

Oracle® Fusion Cloud EPM

フリーフォームの管理



F54811-10

ORACLE®

Oracle Fusion Cloud EPM フリーフォームの管理、

F54811-10

Copyright © 2022, 2024, Oracle and/or its affiliates.

著者: EPM Information Development Team

This software and related documentation are provided under a license agreement containing restrictions on use and disclosure and are protected by intellectual property laws. Except as expressly permitted in your license agreement or allowed by law, you may not use, copy, reproduce, translate, broadcast, modify, license, transmit, distribute, exhibit, perform, publish, or display any part, in any form, or by any means. Reverse engineering, disassembly, or decompilation of this software, unless required by law for interoperability, is prohibited.

The information contained herein is subject to change without notice and is not warranted to be error-free. If you find any errors, please report them to us in writing.

If this is software, software documentation, data (as defined in the Federal Acquisition Regulation), or related documentation that is delivered to the U.S. Government or anyone licensing it on behalf of the U.S. Government, then the following notice is applicable:

U.S. GOVERNMENT END USERS: Oracle programs (including any operating system, integrated software, any programs embedded, installed, or activated on delivered hardware, and modifications of such programs) and Oracle computer documentation or other Oracle data delivered to or accessed by U.S. Government end users are "commercial computer software," "commercial computer software documentation," or "limited rights data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, the use, reproduction, duplication, release, display, disclosure, modification, preparation of derivative works, and/or adaptation of i) Oracle programs (including any operating system, integrated software, any programs embedded, installed, or activated on delivered hardware, and modifications of such programs), ii) Oracle computer documentation and/or iii) other Oracle data, is subject to the rights and limitations specified in the license contained in the applicable contract. The terms governing the U.S. Government's use of Oracle cloud services are defined by the applicable contract for such services. No other rights are granted to the U.S. Government.

This software or hardware is developed for general use in a variety of information management applications. It is not developed or intended for use in any inherently dangerous applications, including applications that may create a risk of personal injury. If you use this software or hardware in dangerous applications, then you shall be responsible to take all appropriate fail-safe, backup, redundancy, and other measures to ensure its safe use. Oracle Corporation and its affiliates disclaim any liability for any damages caused by use of this software or hardware in dangerous applications.

Oracle®, Java, MySQL and NetSuite are registered trademarks of Oracle and/or its affiliates. Other names may be trademarks of their respective owners.

Intel and Intel Inside are trademarks or registered trademarks of Intel Corporation. All SPARC trademarks are used under license and are trademarks or registered trademarks of SPARC International, Inc. AMD, Epyc, and the AMD logo are trademarks or registered trademarks of Advanced Micro Devices. UNIX is a registered trademark of The Open Group.

This software or hardware and documentation may provide access to or information about content, products, and services from third parties. Oracle Corporation and its affiliates are not responsible for and expressly disclaim all warranties of any kind with respect to third-party content, products, and services unless otherwise set forth in an applicable agreement between you and Oracle. Oracle Corporation and its affiliates will not be responsible for any loss, costs, or damages incurred due to your access to or use of third-party content, products, or services, except as set forth in an applicable agreement between you and Oracle.

目次

ドキュメントのアクセシビリティについて

ドキュメントのフィードバック

1 EPM センター・オブ・エクセレンスの作成および実行

2 フリーフォーム・アプリケーションの作成

フリーフォームの理解	2-1
フリーフォーム・アプリケーションのソース	2-4
フリーフォーム・アプリケーションの重要な考慮事項	2-5
フリーフォーム・アプリの作成	2-6
アウトライン・ファイルまたはスナップショットを使用したフリーフォーム・アプリケーションの作成	2-7
アプリケーション作成ウィザードを使用したフリーフォーム・アプリケーションの作成	2-8
アプリケーション所有権の管理	2-11
フリーフォーム・アプリケーションの FAQ	2-11

3 はじめに

ホーム・ページについて	3-1
レッドウッド・エクスペリエンスでの動的タブの使用	3-5

4 アクセス権限の設定

ユーザーおよび役割の管理について	4-1
権限を割り当てることができるアプリケーション・アーティファクト	4-1
アクセス権限タイプ	4-2
アーティファクトへの権限の管理	4-4
アーティファクト、ルールおよびフォルダに対する権限の割当てについて	4-4
アーティファクトおよびフォルダに対する権限の追加、変更および削除	4-5

ルールおよびルール・フォルダに対する権限の追加、変更および削除	4-6
アクセス権限のレポート	4-6
アクセス権限レポートの操作	4-7
アクセス制御からの変更情報の取得	4-7

5 アプリケーションの管理

アプリケーションの概要	5-2
アプリケーションのリフレッシュ	5-2
キューブの管理	5-3
キューブの表示および管理	5-3
キューブの追加	5-3
キューブのクリア	5-4
キューブのクリアについて	5-4
キューブのクリア・ジョブの作成	5-5
キューブのクリア・ジョブの開始および削除	5-6
キューブのクリア・ジョブのスケジュール	5-7
キューブのパフォーマンスの向上	5-7
ディメンションの管理	5-9
キューブによるディメンション・ビューのフィルタ	5-10
ディメンションの作成	5-10
ユーザー・プリファレンスの設定	5-11
変数の管理	5-11
代替変数の操作	5-11
代替変数について	5-12
代替変数の作成および値の割当て	5-12
代替変数の削除	5-13
ユーザー変数の操作	5-13
ユーザー変数について	5-13
ユーザー変数の作成	5-14
ユーザー変数の管理	5-15
フォーム上のユーザー変数に対する制限の設定	5-15
ユーザー変数の削除	5-16
アクティビティ・レポートの表示	5-16
データとメタデータのインポートおよびエクスポート	5-17
メタデータのインポート	5-17
メタデータ・インポート・ファイルの作成	5-18
メタデータ・インポート・ファイルのロード	5-21
メタデータのエクスポート	5-23

データのインポートとエクスポート	5-25
データのインポート	5-25
ドライバ・メンバーのキャスト・エラー	5-29
データのエクスポート	5-30
データ・インポートおよびエクスポートのステータスの表示	5-33
Essbase アウトラインの検証	5-33
アプリケーション・データベースの作成とリフレッシュ	5-34
アプリケーション・データベースの作成	5-34
データベースをリフレッシュする前に	5-35
アプリケーション・データベースのリフレッシュ	5-35
メタデータの検証	5-36
アプリケーションへの集約ストレージ・アウトラインの追加	5-37
集約ストレージについて	5-37
集約ストレージ・アウトラインのキューブの特性	5-38
アプリケーションに集約ストレージ・データベースを追加するプロセス	5-38
アプリケーションの削除	5-39
日次メンテナンス・プロセス開始時間の設定	5-39
受信ボックス/送信ボックス・エクスプローラを使用したファイルのアップロードおよびダウンロード	5-40

6 メンバー・セレクタの使用

メンバーの操作	6-1
選択	6-2
メンバーの関係	6-5
ワイルドカードを使用した検索	6-6
メンバーとしての属性値の選択	6-6
フォームのメンバーの選択	6-8
メンバーとしての代替変数の選択	6-10
メンバーとしてのユーザー変数の選択	6-11
UDA のメンバーとしての選択	6-11

7 EPM Cloud の環境の接続

EPM Cloud 環境の接続について	7-1
EPM Cloud 接続を移行する際の考慮事項	7-3
他の EPM Cloud 環境への接続の作成、編集および削除	7-4
外部 Web サービスへの接続	7-6
外部接続の詳細設定オプションの指定	7-7
EPM Cloud 環境間のナビゲート	7-8

他の EPM Cloud 環境にアクセスするためのナビゲーション・フローのカスタマイズ	7-9
他の EPM Cloud 環境からのカードのクラスタへのグループ化	7-9
複数 EPM Cloud 環境からのタブのあるカードの構成	7-13
接続された環境を統合するためのダイレクト URL の使用	7-16
個々の URL のコピー	7-17
CSV ファイルへのすべての URL のエクスポート	7-17

8 カスタム・ナビゲーション・フローの設計

ナビゲーション・フローの理解	8-1
ビジネス・プロセス・インタフェースでカスタマイズできる内容	8-1
ナビゲーション・フローのカスタマイズ・カテゴリ	8-2
ナビゲーション・フローの権限	8-3
事前定義済みのナビゲーション・フロー	8-3
インポート後のナビゲーション・フロー・ステータスの理解	8-3
ナビゲーション・フローの表示と操作	8-4
ナビゲーション・フロー設計のベスト・プラクティスおよび命名の考慮事項	8-5
ナビゲーション・フローの作成と複製	8-6
ナビゲーション・フローの編集	8-7
ナビゲーション・フローのアクティブ化と非アクティブ化	8-8
検証を使用したナビゲーション・フローでの欠落アーティファクトの検索	8-9
警告アイコンが表示されたナビゲーション・フローの解決	8-10
カード、タブおよびクラスタのラベルのカスタマイズ	8-10
カードおよび垂直タブのアイコンのカスタマイズ	8-11
クラスタ、カードおよびタブの非表示および再表示	8-12
ホーム・ページ上のカードの表示順序の変更	8-12
カードの追加	8-12
表形式ページへのタブの追加	8-15
URL を使用した EPM Cloud アプリケーションへのサード・パーティ・ページの埋込みについて	8-18
ナビゲーション・フロー、カードおよびタブの削除	8-18
クラスタへのカードのグループ化	8-19
ナビゲーション・フローのリロード	8-21
実行時のナビゲーション・フローの切替え	8-22

9 簡易ディメンション・エディタでのディメンションの編集

簡易ディメンション・エディタでのディメンションの編集について	9-1
ディメンションの概要	9-2
ディメンションとメンバーについて	9-2

疎ディメンションおよび密ディメンションについて	9-2
ディメンションの階層について	9-2
カスタム・ディメンションについて	9-3
集約オプション	9-3
ストレージ・オプション	9-3
エンティティについて	9-5
勘定科目について	9-6
勘定科目タイプ	9-6
保存された仮定	9-9
データ型	9-9
勘定科目、エンティティ、期間およびキューブ	9-10
簡易ディメンション・エディタへのアクセス	9-10
簡易ディメンション・エディタ・グリッドの操作	9-10
他のディメンションへの切替え	9-11
列レイアウトのカスタマイズ	9-11
祖先の表示	9-12
アプリケーションでのメンバーの用途の表示	9-12
編集のフォーカス	9-13
メンバーの検索	9-13
メンバーの移動	9-14
メンバーのソート	9-14
別の階層へのメンバーの移動	9-14
メンバー式の操作	9-15
Microsoft Excel からのメンバー名のコピー	9-15
簡易ディメンション・エディタでのメンバー・プロパティの編集	9-16
「メンバー・プロパティの編集」へのアクセス	9-16
簡易ディメンション・エディタでのメンバーの追加	9-19
簡易ディメンション・エディタでのメンバーの編集	9-21
簡易ディメンション・エディタでのメンバーの削除	9-22
簡易ディメンション・エディタでの共有メンバーの追加	9-22
ディメンション・メンバーへのアクセス権の割当て	9-23
メンバーに対するアクセス権の追加、編集および削除	9-24
共有メンバーへの有効なアクセス権限について	9-24
簡易ディメンション・エディタでのディメンション・プロパティの編集	9-25
簡易ディメンション・エディタでの属性の操作	9-27
簡易ディメンション・エディタでの属性の削除	9-28
簡易ディメンション・エディタでの UDA の操作	9-29
簡易ディメンション・エディタでの属性値の操作	9-30

10 ダッシュボードの設計

ダッシュボードのメリット	10-2
ダッシュボードの作成および管理	10-4
ダッシュボード・バージョンについて	10-5
ダッシュボードの表示	10-6
ダッシュボード 1.0 のダッシュボードの 2.0 への変換	10-9
ダッシュボード 1.0 の作成および管理	10-10
1.0 ダッシュボード設計の概念	10-10
ダッシュボード 1.0 のダッシュボードの作成	10-13
マスター・フォームと詳細を含むダッシュボードの作成	10-15
ダッシュボードのレイアウトについて - バージョン 1.0	10-15
ゲージ・チャート・タイプについて	10-16
タイル・チャート・タイプについて	10-18
ダッシュボードの色のカスタマイズ	10-20
1.0 ダッシュボードのグローバル POV とローカル POV について	10-21
ダッシュボード POV と有効な交差	10-23
ダッシュボード 2.0 の作成および管理	10-23
ダッシュボード 2.0 のダッシュボード設計の概念	10-24
オブジェクト・パレット	10-27
ダッシュボード・ツールバー	10-28
ダッシュボード・ワークスペース	10-29
プロパティ・パネル	10-30
ダッシュボード・コンポーネント	10-34
ダッシュボード 2.0 の考慮事項	10-35
ダッシュボード 2.0 のダッシュボードの作成	10-37
ダッシュボード 2.0 の設計時のメンバー・セレクタの操作	10-38
ダッシュボード 2.0 のフォーム 2.0 のグリッドについて	10-39
ジオマップ・チャート・タイプについて	10-40
ピラミッド・チャート・タイプについて	10-41
ウォーターフォール・チャート・タイプについて	10-42
ダッシュボードでの表の使用	10-45
ダッシュボード 2.0 のゲージ・チャート・タイプについて	10-46
ダッシュボード 2.0 のレーダー・チャート・タイプについて	10-49
ダッシュボード 2.0 の組合せチャート・タイプについて	10-51
ダッシュボード 2.0 のタイル・チャート・タイプについて	10-53
ダッシュボード 2.0 のグローバル POV とローカル POV について	10-55
クイック分析について	10-58

11 インフォレットの設計

インフォレットについて	11-1
インフォレットの詳細分析	11-3
インフォレットの内容の決定	11-6
インフォレットのフォームの設計	11-7
インフォレットのチャートの設計	11-7
インフォレット・デザイナの使用	11-8
インフォレットの作成	11-11
インフォレットの操作	11-11
インフォレットにアクセスするインタフェースのカスタマイズ	11-13

12 独自の ML の持込み: 機械学習モデルのインポートについて

独自の ML の持込みの考慮事項	12-2
ML モデルのインポート	12-3
プランナへの ML モデルのデプロイ	12-5

13 有効な交差とセル・レベル・セキュリティの定義

有効な交差の定義	13-1
有効な交差の理解	13-1
有効交差グループ	13-2
有効交差ルール	13-2
アンカーおよび非アンカー・ディメンション	13-3
有効な交差の例	13-3
有効交差ルールの冗長または重複	13-6
共有メンバーおよび有効交差ルール	13-6
代替変数および有効交差ルール	13-6
評価順序	13-7
有効な交差の作成	13-7
有効な交差の管理	13-8
有効交差の表示	13-9
有効な交差のフィルタ	13-10
交差のインポートとエクスポート	13-10
有効交差グループの評価順序の変更	13-13
有効交差グループの無効化および有効化	13-13
有効交差グループの詳細の編集	13-14
有効交差グループの複製	13-15
有効交差グループの削除	13-15

フォーム内の無効データの抑制	13-16
無効なデータのクリア	13-16
無効なデータについて	13-16
無効な交差レポートの操作	13-17
無効な交差のデータのクリア	13-18
有効交差の操作	13-18
アプリケーション・フォームでの有効交差の操作	13-18
Calculation Manager ルールの実行時プロンプトでの有効交差の操作	13-19
セル・レベル・セキュリティの定義	13-20
セル・レベル・セキュリティの理解	13-20
セル・レベル・セキュリティ定義の作成	13-21
セル・レベル・セキュリティ定義の表示	13-22
セル・レベル・セキュリティ定義のフィルタ	13-23
セル・レベル・セキュリティ定義のインポートとエクスポート	13-24
セル・レベル・セキュリティのテスト	13-26
セル・レベル・セキュリティ定義リストの並替え	13-27

14 データ・マップの定義とファイルベース統合の作成

15 ジョブの管理

ジョブで時間を節約する方法	15-1
保留中のジョブおよび最近のアクティビティの表示	15-1
ジョブのスケジュール	15-2
ジョブ・タイプ	15-3
後で実行するジョブのスケジュール	15-6
時間ごとのジョブのスケジュール	15-7
ジョブの編集および取消し	15-10
ジョブの複製	15-10
ルール・ジョブおよびルール・セット・ジョブの取消し	15-11
送信ボックスからのエクスポート・ファイルのダウンロード	15-12

16 タスクおよびデータの監査

監査の概要	16-1
監査トラッキングの有効化	16-2
監査詳細の表示	16-3

17 データ検証の管理

データ検証ルールの作成および更新	17-1
セルのフォーマット	17-4
データ検証ルールの表示	17-5
データ検証ルールの評価および実行の順序	17-6
ルール・ビルダーによってサポートされている条件	17-6
IF 条件値	17-6
THEN 条件値	17-14
RANGE 条件値	17-14
データ検証の条件演算子	17-15
データ検証ルールのシナリオ	17-16

18 アプリケーションおよびシステム設定の管理

指定可能なアプリケーションおよびシステム設定	18-1
ユーザー変数の定義	18-7
表示形式のカスタマイズ	18-7
将来のイベントのお知らせ	18-9
アーティファクト・ラベルの指定	18-9
ローカライズ可能なアーティファクト・ラベル	18-9
アーティファクト・ラベル・グリッドの操作	18-10
言語の追加とローカライズされたアーティファクト・ラベルの定義	18-11
編集するアーティファクト・ラベルのエクスポートとインポート	18-12

19 その他の管理タスクへのアクセス

「ナビゲータ」メニューについて	19-1
データ・ロード設定の管理	19-2
データ統合を使用したインポート	19-3
アクション・メニューの管理	19-3
アクション・メニューの作成と更新	19-3
アクション・メニュー・アイテムの操作	19-4
アクション・メニュー・アイテムの定義	19-5
別名表の管理	19-8
別名について	19-8
別名表について	19-9
別名表の操作	19-10
デフォルトの別名表の指定と、メンバーおよび別名の表示オプションの設定	19-10
ディメンションの管理	19-11

ディメンションについて	19-12
ディメンション階層の操作	19-12
カスタム・ディメンション、エンティティ、勘定科目、期間およびキューブについて	19-13
ユーザー定義カスタム・ディメンションの追加または編集	19-13
メンバーの操作	19-16
属性の操作	19-24
属性値の操作	19-28
カレンダーのカスタマイズ	19-30
動的時系列メンバーの設定	19-34
UDA の操作	19-36
メンバー式の操作	19-37
フォームの管理	19-43
フォームについて	19-43
フォーム・コンポーネント	19-44
フォームの設計に関する考慮事項	19-45
フォームでの暗黙の共有の理解	19-46
フォームの作成	19-47
レイアウトの定義	19-48
精度の設定について	19-61
フォームの精度およびその他オプションの設定	19-61
スマート・プッシュを使用したデータの移動	19-62
非対称の行と列の作成	19-62
式の行と列の追加	19-63
フォーム・ページと視点の定義	19-63
特定のタイプのフォームの設計	19-64
フォームおよびフォーム・コンポーネントの操作	19-70
フォームとフォルダの選択および表示	19-70
フォームのプレビュー	19-71
フォーム定義の印刷	19-71
フォームの検索	19-72
フォームの編集	19-72
フォームの移動、削除および名前変更	19-73
Smart View のセル・フォーマットのフリーフォームでの存続	19-74
フォームとフォルダの管理	19-74
フォルダの作成	19-75
フォルダの操作	19-75
ルールの管理	19-76
ルールについて	19-76
フォームでのルールの追加および削除	19-77

ビジネス・ルールのプロパティの設定	19-78
ルールの使用状況の表示	19-79
実行時プロンプトについて	19-82
実行時プロンプトの理解	19-82
Groovy ルールの使用	19-87
Groovy ビジネス・ルールの作成について	19-87
Groovy ルールの Java API リファレンス	19-88
Groovy ビジネス・ルールの例	19-89
Groovy ビジネス・ルール・チュートリアル・ビデオ	19-89
Groovy ルールのビジネス・シナリオ	19-90
ルール・セキュリティの管理	19-102
ルールに対するアクセス権の割当て	19-102
ルールに対するアクセス権の追加、編集および削除	19-102
Groovy テンプレートに対するアクセス権の割当て	19-103
スマート・リストの管理	19-103
スマート・リストの操作	19-103
レポート・アプリケーションでのスマート・リストの同期	19-105
スマート・リストのプロパティの設定	19-105
スマート・リストのエントリの定義	19-107
スマート・リストのプレビュー	19-107
スマート・リストで#Missing を表示	19-108
タスク・リストの管理	19-108
タスク・リストの操作	19-108
タスク・リストへの指示の追加	19-109
タスク・リストへのタスクの追加	19-109
タスク・リストの編集	19-113
タスクの編集	19-113
タスクのコピーおよび移動	19-114
タスク・リストの移動および順序変更	19-114
タスク・リストのクリア	19-115
タスクおよびタスク・リストの削除	19-115
タスク・リストへのアクセス権の割当て	19-116
タスク・リストへのアクセス権の追加	19-116
タスク・リストへのアクセス権の変更および削除	19-117
セル詳細のクリア	19-117
データのコピー	19-119
アプリケーション診断の管理	19-120
アプリケーション診断について	19-120
仮定	19-121

アプリケーション診断の機能	19-121
アプリケーション診断グラフの使用	19-121
アプリケーション診断の起動	19-122
最適なパフォーマンスのためのアーティファクトの変更	19-123

A 命名規則

アプリケーションとデータベースの命名規則	A-1
ディメンション、メンバーおよび別名の名前付けの制限	A-2
計算スクリプト、レポート・スクリプト、式、フィルタおよび代替変数値でのディメンションとメンバー名	A-5
ユーザー名およびグループ名の命名規則	A-6

B フォームの式関数

フォームの式関数について	B-1
式の操作	B-1
式の作成	B-1
式の編集	B-2
式の削除	B-2
式の関数	B-2
引数	B-4
数値引数	B-4
行、列またはセルの参照引数	B-4
プロパティ引数	B-6
引数への関数の埋込み	B-8
Abs	B-9
Average	B-9
AverageA	B-10
Count	B-11
CountA	B-12
Difference	B-13
Eval	B-14
IfThen、If	B-14
条件文に関するノート	B-17
複合条件	B-17
Max	B-17
Min	B-18
Mod	B-19
PercentOfTotal	B-19

Pi	B-20
Product	B-21
Random	B-21
Round	B-21
Sqrt	B-22
Sum	B-23
Truncate/Trunc	B-24
Variance/Var	B-25
VariancePercent/VarPer	B-26

C Smart View を使用したアプリケーションの管理

Smart View でのアプリケーションの管理について	C-1
アプリケーション管理のための Smart View とその管理拡張機能のインストール	C-3
Smart View でのアプリケーション管理オプションの表示の制御	C-4
アプリケーション・テンプレートのダウンロード	C-5
Smart View でのテンプレートのダウンロード	C-5
Web インタフェースからのアプリケーション・テンプレート zip ファイルのダウンロード	C-6
アプリケーションの作成	C-7
アプリケーション・テンプレートでのアーティファクトの操作	C-8
アプリケーション・テンプレートでのアーティファクトの操作について	C-9
アプリケーションの定義	C-9
ディメンションの定義	C-13
属性ディメンションの定義	C-18
データの定義	C-19
代替変数の定義	C-21
セキュリティの定義	C-22
拡張設定の定義	C-24
Smart View でのアプリケーションの更新	C-28
アプリケーションの削除	C-29
プランニング管理拡張機能と Office のオートコレクト	C-29

D Smart View を使用したアプリケーション・メタデータのインポートおよび編集

Smart View を使用したアプリケーション・メタデータの操作について	D-1
ディメンションの編集のための Smart View とその管理拡張機能のインストール	D-2
Smart View グリッドを使用したアプリケーション・メタデータのインポートおよび編集	D-3
Smart View グリッドについて	D-4

Smart View グリッドおよびリボンの表示	D-4
Smart View グリッドの使用のガイドライン	D-6
デフォルトのメタデータ・ディメンション・メンバー・プロパティ	D-7
Smart View のディメンションのインポート	D-9
Smart View for Office でのディメンションのインポート	D-10
Smart View (Mac and Browser)でのディメンションのインポート	D-11
Smart View でのメンバーの編集	D-13
Smart View でのアプリケーション・メンバーの追加	D-13
Smart View でのメンバーの追加	D-14
Smart View でのメンバーの追加のガイドライン	D-15
Smart View でのメンバーの移動	D-16
Smart View でのメンバーの移動のガイドライン	D-16
属性ディメンションの操作	D-16
Smart View での属性ディメンション・メンバーの追加	D-17
Smart View for Office での属性ディメンション・メンバーの追加	D-17
Smart View (Mac and Browser)での属性ディメンション・メンバーの追加	D-18
属性ディメンション・メンバーとディメンション・メンバーの関連付け	D-20
Smart View での共有メンバーの指定	D-22
データベースのリフレッシュ	D-22
Smart View for Office でのデータベースのリフレッシュ	D-23
Smart View (Mac and Browser)でのデータベースのリフレッシュ	D-23
プランニング管理拡張機能と Office のオートコレクト	D-25

E フリーフォームのベスト・プラクティス

F EPM Cloud に関するよくある質問(FAQ)

ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクルのアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト(<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=docacc>)を参照してください。

Oracle Support へのアクセス

サポートをご契約のお客様には、My Oracle Support を通して電子支援サービスを提供しています。詳細情報は <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=info> か、聴覚に障害のあるお客様は <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=trs> を参照してください。

ドキュメントのフィードバック

このドキュメントに対するフィードバックを送るには、Oracle Help Center トピックのページの下部にあるフィードバック・ボタンをクリックします。
epmdoc_ww@oracle.com に電子メールを送信することもできます。

1

EPM センター・オブ・エクセレンスの作成および実行

EPM のベスト・プラクティスは、CoE (センター・オブ・エクセレンス)を作成することです。

EPM CoE は、導入およびベスト・プラクティスを確実にするための統合された取組みです。パフォーマンス管理およびテクノロジー対応ソリューションの使用に関連するビジネス・プロセスの変革を促進します。

クラウドの導入により、組織がビジネス・アジリティを改善し、革新的なソリューションを促進することが可能になります。**EPM CoE** はクラウド・イニシアチブを監督し、投資を保護および維持し、効果的な使用を促進するのに役立ちます。

EPM CoE チーム:

- クラウドの導入を確実にし、組織が **Cloud EPM** の投資を最大限に活用することを支援します
- ベスト・プラクティスの運営委員会として機能します
- **EPM** 関連の変更管理イニシアチブをリードし、変革を促進します

すでに **EPM** を実装済の顧客を含めて、すべての顧客が **EPM CoE** からメリットを得られます。

使用を開始する方法

クリックして、**EPM CoE** のベスト・プラクティス、ガイダンスおよび戦略を取得します: **EPM センター・オブ・エクセレンスの概要**。

さらに学習

- クラウド・カスタマ・コネクト Web セミナーを見る: [Cloud EPM のセンター・オブ・エクセレンス\(CoE\)の作成および実行](#)
- ビデオを見る: [概要: EPM センター・オブ・エクセレンスおよびセンター・オブ・エクセレンスの作成](#)。
- **EPM センター・オブ・エクセレンスの作成および実行**の **EPM CoE** のビジネス上のメリットおよび価値提案の確認。



2

フリーフォーム・アプリケーションの作成

フリーフォーム・アプリケーションでは、オープンなディメンション・キューブ構造を使用して、必要なディメンションの組合せでキューブを作成できます。

Related Topics

- [フリーフォームの理解](#)
- [フリーフォーム・アプリケーションのソース](#)
- [フリーフォーム・アプリケーションの重要な考慮事項](#)
- [フリーフォーム・アプリケーションの作成](#)
- [アプリケーション所有権の管理](#)
- [フリーフォーム・アプリケーションの FAQ](#)

フリーフォームの理解

フリーフォームは、レポート作成、分析およびプランニングのアプリケーションです。フリーフォームでは、標準アプリケーションによって強制されるキューブおよびディメンションの制限を受けずに、選択したキューブおよびディメンションでアプリケーションを作成できます。フリーフォームを使用して、ビジネス・プロセスの機能性を利用する機能を維持しながら、独自のキューブをモデル化して構築できます。

フリーフォームには、Oracle Smart View for Office または Oracle Enterprise Performance Management Cloud の画面を使用してアクセスでき、カスタム関数のための Groovy スクリプトおよび計算用のビジネス・ルールがサポートされています。

複数のキューブを使用してアプリケーションを作成することも、単一のキューブを使用してアプリケーションを作成し、後でキューブをさらに追加することもできます(最大で合計 12 個のキューブ)。

Table 2-1 フリーフォームの機能の概要

フリーフォームとは何か	フリーフォームで作成できるもの	複数キューブ・フリーフォームで解決できるユースケース	複数キューブ・フリーフォームに関する特記事項
フリーフォームは、ディメンションの前提条件がない EPM アプリケーションであり、ビジネス・ユースケースのニーズに基づいてディメンションに完全な柔軟性がある複数のキューブを作成します。	ユースケースのニーズに基づいて、キューブごとに任意の組合せで 29 個のディメンションを使用できる最大 12 個のキューブを作成します(26 個のカスタム・ディメンションと 3 個のディメンション・タイプ(勘定科目、期間およびエンティティ))。	<ul style="list-style-type: none"> • 統合レポート • Essbase SaaS の移行 • Excel モデルの移行 • 任意の産業における財務および業務のレポートまたはプランニング 	<ul style="list-style-type: none"> • ASO キューブのみを使用してレポート・アプリケーションを作成できる EPM Cloud にのみ配置します • (移行またはアウトライン・ロードを使用して) Oracle Essbase ファイルをインポートしてアプリケーションを作成できる EPM にのみ配置します
Oracle EPM Cloud プラットフォームは、お客様の成功を支援するテクノロジー・フレームワークのガードレールおよび機能を提供します。	すべて ASO レポート・キューブまたはすべてハイブリッド BSO プランニング・キューブあるいは ASO と BSO の組合せであるアプリケーションを作成します。	<ul style="list-style-type: none"> • 財務レポート • 業務レポート • 収益プランニング • 費用プランニング • 需要プランニング • 供給プランニング • その他 	お客様が営業と連携して、レポート作成やプランニングの要件に最も適した最適なソリューションを作成できるようにします

 **Note:**

次の機能を使用するには、提供されているシナリオ、バージョン、期間および年ディメンションが存在する必要があるため、これらの機能をフリーフォームで使用することはできません:

- 予測プランニング
- 自動予測
- IPM インサイト

フリーフォームでは、シナリオ、バージョン、期間および年ディメンションをカスタム・ディメンションとして定義できます。

また、フリーフォームでは次の機能を使用できません:

- サンドボックス
- 承認
- タスク・マネージャ

複数キューブ・フリーフォーム・アプリケーションについて

- フリーフォーム・アプリケーション内のカスタム・ディメンションの許容最大数は 26 です。
- キューブでディメンションを共有することも、スタンドアロン・ディメンションを使用することもできます。
- すべてのディメンションをカスタムにすることも、ネイティブの勘定科目、期間またはエンティティ・ディメンション、あるいはそのすべてをキューブで継承することもできます。
- クロスキューブ・データ・マップ、「スマート・プッシュ」および「データのコピー」のサポートをフリーフォーム・アプリケーション・タイプで使用できます。

複数キューブ・フリーフォーム・アプリケーションは、次に示す既存のビジネス・プロセスの前提に制約されます:

- メンバーは、フリーフォーム内のすべてのキューブ間で一意である必要があります。
- ガバナーは、アプリケーション・レベルで適用可能であり、キューブ・レベルで適用することはできません。
- 重複したメンバー名を許可するには、入力アウトラインを有効にしないでください。

ビデオ

目的	方法の学習
フリーフォームの概要を確認します。	 Cloud EPM のフリーフォーム・アプリケーションの概要
オンプレミスの Essbase アウトライン(OTL)ファイルおよびスナップショットからフリーフォーム・アプリケーションを作成します。	 オンプレミスの Essbase アウトライン・ファイルおよびスナップショットからのフリーフォーム・アプリケーションの作成
Essbase アウトラインを使用して複数キューブ・フリーフォーム・アプリケーションを作成します	 Essbase アウトラインからの複数キューブ・フリーフォーム・アプリケーションの作成
ハイブリッド BSO キューブを使用してフリーフォーム・アプリケーションを作成します	 ハイブリッド BSO キューブを使用したフリーフォーム・アプリケーションの作成
ASO キューブまたはレポート・キューブを使用してフリーフォーム・アプリケーションを作成します	 レポート/ASO キューブを使用したフリーフォーム・アプリケーションの作成
BSO キューブまたは ASO キューブを使用して複数キューブ・フリーフォーム・アプリケーションを作成します	 BSO キューブおよび ASO キューブからの複数キューブ・フリーフォーム・アプリケーションの作成

目的

Excel テンプレートを使用してフリーフォーム・アプリケーションを作成する方法を学習します。Excel テンプレートを使用して、アプリケーション・プロパティの定義、キューブの管理、ディメンションおよびメンバー、属性、アクセス権限の作成、フリーフォーム・アプリケーションへのデータ・ロードを行う方法を学習します。

Excel テンプレートを使用して、Web インタフェースで変更を確認しながらフリーフォーム・アプリケーションを更新する方法を学習します。Excel テンプレートを使用してフリーフォーム・アプリケーションを作成した後で、同じテンプレートを使用して、ディメンション、メンバー、代替変数およびセキュリティに変更を加える方法を学習します。その後、Planning Web インタフェースで、アプリケーション管理オプションを割り当て、アプリケーションのプロパティと定義およびインポートしたデータを確認します。

方法の学習

 Excel テンプレートを使用した複数キューブ・フリーフォーム・アプリケーションの作成 - パート 1

 Excel テンプレートを使用した複数キューブ・フリーフォーム・アプリケーションの作成 - パート 2

フリーフォーム・アプリケーションのソース

フリーフォーム・アプリケーションを構築するには、アプリケーション作成ウィザードを使用してディメンションを作成します。または、オンプレミス・リリース 11.1.2.4.xxx (またはそれ以降)の単一キューブ Oracle Essbase アプリケーションのアウトライン(OTL)ファイルまたはスナップショットを使用して、フリーフォーム・アプリケーションを作成できます。

フリーフォーム・アプリケーションのソースとして Essbase キューブ OTL ファイルまたは Essbase アプリケーション・スナップショットを使用する場合、勘定科目、期間(時間)およびエンティティ(国)ディメンションが自動的に作成されマップされます。さらに、Essbase アプリケーションの「バージョン」および「シナリオ」ディメンションがカスタム・ディメンションとして作成されます。その結果、即時利用可能なワークフロー機能はフリーフォーム・アプリケーションではサポートされません。

サービス管理者が、アプリケーション作成ウィザードまたは次のソースを使用してフリーフォーム・アプリケーションを構築します:

- **オンプレミス・リリース 11.1.2.4.xxx (またはそれ以降)の単一キューブ Essbase アプリケーションのアウトライン・ファイル**

オンプレミス・リリース 11.1.2.4.xxx (またはそれ以降)の単一キューブ Essbase アプリケーションの OTL ファイルを使用して、フリーフォーム・アプリケーションの構造を作成できます。このフリーフォーム・アプリケーションについて後で新しいキューブを追加または作成できます。

OTL ファイル名はフリーフォーム・アプリケーションについて作成されたキューブに割り当てられるため、ファイル名を 8 文字以下にする必要があります。ファイル名が長いとプロセスが失敗する原因になります。

通常、OTL ファイルは、オンプレミス Essbase デプロイメント内の EssbaseServer/essbaseserver1/app/<app_Name>ディレクトリにあります。

OTL ファイルにはアプリケーション・データが含まれていないため、Essbase データをファイルに抽出する必要があります。MaxL、Essbase Studio または別のツ

ールを使用して、Essbase アプリケーションからデータをエクスポートします。データは、Essbase データ・ファイル・フォーマットでエクスポートする必要があります。

アプリケーションを作成した後、抽出したデータを Essbase のソース・タイプを選択してインポートします。ローカルに格納されたデータ・ファイルから、または Oracle Enterprise Performance Management Cloud 受信ボックスにアップロードされたファイルからインポートできます。手順の詳細は、[データのインポート](#)を参照してください。

- **オンプレミス・リリース 11.1.2.4.xxx (またはそれ以降)の単一キューブ Essbase アプリケーションのアプリケーション・スナップショット**

このオプションは、移行を使用して作成された既存の Essbase アプリケーション・スナップショット(ZIP ファイル)を移行することで、アプリケーションの作成を簡略化します。このプロセスは、ディメンションのロード、代替変数の作成、グラフィカル・ルールとしての計算スクリプトの変換、およびデータのロードを自動化します。このフリーフォーム・アプリケーションについて後で新しいキューブを追加または作成できます。

フリーフォーム・アプリケーションの重要な考慮事項

Note:

Oracle Essbase 移行スナップショットを Oracle Enterprise Performance Management Cloud 環境にインポートすることによって、フリーフォーム・アプリケーションを作成しようとししないでください。移行を使用したスナップショットのインポートは、以前のフリーフォーム・アプリケーションから作成されたスナップショットに対してのみサポートされています。

- アプリケーション作成ウィザードを使用して 1 つのキューブのフリーフォーム・アプリケーションを作成する場合、データ・マップおよびその他の複数キューブ機能は使用できません。
- カスタム定義関数(CDF)および CDF 参照が含まれている Essbase スナップショットは、フリーフォーム・アプリケーションの作成には使用できません。
- 使用している OTL ファイルまたは Essbase アプリケーション・スナップショットに、システムにより制限されている名前のオブジェクトが含まれていないことを確認してください(たとえば、年ディメンションでの FY02 という名前のメンバーなど)。アプリケーションの作成に使用する予定の OTL ファイルまたはスナップショットを生成する前に、このような制限されている名前を変更または削除する必要があります。[命名規則](#)を参照してください。
- 使用している OTL ファイルまたは Essbase アプリケーション・スナップショットに、80 文字を超えるメンバー名および別名が含まれていないことを確認してください。メンバー名および別名が 80 文字を超える場合は、それらを削除するか、短くする必要があります。そうしないと、インポートは成功しません。[命名規則](#)を参照してください。
- 使用している OTL ファイルに「年合計」メンバーおよび「期首残高」メンバーが含まれている場合、「期首残高」メンバーは「期間」ディメンションの最初の子であり、「年合計」は「期間」ディメンションの 2 番目の子である必要があります。これらのメンバーには特別な処理が必要であり、スナップショットを復元する前に移行スナップショットの.csv ファイルを変更することで、適切な位置に移動できます。

- EPM Cloud 環境に保存されている OTL ファイルまたはスナップショットをソースとして使用する場合は、アプリケーション作成プロセスを開始する前にファイルをアップロードします。

uploadFile EPM 自動化ユーティリティ・コマンドまたは移行を使用して OTL ファイルまたはスナップショットを EPM Cloud 環境にアップロードします。

- インポートされたデータは、フリーフォーム・アプリケーションでは編集できない場合があります。データが読取り専用を設定されることがあります。
- メンバー・アウトラインは、アプリケーション内で一意である必要があります。
- OTL またはスナップショットをインポートしてフリーフォーム・アプリケーションを作成する場合は、後でこのフリーフォーム・アプリケーションの新しいキューブを追加または作成できます。
- アプリケーション作成ウィザードで新しいキューブを追加してフリーフォーム・アプリケーションを作成する場合は、後でこのフリーフォーム・アプリケーションに Essbase キューブ OTL または Essbase アプリケーション・スナップショットをインポートして、新しいキューブを作成することはできません。

フリーフォームのディメンションおよびメンバーに名前を付ける際は、次の予約語を使用しないでください:

Table 2-2 フリーフォームのメンバー名として使用できない予約語

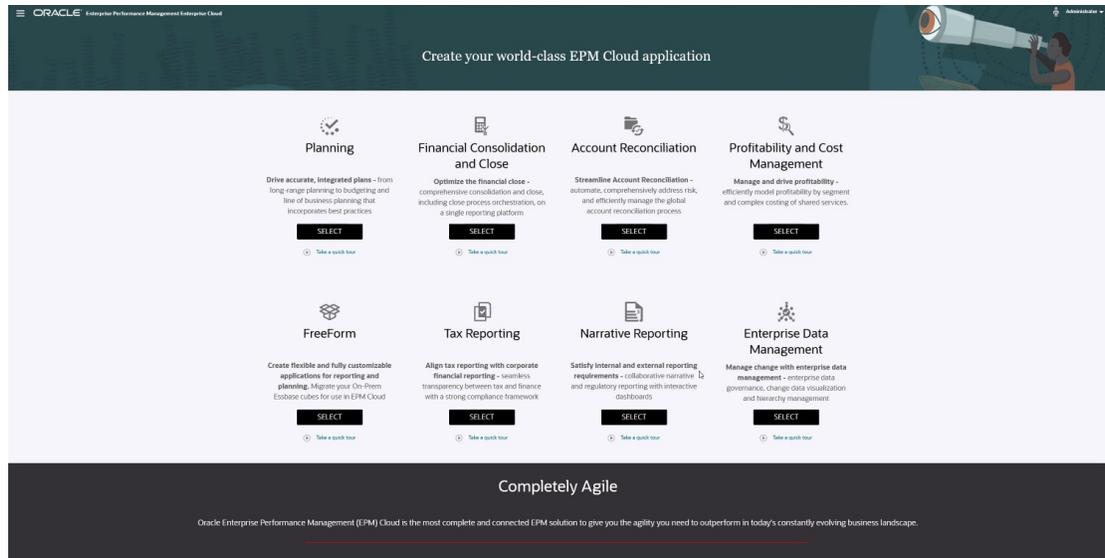
予約語			
BU Version_1	Users	Attribute Dimensions	HSP_Entity
ConsolidatedData	Groups	Default	HSP_Period
BaseData	Calendars	Task Lists	HSP_Version
SandBoxData	Currencies	Menus	HSP_XCRNCY
Super User	Predefined	CalcMgrRules	HSP_Years
Strategic Planner	FX_Tables	CalcMgrRulesets	HSP_View
Service Administrator	Forms	CalcMgrVariables	HSP_Metric
CalcMgrTemplates	Aliases	HSP_Rates	
Root	Cubes	HSP_Scenario	
Dimensions	Planning Units	HSP_Account	

フリーフォーム・アプリの作成

フリーフォーム・アプリケーションを作成する前に、重要な考慮事項、およびフリーフォーム・アプリケーションでメンバー名として使用できない予約語を確認します。[フリーフォーム・アプリケーションの重要な考慮事項](#)を参照してください。

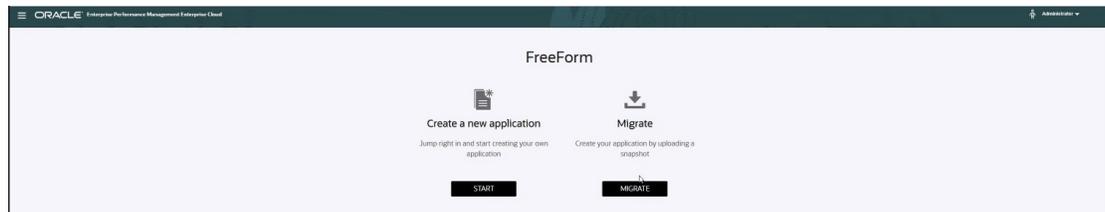
ランディング・ページ

ランディング・ページは、フリーフォーム・アプリケーションを作成したり、開始に役立つ概要ビデオを表示するための開始点です。



フリーフォーム・アプリケーションの作成オプション

フリーフォーム・アプリケーションを作成するには、フリーフォームの説明の下にある「**選択**」をクリックします。次のオプションが表示されます:



- 新規アプリケーションを作成します:** カスタム・ディメンションを使用して独自のモデルに基づくフリーフォーム・アプリケーションを手動で作成するには、「**開始**」をクリックします。このプロセス中に、エンティティ、期間および勘定科目ディメンションとして使用するカスタム・ディメンションをマップできるとともに、独自のモデルをサポートする他のカスタム・ディメンションを追加することもできます。[アプリケーション作成ウィザードを使用したフリーフォーム・アプリケーションの作成](#)を参照してください。
- 移行:** 以前に環境にアップロードしたスナップショットからフリーフォーム・アプリケーションを作成するには、「**移行**」をクリックします。1つのスナップショットのみが許可されます。[アウトライン・ファイルまたはスナップショットを使用したフリーフォーム・アプリケーションの作成](#)を参照してください。

アウトライン・ファイルまたはスナップショットを使用したフリーフォーム・アプリケーションの作成

アウトライン・ファイルまたはスナップショットを使用してフリーフォーム・アプリケーションの作成を続行するには:

1. ソース OTL ファイルまたは Essbase アプリケーション・スナップショットの場所を選択します:

- 現在 Oracle Enterprise Performance Management Cloud にアクセスしているコンピュータからソース OTL ファイルまたはスナップショットにアクセスするために、「ローカル」を選択します。
「ファイルのインポート」で、「ファイルの選択」をクリックし、ソース OTL ファイルまたはスナップショットを選択します。
 - 「受信ボックス」を選択し、EPM Cloud 環境からソース OTL ファイルまたはスナップショットにアクセスします。
「1つ選択」から、ソース OTL ファイルまたはスナップショットを選択します。
2. 「次」をクリックします。
 3. アプリケーション情報を確認して、「作成」をクリックします。
アプリケーションの作成が完了すると、EPM Cloud ホーム・ページが表示されます。
 4. アプリケーションの作成中にエラーが報告されていないことを確認します。
 - 「アプリケーション」、「ジョブ」の順にクリックして、ジョブ・コンソールを開きます
 - 「データベースの作成」および「アウトラインの処理」アクティビティがエラーなしで終了したことを確認します。エラーが報告された場合は修正します。
 5. **オプション:** OTL ファイルをソースとして使用してアプリケーションを作成した場合は、アプリケーション・データをインポートします。[データのインポート](#)を参照してください。
スナップショットをアプリケーション・ソースとして使用した場合は、アプリケーション作成プロセスによりデータが自動的にインポートされます。
 6. アプリケーション・ユーザーをアイデンティティ・ドメインに作成し、必要に応じて事前定義されている役割を割り当てます。*Oracle Enterprise Performance Management Cloud 管理者スタート・ガイド*のユーザーと役割の管理を参照してください。
 7. 必要に応じてアクセス権を設定します。[アクセス権限の設定](#)を参照してください。

アプリケーション作成ウィザードを使用したフリーフォーム・アプリケーションの作成

アプリケーション作成ウィザードを使用してフリーフォーム・アプリケーションの作成を続行するには:

1. 「キューブ数」で、フリーフォーム・アプリケーションを作成するために使用するキューブの数を選択します。この時点で最大 12 個のキューブを追加することも、1つのキューブから開始した後、アプリケーション概要ページでキューブをさらに追加することもできます。

 **Note:**

単一キューブのフリーフォーム・アプリケーションを作成する場合は、キューブをフリーフォーム・アプリケーションに追加するまで、データ・マップおよびその他のマルチキューブ機能を使用できません。また、データ・マップが機能するには、ブロック・ストレージ(BSO)キューブが少なくとも1つ必要であり、データ・マップのソースがBSOキューブである必要があります。

2. 「**キューブ名**」に、それぞれのキューブの名前(最大8文字)を入力します。
3. キューブが集約ストレージ・キューブである場合は、「**ASO**」を選択します。「**ASO**」チェック・ボックスの選択を解除すると、キューブはハイブリッド・ブロック・ストレージ・キューブになります。

 **Note:**

ASO キューブを使用するレポート・アプリケーションは、通常、データを集約ビューに格納し、パフォーマンスに悪影響を与えることなくBSOよりも多くのディメンションを処理できます。

4. 「**次**」をクリックします。

ディメンションの作成ページが表示されます。この画面から、3つまでのディメンションを作成し、それぞれを「勘定科目」、「エンティティ」および「期間」デフォルト・ディメンション・タイプに割り当てることができます。後で、**Web** インタフェースでディメンションを追加できます。

 **Note:**

フリーフォーム・アプリケーションには、標準ディメンションは必要ありません。選択したメンバーを含むカスタム・ディメンションのみでアプリケーションを作成できます。作成するディメンションおよびその構造には、標準のアプリケーション・ディメンションで強制される制約が適用されません。

5. 「**ディメンションの作成**」で、デフォルトのアプリケーション・ディメンションを作成およびマップします。次のステップを実行します:
 - ディメンションを作成してデフォルトのディメンション・タイプにマップするには、「**使用可能**」チェック・ボックスを選択して、ディメンション名を入力します。

 **Note:**

ディメンションの有効化は自動ではありません。カスタム・アプリケーションと同様に、フリーフォーム・アプリケーションについてもディメンションを手動で有効にする必要があります。この時点でこれを行うことも、後で有効にすることもできます。

- ディメンションを作成してディメンション・タイプを割り当てるには、行のチェック・ボックスを選択して、ディメンション名を入力します。

- シェル・アプリケーションを作成する場合は、この画面を何も変更しないでください。
アプリケーション作成プロセスの完了後に、ディメンションをシェル・アプリケーションに追加およびマップできます。
- 6. 「次」をクリックします。
- 7. 「確認」で、選択した設定を確認してから「作成」をクリックします。
アプリケーションの作成プロセスには数分かかる場合があります。
- 8. 「アプリケーション作成のステータス」画面で、「OK」をクリックします。
ホーム・ページが表示されます。
- 9. **オプション:** 必要に応じて、カスタム・ディメンションを作成します。
 - a. 「アプリケーション」、「概要」の順にクリックし、「ディメンション」タブを選択します。
 - b. 「キューブ」で、フリーフォーム・アプリケーションについて作成したキューブを選択するか、「すべて」を選択します。
 - c. 「作成」をクリックします。
 - d. 追加する各ディメンションのディメンション詳細を入力します。ディメンション・プロパティの詳細は、[簡易ディメンション・エディタでのディメンション・プロパティの編集](#)を参照してください。
フリーフォーム・アプリケーションでは、ディメンション・タイプを選択できます。ディメンション・タイプは次のとおりです:
 - 勘定科目
 - エンティティ
 - 期間
 - カスタムディメンション・タイプに関するノート:
 - ディメンション・タイプをすでに作成している場合(「勘定科目」、「エンティティ」、「期間」の場合)、またはディメンションの最大数を超過している場合(「カスタム」の場合)、ディメンション・タイプはリストされません。
 - ディメンションの作成後は、ディメンション・タイプを編集できません。「使用可能」を選択して、ディメンションがこのキューブで使用されるかどうかを示します。

 **Note:**

ディメンションの有効化は自動ではありません。カスタム・アプリケーションと同様に、フリーフォーム・アプリケーションについてもディメンションを手動で有効にする必要があります。

- e. 「完了」をクリックします。
- f. 「アクション」、「データベースのリフレッシュ」の順にクリックして、キューブをリフレッシュします。

10. **オプション:** アプリケーション・データをインポートします。[データのインポート](#)を参照してください。
11. **オプション:** スナップショットをインポートするビューのあるシェル・アプリケーションを作成した場合、「移行」にアクセスし、アプリケーションを削除してからインポート・プロセスを完了します。
 - a. フリーフォーム・アプリケーションから環境にスナップショットをアップロードします。手順の詳細は、*Oracle Enterprise Performance Management Cloud 移行の管理*のサービスへのアーカイブのアップロードを参照してください。
 - b. スナップショットをインポートします。手順の詳細は、*Oracle Enterprise Performance Management Cloud 移行の管理*のスナップショットからのアーティファクトとアプリケーションのインポートの別の環境のクローンを作成するためのバックアップのインポートを参照してください。
12. アプリケーション・ユーザーをアイデンティティ・ドメインに作成し、必要に応じて事前定義されている役割を割り当てます。*Oracle Enterprise Performance Management Cloud 管理者スタート・ガイド*のユーザーと役割の管理を参照してください。
13. 必要に応じてアクセス権を設定します。[アクセス権限の設定](#)を参照してください。

アプリケーション所有権の管理

アプリケーションを作成するサービス管理者には、アプリケーション所有者の機能が自動的に割り当てられます。アプリケーション所有者の機能を持つサービス管理者が削除された場合や、ユーザーの事前定義された役割の割当てがダウングレードされた(例: サービス管理者からパワー・ユーザーなどに変更された)場合は、アプリケーションで次に使用可能なサービス管理者ユーザー(アルファベット順)に、アプリケーション所有者の機能が再割当てされます。その後、現在のアプリケーション所有者ユーザーの役割が削除または変更され、アクセス制御と同期されます。

使用可能なサービス管理者がない場合、サービス管理者ユーザーの削除や役割の変更は行われません。問題を解決するための以降の手順について **Oracle** からご連絡します。

任意のサービス管理者が、「**システム設定**」を使用して、アプリケーション所有者の役割を任意の使用可能なサービス管理者に引き継いだり再割当てできます。

[指定可能なアプリケーションおよびシステム設定](#)を参照してください。

フリーフォーム・アプリケーションの FAQ

関連リンク

一般的な質問:

- [Essbase と EPM Cloud フリーフォーム・アプリケーションの違いは何ですか。](#)
- [現在の Essbase 21c バージョンが EPM Cloud に導入されるのはいつですか。](#)
- [EPM Cloud + Essbase 21c を使用するとどのような影響がありますか。これらはどのように連携しますか。データ移動、レポート作成、Smart View 接続など。](#)
- [オンプレミス EPM から EPM Cloud に移行する際に、Essbase キューブについて顧客に推奨することは何ですか。](#)
- [処理を制限するデフォルトのハードウェア設定は何ですか。](#)

- 複数キューブのフリーフォームを入手するにはどの EPM ライセンスが必要ですか。

フリーフォーム・アプリケーションの詳細に関する質問:

- すべてのフリーフォーム・アプリケーションはカスタム・アプリケーションとみなされますか。
- 複数キューブのフリーフォーム・アプリケーションとは、12 個のキューブを持つことができ、それぞれに 2 つまたは 3 つのディメンションのみがあることを意味しますか。
- フリーフォーム・アプリケーションではどのような種類の管理インターフェースを使用できますか。
- 「キューブのリフレッシュ」では、すべてのキューブが一度にリフレッシュされますか。
- サイズのしきい値についてはどうですか。
- 緩やかに変更される属性はフリーフォーム・アプリケーションでサポートされますか。
- Smart View、Oracle Analytics Cloud およびデータ・ビジュアライゼーションを介してフリーフォーム・キューブに直接アクセスできますか。
- ハイブリッド・キューブはフリーフォーム・アプリケーションでサポートされていますか。
- フリーフォーム・アプリケーションでは複数のアプリケーションのリポジトリは提供されますか。
- フリーフォーム・アプリケーションではデータ管理を介したメタデータのロードを使用できますか。
- フリーフォーム・アプリケーションでは Planning のカスタム・アプリケーション・タイプに関連する機能は失われますか。
- フリーフォーム・アプリケーションを選択した場合、Groovy を使用できますか。
- ディメンションを追加した後、削除できますか。
- Planning の移行ファイルを使用して、Essbase OTL または移行 zip ファイルに類似したアプリケーションを作成できますか。
- 複数のアウトライン・ファイルまたは移行ファイルをインポートできますか。
- フリーフォームを使用できるのは、EPM の Enterprise バージョンのみですか(以前に PBCS と呼ばれていたバージョンでは使用できますか)。
- ディメンション(および階層)は、フリーフォームを使用して、従来の Oracle Hyperion Planning アプリケーションから EPM にどのようにアップロードされますか。
- Smart View からデータベースをリフレッシュできますか。
- パーティションは有効になっていますか。
- セキュリティ・フィルタはどのようにして構成できますか。
- タスク・マネージャ機能は、統合できる Financial Consolidation and Close と類似していますか、あるいは単なる基本タスクですか。この機能についてコメントしてください。

- フリーフォームのディメンションはどのように管理されていますか。
- フリーフォーム・アプリのバックアップを作成し、それを **Financial Consolidation and Close** または **Planning Modules Cloud** アプリケーションに移行できますか。
- ビジネス・ルールのスクリプトはどうなりますか。適切に移行されますか。また、**Financial Consolidation and Close** アプリケーションに関する構成可能な連結ルールはありますか。
- OTL の移行は **Essbase** のすべてのバージョンで機能しますか。
- シナリオ/期間ディメンションを必要とするフリーフォームでのデータ統合に制限はありますか。
- アプリケーションがすでに作成されている場合、データをインポートできますか。
- **EPM** 統合エージェント機能がデータ交換でどのように使用されるのかについて情報を提供してください。
- カスタム・ディメンションとビジネス・ルールを作成する機能はありますか。

Oracle Essbase の移行に関する技術的な質問:

- フリーフォーム・アプリケーションではどのようなチューニング機能を使用できますか (ある場合)。
- パーティション化はサポートされていますか。透過、リンク済、レプリケート済ですか。
- 管理者、自動化、シェル統合のための **MaxL** 言語についてはどうですか。
- **MDX** 機能はサポートされますか。
- データ統合/**ETL** 以外に、フリーフォーム・アプリケーションでルール・ファイルを再作成するにはどうすればよいですか。これは、データ統合では扱いにくい可能性があります。
- 大規模な **ASO** データベースの場合、フリーフォーム・アプリケーションで推奨されるデータ・ロード・メカニズムは何ですか。
- **CDF** から **Groovy** への移行ツールを作成する計画はありますか。
- フリーフォーム・アプリケーションに移行できる **Essbase** アーティファクトとその方法を教えてください。
- **Essbase** アウトライン・ファイルまたは移行ファイルがフリーフォーム・アプリケーションにインポートされるときにスキップされるオブジェクトは何ですか。
- **Essbase** 機能は **EPM Cloud** のフリーフォーム・アプリケーションにどのようにマッピングされますか。
- **Essbase** からアクティブおよびパッシブな **Essbase** キューブを移行する場合、フリーフォームでこれらのキューブをどのように処理しますか。

一般的な質問:

Essbase と EPM Cloud フリーフォーム・アプリケーションの違いは何ですか。

ソリューションとしての **Essbase** は、オンプレミス・ソリューションとして購入することも、**Oracle Cloud Infrastructure (OCI)** を介してデプロイするために購入することもできます。これは、お客様がキューブのデプロイメントを完全に制御できる **OCI** ソリューションとしてデプロイされます。フリーフォーム・アプリケーションは、**Oracle Enterprise Performance Management Cloud** が提供する **SaaS** ソリューションであり、**Essbase** キューブを **EPM**

Cloud にインポートして、スタンドアロンでデプロイできます。フリーフォーム・アプリケーションには、Essbase キューブを超えるリレーショナル・コンポーネントを備えたハイブリッド・アーキテクチャがあります。フリーフォーム・アプリケーションは、最大 12 個のキューブと、すべてのキューブ全体で合計 29 個までのディメンションを持つことができます。(26 個のカスタム・ディメンションに加えて、勘定科目、期間およびエンティティの 3 つのディメンション・タイプ。)

現在の Essbase 21c バージョンが EPM Cloud に導入されるのはいつですか。

EPM Cloud への Essbase の最新バージョンの導入は、お客様に対する影響(機能およびパフォーマンス)に基づいています。現在、21c の EPM Cloud への導入を評価中で、フリーフォーム・アプリケーションは早期導入者の 1 つになります。

EPM Cloud + Essbase 21c を使用するとどのような影響がありますか。これらはどのように連携しますか。データ移動、レポート作成、Smart View 接続など。

OCI 上の Essbase 21c は、IaaS デプロイメントです。フリーフォームは SaaS デプロイメントです。データは、いずれかの環境から抽出するか、もう一方の環境に移動する必要があります。Oracle Smart View for Office の共有接続は同じプラットフォーム内で接続できるため、1 つの共有 EPM 接続を使用して複数のフリーフォーム・アプリケーションを接続できます。Smart View でフリーフォームが共有接続である場合、OCI 上の Essbase 21c はプライベート接続になります。フリーフォーム・アプリケーションと OCI 上またはオンプレミスの Essbase 21c の間のデータ交換は、データのエクスポート-インポートになります。

オンプレミス EPM から EPM Cloud に移行する際に、Essbase キューブについて顧客に推奨することは何ですか。

オンプレミス EPM インスタンスを EPM Cloud に移行するオンプレミスのお客様は、Essbase レポート・キューブ・インスタンスまたはプランニング・キューブ・インスタンスを EPM Cloud のフリーフォーム・アプリケーションに移行する必要があります。これにより、SaaS EPM Cloud 内のすべての EPM ビジネス・プロセスへの一貫したアクセスが確実化されます。また、データの遅延および環境間でのデータの移動も回避されます。さらに、アクセス権とセキュリティを維持する 1 つの場所が確保されます。お客様は、EPM Cloud プラットフォームのすべての最新機能および将来の拡張機能を継続的に活用できます。

処理を制限するデフォルトのハードウェア設定は何ですか。

名前付きユーザー・ライセンスに基づいて運営しており、パフォーマンスの期待値はクラウド・ホスティング・ポリシーに応じたものになります。EPM Cloud では標準化されたクラウド・ハードウェア構成が使用され、お客様はサービス・リクエスト・プロセスを使用して変更リクエストを作成できます。

複数キューブのフリーフォームを入手するにはどの EPM ライセンスが必要ですか。

フリーフォーム・アプリケーションは、EPM Enterprise Cloud で使用できます。

フリーフォーム・アプリケーションの詳細に関する質問:

すべてのフリーフォーム・アプリケーションはカスタム・アプリケーションとみなされますか。

はい。すべてのフリーフォーム・アプリケーションは完全にカスタムで、すぐに使用できるコンテンツはありません。ディメンションおよびメンバーには完全な柔軟性が

あります。キューブの合計数がカスタム・ディメンション数の 26 より少ない場合は、任意のディメンションの組合せのキューブを作成できます。「勘定科目」、「期間」または「エンティティ」の各ディメンションがキューブ・ディメンションの一部である場合は、これらをデフォルトのディメンション・タイプにマップできます。これらのディメンションがソース・アウトラインまたは移行ファイルに存在する場合は、自動的にマップされます。

複数キューブのフリーフォーム・アプリケーションとは、12 個のキューブを持つことができ、それぞれに 2 つまたは 3 つのディメンションのみがあることを意味しますか。

フリーフォーム・アプリケーションでは、BSO キューブと ASO キューブを組み合わせて、最大 12 個のキューブを使用できます。各キューブには、必要なディメンションまたはメンバーを要求しなくても、必要なディメンションを含めることができます。

フリーフォーム・アプリケーションではどのような種類の管理インターフェースを使用できますか。

SaaS に関連する範囲の Essbase 管理コンソール機能は、Calculation Manager またはフリーフォーム・アプリケーションのディメンション・エディタで使用できます。これは Web ベースのアプリケーションであるため、EPM Web アプリケーションには、管理者が EPM アプリケーションを管理できる他の管理インターフェースがあります。

「キューブのリフレッシュ」では、すべてのキューブが一度にリフレッシュされますか。

フリーフォーム・デプロイメントは、1 つのフリーフォーム・アプリケーション内に含まれるキューブです。最大 12 個のキューブを持つことができます。リフレッシュは、アプリケーションによってすべてのキューブを横断して実行されます。EPM Cloud にはキューブ固有のリフレッシュの概念はありません。

サイズのしきい値についてはどうですか。

フリーフォームが使用できる新しい EPM Enterprise Cloud には、ファイル・サイズの制限はありません。ディメンション・サイズおよびデータ量は、ケースバイケースで処理されます。しきい値をアップスケールするための標準的な安定したサポート・プロトコルがあります。

緩やかに変更される属性はフリーフォーム・アプリケーションでサポートされますか。

これについて一部のお客様から要望がありましたが、要求度がそれほど高くありません。クラウド・カスタム・コネクトのカスタム・コネクト・フィードバックに基づいて調査する予定です。

Smart View、Oracle Analytics Cloud およびデータ・ビジュアライゼーションを介してフリーフォーム・キューブに直接アクセスできますか。

フリーフォーム・アプリケーションへの Smart View の接続は、標準の Smart View EPM Cloud インターフェースを経由します。フリーフォーム・アプリケーションにアクセスするには、Oracle Analytics Cloud から、および Oracle Analytics Cloud の直接接続機能を使用したデータ・ビジュアライゼーションを使用できます。

ハイブリッド・キューブはフリーフォーム・アプリケーションでサポートされていますか。

フリーフォーム・アプリケーションは、ハイブリッド BSO キューブおよび ASO キューブの作成をサポートしています

フリーフォーム・アプリケーションでは複数のアプリケーションのリポジトリは提供されますか。

アプリケーションごとにリポジトリがありますが、別のアプリケーションから接続できます。アプリケーション間のデータは、Web と Smart View でブレンドできます。

フリーフォーム・アプリケーションではデータ管理を介したメタデータのロードを使用できますか。

はい。データ管理のメタデータのロードは、少なくとも 1 つの BSO キューブがある場合にサポートされます。近い将来、データ管理を介した ASO キューブのみでフリーフォーム・アプリケーションをサポートする予定です。アウトライン・ロード・ユーティリティ (OLU) を使用したメタデータのインポートはオプションです。

フリーフォーム・アプリケーションでは Planning のカスタム・アプリケーション・タイプに関連する機能は失われますか。

Planning の必須ディメンションに依存しない共通のプラットフォーム機能はすべて使用できます。オープンされているディメンションの承認は計画中です。

フリーフォーム・アプリケーションを選択した場合、Groovy を使用できますか。

はい。フリーフォーム・アプリケーションでは、すべてのプラットフォーム機能を使用できます。Groovy ルールを含むすべてのビジネス・ルールは、フリーフォーム・アプリケーションでサポートされています。

ディメンションを追加した後、削除できますか。

キューブからディメンションの選択を解除すると、次のキューブのリフレッシュにより、そのキューブからディメンションの関連付けが削除されます。

Planning の移行ファイルを使用して、Essbase OTL または移行 zip ファイルに類似したアプリケーションを作成できますか。

フリーフォーム・アプリケーションは、Essbase アウトライン(OTL)/移行のインポート用、または最初から構築するアプリケーションとして使用できます。オンプレミス Planning アプリケーションは、EPM Enterprise Cloud のカスタム・アプリケーション・タイプにマップされます。

複数のアウトライン・ファイルまたは移行ファイルをインポートできますか。

フリーフォームは、アプリケーションを作成するために 1 つのアウトライン・ファイルまたは移行ファイルのみを受け入れます。インタフェースで追加のキューブを作成し、このアウトラインに関連付けることができます。複数のアウトライン・ファイルまたは移行ファイルを 1 つのアプリケーションにインポートすることはありません。

フリーフォームを使用できるのは、EPM の Enterprise バージョンのみですか(以前に PBCS と呼ばれていたバージョンでは使用できますか)。

フリーフォーム・アプリケーションは、EPM Enterprise Cloud で使用できます。

ディメンション(および階層)は、フリーフォームを使用して、従来の Oracle Hyperion Planning アプリケーションから EPM にどのようにアップロードされますか。

オプションとして、Essbase アウトライン・ファイル(OTL)を使用したロード、ソースからのディメンション抽出とインポート、Web インタフェース/SmartView 拡張機能を使用した管理または手動作成があります。

Smart View からデータベースをリフレッシュできますか。

はい。Smart View からリフレッシュできます。「**ディメンション**」を右クリックし、「**データベースのリフレッシュ**」を選択します。

パーティションは有効になっていますか。

いいえ。フリーフォームは EPM Cloud の SaaS デプロイメントであり、代替ソリューションを使用できるため、フリーフォーム内にパーティションは必要ありません。データ・マップおよびスマート・プッシュを使用して、キューブ間でデータをフィードできます。パーティション化には、ディスク I/O とネットワーク・アクセスの両方が必要ですが、どちらも Oracle SaaS Cloud では許可されていません。クラウドでは、ディスクおよびネットワークが仮想化されています。同じフリーフォーム・アプリケーションに ASO キューブと BSO キューブが混在し、ハイブリッド BSO、データ・マップ、スマート・プッシュおよび Groovy を使用する場合、パーティション化は必要ありません。

セキュリティ・フィルタはどのようにして構成できますか。

セキュリティはアクセス制御を介して制御され、ユーザーにはアプリケーションへのアクセスが付与され、そこからオブジェクトへのアクセスが許可されます。さらに、フリーフォームにはセル・レベルのセキュリティがあります。

タスク・マネージャ機能は、統合できる Financial Consolidation and Close と類似していますか、あるいは単なる基本タスクですか。この機能についてコメントしてください。

フリーフォームではタスク・リストが使用されます。タスク・マネージャ機能は、Planning アプリケーションで使用できるようになりましたが、フリーフォームでは使用できません。

フリーフォームのディメンションはどのように管理されていますか。

ディメンション管理は、様々な方法で完了できます:

- Web インタフェースおよび Smart View を使用したソリューションでの手動による方法
- データ管理およびディメンションのインポート・ジョブを使用したソース・ソリューションからの統合による方法
- Oracle Fusion Cloud EPM Infrastructure (OCI)などの統合ツールを使用する方法
- 統合された Oracle Data Relationship Management (DRM)から管理する方法
- 完全なエンタープライズ・データ・ガバナンスおよび制御機能を提供する、EPM Enterprise ソリューションの一部である Oracle Enterprise Data Management Cloud を使用する方法

フリーフォーム・アプリケーションのバックアップを作成し、それを Financial Consolidation and Close または Planning モジュール Cloud アプリケーションに移行できますか。

いいえ。フリーフォームは異なるビジネス・プロセスであるため、他のビジネス・プロセスには移行できません。

ビジネス・ルールのスクリプトはどうなりますか。適切に移行されますか。また、Financial Consolidation and Close アプリケーションに関する構成可能な連結ルールはありますか。

いいえ。フリーフォームは異なるビジネス・プロセスであるため、他のビジネス・プロセスには移行できません。

OTL の移行は Essbase のすべてのバージョンで機能しますか。

オンプレミス・リリース 11.1.2.4.xxx (またはそれ以降)の単一キューブ Essbase アプリケーションのアウトライン(OTL)ファイルまたはスナップショットを使用して、フリーフォーム・アプリケーションを作成できます。詳細は、[フリーフォーム・アプリケーションのソース](#)を参照してください。

シナリオ/期間ディメンションを必要とするフリーフォームでのデータ統合に制限はありませんか。

フリーフォームでデータ統合を使用するには、少なくとも勘定科目、期間およびシナリオのディメンション・タイプを定義する必要があります。詳細は、*Oracle Enterprise Performance Management Cloud データ統合の管理*のフリー・フォーム・アプリケーションへのデータのロードを参照してください。

アプリケーションがすでに作成されている場合、データをインポートできますか。

データ・インポート機能を使用してデータをインポートできます。詳細は、[データのインポート](#)を参照してください。移行ベースのデータ・インポートは、アプリケーションの作成時にのみ使用できます。

EPM 統合エージェント機能がデータ交換でどのように使用されているかについて情報を提供してください。

EPM 統合エージェントは、オンプレミスまたは任意のシステム(サード・パーティのクラウドなど)からデータやメタデータを抽出して変換し、EPM Cloud に提供する完全に統合されたソリューションです。

カスタム SQL 問合せまたは事前パッケージ化済問合せを使用して、オンプレミス・データ・ソースに接続してデータをロードし、EBS や PeopleSoft General Ledger などのソースからデータをインポートできます。

詳細は、*Oracle Enterprise Performance Management Cloud データ統合の管理*の EPM 統合エージェントを使用した EPM Cloud とオンプレミス間の接続を参照してください。

カスタム・ディメンションとビジネス・ルールを作成する機能はありますか。

はい。フリーフォームは設計上完全にオープンなビジネス・プロセスであるため、ディメンションおよびビジネス・ルールはすべてカスタムで構築されます。

Essbase の移行に関する技術的な質問:**フリーフォーム・アプリケーションではどのようなチューニング機能を使用できますか(ある場合)。**

フリーフォーム・アプリケーションは SaaS アプリケーションであるため、チューニングは Oracle によって管理されます。必要な範囲で、データベース・プロパティは、Calculation Manager インタフェース内で使用できます。

パーティション化はサポートされていますか。透過、リンク済、レプリケート済ですか。

いいえ。フリーフォームは EPM Cloud の SaaS デプロイメントであり、代替ソリューションを使用できるため、フリーフォーム内にパーティションは必要ありません。データ・マップおよびスマート・プッシュを使用して、キューブ間でデータをフィードできます。パーティション化には、ディスク I/O とネットワーク・アクセスの両方が必要ですが、どちらも Oracle SaaS Cloud では許可されていません。クラウドでは、ディスクおよびネットワークが仮想化されています。同じフリーフォーム・アプリケーションに ASO キューブと BSO キューブが混在し、ハイブリッド BSO、データ・マップ、スマート・プッシュおよび Groovy を使用する場合、パーティション化は必要ありません。

管理者、自動化、シェル統合のための MaxL 言語についてはどうですか。

SaaS クラウドのセキュリティ上の理由から、直接スクリプトは使用できません。SaaS プラットフォームであるため、無制限のスクリプトは許可されていません。MaxL については EPM Cloud では、他に使用できる代替手段があります。EPM 自動化、EPM エージェントおよび Groovy は優れた代替手段です。

MDX 機能はサポートされますか。

MDX は、すでにフリーフォーム・アプリケーションの ASO である程度サポートされています。カスタム計算および配賦の MDX スクリプトは、20.05 以降 Groovy スクリプトを介して公開されています。

データ統合/ETL 以外に、フリーフォーム・アプリケーションでルール・ファイルを再作成するにはどうすればよいですか。これは、データ統合では扱いにくい可能性があります。

現在、フリーフォーム・アプリケーションへの Essbase フォーマット・データのインポートをサポートしています。Oracle Enterprise Performance Management Cloud データ統合の管理のデータ統合の定義およびフリーフォーム・アプリケーションへのデータのロードを参照してください。

大規模な ASO データベースの場合、フリーフォーム・アプリケーションで推奨されるデータ・ロード・メカニズムは何ですか。

Essbase ファイル・フォーマットを使用するか、データ統合を使用します。

CDF から Groovy への移行ツールを作成する計画はありますか。

Groovy に CDF を移行する計画はありません。Java のセキュリティを考慮すると、CDF の移行は実行できません。Groovy は優れた最新の代替手段です。

フリーフォーム・アプリケーションに移行できる Essbase アーティファクトとその方法を教えてください。

Essbase アーティファクト	フリーフォーム・インポート・ファイル?	ノート
アプリケーションとキューブのメタデータ	はい	キューブおよびアウトライン・メタデータがインポートされます。
計算スクリプト	はい	Calculation Manager にインポートされ、ビジネス・ルールとして使用されます
データ	はい	ソースからの、または移行を使用したレベル・ゼロのインポート
ディスク・ボリューム	NA	
ドリル・スルー定義	いいえ	データ統合を介して管理されます
Excel のワークブックとファイル	NA	Smart View で EPM 接続を使用して再マップされます
フィルタ	いいえ	メタデータのセキュリティは、リレーショナル・スキーマで維持されます。
リンクされたレポート・オブジェクト(Linked Reporting Object:LRO)	いいえ	添付およびコメントは、EPM では個別に管理されます。
ロケーション別名	NA	
ログ・ファイル	いいえ	
アウトラインと式	はい	
パーティション	いいえ	キューブ間でデータ・マップおよびスマート・プッシュによる代替手段を使用できます。
レポート・スクリプト	いいえ	他のエクスポートの代替手段を使用できます。
ルール・ファイル、テキスト・ファイル、.csv ファイル	はい	
シナリオ	NA	
代替変数	はい	
ユーザー	いいえ	EPM SaaS Cloud の IDM で個別に管理されます
ユーザーの役割	いいえ	EPM SaaS Cloud の IDM で個別に管理されます

Essbase アウトライン・ファイルまたは移行ファイルがフリーフォーム・アプリケーションにインポートされるときにスキップされるオブジェクトは何ですか。

Essbase アーティファクト	インポート中にオブジェクトがスキップされる理由
カスタム定義の関数(CDF)	CDF は可能ですが、Java のセキュリティを考慮すると、現在は実行できません。Groovy は優れた代替手段です。
カスタム定義のマクロ(CDM)	Essbase の CDM は古いアーティファクトです。ルールで Calculation Manager の設計時プロンプトを使用することで、その同じ概念がより適切に実装されます。

Essbase アーティファクト	インポート中にオブジェクトがスキップされる理由
ロケーション別名	ロケーション別名は、サーバー名、アプリケーション名、データベース名、ユーザー名およびパスワードを介して物理 Essbase データベースを参照できるショートカット名です。フリーフォーム・アプリケーションは自己完結型で、複数のデータベースを備えた単一のアプリケーション内にあります。このために、アプリケーション内でデータ・マップおよびスマート・プッシュを使用できません。
レポート・スクリプト	データのインポートおよびエクスポートの代替手段は、Groovy および EPM 自動化を介して EPM Cloud で使用できます。
ルールのロード	データ統合は、個別に実行できるルールのロードを取得する機能を提供します。

Essbase 機能は EPM Cloud のフリーフォーム・アプリケーションにどのようにマッピングされますか。

ネイティブ Essbase 11g の機能	EPM Cloud のフリーフォーム・アプリケーション
アクティブ/パッシブ・キューブ	実装設定を使用してサポートできます
計算スクリプト	ビジネス・ルール
カスタム定義の関数/マクロ	Groovy
データベースのバージョンニング	移行のスナップショットによる自動化。追加の環境。
Oracle Essbase Administration Services のアウトラインの表示/編集	ディメンション・エディタ
Essbase のセル・レベル・セキュリティ	EPM Cloud アプリケーションのセル・レベル・セキュリティ
リンク・レポート・オブジェクト	セル・コメント、ドキュメントの添付、サポート詳細
ルールのロード	データ統合のルール、Groovy、ディメンション/データ・インポート、OLU エクスポート、レベル 0 (自動)のエクスポート
MaxL スクリプト	EPM 自動化、EPM エージェントおよび Groovy
パーティショニング	Groovy を使用したクロス・キューブのデータ・マップ/スマート・プッシュは効果的な代替手段です
レポート・スクリプト	EPM Cloud のエクスポート・ルール、他の問合せ/自動化ソリューション
テキスト・リスト	すべてのディメンションにおけるスマート・リスト

Essbase からアクティブおよびパッシブな Essbase キューブを移行する場合、フリーフォームでこれらのキューブをどのように処理しますか。

- アクティブなキューブは、アクティブに使用され、多くのユーザーによって頻繁に使用されるキューブです。
- パッシブなキューブは、アクティブには使用されず、たまにしか使用されないキューブです。パッシブなキューブは多くの場合、振り返って確認するかまたは監査用のデータのアーカイブとして、比較決定を行うためにある時点のデータのビューを表すデータのバージョンのスナップショットです。パッシブなキューブはたまにしか必要でなく、少数のユーザーのみが必要とします。

- 通常、アクティブなキューブの数はパッシブなキューブより少なくなります。アクティブなキューブは頻繁に使用され、使用回数も多いため、お客様はすべてのアクティブなキューブをアクティブなアプリケーションに移行する必要があります。共通ディメンションを持つキューブは、デプロイされるアプリケーションの数を最適化するために、可能な限り 1 つのアプリケーションに整理する必要があります。

パッシブなキューブの場合、推奨プラクティスは次のとおりです：

1. ライセンス・プロセスの一環として、追加の環境(通常は 2 から 5)を要求します。追加の環境の正確な数は、ユーザー数およびパッシブなキューブ数によって異なります。
2. EPM 自動化を使用して、パッシブなキューブそれぞれの Oracle Essbase アウトライン・ファイル/移行を予備環境にインポートし、フリーフォームの移行ファイルとしてエクスポートするインポートおよびエクスポート自動化ルーチンを作成します。パッシブなキューブ・アプリケーションそれぞれのフリーフォームの移行ファイルをローカル/リモートのクラウドの場所に毎月エクスポートして、パッシブなキューブ・アプリケーションそれぞれの現在のバージョンの移行ファイルを常に即座にインポートできるようにします。これらのパッシブなキューブを含むアプリケーションのファイル名は、キューブの機能的性質を表し、直感的にわかるようにしてください。
3. パッシブなキューブ内のデータを操作または表示する必要がある場合は、そのアプリケーションの移行ファイルを予備の EPM Cloud インスタンスにインポートできます。移行ファイルのバージョンは現在のバージョンであるため、フリーフォームの現在のバージョンの EPM Cloud にインポートされます。

3

はじめに

次も参照:

- [ホーム・ページについて](#)
ビジネス・プロセスを作成した後は、ホーム・ページがビジネス・プロセス・タスクにアクセスするための起動ポイントとなります。
- [レッドウッド・エクスペリエンスでの動的タブの使用](#)
親アーティファクトから移動せずに、タブ内で関連するアーティファクトを操作します。

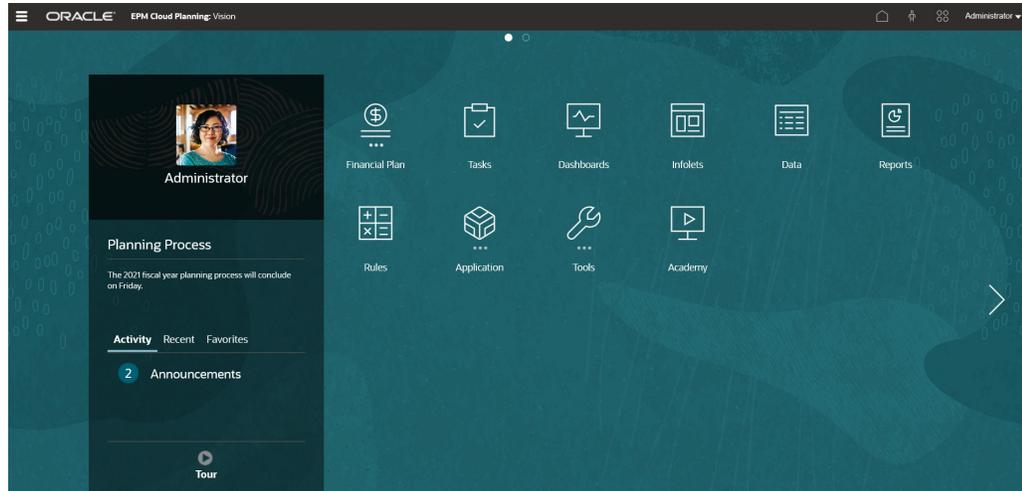
ホーム・ページについて

ビジネス・プロセスを作成した後は、ホーム・ページがビジネス・プロセス・タスクにアクセスするための起動ポイントとなります。

インタフェースにより、直感的なユーザー操作と、よく使用される機能へのクイック・アクセスの概要が提供されます。たとえば、ユーザーは、タスクへのアクセス、データの操作、予算の承認、レポートの表示および設定の制御を行うことができます。サービス管理者は、ビジネス・プロセスの管理とカスタマイズ、フォームやダッシュボード、インフォレットの作成、データおよびメタデータのインポートとエクスポート、ジョブのスケジュール、有効な交差の定義、通知の作成、環境間接続の作成などを行うことができます。

新しく作成された、または再作成されたすべての **Oracle Enterprise Performance Management Cloud** サービス、ビジネス・プロセスおよびアプリケーションで、レッドウッド・エクスペリエンスがデフォルト・テーマとして使用されます。「**外観**」ページで、EPM Cloud 環境の全般的なルック・アンド・フィールを変更できます。「**外観**」ページでは、レッドウッド・エクスペリエンスを有効にするか、クラシック・テーマを選択できます。テーマごとに、異なる背景色やアイコン・スタイルなどが用意されています。ブランド・ロゴと背景イメージをホーム・ページに追加することもできます。環境の全般的なルック・アンド・フィールを変更するには、[表示形式のカスタマイズ](#)を参照してください。

レッドウッド・エクスペリエンスを表示するホーム・ページの例



グローバル・ヘッダー

グローバル・ヘッダーは、ユーザー・インタフェース上部の横幅にわたる領域です。ここには、ナビゲーション・アイコンの他、アクセシビリティ設定や「**設定およびアクション**」メニューへのアクセスが含まれます。また、グローバル・ヘッダーからナビゲーション・フローを切り替えることもできます。



グローバル・ヘッダーの左から右までの部分には次のものがあります:

グローバル・ヘッダーの部 説明



「ナビゲータ」アイコンによって「**ナビゲータ**」メニューが開かれます。これは、ビジネス・プロセスのサイトマップであり、アクセスできるすべてのビジネス・プロセス・ページへのリンクが表示されます。

ノート:

「**ナビゲータ**」メニューの一部のリンクは、デスクトップからビジネス・プロセスにアクセスしている場合にのみ使用可能です。



ビジネス・プロセスの他の場所で作業中に Oracle ロゴをクリックすると、ホーム・ページに戻ります。Oracle ロゴのかわりにカスタム・ロゴを表示するには、「**外観**」ページで「**ロゴ・イメージ**」を選択します。



現在のビジネス・プロセスの名前です。ビジネス・プロセス名を非表示にするには、「**外観**」ページの「**ビジネス・プロセス名の表示**」オプションについて「**いいえ**」を選択します。

グローバル・ヘッダーの部 説明 分



ホーム・アイコンで、ホーム・ページを更新したり、ビジネス・プロセスの他の場所で作業しているときにホーム・ページに戻ります。



「アクセシビリティ設定」アイコンをクリックして、アクセシビリティ機能を有効にします。



複数のグループに属している場合、またはナビゲーション・フローが役割に割り当てられている場合は、ナビゲーション・フロー・アイコンをクリックして実行時にナビゲーション・フローを切り替えます。



ユーザー名をクリックして「設定およびアクション」メニューにアクセスします。

作業領域

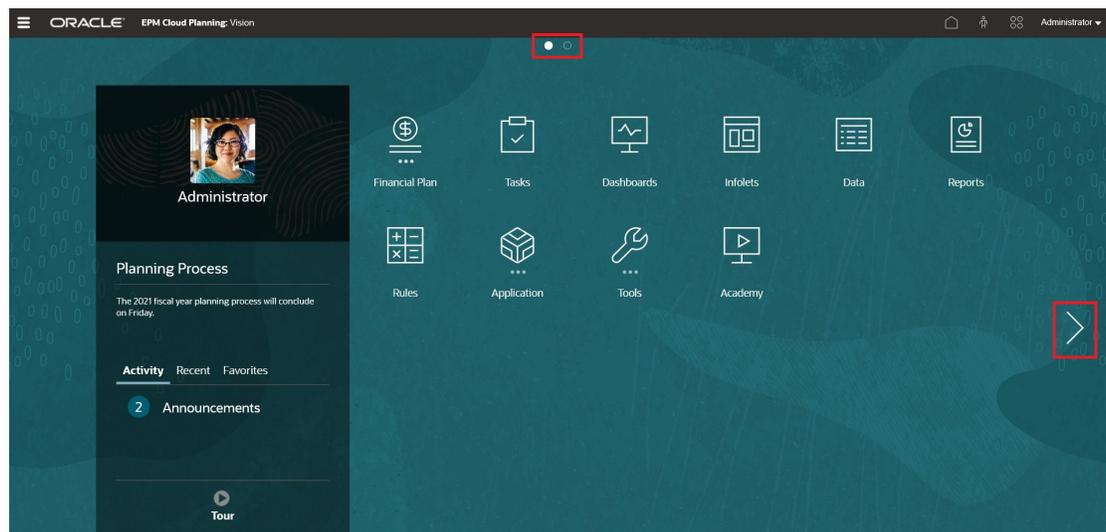
ホーム・ページの作業領域には、テーマに基づく背景イメージまたはカスタムの背景イメージが表示されます。作業領域に表示されるアイコンは、アクセス権を持っているビジネス・プロセスの各機能領域にリンクしています。たとえば、「財務」、「ダッシュボード」、「データ」があります。アイコン・ラベルの上に表示された3つのドットは、そのアイコンによってクラスタと呼ばれるサブアイコンのグループが表示されることを示します。

「アカデミ」アイコンは、ビジネス・プロセスの使用に関連する様々なリソースにリンクします。

作業領域のテーマに基づく背景イメージをカスタムの背景イメージに置き換えるには、「外観」ページで「背景イメージ」を選択します。

インフォレットのナビゲーション

ビジネス・プロセスでインフォレットを使用して概要レベルの必須情報を示す場合は、グローバル・ヘッダーの下に表示されるドットをクリックして調べることができます。ホーム・ページの側面にも矢印があり、ホーム・ページとインフォレット・ダッシュボード・ページとの間を簡単に移動できます。



「お知らせ」パネル

「お知らせ」パネルには、ユーザー名とプロフィール・ピクチャ(設定されている場合)、サービス管理者によって入力されたシステムに関するお知らせが表示され、自分のアクティビティを追跡できます。



- プロファイル・ピクチャを設定して、ホーム・ページの「お知らせ」パネルの上部に表示できます。プロフィール・ピクチャを設定するには、「**ツール**」、「**ユーザー・プリファレンス**」の順にクリックします。

詳細は、フリーフォームの操作のプロファイル・ピクチャの設定を参照してください。

- **アクティビティ**: システムのお知らせが要約され(発効日でソートした最新のお知らせが一番上に表示されます)、オープン・タスクがリストされます。「**お知らせ**」をクリックしてパネルを反転させてお知らせを表示します。「**本日期限のタスク**」をクリックしてパネルを反転させて、自分のタスクを表示します。
- **最新**: 最近アクセスしたフォームとダッシュボード(最大 15 アイテム)へのリンクのリストが表示されます。リンクをクリックすると、アイテムがセカンダリ・ウィンドウで起動します。リンクの横の星をクリックすると、お気に入りとしてタグ付けされます。
- **お気に入り**: お気に入りとしてタグ付けされたフォームまたはダッシュボードへのリンクのリストが表示され、それらが上書きされないようにします。「**お気に入り**」のリンクをクリックして、アイテムをセカンダリ・ウィンドウで起動します。「**お気に入り**」にアイテムを追加するには、「**最新**」をクリックして最近のユーザー・アクティビティを表示し、アイテムの右側にある星をクリックします。
-  **「ツアー」** アイコンをクリックして、ビジネス・プロセスの主要機能に関するビデオを起動します。

ビデオ

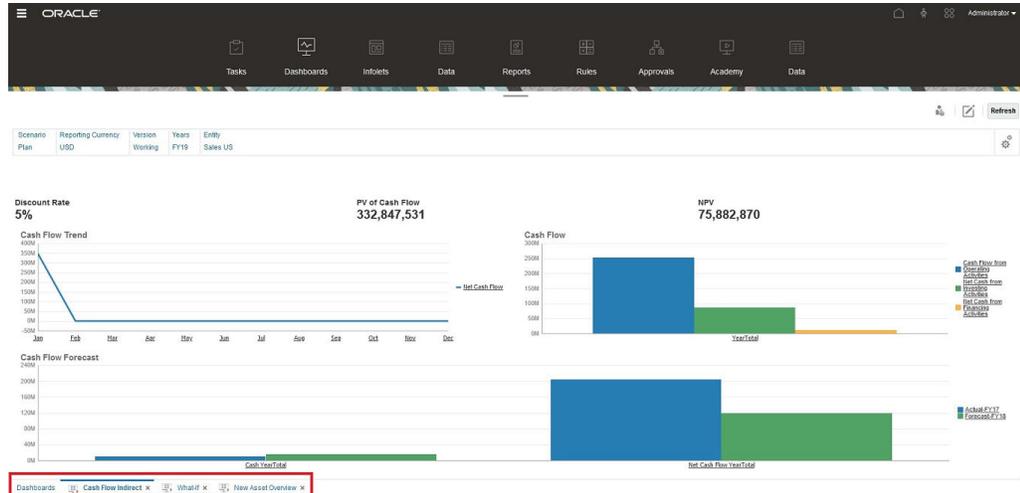
目的	視聴するビデオ
デフォルトのレッドウッド・エクスペリエンス・テーマについて調べます。	 概要: EPM Cloud の新しいレッドウッド・テーマのお知らせ
インタフェースをカスタマイズしてワークフローを合理化する方法を学習します。	 概要: Enterprise Performance Management Cloud のワークフローのカスタマイズ

レッドウッド・エクスペリエンスでの動的タブの使用

親アーティファクトから移動せずに、タブ内で関連するアーティファクトを操作します。

動的タブについて

動的タブを使用して、単一のページに複数のアーティファクトを表示できます。たとえば、フォームを開いている場合は、他の関連するフォームやダッシュボードを開くことができます。これらの追加のアーティファクトは、ページの下部にある水平タブで示されます。これは、複数のアーティファクトを同時に表示する必要があるときに、複数のブラウザ・ウィンドウを開くことを望まないユーザーのための機能です。動的タブ機能は、レッドウッド・エクスペリエンスが有効になっている場合にのみ使用できます。



動的タブの用語:

- 動的タブ: 関連するアーティファクトが起動されたときに、ページ下部のソース・タブの右側に追加されるタブ。閉じるアイコンが表示されるのは動的タブのみです。
- ソース・タブ: 動的タブを起動したページ。

Oracle Enterprise Performance Management Cloud 環境に別の EPM Cloud 環境のタブが含まれている場合、それらの環境間のタブに対して動的タブがサポートされます。

動的タブを使用する場合の考慮事項

- 動的タブを使用するには、レッドウッド・エクスペリエンスを有効にする必要があります。ビジネス・プロセスにレッドウッド・エクスペリエンス以外のテーマを使用している場合は、動的タブを使用できません。
- 1 ページに最大 30 個のタブを開くことができます。30 個を超えるタブを開こうとすると、新しいタブを開く前にいくつかのタブを閉じるように求めるメッセージが表示されます。
- 長いアーティファクト名は、切り捨てられてタブに表示されます。
- レッドウッド・エクスペリエンスの「アクション」メニューには、グローバル・オプションのみが表示されます。フォームの右クリック・メニューと同じオプションは表示されなくなります。フォーム固有のオプション(Tax Reporting の「連結」や「換算」など)を表示するには、行、列、POV またはセルをフォームで右クリックします。

動的タブの操作

作業しているページの下部には、ソース・タブと動的タブが表示されます。

既存のタブまたはリスト・ページから新しい動的タブを起動すると、新しいタブは、既存のタブの右側に追加され、新しく起動されたタブにフォーカスが移動します。

動的タブは、現在のセッションでのみ保持されます。表示された最後のタブは、同じセッション内で次回ページにアクセスしたときに保持されています。ログアウトしてから再度ログインした場合、ナビゲーション・フローをリロードした場合、または別のナビゲーション・フローに切り替えた場合、動的タブは保持されません。保存されていないデータがある場合は、続行する前に保存するように求められます。

新しいアクションを実行するたびに、新しい動的タブが開きます。たとえば、フォーム 1 でドリルスルーを実行した後、フォーム 2 でドリルスルーを実行すると、2 つの動的タブが開きます。フォーム 1 で別のドリルスルーを実行すると、以前に開いたタブが再起動されます。

動的タブに起動されたアーティファクトは、「お知らせ」パネルの最近の履歴にもリストされます。また、「お知らせ」パネルの「**お気に入り**」にも動的タブを追加できます。

動的タブには閉じるアイコンが表示されます。保存されていないデータがタブにある場合は、タブを閉じる前に保存するように求められます。タブを閉じると、閉じたタブの左側のタブにフォーカスが移動します。フォーカスされていないタブを閉じると、フォーカスは、現在表示されているタブにとどまります。動的タブをすべて閉じるには、ページの下部に表示されている水平タブを右クリックし、「**すべてのタブを閉じる**」をクリックします。

ビデオ

目的	参照するビデオ
動的タブを使用して、様々なアーティファクトを含む複数タスクに移動する方法を学習します。動的タブを使用すると、元のアーティファクトを開いたまま、関連するアーティファクトを開くことができます。	 動的タブを使用した移動

4

アクセス権限の設定

ディメンション、フォーム、ダッシュボード、タスク・リストなどのアプリケーション・アーティファクトに対するアクセス権限を割り当てます。

次も参照:

- [ユーザーおよび役割の管理について](#)
- [権限を割り当てることができるアプリケーション・アーティファクト](#)
- [アクセス権限タイプ](#)
- [アーティファクトへの権限の管理](#)
- [アクセス権限のレポート](#)
- [アクセス制御からの変更情報の取得](#)

ユーザーおよび役割の管理について

このビジネス・プロセスでは、セキュリティを確保するために複数のセキュリティ・レイヤーが使用されています。Oracle によって実装および管理されるインフラストラクチャ・コンポーネントにより、アプリケーションのセキュアな環境が構築されます。

権限があるユーザーのみにアプリケーションへのアクセスを許可する次のメカニズムを使用することにより、ビジネス・プロセス・レベルのセキュリティが保証されます。

- シングル・サインオン(SSO)
- ビジネス・プロセスへの役割ベースのアクセス

グローバル役割は、Oracle Cloud Identity Console を介して付与されます。Oracle Enterprise Performance Management Cloud 管理者スタート・ガイドを参照してください。

アクセス権限はアプリケーション・インタフェースを介して付与されます。詳細は、この章で説明します。

権限を割り当てることができるアプリケーション・アーティファクト

次のアーティファクトに権限を割り当てることができます。

- ユーザー定義のディメンションを含む、ディメンション

 **ノート:**

メンバーに権限を割り当てるには、ディメンション・プロパティ「**セキュリティの適用**」を選択します。「**セキュリティの適用**」の設定を省略またはクリアすると、すべてのユーザーがディメンションのメンバーにアクセスできるようになります。

[簡易ディメンション・エディタでのディメンション・プロパティの編集](#)を参照してください。

- ナビゲーション・フロー
- ルールの起動権限
- ルール・フォルダ
- フォーム
- ダッシュボード
- インフォレット
- レポート、ブックおよびバースティング定義
- フォーム・フォルダ
- ダッシュボード・フォルダ
- インフォレット・フォルダ
- レポートおよびドキュメント・フォルダ
- タスク・リスト
- Groovy テンプレート

アクセス権限タイプ

アクセス権限には、読取り、書込みおよびなしがあります。どのユーザーがどのルールを起動できるかを設定することもできます。

- **起動:** 起動の権限を許可します

 **ノート:**

表示ユーザー・タイプには、ディメンション・メンバーへの書込み権限がないため、メンバー、ディメンション、メンバー範囲またはディメンション間実行時プロンプト・タイプを含む実行時プロンプトのあるルールを起動できません。その他の実行時プロンプト(たとえば日付タイプ)のあるルールを起動することは可能です。

- **起動しない:** 起動を許可しない権限

 **ノート:**

ユーザーがあるグループに属する理由からルール of 起動権限を継承しているが、他のグループに属する理由から起動を許可しない権限も割り当てられている場合は、より制限的である「起動を許可しない」権限が優先します。

個別ユーザーおよび各グループにアクセス権限を指定できます。ユーザーをグループに割り当てる場合、ユーザーはグループへのアクセス権限が必要になります。個人のアクセス権限とユーザーが属するグループのアクセス権限に矛盾がある場合は、ユーザーに割り当てられたアクセス権限が優先します。

権限の継承

ユーザーまたはグループのアクセス権限は継承によって決定されます。メンバーの子または子孫がその権限を継承する原因となる属性を指定できます。割り当てられた権限は、継承された権限に優先します。権限設定で、メンバーを含めるかまたは除外できます。

表 4-1 アクセス権限の継承オプション

継承オプション	権限の割当て
メンバー	現在選択されているメンバーのみ
子	現在選択されているメンバーのレベル以下にあるすべての子メンバー
子(含む)	現在選択されているメンバーおよびそのメンバーのレベル以下にあるすべての子メンバー
子孫	現在選択されているメンバーの下にあるすべての子孫メンバー
子孫(含む)	現在選択されているメンバーおよびそのメンバーの下にあるすべての子孫メンバー

権限の評価法

権限を評価する場合、アプリケーションは次の順序で優先権を与えます。

1. 役割レベルのセキュリティ。サービス管理者の役割を持つユーザーには、すべてのアプリケーション要素への権限があります。
2. 具体的にユーザーに割り当てられた権限である、パワー・ユーザー、ユーザーおよび参照者のユーザー・タイプ。
3. グループに属することで割り当てられた権限。

 **ノート:**

1つのメンバーが、グループ・メンバーに対して異なる権限を割り当てている2つのグループに属する場合、最も制限の小さい権限が優先されます。たとえば、あるグループがメンバーに「読取り」権限を割り当て、別のグループが同じメンバーに「書込み」権限を割り当てている場合は、「書込み」権限が優先されます。ただし、グループの1つが権限なし(なし)をメンバーに割り当てている場合は、「なし」が「読取り」と「書込み」に優先されます。

4. 親レベルの割当て(たとえば、親メンバーまたはフォルダへのアクセス)。

アーティファクトへの権限の管理

次も参照:

- [アーティファクト、ルールおよびフォルダに対する権限の割当てについて](#)
- [アーティファクトおよびフォルダに対する権限の追加、変更および削除](#)
- [ルールおよびルール・フォルダに対する権限の追加、変更および削除](#)

アーティファクト、ルールおよびフォルダに対する権限の割当てについて

サービス管理者は、アーティファクト(フォーム、ダッシュボード、インフォレット、レポート、ブックおよびバースティング定義)、ルールおよびフォルダに対する権限を割り当てることができます。

ディメンション・メンバーに対する権限の割当ての詳細は、[アクセス権限タイプ](#)および[ディメンション・メンバーへのアクセス権の割当て](#)を参照してください。

原則:

- **アーティファクト(フォーム、ダッシュボード、インフォレット、レポート、ブックおよびバースティング定義):**
 - ユーザーおよびパワー・ユーザーは、権限を持つフォームのみ表示またはデータ入力することが可能です(また、権限を持つメンバーに対してのみ作業を行うことが可能です)。
 - サービス管理者およびパワー・ユーザーはアーティファクトを設計できます。
 - パワー・ユーザーは、自分が作成した、またはサービス管理者によって権限を割り当てられたアーティファクトにアクセスできます。
 - サービス管理者は、すべてのディメンション・メンバーおよびすべてのアーティファクトに対する「書込み」権限を持ちます。
- **ルール:**
 - ユーザーおよびパワー・ユーザーは、「起動」権限を割り当てられているルールのみを表示および起動できます。
 - ルールセットは、ルールセットに含まれるルールから起動権限を継承します。
- **フォルダ:**
 - フォルダに対する権限を割り当てられているユーザーは、より詳細な権限を割り当てられていないかぎり、そのフォルダ内のアイテムにアクセスできます。同様に、ユーザーは、より詳細な権限を割り当てられていないかぎり、権限を割り当てられているフォルダにある **Calculation Manager** のルールに対する「起動」権限を持ちます。
 - フォルダに対する権限を割り当てると、その下にあるすべてのフォルダにその権限が継承されます。
 - フォルダに対する特定の権限(「なし」や「書込み」など)を割り当てた場合、その権限はその親フォルダの権限より優先されます。たとえば、ユーザーが「なし」権限を持っている Folder2 を含む Folder1 に対する「書込み」権限を持つ

ている場合、そのユーザーは **Folder1** を開くことはできますが、**Folder2** を表示することはできません。

- **Calculation Manager** のフォルダに対する特定の権限(「起動」など)を割り当てた場合、その権限はその親フォルダの権限より優先されます。たとえば、ユーザーが「起動しない」権限を持っている **RulesFolder2** を含む **RulesFolder1** に対する「起動」権限を持っている場合、そのユーザーは **RulesFolder1** を開くことはできますが、**RulesFolder2** を表示することはできません。
- ユーザーが「書込み」権限を持っている **Form1** というフォームを含む **Folder1** というフォルダに対する「なし」権限を持っている場合、そのユーザーは **Folder1** と **Form1** を表示できます。
- ユーザーが「起動」権限を持っている **Rule1** というルールを含む **RulesFolder1** という **Calculation Manager** のフォルダに対する「起動しない」権限を持っている場合、そのユーザーは **RulesFolder1** および **Rule1** を表示できます。

手順の詳細は、[アーティファクトおよびフォルダに対する権限の追加、変更および削除](#)および[ルールおよびルール・フォルダに対する権限の追加、変更および削除](#)を参照してください。

アーティファクトおよびフォルダに対する権限の追加、変更および削除

アーティファクト(フォーム、ダッシュボード、インフォレットと、レポート、ブックおよびバースティング定義)およびフォルダに割り当てられる権限とは、基礎となるデータではなく、アーティファクトとフォルダの定義を変更する能力のことです。

アーティファクトおよびフォルダに対する権限を割り当てるには:

1. アーティファクト(「データ」、「ダッシュボード」、「インフォレット」、「レポート」または「ドキュメント」)リスト・ページにナビゲートします。
2. アーティファクトまたはフォルダの横にある「アクション」アイコンをクリックし、「**権限の割当て**」をクリックします。

ノート:

同時に1つのアーティファクトまたはフォルダに対する権限を割り当てることができます。

3. 「**権限**」をクリックします。
4. 次のタスクを実行します:
 - 権限を追加するには、「**ユーザー/グループの追加**」をクリックし、使用可能なユーザーおよびグループのリストから選択します。
 - 権限のタイプを編集するには、次のオプションを選択します。
 - 「**読取り**」をクリックすると、選択したユーザーおよびグループは、リスト内のアーティファクトまたはフォルダを表示できますが、アーティファクトまたはフォルダの情報を作成、編集または削除することはできません。
 - 「**書込み**」をクリックすると、選択したユーザーおよびグループは、リスト内のアーティファクトまたはフォルダを表示でき、さらにアーティファクトまたはフォルダの情報を作成、編集または削除できます。

- 選択したユーザーまたはグループにリスト内のアーティファクトまたはフォルダの表示を許可しない場合は、「なし」をクリックします。
- 権限を削除するには、ユーザーまたはグループの横にある  をクリックします。

ルールおよびルール・フォルダに対する権限の追加、変更および削除

ルールおよびルール・フォルダに対する権限を割り当てるには:

1. 「ルール」をクリックします。
2. ルールまたはルール・フォルダを選択し、 をクリックして、「権限の割当て」をクリックします。

ノート:

一度に1つのルールまたはフォルダのみに対する権限を割り当てることができます。

3. 「権限」をクリックします。
4. 次のタスクを実行します:
 - 権限を追加するには、「ユーザー/グループの追加」をクリックし、使用可能なユーザーおよびグループのリストから選択します。
 - 権限のタイプを編集するには、次のオプションを選択します。
 - 選択したユーザーおよびグループが、選択したルールを起動できるようにするには、「起動」をクリックします。
 - 選択したユーザーおよびグループが、選択したルールを起動できないようにするには、「起動しない」をクリックします。
 - 権限を削除するには、ユーザーまたはグループの横にある  をクリックします。

アクセス権限のレポート

現在のアクセス権限を表示し、レポートを印刷できます。

アプリケーションにおけるユーザーおよびグループの現在のアクセス権限をレポートするには:

1. ホーム・ページで「ナビゲータ」 をクリックしてから、「モニターおよび検索」で、「システム・レポート」をクリックします。
2. 「アクセス制御」をクリックします。
3. 「ユーザーまたはグループの選択」で、使用可能なオプションから選択します。

4. 左側の「使用可能」パネルから、レポートするユーザーまたはグループを選択して「選択済」パネルに移動します。
5. 左側の「使用可能なオブジェクト」パネルから、レポートするオブジェクトを選択して「選択したオブジェクト」パネルに移動します。
6. レポート・オプションを選択します。
 - 「タイプが一致するアクセスの表示」で、ビューへのアクセス「読取り」、「書込み」または「なし」を選択します。
 - 「結果のグループ分け単位」で、どのようにレポートを表示するかを「ユーザー」または「オブジェクト」から選択します。
 - 「レポート・タイプ」セクションで、「割り当てられたアクセス」または「有効なアクセス」を選択します。

表 4-2 アクセス・レポート・タイプ

レポート・タイプ	説明	オプション
割り当てられたアクセス	サービス管理者により割り当てられるアクセス権限の要約	アクセス権がメンバー選択リレーションまたはグループ・メンバーシップのどちらにより割り当てられるかを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> • 「関係が一致するアクセスの表示」：「メンバー」、「子」、「子(含む)」、「子孫」、または「子孫(含む)」。 • グループからの継承を表示: グループのユーザーから継承済のアクセス権限を表示します。
有効なアクセス	アプリケーションの評価に伴いアクセス権の割当てを要約します(たとえば、子またはグループ・メンバーシップなどのメンバー選択関係)。アクセス権限に不一致が見られる場合に有効です。	「有効なアクセス元の表示」を選択することにより、有効なアクセス権元を説明します。たとえば、Entity1 の書込みアクセス権を割り当てられているユーザー名 JSomebody が、Entity1 の読取りアクセス権を割り当てられている Sales グループに属しているとします。個人に割り当てられたアクセス権は、グループ・メンバーシップにより継承されるアクセス権に優先するため、この設定では JSomebody が Entity1 の書込みアクセス権を割り当てられていると表示されます。

 **ノート:**

有効なアクセス権レポートはグループに対しては生成できません。

7. 「レポート作成」をクリックします。

アクセス権限レポートの操作

アクセス権限のレポートは Adobe Acrobat に表示されます。Adobe Acrobat のツールバーを使ってレポートを操作できます。

アクセス制御からの変更情報の取得

アクセス制御からのグループ名またはグループ・メンバーシップの変更は、アプリケーションに反映されません。変更を適用するには、セキュリティ・アーティファクトを再インポートする必要があります。

グループのプロパティを変更した後に情報を同期するには:

1. サービス管理者として環境にアクセスします。
2. 「ツール」、「移行」の順にクリックします。
3. セキュリティ・アーティファクトをエクスポートします。
 - a. 「コア」をクリックしてから「セキュリティ」を選択します。
 - b. 「エクスポート」をクリックします。
 - c. ファイル名を入力して「OK」をクリックします。
 - d. 移行ステータス・レポートをレビューしてエクスポートが成功したことを確認します。
 - e. 「閉じる」をクリックします。
4. 作成したスナップショットをインポートします。
 - a. 「移行」ページで、「スナップショット」をクリックします。
 - b. 「アクション」で、前のステップで作成したスナップショットの横の・・・をクリックしてから、「インポート」をクリックします。
 - c. 「OK」をクリックします。
 - d. 移行ステータス・レポートをレビューしてインポートが成功したことを確認します。
 - e. 「閉じる」をクリックします。

5

アプリケーションの管理

アプリケーション・コンソールを使用して、アプリケーション、キューブおよびディメンションの表示と管理を行います。

次も参照:

- [アプリケーションの概要](#)
アプリケーション、ディメンションおよびディメンション・メンバーの管理方法について学習するには、ここから開始します。
- [アプリケーションのリフレッシュ](#)
アプリケーションの構造を変更したら、アプリケーションを必ずリフレッシュします。
- [キューブの管理](#)
- [ディメンションの管理](#)
ディメンションおよびディメンション・メンバーの管理方法を学習するには、ここから開始します。
- [ユーザー・プリファレンスの設定](#)
- [変数の管理](#)
- [アクティビティ・レポートの表示](#)
アクティビティ・レポートでユーザー・アクティビティをモニターします。
- [データとメタデータのインポートおよびエクスポート](#)
フリーフォームを使用して、アプリケーションの内外にデータおよびメタデータを移動します。
- [Essbase アウトラインの検証](#)
Essbase アウトラインを事前検証して、アプリケーションがハイブリッド Essbase バージョンと互換性があることを確認します。
- [アプリケーション・データベースの作成とリフレッシュ](#)
アプリケーション・データベースをリフレッシュする前に知っておく必要のあること。
- [アプリケーションへの集約ストレージ・アウトラインの追加](#)
集約ストレージの機能とアプリケーションでの使用方法について理解します。
- [アプリケーションの削除](#)
アプリケーションを削除する場合、慎重に作業を進めます。
- [日次メンテナンス・プロセス開始時間の設定](#)
1時間の日次メンテナンス・プロセスを開始するのに最も都合のよい時間を決定して設定する方法について理解します。
- [受信ボックス/送信ボックス・エクスプローラを使用したファイルのアップロードおよびダウンロード](#)
受信ボックス/送信ボックス・エクスプローラを使用して、ファイルをサーバーにアップロードしたり、コンピュータにダウンロードします。

アプリケーションの概要

アプリケーション、ディメンションおよびディメンション・メンバーの管理方法について学習するには、ここから開始します。

アプリケーションは、ビジネス・プロセスのニーズを満たすために使用される、関連する一連のディメンションとディメンション・メンバーです。各アプリケーションにはそれ自体の勘定科目、エンティティ、シナリオおよび他のデータ要素があります。

アプリケーションを作成するには、[フリーフォーム・アプリケーションの作成](#)を参照してください。

アプリケーションを作成した後、アプリケーション・コンソールを使用して表示および管理できます。アプリケーション・コンソールを表示するには、「**アプリケーション**」をクリックし、「**概要**」をクリックします。

アプリケーション・コンソールには、アプリケーションのプロパティ(アプリケーション・タイプなど)およびアプリケーション統計(アプリケーション内のタスク、プランおよびルールの数など)が表示されます。また、アプリケーションで使用されているキューブ(標準アプリケーションの場合)とディメンション(レポート・アプリケーションの場合)もリストされます。

- アプリケーションの概要を表示するには、「**概要**」をクリックします。
- キューブを管理するには、「**キューブ**」をクリックします。[キューブの管理](#)を参照してください。
- ディメンションを管理するには、「**ディメンション**」をクリックします。[ディメンションの管理](#)を参照してください。
- アクティビティ・レポートを表示するには、「**アクティビティ**」をクリックします。[アクティビティ・レポートの表示](#)を参照してください。

アプリケーションのリフレッシュ

アプリケーションの構造を変更したら、アプリケーションを必ずリフレッシュします。

アプリケーションをリフレッシュするまで、アプリケーションの変更がユーザーによるデータの入力タスクに影響を与えることはありません。たとえば、ディメンション・メンバーのプロパティ修正、メンバーの追加またはアクセス権限の変更を行った場合、これらの更新はアプリケーションをリフレッシュした後ユーザーに表示されます。

アプリケーションをリフレッシュするには:

1. 「**アプリケーション**」、「**概要**」の順にクリックします。
2. 「**リフレッシュ**」をクリックします。

 ノート:

アプリケーションの更新時にアプリケーションが自動的にリフレッシュされます。リフレッシュに関する情報は、コンテンツ更新と呼ばれるジョブで取得されます。コンテンツ更新プロセスの進行状況および詳細を表示するには、ジョブ・コンソールを使用します。ジョブ・コンソールには、ホーム・ページで「**アプリケーション**」クラスタ内の「**ジョブ**」をクリックするとアクセスできます。ジョブを表示する手順は、このガイドの[保留中のジョブおよび最近のアクティビティの表示](#)を参照してください。また、コンテンツ更新の開始時間の設定については、*Oracle Enterprise Performance Management Cloud 管理者スタート・ガイド*のコンテンツ更新開始時間の設定を参照してください。

キューブの管理

関連トピック

- [キューブの表示および管理](#)
- [キューブの追加](#)
- [キューブのクリア](#)
- [キューブのパフォーマンスの向上](#)

キューブの表示および管理

キューブを表示および管理するには:

1. 「**アプリケーション**」、「**概要**」の順にクリックします。
2. 「**キューブ**」をクリックします。
3. 次のいずれかのタスクを実行します。
 - キューブの詳細を表示するには、表示するキューブの名前をクリックします。
 - キューブを追加するには、「**作成**」をクリックして、キューブの詳細をすべて指定し、「**完了**」をクリックします。

キューブの詳細は、[キューブの追加](#)を参照してください。

 ノート:

アプリケーションの作成時にのみキューブの名前を変更できます。キューブを追加した後、名前の変更や削除を行うことはできません。

キューブの追加

フリーフォームの場合、集約ストレージとブロック・ストレージを任意に組み合わせて、最大で合計 12 のキューブを追加できます。アプリケーション・タイプ別のキューブの比較については、次のチャートを参照してください。[フリーフォームの理解](#)を参照してください。

キューブを追加すると、他のアプリケーション・キューブと同様に動作します。キューブが集約ストレージ・データベースにマップする場合、集約ストレージの制限が適用されます。

 **ノート:**

集約ストレージ・キューブの場合、集約ストレージ・データベースは独自のアプリケーションに存在する必要があるため、データベースを格納するアプリケーション名を指定する必要があります。

アプリケーション・タイプ別キューブ比較

Planning Application Types

Cube Comparisons

	App type	Open Cubes		Module Cubes		TOTAL
		BSO	ASO	BSO	ASO	
EPM Cloud Enterprise	Modules Based	3	4	5	2	14
	Custom	6	6	0	0	12
	FreeForm*	12*	12*	0	0	12
	Sales Planning**	0	1	3	2	6
	SWP**	0	1	2	1	4
EPM Cloud Standard	Modules	1	1	5	2	9
Legacy	EPBCS	3	4	5	2	14
	PBCS	3	4	0	0	7

Copyright © 2023 Oracle and/or its affiliates.

Move the database to the new tablespace and recompile the cubes. * Total of 12 Hybrid BSO or ASO ** Targeting 23.09

キューブのクリア

次も参照:

- [キューブのクリアについて](#)
- [キューブのクリア・ジョブの作成](#)
- [キューブのクリア・ジョブの開始および削除](#)
- [キューブのクリア・ジョブのスケジュール](#)

キューブのクリアについて

アプリケーションでは、入力キューブおよびレポート・キューブ内の特定のデータをクリアできます。キューブのクリア・ジョブをすぐに開始するか、後で実行するようにスケジュールできます。

 ノート:

入力キューブおよびレポート・キューブ内で指定したデータはキューブのクリア・ジョブによって削除されますが、アプリケーションのリレーショナル表内のキューブ定義は削除されません。

キューブのクリア・ジョブの作成

キューブのクリア・ジョブを作成するには:

1. 「アプリケーション」、「概要」の順にクリックします。
2. 「アクション」、「キューブのクリア」の順にクリックします。
3. 「キューブのクリア」ページで、「作成」をクリックし、ジョブ名を入力し、キューブを選択して、クリア・オプションを選択します。
 - **すべてクリア:** ブロック・ストレージ・キューブと集約ストレージ・キューブの両方について、選択したエンティティに関連付けられているキューブ内のすべてのデータを削除します:
 - サポート詳細
 - コメント
 - 添付
 - Essbase データ
 - ブロック・ストレージ・キューブのみの場合:
 - **上位レベル・ブロック:** 上位レベル・ブロック内のデータを削除します
 - **非入力ブロック:** 非入力ブロック内のデータを削除します
 - **動的ブロック:** 動的ブロック内のデータを削除します
 - **空のブロック:** #MISSING 値のあるブロックを削除します
 - 集約ストレージ・キューブのみの場合:
 - **すべての集約:** すべての集約ビューを削除します
 - **部分データ(基本モード):** 指定した領域内のデータをクリアします。メンバー・セレクトタ  を使用して、視点を選択できます。
 - * サポート詳細
 - * コメント
 - * 添付
 - * **Essbase データ(論理):** 指定した領域内の入力セルが負の相殺値とともに新しいデータ・スライスに書き込まれ、その結果、クリアするセルの値がゼロになります。データを論理的にクリアするプロセスは、クリアされるデータのサイズに比例した時間で完了します。相殺セルが作成されるため、このオプションではデータベースのサイズが大きくなります。
 - * **Essbase データ(物理):** 指定した領域内の入力セルが集約ストレージ・データベースから物理的に削除されます。データを物理的にクリアするプロセス

は、クリアされるデータのサイズではなく、入力データのサイズに比例した時間で完了します。したがって、この方法は通常、大きいデータ・スライスを削除する必要がある場合にのみ使用します。

- **部分データ(拡張モード):** 表示されるテキスト・ボックスで MDX 式を使用して、Essbase データのみをクリアします。
 - * **Essbase データ(論理):** 指定した領域内の入力セルが負の相殺値とともに新しいデータ・スライスに書き込まれ、その結果、クリアするセルの値がゼロになります。データを論理的にクリアするプロセスは、クリアされるデータのサイズに比例した時間で完了します。相殺セルが作成されるため、このオプションではデータベースのサイズが大きくなります。
 - * **Essbase データ(物理):** 指定した領域内の入力セルが集約ストレージ・データベースから物理的に削除されます。データを物理的にクリアするプロセスは、クリアされるデータのサイズではなく、入力データのサイズに比例した時間で完了します。したがって、この方法は通常、大きいデータ・スライスを削除する必要がある場合にのみ使用します。

4. 「保存して閉じる」をクリックします。

5. 「キューブのクリア」リスト・ページにジョブを表示するには、「リフレッシュ」をクリックします。

キューブのクリア・ジョブをすぐに開始するかジョブを削除するには、[キューブのクリア・ジョブの開始および削除](#)を参照してください。

キューブのクリア・ジョブを即時または後で実行するか一定間隔で実行するようにスケジュールするには、「ジョブ」ページに移動します。[ジョブのスケジュール](#)を参照してください。

ヒント:

後続する「[キューブのクリア](#)」ジョブのジョブ作成プロセスを合理化するには、「名前を付けて保存」オプションを使用して既存のジョブを複製し、そのジョブを更新できます。[ジョブの複製](#)を参照してください。

キューブのクリア・ジョブの開始および削除

キューブのクリア・ジョブをすぐに開始するかジョブを削除するには:

1. 「アプリケーション」、「概要」の順にクリックします。
2. 「アクション」、「キューブのクリア」の順にクリックします。
3. 「キューブのクリア」リスト・ページで、開始または削除するキューブのクリア・ジョブの横にある...をクリックし、次のいずれかのオプションを選択します。
 - 「送信」をクリックすると、ジョブがすぐに開始されます。
 - 「削除」をクリックすると、ジョブが削除されます。

キューブのクリア・ジョブのスケジュール

キューブのクリア・ジョブは、後で実行するか一定間隔で実行するようにスケジュールできます。キューブのクリア・ジョブをスケジュールするには、「ジョブ」ページに移動します。[ジョブのスケジュール](#)を参照してください。

キューブのパフォーマンスの向上

キューブのパフォーマンスを向上させるためにスケジュールできるジョブ

アプリケーションでは、キューブのパフォーマンスを向上させるジョブをスケジュールできます。これには、次のようなジョブがあります：

- **キューブの再構築:** ブロック・ストレージ・キューブの完全な再構築が実行され、断片化が解消または減少します。また、空のブロックが削除されます。このジョブを実行しても、変更内容はビジネス・プロセスから **Essbase** にプッシュされません。
- **アウトラインの圧縮:** 集約ストレージ・キューブのアウトライン・ファイルを圧縮します。圧縮は、アウトライン・ファイルを最適なサイズに保つのに役立ちます。アウトラインを圧縮しても、データはクリアされません。このジョブを実行しても、変更内容はビジネス・プロセスから **Essbase** にプッシュされません。
- **データ・スライスのマージ:** 集約ストレージ・キューブの増分データ・スライスをマージします。スライスが少なくなると、キューブのパフォーマンスは向上します。メイン・データベース・スライスにすべての増分データ・スライスをマージしたり、メイン・データベース・スライスを変更しないまま単一のデータ・スライスにすべての増分データ・スライスをマージしたりできます。オプションで、値がゼロのセルを削除することも可能です。
- **集約の最適化:** 集約ストレージ・キューブで収集された問合せトラッキング情報に基づいて、最適化したビューを生成します。このジョブには2つのアクションがあります。
 - **問合せトラッキングの有効化:** 有用な一連の問合せを記録したうえで、記録した問合せデータを使用して、そのデータベース用に生成するのに最も適した集約ビューのセットを選択します。問合せデータに基づいて集約プロセスを実行するには、問合せトラッキングを有効にし、データ収集に十分な時間を取る必要があります。

これを有効にすると、問合せトラッキングを無効にするか、キューブをリロードまたはリフレッシュする、アウトラインを圧縮する、アプリケーションを終了する、またはこのデータベースに追加の集約ビルドが生成されるまで、問合せトラッキングは続行します。これらのアクションの実行後、問合せトラッキングは自動的に再開されません。

 ノート:

次のアクションを実行すると、保存されている問合せトラッキング情報が集約ストレージ・キューブからクリアされますが、問合せトラッキングは無効になりません。

- * 増分データ・スライスのマージ
- * データのクリア中
- * 既存の集約のクリア
- * 部分データのクリア
- * 集約ストレージ・キューブへのデータのロード

- **集約プロセスの実行:** データが含まれ、ユーザーに計算権限が付与されている集約ストレージ・データベースに対して集約を計算します。集約を実行するには、システム推奨のビューを使用します。ビューの選択と集約のプロセスをまとめて、サーバーによって実行される1つの構成不可能な操作にします。オプションで、生成されるファイルの最大ディスク・スペースを指定し、ユーザー問合せパターンに基づいてビューの選択を行い、ビュー選択にロールアップ階層を含めることができます。次の1つ以上のオプションを選択します。

- * **問合せデータを基準にしますか?:** 収集されたユーザー問合せパターンに基づいて、サーバーで選択されるビューを集約します。このオプションは、問合せトラッキングがオンになっている場合にのみ使用可能です。
- * **ロールアップ・オプションを含めますか?:** セカンダリ階層(デフォルトのレベルの使用)をビュー選択プロセスに含めます。
- * **成長サイズ・オプションを含めますか?:** 指定された集約データベースの増大限度を超えるまで、サーバーで選択されるビューを集約します。サーバーがそれを超えると集約を停止する必要があるサイズ(比率)を入力します。

ジョブをすぐに開始することも、後で実行するようスケジュールすることもできます。

 ノート:

これらのアクションの間、ユーザーはログインしたままでかまいません。

関連トピック

- [ジョブのスケジュール](#)
- [Oracle Enterprise Performance Management Cloud オペレーション・ガイドのBSO キューブの最適化](#)
- [Oracle Enterprise Performance Management Cloud オペレーション・ガイドの集約ストレージ・オプション・キューブの最適化](#)

ディメンションの管理

ディメンションおよびディメンション・メンバーの管理方法を学習するには、ここから開始します。

ディメンションで、データ値が分類されます。

「**ディメンション**」ページのディメンションは、優先順位の順序でリストされます。ディメンションの順序は、アプリケーションの構造およびパフォーマンスにとって重要です。ディメンションの順序により、データ計算がどのように実行されるかが決定されます。「**評価順**」で、データ交差にデータ・タイプの競合がある場合に優先されるデータ・タイプを指定できます。

ノート:

スマート・リストをフォームで表示可能にするには、スマート・リストのタイプ・メンバーが属するディメンションが評価順序の最初にある必要があります。[スマート・リストの操作](#)を参照してください。

ディメンションを管理するには:

1. 「**アプリケーション**」をクリックし、「**概要**」をクリックして、「**ディメンション**」をクリックします。
2. 次のタスクを実行します:
 - ディメンションをキューブでフィルタするには、[キューブによるディメンション・ビューのフィルタ](#)を参照してください。
 - ディメンションとそのメンバーについてプロパティを表示および編集するには、ディメンションの名前をクリックします。[簡易ディメンション・エディタでのディメンションの編集](#)を参照してください。
 - ディメンションの順序を変更するには、移動するディメンションの横にある「**順序**」列内の上矢印または下矢印をクリックします。
 - 異なる評価順序を設定するには、更新するディメンションの横にある「**評価順**」フィールドをクリックします。
 - ディメンションの名前を変更するには、名前を変更するディメンションの名前をクリックして「**ディメンション・プロパティの編集**」タブを選択し、「**ディメンション**」フィールドに新しい名前を入力します。[簡易ディメンション・エディタでのディメンション・プロパティの編集](#)を参照してください。
 - ディメンションを作成するには、「**作成**」をクリックします。[ディメンションの作成](#)を参照してください。
 - メタデータをインポートするには、「**インポート**」をクリックします。[メタデータのインポート](#)を参照してください。
 - メタデータをエクスポートするには、「**エクスポート**」をクリックします。[メタデータのエクスポート](#)を参照してください。

チュートリアル

チュートリアルには、トピックの学習に役立つ一連のビデオやドキュメントを使用した手順が用意されています。

目的	方法の学習
ディメンションおよびメンバーの概要を確認し、Oracle Enterprise Performance Management Cloud ビジネス・プロセスでこれらを管理する方法を学習します。	 Cloud EPM ビジネス・プロセスでのディメンションの管理

キューブによるディメンション・ビューのフィルタ

標準アプリケーションの場合、ディメンション・ビューをキューブでフィルタできません。キューブを選択すると、そのキューブで使用されているディメンションのみが表示されます。

ディメンション・ビューをキューブでフィルタするには:

1. 「**アプリケーション**」をクリックし、「**概要**」をクリックして、「**ディメンション**」をクリックします。
2. 「**キューブ**」の右側にある下矢印をクリックして、ディメンションのリストをキューブでフィルタします。

デフォルトでは、標準アプリケーションのすべてのキューブが表示されます。ディメンション・リストをフィルタすると、選択したキューブで使用されているディメンションのみが表示されます。

(すべてのキューブを表示するのではなく)キューブでフィルタすると、ディメンションに関する次の詳細を表示することもできます。

- 優先順位
- ディメンションの密度

ノート:

「密」列は、ASO キューブのみを含むアプリケーションについては非表示になっています。アプリケーションに BSO キューブが含まれているか、BSO キューブと ASO キューブが含まれている場合は、「密」列が両方のキューブについて表示されます。

- 評価順序

ディメンションの編集の詳細は、[簡易ディメンション・エディタでのディメンションの編集](#)を参照してください。

ディメンションの作成

ディメンションを作成すると、ディメンション・ビューにあるディメンションのリストの最後に追加されます。

ディメンションを作成するには:

1. 「**アプリケーション**」をクリックし、「**概要**」をクリックして、「**ディメンション**」をクリックします。

2. 「作成」をクリックします。
3. 「**ディメンションの作成**」ページで、表示されるプロパティの値を入力または選択します。

フリーフォーム・アプリケーションでは、ディメンション・タイプを選択できます。ディメンション・タイプは次のとおりです：

- 勘定科目
- エンティティ
- 期間
- カスタム

ディメンション・タイプに関するノート：

- ディメンション・タイプをすでに作成している場合(「勘定科目」、「エンティティ」、「期間」の場合)、またはディメンションの最大数を超過している場合(「カスタム」の場合)、ディメンション・タイプはリストされません。
- ディメンションの作成後は、ディメンション・タイプを編集できません。

プロパティの詳細は、[簡易ディメンション・エディタでのメンバー・プロパティの編集](#)を参照してください。

ディメンションの編集の詳細は、[簡易ディメンション・エディタでのディメンションの編集](#)を参照してください。

ユーザー・プリファレンスの設定

サービス管理者は、現在のアプリケーションのデフォルトを指定します。ただし、ユーザーは、プリファレンスを設定してこれらのアプリケーションのデフォルトをオーバーライドし、プロフィール写真やアプリケーションでの数値の表示方法など、様々な側面を制御できます。

ユーザー・プリファレンス・オプションについてさらに学習するには、[フリーフォームの操作のプリファレンスの設定](#)を参照してください。

アプリケーション・デフォルトおよびシステム設定についてさらに学習するには、[アプリケーションおよびシステム設定の管理](#)を参照してください。

変数の管理

次も参照：

- [代替変数の操作](#)
- [ユーザー変数の操作](#)

代替変数の操作

次も参照：

- [代替変数について](#)
- [代替変数の作成および値の割当て](#)
- [代替変数の削除](#)

代替変数について

代替変数は定期的に変化する情報のグローバルなプレースホルダとして機能します。たとえば、フォームやレポート・スクリプトで月の値を毎月更新しなくてもよいように、現在の月メンバーを代替変数 CurMnth に設定できます。アプリケーション内で代替変数を作成し、値を割り当てます。これらの代替変数は、フォームのメンバーを選択するときにアプリケーションで使用できます。

代替変数の選択の詳細は、[メンバーとしての代替変数の選択](#)を参照してください。

ノート:

グローバル変数を使用するアプリケーションを移行した場合、アプリケーションでそれらを表示できますが、編集することはできません。

代替変数の作成および値の割当て

代替変数を作成して値を割り当てるには:

1. ホーム・ページで、「ツール」、「**変数**」の順にクリックします。
2. 「**代替変数**」タブを選択します。

3.  をクリックします。

新しい変数がリストの一番下に追加されます。

4. リストの一番下までスクロールし、新しく追加された変数の「**キューブ**」名の横の下向き矢印をクリックして、キューブを作成します。
5. 「**名前**」に、代替変数名(最大 80 文字)を入力します。
6. 「**値**」に、代替変数の値(最大 255 文字)を入力します。

 ノート:

- 代替変数を定義する際に、FY16:FY18 のように値の範囲を指定できます。
基本メンバーと親メンバーの代替変数範囲を定義できます。基本メンバーの場合は、単一のコロンの(:)または二重コロンの(::)を区切り文字として使用できます(例: SunEnT 110::111)。一方、親メンバーの場合は、単一のコロンの(:)のみ使用できます。
- 代替変数がブロック・ストレージ・キューブのデータ・エクスポート・ジョブ定義で使用され、メンバー名が数字のみの場合、「値」フィールドでは、そのメンバー名を二重引用符で囲む必要があります(例: "1100"または"000")。英数字のメンバー名に対する二重引用符は不要です(例: a1110)。ただし、この変数が集約ストレージ・キューブのデータ・エクスポート・ジョブ定義で選択された場合、「値」フィールドのメンバー名を二重引用符で囲むことはできません。したがって、両方のタイプのキューブに対して定義されたデータ・エクスポート・ジョブ代替変数で同じメンバー名を使用する必要がある場合は、2つの代替変数(引用符がある/ない)を定義する必要があります

7. 「保存」をクリックします。

代替変数の削除

代替変数を削除するには:

1. ホーム・ページで、「ツール」、「変数」の順にクリックします。
2. 「代替変数」タブを選択します。
3. 削除する代替変数の横にある  をクリックします。
4. 削除を確認するには、「はい」をクリックします。

ユーザー変数の操作

次も参照:

- [ユーザー変数について](#)
- [ユーザー変数の作成](#)
- [ユーザー変数の管理](#)
- [フォーム上のユーザー変数に対する制限の設定](#)
- [ユーザー変数の削除](#)

ユーザー変数について

ユーザー変数はフォームでフィルタとして機能し、ユーザーは部署などの特定のメンバーのみに集中できます。ユーザー変数をフォームに関連付けるには、ユーザー変数を作成する必要があります。ユーザー変数でフォームを作成するとき、ユーザーはフォームを開く前に変数の値をプリファレンスで先に選択する必要があります。その後、ユーザーは、変数が動的

ユーザー変数の場合のみ、フォームで変数を変更できます。それ以外の場合は、プリファレンスで変数の設定を続行する必要があります。たとえば、Division という名のユーザー変数を作成する場合、ユーザーはフォームに作業する前に除算を選択する必要があります。

ヒント:

属性も、フォームをフィルタする方法です。ただし、属性(「赤」など)で明示的にフィルタするかわりに、属性ディメンションのユーザー変数を作成し、ユーザー変数をフィルタとして使用できます。次に、ユーザー変数を動的ユーザー変数として有効化し、実行時にユーザーがフィルタの値を変更できるようにすることができます。これは、動的フィルタ処理を可能にする有用な手法です。

フォーム用に変数を初回に選択するときに、ユーザーはプリファレンスでこれを実行する必要があります。そのあとはプリファレンスまたはフォームで変数を更新できます。ユーザー変数をメンバーとして選択する方法の詳細は、[メンバーとしてのユーザー変数の選択](#)を参照してください。

ユーザー変数の作成

ユーザー変数を作成するには:

1. ホーム・ページで、「ツール」、「変数」の順にクリックします。
2. 「ユーザー変数」タブを選択します。
3.  をクリックします。

新しい変数がリストの一番下に追加されます。

4. リストの一番下までスクロールし、新しく追加された変数の「ディメンション」名の横の下向き矢印をクリックします。「ディメンションの選択」で、ユーザー変数を作成する対象のディメンションを選択します(属性ディメンションを含む)。
5. 「ユーザー変数名」列にユーザー変数の名前を入力します。
6.  をクリックしてディメンション・メンバーを選択します。

ノート:

「コンテキストの使用」の設定は、ユーザーがユーザー・プリファレンスから値を選択できないことを意味します。かわりに、値が別のフォームからその視点コンテキストに基づいて渡され、フォームのコンテキストに基づいて値が動的に変更されます。ただし、行や列など、他の場所でユーザー変数が使用されている場合は、動的に設定されないため、ユーザーが独自の値を設定できるように別のユーザー変数を作成する必要があります。

7. 「OK」をクリックします。

これで、フォームにユーザー変数を関連付けることができます。[メンバーとしてのユーザー変数の選択](#)を参照してください。フォーム上のユーザー変数に制限を設定することもできます。[フォーム上のユーザー変数に対する制限の設定](#)を参照してください。

その後、ユーザーはユーザー変数のメンバーを選択できます。[フリーフォームの操作](#)を参照してください。

ユーザー変数の管理

ユーザー変数を設定し、フォームで表示されるメンバー数を制限することで、ユーザーが一定のメンバーに注目できるようになります。たとえば、エンティティ・ディメンションで **Division** という名前のユーザー変数を作成すると、ユーザーは自分の区分のメンバーを選択できます。各ディメンション(属性ディメンションを含む)についてユーザー変数の数を作成し、フォームのすべての軸でユーザー変数を選択できます。[フォーム・ページと視点の定義](#)を参照してください。

一般的なステップ:

1. 必要に応じて、ディメンション・アウトラインに適切な親レベルのメンバーを作成します。
2. ユーザーがフィルタ処理できるディメンション(属性ディメンションを含む)について、それぞれユーザー変数を定義します。
[ユーザー変数の作成](#)を参照してください。
3. フォームをデザインするときに、ユーザー変数をフォームに関連付けします。
[メンバーとしてのユーザー変数の選択](#)を参照してください。
4. フォームに関連付けられたユーザー変数についてメンバーを選択するよう、ユーザーに指示します。

ユーザー変数を持つフォームをユーザーが開く前に、プリファレンスで「ユーザー変数オプション」のメンバーを選択する必要があります。初期値を選択したあとで、フォームまたはプリファレンスでそれを変更できます。[フリーフォームの操作](#)を参照してください。

フォーム上のユーザー変数に対する制限の設定

ユーザー変数のメンバー選択を制限することで、個々のフォームを表示または選択できるメンバー・ユーザーを制限できます。ユーザー変数の制限は、アクセス権限に関係なく、フォーム・レベルですべてのユーザーに制限を適用します。メンバー別の制限の設定に加えて、サービス管理者は機能別の制限(たとえば、「IChildren(Existing Employees)」など)も選択できます。

ユーザー変数の制限を設定するには:

1. フォーム設計時に、「**動的ユーザー変数の使用可能**」を選択して、フォームの動的ユーザー変数を許可します。
[フォームの精度およびその他オプションの設定](#)を参照してください。
2. ユーザー変数を作成します。
[ユーザー変数の作成](#)を参照してください。
3. 「**変数**」ページの「**ユーザー変数**」タブにある「**ユーザー変数定義**」フィールドで、 をクリックし、メンバーを追加または削除して制限を設定します。

機能別にメンバーを選択するには、をクリックし、使用可能なオプションから選択します。

4. フォーム・デザイナーで、ユーザー変数をページ軸に割り当てます。
フォーム・ページと視点の定義を参照してください。

ユーザー変数の削除

ユーザー変数がフォームに関連付けられていない場合、それらを削除できます。フォームで使用されているユーザー変数を削除しようとする、削除できないというエラー・メッセージが表示されます。このメッセージには、ユーザー変数が使用されているフォームの名前も示されます。

フォームに関連付けられていないユーザー変数を削除するには:

1. ホーム・ページで、「ツール」、「変数」の順にクリックします。
2. 「ユーザー変数」タブを選択します。
3. 削除するユーザー変数の横にある  をクリックします。
4. 削除を確認するには、「はい」をクリックします。

アクティビティ・レポートの表示

アクティビティ・レポートでユーザー・アクティビティをモニターします。

アクティビティ・レポートを使用すると、サービス管理者はアプリケーションの使用状況を把握できます。ユーザー・リクエスト、計算スクリプト、フォーム、レポートなどを特定し、アプリケーションの設計を合理化することにも役立ちます。HTMLバージョンとJSONバージョンの2つのバージョンのレポートを使用できます。

Oracle Enterprise Performance Management Cloud では、過去 60 日間のアクティビティ・レポートのみが保持されます。過去のトレンドについて分析するために、ダウンロードしてローカル・コンピュータにバックアップ・コピーを作成することをお勧めします。

アクティビティ・レポートは、次の状況で自動的に生成されます:

- サービスの日次メンテナンス中に毎日
- フィードバックの提供の送信資料を送信するたび
- `resetService EPM` 自動化コマンドを実行して環境を再起動するたび

アクティビティ・レポートで提供される情報の詳細は、*Oracle Enterprise Performance Management Cloud 管理者スタート・ガイド*のアクティビティ・レポートの内容を参照してください。

アクティビティ・レポートを表示するには:

1. 「アプリケーション」、「概要」の順にクリックします。
2. 「アクティビティ・レポート」をクリックします。
3. レポート詳細を表示するには、表示するレポートの名前の横にある「表示」をクリックします。

データとメタデータのインポートおよびエクスポート

フリーフォームを使用して、アプリケーションの内外にデータおよびメタデータを移動します。

次も参照:

- [メタデータのインポート](#)
カンマ区切り、タブ区切りまたは他の形式で、メタデータをフラット・ファイルからインポートできます。
- [メタデータのエクスポート](#)
.csv (カンマ区切り)または.txt (タブ区切りまたは他の区切り文字)形式でメタデータをフラット・ファイルにエクスポートできます。
- [データのインポートとエクスポート](#)

メタデータのインポート

カンマ区切り、タブ区切りまたは他の形式で、メタデータをフラット・ファイルからインポートできます。

インポートでは次のアーティファクトがサポートされています。

- ディメンション
- スマート・リスト
- 為替レート表

メタデータをインポートするには、次のタスクを実行します:

- インポートする各アーティファクトのインポート・ファイルを作成します。[メタデータ・インポート・ファイルの作成](#)を参照してください。
- 1つまたは複数のファイルをロードします(一度に複数のディメンション・ファイルをインポートできます)。[メタデータ・インポート・ファイルのロード](#)を参照してください。

ノート:

- メタデータのインポート中には、属性ディメンションのメンバーの名前は変更できません。メンバーの名前変更は無視されます。
- メタデータのインポート中には、属性ディメンションは削除できません。

ビデオ

目的

メタデータのインポート方法を学習します。

視聴するビデオ



[Cloud EPM でのメタデータのインポート](#)

メタデータ・インポート・ファイルの作成

次も参照:

- [メタデータ・インポート・ファイルについて](#)
- [エンティティ・ディメンションのインポート・ファイルの例](#)
- [他のサポートされている区切り文字](#)

メタデータ・インポート・ファイルについて

ロードを開始する前に、インポートする各アーティファクト(ディメンション、スマート・リストおよび為替レート表)のインポート・ファイルを作成する必要があります。インポート・ファイルにはヘッダー・レコードが含まれている必要があります。ヘッダー・レコードの下には、インポートまたは更新するメタデータ・レコードのリストが含まれている必要があります。ファイルの形式は、.csv (カンマ区切り)または.txt (タブ区切りまたは他の区切り文字)にできます。

1. ヘッダー・レコード、ファイルの最初の行:
 - 後続のメタデータ・レコードで使用されるディメンションおよびメンバーのプロパティをリストします。ヘッダー・レコードおよび後続のレコードは、すべてのプロパティを含める必要はありません。含まれていないプロパティは、対応する親のデフォルトのプロパティ値から継承されます
 - 大文字と小文字は区別されます
 - 後続のメタデータ・レコードが同じ順序であるかぎり、任意の順序でプロパティをリストできます
 - カンマまたはタブ区切り文字を使用できます。他の区切り文字は、その区切り文字がサポートされていて同じ区切り文字がファイル全体で使用されている場合に、使用できます。サポートされている区切り文字と例外のリストは、[他のサポートされている区切り文字](#)を参照してください。
2. ヘッダー・レコードの後の、インポートまたは更新するメタデータ・レコードのリスト。各メタデータ・レコードには、ヘッダー・レコードで指定された順序に一致するプロパティ値の区切りリスト(カンマ、タブまたはその他)が含まれています。メタデータ・レコードは、ヘッダー・レコードで指定されているプロパティをスキップできます。この場合、デフォルトのプロパティが指定されているものとして処理されます。

ノート:

ファイルのインポートまたはエクスポートでは、UTF-8の文字セットに含まれる文字のみがサポートされます。UTF-8の文字セットに含まれない文字は無効と考慮されます。ディメンション名の制限事項については、[ディメンション、メンバーおよび別名の名前付けの制限](#)を参照してください。

メタデータ・ロード・ファイル内のUDAおよび属性を削除するには、プロパティ値を空白のままにするのではなく、UDAおよび属性を<none>に置き換えます。

インポート・ファイルの例は、エンティティ・ディメンションのインポート・ファイルの例を参照してください。

エンティティ・ディメンションのインポート・ファイルの例

```
Entity,Parent,Data Storage,Plan Type (Plan1),Plan Type (Plan2),Plan Type (Plan3),Data Type,Base Currency,
Alias: Default NoEntity,,Never Share,TRUE,TRUE,TRUE,Unspecified,USD,Unspecified Entity
AllEntities,,Never Share,TRUE,TRUE,TRUE,Unspecified,USD,Total Entity
1000,AllEntities,Never Share,TRUE,TRUE,TRUE,Unspecified,USD,Agencies
1001,1000,Never Share,TRUE,TRUE,TRUE,Unspecified,USD,Administration and Finance
1011,1001,Never Share,TRUE,TRUE,TRUE,Unspecified,USD,Office of the Secretary of Administration and Finance
1012,1001,Never Share,TRUE,TRUE,TRUE,Unspecified,USD,Bureau of State Office Buildings
1101,1012,Never Share,TRUE,TRUE,TRUE,Unspecified,USD,Finance and Administration
1102,1012,Never Share,TRUE,TRUE,TRUE,Unspecified,USD,State Office Buildings
1103,1012,Never Share,TRUE,TRUE,TRUE,Unspecified,USD,Safety and Security
1104,1012,Never Share,TRUE,TRUE,TRUE,Unspecified,USD,State House ADA/Communications Access
1105,1012,Never Share,TRUE,TRUE,TRUE,Unspecified,USD,State House Events
1013,1001,Never Share,TRUE,TRUE,TRUE,Unspecified,USD,Civil Service Commission
1014,1001,Never Share,TRUE,TRUE,TRUE,Unspecified,USD,Department of Revenue
1106,1014,Never Share,TRUE,TRUE,TRUE,Unspecified,USD,Child Support Enforcement
1107,1014,Never Share,TRUE,TRUE,TRUE,Unspecified,USD,Division of Local Services
1108,1014,Never Share,TRUE,TRUE,TRUE,Unspecified,USD,Appellate Tax Board
1015,1001,Never Share,TRUE,TRUE,TRUE,Unspecified,USD,Developmental Disabilities Council
1016,1001,Never Share,TRUE,TRUE,TRUE,Unspecified,USD,Division of Administrative Law Appeals
1017,1001,Never Share,TRUE,TRUE,TRUE,Unspecified,USD,Dept. of Revenue
1018,1001,Never Share,TRUE,TRUE,TRUE,Unspecified,USD,Executive Office for Administration and Finance
1019,1001,Never Share,TRUE,TRUE,TRUE,Unspecified,USD,George Fingold Library
1020,1001,Never Share,TRUE,TRUE,TRUE,Unspecified,USD,Group Insurance Commission
```

次の例では、インポート・ファイルは、必要なヘッダー・レコードと3つのデータ・レコードを持つエンティティのディメンションをロードします。この例ではカンマ区切りです。ヘッダー・レコードは、インポートするメンバー(Entity)、メンバーのインポート先となる親メンバー(Parent)、およびメンバーに割り当てる Data Storage プロパティを指定します。

```
Entity, Parent, Data Storage
e1, Entity,
e2, ,
e1, e2, Shared
```

このインポート・ファイルを使用すると、他のメンバーが存在しないと仮定すればこのアウトラインになります:

```
Entity
e1
e2
    e1 (Shared)
```

最初のデータ・レコード(e1, Entity)は Entity メンバー e1 をルート・メンバー Entity にある子としてインポートします。指定されない値はデフォルトと見なします。たとえば、データ・ストレージが指定されていない場合、デフォルト値の「共有しない」とみなします。次のデータ・レコード(e2, ,)は、親が指定されていないため、ディメンション・ルート・メンバーにある Entity メンバー e2 をインポートし、データ・ストレージを「共有しない」に設定します。最後のデータ・レコード(e1, e2, Shared)は、メンバー e2 にある e1 の共有メンバーをインポートし、データ・ストレージを「共有」に設定します。

他のサポートされている区切り文字

カンマとタブに加えて、アプリケーションでは、インポート・ファイルとエクスポート・ファイルで次の区切り文字をサポートしています。

- チルダ(~)

- 重アクセント(`)
- 感嘆符(!)
- シャープ記号(#)
- 疑問符(?)
- ドル記号(\$)
- パーセント記号(%)
- キャレット(^)
- アンパサンド(&)
- アスタリスク(*)
- 丸カッコ()
- ハイフンマイナス(-)
- プラス(+)
- コロン(:)
- セミコロンの(;)
- 山カッコ(< >)
- 円記号(バックスラッシュ) (\)
- スラッシュ(/)
- 垂直棒(|)
- アポストロフィ(')
- 中カッコ({ })
- アンダースコア(_)
- 大カッコ([])
- アット・マーク(@)
- ピリオド(.)

区切り文字用にサポートされるのは1文字のみです。たとえば、1つの縦棒(|)はサポートされていますが、2つの縦棒(||)はサポートされていません。

▲ 注意:

リストされているすべての文字が、すべてのインポートおよびエクスポート・シナリオで使用できるわけではありません。次の例外に注意してください。

インポートおよびエクスポート・メタデータの区切り文字の例外

メタデータのインポートおよびエクスポート・ファイルで次の区切り文字は使用しないでください。

表 5-1 インポートおよびエクスポート・メタデータの区切り文字の例外

区切り文字	例外の理由
二重引用符("")	空のファイルが作成されます
プラス(+)	メタデータ・インポート・ファイルにこれらの文字を使用する集計プロパティが含まれている場合、エラーが発生します
マイナス(-)	
スラッシュ(/)	
パーセント記号(%)	
山カッコ(<>)	プロパティで値<none>を使用している場合、エラーが発生します



ノート:

メンバー名の文字と競合する文字を使用すると、エラーが発生します。

インポートおよびエクスポート・データの区切り文字の例外

表 5-2 インポートおよびエクスポート・データの区切り文字の例外

区切り文字	例外の理由
アポストロフィ(')	キューブ名で使用すると、エラーが発生します
丸カッコ()	データ・インポート・ファイルで使用すると、エラーが発生します
二重引用符("")	空のファイルが作成されます
ハイフンマイナス(-)	データ・インポート・ファイルで使用すると、エラーが発生します

メタデータ・インポート・ファイルのロード

メタデータ・インポート・ファイルをロードするには:

1. インポートする各アーティファクト(ディメンション、スマート・リストおよび為替レート表)のメタデータ・インポート・ファイルを作成します。[メタデータ・インポート・ファイルの作成](#)を参照してください。
2. 「アプリケーション」、「概要」の順にクリックします。
3. 「ディメンション」、「インポート」の順にクリックします。
4. 「メタデータのインポート」ページで、「作成」をクリックします。
5. メタデータ・インポート・ファイルの場所を選択します:
 - **ローカル:** 自分のコンピュータ上の場所からインポート・ファイルをロードします。「ファイルのインポート」で、「参照」をクリックして、インポートしているアーティファクトのインポート・ファイルを自分のコンピュータ上で選択します。
 - **受信ボックス:** サーバーからインポート・ファイルをロードします。「ファイルのインポート」内にファイルの名前を入力します。[受信ボックス/送信ボックス・エクスポート](#)を使用したファイルのアップロードおよびダウンロードを参照してください。

6. 「ファイル・タイプ」で、「カンマ区切り」、「タブ区切り」または「その他」を選択します。
「その他」を選択した場合、インポート・ファイルで使用する区切り文字を入力します。サポートされている区切り文字と例外のリストは、[他のサポートされている区切り文字](#)を参照してください。
7. インポートを実行する前に、「メンバーのクリア」を選択し、ロード・ファイルで明示的に指定されていないメンバーを削除します。

 ノート:

- ディメンションをインポートした後、指定されていないメンバーはアプリケーション・アウトラインから削除されますが、これが、指定されたメンバーの祖先である場合または指定された共有メンバーの基本メンバーである場合は削除されません。
 - 「メンバーのクリア」が選択されていない場合、インポートでは既存のメンバーの追加または更新のみが実行されます。ファイルを正常にロードするには、「メンバーのクリア」を選択せずにメタデータ・ファイルをロードすることをお勧めします。次に、「メンバーのクリア」を選択して、インポートを再度実行します。
 - 「メンバーのクリア」は、特定のディメンション(メンバーが存在する必要があり、メンバーがアプリケーションに取手重要であるディメンション)では使用できません。
 - なんらかの理由(フォームや検証ルールで使用されるなど)でディメンション・エディタで削除できないメンバーは、削除されません。
8. オプション: 選択した場所が「受信ボックス」の場合、「ジョブとして保存」をクリックしてインポート操作を、ただちにまたは後で実行をスケジュールできるジョブとして保存します。「ローカル」が選択されている場合、このオプションを選択できません。[ジョブの管理](#)を参照してください。

 ノート:

- インポート操作をジョブとして保存すると、ロード・シーケンスをバッチ処理する場合に便利です。たとえば、メタデータをインポートし、次にデータをインポートして、データのロードが完了したらルールを実行します。
- 一度に最大5つのインポート・ジョブを実行できます。
- メタデータ・インポート・ジョブ中に拒否されたデータを確認する場合は、「**ジョブとして保存**」ダイアログで「**エラー・ファイル**」を指定できます。このファイルにより、各ディメンションについてインポートされなかったメタデータ・レコードについての情報が提供されます。エラーの zip ファイルが指定されると、ディメンションごとに個別のエラー・ファイルが作成されて、エラー・ファイルがまとめてが zip されて、zip ファイルが、「受信ボックス/送信ボックス・エクスプローラ」を使用してファイルをダウンロードできる送信ボックスに格納されます。[受信ボックス/送信ボックス・エクスプローラを使用したファイルのアップロードおよびダウンロード](#)を参照してください。

 ヒント:

後続する「**メタデータのインポート**」ジョブのジョブ作成プロセスを合理化するには、「**名前を付けて保存**」オプションを使用して既存のジョブを複製し、そのジョブを更新できます。[ジョブの複製](#)を参照してください。

9. **オプション:** 選択した場所が「**ローカル**」の場合、「**検証**」をクリックして、インポート・ファイルの形式が正しいかどうかをテストします。

10. 「**インポート**」をクリックして、インポート操作を実行します。

インポート・ファイルにリストされているキューブがアプリケーション内のキューブ名と一致しない場合、アプリケーションでは未認識キューブ列が無視されます。

インポートが失敗した場合は、「**最終検証/インポート**」列に「**失敗**」ステータスが表示されます。詳細なステータスを表示するには、「**失敗**」をクリックします。インポートが成功した場合は、「**最終検証/インポート**」列に「**完了**」ステータスが表示されます。成功したインポートの詳細を表示するには、「**完了**」をクリックし、「**表示**」ドロップダウンで「**すべて**」を選択します。

「移行」または「EPM 自動化」を使用して環境のクローニングまたはスナップショットのインポートの一環としてメタデータ・ロードを実行するとき、Oracle Enterprise Performance Management Cloud では、マルチパス・ソリューションが使用されます。このソリューションでは、前のメタデータのロードでレコードが拒否された場合、同じメタデータ入力ファイルの別のロードが自動的に開始されます。

メタデータのエクスポート

.csv (カンマ区切り)または.txt (タブ区切りまたは他の区切り文字)形式でメタデータをフラット・ファイルにエクスポートできます。

エクスポートでは次のアーティファクトがサポートされています。

- ディメンション
- スマート・リスト
- 為替レート

アプリケーションでは、アーティファクトごとにエクスポート・ファイル(ファイル・タイプに応じて.txt または.csv)が作成され、すべてのエクスポート・ファイルが1つのzip ファイルに統合されます。ファイルをインポート・ファイルとして使用する場合(たとえば、別のアプリケーションにインポートする場合は、zip ファイルから.csv または.txt ファイルを抽出する必要があります)。

ノート:

ファイルのエクスポートまたはインポートでは、UTF-8 の文字セットに含まれる文字のみがサポートされます。UTF-8 の文字セットに含まれない文字は無効と考慮されます。ディメンション名の制限事項については、[ディメンション、メンバーおよび別名の名前付けの制限](#)を参照してください。

ビデオ

目的

視聴するビデオ

メタデータのエクスポート方法を学習します。



[Cloud EPM でのメタデータのエクスポート](#)

メタデータをフラット・ファイルにエクスポートするには:

1. 「**アプリケーション**」、「**概要**」の順にクリックします。
2. 「**ディメンション**」、「**エクスポート**」の順にクリックします。
3. 「**メタデータのエクスポート**」ページで、「**作成**」をクリックします。
4. エクスポート・ファイルのターゲット環境を選択します。
 - **ローカル**: エクスポート・ファイルをローカル・コンピュータ上の場所に保存します。
 - **送信ボックス**: エクスポート・ファイルをサーバーに保存し、エクスポート・ジョブのスケジュールに使用できるようにします。[受信ボックス/送信ボックス・エクスプローラを使用したファイルのアップロードおよびダウンロード](#)を参照してください。

「**ジョブとして保存**」をクリックしてエクスポート操作を、ただちにまたは後で実行をスケジュールできるジョブとして保存します。「**ローカル**」が選択されている場合、このオプションを選択できません。

ノート:

- 一度に最大5つのエクスポート・ジョブを実行できます。
- エクスポート・ジョブをスケジュールするときは、各ジョブに対して一意の出力ファイル名を指定できます。
- ジョブのスケジュールの詳細は、[ジョブの管理](#)を参照してください。

ヒント:

後続する「**メタデータのエクスポート**」ジョブのジョブ作成プロセスを合理化するには、「**名前を付けて保存**」オプションを使用して既存のジョブを複製し、そのジョブを更新できます。[ジョブの複製](#)を参照してください。

5. エクスポートする1つまたは複数のアーティファクトを選択します。
6. オプションを選択します:
 - **カンマ区切り:** 各アーティファクトのカンマ区切りの.csv ファイルを作成します。
 - **タブ区切り:** 各アーティファクトのタブ区切りの.txt ファイルを作成します。
 - **その他:** 各アーティファクトの.txt ファイルを作成します。エクスポート・ファイルで使用する区切り文字を入力します。サポートされている区切り文字と例外のリストは、[他のサポートされている区切り文字](#)を参照してください。
7. 「**エクスポート**」をクリックし、エクスポート・ファイルを保存する場所を指定します。

データのインポートとエクスポート

ディメンションをインポートした後、アプリケーション・データを移入できます。直接データ・ロードは実行できません。ファイルからデータをインポートする必要があります。

関連トピック

- [データのインポート](#)
- [ドライバ・メンバーのキャスト・エラー](#)
- [データのエクスポート](#)
- [データ・インポートおよびエクスポートのステータスの表示](#)

データのインポート

データをインポートする前に、次のことを実行する必要があります:

- メタデータを定義またはロードし、データベースをリフレッシュします。[メタデータのインポート](#)を参照してください。
- データ・ロード・ファイルを準備します。ソース・データは、ビジネス・プロセス固有のデータ・ファイル・フォーマット、または Oracle Essbase データ・ファイル・フォーマットである必要があります。

- データ・ロード・ファイル内のデータ値の周囲に 3 桁ごとの区切り文字、引用符などが含まれていないことを確認します。最大 1 つの.(小数点)文字がサポートされています。
- データ・インポート・ファイル形式が.csv、.txt または.zip であることを確認します。

データ・インポート・ファイルは、テンプレートに基づいて作成したり、ソース・システムに基づいて生成できます。テンプレートを使用するには、ビジネス・プロセスでデータのエクスポート・プロセスを実行し、エクスポートされたファイルをテンプレートとして使用します。[データのエクスポート](#)を参照してください。

ノート:

データのインポート時には、有効な交差を確認するための検証が交差に対して実行されず、すべての交差にデータがロードされます。無効な交差にロードされているデータを確認するには、データをインポートする前に「無効な交差」レポートを実行し、無効な交差を表示してクリアします。[無効な交差レポートの操作](#)を参照してください。

データをインポートするには:

1. 「**アプリケーション**」、「**概要**」の順にクリックします。
2. 「**アクション**」、「**データのインポート**」の順にクリックします。
3. 「**作成**」をクリックします。
4. データ・インポート・ファイルの場所を選択するには:
 - **ローカル**: 自分のコンピュータ上の場所からデータ・インポート・ファイルをインポートします。
 - **受信ボックス**: サーバーからデータ・インポート・ファイルをインポートします。[受信ボックス/送信ボックス・エクスプローラを使用したファイルのアップロードおよびダウンロード](#)を参照してください。

ノート:

有効なインポート・データのファイル形式は、.csv、.txt、.zip です。

5. データ・インポート・ファイルの「**ソース・タイプ**」を選択するには:
 - **デフォルト**: ビジネス・プロセス固有のデータ・ファイル・フォーマットでデータをロードする場合は、このソース・タイプを選択します。このオプションを選択した場合は、「**カンマ区切り**」、「**タブ区切り**」、「**その他**」のいずれかを選択してください。

 ノート:

- ビジネス・プロセス固有のデータのロード中にインポート・エラーが発生した場合でも、有効なデータは引き続きロードされます(部分ロード)。エラーがあったデータは、インポートまたはエクスポートのステータスになります。[データ・インポートおよびエクスポートのステータスの表示](#)を参照してください。
- サポートされている区切り文字と例外のリストは、[他のサポートされている区切り文字](#)を参照してください。
- データをビジネス・プロセス固有のフォーマットでファイルにエクスポートする場合、メモ帳を使用してファイル内のデータベース名 (ASOCube など)を変更してから、データ・ファイルを集約ストレージ・アウトラインにインポートできます(すべてのディメンションが集約ストレージ・アウトラインに存在している場合)。

- **Essbase:** Essbase データ・ファイル・フォーマットでデータをロードする場合は、このソース・タイプを選択します。このオプションを選択した場合、キューブを選択する必要があります。

「**デリミタ**」で Essbase データの区切り文字を指定します。オプションは「**スペース**」または「**タブ**」です。

 ノート:

デフォルトでは、「**エラーの場合に停止**」が選択されています。このオプションが選択されていて、Essbase データのロード中にインポート・エラーが発生した場合、インポートは中断され、データはロードされません。このオプションが選択されていない場合は、エラーが発生してもデータのロードは継続されます。

6. ソース・ファイルを入力または選択します。
 - 「**ローカル**」を選択した場合、「**参照**」をクリックし、ソース・ファイルに移動します。
 - 「**受信ボックス**」を選択した場合、「**ソース・ファイル**」にファイルの名前を入力します。
7. **オプション: 「メタデータを含む」**をクリアして、データ・インポートのパフォーマンスを向上させ、メンバーがデータのインポート中にアウトラインの位置を変更できないようにします。このオプション設定に関係なく、アプリケーション・データをロードする前に、必要なメタデータがビジネス・プロセスと Essbase アウトラインにすでに存在する必要があります。
8. 「**ジョブとして保存**」をクリックしてインポート操作を、後で実行をスケジュールできるジョブとして保存します。

 **ノート:**

- 「**ジョブとして保存**」は、「**受信ボックス**」を選択した場合にのみ使用できます。
- インポート操作をジョブとして保存すると、ロード・シーケンスをバッチ処理する場合に便利です。たとえば、メタデータをインポートし、次にデータをインポートして、データのロードが完了したらルールを実行する場合などです。[ジョブの管理](#)を参照してください。
- 一度に最大5つのインポート・ジョブを実行できます。
- データ・インポート・ジョブ中に拒否されたデータを確認する場合は、「**ジョブとして保存**」ダイアログで「**エラー・ファイル**」を指定できます。このファイルにより、インポートされなかったデータ・レコードに関する情報が提供されます。エラーの zip ファイルを指定すると、zip ファイルが送信ボックスに格納され、受信ボックス/送信ボックス・エクスプローラを使用してファイルをダウンロードできます。[受信ボックス/送信ボックス・エクスプローラを使用したファイルのアップロードおよびダウンロード](#)を参照してください。

 **ヒント:**

後続する「**データのインポート**」ジョブのジョブ作成プロセスを合理化するには、「**名前を付けて保存**」オプションを使用して既存のジョブを複製し、そのジョブを更新できます。[ジョブの複製](#)を参照してください。

9. **オプション:** インポート・ファイルのフォーマットが正しいかどうかをテストするには、「**検証**」をクリックします。
10. 「**インポート**」をクリックして、インポート操作を実行します。

ノート:

このビジネス・プロセスには、インポート前にデータをクリアするインポート・オプションはありません。このため、インポートでは#MISSING 値を持つ既存のデータ値は上書きされません。ただしインポート前にキューブのクリア・ジョブを実行することも、スクリプトまたはルールを使用するか、REST API を使用してデータをクリアすることもできます:

- 入力キューブおよびレポート・キューブ内の特定のビジネス・プロセス・データをクリアできるキューブのクリア・ジョブを実行できます。[キューブのクリア](#)を参照してください。
- 特定のデータ値をクリアするための Essbase の CLEARDATA コマンドを使用するビジネス・ルールを記述できます。[Oracle Analytics Cloud - Essbase のテクニカル・リファレンスの CLEARDATA](#) を参照してください。
- データ・スライスのクリア REST API を使用して、指定した領域のビジネス・プロセスと Essbase のデータをクリアできます。[Enterprise Performance Management Cloud REST API のデータ・スライスのクリア](#)を参照してください。

注意:

データをエクスポートした後にアプリケーションでの評価順序を変更した場合、インポートで予期しない結果が生じることがあります。

データ・ロード入力ファイルの値が評価済ドライバ・メンバーのタイプと一致しない場合(ドライバ・メンバーの評価済タイプが"日付"で、対応する入力値が有効な日付形式でない場合など)ドライバ・メンバーのキャスト・エラーが発生します。[ドライバ・メンバーのキャスト・エラー](#)を参照してください。

ドライバ・メンバーのキャスト・エラー

データ・ロード入力ファイルの値が評価済ドライバ・メンバーのタイプと一致しない場合、ドライバ・メンバーのキャスト・エラーが発生します。次に、ドライバ・メンバーのキャスト・エラーをいくつか示します:

- ドライバ・メンバーが"日付"タイプで、対応する入力値が有効な日付フォーマットでない場合
- "スマート・リスト"タイプのドライバ・メンバーに、存在しないスマート・リスト値が指定されている場合
- "通貨"、"データ"または"パーセント"タイプのメンバーに、数値以外の値が指定されている場合。

キャスト・エラーは、データ・レコードで発生するたびに入力ファイルで指定した各ドライバ・メンバーに対して発生します。したがって、指定された入力レコードのキャスト・エラー数の範囲は0からドライバ数までです。成功したドライバ・メンバーのバインディングがドライバ・メンバーのバインディング・エラーを伴って発生することがあるため、アプリケーションでは、入力レコード全体は拒否されず、インポートおよびエクスポート・ステータ

スにエラーが示されます。データ・インポートおよびエクスポートのステータスの表示を参照してください。

不正な日付値が指定されている、次のデータ・レコードの入力ファイルを検討してください:

```
Entity, aDate, aSl, aText, aCurr, aPercent, Point-of-View,Data Load  
Cube Name  
e1, exampleBadDateValue, s11, text11, 888, 0.99,  
"FY15,Current,""BUVersion_1"",Local,u1,Jan",Plan1
```

表示されるエラー・メッセージ:

- データのロード後に、ステータス・ウィンドウに次が表示されます:

```
Outline data store load process finished (Invalid data values were not  
loaded). 7 data records were read, 7 data records were processed, 7  
were accepted for loading (verify actual load with Essbase log files),  
0 were rejected.
```
- 次のエントリ詳細とともにインポートおよびエクスポート・ステータスのエラーとして、エラーが示されます:

```
Category: Data record  
Record Index: 2  
Message: Unable to load specified data value in Record 2: (aDate:  
exampleBadDateValue)
```
- 複数のキャスト・エラーが発生した場合、各エラーは同じエラー・メッセージに記録されます:

```
Unable to load specified data values in Record 2: (aSl: aaaaaaas11),  
(aPercent: cc), (aDate: exampleBadDateValue), (aCurr: bb)
```
- エラー・メッセージ数が最大制限値を超えた場合、次のメッセージが発行され
ます:

```
The warning [Unable to load specified data values] message count limit  
(100) exceeded: no more warnings of this type will be issued.
```

データのエクスポート

ファイルにデータをエクスポートするには:

1. 「アプリケーション」、「概要」の順にクリックします。
2. 「アクション」、「データのエクスポート」の順にクリックします。
3. 「作成」をクリックします。
4. 「データのエクスポート」ページで、データ・エクスポート・ファイルのターゲット環境を選択します:
 - **ローカル:** データ・エクスポート・ファイルをローカル・コンピュータ上の場所に保存します。
 - **送信ボックス:** データ・エクスポート・ファイルをサーバーに保存します。受信ボックス/送信ボックス・エクスプローラを使用したファイルのアップロードおよびダウンロードを参照してください。

5. キューブを選択します。

 **ノート:**

データのエクスポート・ジョブ定義のドライバと列のディメンションは密である必要があります。

6. ファイル・タイプを選択します。
- **カンマ区切り:** 各アーティファクトのカンマ区切りの.csv ファイルを作成します。
 - **タブ区切り:** 各アーティファクトのタブ区切りの.txt ファイルを作成します。
 - **その他:** 各アーティファクトの.txt ファイルを作成します。エクスポート・ファイルで使用する区切り文字を入力します。サポートされている区切り文字と例外のリストは、[他のサポートされている区切り文字](#)を参照してください。
7. 「スマート・リスト」で、「ラベルのエクスポート」または「名前のエクスポート」を指定します。
8. 「動的メンバー」に対して、エクスポート時に動的計算メンバーを「含む」か「除外」するかを選択します。

 **ノート:**

- 動的計算メンバーをエクスポート・データから除外すると、データ・エクスポート時のパフォーマンスが向上します。
- 選択したキューブがブロック・ストレージ(BSO)キューブの場合、「動的メンバー」は密ディメンションにのみ適用されます。
- BSO キューブに対して「動的メンバー」が選択されている場合、エクスポートする動的メンバーを含む密ディメンションを選択する必要があります。
- BSO キューブに対して動的疎メンバーを選択すると、エクスポート中にエラーが発生する可能性があります。

9. 「小数点以下の桁数」に、エクスポート後のデータをフォーマットするための小数部の桁数(0-16)を指定するか、またはデフォルトの「なし」を選択してデフォルトの精度フォーマットを使用します。たとえば、「小数点以下の桁数」フィールドに小数値の「3」を指定すると、該当する場合はいつでも、小数点の右側に 3 桁の数字が表示されたエクスポート済データとなります。

 **ノート:**

「なし」を選択すると、小数はデフォルトの精度設定に従ってフォーマットされ、「0」を選択すると、整数を表示するようにデータがフォーマットされます。たとえば、エクスポートしているデータの値が 123.45678 の場合は、「0」を選択すると、データが 123 として、「なし」を選択すると、データが 123.45678 としてエクスポートされます。

10. エクスポートするデータのスライスを選択します。

 **ノート:**

集約ストレージ・キューブからデータをエクスポートし、複数のメンバーを同時にエクスポートする場合、選択したメンバーの少なくとも1つが非共有メンバーであることを確認してください。共有メンバーの個別のエクスポートは、基本メンバーの選択と同じなので可能です。ただし、子孫がすべて共有メンバーである親メンバーのレベル0の子孫の選択はディメンションからのメンバーの選択と同じではないので、エクスポートは実行されません。したがって、選択したメンバーのいずれかが非共有メンバーであることを確認する必要があります。

11. **オプション: 「ジョブとして保存」** をクリックしてエクスポート操作を、ただちにまたは後で実行をスケジュールできるジョブとして保存します。

 **ノート:**

- 「**ジョブとして保存**」は、「**送信ボックス**」を選択した場合にのみ使用できます。
- 一度に最大5つのエクスポート・ジョブを実行できます。
- エクスポート・ジョブをスケジュールするときは、各ジョブに対して一意の出力ファイル名を指定できます。
- ジョブのスケジュールの詳細は、[ジョブの管理](#)を参照してください。

 **ヒント:**

後続する「**データのエクスポート**」ジョブのジョブ作成プロセスを合理化するには、「**名前を付けて保存**」オプションを使用して既存のジョブを複製し、そのジョブを更新できます。[ジョブの複製](#)を参照してください。

12. 「**エクスポート**」 をクリックして、データ・エクスポート・ファイルの保存先を指定します。

 **ノート:**

データ・エクスポート・ファイルのサイズを削減するために、フォームに全体が#MISSING 値の行が含まれる場合、その行はデータ・エクスポート・ファイルから省略されます。

トラブルシューティング

ASO キューブから多数のデータ・セルをエクスポートするときに Oracle Essbase の問合せ制限エラーが表示された場合に問題をトラブルシューティングする方法の詳細は、*Oracle Enterprise Performance Management Cloud オペレーション・ガイド*の

ASO キューブからの大規模なデータ・エクスポートに関連する問題の対処を参照してください。

データ・インポートおよびエクスポートのステータスの表示

データのインポートおよびエクスポートのステータスを表示するには:

1. 「アプリケーション」をクリックし、「ジョブ」をクリックします。
2. 「最近のアクティビティ」の下にあるインポートまたはエクスポートのジョブ名をクリックします。

ステータス・ページに、「エラー」、「警告」、「情報」および「すべて」のメッセージが表示されます。エラーがあり、ジョブの定義中にエラー・ファイル名を指定した場合、「エラー・ファイル」リンクを使用して、生成されたエラー・ファイルをダウンロードできます。

Essbase アウトラインの検証

Essbase アウトラインを事前検証して、アプリケーションがハイブリッド Essbase バージョンと互換性があることを確認します。

ハイブリッド・ブロック・ストレージ・オプション(BSO)キューブをサポートする Oracle Essbase バージョンにすべての環境をアップグレードする作業の一環として、Oracle では、Essbase アウトラインを事前検証するプロセスを追加しました。これにより、ハイブリッド Essbase バージョンに環境をアップグレードする際、スムーズに移行できます。

Note:

Essbase バージョンの詳細は、*Oracle Enterprise Performance Management Cloud 管理者スタート・ガイド*の EPM Cloud の Essbase についてを参照してください。

アプリケーションとハイブリッド Essbase バージョンとの互換性を確保するには、環境内のメンバー式を検証して、問題があれば修正できるようレポートを提出する、新しいユーティリティを実装しておきます。アプリケーションの概要ページの「アクション」メニューの「Essbase アウトライン検証」メニュー・オプションにある次のオプションを使用します:

- **アウトラインの事前検証:** アプリケーションの検証を実行します
- **アウトライン事前検証レポート:** ハイブリッド Essbase バージョンとの互換性を保つために修正が必要なメンバー式のリストを表示します

 **Note:**

- 「**Essbase アウトライン検証**」メニュー・オプションは、環境が非ハイブリッド Essbase バージョンの場合にのみ表示されます。環境がハイブリッド Essbase バージョンの場合は、「**Essbase アウトライン検証**」メニュー・オプションは表示されなくなります。
- 環境がハイブリッドまたは非ハイブリッド Essbase バージョンのどちらであるかを確認する別の方法は、「**アクティビティ・レポート**」の **Essbase バージョンでのハイブリッド・ブロック・ストレージ・オプションのサポート**の値を表示することです。値が「はい」の場合、環境はハイブリッド Essbase バージョンです。値が「いいえ」の場合、環境は非ハイブリッド Essbase バージョンです。

環境内の Essbase アウトラインを検証して、メンバー式で検出されたエラーを修正するには:

1. ホーム・ページで「**アプリケーション**」をクリックし、「**概要**」をクリックします。
2. 「**アクション**」をクリックして「**Essbase アウトライン検証**」を選択し、次のオプションから選択します:
 - 検証を実行するには、「**アウトラインの事前検証**」を選択します。
 - 検証中に検出されたエラーのレポートを表示およびダウンロードするには、「**アウトライン事前検証レポート**」を選択します。

メンバー式を修正した後、「**アウトラインの事前検証**」オプションを再度使用して、すべての問題が解決されたことを確認します。

アプリケーション・データベースの作成とリフレッシュ

アプリケーション・データベースをリフレッシュする前に知っておく必要のあること。

次も参照:

- [アプリケーション・データベースの作成](#)
- [データベースをリフレッシュする前に](#)
- [アプリケーション・データベースのリフレッシュ](#)
- [メタデータの検証](#)

アプリケーション・データベースの作成

アプリケーションを作成すると、アプリケーション内の各キューブのデータを保管するアプリケーション・データベースが作成されます。

フリーフォーム・アプリケーションを作成するには、[フリーフォーム・アプリケーションの作成](#)を参照してください。

データをクリアする必要がある場合は、**Calculation Manager** を使用して、それを行うことができます。データをリフレッシュするには、[アプリケーション・データベースのリフレッシュ](#)を参照してください。

データベースをリフレッシュする前に

アプリケーション構造を変更し、ディメンションやメンバーなどのアーティファクトを変更したら、データベースをリフレッシュする必要があります。データベースをリフレッシュする前に、すべてのユーザーに通知し、作業を保存してアプリケーションを閉じるよう求めることをお勧めします。

データベースをリフレッシュする前に:

- アプリケーションをバックアップし、すべてのデータベースからデータをエクスポートします。
- リフレッシュ中にすべてのユーザーが管理モードでアプリケーションを使用できるようにするか、現在のサービス管理者のみが使用できるようにするかを決定します
- すべてのユーザーをログオフさせるかどうかを決定します
- アクティブなアプリケーション要求を終了します

アプリケーション・データベースのリフレッシュ

アプリケーション・データベースには、アプリケーション内の各キューブのデータが保管されます。アプリケーション構造を変更し、ディメンションやメンバーなどのアーティファクトを変更したら、データベースをリフレッシュする必要があります。「データベースのリフレッシュ」プロセスをすぐに開始することも、後でジョブとして実行するようにスケジュールすることもできます。

データベースをリフレッシュするには:

1. [データベースをリフレッシュする前に](#)を参照してください。
2. 「**アプリケーション**」、「**概要**」の順にクリックします。
3. 「**アクション**」、「**データベースのリフレッシュ**」の順にクリックします。
4. 「**データベースのリフレッシュ**」ページで、「**作成**」をクリックし、次のいずれかのオプションを選択します。

データベースのリフレッシュ前

- **アプリケーションを使用可能にする対象:** リフレッシュ中に**すべてのユーザー**または**管理者**(現在ログインしているサービス管理者)が管理モードでアプリケーションにアクセスできるようにします
- **すべてのユーザーのログオフ:** リフレッシュを開始する前にすべてのアプリケーション・ユーザーをログオフします
- **すべてのアクティブな要求の停止:** Essbase アプリケーションにアクティブな要求があれば停止して、リフレッシュを開始します

データベースのリフレッシュ後

- **アプリケーションを使用可能にする対象:** リフレッシュ後に、「**すべてのユーザー**」または「**管理者**」がアプリケーションを使用できるようにします

- **メタデータの検証:** デフォルトでは、このオプションは選択されていません。このオプションが選択されている場合は、ビジネス・プロセスと Oracle Essbase の間のメンバー・アイデンティティ (ID) の不一致がスキャンされ、リフレッシュ・プロセス後に自動的に解決されます。「**メタデータの検証**」を選択すると、リフレッシュ・プロセスにさらに時間がかかる場合があります。詳細は、[メタデータの検証](#)を参照してください。

「メタデータの検証」 オプションは、ハイブリッド・ブロック・ストレージ・オプション(BSO)キューブ(ハイブリッド BSO、ASO および BSO)をサポートする Oracle Essbase バージョンで実行されているこれらのストレージ・オプションがあるキューブで使用できます。このオプションは、ハイブリッド BSO キューブをサポートしていない従来の Essbase バージョンで実行されているキューブでは使用できません。
- 5. データベースをすぐにリフレッシュするには、「**データベースのリフレッシュ**」をクリックします。リフレッシュを後でジョブとして実行するには、「**ジョブとして保存**」をクリックします。**データベースのリフレッシュ**・ページで選択したすべてのオプション(「**メタデータの検証**」を含む)は、保存済ジョブに保持されます。[ジョブの管理](#)を参照してください。

ヒント:

後続する「**データベースのリフレッシュ**」ジョブのジョブ作成プロセスを合理化するには、「**名前を付けて保存**」オプションを使用して既存のジョブを複製し、そのジョブを更新できます。[ジョブの複製](#)を参照してください。

トラブルシューティング

データベースのリフレッシュに関する問題のトラブルシューティングの詳細は、*Oracle Enterprise Performance Management Cloud オペレーション・ガイド*のデータベース更新の問題のトラブルシューティングを参照してください。

メタデータの検証

メタデータの検証について

「**メタデータの検証**」設定(以前の「**エラーの自動修正**」)をデータベース・リフレッシュ・プロセスの一環として使用して、ビジネス・プロセスと Oracle Essbase の間のメンバー・アイデンティティ (ID) の不一致をスキャンし、自動的に解決します。

Caution:

「**メタデータの検証**」を選択すると、リフレッシュ・プロセスにさらに時間がかかる場合があります。

特定のケースで、アプリケーションが使用するマルチディメンショナル・データベースで完全には認識されない方法で、メンバーのアイデンティティが変更される場合があります。システムのすべての部分でメンバーのアイデンティティが完全には正確に確立されていない場合、メンバー順序の不正などの階層に関する問題が発生したり、該当するメンバーの子、兄弟の一部、特定のプロパティなどが不足することがあります。

す。「**メタデータの検証**」を選択すると、そのようなメンバーが検出されてアイデンティティが自動的に解決されます。これにより、これらのメンバーと、プロパティおよび兄弟を含む階層が完全かつ正確に認識されるようになり、システムのすべての部分で使用可能になります。

メンバーの移動および削除の詳細を示すレポートの表示

メンバー ID の修正を行った後、メンバーを削除または移動できます。メンバーの(異なる親への)移動または削除の詳細を示すレポート・ファイルが生成され、csv (カンマ区切り)ファイル形式で送信ボックスに配置されます。レポートを確認し、子階層が変更された可能性のある保管された一部の親メンバーを再集約します。

例:

Action	Member	Parent	Dimension	Cube	New Parent
Delete	Member1	Parent1	Scenario	Plan1	
Move	Member2	Parent2	Account	Plan2	Parent3

CSV ファイルが送信ボックス・フォルダに生成され、アプリケーション名の後に `_autocorrect.csv` が続くファイル名が自動的に作成されます(例: `vision_autocorrect.csv`)。このファイルは、実行のたびに上書きされます。

「**メタデータの検証**」設定を使用して「**データベースのリフレッシュ**」ジョブを実行した後、送信ボックスからエクスポート・ファイルをダウンロードできます。

ファイルをダウンロードするには:

1. 「**アプリケーション**」をクリックし、「**ジョブ**」をクリックします。
2. 「**最近のアクティビティ**」で、ジョブをクリックします。
3. 「**ジョブの詳細**」の上部で、エクスポート・ファイル・オプションをクリックしてダウンロード場所を選択します。

アプリケーションへの集約ストレージ・アウトラインの追加

集約ストレージの機能とアプリケーションでの使用方法について理解します。

次も参照:

- [集約ストレージについて](#)
- [集約ストレージ・アウトラインのキューブの特性](#)
- [アプリケーションに集約ストレージ・データベースを追加するプロセス](#)

集約ストレージについて

集約ストレージとは、多数の潜在的に大きなディメンションに分類されている大規模な疎に分散したデータをサポートする、データベース・ストレージ・モデルです。選択されたデー

タ値は集約および保管され、一般的に集約時間が改善されます。ストレージのタイプには、この集約ストレージの他にブロック・ストレージ(密/疎構成)があります。

集約ストレージ・アウトラインのキューブの特性

- 集約ストレージ・データベースでは XREF が生成されません。XREF は、ブロック・ストレージ・データベースでのみ生成できます。
- 動的時系列のメンバーは、集約ストレージ・アプリケーションの期間ディメンションには適用できません。
- セキュリティ・フィルタの作成およびリフレッシュは、集約ストレージ・データベースに適用できません。

トラブルシューティング

集約ストレージ・レポート・キューブのパフォーマンスには、キューブのスライス数、キューブのアウトライン、キューブのディメンションのタイプなど、多くの要因が影響を及ぼします。*Oracle Enterprise Performance Management Cloud* オペレーション・ガイドの集約ストレージ・オプション・キューブの最適化を参照してください。

集約ストレージ・アウトラインのキューブの特性

- 集約ストレージ・データベースでは XREF が生成されません。XREF は、ブロック・ストレージ・データベースでのみ生成できます。
- 動的時系列のメンバーは、集約ストレージ・アプリケーションの期間ディメンションには適用できません。
- セキュリティ・フィルタの作成およびリフレッシュは、集約ストレージ・データベースに適用できません。

アプリケーションに集約ストレージ・データベースを追加するプロセス

アプリケーションに集約ストレージ・データベースを追加するには:

1. 集約ストレージ・キューブを作成します。次のいずれかのタスクを実行します。
 - アプリケーションの作成時に、集約ストレージ・キューブを作成します。
フリーフォーム・アプリケーションを作成するには、[フリーフォーム・アプリケーションの作成](#)を参照してください。
 - キューブ・エディタを使用して新規キューブを追加します。
[キューブの管理](#)を参照してください。
2. 集約ストレージ・キューブにディメンションを追加します。
[簡易ディメンション・エディタでのディメンションの編集](#)を参照してください。
3. ディメンション・メンバーを追加します。[簡易ディメンション・エディタでのメンバーの追加](#)を参照してください。
4. アプリケーションのアウトラインをリフレッシュします。[アプリケーション・データベースのリフレッシュ](#)を参照してください。
5. 集約ストレージ・データベースに関連付けられたディメンションを使用してフォームを作成します。[フォームの管理](#)を参照してください。

アプリケーションの削除

アプリケーションを削除する場合、慎重に作業を進めます。

アプリケーションを削除するとそのコンテンツおよびスケジュール済のジョブがすべて削除されるため、アプリケーションのバックアップを作成してください。

アプリケーションを削除するには:

1. 「**アプリケーション**」、「**概要**」の順にクリックします。
2. 「**アクション**」、「**アプリケーションの削除**」の順にクリックします。

日次メンテナンス・プロセス開始時間の設定

1時間の日次メンテナンス・プロセスを開始するのに最も都合のよい時間を決定して設定する方法について理解します。

ビジネス・プロセス・インスタンスでは、定期的なメンテナンスの実行に毎日1時間が必要です。サービス管理者は都合のよい時間を選択(および変更)して1時間のメンテナンス・プロセスを開始できます。

日次メンテナンス操作および環境のメンテナンス開始時刻のスケジュールの詳細は、**Oracle Enterprise Performance Management Cloud 管理者スタート・ガイド**の日次メンテナンスの管理を参照してください。

ノート:

「日次メンテナンス時に増分データ・インポートのために EPM Cloud スマート・リストのテキスト・データをエクスポート」と呼ばれるシステム設定があり、この設定が有効かどうかに応じて、エクスポートの時間に影響を与える可能性があります。この設定の使用の詳細および推奨事項は、次のトピックを参照してください:

- **Oracle Enterprise Performance Management Cloud オペレーション・ガイド**の日次メンテナンス時に増分データ・インポートのためにスマート・リストのテキスト・データをエクスポート
- [指定可能なアプリケーションおよびシステム設定](#)

スケジュール済ジョブによって自動バックアップが失敗するのを防ぐために、EPM Cloud では、日次メンテナンス・プロセスの実行中に特定のスケジュール済ジョブを開始することが禁止されています。

次のジョブを日次メンテナンス中に開始することはできません:

- データのインポート
- メタデータのインポート
- データのエクスポート
- メタデータのエクスポート
- データベースのリフレッシュ

- キューブのクリア
- キューブの再構築
- アウトラインの圧縮
- データ・スライスのマージ
- 集約の最適化

システムによってジョブの開始が妨げられた場合、「ジョブの詳細」に理由が示されません。ジョブ・コンソールの電子メール通知を有効にしている場合は、ジョブが開始されなかったときに電子メール通知を受け取ります。日次メンテナンス・プロセス中に開始するようにスケジュールされたジョブがある場合は、日次メンテナンス・ウィンドウ外で開始するようにジョブを再スケジュールすることをお勧めします。[ジョブのスケジュール](#)を参照してください。

受信ボックス/送信ボックス・エクスプローラを使用したファイルのアップロードおよびダウンロード

受信ボックス/送信ボックス・エクスプローラを使用して、ファイルをサーバーにアップロードしたり、コンピュータにダウンロードします。

インポート・ジョブまたはエクスポート・ジョブをスケジュールする方法については、[ジョブのスケジュール](#)を参照してください。

ファイルをアップロードまたはダウンロードするには:

1. 「**アプリケーション**」、「**概要**」の順にクリックします。
2. 「**アクション**」、「**受信ボックス/送信ボックス・エクスプローラ**」の順にクリックします。
3. **オプション**: 名前でフィルタし、リストをリフレッシュし、サーバーからファイルをアップロードします。
4. サーバーからファイルをアップロードするには、「**アップロード**」をクリックします。「**ファイルのアップロード**」ダイアログ・ボックスで、「**参照**」をクリックしてアップロードするファイルを選択し、「**ファイルのアップロード**」をクリックします。
5. サーバーからファイルをダウンロードするには、目的のファイルを選択して...をクリックし、「**ファイルのダウンロード**」をクリックします。
6. 「**閉じる**」をクリックして「**受信ボックス/送信ボックス・エクスプローラ**」を閉じ、「**概要**」タブに戻ります。

 ノート:

アップロード・ファイルのサイズには、**2GB** の上限があります。アップロード・ファイルがサイズ制限を超える場合は、より小さいファイルを選択するか、**EPM** 自動化を使用してより大きいファイルをアップロードします。**EPM** 自動化の詳細は、*Oracle Enterprise Performance Management Cloud EPM 自動化の操作*を参照してください。

6

メンバー・セレクタの使用

次も参照:

- [メンバーの操作](#)
- [選択](#)
- [メンバーの関係](#)
- [ワイルドカードを使用した検索](#)
- [メンバーとしての属性値の選択](#)
- [フォームのメンバーの選択](#)
- [メンバーとしての代替変数の選択](#)
- [メンバーとしてのユーザー変数の選択](#)
- [UDAのメンバーとしての選択](#)

メンバーの操作

「**メンバーの選択**」ダイアログ・ボックスを使用して、次の機能で使用するメンバーを選択します。

- ビジネス・ルール実行時プロンプト
- ユーザー変数
- 動的変数
- データのエクスポート
- 有効交差ルールが適用される視点およびページ軸
- 有効な交差

ノート:

フォーム 2.0、ダッシュボード 2.0 およびアド・ホック・グリッドでは、異なるバージョンのメンバー・セレクタを使用します。*Enterprise Profitability and Cost Management* の管理および操作のメンバー・セレクタの使用を参照してください。

変数と属性が定義されている場合は、変数と属性を選択できます。メンバー名または別名でメンバーを表示および選択できます。「**メンバー選択**」ダイアログ・ボックスに定義する表示オプションは、サービス管理者によってアプリケーション・デフォルトとして定義されたオプションより、またアプリケーション・プリファレンスで指定されたオプションよりも優先されます。

フォームで行ディメンションに対してドロップダウン・メンバー・セレクタが定義されている場合、リストから直接メンバーを選択して、データを入力して、フォームに行を追加できます。

フリーフォームの操作の抑制または除外されたメンバーに対するデータの入力を参照してください。

選択

ユーザーがアクセスできるメンバー、代替変数、属性のみが表示されます。複数のメンバー選択にメンバー・セレクタを起動している場合のみ、「**選択**」ペインが表示されます。

有効交差ルールが使用されている場合、有効なメンバーのみがアプリケーション・フォームおよび Calculation Manager ルールの実行時プロンプトに表示されます。Web と Oracle Smart View for Office の両方のアド・ホック・フォームでは、アプリケーションによって視点およびページ軸の有効交差ルールがフィルタされません。グリッドのセルのみ、アド・ホック・フォームで有効交差ルールに従います。

選択するには:

1.  をクリックします。
2. **オプション:** 次のタスクを実行します:
 - 検索条件(メンバー名または別名のみ)を入力するには、(デスクトップから) **[Enter]**を押すか、(モバイル上で) **「検索」** をクリックします。

ノート:

検索では大文字と小文字は区別されません。検索できるのは、1つの単語、複数の単語またはワイルドカード文字です。 [ワイルドカードを使用した検索](#)を参照してください。

- 変数や属性の表示、別名の表示、メンバー数の表示、アルファベット順のソート、メンバー・リストのリフレッシュまたは選択のクリアなど、表示オプションを変更するには、「**検索**」の横の  をクリックし、表示オプションのリストから選択します。
- メンバー・リストに表示されているメンバーをフィルタするには、  「**検索**」の横で、「**フィルタの追加**」を選択し、フィルタ・オプションのリストから選択します。

ノート:

Android ユーザーは、  をクリックして、フィルタ・オプションを表示および選択できます。

3. メンバー・リストのメンバーをクリックして選択を行います。

関連メンバーを選択する方法を理解するには、[メンバーの関係](#)を参照してください。

ノート:

- 選択されたメンバーにはチェック・マークが表示され、「**選択**」ペインに移動されます(該当する場合)。
- 親メンバーを展開してその子メンバーを表示するには、親メンバー名の右側にある拡張アイコンをクリックします。拡張アイコンをクリックしても、親メンバーは選択されません。

- 行った選択をクリアするには、 をクリックし、「**選択項目のクリア**」を選択します。

選択する視点およびページ軸が抑制されている場合があります。これは、視点およびページ軸内のディメンション選択が、適用済の有効交差により他のディメンションを無効化している場合に発生します。この問題を解決するには、「**選択項目のクリア**」オプションを使用して、以前に選択した視点およびページ軸をクリアします。次に、視点およびページ軸を再度使用して、以前は抑制されていたメンバーを選択します。

- 有効な交差ルールのために抑制されているメンバーをすべて表示するには、 をクリックし、「**無効なメンバーの表示**」を選択します。無効なメンバーは表示されますが、選択できません。

4. オプション: 次のタスクを実行します:

- 「**選択**」ペインで選択する関連メンバーをさらに絞り込むには、メンバーの右側にある  をクリックして、メンバーの関係メニューを表示します:

Member	
Ancestors	
Children	
Descendants	
Siblings	
Parents	
Level 0 Descendants	
Left Siblings	
Right Siblings	
Previous Sibling	
Next Sibling	
Previous Level 0 Member	
Next Level 0 Member	
Previous Generation Me...	
Next Generation Member	

関係名をクリックして、関連メンバーを選択します(選択したメンバーを除く)。

関係名の右側にある「含む」アイコン  をクリックして、関連メンバーを選択します(選択したメンバーを含む)。

関係の詳細は、[メンバーの関係](#)を参照してください。

- 代替変数または属性が定義されている場合は、メンバー選択領域の下で、「**メンバー**」の横にある ▼ をクリックし、「**代替変数**」または「**属性**」を選択して代替変数または属性のメンバーを選択します。メンバーは子として表示されます。フォームに表示されるのは、ユーザーが読取りアクセス権を持つメンバーのみです。
- 「**選択**」ペインでメンバーを移動または削除するには、「**選択**」の横にある  をクリックします。
- ディメンション階層内で選択済メンバーの場所をハイライトするには、「**選択**」ペインでメンバー名をダブルクリックします。

ノート:

モバイル・デバイスで選択済メンバーの場所をハイライトするには、

「**選択**」ペインでメンバー名をタップし、「**選択**」の横の  の下の「**検索**」をタップします。

5. 選択が完了したら、「OK」をクリックします。

メンバーの関係

この表は、メンバー選択時に含まれるメンバーおよび関連メンバーを示しています。

表 6-1 メンバーの関係

関係	含まれるメンバー
メンバー	選択したメンバー
祖先	選択したメンバーの上方にあるすべてのメンバー(選択したメンバーは除く)
祖先(含む)	選択したメンバーとその祖先
子	選択したメンバーの真下にあるレベルのすべてのメンバー
子(含む)	選択したメンバーとその子
子孫	選択したメンバーのすべての子孫(選択したメンバーは除く)
子孫(含む)	選択したメンバーとその子孫
兄弟	選択したメンバーと同じ階層レベルからのすべてのメンバー(選択したメンバーは除く)
兄弟(含む)	選択したメンバーとその兄弟
親	選択したメンバーの上方にあるレベルのメンバー
親(含む)	選択したメンバーとその親
レベル 0 の子孫	子を持たない選択したメンバーのすべての子孫
左兄弟	同じ親を持つ選択したメンバーの前に出現するメンバー
左兄弟(含む)	選択したメンバーとその左兄弟
右兄弟	同じ親を持つ選択したメンバーの後に出現するメンバー
右兄弟(含む)	選択したメンバーとその右兄弟
前の兄弟	同じ親を持つ選択したメンバーの直前に出現するメンバー
次の兄弟	同じ親を持つ選択したメンバーの直後に出現するメンバー
前のレベル 0 のメンバー	選択したメンバーの前に出現する前のレベル 0 のメンバー 例: <code>PrevLvl0Mbr(Jan)</code> は <code>BegBalance</code> を、 <code>PrevLvl0Mbr(Jul)</code> は <code>Jun</code> を、 <code>PrevLvl0Mbr(BegBalance)</code> は空の結果を返します
次のレベル 0 のメンバー	選択したメンバーの後に出現する次のレベル 0 のメンバー 例: <code>NextLvl0Mbr(Mar)</code> は <code>Apr</code> を、 <code>NextLvl0Mbr(Dec)</code> は空の結果を返します
前の世代のメンバー	同じ世代内の選択したメンバーの直前に出現するメンバー
次の世代のメンバー	同じ世代内の選択したメンバーの直後に出現するメンバー
相対	同じ世代の指定したオフセットの、指定したメンバーに相対的なメンバーを戻します。 例: <code>Relative("Jan", 4)</code> は、標準月次期間ディメンションで 1 月に 4 か月を足した 5 月を戻し、 <code>Relative("Jan", -2)</code> は、標準月次期間ディメンションで 1 月から 2 か月を引いた 11 月を戻します。
相対範囲	進む場合は開始メンバーからオフセット・メンバーへのすべてのメンバーを戻し、戻る場合はオフセット・メンバーから開始メンバーへのすべてのメンバーを戻します。 例: <code>RelativeRange("Jan", 4)</code> は 1 月、2 月、3 月、4 月、5 月を戻し、 <code>RelativeRange("Jan", -2)</code> は 11 月、12 月、1 月を戻します。

 ノート:

メンバー関係は、期間ディメンションのみでなく、任意のディメンションで機能します。時間は線形であるため説明が容易なので、例では期間ディメンションを使用しました。

ワイルドカードを使用した検索

次のワイルドカード文字を使用して、メンバーを検索できます。

表 6-2 ワイルドカード文字

ワイルドカード	説明
?	任意の 1 文字を表します
*	ゼロ文字以上の文字を表します。たとえば、「sale*」と入力すると、「Sales」と「Sale」が一致します。これは*を使用することで、「sale」という語の後にゼロ文字以上の文字を含む語と一致するためです。 デフォルトの検索には、*ワイルドカードが使用されます。デフォルトの検索には、*ワイルドカードが使用されます。たとえば、検索条件として「cash」と入力すると、「*cash*」が検索され、「Restricted Cash」、「Cash Equivalents」、「Cash」、「Noncash Expenses」などが戻されます。これは、一致した各アイテム内に「cash」が含まれるためです。
#	任意の 1 つの数字(0-9)を表します
[list]	指定した文字リスト内の任意の単一文字を検索します。ワイルドカードとして使用する特定の文字をリストできます。たとえば、[plan]と入力すると、カッコ内のすべての文字を 1 つのワイルドカード文字として使用します。「-」文字を使用すると、[A-Z]や[!0-9]などの範囲を指定できます。「-」文字をリストの一部として使用するには、この文字をリストの先頭に入力します。たとえば、[-@&]の場合、カッコ内の文字をワイルドカード文字として使用します。
[!list]	指定した文字リスト内にはないすべての単一文字を検索します。また、[!A-Z]や[!0-9]のように、「-」で範囲を示すこともできます。

メンバーとしての属性値の選択

属性メンバーが定義されている場合、「メンバーの選択」ダイアログ・ボックスで属性値を選択できます。属性メンバーについては、すべての非レベル 0 属性を選択すると、すべてのレベル 0 子孫が選択され、演算子が相互に適用されます。数値、日付、ブール(false = 0 で true = 1)などのタイプの属性については、評価は最小値と最大値に基づいています。テキスト属性については、評価は階層の上部から下部への位置に基づいています。最上部の位置は最小値となり、最下部の位置は最大値となります。

例: 数値属性

この例では、数値に基づいて、選択された演算子は各レベル 0 子孫に適用されます。たとえば、「メンバーの選択」ダイアログ・ボックスで「等しくない」と「小」を選択

すると、1 に等しくなく、2 に等しくないすべての値が含まれるため、選択には 3、4、5 および 6 が入ります。「より大きい」と「小」を選択すると、1 より大きいまたは 2 よりも大きなすべての値が含まれます。このため選択には 2、3、4、5 および 6 が入ります。

Size

Small

1

2

Medium

3

4

Large

5

6

表 6-3 例: 数値属性評価

選択された演算子	選択された属性値	結果	説明
等しい	Large	5, 6	「等しい」演算子は、5 と 6 を含む Large のすべてのレベル 0 子孫に適用されます。
より小さい	Medium	1, 2, 3	「より小さい」演算子は Medium のすべてのレベル 0 子孫に適用されます。これには 3 より小さい、または 4 より小さい値が含まれ、結果として 1、2 および 3 になります。
より大きい	Medium	4, 5, 6	「より大きい」演算子は Medium のすべてのレベル 0 子孫に適用されます。これには 3 より大きい、または 4 より大きい値が含まれ、結果として 4、5 および 6 になります。
以上	Medium	3, 4, 5, 6	「以上」演算子は Medium のすべてのレベル 0 子孫に適用されます。これには 3 以上、または 4 以上の値が含まれ、結果として 3、4、5 および 6 になります。
以下	Medium	1, 2, 3, 4	「以下」演算子は Medium のすべてのレベル 0 子孫に適用されます。これには 3 以下、または 4 以下の値が含まれ、結果として 1、2、3 および 4 になります。
等しくない	Medium	1, 2, 5, 6	「等しくない」演算子は Medium のすべてのレベル 0 子孫に適用されます。これには 3 に等しくなく、かつ 4 に等しくない値が含まれます。結果として 1、2、5 および 6 になります。

例: テキスト属性

テキスト属性の場合、選択された演算子は階層の位置、上部(最小値)から下部(最大値)までに基づいて、各レベル 0 子孫に適用されます。

この例では、Envelope は最上部にあり、最小値となります。Packet は次に高い値になります。これに Box、Carton、Barrel、Crate が続きます。Crate は最下部にあり、最大値となります。

このテキスト属性の場合には、「より小さい」と Small を選択すると、Envelope よりも小さい値または Packet よりも小さい値が含まれます。Envelope は Packet よりも小さいため、結果として Envelope のみを含む選択となります。同じように、「より大きい」と Large を選択すると、Barrel より大きい値または Crate よりも大きい値が含まれ、結果として Crate のみを含む選択となります。

```
Containers
Small
Envelope
Packet
Medium
Box
Carton
Large
Barrel
Crate
```

表 6-4 例: テキスト属性評価

選択された演算子	選択された属性値	結果	説明
等しい	Medium	Box、Carton	「等しい」演算子は Medium のすべてのレベル 0 子孫に適用されます。これには Box および Carton が含まれます。
等しくない	Medium	Envelope、Packet、Barrel、Crate	「等しくない」演算子は Medium のすべてのレベル 0 子孫に適用されます。これには、Box に等しくなく、かつ Carton に等しくない値が含まれます。この結果として Envelope、Packet、Barrel、Crate となります。
より小さい	Medium	Box、Packet、Envelope	「より小さい」演算子は Medium のすべてのレベル 0 子孫に適用されます。これには、Carton よりも下位または Box より下位のすべてが含まれます。この結果として Box、Packet、Envelope となります。
以下	Medium	Envelope、Packet、Box、Carton	「以下」演算子は Medium のすべてのレベル 0 子孫に適用されます。これには、Carton と同じ位置またはカートンより下位のすべてが含まれます。この結果として Envelope、Packet、Box、Carton となります。

フォームのメンバーの選択

フォームのメンバーを選択するとき:

- 特定のユーザーからメンバーをフィルタ処理するには、そのアクセス権をメンバーに制限し、そのあとプランをリフレッシュします。
- 「**選択したメンバー**」リストでのメンバーの順序によりフォームの順序が決まります。順序を変更するには、メンバーを選択し、選択したメンバー・リストの上にある上矢印または下矢印を選択します。

 **ノート:**

メンバーを個別に選択し、その親を最初に選択する場合、親はフォームのメンバー階層の一番上に表示されます。(階層レベルの数に応じて、個別に選択されたメンバーの親についての合計の計算では複数のパスがとられ、計算が遅くなる可能性があります)。「子孫(含む)」などの関係によって選択されたメンバーの親は、階層の一番下に表示されます。

- 「**フォームの管理**」ダイアログ・ボックスの「**レイアウト**」タブで、メンバー選択アイコンをクリックするか、行または列を右クリックして「**メンバー選択**」を選択することにより、「**メンバー選択**」ダイアログ・ボックスを開くことができます。
- 同じディメンションで異なるメンバー・セットを選択するには、[非対称の行と列の作成](#)を参照してください。
- 1つの行または列内に複数のディメンションがあるフォームの場合、ディメンションに対してメンバー選択オプションを設定できます。それには、「メンバー選択」ダイアログ・ボックスに表示される「**ディメンション**」ドロップダウン・リストから、そのディメンションを選択します。
- メンバー選択アイコンをクリックすると、「**選択内容を別々の行に配置**」または「**選択内容を別々の列に配置**」のオプションが表示されます。これを使用すると、選択内容がフォーム上の既存の最後の行または列の後の行または列に追加されます。たとえば、列 A に Acct1、Acct2 および Acct3 のメンバーが含まれるフォームの場合、「**選択内容を別々の列に配置**」を選択した状態でこれらのメンバーを選択すると、列 A、B、C としてそれぞれ Acct1、Acct2 および Acct3 が選択されます。このオプションを使用せずにメンバーを選択すると、列 A としてすべてのメンバーが選択されます。

この機能は、単一のメンバーに対してのみ使用でき、「子(含む)」などの関数を使用して選択されたメンバーには使用できません。たとえば、列 A に対して「Q」/「子(含む)」を選択している場合に、「**選択内容を別々の列に配置**」を選択しても、フォームのレイアウトは変更されません。

- 「メンバー選択」ダイアログ・ボックスを閉じた後は、「カウント」を除くすべての設定が保持され、「メンバー選択」ダイアログ・ボックスのメンバーはユーザー定義設定に基づいて表示されます。「レイアウト」タブに表示されるメンバーは、「メンバー選択」ダイアログ・ボックスに定義されている表示設定を継承しません。かわりに、メンバー名を使用して表示されます。
- ディメンションについて異なるメンバー・セットを定義するには、[非対称の行と列の作成](#)を参照してください。
- 表示、機能および印刷オプションを設定するには、[フォームの精度およびその他オプションの設定](#)を参照してください。

メンバーとしての代替変数の選択

代替変数は定期的に変化する情報のグローバルなプレースホルダとして機能します。代替変数はローリング予測で展開、レポートする場合に特に役立ちます。代替変数をフォームのメンバーとして選択すると、その値は動的に生成される情報に基づきます。たとえば、フォームやレポート・スクリプトで月の値を毎月更新しなくてもよいように、現在の月メンバーを代替変数 `CurMnth` に設定できます。

ノート:

- フォームで値をオープンまたは計算する際に、アプリケーションでは、割り当てられた値で代替変数を置き換えます。
- アプリケーション内で代替変数を作成し、値を割り当てます。これらの代替変数は、フォームのメンバーを選択するときにアプリケーションで使用できます。アプリケーションを使用して値を作成し、代替変数に割り当てるときの手順については、[代替変数の操作](#)を参照してください。
- 代替変数はフォームのコンテキストに適合する必要があります。「期間」ディメンションのメンバーとしての `Qtr2` の値により、`CurrQtr` という名前の代替変数を選択できます。`CurrYr` という名前の代替変数を「年」ディメンションで選択しても、その値が `Feb` であれば有効になりません。アプリケーションまたはデータベース・レベルで代替変数を設定できません。

同じ代替変数が複数のレベルで存在します。アプリケーションは、次の順序で検索するときに検出される最初の代替変数を使用します。

1. データベース
 2. アプリケーション
- 代替変数がビジネス・ルールの実行時プロンプト用に使用可能であり、その値がビジネス・ルールの実行時プロンプトでメンバー・セットに一致する場合、それらの代替変数のいずれかをメンバーとして選択できます。
 - アプリケーションは代替変数を使用するときに(たとえば、フォームを開く場合)、その代替変数の有効性を確認します。フォームを設計するときには確認しないため、フォームを保存して開くことで、代替変数をテストする必要があります。
 - グローバル変数を使用するアプリケーションを移行した場合、このビジネス・プロセスでそれらを表示できますが、編集はできません。

代替変数をフォームで指定するには:

1. フォームを作成します([フォームの作成](#)を参照)。
2. 「**メンバー選択**」で、「**変数**」タブをクリックし、「**代替変数**」を展開して、メンバーを選択するのと同じ方法で代替変数を選択して「**選択したメンバー**」で代替変数を移動します。

選択すると、代替変数にはアンパサンド(&)が先頭に付きます。例:

&CurrentScenario

3. 「OK」をクリックします。

メンバーとしてのユーザー変数の選択

ユーザー変数はフォームでフィルタとして機能し、ユーザーは部署などの特定のメンバーのみに集中できます。ユーザー変数をフォームに関連付けるには、ユーザー変数を作成する必要があります。[ユーザー変数の管理](#)を参照してください。

ユーザー変数でフォームを作成するとき、ユーザーはフォームを開く前に変数の値を選択する必要があります。たとえば、Division という名のユーザー変数を作成する場合、ユーザーはフォームに作業する前に除算を選択する必要があります。フォーム用に変数を初回に選択するときに、プリファレンスでこれを実行します。その後はプリファレンスまたはフォームで変数を更新できます。

フォームのユーザー変数を選択するには:

1. フォームを作成します([フォームの作成](#)を参照)。
2. 「メンバー選択」で、「変数」タブをクリックし、「ユーザー変数」を展開して、矢印を使用して「選択したメンバー」でユーザー変数を移動して、メンバーを選択するのと同じ方法でユーザー変数を選択します。

ユーザー変数が現在のディメンションに対して表示されます。たとえば、エンティティ・ディメンションのユーザー変数は次のように表示される可能性があります。

Division = [ユーザー変数]

選択すると、ユーザー変数には先頭にアンパサンドが付きます。例:

子孫(含む) (&Division)

3. 「OK」をクリックします。

UDA のメンバーとしての選択

フォームのメンバーを、ユーザー定義属性(UDA)として定義した共通属性に基づいて選択できます。UDA をフォームに関連付けるには、UDA を作成する必要があります。[UDA の操作](#)を参照してください。

UDA を使用してフォームを作成すると、その UDA に割り当てられているメンバーが、フォームに動的に追加されます。たとえば、「新製品」と呼ばれる UDA を作成し、この UDA を製品ディメンションの階層にある新製品に割り当てた場合、フォームでは、実行時に新製品が自動的に表示されます。

フォームの UDA を選択するには:

1. フォームを作成します([フォームの作成](#)を参照)。
2. 「メンバー選択」で、「変数」タブをクリックし、「UDA」を展開して、矢印を使用して「選択したメンバー」で UDA を移動して、メンバーを選択するときと同じように UDA を選択します。

UDA は現在のディメンションに対してのみ表示されます。選択すると、UDA には先頭に UDA が付きます。例:

UDA (新製品)

3. 「OK」をクリックします。

EPM Cloud の環境の接続

次も参照:

- [EPM Cloud 環境の接続について](#)
- [EPM Cloud 接続を移行する際の考慮事項](#)
- [他の EPM Cloud 環境への接続の作成、編集および削除](#)
- [外部 Web サービスへの接続](#)
- [外部接続の詳細設定オプションの指定](#)
- [EPM Cloud 環境間のナビゲート](#)
- [他の EPM Cloud 環境にアクセスするためのナビゲーション・フローのカスタマイズ](#)
- [接続された環境を統合するためのダイレクト URL の使用](#)

EPM Cloud 環境の接続について

概要

サービス管理者は、次のタイプの複数の EPM Cloud 環境を接続できます。

- Account Reconciliation
- Enterprise Profitability and Cost Management
- Financial Consolidation and Close
- フリーフォーム
- Narrative Reporting
- Planning
- Planning モジュール
- Profitability and Cost Management
- Sales Planning
- Strategic Workforce Planning
- Tax Reporting

サービス管理者が接続を設定すると、EPM Cloud 環境全体に対するアクセス権を持つユーザーは、1 回のログインで単一のアクセス・ポイントから複数の環境間をナビゲートできるようになります。フォームやダッシュボードなど、複数の環境からのアーティファクトについても、ナビゲーション・フローのクラスター内またはカード上のタブ内で混合できます。ターゲット環境に含まれるアーティファクトへのアクセス権はユーザーの役割によって決まります。

 ノート:

Oracle Analytics Cloud Enterprise Edition または Professional Edition 5.6 から EPM Cloud プラットフォームに直接接続することもできます(両方のサービスを使用している場合)。接続を構成した場合は、Oracle Analytics Cloud の EPM Cloud ビジネス・プロセスからデータをビジュアル化できます。Oracle Analytics Cloud でビジュアライゼーションおよびダッシュボードを作成するために、メタデータ・リポジトリ(RPD)ファイルで EPM データをモデル化する必要はありません。詳細は、Oracle Analytics Cloud ドキュメントを参照してください。

また、Oracle NetSuite Account Reconciliation および Oracle NetSuite Planning and Budgeting を接続できます。

接続できる環境

ソース環境とは、接続の作成元となる環境です。ターゲット環境とは、ソース環境から接続する環境です。

次のソース環境を接続できます(これらの環境はターゲット環境にすることもできます):

- Enterprise Profitability and Cost Management
- フリーフォーム
- Financial Consolidation and Close
- Oracle NetSuite Planning and Budgeting
- Planning
- Planning モジュール
- Sales Planning
- Strategic Workforce Planning
- Tax Reporting

また、ソース環境は次のターゲット環境に接続できます(これらの環境はソース環境にすることはできません)。

- Account Reconciliation
- Narrative Reporting
- Oracle NetSuite Account Reconciliation
- Profitability and Cost Management

他の EPM Cloud 環境に接続する方法

- 「ナビゲータ」メニューでソース環境とターゲット環境間を切り替えます。[EPM Cloud 環境間のナビゲート](#)を参照してください。
- ソース環境のナビゲーション・フローをカスタマイズして、ホーム・ページから他のターゲット環境のクラスタ、カードおよびアーティファクトにアクセスできるよ

うにします。他の EPM Cloud 環境にアクセスするためのナビゲーション・フローのカスタマイズを参照してください。

- ダイレクト URL を使用して、接続された環境をシームレスに統合します。接続された環境を統合するためのダイレクト URL の使用を参照してください。

考慮事項

- サービス管理者のみが環境間接続を作成します。
ユーザーがナビゲーション・リンクをクリックすると、リンク先の環境が開きます。リンク先の環境内でのアクセスは、ユーザーに割り当てられた事前定義済の役割とアクセス権限(存在する場合)によって決まります。
- 環境間をシームレスにナビゲートするためには、環境間のナビゲーション・フローが設定されているすべての環境インスタンスが同じアイデンティティ・ドメインに属している必要があります。

ノート:

ターゲットとソースの環境インスタンスが同じアイデンティティ・ドメインに属していない場合は、それらのインスタンス間の接続を確立できません。

- サービス管理者が、企業の SSO (アイデンティティ・プロバイダ)資格証明を使用して環境間接続を構成することはできません。
環境が SSO 用に構成されている場合は、環境間接続を構成するサービス管理者に、アイデンティティ・ドメイン資格証明が保持されている必要があります。アイデンティティ・ドメイン資格証明によるサインインの有効化を参照してください。
- 特定のコース・ケース・シナリオでは、テスト環境と本番環境の間で環境間接続を移行すると、問題が発生することがあります。詳細は、[EPM Cloud 接続を移行する際の考慮事項](#)を参照してください。
- 環境間接続でバニティ URL はサポートされていません。

トラブルシューティング

環境の接続中の一般的なエラーを修正する方法の詳細は、*Oracle Enterprise Performance Management Cloud オペレーション・ガイド*のナビゲーション・フローに関する問題の処理を参照してください。

ビデオ

目的

EPM Cloud ワークフローをカスタマイズする方法を学習するには、このビデオをご覧ください。

視聴するビデオ



概要: EPM Cloud ビジネス・プロセスを統合するためのナビゲーション・フローの構成

EPM Cloud 接続を移行する際の考慮事項

オラクル社では、サービス管理者が環境の接続などの新機能をテスト環境で試してから本番環境に移行することが一般的であると認識しています。ただし、そうすると、移行後に問題

が発生する可能性があります。ここでは、知っておく必要があるユース・ケース・シナリオをいくつか説明します。

次のシナリオでは、Financial Consolidation and Close および Planning の環境があることが前提となります。

ユースケース・シナリオ 1: テストから本番へ

テスト環境の接続を本番環境に移行する場合、テスト環境で定義された接続が対応する本番環境を指すように変更されていることを確認してください。

たとえば、サービス管理者が Planning と Financial Consolidation and Close のテスト環境間の接続を定義したとします。その後、サービス管理者はこの接続を使用して、Financial Consolidation and Close のカードを参照するナビゲーション・フローを Planning 内に構築します。サービス管理者が Planning テスト環境の移行のために作成するスナップショットには、Financial Consolidation and Close テスト環境への接続を含む、接続およびナビゲーション・フローが含まれます。

このスナップショットを Planning 本番環境に移行すると、Planning には Financial Consolidation and Close テスト環境への不要な接続が含まれることとなります。環境の移行前または移行後に、不要な接続を、対応する本番環境を指すように手動で変更する必要があります。

ユースケース・シナリオ 2: 本番から本番へまたはテストからテストへ

このシナリオでは、警告する点はありません。

ユースケース・シナリオ 3: 本番からテストへ

このシナリオでは、サービス管理者が問題を解決するためにスナップショットを本番環境からテスト環境に移行しようとしている可能性があります。テスト環境で作成された接続はまだ本番環境を指しているため、サービス管理者がテスト環境を指すように接続を変更することが重要です。テスト環境に本番インスタンスを指す接続があると、本番環境が誤って改ざんされる可能性があります。

他の EPM Cloud 環境への接続の作成、編集および削除

他の EPM Cloud 環境への接続を作成する前に、接続するソースとターゲットの環境に対するアクセス権があることを確認してください。また、接続する他の環境の URL および各環境のログイン詳細(サービス管理者としてのユーザー ID とパスワードなど)も必要です。

接続を作成、編集、複製および削除するには:

1. ソース環境にログインします。
2. ホーム・ページから、「ツール」、「接続」の順にクリックします。
3. 次のいずれかの操作を選択します。
 - 接続を追加するには:
 - a. 「接続の管理」ページで、「作成」をクリックします。
 - b. 接続を作成するためのプロバイダの選択ページで、追加するターゲット環境を選択します。

- c. ターゲット環境の接続詳細を入力します。
 - 「**プロバイダの変更**」をクリックして、別のターゲット環境を選択します。
 - 「**接続名**」に、このナビゲーション・リンクの名前を入力します。例:
Consolidation Application。
 - オプションで、リンクの説明を入力します。
 - 「**URL**」に、ターゲット環境インスタンスの URL (http(s)://your-target-host-url.com など)を入力します。ターゲット環境インスタンスにサインインするには、通常、この URL を使用することになります。
 - 「**サービス管理者**」および「**パスワード**」を使用して、サービス管理者の資格証明を指定します。

 **ノート:**

- * この資格証明は、ナビゲーション・リンクの定義と検証にのみ使用されます。ユーザーがログインしてターゲット環境にアクセスするには、それぞれ独自の役割およびアクセス権が適用されます。
- * 他の EPM Cloud 環境に接続する場合は、ユーザー名にドメイン名の接頭辞を付けないでください。ただし、他の外部 Web サービスに接続する場合は、引き続きドメイン名が必要です。外部 Web サービスへの接続を参照してください。

- 「**ドメイン**」フィールドは、入力した URL に基づいて自動的に入力されます。URL にドメインがない場合は、「**ドメイン**」フィールドを空のままにしておきます。
- d. 「**検証**」をクリックします。
- e. 検証に成功したら、「**保存して閉じる**」をクリックします。
- 接続を編集するには:
 - a. 「**接続の管理**」ページで、接続の名前をクリックします。
 - b. 接続の詳細を編集します。

 **ノート:**

新規サービス・タイプに接続するように URL を編集すると、ナビゲーション・フローが破損する可能性があります。異なるサービスに接続する必要がある場合は、かわりに新しい接続を作成することをお勧めします。

- c. 「**検証**」をクリックします。
- d. 検証に成功したら、「**保存して閉じる**」をクリックします。
- 接続を複製するには:

- a. 「**接続の管理**」ページで、複製する接続の横にある「**アクション**」列の…をクリックします。
 - b. 「**複製**」をクリックします。
 - c. 複製する接続の名前を入力し、「**OK**」をクリックします。
- 接続を削除するには:
 - a. 「**接続の管理**」ページで、削除する接続の横にある「**アクション**」列の…をクリックします。
 - b. 「**削除**」をクリックします。

ターゲット環境が EPM Cloud ソース環境に接続されている場合は、ソース環境の「**ナビゲータ**」メニューの「**自分の接続**」ペインにリストされます。「**ナビゲータ**」メニューの「**自分の接続**」ペインでは、環境間を移動できます。[EPM Cloud 環境間のナビゲート](#)を参照してください。

トラブルシューティング

トラブルシューティングのサポートは、*Oracle Enterprise Performance Management Cloud オペレーション・ガイド*の[ナビゲーション・フローに関する問題の処理](#)を参照してください。

外部 Web サービスへの接続

サービス管理者はまた、外部 Web サービスからのデータの読み取りや外部 Web サービスへの書き込みのために外部 Web サービスに接続できます。

この接続を Groovy スクリプトで参照または使用して、Groovy スクリプトと外部 HTTP/HTTPS リソース間に通信リンクを作成できます。この接続を Groovy スクリプトで使用方法の詳細および例は、EPM Groovy オブジェクト・モデルの [Connection](#) および [HttpRequest](#) オブジェクトについて、[Java API ドキュメント](#)を参照してください。

ノート:

「**その他の Web サービス・プロバイダ**」接続タイプは、Groovy ルールを作成可能なビジネス・プロセスでのみ使用できます。[Oracle Enterprise Performance Management Cloud](#)、[Groovy ルール Java API リファレンス](#)を参照してください。

外部 Web サービスへの接続を作成する前に、接続する Web サービスへのアクセス権があることを確認する必要があります。場合によっては Web サービスの URL およびログイン詳細も必要です。

外部 Web サービスへの接続を作成するには:

1. ソース環境にログインします。
2. ホーム・ページから「**ツール**」をクリックして、次に「**接続**」をクリックします。
3. 「**接続の管理**」ページで、「**作成**」をクリックします。

4. 「その他の Web サービス・プロバイダ」をクリックします。
5. 接続名および接続の説明を入力します。
6. ターゲット接続の URL を入力します。
7. URL の詳細設定オプションを必要に応じて入力します。

 ノート:

オプションの詳細設定オプションでは、外部接続を定義するときに問合せまたはヘッダー・パラメータを指定できます。[外部接続の詳細設定オプションの指定](#)を参照してください。

8. 必要に応じて、接続のユーザーおよびパスワード・ログイン資格証明を入力します。Oracle Fusion Cloud EPM サービスへの接続など、場合によってはユーザー名の前にドメイン名を付ける必要があります(例: <アイデンティティ・ドメイン>.<ユーザー名>)。

EPM Cloud REST API の基本認証を理解するための説明およびアイデンティティ・ドメインの検索手順は、*Enterprise Performance Management Cloud REST API* の基本認証 - クラシックおよび OCI を参照してください。
9. 「保存して閉じる」をクリックします。

外部接続の詳細設定オプションの指定

オプションの詳細設定オプションでは、外部接続を定義するときに問合せまたはヘッダー・パラメータを指定できます。

 ノート:

外部接続の問合せパラメータを定義する機能は、Groovy ルールを作成可能なビジネス・プロセスでのみ使用できます。[Oracle Enterprise Performance Management Cloud](#)、[Groovy ルール Java API リファレンス](#)を参照してください。

外部接続の詳細設定オプションを指定するには:

1. 外部接続を作成するか、既存の外部接続をオープンします。
[外部 Web サービスへの接続](#)を参照してください。
2. 接続の詳細を入力し、「**詳細設定オプションを表示**」をクリックします。
3. 次のように問合せ詳細を指定します。
 - **+**: 問合せの追加
 - **X**: 問合せの削除
 - **タイプ**: 「ヘッダー」または「パラメータ」を選択します。

ヘッダーでは、この接続に対して行われるすべてのリクエストで送信されるデフォルト・ヘッダーを設定します。**パラメータ**では、この接続に対して行われるすべてのリクエストで送信されるデフォルトの問合せパラメータを設定します。

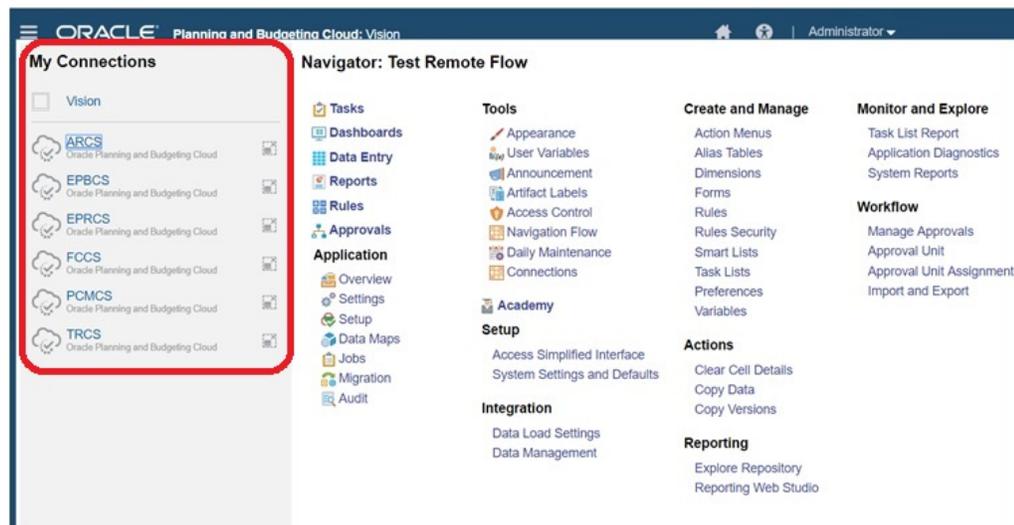
- **保護**: 選択すると、「値」フィールドに入力された値が暗号化されます。行の「保護」チェック・ボックスをクリアすると、値が削除されます。

保護するヘッダーの例としては、ベアラー認証をサポートする外部 Web サービスのベアラー・トークン、認証に API キーをサポートする外部 Web サービスの API キー問合せパラメータがあります。

- **名前**: ヘッダーまたは問合せパラメータの名前を入力します。
- **値**: ヘッダーまたは問合せパラメータの値を入力します。

EPM Cloud 環境間のナビゲート

サービス管理者が他の EPM Cloud 環境への接続を作成したら、接続が「ナビゲータ」メニューの「自分の接続」ペインにリストされます。



ここで環境間を切り替えることができます。他の環境を開くためには、それらの環境へのアクセス権が必要です。アーティファクトは、ユーザーの役割に基づいてアクセスできます。

別の Oracle Enterprise Performance Management Cloud 環境を開くには:

1. ホーム・ページで、「ナビゲータ」をクリックします。
2. 環境が接続され、自分にそれらの環境へのアクセス権がある場合は、接続された環境のリストが「自分の接続」ペインに表示されます。環境をクリックして開きます。

 ノート:

環境名の右側にあるアイコンをクリックすると、その環境が新しいウィンドウで開きます。

他の EPM Cloud 環境にアクセスするためのナビゲーション・フローのカスタマイズ

ビジネス・プロセス・インタフェースをカスタマイズして、ソース環境のホーム・ページから他の EPM Cloud 環境にアクセスできます。たとえば、他の EPM Cloud 環境からのアーティファクト(フォームやレポートなど)をホーム・ページに追加できます。ナビゲーション・フローをカスタマイズして、これらのアーティファクト(カードと呼ぶ)をクラスタにグループ化できます。ターゲット EPM Cloud 環境のクラスタおよびカードを、ソース EPM Cloud 環境のナビゲーション・フローに直接追加できます。ナビゲーション・フロー・デザイナーを使用してカードをカスタマイズし、それぞれ異なる環境からのアーティファクトを示すタブ形式のページで構成することもできます。

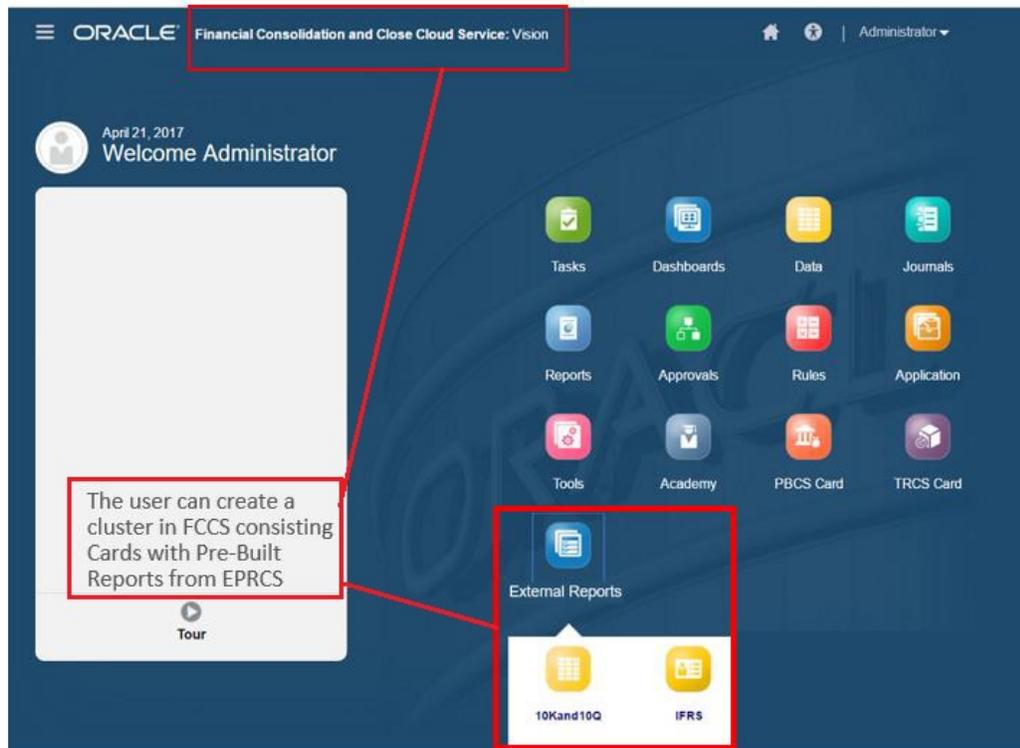
次の2つのユース・ケースでは、他の EPM Cloud 環境にアクセスできるようにナビゲーション・フローをカスタマイズする方法を詳しく説明しています:

- [他の EPM Cloud 環境からのカードのクラスタへのグループ化](#)
- [複数 EPM Cloud 環境からのタブのあるカードの構成](#)

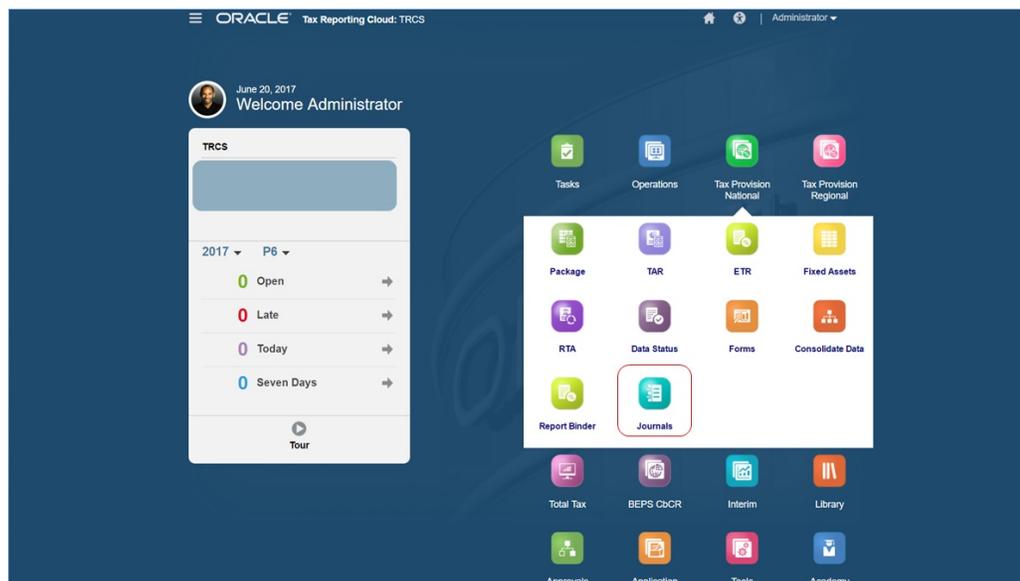
ナビゲーション・フローの設計についてさらに学習するには、カスタム・ナビゲーション・フローの設計を参照してください。

他の EPM Cloud 環境からのカードのクラスタへのグループ化

様々な EPM Cloud 環境のカードをクラスタにグループ化して、ソース環境のホーム・ページからアクセスできるようにすることができます。たとえば、Narrative Reporting からの事前作成済の外部レポートのカードで構成されるクラスタを、Financial Consolidation and Close 内に作成できます。



複数の環境のカードをソース環境の同一クラスタ内にも含めることもできます。たとえば、Tax Reporting ユーザーは、Tax Reporting から移動せずに Financial Consolidation and Close から「仕訳」アイコンを起動できます。



ナビゲーション・フローをカスタマイズして、クラスタを作成し、クラスタにカードを追加します。

ナビゲーション・フローの全般情報は、カスタム・ナビゲーション・フローの設計を参照してください。

他の EPM Cloud 環境のカードからなるクラスタを作成するには:

1. 「ナビゲーション・フロー」ページを開き、ナビゲーション・フローを作成するか、既存のナビゲーション・フローを編集します。

ノート:

ナビゲーション・フローを作成するには、最初に既存のナビゲーション・フローを選択し、そのコピーを作成する必要があります。その後、複製したナビゲーション・フローの詳細を編集して保存します。

- a. 「ツール」、「ナビゲーション・フロー」の順にクリックします。
- b. ナビゲーション・フローを作成するには、コピーするナビゲーション・フローを選択し、ページの右上隅にある  をクリックして、「コピーの作成」を選択します。ナビゲーション・フローの名前を入力し、「OK」をクリックします。

ノート:

新しいフローは、サービス管理者がアクティブにするまで「非アクティブ」に設定されます。ナビゲーション・フローをアクティブ化または非アクティブ化するには、「アクティブ」列で「アクティブ」または「非アクティブ」をクリックします。一度にアクティブにできるナビゲーション・フローは1つのみです。

- c. 既存のナビゲーション・フローを編集するには、編集するナビゲーション・フローの名前をクリックします。

ノート:

編集できるのは、ナビゲーション・フローがアクティブでない場合のみです。編集しようとするナビゲーション・フローがアクティブな場合は、「非アクティブ」とマークしてから編集します。

2. クラスタを作成する、または既存のクラスタを追加するには:
 - a. まだ開いていない場合は、「ナビゲーション・フロー」ページから、クラスタを追加するナビゲーション・フローの名前をクリックします。
 - b. 新しいクラスを作成するには、カードまたはクラスタを右クリック(または  をクリック)して「クラスタの追加」をクリックし、クラスタの詳細を入力または選択してから、クラスタのアイコンを選択します。
 - c. 別の環境の既存のクラスタを追加するには、カードまたはクラスタを右クリック(または「既存のカード/クラスタの追加」をクリック)し、「自分の接続」でターゲット環境を選択して、ナビゲーション・フローに追加するクラスタを選択します。
次の点に注意してください。

- Narrative Reporting および Profitability and Cost Management で、「**既存のカード/クラスタの追加**」オプションを使用して直接クラスタを選択することはできません。
- 別のナビゲーション・フローまたは別の環境から追加されるクラスタには、ソース・ナビゲーション・フローで定義されたローカライズされたラベルが表示されます。ナビゲーション・フローでのクラスタのラベルを更新するには、ホーム・ページで「**ツール**」、「**アーティファクト・ラベル**」の順にクリックします。

アーティファクト・ラベルの指定を参照してください。

3. 次のいずれかのオプションを使用して、クラスタに含めるカードを選択します:

- クラスタに追加するカードに移動します。カードが別の環境に含まれている場合は、最初に「**自分の接続**」で環境を選択してから、その環境内のカードにナビゲートします。次のいずれかのオプションを使用して、カードをクラスタに割り当てます:
 - 「**順序**」列で、移動するカードの右側にある  をクリックします。クラスタを選択し、「**OK**」をクリックします。
 - カードの名前をクリックしてカードの詳細を表示し、「**クラスタ**」でカードのクラスタを選択して「**OK**」をクリックします。
- 新しいカードを追加するクラスタに移動します。クラスタが別の環境に含まれている場合は、最初に「**自分の接続**」で環境を選択してから、その環境内のクラスタに移動します。クラスタを右クリック(または  をクリック)して**カードをクラスタに追加**をクリックし、オプションを選択します:
 - 既存のカードを選択、または別のクラスタから選択したクラスタに既存のカードを追加するには、「**既存のカードの追加**」を選択します。
 - 新しいカードを選択したクラスタに追加するには、「**カードの追加**」を選択し、カードの詳細を入力します。

ノート:

カードまたはクラスタが別のナビゲーション・フローからすでに参照されている場合、カードをクラスタに追加することはできません。

カードがクラスタの子としてリストに表示されます。必要に応じて、カードの横にある上矢印と下矢印を使用して、クラスタ内でカードの順序を変更します。

4. 「**保存して閉じる**」をクリックします。

設計時の変更を表示するには、ナビゲーション・フローをアクティブにしてリロードする必要があります。ナビゲーション・フローをリロードするには、下矢印をクリックします。次に、「**設定およびアクション**」メニューで「**ナビゲーション・フローのリロード**」をクリックします。

Settings and Actions

[Reload Navigation Flow](#)

[Downloads...](#)

[Help...](#)

[Cloud Customer Connect](#)

[Provide Feedback...](#)

[Oracle Support...](#)

[About...](#)

[Sign Out](#)

トラブルシューティング

ナビゲーション・フローのアクティブ化およびリロード後に、参照されるアーティファクトが表示されない場合は、*Oracle Enterprise Performance Management Cloud* オペレーション・ガイドのナビゲーション・フローに関する問題の処理を参照してください。

複数 EPM Cloud 環境からのタブのあるカードの構成

ナビゲーション・フローのカードをカスタマイズし、それぞれ異なる環境からのアーティファクトを示すタブ形式のページで構成することもできます。たとえば、**Planning** ユーザーは、「収益」アイコンをクリックして、**Narrative Reporting** からのレポートを表示する水平タブを含むカードを起動できます。

The screenshot displays the Oracle Planning and Budgeting Cloud (EPBCS) interface. At the top, there are navigation icons for Revenue, Expense, Balance Sheet, Cash Flow, and Analysis. Below these, a horizontal tab bar is visible, with 'Income Statement Trend' selected and highlighted by a red box. The main content area shows the 'Income Statement Trend' report for Vision Operations, including a table with columns for Actual and Plan values across months and a YTD total.

	Actual		Plan										YTD
	Jan	Feb	Mar	Apr	May	Jun	Jul	Aug	Sep	Oct	Nov	Dec	
Net Revenue	125,017	111,561	140,997	141,936	142,904	157,731	148,385	110,093	182,352	142,464	142,627	139,291	1,685,358
Cost of Sales	81,013	71,651	89,685	92,372	87,488	106,662	99,741	70,066	117,467	92,232	91,144	89,085	1,088,607
Gross Profit	44,003	39,910	51,312	49,564	55,416	51,069	48,644	40,027	64,885	50,232	51,483	50,206	596,751
Total Compensation	8,431	7,465	8,992	9,828	8,537	11,356	10,479	7,326	12,595	9,989	9,611	9,419	114,029
Travel	625	535	838	606	924	642	709	567	814	596	702	678	8,235
General Supplies	475	406	626	465	686	496	539	425	615	452	527	509	6,222
Telecommunications	826	715	1,008	866	1,056	957	970	735	1,139	865	931	905	10,973
Equipment Maintenance	1,945	1,693	2,305	2,094	2,368	2,344	2,318	1,732	2,757	2,117	2,215	2,157	26,047
Fees Outside Services	12,979	12,012	15,154	15,167	14,328	16,895	16,082	11,618	19,287	15,084	15,065	14,704	178,376
Employee HP	858	741	1,090	866	1,191	942	988	768	1,151	860	963	933	11,350

ナビゲーション・フローをカスタマイズして、表形式のカードを作成できます。

ナビゲーション・フローの全般情報は、カスタム・ナビゲーション・フローの設計を参照してください。

他の EPM Cloud 環境のタブおよびサブ・タブからなるカードを構成するには:

1. 「ナビゲーション・フロー」ページを開き、ナビゲーション・フローを作成するか、既存のナビゲーション・フローを編集します。

ノート:

ナビゲーション・フローを作成するには、最初に既存のナビゲーション・フローを選択し、そのコピーを作成する必要があります。その後、複製したナビゲーション・フローの詳細を編集して保存します。

- a. 「ツール」、「ナビゲーション・フロー」の順にクリックします。
- b. ナビゲーション・フローを作成するには、コピーするナビゲーション・フローを選択し、ページの右上隅にある  をクリックして、「コピーの作成」を選択します。ナビゲーション・フローの名前を入力し、「OK」をクリックします。

ノート:

新しいフローは、サービス管理者がアクティブにするまで「非アクティブ」に設定されます。ナビゲーション・フローをアクティブ化または非アクティブ化するには、「アクティブ」列で「アクティブ」または「非アクティブ」をクリックします。一度にアクティブにできるナビゲーション・フローは1つのみです。

- c. 既存のナビゲーション・フローを編集するには、編集するナビゲーション・フローの名前をクリックします。
2. 様々なターゲット環境からのアーティファクトからなるタブ形式のカードを追加します。
 - a. 別の環境から既存のカードを追加する場合は、ナビゲーション・フロー・ページで、カードまたはクラスタを右クリック(または  をクリック)して「既存のカード/クラスタの追加」をクリックし、「自分の接続」でターゲット環境を選択し、ナビゲーション・フローに追加するカードを選択します。

次の点に注意してください。

 - Narrative Reporting および Profitability and Cost Management で、「既存のカード/クラスタの追加」オプションを使用して直接カードを選択することはできません。
 - 別のナビゲーション・フローまたは別の環境から追加されるカードには、ソース・ナビゲーション・フローで定義されたローカライズされたラベルが表示されます。ナビゲーション・フローでのカード・ラベルを更新するには、ホーム・ページで「ツール」、「アーティファクト・ラベル」の順にクリックします。

アーティファクト・ラベルの指定を参照してください。
 - b. 表形式のカードをナビゲーション・フローに追加するには、「ナビゲーション・フロー」ページで、カードまたはクラスタを右クリック(または  をクリック)して「カードの追加」をクリックし、カードの詳細を選択します:

- **名前:** カードのラベルを入力します。
 - **表示可能:** ホーム・ページ上でカードをユーザーに表示するかどうかを選択します。
 - **クラスタ:** クラスタが存在する場合、カードのクラスタを選択するか、「なし」を選択します。
 - **アイコン:** 作成するカードについて表示するアイコンを選択します。アイコン・ライブラリで提供されている、使用可能なアイコンから選択してください。
 - **内容:** 次のオプションから選択します:
 - **ページ・タイプ:** 複数ページ(表形式)のフォーマットを選択します。
 - **向き:** 「垂直」または「水平」を選択します。
3. タブとサブ・タブを表形式のカードに追加します。
- a. 既存のタブを追加するには、タブを右クリックして「**既存タブの追加**」をクリック(または「**既存タブの追加**」ボタンをクリック)し、オブジェクト・ライブラリからタブを選択します。
 - b. 新しいタブを追加するには、タブを右クリックし、「**新規タブの追加**」をクリック(または「**新規タブの追加**」ボタンをクリック)して、タブの詳細を編集します。
 - c. タブを右クリックして「**新規サブ・タブの追加**」または「**既存サブ・タブの追加**」をクリック(または「**新規サブ・タブの追加**」または「**既存サブ・タブの追加**」ボタンをクリック)し、オブジェクト・ライブラリからサブ・タブを選択するか、サブ・タブの詳細を編集します。
 - d. 「**アーティファクト**」で、 をクリックして、アーティファクト・ライブラリでアーティファクトを選択します。たとえば、アーティファクトがフォームである場合、アーティファクトのリストから特定のフォームを選択します。使用可能なアーティファクトには、フォーム、ダッシュボード、レポートがあります。別の環境からアーティファクトを選択するには、「**自分の接続**」でターゲット環境を選択し、サブ・タブに追加するアーティファクトを選択します。
 - e. カードが完成するまで、タブとサブ・タブの追加を繰り返します。
4. 「**保存して閉じる**」をクリックします。

ノート:

- カードに複数のタブまたはサブ・タブがある場合、同じセッションで次にそのカードにアクセスすると、ユーザーが前回アクセスしたタブが開きます。ユーザーがログアウトして再度ログインした場合には、デフォルトのタブが表示されます。
- 別のナビゲーション・フローまたは別の環境から追加されるタブまたはサブ・タブには、ソース・ナビゲーション・フローで定義されたローカライズされたラベルが表示されます。ナビゲーション・フローでのタブ・ラベルを更新するには、ホーム・ページで「**ツール**」、「**アーティファクト・ラベル**」の順にクリックします。

アーティファクト・ラベルの指定を参照してください。

設計時の変更を表示するには、ナビゲーション・フローをリロードする必要があります。ナビゲーション・フローをリロードするには、下矢印をクリックします。次に、「設定およびアクション」メニューで「ナビゲーション・フローのリロード」をクリックします。

Settings and Actions

[Reload Navigation Flow](#)

[Downloads...](#)

[Help...](#)

[Cloud Customer Connect](#)

[Provide Feedback...](#)

[Oracle Support...](#)

[About...](#)

[Sign Out](#)

ナビゲーション・フローのリロード後に参照されるアーティファクトが表示されない場合は、*Oracle Enterprise Performance Management Cloud* オペレーション・ガイドのナビゲーション・フローに関する問題の処理を参照してください。

接続された環境を統合するためのダイレクト URL の使用

Oracle ERP Cloud などの他のソース・システムでは、URL を埋め込んで、接続された Oracle Enterprise Performance Management Cloud 環境内のカード、タブおよびサブタブに含まれるアーティファクトに直接リンクできます。

Oracle ERP Cloud などの他のクラウド環境では、ダイレクト URL リンクを使用して、フォーム、ダッシュボード、インフォレット、レポートなどの接続された EPM Cloud コンテンツを開きます。EPM Cloud と他のシステムとの統合をシームレスにするために、接続された EPM Cloud ビジネス・プロセス内のアーティファクトの一意の URL をコピーできます。次の 2 つのいずれかの方法で一意の URL をコピーできます：

- ビジネス・プロセスのアーティファクトの個々の URL をコピーします。[個々の URL のコピー](#)を参照してください。
- ビジネス・プロセスのすべての URL を CSV ファイルにエクスポートし、一意の URL を見つけてコピーします。[CSV ファイルへのすべての URL のエクスポート](#)を参照してください。

ビデオ

目的

直接リンクを使用して、ERP Cloud や NetSuite などの他のシステムに EPM Cloud のコンテンツを埋め込む方法を学習します。

視聴するビデオ



[概要: 直接リンクを使用したコンテンツの埋込み](#)

個々の URL のコピー

Oracle Enterprise Performance Management Cloud ビジネス・プロセスのアーティファクト (ダッシュボード、フォーム、インフォレットおよびレポート)の一意の URL をコピーするには、アーティファクトのリスト・ページにある「URL のコピー」オプションを使用します。

Note:

すべてのユーザーが「URL のコピー」を使用できるため、アーティファクトへの直接 URL を共有できます。ただし、ターゲット・アーティファクトへのアクセス権を持つユーザーのみが、ターゲット・アーティファクトに対してアクションを実行できます。

アーティファクトの一意の URL をコピーするには:

1. ホーム・ページから、アーティファクトのリスト・ページを開きます。
たとえば、「ダッシュボード」、「データ」、「インフォレット」または「レポート」をクリックします。
2. リスト・ページから、アーティファクトの横にある・・・をクリックし、「URL のコピー」を選択します。
3. 「URL のコピー」ダイアログに、アーティファクトの一意の URL が表示されます。URL をコピーします。

コピーされた URL が無効になる場合があります。無効な URL の考えられる理由には、次のものがあります:

- アーティファクトが削除されています。
- アーティファクトへのユーザー・アクセスが取り消されています。
- アーティファクトが名前変更され、URL が破損しています。
- アーティファクトが新規フォルダに移動して新しい URL になり、URL が破損しています。

CSV ファイルへのすべての URL のエクスポート

「URL のエクスポート」オプションを使用して、接続された Oracle Enterprise Performance Management Cloud ビジネス・プロセス内の各カード、タブまたはサブタブに一意の URL を提供する CSV ファイルを作成します。URL はナビゲーション・フロー別およびクラスター別にグループ化されるため、CSV ファイルで URL を簡単に見つけることができます。CSV ファイルをテキスト・エディタまたは Microsoft Excel で開き、関連する URL をソース・システム・ページに埋め込んで、EPM Cloud への起動ポイントとして使用できます。

EPM Cloud の URL を CSV ファイルにエクスポートするには:

1. EPM Cloud 環境にログインします。
2. ホーム・ページで、ユーザー名の横にある下矢印(画面の右上隅)をクリックします。

3. 「設定およびアクション」メニューで、「URL のエクスポート」、「保存」の順にクリックします。

ローカル・マシンのデフォルトのダウンロード・フォルダに CSV ファイルが保存されます。ファイル名は、たとえば、19_Feb_2021_13_15_38 Navigation Flow URLs.csv など、サーバーの現在の日時を使用して自動的に生成されます。ダウンロード・フォルダでファイルを見つけて、テキスト・エディタまたは Microsoft Excel で開きます。

エクスポートされた URL ファイルの表示

CSV ファイルには、ビジネス・プロセスのすべての URL がリストされます。各カード、タブ(垂直タブ)およびサブタブ(水平タブ)には一意の URL があります。メモ帳などのテキスト・エディタや Microsoft Excel に表示すると、カード、タブおよびサブタブごとに一意の URL が識別されるため、各アーティファクトの URL を簡単に見つけることができます。URL は、ナビゲーション・フロー別およびクラスタ別にグループ化されます。

Note:

カード、タブおよびサブタブにのみ URL があります。ナビゲーション・フローとクラスタには URL はありません。

Table 7-1 直接 URL エクスポート・ファイルのヘッダー

ヘッダー	説明
ナビゲーション・フロー名	たとえば、デフォルト、財務フローなど、ナビゲーション・フローの名前。
ステータス	たとえば、アクティブ、非アクティブなど、ナビゲーション・フローのステータス。
タイプ	たとえば、クラスタ、カード、タブ、サブタブなど、エントリのタイプ
名前	アーティファクトが含まれているクラスタ、カード、タブまたはサブタブの名前。アーティファクトを直接含まないクラスタまたはカードの場合、このエントリは空になります。
アーティファクト・タイプ	アーティファクトのタイプ。たとえば、フォーム、ダッシュボード、財務レポートおよび URL タイプのアーティファクト。
アーティファクト名	アーティファクトの名前、または URL タイプのアーティファクトの場合はターゲット・ページの直接 URL。
URL	これは、接続された環境の統合に使用する一意の URL です。

Caution:

直接 URL が表示される場合は、この URL を接続環境の統合に使用する一意の URL と混同しないでください。

Table 7-1 (Cont.) 直接 URL エクスポート・ファイルのヘッダー

ヘッダー	説明
表示可能	ホーム・ページでナビゲーション・フローのアーティファクトが、ユーザーまたはグループに表示されるかどうかを示します(たとえば、Y または N)。
役割/グループ	ナビゲーション・フローを表示できる役割またはグループ。ナビゲーション・フローがグローバルの場合は、すべてのユーザーが表示できます。
説明	ナビゲーション・フローの説明(提供されている場合)。

URL エクスポート・ファイルは、垂直棒またはパイプ(|)区切り文字で区切られた情報を提供します。メモ帳に表示された、次の直接 URL エクスポート・ファイルの例を参照してください:

```

1 Navigation Flow Name[Status]Type[Name]Artifact Type[Artifact Name]HomeURL[Visible]Role/Group[Description]
2 Dashboard 2.0 Test Inactive cluster Strategic Modeling Y Global Default Navigation Flow
3 Dashboard 2.0 Test Inactive card Model View | https://skcar261.usdv1.oraclecloud.com:10151/HyperionPlanning?EC_MV=Y&EC_MF=Dashboard2.0Test&EC_PAGE_ID=EFM_CA_20-EFM_CA_10151GlobalDefault Navigation Flow
4 Dashboard 2.0 Test Inactive card Consolidation View | https://skcar261.usdv1.oraclecloud.com:10151/HyperionPlanning?EC_MV=Y&EC_MF=Dashboard2.0Test&EC_PAGE_ID=EFM_CA_20-EFM_CA_10151GlobalDefault Navigation Flow
5 Dashboard 2.0 Test Inactive card Templates | https://skcar261.usdv1.oraclecloud.com:10151/HyperionPlanning?EC_MV=Y&EC_MF=Dashboard2.0Test&EC_PAGE_ID=EFM_CA_20-EFM_CA_10151GlobalDefault Navigation Flow
6 Dashboard 2.0 Test Inactive card Tasks | https://skcar261.usdv1.oraclecloud.com:10151/HyperionPlanning?EC_MV=Y&EC_MF=Dashboard2.0Test&EC_PAGE_ID=EFM_CA_20-EFM_CA_10151GlobalDefault Navigation Flow
7 Dashboard 2.0 Test Inactive card Dashboards | https://skcar261.usdv1.oraclecloud.com:10151/HyperionPlanning?EC_MV=Y&EC_MF=Dashboard2.0Test&EC_PAGE_ID=EFM_CA_20-EFM_CA_10151GlobalDefault Navigation Flow
8 Dashboard 2.0 Test Inactive card Infolets | https://skcar261.usdv1.oraclecloud.com:10151/HyperionPlanning?EC_MV=Y&EC_MF=Dashboard2.0Test&EC_PAGE_ID=EFM_CA_20-EFM_CA_10151GlobalDefault Navigation Flow
9 Dashboard 2.0 Test Inactive card Data | https://skcar261.usdv1.oraclecloud.com:10151/HyperionPlanning?EC_MV=Y&EC_MF=Dashboard2.0Test&EC_PAGE_ID=EFM_CA_20-EFM_CA_10151GlobalDefault Navigation Flow
10 Dashboard 2.0 Test Inactive card Reports | https://skcar261.usdv1.oraclecloud.com:10151/HyperionPlanning?EC_MV=Y&EC_MF=Dashboard2.0Test&EC_PAGE_ID=EFM_CA_20-EFM_CA_10151GlobalDefault Navigation Flow
11 Dashboard 2.0 Test Inactive tab Reports | https://skcar261.usdv1.oraclecloud.com:10151/HyperionPlanning?EC_MV=Y&EC_MF=Dashboard2.0Test&EC_PAGE_ID=EFM_CA_20-EFM_CA_10151GlobalDefault Navigation Flow
12 Dashboard 2.0 Test Inactive tab Financial Reports | https://skcar261.usdv1.oraclecloud.com:10151/HyperionPlanning?EC_MV=Y&EC_MF=Dashboard2.0Test&EC_PAGE_ID=EFM_CA_20-EFM_CA_10151GlobalDefault Navigation Flow
13 Dashboard 2.0 Test Inactive tab Documents | https://skcar261.usdv1.oraclecloud.com:10151/HyperionPlanning?EC_MV=Y&EC_MF=Dashboard2.0Test&EC_PAGE_ID=EFM_CA_20-EFM_CA_10151GlobalDefault Navigation Flow
14 Dashboard 2.0 Test Inactive card Rules | https://skcar261.usdv1.oraclecloud.com:10151/HyperionPlanning?EC_MV=Y&EC_MF=Dashboard2.0Test&EC_PAGE_ID=EFM_CA_20-EFM_CA_10151GlobalDefault Navigation Flow
15 Dashboard 2.0 Test Inactive card Approvals | https://skcar261.usdv1.oraclecloud.com:10151/HyperionPlanning?EC_MV=Y&EC_MF=Dashboard2.0Test&EC_PAGE_ID=EFM_CA_20-EFM_CA_10151GlobalDefault Navigation Flow
16 Dashboard 2.0 Test Inactive cluster Application | https://skcar261.usdv1.oraclecloud.com:10151/HyperionPlanning?EC_MV=Y&EC_MF=Dashboard2.0Test&EC_PAGE_ID=EFM_CA_20-EFM_CA_10151GlobalDefault Navigation Flow
17 Dashboard 2.0 Test Inactive card Overview | https://skcar261.usdv1.oraclecloud.com:10151/HyperionPlanning?EC_MV=Y&EC_MF=Dashboard2.0Test&EC_PAGE_ID=EFM_CA_20-EFM_CA_10151GlobalDefault Navigation Flow
18 Dashboard 2.0 Test Inactive card Settings | https://skcar261.usdv1.oraclecloud.com:10151/HyperionPlanning?EC_MV=Y&EC_MF=Dashboard2.0Test&EC_PAGE_ID=EFM_CA_20-EFM_CA_10151GlobalDefault Navigation Flow
19 Dashboard 2.0 Test Inactive card Valid Intersections | https://skcar261.usdv1.oraclecloud.com:10151/HyperionPlanning?EC_MV=Y&EC_MF=Dashboard2.0Test&EC_PAGE_ID=EFM_CA_20-EFM_CA_10151GlobalDefault Navigation Flow
20 Dashboard 2.0 Test Inactive sub tab Setup | https://skcar261.usdv1.oraclecloud.com:10151/HyperionPlanning?EC_MV=Y&EC_MF=Dashboard2.0Test&EC_PAGE_ID=EFM_CA_20-EFM_CA_10151GlobalDefault Navigation Flow
21 Dashboard 2.0 Test Inactive sub tab Reports | https://skcar261.usdv1.oraclecloud.com:10151/HyperionPlanning?EC_MV=Y&EC_MF=Dashboard2.0Test&EC_PAGE_ID=EFM_CA_20-EFM_CA_10151GlobalDefault Navigation Flow
22 Dashboard 2.0 Test Inactive card Data Exchange | https://skcar261.usdv1.oraclecloud.com:10151/HyperionPlanning?EC_MV=Y&EC_MF=Dashboard2.0Test&EC_PAGE_ID=EFM_CA_20-EFM_CA_10151GlobalDefault Navigation Flow
23 Dashboard 2.0 Test Inactive sub tab Data Integration | https://skcar261.usdv1.oraclecloud.com:10151/HyperionPlanning?EC_MV=Y&EC_MF=Dashboard2.0Test&EC_PAGE_ID=EFM_CA_20-EFM_CA_10151GlobalDefault Navigation Flow
24 Dashboard 2.0 Test Inactive sub tab Data Maps | https://skcar261.usdv1.oraclecloud.com:10151/HyperionPlanning?EC_MV=Y&EC_MF=Dashboard2.0Test&EC_PAGE_ID=EFM_CA_20-EFM_CA_10151GlobalDefault Navigation Flow
25 Dashboard 2.0 Test Inactive card Jobs | https://skcar261.usdv1.oraclecloud.com:10151/HyperionPlanning?EC_MV=Y&EC_MF=Dashboard2.0Test&EC_PAGE_ID=EFM_CA_20-EFM_CA_10151GlobalDefault Navigation Flow
26 Dashboard 2.0 Test Inactive card Cell Level Security | https://skcar261.usdv1.oraclecloud.com:10151/HyperionPlanning?EC_MV=Y&EC_MF=Dashboard2.0Test&EC_PAGE_ID=EFM_CA_20-EFM_CA_10151GlobalDefault Navigation Flow
    
```

URL エクスポート・ファイルを Microsoft Excel で表示するには:

1. Excel を開き、「データ」メニューをクリックします。
2. 「新しいクエリ」、「ファイルから」、「CSV から」の順にクリックします。
3. エクスポートした CSV ファイルを見つけて選択し、「インポート」をクリックします。新しいウィンドウに CSV ファイルのデータが表示されます。
4. CSV ファイルの最初の行をヘッダー行にするには、「編集」、「Use First Row as Headers」、「Close and Load」の順にクリックします。

結果の Excel ファイルは次の例のようになります:

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
	Navigation Flow Name	Status	Type	Name	Artifact Type	Artifact Name	URL	Visible	Role/Group	Description
1	Dashboard 2.0 Test	Inactive	cluster	Strategic Modeling				Y	Global	Default Navigation Flow
2	Dashboard 2.0 Test	Inactive	card	Model View			http://skcar261.usdv1.oraclecloud.com:10151/HyperionPlanning?EY	Y	Global	Default Navigation Flow
3	Dashboard 2.0 Test	Inactive	card	Consolidation View			http://skcar261.usdv1.oraclecloud.com:10151/HyperionPlanning?EY	Y	Global	Default Navigation Flow
4	Dashboard 2.0 Test	Inactive	card	Templates			http://skcar261.usdv1.oraclecloud.com:10151/HyperionPlanning?EY	Y	Global	Default Navigation Flow
5	Dashboard 2.0 Test	Inactive	card	Tasks			http://skcar261.usdv1.oraclecloud.com:10151/HyperionPlanning?EY	Y	Global	Default Navigation Flow
6	Dashboard 2.0 Test	Inactive	card	Dashboards			http://skcar261.usdv1.oraclecloud.com:10151/HyperionPlanning?EY	Y	Global	Default Navigation Flow
7	Dashboard 2.0 Test	Inactive	card	Infolets			http://skcar261.usdv1.oraclecloud.com:10151/HyperionPlanning?EY	Y	Global	Default Navigation Flow
8	Dashboard 2.0 Test	Inactive	card	Data			http://skcar261.usdv1.oraclecloud.com:10151/HyperionPlanning?EY	Y	Global	Default Navigation Flow
9	Dashboard 2.0 Test	Inactive	card	Reports			http://skcar261.usdv1.oraclecloud.com:10151/HyperionPlanning?EY	Y	Global	Default Navigation Flow
10	Dashboard 2.0 Test	Inactive	card	Reports			http://skcar261.usdv1.oraclecloud.com:10151/HyperionPlanning?EY	Y	Global	Default Navigation Flow
11	Dashboard 2.0 Test	Inactive	tab	Reports			http://skcar261.usdv1.oraclecloud.com:10151/HyperionPlanning?EY	Y	Global	Default Navigation Flow
12	Dashboard 2.0 Test	Inactive	tab	Financial Reports			http://skcar261.usdv1.oraclecloud.com:10151/HyperionPlanning?EY	Y	Global	Default Navigation Flow
13	Dashboard 2.0 Test	Inactive	tab	Documents			http://skcar261.usdv1.oraclecloud.com:10151/HyperionPlanning?EY	Y	Global	Default Navigation Flow
14	Dashboard 2.0 Test	Inactive	card	Rules			http://skcar261.usdv1.oraclecloud.com:10151/HyperionPlanning?EY	Y	Global	Default Navigation Flow
15	Dashboard 2.0 Test	Inactive	card	Approvals			http://skcar261.usdv1.oraclecloud.com:10151/HyperionPlanning?EY	Y	Global	Default Navigation Flow
16	Dashboard 2.0 Test	Inactive	cluster	Application				Y	Global	Default Navigation Flow
17	Dashboard 2.0 Test	Inactive	card	Overview			http://skcar261.usdv1.oraclecloud.com:10151/HyperionPlanning?EY	Y	Global	Default Navigation Flow
18	Dashboard 2.0 Test	Inactive	card	Settings			http://skcar261.usdv1.oraclecloud.com:10151/HyperionPlanning?EY	Y	Global	Default Navigation Flow
19	Dashboard 2.0 Test	Inactive	card	Valid Intersections			http://skcar261.usdv1.oraclecloud.com:10151/HyperionPlanning?EY	Y	Global	Default Navigation Flow
20	Dashboard 2.0 Test	Inactive	sub tab	Setup			http://skcar261.usdv1.oraclecloud.com:10151/HyperionPlanning?EY	Y	Global	Default Navigation Flow
21	Dashboard 2.0 Test	Inactive	sub tab	Reports			http://skcar261.usdv1.oraclecloud.com:10151/HyperionPlanning?EY	Y	Global	Default Navigation Flow
22	Dashboard 2.0 Test	Inactive	card	Data Exchange			http://skcar261.usdv1.oraclecloud.com:10151/HyperionPlanning?EY	Y	Global	Default Navigation Flow
23	Dashboard 2.0 Test	Inactive	sub tab	Data Integration			http://skcar261.usdv1.oraclecloud.com:10151/HyperionPlanning?EY	Y	Global	Default Navigation Flow
24	Dashboard 2.0 Test	Inactive	sub tab	Data Maps			http://skcar261.usdv1.oraclecloud.com:10151/HyperionPlanning?EY	Y	Global	Default Navigation Flow
25	Dashboard 2.0 Test	Inactive	card	Jobs			http://skcar261.usdv1.oraclecloud.com:10151/HyperionPlanning?EY	Y	Global	Default Navigation Flow
26	Dashboard 2.0 Test	Inactive	card	Cell Level Security			http://skcar261.usdv1.oraclecloud.com:10151/HyperionPlanning?EY	Y	Global	Default Navigation Flow

他の接続された環境に統合するカード、タブまたはサブタブの一意的 URL (URL 列にあります)を見つけてコピーします。URL ターゲットのみが開き、ターゲット・アーティファクトに

アクセスできるユーザーは、ターゲット・ビジネス・プロセス内で作業している場合と同じアクションを実行できます。

8

カスタム・ナビゲーション・フローの設計

ナビゲーション・フローを使用してビジネス・プロセス・インタフェースをカスタマイズします。ナビゲーション・フローによって、設計者は、役割またはグループがビジネス・プロセスと対話する方法を制御できます。

次も参照:

- [ナビゲーション・フローの理解](#)
- [ナビゲーション・フローの表示と操作](#)

ナビゲーション・フローの理解

ビジネス・プロセス設計者は、ナビゲーション・フローによって、各種の役割またはグループがビジネス・プロセスと対話する方法を制御できます。ナビゲーション・フロー・デザイナーを使用すると、ビジネス・プロセス・インタフェースをカスタマイズできます。たとえば、ホーム・ページに表示されるカードとクラスタの名前および表示順序を変更できます。カードを非表示にし、新しいカードを作成し、カードをクラスタにグループ化できます。カードに表示される垂直タブと水平タブをカスタマイズすることもできます。

ビデオ

目的	視聴するビデオ
接続された環境のワークフローのカスタマイズに関する概要を確認します。	 概要: EPM Cloud ビジネス・プロセスを統合するためのナビゲーション・フローの構成

関連トピック

- [ビジネス・プロセス・インタフェースでカスタマイズできる内容](#)
- [ナビゲーション・フローのカスタマイズ・カテゴリ](#)
- [ナビゲーション・フローの権限](#)
- [事前定義済みのナビゲーション・フロー](#)
- [ナビゲーション・フローの表示と操作](#)

ビジネス・プロセス・インタフェースでカスタマイズできる内容

ナビゲーション・フローはカードで構成されています。各カードには、1つ以上のタブ付きのページとして表示される情報を含むコンテンツが含まれます。カードに含まれるコンテンツには、URL またはアーティファクト (フォーム、ダッシュボード、レポートなど) があります。カードをクラスタにグループ化できます。

ノート:

ダッシュボード 2.0 およびフォーム 2.0 がビジネス・プロセスで有効な場合:

- ナビゲーション・フローでは、ダッシュボード 2.0 およびフォーム 2.0 に組み込まれた機能がサポートされ、ランタイム・ダッシュボード内からフォームを編集したり、データの有無に関係なくフォームを編集できます。ダッシュボード 2.0 コンポーネント・アクション(「**フォームを開く**」や「**フォームの編集**」など)も、ナビゲーション・フロー内で直接機能します。
- ダッシュボードに複数のコンポーネントが含まれる場合は、ナビゲーション・フロー内からダッシュボードを編集する際に、ダッシュボード内の最後のコンポーネントにフォーカスが設定されます。

フリーフォームの操作の 2.0 ダッシュボードの操作を参照してください。

ナビゲーション・フローは、次の方法でカスタマイズできます:

- カードまたはタブのラベル
- カードまたはタブに使用されるアイコン
- カードおよびタブの表示と非表示の切替え
- カードおよびタブの表示順序
- 新しいカードの追加
- 既存のカードの追加
- 新しい水平タブまたは垂直タブの追加
- ナビゲーション・フロー、カードおよびタブの削除
- クラスタへのカードのグループ化
- 既存のクラスタの追加

[ナビゲーション・フローの表示と操作](#)を参照してください。

ナビゲーション・フローのカスタマイズ・カテゴリ

ナビゲーション・フローは、カスタマイズにおいて次のようにカテゴリ化されます。

1. グローバル: ナビゲーション・フローはすべてのユーザーに表示されます
2. 役割: ナビゲーション・フローは、サービス管理者やパワー・ユーザーなど、特定の役割のユーザーのみに表示されます
3. グループ: ナビゲーション・フローは特定のグループ(販売など)に属するユーザーのみに表示されます

ナビゲーション・フローはこれらのいずれかのレベルで定義できます。ナビゲーション・フローが複数のレベルに存在する場合、更新は最も高いレベル(グローバル)から最も低いレベル(グループ)の順に適用されます。

たとえば、ホーム・ページで"マイ・タスク"という名前のアイコンを表示するナビゲーション・フローを作成し、別のサービス管理者がこのナビゲーション・フローを複製

し、カードに対して次の変更を加え、ナビゲーション・フローをグループに関連付けるとします。

- グローバル・レベルで、"マイ・タスク"を"会社のタスク"という名前に変更します
- グループ・レベルで、販売という名前のグループに対して、"マイ・タスク"を"販売のタスク"という名前に変更します

販売と呼ばれるグループに属するユーザーには、ナビゲーション・フローで"マイ・タスク"ではなくラベル"販売のタスク"が表示され、他のすべてのユーザーにはラベル"会社のタスク"が表示されます。

ナビゲーション・フローの権限

ビジネス・プロセスでは、ナビゲーション・フローについて次の 3 レベルの権限があります。

- 役割ベース: 権限は、特定の役割に割り当てられたユーザーまたはグループに付与されます。たとえば、ユーザーには、サービス管理者とは異なるカードがホーム・ページに表示されます
- アーティファクトベース: 権限は、特定のアーティファクトを表示できるユーザーまたはグループに付与されます。たとえば、ユーザーには、権限が割り当てられているフォームのみが表示されます
- グローバル: 権限はすべてのユーザーに付与されます

事前定義済みのナビゲーション・フロー

ビジネス・プロセスには、デフォルトと呼ばれる 1 つの事前定義済ナビゲーション・フローがあります。デフォルト・ナビゲーション・フローは読取り専用であり、変更できません。

デフォルト・ナビゲーション・フローに対して実行できる操作と実行できない操作は次のとおりです。

- 名前: 名前は変更できません。
- 削除: ナビゲーション・フローは削除できません。
- 編集: ナビゲーション・フローの詳細を表示できますが、変更はできません。
- アクティブ化または非アクティブ化: ナビゲーション・フローをアクティブ化または非アクティブ化できます。
- 複製: ナビゲーション・フローのコピーを作成できます。

インポート後のナビゲーション・フロー・ステータスの理解

アクティブなナビゲーション・フローを含むスナップショットを、同じカテゴリ(役割、グループまたはグローバル)のアクティブなナビゲーション・フローを含む環境にインポートすると、インポートされる新しいナビゲーション・フローが非アクティブ化されます。

たとえば、次のナビゲーション・フローがシステムで現在アクティブです:

- NF Sales Q2 (販売グループ)
- NF Administrator (サービス管理者役割)
- NF Custom Default (グローバル)

NF Sales Q2 と同じ販売グループを使用する NF Sales Q3 というナビゲーション・フローをインポートするとします。NF Sales Q3 ナビゲーション・フローは非アクティブとしてインポートされ、既存の NF Sales Q2 が販売グループに対してアクティブなままです。新しい NF Sales Q3 をアクティブにする場合、手動でアクティブ化する必要があります(古い NF Sales Q2 が非アクティブ化されます)。インポートが Q3 開始日より前に発生した可能性があるため、Q3 ナビゲーション・フローが Q3 開始日より前にアクティブ化されないようにするため、インポートした Q3 ナビゲーション・フローを非アクティブ化します。

新規アプリケーションが、アクティブなカスタム・グローバル・ナビゲーション・フロー(NF カスタムなど)を含む移行スナップショットから作成される場合、NF カスタム・グローバル・ナビゲーション・フローは移行インポート後に非アクティブになります。アプリケーションがクローニングされる場合も同様です。デフォルトのグローバル・ナビゲーション・フローがアクティブなグローバル・ナビゲーション・フローになり、新規アプリケーションの作成後にグローバル NF カスタム・ナビゲーション・フローをアクティブ化する必要があります。すべてのユーザーが NF カスタム・グローバル・ナビゲーション・フローを使用している場合、NF カスタム・ナビゲーション・フローがアクティブ化されるまでサービスの中断が発生する可能性があります。

ナビゲーション・フローを設計する場合:

- ユーザーの特定のグループまたはクラスのナビゲーション・フローを作成します。次に、ナビゲーション・フローを該当するユーザー・グループに関連付けます。
- すべてのユーザーに 1 つのグローバル・ナビゲーション・フローを作成しないようにします。

ナビゲーション・フローの表示と操作

サービス管理者の役割を割り当てられたユーザーは、ナビゲーション・フロー・ページで、事前定義済ナビゲーション・フローを含むすべてのナビゲーション・フローを表示できます。他の役割およびグループに割り当てられたユーザーには、アクセス権があるナビゲーション・フローのみが表示されます。

「ナビゲーション・フロー」ページには、各ナビゲーション・フローが名前別に一覧表示され、ナビゲーション・フローにアクセスできる役割またはグループ(割り当てられている場合)、およびナビゲーション・フローの説明(提供されている場合)が示されます。リストには、ナビゲーション・フローがアクティブであるかどうかも示されます。

ナビゲーション・フローの表示

ナビゲーション・フロー・ページを表示するには:

1. ホーム・ページで、「ツール」をクリックします。
2. 「ナビゲーション・フロー」をクリックします。

ナビゲーション・フローの操作

ナビゲーション・フローを操作するには、次のアクションを実行します。

- 設計のベスト・プラクティスおよび考慮事項は、[ナビゲーション・フロー設計のベスト・プラクティスおよび命名の考慮事項](#)を参照してください。
- ナビゲーション・フローを作成および複製するには、[ナビゲーション・フローの作成と複製](#)を参照してください。

- ナビゲーション・フローを編集するには、[ナビゲーション・フローの編集](#)を参照してください。
- ナビゲーション・フローをアクティブ化または非アクティブ化するには、[ナビゲーション・フローのアクティブ化と非アクティブ化](#)を参照してください。
- ナビゲーション・フローを検証し、欠落したアーティファクトがあるナビゲーション・フロー要素を検出して解決する方法を学習するには、[検証を使用したナビゲーション・フローでの欠落アーティファクトの検索](#)を参照してください。
- 警告アイコン  が表示されている、リスト内のナビゲーション・フローを解決するには、「警告」アイコンが表示される[ナビゲーション・フローの解決](#)を参照してください。
- カードおよびタブの名前を変更するには、[カード、タブおよびクラスタのラベルのカスタマイズ](#)を参照してください。
- カードおよびタブに使用されるグラフィックをカスタマイズするには、[カードおよび垂直タブのアイコンのカスタマイズ](#)を参照してください。
- カードおよびタブの表示と非表示を切り替えるには、[クラスタ、カードおよびタブの非表示および再表示](#)を参照してください。
- ホーム・ページでカードの表示順を変更するには、[ホーム・ページ上のカードの表示順序の変更](#)を参照してください。
- カードを追加するには、[カードの追加](#)を参照してください。
- タブを追加するには、[表形式ページへのタブの追加](#)を参照してください。
- ナビゲーション・フロー、カードおよびタブを削除するには、[ナビゲーション・フロー、カードおよびタブの削除](#)を参照してください。
- カードをクラスタにグループ化するには、[クラスタへのカードのグループ化](#)を参照してください。

トラブルシューティング

ナビゲーション・フローの問題を解決する方法の詳細は、*Oracle Enterprise Performance Management Cloud オペレーション・ガイド*のナビゲーション・フローに関する問題の処理を参照してください。

ナビゲーション・フロー設計のベスト・プラクティスおよび命名の考慮事項

設計のベスト・プラクティス

最適なユーザー操作を提供し、ホーム・ページおよびカードやタブでの過度のスクロールを避けるには、ナビゲーション・フローの設計時に次のガイドラインに従う必要があります：

- 最上位レベルのアイテム(カードおよびクラスタ)では、表示可能アイテムは 16 個以下に抑えます。
- 16 個以下の表示可能カードをクラスに追加します。
- 10 個以下の表示可能な垂直タブをカード内に追加します。
- 20 個以下の表示可能サブ・タブ(水平タブ)を垂直タブ内に追加します。
- 実行時にサブ・タブ(水平タブ)のラベル名は、最初の 30 文字のみが表示されます。タブにカーソルを置くと、ラベル全体が表示されます。

 **Note:**

表示可能な制限を超えようとする、制限を超えたことを通知する警告メッセージが表示されます。

命名の考慮事項

ナビゲーション・フローおよびナビゲーション・フロー内のカード、クラスタ、タブ、インフォレット(ビジネス・プロセスでインフォレットを使用する場合)には命名規約があります。次の特殊文字は使用できません。

- アンパサンド(&)
- 小なり記号(<)
- 大なり記号(>)
- 引用符(")
- 円記号(バックスラッシュ)(\)
- プラス記号(+)

ナビゲーション・フローの作成と複製

ナビゲーション・フローを作成するには、最初に既存のナビゲーション・フローを選択し、そのコピーを作成する必要があります。その後、複製したナビゲーション・フローの詳細を編集して保存します。

ナビゲーション・フローを作成および複製するには:

1. 「**ナビゲーション・フロー**」ページを開きます。[ナビゲーション・フローの表示と操作](#)を参照してください。
2. ページの右上隅で  をクリックし、「**コピーの作成**」を選択します。
3. ナビゲーション・フローの名前を入力し、「**OK**」をクリックします。

 **ノート:**

必ず、[ナビゲーション・フロー設計のベスト・プラクティス](#)および[命名の考慮事項](#)に記載されているナビゲーション・フローの命名規則に従ってください。

4. ナビゲーション・フローの詳細を編集します。[ナビゲーション・フローの編集](#)を参照してください。

 **ノート:**

新しいフローは、サービス管理者がアクティブにするまで「**非アクティブ**」に設定されます。ナビゲーション・フローをアクティブにするには、[ナビゲーション・フローのアクティブ化と非アクティブ化](#)を参照してください。

ナビゲーション・フローをリロードして設計時の変更を表示するには、[ナビゲーション・フローのリロード](#)を参照してください。

ナビゲーション・フローの編集

ナビゲーション・フローを編集するには:

1. 「**ナビゲーション・フロー**」 ページを開きます。[ナビゲーション・フローの表示と操作](#)を参照してください。
2. 編集するナビゲーション・フローの名前をクリックします。

 **ノート:**

事前定義済のナビゲーション・フローは編集できません。ただし、事前定義済のナビゲーション・フローのコピーを作成し、そのコピーを編集することは可能です。[事前定義済のナビゲーション・フロー](#)を参照してください。

ナビゲーション・フロー内のカードおよびクラスタがリストされたページが表示されます。このページで、役割またはグループの割当ての編集、ホーム・ページに表示可能なクラスタおよびカードの指定、ナビゲーション・フローのクラスタおよびカードが表示される順序の変更、クラスタへのカードの追加またはそれらの削除、ナビゲーション・フローからのクラスタおよびカードの削除を行うことができます。

- **割当先:**  をクリックして、ユーザーのグループまたは役割にナビゲーション・フローを割り当てます。
- **表示可能:** 「**表示可能**」列でナビゲーション・フローのクラスタおよびカードを選択するか、選択を解除して、ホーム・ページにおけるそれらの表示の可否を編集します。

 **ノート:**

必ず、[ナビゲーション・フロー設計のベスト・プラクティスおよび命名の考慮事項](#)に記載されているナビゲーション・フローの表示のガイドラインに従ってください。

- **順序:** クラスタおよびカードが、ホーム・ページ上に表示される順序でリストされます(表示可能な場合)。上矢印または下矢印オプションを選択すると、リスト内でクラスタおよびカードの位置が変わり、ホーム・ページ上のクラスタおよびカードの表示順序が変更されます。右矢印を選択すると、カードがクラスタに移動します。
- **削除:** ナビゲーション・フローからクラスタまたはカードを削除します。

3. クラスタまたはカードをクリックして詳細を編集します。カードの詳細の説明は、次のトピックを参照してください:
 - [カードの追加](#)
 - [表形式ページへのタブの追加](#)

ナビゲーション・フローをリロードして設計時の変更を表示するには、[ナビゲーション・フローのリロード](#)を参照してください。

ナビゲーション・フローのアクティブ化と非アクティブ化

各カテゴリ(グローバル、役割またはグループ)について複数のナビゲーション・フローを作成できますが、各カテゴリでアクティブにできるナビゲーション・フローは1つのみです。ナビゲーション・フローをアクティブにすると必ず、同じカテゴリ内の他のナビゲーション・フローは非アクティブになります。

ノート:

各ビジネス・プロセスには、アクティブなグローバル・ナビゲーション・フローが1つが必要です。異なるグローバル・ナビゲーション・フローをアクティブにするには、別のグローバル・ナビゲーション・フローを選択し、それをアクティブ化してください。

カテゴリの詳細は、[ナビゲーション・フローのカスタマイズ・カテゴリ](#)を参照してください。

アクティブなナビゲーション・フローに対してユーザーが実行できる操作と実行できない操作は次のとおりです。

- 名前: ユーザーは名前を変更できません。
- 削除: ユーザーはナビゲーション・フローを削除できません。
- 編集:
 - ユーザーはナビゲーション・フローの定義を表示できますが、何も変更できません。
 - ビジネス・プロセスが管理モードになっている場合、ユーザーは変更を保存できます。
- アクティブ化または非アクティブ化: ユーザーはナビゲーション・フローをアクティブ化または非アクティブ化できます。
- 複製: ユーザーはナビゲーション・フローのコピーを作成できます。

ナビゲーション・フローをアクティブまたは非アクティブにするには:

1. 「[ナビゲーション・フロー](#)」 ページを開きます。[ナビゲーション・フローの表示と操作](#)を参照してください。
2. 「**アクティブ**」列で、「**アクティブ**」または「**非アクティブ**」をクリックします。アクティブなフローは非アクティブに設定されます。逆に、非アクティブなフローはアクティブに設定されます。

検証を使用したナビゲーション・フローでの欠落アーティファクトの検索

ナビゲーション・フローのリストを表示しているときに、ナビゲーション・フローのノードまたはアーティファクトにエラー・アイコン  が表示される場合があります。このエラーは、ナビゲーション・フローに関連付けられていたアーティファクトが名前変更または削除されて、現在は欠落とみなされているために発生します。ナビゲーション・フローをアクティブにする前に、名前変更されたアーティファクトまたは別のアーティファクトに関連付けるようにナビゲーション・フローを編集する必要があります。アーティファクトが欠落とみなされていることに気づかない場合があるため、「アクティブ」ステータスに設定する前にナビゲーション・フローを検証することをお勧めします。

Note:

警告アイコン  が表示されたナビゲーション・フローを解決するには、「警告」アイコンが表示されるナビゲーション・フローの解決を参照してください。

ナビゲーション・フローを検証し、欠落したアーティファクトを検出して再度関連付けるには:

1. 「ナビゲーション・フロー」 ページを開きます。 [ナビゲーション・フローの表示と操作](#) を参照してください。
2. ナビゲーション・フローがすでに非アクティブ化されている場合は、検証するナビゲーション・フローを「非アクティブ」ステータスに設定します。 [ナビゲーション・フローのアクティブ化と非アクティブ化](#) を参照してください。
3. 検証するナビゲーション・フローの行(1行または複数)を強調表示します。
4.  をクリックし、「検証」を選択します。
 アーティファクトが欠落している場合は、検出できないアーティファクトをナビゲーション・フローが参照していることを示すエラー・メッセージが表示されます。
5. エラーが発生した各ナビゲーション・フローの名前をクリックし、欠落したアーティファクトが表示されている「管理」ページに到達するまで、エラー・アイコン  が表示されたノードを展開します。
6. **アーティファクト** については、 をクリックして、アーティファクト・ライブラリで名前変更したアーティファクトまたは別のアーティファクトを選択します。
7. 「保存して閉じる」をクリックします。
8. ナビゲーション・フローが有効であることを示すメッセージが表示されるまで、必要に応じてナビゲーション・フローで検証を繰り返し、ドリルダウンして修正を行います。
9. ナビゲーション・フローをアクティブにします。 [ナビゲーション・フローのアクティブ化と非アクティブ化](#) を参照してください。

ナビゲーション・フローをリロードして設計時の変更を表示するには、 [ナビゲーション・フローのリロード](#) を参照してください。

警告アイコンが表示されたナビゲーション・フローの解決

ナビゲーション・フローのリストを表示しているときに、ナビゲーション・フローに警告アイコン  が表示される場合があります。これは、ナビゲーション・フローに関連付けられていたグループが削除されているために発生します。ナビゲーション・フローを編集してグループまたは役割に関連付けてから、ナビゲーション・フローをアクティブにする必要があります。

Note:

エラー・アイコン  が表示されたナビゲーション・フローを解決するには、[検証を使用したナビゲーション・フローでの欠落アーティファクトの検索](#)を参照してください。

ナビゲーション・フローを解決するには:

1. 「**ナビゲーション・フロー**」 ページを開きます。[ナビゲーション・フローの表示と操作](#)を参照してください。
2. 警告アイコン  が表示されているナビゲーション・フローの名前をクリックします。
3. 「**割当先**」の  をクリックして、ユーザーのグループまたは役割にナビゲーション・フローを割り当て、「**保存して閉じる**」をクリックします。
4. ナビゲーション・フローをアクティブにします。[ナビゲーション・フローのアクティブ化と非アクティブ化](#)を参照してください。

ナビゲーション・フローをリロードして設計時の変更を表示するには、[ナビゲーション・フローのリロード](#)を参照してください。

カード、タブおよびクラスタのラベルのカスタマイズ

カード(ホーム・ページに表示されるアイコン)、タブおよびクラスタのラベルをカスタマイズできます。ラベルは、25 文字以下に制限されています。垂直タブの場合、垂直タブのラベルはホバー・テキストとして表示されるため、文字数の制限はありません。

ノート:

デフォルト・ナビゲーション・フローに対するカード、タブまたはクラスタのラベルを更新しないでください。カスタム・ナビゲーション・フローのラベルのみカスタマイズします。

カード、タブおよびクラスタのラベルをカスタマイズするには:

1. 「**ナビゲーション・フロー**」 ページを開き、編集するナビゲーション・フローの名前をクリックします。[ナビゲーション・フローの表示と操作](#)を参照してください。

2. カードまたはクラスタのラベルをカスタマイズする場合:
 - a. 編集するカードまたはクラスタの名前をクリックします。
 - b. 新しい名前を入力し、それを保存します。

ノート:

- ラベルはここで編集できます。ただし、ラベルが「ツール」クラスタの「アーティファクト・ラベル」ページで定義されている場合は、その定義が優先され、実行時に表示されます。ラベルを完全に変更するには、「アーティファクト・ラベル」ページで再定義してください。
アーティファクト・ラベルの指定を参照してください。
- 必ず、[ナビゲーション・フロー設計のベスト・プラクティスおよび命名の考慮事項](#)に記載されている命名規則に従ってください。

3. タブのラベルをカスタマイズする場合:
 - a. 編集するカードの名前をクリックします。
 - b. 「**タブの管理**」ページのタブ・リストで、編集するタブの名前をクリックします。
 - c. タブの新しい名前を入力し、それを保存します。

ナビゲーション・フローをリロードして設計時の変更を表示するには、[ナビゲーション・フローのリロード](#)を参照してください。

カードおよび垂直タブのアイコンのカスタマイズ

カードおよび垂直タブで使用されているアイコンを変更できます。アイコン・ライブラリで提供されている使用可能なアイコンから選択する必要があります。

カードおよび垂直タブのアイコンをカスタマイズするには:

1. 「**ナビゲーション・フロー**」ページを開き、編集するナビゲーション・フローの名前をクリックします。[ナビゲーション・フローの表示と操作](#)を参照してください。
2. カードのアイコンをカスタマイズする場合:
 - a. 編集するカードの名前をクリックします。
 - b. カードのアイコンをクリックし、ライブラリから新しいアイコンを選択して、それを保存します。
3. タブのアイコンをカスタマイズする場合:
 - a. 編集するアイコンの名前をクリックします。
 - b. 「**タブの管理**」ページのタブ・リストで、編集するタブの名前をクリックします。
 - c. タブのアイコンをクリックし、ライブラリから新しいアイコンを選択して、それを保存します。

ナビゲーション・フローをリロードして設計時の変更を表示するには、[ナビゲーション・フローのリロード](#)を参照してください。

クラスタ、カードおよびタブの非表示および再表示

次のナビゲーション要素は非表示にできません。

- 「アプリケーション」クラスタと、「アプリケーション」クラスタの「設定」アイコン。
- 「ツール」クラスタと、「ツール」クラスタの次のアイコン:
 - アクセス制御
 - ナビゲーション・フロー
 - 日次メンテナンス
 - 移行

必ず、[ナビゲーション・フロー設計のベスト・プラクティスおよび命名の考慮事項](#)に記載されているナビゲーション・フローの表示のガイドラインに従ってください。

クラスタ、カードおよびタブを非表示および再表示するには:

1. 「ナビゲーション・フロー」アイコンをクリックし、編集するナビゲーション・フローの名前をクリックします。[ナビゲーション・フローの表示と操作](#)を参照してください。
2. 「表示可能」列でクラスタおよびカードを選択または選択解除して、ホーム・ページのナビゲーション・フローの表示を編集します。
3. タブを表示または非表示にする場合:
 - a. 編集するカードの名前をクリックします。
 - b. **タブの管理**ページのタブ・リストで、「表示可能」列のチェック・ボックスを選択または選択解除します。

ナビゲーション・フローをリロードして設計時の変更を表示するには、[ナビゲーション・フローのリロード](#)を参照してください。

ホーム・ページ上のカードの表示順序の変更

ナビゲーション・フロー・デザイナーでカードの表示順序を変更できます。カードは、リスト内に表示される順序でホーム・ページ上に表示されます。

ホーム・ページ上のカードの表示順序を変更するには:

1. 「ナビゲーション・フロー」ページを開きます。[ナビゲーション・フローの表示と操作](#)を参照してください。
2. リスト内で、「順序」列の上矢印および下矢印を使用して、ナビゲーション・フローの順序内でカードを上下に移動します。

ナビゲーション・フローをリロードして設計時の変更を表示するには、[ナビゲーション・フローのリロード](#)を参照してください。

カードの追加

ホーム・ページに表示されるアイコンはカードを表します。カードは、ビジネス・プロセスの各機能領域に固有です。各カードをクリックすると、ユーザーは対応する領

域に移動し、他の情報が 1 つ以上のタブ付きのページとして表示されます。単一ページまたは複数ページ(タブ形式)のカードを作成できます。

最適なユーザー・エクスペリエンスを確実にするために、ナビゲーション・フロー設計のベスト・プラクティスを確認します。[ナビゲーション・フロー設計のベスト・プラクティスおよび命名の考慮事項](#)を参照してください。

カードをクラスタにグループ化することもできます。[クラスタへのカードのグループ化](#)を参照してください。

カードをナビゲーション・フローに追加するには:

1. 「**ナビゲーション・フロー**」 ページを開き、編集するナビゲーション・フローの名前をクリックします。[ナビゲーション・フローの表示と操作](#)を参照してください。
2. 既存のカードをナビゲーション・フローに追加するには、リストでカードまたはクラスタを右クリックし(あるいは **+** をクリックし)、「**既存のカード/クラスタの追加**」をクリックして、カードを選択します。別の環境から既存のカードを追加する場合は、リストでカードまたはクラスタを右クリックし(あるいは **+** をクリックし)、「**既存のカード/クラスタの追加**」をクリックして、「**自分の接続**」でターゲット環境を選択した後、ナビゲーション・フローに追加するカードを選択します。

次の点に注意してください。

- **Narrative Reporting** および **Profitability and Cost Management** からは、「**既存のカード/クラスタの追加**」 オプションを使用してカードを直接選択することはできません。
- 別のナビゲーション・フローまたは別の環境から追加されるカードには、ソース・ナビゲーション・フローで定義されたローカライズされたラベルが表示されます。ナビゲーション・フローでカード・ラベルを更新するには、ホーム・ページで「**ツール**」、**「アーティファクト・ラベル」**の順にクリックします。
アーティファクト・ラベルの指定を参照してください。
- 参照カードは、別のナビゲーション・フローからすでに参照されているカードです。すでに参照されているカードへの参照は、ナビゲーション・フローではサポートされず、既存のカードを追加する際にオブジェクト・ライブラリで選択できません。次に例を挙げます:
 - リモート・アーティファクトまたはリモート・タブを参照するカードは、既存のカードを追加するときにオブジェクト・ライブラリから使用できません。
 - 別のナビゲーション・フローのタブを参照するカードは、既存のカードを追加するときにオブジェクト・ライブラリから使用できません。

カードは、リスト内で現在選択されているカードまたはクラスタの下に兄弟として追加されます。カードをクラスタに追加するには、[クラスタへのカードのグループ化](#)を参照してください。

ノート:

最初にカードまたはクラスタを選択せずに追加されたカードは、リストの最後に追加されます。

3. 新しいカードをナビゲーション・フローに追加するには、リストでノードを右クリックし(または **+** をクリックし)、「**カードの追加**」をクリックして、新しいカードの詳細を選択します。

表 8-1 新しいカードの詳細

ラベル	説明
名前	カードのラベルを入力します。 必ず、 ナビゲーション・フロー設計のベスト・プラクティスおよび命名の考慮事項 に記載されている命名規則に従ってください。
表示可能	ホーム・ページ上でカードをユーザーに表示するかどうかを選択します。
クラスタ	クラスタが存在する場合、カードのクラスタを選択するか、「なし」を選択します。
アイコン	作成するカードについて表示するグラフィックを選択します。グラフィック・ライブラリで提供されている、使用可能なグラフィックから選択してください。
ページ・タイプ	「 単一ページ 」フォーマットまたは「 表形式ページ 」フォーマットを選択します。
コンテンツ・ソース	「 単一ページ 」フォーマットを選択した場合、「 アーティファクト 」または「 URL 」を選択します： <ul style="list-style-type: none"> • アーティファクト については、 をクリックして、アーティファクト・ライブラリでアーティファクトを選択します。たとえば、アーティファクトがフォームである場合、アーティファクトのリストから特定のフォームを選択します。使用可能なアーティファクトには、フォーム、ダッシュボード、レポートがあります。別の環境からアーティファクトを選択するには、「自分の接続」でターゲット環境を選択し、追加するアーティファクトを選択します。 • 「URL」については、完全な URL を入力します。たとえば、Oracle Analytics Cloud ダッシュボードをカードに埋め込むための URL を入力し、「プレビュー」をクリックしてポップアップ・ウィンドウで URL を検証します。 https://セキュリティ・プロトコルで始まる外部サイトの URL のみを挿入します。内部または相対 URL や、同意していないサードパーティ・サイトの URL は使用しないでください。EPM Cloud アプリケーションにサードパーティ・ページを埋め込むための URL の使用についてを参照してください。
向き	「 表形式ページ 」フォーマットを選択した場合、「 垂直 」または「 水平 」を選択し、新規または既存のタブおよびサブ・タブを追加します。 表形式ページへのタブの追加 を参照してください。

カードは、リスト内で現在選択されているカードまたはクラスタの下に兄弟として追加されます。カードをクラスタに追加するには、[クラスタへのカードのグループ化](#)を参照してください。

 **ノート:**

最初にカードまたはクラスタを選択せずに追加されたカードは、リストの最後に追加されます。

4. 「保存して閉じる」をクリックします。

ナビゲーション・フローをリロードして設計時の変更を表示するには、[ナビゲーション・フローのリロード](#)を参照してください。

表形式ページへのタブの追加

タブは水平または垂直方向にすることができます。たとえば、「有効な交差」カード(「アプリケーション」クラスタの下)は、2つの水平タブ(「セットアップ」および「レポート」)がある表形式ページです。

 **ノート:**

レッドウッド・エクスペリエンスが有効になっている場合、「セットアップ」タブと「レポート」タブはページの下部にあります。

垂直タブのある表形式ページも作成できます。垂直タブにはグラフィックが表示され、カーソルをタブに置くと、テキストが表示されます。水平タブには、テキストのみまたはテキストとアイコンを含むラベルが表示されます。

最適なユーザー・エクスペリエンスを確実にするために、ナビゲーション・フロー設計のベスト・プラクティスを確認します。[ナビゲーション・フロー設計のベスト・プラクティスおよび命名の考慮事項](#)を参照してください。

表形式ページにタブを追加するには:

1. 「ナビゲーション・フロー」ページを開き、編集するナビゲーション・フローの名前をクリックします。[ナビゲーション・フローの表示と操作](#)を参照してください。
2. 編集するカードの名前をクリックして既存のカードを編集するか、カードを右クリックし(または  をクリックし)、「カードの追加」をクリックして新しいカードを追加します。
3. 「カードの管理」ページで、次のオプションを選択します:
 - 「ページ・タイプ」で、「表形式ページ」を選択します。
 - 「向き」で、「垂直」または「水平」を選択します。
 「カードの管理」ページの下部にタブ・リストが表示されます。
4. 既存のタブを編集するには、タブのリストからタブ名をクリックし、タブの詳細を編集します。
5. 新規または既存のタブを追加するには:
 - a. 既存のタブを追加するには、「カードの管理」ページの下部にあるリストでタブを右クリックし、「既存タブの追加」をクリックして(または「既存タブの追加」ボタンをクリックして)、オブジェクト・ライブラリからタブを選択した後、「OK」をクリックします。

 ノート:

参照タブは、別のナビゲーション・フローからすでに参照されているタブです。すでに参照されているタブへの参照は、ナビゲーション・フローではサポートされず、既存のタブを追加する際にオブジェクト・ライブラリで選択できません。次に例を示します:

- リモート・アーティファクトまたはリモート・サブ・タブを参照するタブは、既存のタブを追加する際にオブジェクト・ライブラリから使用できません。
- 別のナビゲーション・フローのサブ・タブを参照するタブは、既存のタブを追加する際にオブジェクト・ライブラリから使用できません。

b. 新しいタブを追加するには、タブを右クリックし、「**新規タブの追加**」をクリックして(または「**新規タブの追加**」ボタンをクリックして)、タブの詳細を編集します。

c. 新しいタブのコンテンツを選択します:

- **アーティファクト**については、 をクリックして、アーティファクト・ライブラリでアーティファクトを選択します。たとえば、アーティファクトがフォームである場合、アーティファクトのリストから特定のフォームを選択します。使用可能なアーティファクトには、フォーム、ダッシュボード、レポートがあります。別の環境からアーティファクトを選択するには、「**自分の接続**」でターゲット環境を選択し、追加するアーティファクトを選択します。
- 「**URL**」については、完全な URL を入力します。たとえば、Oracle Analytics Cloud ダッシュボードをタブに埋め込むための URL を入力し、「**プレビュー**」をクリックしてポップアップ・ウィンドウで URL を検証します。

https://セキュリティ・プロトコルで始まる外部サイトの URL のみを挿入します。内部または相対 URL や、同意していないサードパーティ・サイトの URL は使用しないでください。EPM Cloud アプリケーションにサードパーティ・ページを埋め込むための URL の使用についてを参照してください。

タブは、リスト内で現在選択されているタブの下に兄弟として追加されます。

 ノート:

最初にタブを選択せずに追加されたタブは、リストの最後に追加されます。

6. 新規または既存のサブ・タブをタブに追加するには:

- a. タブ・リストでタブの名前をクリックします。
- b. 「**ページ・タイプ**」で、「**表形式ページ**」を選択します。

- c. タブを右クリックし、「**新規サブ・タブの追加**」または「**既存サブ・タブの追加**」をクリックして(あるいは「**新規サブ・タブの追加**」または「**既存サブ・タブの追加**」ボタンをクリックして)、サブ・タブの詳細を編集します。
- d. 新しいサブ・タブのコンテンツを選択します:

- **アーティファクト**については、 をクリックして、アーティファクト・ライブラリでアーティファクトを選択します。たとえば、アーティファクトがフォームである場合、アーティファクトのリストから特定のフォームを選択します。使用可能なアーティファクトには、フォーム、ダッシュボード、レポートがあります。別の環境からアーティファクトを選択するには、「**自分の接続**」でターゲット環境を選択し、追加するアーティファクトを選択します。
- 「**URL**」については、完全な URL を入力します。たとえば、Oracle Analytics Cloud ダッシュボードをサブ・タブに埋め込むための URL を入力します。「**プレビュー**」をクリックしてポップアップ・ウィンドウで URL を検証します。

https://セキュリティ・プロトコルで始まる外部サイトの URL のみを挿入します。内部または相対 URL や、同意していないサードパーティ・サイトの URL は使用しないでください。[EPM Cloud アプリケーションにサードパーティ・ページを埋め込むための URL の使用について](#)を参照してください。

サブ・タブは、リスト内で現在選択されているタブの下に兄弟として追加されます。

ノート:

最初にタブを選択せずに追加されたサブ・タブは、リストの最後に追加されます。

7. 「保存して閉じる」をクリックします。

ナビゲーション・フローをリロードして設計時の変更を表示するには、[ナビゲーション・フローのリロード](#)を参照してください。

ノート:

- カードに複数のタブまたはサブ・タブがある場合、同じセッションで次にそのカードにアクセスすると、ユーザーが前回アクセスしたタブが開きます。ユーザーがログアウトして再度ログインした場合には、デフォルトのタブが表示されます。
- 別のナビゲーション・フローまたは別の環境から追加されるタブまたはサブ・タブには、ソース・ナビゲーション・フローで定義されたローカライズされたラベルが表示されます。ナビゲーション・フローでタブ・ラベルを更新するには、ホーム・ページで「**ツール**」、「**アーティファクト・ラベル**」の順にクリックします。

アーティファクト・ラベルの指定を参照してください。

URL を使用した EPM Cloud アプリケーションへのサード・パーティ・ページの埋込みについて

Oracle Enterprise Performance Management Cloud では、IFrame を使用して、サード・パーティの URL を埋め込みます。IFrame では、埋込み先のページは、埋込み元のページに承認を付与する必要があります。たとえば、sharepoint.com から EPM Cloud アプリケーションにページを埋め込む場合、sharepoint.com は、sharepoint.com からページを埋め込むことを oraclecloud.com に許可する必要があります。

これを実行するには、ページを埋め込む必要がある Web アプリケーションの [コンテンツ・セキュリティ・ポリシー](#) に oraclecloud.com を追加します。

また、サード・パーティ・ページを埋め込むときは、ページがパブリックに使用可能か、またはログインが必要かを検討する必要があります。たとえば、wikipedia.org からのページは認証が必要ありません。

認証が必要なページを埋め込む場合は、ページに対して SSO を埋め込むことができるかどうかを確認する必要があります。不可の場合、ページは IFrame 内にロードできない場合があります。回避策として、別のブラウザ・タブで対象の Web アプリケーションにログインし、EPM Cloud アプリケーションから同じページにアクセスするとページが開きます。

この URL サポート機能により、次のタイプのページを埋め込むことができます:

- 他の Oracle 製品(SSO の有効化が必要)
- 顧客が所有する Web アプリケーション(コンテンツ・セキュリティ・ポリシーの更新、SSO の有効化などにより、EPM Cloud アプリケーションの許可が必要)
- パブリック・ドメインからのページ(wikipedia.org など)

Note:

Oracle でサポートされていませんが、ナビゲーション・フロー・カード、タブおよびサブ・タブ内に次のリソースへのリンクを埋め込むこともできます:

- Google スプレッドシート
- Google Drive に格納されたファイル(PDF や Excel など)
- Microsoft Office 365 に格納されたファイル

サードパーティ・サイトによって提供された指示を使用して、EPM Cloud アプリケーションで使用できる URL を生成します。

ナビゲーション・フロー、カードおよびタブの削除

次のナビゲーション要素は削除できません。

- 「アプリケーション」クラスタと、「アプリケーション」クラスタの「設定」アイコン。
- 「ツール」クラスタと、「ツール」クラスタの次のアイコン:

- アクセス制御
- ナビゲーション・フロー
- 日次メンテナンス
- 移行

ナビゲーション・フロー、カードおよびタブを削除するには:

1. 「ナビゲーション・フロー」ページを開きます。[ナビゲーション・フローの表示と操作](#)を参照してください。
2. ナビゲーション・フローを削除する場合:
 - a. 削除するナビゲーション・フローを選択します。
 - b. ページの右上隅で  をクリックし、「削除」をクリックします。

 **ノート:**

デフォルトと呼ばれる事前定義済ナビゲーション・フローは削除できません。

3. カードを削除する場合:
 - a. 編集するナビゲーション・フローの名前をクリックします。
 - b. 削除するカードの「削除」列で  をクリックします。
4. タブを削除する場合:
 - a. 編集するナビゲーション・フローの名前をクリックします。
 - b. 編集するカードの名前をクリックします。
 - c. 「**タブの管理**」ページの下部にあるタブ・リストで、削除するタブの「**削除**」列の  をクリックします。

ナビゲーション・フローをリロードして設計時の変更を表示するには、[ナビゲーション・フローのリロード](#)を参照してください。

クラスタへのカードのグループ化

クラスタは、カードのグループです。最初にクラスタを作成する必要があり、その後でカードを割り当てることができます。既存のクラスタをナビゲーション・フローに追加することもできます。

最適なユーザー・エクスペリエンスを確実にするために、ナビゲーション・フロー設計のベスト・プラクティスを確認します。[ナビゲーション・フロー設計のベスト・プラクティスおよび命名の考慮事項](#)を参照してください。

カードをクラスタに割り当てるには:

1. 新しいクラスタを作成するか、既存のクラスタを追加します。
 - a. 「ナビゲーション・フロー」ページを開き、クラスタを追加するナビゲーション・フローの名前をクリックします。[ナビゲーション・フローの表示と操作](#)を参照してください。

- b. 新しいクラスタを作成するには、リスト内のカードまたはクラスタを右クリック(または **+** をクリック)し、「**クラスタの追加**」をクリックし、クラスタの詳細を入力または選択して、クラスタのグラフィックを選択します。

 **ノート:**

必ず、[ナビゲーション・フロー設計のベスト・プラクティス](#)および[命名の考慮事項](#)に記載されている表示規則および命名規則に従ってください。

クラスタは、現在選択されているクラスタの下の兄弟としてリストに追加されます。

 **ノート:**

カードまたはクラスタを最初に選択せずに追加されたクラスタは、リストの最後に追加されます。

- c. 既存のクラスタを追加するには、リスト内のカードまたはクラスタを右クリック(または **+** をクリック)し、「**既存のカード/クラスタの追加**」をクリックします。別の環境の既存のクラスタを追加する場合は、リスト内のカードまたはクラスタを右クリック(または **+** をクリック)し、「**既存のカード/クラスタの追加**」をクリックし、「**自分の接続**」でターゲット環境を選択して、ナビゲーション・フローに追加するクラスタを選択します。

 **ノート:**

- Narrative Reporting および Profitability and Cost Management から「**既存のカード/クラスタの追加**」オプションを使用してクラスタを直接選択することはできません。
- 別のナビゲーション・フローまたは別の環境から追加されるクラスタには、ソース・ナビゲーション・フローで定義されたローカライズされたラベルが表示されます。ナビゲーション・フローでクラスタ・ラベルを更新するには、ホーム・ページで「**ツール**」、**「アーティファクト・ラベル」**の順にクリックします。
アーティファクト・ラベルの指定を参照してください。
- 参照クラスタは、別のナビゲーション・フローからすでに参照されているクラスタです。すでに参照されているクラスタへの参照は、ナビゲーション・フローではサポートされず、既存のクラスタを追加する際にオブジェクト・ライブラリで選択できません。

クラスタは、現在選択されているカードまたはクラスタの下の兄弟としてリストに追加されます。

 ノート:

カードまたはクラスタを最初に選択せずに追加されたクラスタは、リストの最後に追加されます。

- d. 「保存して閉じる」をクリックします。
2. 次のいずれかのオプションを使用して、クラスタに含めるカードを選択します:
 - a. 追加するカードに移動します。カードが別の環境に含まれている場合は、最初に「**自分の接続**」で環境を選択してから、その環境内のカードにナビゲートします。次のいずれかのオプションを使用して、カードをクラスタに割り当てます:
 - 「**順序**」列のカードの右側にある  をクリックし、クラスタを選択して、「**OK**」をクリックします。
 - カードの名前をクリックしてカードの詳細を表示し、「**クラスタ**」でカードのクラスタを選択して、「**OK**」をクリックします。
 - b. カードを追加するクラスタに移動し、クラスタを右クリック(または  をクリック)し、「**クラスタにカードを追加**」をクリックして、次のいずれかのオプションを選択します:
 - 既存のカードを選択、または別のクラスタから選択したクラスタに既存のカードを追加するには、「**既存のカードの追加**」を選択します。
 - 新しいカードを選択したクラスタに追加するには、「**カードの追加**」を選択し、カードの詳細を入力します。

 ノート:

カードまたはクラスタが別のナビゲーション・フローからすでに参照されている場合、カードをクラスタに追加することはできません。

- c. 「保存して閉じる」をクリックします。

カードがクラスタの子としてリストに表示されます。必要に応じて、カードの横にある上矢印と下矢印を使用して、クラスタ内でカードの順序を変更します。

ナビゲーション・フローをリロードして設計時の変更を表示するには、[ナビゲーション・フローのリロード](#)を参照してください。

ナビゲーション・フローのリロード

ナビゲーション・フローの操作時に設計変更を表示するには、ナビゲーション・フローをリロードします。

設計変更を行った後にナビゲーション・フローをリロードするには:

1. ホーム・ページから、ユーザー名の横の下向き矢印をクリックします(画面の右上隅)。
2. 「**設定およびアクション**」メニューで、「**ナビゲーション・フローのリロード**」をクリックします。

実行時のナビゲーション・フローの切替え

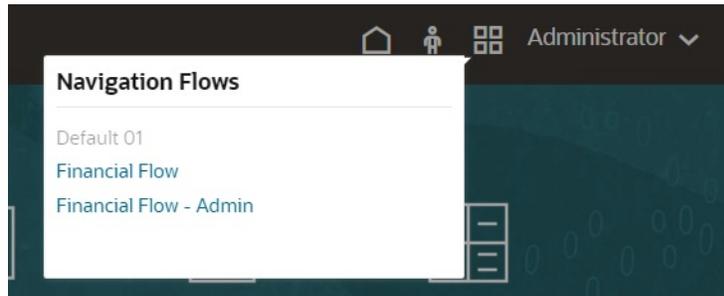
複数のグループに属している場合、またはナビゲーション・フローが役割に割り当てられている場合、複数のナビゲーション・フローにアクセスできます。

ノート:

サービス管理者の役割を割り当てられたユーザーは、すべてのナビゲーション・フローにアクセスできます。

実行時にナビゲーション・フローを切り替えるには:

1. ホーム・ページで  をクリックします。
2. 表示するナビゲーション・フローを選択します。



9

簡易ディメンション・エディタでのディメンションの編集

簡易グリッド・インタフェースでアプリケーションのディメンションとメンバーを操作します。

次も参照:

- [簡易ディメンション・エディタでのディメンションの編集について](#)
簡易ディメンション・エディタには、グリッド形式でディメンションとメンバーが表示されます。
- [ディメンションの概要](#)
- [簡易ディメンション・エディタへのアクセス](#)
- [簡易ディメンション・エディタ・グリッドの操作](#)
簡易グリッド・インタフェースでグリッド要素を操作します。
- [簡易ディメンション・エディタでのメンバー・プロパティの編集](#)
- [簡易ディメンション・エディタでのディメンション・プロパティの編集](#)
- [簡易ディメンション・エディタでの属性の操作](#)

簡易ディメンション・エディタでのディメンションの編集について

簡易ディメンション・エディタには、グリッド形式でディメンションとメンバーが表示されます。

グリッド形式では、ディメンションとメンバーを 1つのページで編集できます。メンバーのプロパティはグリッド上で直接編集でき、ズームイン、ズームアウト、選択項目の保持、選択項目の削除、凍結などのアドホック操作を実行できます。

関連トピック

- [ディメンションの作成](#)
- [ディメンションの概要](#)
- [簡易ディメンション・エディタへのアクセス](#)
- [簡易ディメンション・エディタ・グリッドの操作](#)
- [簡易ディメンション・エディタでのディメンション・プロパティの編集](#)
- [簡易ディメンション・エディタでのメンバー・プロパティの編集](#)
- [簡易ディメンション・エディタでの属性の操作](#)

ディメンションの概要

次も参照:

- [ディメンションとメンバーについて](#)
- [疎ディメンションおよび密ディメンションについて](#)
- [ディメンションの階層について](#)
- [カスタム・ディメンションについて](#)
- [エンティティについて](#)
- [勘定科目について](#)
- [勘定科目、エンティティ、期間およびキューブ](#)

ディメンションとメンバーについて

ディメンションは、ビジネス・データを整理して値の抽出や保持のために使用されるデータ・カテゴリです。

ディメンションには関連するメンバーをグループ化した階層が含まれます。たとえば、年ディメンションには多くの場合、各期間(四半期や月など)のメンバーが含まれます。

フリーフォーム・アプリケーションは、すべてのキューブにわたって合計で最大 29 個のディメンションを持つことができます(26 個のカスタム・ディメンションと 3 個のディメンション・タイプ(勘定科目、期間およびエンティティ))。

疎ディメンションおよび密ディメンションについて

疎ディメンションには、メンバーの組合せの多くにデータ値が存在しません。密ディメンションには、メンバーの組合せの多くにデータ値が存在します。少なくとも 1 つの密ディメンションが必要です。カスタム属性を密ディメンションに割り当てることはできません。アプリケーションでは、勘定科目および期間ディメンションは密として、他のディメンションは疎として指定されます。疎ディメンションのパフォーマンスを最適化するために、アプリケーションでは、各ディメンションの組合せにあるデータ値のみが検索および計算されるため、計算時間が短縮され、ディスク使用量も削減されます。この設定を変更することも可能です。

ディメンションの階層について

ディメンションの階層は、構造的および算術関係、さらにアプリケーションのメンバー間の連結を定義します。関係は、折りたたみ式の階層図式で表示されます。キューブ名の下位にはディメンションが示され、各ディメンションの下位にはメンバーが示されます。

期間ディメンションに、メンバーの Q1、Q2、Q3、および Q4 を含む、メンバーの「年合計」を含めることができます。メンバーの Q1、Q2、Q3 および Q4 には、その年に追加した月の独自のメンバーを含みます。期間ディメンションのデータ値を集計するには、月次データ値をロール・アップして四半期ごとのデータ値を取得し、さらに四半期のデータ値をロール・アップして年次データ値を取得します。

同じディメンションまたはメンバーに属する同レベルのメンバーを兄弟と呼びます。たとえば、Q1、Q2、Q3 および Q4 は、階層の同一レベルにあるので兄弟であり、同じメンバーである年合計のメンバーです。

ディメンションのメンバーをディメンションの子と呼びます。メンバーに属するメンバーを、そのメンバーの子と呼びます。メンバーの年合計は、期間の子であり、Q1、Q2、Q3、Q4 のメンバーは、年合計の子、さらに、1月、2月、3月はQ1の子と見なします。Q1は1月、2月、3月の親で、年合計はQ1、Q2、Q3、Q4の親、さらに期間は年合計の親と見なします。

カスタム・ディメンションについて

フリーフォーム・アプリケーションでは、最大 26 個のカスタム・ディメンションを設定できます。シナリオ、バージョン、期間および年ディメンションをカスタム・ディメンションとして定義できます。[フリーフォームの理解](#)を参照してください。

▲ 注意:

カスタム・ディメンションは、一度作成すると削除できません。

- [集約オプション](#)
- [ストレージ・オプション](#)

集約オプション

集約オプションを使用して、ディメンション階層内に計算を定義できます。集約オプションで、親のメンバーに対する子のメンバーの値をどのように集約させるか決定します。

- + 加算
- - 減算
- * 乗算
- / 除算
- % パーセント
- ~ 無視
- なし(階層に関係なく集約しない)

ストレージ・オプション

ディメンションを操作するとき、様々なデータ・ストレージ・オプションや、ビジネス・プロセスでのそれらのオプションの使用方法を理解することが重要です。

- [ストレージ・オプション](#)
- [動的計算について](#)
- 「動的計算」と「動的計算および保管」の違い
- [保管データ・ストレージについて](#)

- 共有データ・ストレージについて
- 共有しないデータ・ストレージについて
- ラベルのみデータ・ストレージについて

ストレージ・オプション

表 9-1 ストレージ・オプション

オプション	影響
動的計算および保管	メンバーのデータ値および保管値を計算します。
保管	メンバーの保管データ値
動的計算	メンバーのデータ値を計算し、値を無視します。
共有しない	同じディメンション内のメンバーでデータ値を共有することを禁止します。
共有	同じディメンション内のメンバーでデータ値を共有することを許可します。
ラベルのみ	メンバーに関連付けられているデータはありません。

動的計算について

動的に計算されたメンバーを持つアプリケーションでは、メンバーのデータ値が計算され、これらの値が無視されます。ベスト・プラクティスとして、**動的計算**の親の下に作成する子は **100** 個までに制限することをお勧めします。メンバーのストレージを **動的計算**に変更すると、本来のデータの導出方法によっては、データが紛失する場合があります。アウトラインが計算のどちらかまたは両方を更新して動的に計算された値を取得することが必要な場合もあります。

「動的計算」と「動的計算および保管」の違い

たいいていの場合、疎ディメンションのメンバーを計算する際に「動的計算および保管」を使用するかわりに「動的計算」を使用して、計算を最適化し、ディスク容量を削減できます。複雑な式を持つ疎ディメンションのメンバーか、頻繁に取得するユーザーには「動的計算および保管」を使用します。

密ディメンションのメンバーには「動的計算」を使用します。「動的計算および保管」で取得時間と通常の計算時間を多少削減させることはできますが、大幅なディスク容量の削減はできません。多くのユーザーが同時にアクセスするデータ値には、「動的計算」を使用します。「動的計算および保管」と比べて、大幅な取得時間の削減が可能な場合があります。

ノート:

- ユーザーがデータを入力する基本レベルのメンバーには「動的計算」を使用しないでください。
- ターゲット・バージョンのメンバーにデータを入力する場合は、親のメンバーには「動的計算」を使用しないでください。「動的計算」に設定した親のメンバーは、ターゲット・バージョンで読取り専用となります。
- 「動的計算」メンバーのデータ値は保存されません。

保管データ・ストレージについて

子が「動的計算」に設定されている場合は、親メンバーを「保管」に設定しないでください。この組合せの場合、ユーザーがフォームを保存したりリフレッシュしたりする際、親の新しい合計は計算されません。

共有データ・ストレージについて

「共有」を使用して、アプリケーション内で別のロールアップ構造を許可します。

共有しないデータ・ストレージについて

ユーザー定義のカスタム・ディメンションを追加する際、デフォルトのデータ・ストレージ・タイプは「共有しない」です。親に集約されている1つの子メンバーのみを持つ親に対して「共有しない」を使用し、子メンバーへのアクセスを適用できます。

ラベルのみデータ・ストレージについて

ラベルのみメンバーは、通常ナビゲーションで使用される仮想メンバーで、関連付けるデータはありません。

ノート:

- レベル0のメンバーには、「ラベルのみ」を割り当てることはできません。
- ラベルのみメンバーは値を表示できます。
- ディメンションのメンバーをラベルのみにすると、ブロック・サイズが減少するためデータベース容量を最小化できます。
- ラベルのみメンバーには、属性を割り当てることはできません。
- ラベルのみの親の子に対するデータ・ストレージは、デフォルトで「共有しない」に設定されています。

注意:

最初の子メンバーにはデータを保存できないため、最初の子メンバーの後に続くラベルのみの親にフォームを設計しないでください。かわりに、ラベルのみの親を使用して、その子の選択前にフォームを作成するか、フォームにラベルのみの親を選択しないようにします。

エンティティについて

エンティティは通常、地域、部署、部門など組織の構造に一致します。

勘定科目について

勘定科目ディメンションのメンバーでユーザーから必要な情報を指定します。予算管理者に予算アイテムのデータを入力する勘定科目の構造を作成します。勘定科目構造内の計算が定義できます。

関連トピック

- [勘定科目タイプ](#)
- [保存された仮定](#)
- [データ型](#)

勘定科目タイプ

勘定科目タイプで勘定科目のタイム・バランス(値が時間をフローする状態)が定義され、メンバー式で差異レポートへの勘定科目のサイン動作を決定します。

勘定科目タイプの使用例

表 9-2 勘定科目タイプの使用

勘定科目タイプ	目的
費用	ビジネスを行うコスト
収益	収益源
資産	会社のリソース
負債と資本	残余請求権または債権者への債務
保存された仮定	アプリケーションで一貫性を確保する集中管理されたプランニング仮定

勘定科目タイプのサマリー

表 9-3 勘定科目タイプのサマリー

勘定科目タイプ	タイム・バランス	差異レポート
収益	フロー	費用外
費用	フロー	費用
資産	残高	費用外
負債	残高	費用外
資本	残高	費用外
保存された仮定	ユーザー定義	ユーザー定義

差異レポートおよびタイム・バランスの設定はシステム定義ですが、保存された仮定は唯一ユーザー定義です。

タイム・バランス・プロパティ

タイム・バランスでは、アプリケーションによるサマリー期間の値の計算方法を指定します。

表 9-4 タイム・バランス・プロパティ

タイム・バランス・プロパティ	説明	例
フロー	期間合計としてのサマリー期間のすべての値の集約	1月: 10 2月: 15 3月: 20 Q1: 45
最初	期間合計としてのサマリー期間内の最初の値	1月: 10 2月: 15 3月: 20 Q1: 10
残高	期間合計としてのサマリー期間内の最後の値	1月: 10 2月: 15 3月: 20 Q1: 20
平均	期間合計としてのサマリー期間内のすべての子値の平均	1月: 10 2月: 15 3月: 20 Q1: 15
入力	親での値の設定は、その親のすべての祖先に入力されます。子の値が変更されると、デフォルト集約論理はその親に適用されます。 集計演算子およびメンバー式は、メンバーが再計算される際に入力値に上書きされます。	1月: 10、2月: 10、3月: 10、Q1: 30
加重された平均-Actual_Actual	加重日平均は1年の実際の日数に基づいており、2月が29日までであるうるう年に対応しています。例では、Q1の平均は次のように計算されています: (1) Q1の各月の値に、月の日数を掛け合わせます。(2)これらの値の合計を出します。(3)出した合計をQ1の日数で割ります。うるう年と仮定した場合、 $(10*31+15*29+20*31)/91=15$ という計算になります このタイム・バランス・プロパティは、ブロック・ストレージ・キューブにバインドされたディメンションでのみサポートされます。集約ストレージ・キューブでは、「加重平均-Actual_Actual」タイム・バランス・プロパティはサポートされません。	1月: 10 2月: 15 3月: 20 Q1: 15
加重された平均-Actual_365	加重日平均は1年365日に基づき、2月を28日までと仮定しており、うるう年に対応していません。例では、Q1の平均は次のように計算されています: (1) Q1の各月の値に、月の日数を掛け合わせます。(2)これらの値の合計を出します。(3)出した合計をQ1の日数で割ります。うるう年と仮定しない場合、 $(10*31+15*28+20*31)/90=15$ という計算になります このタイム・バランス・プロパティは、ブロック・ストレージ・キューブにバインドされたディメンションでのみサポートされます。集約ストレージ・キューブでは、「加重平均-Actual_365」タイム・バランス・プロパティはサポートされません。	1月: 10 2月: 15 3月: 20 Q1: 15
カスタム	分散は無効化され、アプリケーション・デザイナーが、カスタマイズ済の分散を追加すると想定されます。たとえば、Groovyルールを使用して期間合計(Q1)に値を挿入することができ、フロー・メソッドを使用してサマリー期間が計算されます。	NA

表 9-4 (続き) タイム・バランス・プロパティ

タイム・バランス・プロパティ	説明	例
無効化	分散が無効になり、サマリー期間は読取り専用です。無効にすると、レベル・ゼロ以外の期間にデータが入力されないようになります。フロー・メソッドは、期間合計(Q1)に集計するために使用されますが、合計期間には分散しません。	NA

 ノート:

- 「加重された平均-Actual_Actual」および「加重された平均-Actual_365」タイム・バランス・プロパティは、4つの四半期がロープアップされている標準月次カレンダーでのみ使用できます。

アプリケーションで異なる「タイム・バランス」設定のデータを計算および分散する方法の詳細は、フリーフォームの操作のデータの分散方法を参照してください。
- 「カスタム」と「無効化」のタイム・バランス・プロパティの場合、アプリケーション・デザイナーは、書込み先となるメンバーのストレージ特性を認識する必要があり、集約ストレージまたはブロック・ストレージにします。たとえば、集約ストレージではレベル・ゼロのメンバーにのみ保存することができ、動的計算メンバーへの保存を試行する場合には、無視されて再計算時に上書きされます。また、分散は保存前のグリッドでのみ実行されることに注意し、自動または Groovy ルールの使用のいずれかにします。グリッドの保存後は、データの保存と読取りについては通常の Essbase の動作が引き継ぎます(つまり、標準アウトライン計算の適用、メンバー式、タイム・バランスなど)。

勘定科目タイプと差異レポート

勘定科目の差異レポートのプロパティにより、メンバー式に使用されるときに費用として扱われているかどうかのように決定されます:

- 費用: 実績値は予算値から引かれて、差異が計算されます。
- 費用外: 予算値は実績値から引かれて、差異が計算されます。

ゼロと欠落した値の勘定科目計算の設定

「最初」、「残高」、「平均」のタイム・バランス・プロパティで、データベース計算がスキップ・オプションのあるゼロと欠落した値の扱い方を指定します。

表 9-5 タイム・バランスに「最初」が設定されているときのスキップ・オプションの適用

スキップ・オプション	説明	例
なし	ゼロおよび#MISSING 値は、親の値(デフォルト)を計算するときに考慮されます。例では、最初の子(1月)の値は 0 で、ゼロは親の値を計算するときに考慮されるので、Q1 = 0 とみなされます。	1月: 0 2月: 20 3月: 25 Q1:
欠落	親の値を計算するときに#MISSING 値は除外されます。例では、最初の子(1月)の値は#MISSING で、#MISSING 値は親の値を計算するときに考慮されないため、Q1 = 2 番目の子(2月)、つまり 20 です。	1月: #MISSING 2月: 20 3月: 25 Q1: 20
ゼロ	親の値を計算するときにゼロ値は除外されます。例では、最初の子(1月)が 0 で、ゼロ値は親の値を計算するときに考慮されないため、Q1 = 2 番目の子(2月)、つまり 20 です。	1月: 0 2月: 20 3月: 25 Q1: 20
欠落およびゼロ	親の値を計算するときに#MISSING およびゼロ値は除外されます。例では、最初の子(1月)はゼロで、2 番目の子(2月)は欠落しています。欠落した値とゼロ値は親の値を計算するときに考慮されないため、Q1 = 3 番目の子(3月)、つまり 25 です。	1月: 0 2月: #MISSING 3月: 25 Q1: 25

保存された仮定

保存された仮定を使用して、プランニング仮定を集中させ、主要なビジネス・ドライバを識別し、アプリケーションの一貫性を確実にさせます。タイム・バランスと差異レポートのプロパティを選択します。

- 差異レポートにより、予算データと実際のデータ間の差異を費用または費用外に判別します。
- タイム・バランスにより、サマリー期間の末尾の値が判別されます。

次に、タイム・バランスと差異レポートのプロパティが保存された仮定勘定科目メンバーでどう使用されるかについて例を示します。

- 人数に費やされた実際の金額は予算金額よりも少ないと仮定し、差異レポートに費用タイプの保存された仮定を作成します。アプリケーションでは、予算金額から実際の金額が差し引かれて差異が判別されます。
- 期間の末尾の値を使用して、オフィスの床面積の値を判別します。
- 期間の最終時点での売上製品ユニットの数について仮定を作成します。期間中に売ったユニット数を集約して、サマリー期間の最後の値を判別します。

データ型

データ型によって、勘定科目メンバーに値がどのように保管されるかが決まります。

勘定科目メンバーの値に使用可能なデータ型:

- パーcentage: 数値を保管し、パーセントとして表示します。
- 日付: 日付として表示します。
- テキスト: テキストとして表示します。

勘定科目、エンティティ、期間およびキューブ

勘定科目、エンティティおよび期間メンバーにキューブを割り当てて、メンバーの子がアクセスできるキューブを設定します。たとえば、売上合計勘定科目は収益と P&L に有効にできますが、固定資産勘定科目は貸借対照表のみに有効です。キューブをメンバーに割り当てないと、そのメンバーの子はそのキューブにアクセスできません。

メンバーを移動したとき、新しい親が別のキューブに有効な場合、メンバーは新しい親と共通しているキューブにのみ有効です。勘定科目メンバーの新しい親に別のソース・キューブがある場合、メンバーのソース・キューブは、そのメンバーの一番新しい有効なキューブに設定されます。

エンティティとキューブ

通常、エンティティ・メンバーは異なるプランを準備します。エンティティ・メンバーを定義する際、それらの有効なキューブを指定します。フォームはキューブに関連付けられているので、各キューブについてデータを入力できるエンティティ・メンバーを制御できます。

勘定科目とキューブ

勘定科目が複数のキューブに有効な場合、ソース・キューブを指定して、それらの勘定科目値を保管するキューブのデータベースを決定します。

簡易ディメンション・エディタへのアクセス

簡易ディメンション・エディタにアクセスするには:

1. ホーム・ページで「**アプリケーション**」をクリックし、「**概要**」をクリックします。
2. 「**ディメンション**」をクリックします。
3. 「**キューブ**」ドロップダウン・リストの右側にある下矢印をクリックして、ディメンションのリストをキューブでフィルタします。
4. 表示するディメンションの名前をクリックします。
5. 次のタブから選択します:

- : 「**メンバー・プロパティの編集**」をクリックして、ディメンション・メンバーを表示して編集します。[簡易ディメンション・エディタでのメンバー・プロパティの編集](#)を参照してください。

- : 「**ディメンション・プロパティの編集**」をクリックして、ディメンションの詳細を表示して編集します。[簡易ディメンション・エディタでのディメンション・プロパティの編集](#)を参照してください。

簡易ディメンション・エディタ・グリッドの操作

簡易グリッド・インターフェースでグリッド要素を操作します。

次も参照:

- [他のディメンションへの切替え](#)
- [列レイアウトのカスタマイズ](#)
- [祖先の表示](#)
- [アプリケーションでのメンバーの用途の表示](#)
- [編集のフォーカス](#)
- [メンバーの検索](#)
- [メンバーの移動](#)
- [メンバーのソート](#)
- [別の階層へのメンバーの移動](#)
- [メンバー式の操作](#)
- [Microsoft Excel からのメンバー名のコピー](#)

他のディメンションへの切替え

簡易ディメンション・エディタ・グリッドの表示中に他のディメンションに切り替えるには:

1. 「**メンバー・プロパティの編集**」を表示します。
[簡易ディメンション・エディタへのアクセス](#)を参照してください。
2. ページ上部にあるディメンション名の横にある下矢印をクリックします。

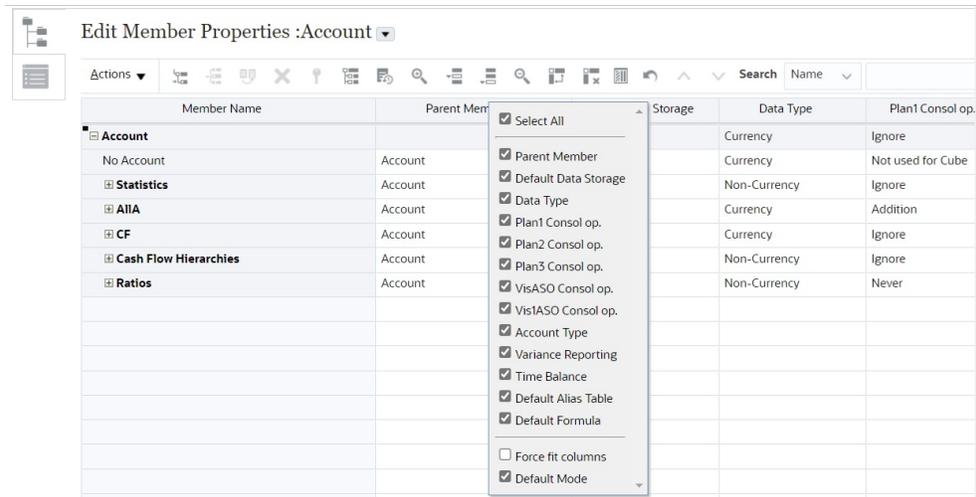
列レイアウトのカスタマイズ

簡易ディメンション・エディタ・グリッドの各列は、メンバー・プロパティ(「**メンバー名**」、**「親メンバー**」、**「デフォルトのデータ・ストレージ**」など)を表します。グリッドに最初から表示される列は、編集しているディメンション・タイプによって異なります。

列のレイアウトは、簡易ディメンション・エディタで列を非表示にする、表示する、サイズを変える操作でカスタマイズできます。「**デフォルト・モード**」オプションをクリアして、プロパティの全セット(すべての列)を表示することもできます。たとえば、「**デフォルト・モード**」をクリアすると、勘定科目ディメンションの UDA 列を表示できます(**デフォルト・モード**では、UDA 列は非表示です)。

簡易ディメンション・エディタ・グリッドで列レイアウトをカスタマイズするには:

1. 「**メンバー・プロパティの編集**」を表示します。
[簡易ディメンション・エディタへのアクセス](#)を参照してください。
2. ディメンション・グリッドで、任意の列見出しを右クリックします。
列のチェックリストが表示されます。列またはグリッドのサイズを変更するオプションも表示されます。



3. グリッドで非表示または表示する列(プロパティ)のチェック・ボックスを選択するか、クリアします。

ノート:

グリッドですべてのプロパティ列を表示するには、「**デフォルト・モード**」チェック・ボックスをクリアします。デフォルトでは「**デフォルト・モード**」は選択されており、表示されるプロパティが制限されます。このオプションをクリアすると、大きい(完全な)プロパティ・セットが(列として)表示されます。

4. グリッドに表示されるグリッドまたは列のサイズを変更するには、「**列の自動調整**」オプションを選択するか、クリアします。「**列の自動調整**」オプションを選択すると、すべての列がスクロールなしでグリッドに表示されるように、列のサイズが変更されます。

祖先の表示

祖先はすべて、ディメンション階層で選択したメンバーより上位のメンバーです。

簡易ディメンション・エディタ・グリッドで、選択したメンバーの祖先を表示するには:

1. 「**メンバー・プロパティの編集**」を表示します。
簡易ディメンション・エディタへのアクセスを参照してください。
2. ディメンション・エディタ・グリッドでメンバーを選択します。
3. 「**アクション**」をクリックし、「**祖先の表示**」を選択します。

アプリケーションでのメンバーの用途の表示

メンバー削除などの操作を実行する前に、「**用途の表示**」を使用して、メンバーが使用されているアプリケーション内の場所(フォームや為替レートなど)を確認することが重要です。

簡易ディメンション・エディタを使用して、メンバーがアプリケーションのどこで使用されているかを確認するには:

1. 「**メンバー・プロパティの編集**」を表示します。
簡易ディメンション・エディタへのアクセスを参照してください。
2. ディメンション・エディタ・グリッドでメンバーを選択します。
3. 「**アクション**」をクリックし、「**用途の表示**」をクリックします。

編集のフォーカス

簡易ディメンション・エディタ・グリッドを操作するとき、ズームイン、ズームアウト、選択項目の保持、選択項目の削除、凍結を使用して編集のフォーカスを絞ります。

ディメンション・エディタ・グリッドを表示中にこれらの操作を実行するには:

1. 「**メンバー・プロパティの編集**」を表示します。
簡易ディメンション・エディタへのアクセスを参照してください。
2. グリッドの特定メンバーに対する編集のフォーカスを絞るには、メンバーを選択してから、次のいずれかのズーム操作をクリックします。
 - 「**次のレベルへズーム・イン**」は、選択しているメンバーの1レベル下にあるすべてのメンバーを表示します。
 - 「**すべてのレベルへズーム・イン**」は、選択しているメンバーの下にあるすべての子孫メンバーを表示します。
 - 「**最下位レベルへズーム・イン**」は、選択しているメンバーの下にあって、子を持たないすべての子孫メンバーを表示します。
 - 「**ズーム・アウト**」は、選択しているメンバーの1レベル上にあるメンバーを表示します。
3. グリッドの特定の行または列に編集のフォーカスを絞るには、次の操作からいずれかを選択します。
 - 「**選択項目の保持**」は、選択した行または列のみをグリッドに表示します。
 - 「**選択項目の削除**」は、選択した行または列をグリッドから削除します。
 - 「**凍結**」(列のみ)は、選択した列と、選択した列の左にあるすべての列を固定し、それらの列をスクロールできないようにします。固定した列の右側のみがスクロールできるようになります。たとえば、メンバー名を含む最初の列のみに固定すると、メンバー名が表示されたまま、右にスクロールしてメンバーのプロパティを編集できます。列を凍結解除するには、「**凍結**」をもう一度クリックします。

メンバーの検索

簡易ディメンション・エディタ・グリッドでディメンション・メンバーを検索するには:

1. ディメンションの「**メンバー・プロパティの編集**」を表示します。
簡易ディメンション・エディタへのアクセスを参照してください。
2. 「**検索**」で、「**名前**」、「**別名**」または「**両方**」を選択し、検索する検索テキスト(メンバー名、別名または文字列の一部)を入力します。
3. 次のいずれかの検索オプションを選択します:

- 上方向に検索
- 下方向に検索

メンバーの移動

メンバーを移動するには:

1. 「**メンバー・プロパティの編集**」を表示します。
[簡易ディメンション・エディタへのアクセス](#)を参照してください。
2. 移動するメンバーを選択します。
3. メンバーを1つ上に移動するには、をクリックします。メンバーを1つ下に移動するには、をクリックします。

メンバーのソート

子または子孫による昇順または降順でメンバーをソートできます。メンバーのソートはアウトラインに影響を及ぼします。たとえば、ユーザーが簡易ディメンション・エディタで階層内のメンバーを迅速に見つけることができるように、子メンバーのリストを降順でソートして、アルファベット順に表示できます。

簡易ディメンション・エディタを使用してメンバーをソートするには:

1. 「**メンバー・プロパティの編集**」を表示します。
[簡易ディメンション・エディタへのアクセス](#)を参照してください。
2. ディメンション・グリッドで、子または子孫をソートするメンバーを選択します。
3. 「**ソート**」で、「**子**」または「**子孫**」を選択します。

ノート:

- ページの上部に「**ソート**」オプションが表示されていない場合は、をクリックします。
- 子でソートする場合は、選択したメンバーの真下のレベルにあるメンバーのみにソートがかかります。子孫でソートする場合は、選択したメンバーのすべての子孫にソートがかかります。

4.  または  をクリックします。

別の階層へのメンバーの移動

簡易ディメンション・エディタで、メンバーを別の階層に移動するには:

1. 「**メンバー・プロパティの編集**」を表示します。
[簡易ディメンション・エディタへのアクセス](#)を参照してください。
2. グリッドの「**親メンバー**」列で、移動するメンバーの新しい親の名前を入力します。

3. 「保存」をクリックします。

メンバー式の操作

簡易ディメンション・エディタ・グリッドの式バーで直接、または有効なメンバー式を検証できる「メンバー式」を使用して、メンバー式を定義または編集できます。

演算子、計算関数、ディメンション名、メンバー名および数値定数を組み合わせてメンバー式を定義することによって、メンバーの計算を実行できます。メンバー式には次も含まれます。

- 式で許可される演算子タイプ、関数、値、メンバー名、UDA など。
- 式に展開するスマート・リスト値またはデータベースのリフレッシュにおける値を含む事前定義済の数式。

簡易ディメンション・エディタでメンバー式を定義または編集するには:

1. 「メンバー・プロパティの編集」を表示します。

[簡易ディメンション・エディタへのアクセス](#)を参照してください。

2. グリッドのデフォルト式列で、式を定義または編集するメンバーを選択します。次のいずれかのオプションを使用して、メンバーの式を定義または編集します。

- ディメンション・エディタ・グリッドのセルをもう一度クリックし、式を入力または編集します。
- ディメンション・エディタ・グリッドの上部にある式バー内をクリックして、式を入力または編集します。
- 式バーの横にある  をクリックして、式を入力または編集します。

ヒント:

式にメンバー名を含めるには、グリッドの式セルにフォーカスを置いたままにします。[Ctrl]を押しながら、式に含めるメンバーの名前をクリックします。メンバー名が式バーに表示されます。

3. オプション: メンバー式の妥当性をチェックするには、式バーの横にある  をクリックしてから、「検証」をクリックします。
4. 「保存」をクリックします。

Microsoft Excel からのメンバー名のコピー

Microsoft Excel から名前をコピーして貼り付けるには:

1. Excel で、1つのセルまたはセル範囲のメンバー名をハイライトして、[Ctrl]を押しながら[C]を押してデータをクリップボードにコピーします。
2. 「簡易」ディメンション・エディタで1つまたは複数のターゲット・セルをハイライト表示して選択し、[Ctrl]を押しながら[V]を押します。
3. クリップボード・ヘルパーが表示されたら、再度[Ctrl]を押しながら[V]を押します。データがクリップボード・ヘルパーに貼り付けられます。

4. 「貼付け」をクリックして、簡易ディメンション・エディタにデータを貼り付けます。

簡易ディメンション・エディタでのメンバー・プロパティの編集

次も参照:

- [「メンバー・プロパティの編集」へのアクセス](#)
- [簡易ディメンション・エディタでのメンバーの追加](#)
- [簡易ディメンション・エディタでのメンバーの編集](#)
- [簡易ディメンション・エディタでのメンバーの削除](#)
- [簡易ディメンション・エディタでの共有メンバーの追加](#)
- [ディメンション・メンバーへのアクセス権の割当て](#)

「メンバー・プロパティの編集」へのアクセス

簡易ディメンション・エディタで「メンバー・プロパティの編集」タブを開くには:

1. ホーム・ページで「アプリケーション」をクリックし、「概要」をクリックします。
2. 「ディメンション」をクリックしてから、メンバー・プロパティを表示するディメンションの名前をクリックします。
3. 「メンバー・プロパティの編集」をクリックします。
4. 簡易ディメンション・エディタ・グリッドでメンバー・プロパティを編集するには、グリッド・セル内をクリックしてテキストを編集するか、ドロップダウン・メニューを開いて、そこからメンバー・プロパティを選択します。行および列でメンバー・プロパティをドラッグ・アンド・ドロップして、同じプロパティを埋めることもできます。プロパティのオプションと説明については、次のメンバー・プロパティ表を参照してください。

[簡易ディメンション・エディタ・グリッドの操作](#)を参照してください。

ノート:

簡易ディメンション・エディタ・グリッドの各列は、メンバー・プロパティを表しています。グリッドに最初から表示されるプロパティのリスト(列)は、編集しているディメンション・タイプによって異なります。列のレイアウトは、列を非表示にする、表示する、サイズを変える操作でカスタマイズできます。「デフォルト・モード」オプションをクリアして、プロパティの全セット(すべての列)を表示することもできます。

簡易ディメンション・エディタ・グリッドで列レイアウトをカスタマイズするには、[列レイアウトのカスタマイズ](#)を参照してください。

メンバー名は、[命名規則](#)に記載されているガイドラインに従っている必要があります。

共有メンバーは、[簡易ディメンション・エディタでの共有メンバーの追加](#)に沿っている必要があります。

表 9-6 メンバーのプロパティ

プロパティ	値
メンバー名	ディメンション・メンバー全体で一意である名前
親メンバー	メンバーの親が階層内に存在する場合、親の名前。
説明	オプション - メンバーの説明(複数のメンバーに対して同じ説明も使用できます)

 **ノート:**

シード・メンバーの説明の編集は許可されていません。ユーザーが追加した他のすべてのメンバーの説明は編集できます。

別名表	オプション: 別名が格納されている別名表を選択します。「 別名 」にメンバーの代替名を入力します。 別名表の管理 を参照してください。
勘定科目メンバーのみ: 勘定科目タイプ	「 費用 」、「 収益 」、「 資産 」、「 負債 」、「 資本 」または「 保存された仮定 」を選択します。 詳細は、 勘定科目タイプ を参照してください。
勘定科目メンバーのみ: 差異レポート	勘定科目タイプが「 保存された仮定 」の場合、「 費用 」または「 費用外 」を選択します。保存された仮定を、収益、資産、負債、資本の勘定科目に指定します。
勘定科目メンバーのみ: タイム・バランス	「 フロー 」、「 最初 」、「 残高 」、「 平均 」、「 入力 」、「 加重された平均-Actual_Actual 」または「 加重された平均-Actual_365 」を選択します。 詳細は、 タイム・バランス・プロパティ を参照してください。
勘定科目メンバーのみ: スキップ	勘定科目タイプが「 資産 」、「 資本 」または「 負債 」の場合、「 なし 」、「 欠落 」、「 ゼロ 」または「 欠落およびゼロ 」を選択します。 詳細は、 ゼロと欠落した値の勘定科目計算の設定 を参照してください。
勘定科目メンバーのみ: 為替レート・タイプ	「 平均 」、「 期末 」または「 履歴 」を選択します。 詳細は、 データ型 を参照してください。
データ型	「 パーセンテージ 」、「 日付 」または「 テキスト 」を選択します。 詳細は、 データ型 を参照してください。
勘定科目メンバーのみ: 配分	週次配分を設定します。アプリケーションの作成時に、このオプションが選択済で基本期間が 12 か月の場合、リーフ勘定科目メンバーに使用できます。

表 9-6 (続き) メンバーのプロパティ

プロパティ	値
階層タイプ	<p>集約ストレージ・キューブにバインドされたディメンションに使用できます。集約ストレージ・ディメンションは、複数階層をサポートするために自動的に有効になります。複数階層のディメンションの最初の階層は保管階層である必要があります。</p> <p>保管階層タイプのメンバーについては、有効なキューブ集約オプションは「加算」または「無視」のみです。保管階層で、最初のメンバーを「加算」に設定する必要があります。動的階層タイプのメンバーについては、すべてのキューブ集約オプションが有効です。「ラベルのみ」メンバーの子ではない保管階層では、集計演算子として「加算」を指定する必要があります。「ラベルのみ」メンバーの子は「無視」に設定できます。</p>
データ・ストレージ	<p>データ・ストレージのプロパティ。新規カスタム・ディメンション・メンバー(ルート・メンバー以外)に対しては、「共有しない」がデフォルトです。</p>
2パス計算	<p>親メンバーまたは他のメンバーの値に基づいてメンバーの値を再計算します。「動的計算」または「動的計算および保管」プロパティで、勘定科目とエンティティ・メンバーに使用できます。</p>
キューブ集計演算子	<p>各キューブの集約オプションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • キューブに使用しない(メンバーはキューブに対して無効になる) • 加算 • 減算 • 乗算 • 除算 • パーセント • 無視 • なし(メンバーは階層に関係なく集約されない) <p>複数のキューブがメンバーに有効な場合にのみ、ソース・キューブを選択できます。メンバーの親に有効なキューブと集約オプションのみが使用可能です。親がキューブまたは集約オプションに有効でない場合は、子メンバーも有効になりません。勘定科目またはエンティティの親メンバーについてキューブの選択を解除すると、その親のすべての子孫についても、その選択が解除されます。保管階層タイプのメンバーに対して有効な集約オプションは、「加算」または「無視」のみです。</p> <p>カスタム・ディメンションおよび期間ディメンションのメンバーには、勘定科目およびエンティティ・ディメンションと同様に、キューブ別に用途を設定できます。</p> <p>注意:アプリケーションにデータを入力した後でディメンション・メンバーのキューブの選択を解除すると、アプリケーションをリフレッシュしたときにデータが失われる場合があります。勘定科目メンバーについては、選択を解除されたキューブがソース・キューブの場合、データが失われます。</p>
勘定科目メンバーのみ: ソース・キューブ	<p>メンバーのソース・キューブを選択します。共有メンバーは基本メンバーへのポイントで、保管されません。これは共有メンバーに無効です。共有メンバーに適用されないため、ソース・プラン・フィールドは使用できませんが、共有勘定科目メンバーのソース・キューブは基本メンバーのソース・キューブと一致します。</p>
スマート・リスト	<p>オプション: スマート・リストを選択してメンバーに関連付けます。</p>

表 9-6 (続き) メンバーのプロパティ

プロパティ	値
解決順	式が評価される順序を指定します。0 から 100000 までの整数を入力してください。指定された解決順を持つメンバーの式は、低い解決順から高い解決順に計算されます。デフォルトは 0 です。 「解決順」は、集約ストレージ・キューブに加えて、ハイブリッドが有効になったブロック・ストレージ・キューブにも使用できます。ブロック・ストレージ・キューブの解決順は、簡易ディメンション・エディタを使用してのみ編集可能です。
動的な子に対して使用可能	ユーザーが、動的な親メンバーを使用するように構成されたビジネス・ルールの実行時プロンプトでメンバー名を入力することにより、このメンバーの子を作成できるようにします。
使用可能な動的な子の数	このオプションは、「動的な子に対して使用可能」が選択されている場合のみ使用可能です。ユーザーが作成できる、動的に追加する最大メンバー数を入力します。デフォルトは 10 です。
メンバー作成者に付与されたアクセス権	このオプションは、「動的な子に対して使用可能」が選択されている場合のみ使用可能です。メンバー作成者が実行時プロンプトで作成する動的メンバーに対して持つ権限を判別します： <ul style="list-style-type: none"> • 継承: メンバー作成者は、新しく作成したメンバーに対する最も近い親のアクセス権を継承します。 • なし: メンバー作成者には、新しく作成したメンバーへのアクセス権は割り当てられません。(サービス管理者は、後でメンバー作成者にメンバーへのアクセス権を割り当てることができます。) • 読取り: メンバー作成者には、新しく作成したメンバーへの読取りアクセス権が割り当てられます。 • 書込み: メンバー作成者には、新しく作成したメンバーへの書込みアクセス権が割り当てられます。 サービス管理者がこれらの設定を変更した場合、その変更は将来の動的メンバーにのみ適用され、遡って動的メンバーに適用されることはありません。

簡易ディメンション・エディタでのメンバーの追加

メンバーは、[命名規則](#)に記載されているガイドラインに従っている必要があります。

共有メンバーを追加するには、[簡易ディメンション・エディタでの共有メンバーの追加](#)を参照してください。

簡易ディメンション・エディタでメンバーを追加するには:

1. ホーム・ページで「アプリケーション」をクリックし、「概要」をクリックします。
2. 「ディメンション」タブをクリックします。
3. 「キューブ」の横にある下矢印をクリックして、ディメンションのリストをキューブでフィルタします。
4. 更新するディメンションの名前をクリックします。
5. 「メンバー・プロパティの編集」タブをクリックします。

 ヒント:

別のディメンションを選択するには、ページ上部のディメンション名の横にある下矢印をクリックします。

6. メンバーの追加:

- 子メンバーを追加するには、親レベルのメンバーを選択し、「アクション」をクリックして、「子の追加」をクリックします。

 ノート:

子メンバーは、親メンバーのディメンション・プロパティを継承します。

- 兄弟メンバーを追加するには、メンバーを選択し、「アクション」をクリックして、「兄弟の追加」をクリックします。
 - カレンダーに年を追加するには、「年」ディメンションを選択し、「アクション」をクリックして、「年の追加」をクリックします。追加する年数を入力し、「適用」をクリックして、カレンダーの最後に年を追加するかどうかを確認します。「はい」をクリックすると、終了年の後に年が追加されます。「いいえ」をクリックすると、開始年の前に年が追加されます。
 - 「年」ディメンションのすべてのメンバーを含む「すべての年」親メンバーを追加するには、「年」ディメンションを選択し、「アクション」をクリックして、「すべての年の追加」をクリックします。

「すべての年」親メンバーにより、ユーザーはプロジェクトの終了日までのコスト合計などの、複数年にわたり累計されたデータを表示することができます。アプリケーションに対して定義された場合、「すべての年」メンバーには「年なし」メンバーは含まれません。
7. メンバー・プロパティを設定または変更するには、「メンバー・プロパティの編集」グリッドでセルをクリックし、更新します。[簡易ディメンション・エディタでのメンバーの編集](#)を参照してください。
 8. 保存する前に行った直前の変更を元に戻すには、「元に戻す」をクリックします。
 9. 前回の保存以降に行ったすべての変更を元に戻すには、「リフレッシュ」をクリックします。
 10. 変更を保存するには、「保存」をクリックします。
 11. 保存後に変更内容をアプリケーション全体に適用するには、「データベースのリフレッシュ」をクリックします。
 12. ディメンション・メンバーを作成した後、通常は、次のタスクを完了させます。
 - アクセス権を割り当てます。「アクション」をクリックし、「権限の割当て」をクリックします。
 - カスタム属性を割り当てます。[簡易ディメンション・エディタでのディメンション・プロパティの編集](#)を参照してください。

簡易ディメンション・エディタでのメンバーの編集

簡易ディメンション・エディタ・グリッドで、メンバーを直接編集できます。

メンバーを編集するには:

1. ホーム・ページで「**アプリケーション**」をクリックし、「**概要**」をクリックします。
2. 「**ディメンション**」タブをクリックします。
3. 「**キューブ**」の横にある下矢印をクリックして、ディメンションのリストをキューブでフィルタします。
4. 編集するディメンションの名前をクリックします。
5. 「**メンバー・プロパティの編集**」タブをクリックします。

ヒント:

別のディメンションを選択するには、ページ上部のディメンション名の横にある下矢印をクリックします。

6. 次のいずれかの操作を実行します。
 - メンバーを追加するには、[簡易ディメンション・エディタでのメンバーの追加](#)を参照してください。
 - ディメンション・エディタ・グリッドを移動して、特定のメンバー、行または列に編集のフォーカスを当てるには、[簡易ディメンション・エディタ・グリッドの操作](#)を参照してください。
 - メンバー・プロパティを変更するには、ディメンション・エディタ・グリッドでセル内をクリックし、ドロップダウン・リストからオプションを選択します。たとえば、勘定科目ディメンション・メンバーで勘定科目タイプを編集する場合は、「勘定科目タイプ」列のセル内をクリックします。セル内に表示される下矢印をクリックし、「勘定科目タイプ」オプションを選択します。メンバー・プロパティの詳細は、[簡易ディメンション・エディタでのメンバー・プロパティの編集](#)を参照してください。

ノート:

グリッドですべてのプロパティ列を表示するには、グリッドの任意の見出しを右クリックし、「**デフォルト・モード**」チェック・ボックスが表示されるまで下にスクロールします。「**デフォルト・モード**」チェック・ボックスをクリアすると、グリッドにすべてのプロパティ列が表示されます。

- メンバーを削除するには、[簡易ディメンション・エディタでのメンバーの削除](#)を参照してください。
7. 保存する前に行った直前の変更を元に戻すには、 をクリックします。
 8. 前回の保存以降に行ったすべての変更を元に戻すには、 をクリックします。
 9. 変更を保存するには、「**保存**」をクリックします。

10. 保存後に変更内容をアプリケーション全体に適用するには、 をクリックします。

簡易ディメンション・エディタでのメンバーの削除

各データ値は、一連のディメンション・メンバー値とキューブによって識別されます。ディメンション・メンバーの削除やキューブの選択の解除を行うと、アプリケーションをリフレッシュしたときにデータが失われます。

メンバーを削除する前に、「用途の表示」を使用して、それらが使用されているアプリケーション内の場所(フォームや為替レートなど)を確認します。[アプリケーションでのメンバーの用途の表示](#)を参照してください。

エンティティ・メンバーをディメンションから削除する前に、アプリケーション全体でそれを削除する必要があります。たとえば、エンティティ・メンバーがフォームで使用されている場合には、そのエンティティ・メンバーをディメンションから削除する前に、フォームから削除する必要があります。

メンバーを削除するには:

1. ホーム・ページで「**アプリケーション**」をクリックし、「**概要**」をクリックします。
2. 「**ディメンション**」をクリックします。
3. 「**キューブ**」の横にある下矢印をクリックして、ディメンションのリストをキューブでフィルタします。
4. 削除するメンバーを含むディメンションの名前をクリックします。
5. 「**メンバー・プロパティの編集**」をクリックします。

ヒント:

別のディメンションを選択するには、ページ上部のディメンション名の横にある下矢印をクリックします。

6. ディメンション・エディタ・グリッドから、削除するメンバーを選択します。
7. 「**メンバーの削除**」をクリックします。

ノート:

基本メンバーを削除すると、その共有メンバーも削除されます。

8. 「メンバーの削除」の問合せで、「**OK**」をクリックします。
9. ビジネス・ルールおよびレポートを更新および検証します。

簡易ディメンション・エディタでの共有メンバーの追加

メンバーを共有すると、アプリケーション内でロールアップ構造の入れ替えが行えます。共有メンバーを作成する前に基本メンバーが存在している必要があります。基本

メンバーに複数の共有メンバーを作成できます。上から下への表示位置では、基本メンバーはその共有メンバーより先に表示されている必要があります。

共有メンバーは、エンティティ、勘定科目、ユーザー定義のカスタム・ディメンションに使用できます。アウトラインをロールアップする際、共有メンバーの値を無視して二重計算を防ぐことができます。

共有メンバーは、メンバー名、別名、メンバーに有効なキューブなどのいくつかのプロパティ定義を基本メンバーと共有します。共有メンバーには、一意の親メンバーおよび異なるロールアップの集約を設定させる必要があります。カスタム属性、カスタム属性値およびメンバー式を共有メンバーに使用することはできません。基本メンバーの名前を変更すると、すべての共有メンバーの名前も変更されます。

ノート:

共有メンバーには、基本メンバーと同じ名前が必要です。基本メンバー名も共有メンバー名も大文字と小文字を区別します。

共有メンバーを別の親メンバーに移動させることはできません。移動させる場合、共有メンバーを削除してから、別の親メンバーの下に再度作成します。基本メンバーをレベル・ゼロにする必要はありません。共有メンバーにデータを入力し、値を基本メンバーと共に保管できます。

簡易ディメンション・エディタで共有メンバーを追加するには:

1. 「**メンバー・プロパティの編集**」を表示します。
[簡易ディメンション・エディタへのアクセス](#)を参照してください。
2. 共有メンバーの追加:
 - a. 基本メンバーと同じ名前で、子メンバーを追加します。
 - b. 新規メンバーの「**親メンバー**」に、新しい親の名前を入力します。
 - c. 新規メンバーの「**デフォルトのデータ・ストレージ**」で、「**共有**」を選択します。
3. 「**保存**」をクリックします。

他のキューブすべてのデータ・ストレージ・プロパティが、自動的に「**共有**」に設定されます。

ディメンション・メンバーへのアクセス権の割当て

ユーザー定義のカスタム・ディメンションのメンバーに対するアクセス権を割り当てる前に、ディメンションの「**ディメンション・プロパティの編集**」ページで「**セキュリティの適用**」チェック・ボックスを選択する必要があります。[簡易ディメンション・エディタでのディメンション・プロパティの編集](#)を参照してください。

ディメンション・メンバーにアクセス権を割り当てるには:

1. 「**メンバー・プロパティの編集**」を表示します。
[簡易ディメンション・エディタへのアクセス](#)を参照してください。
2. メンバーを選択し、 をクリックします。

3. 「権限」をクリックします。
4. 次のトピックを参照して、権限を追加、編集または削除します：
 - [メンバーに対するアクセス権の追加、編集および削除](#)
 - [共有メンバーへの有効なアクセス権限について](#)

メンバーに対するアクセス権の追加、編集および削除

選択したメンバーにアクセスできるユーザーおよびグループを指定できます。

メンバーに対するアクセス権限の割当て、編集および削除を行うには:

1. 「**メンバー・プロパティの編集**」を表示します。
[簡易ディメンション・エディタへのアクセス](#)を参照してください。
2. メンバーを選択し、をクリックします。
3. 「権限」をクリックします。
4. 「**ユーザー/グループの追加**」をクリックします。
5. アクセス権を追加するには:
 - a. をクリックし、選択したメンバーにアクセスするユーザーおよびグループを選択します。
「**ユーザー**」をクリックしてすべてのユーザー名を表示します。または、「**グループ**」をクリックしてすべてのグループを表示します。
 - b. **オプション**: 関係を選択します。
たとえば、「**子**」を選択して、選択したメンバーの子にアクセス権を割り当てます。
6. アクセス権を変更するには:
 - a. 表示されているユーザーまたはグループのアクセス権タイプを選択します。
「**ユーザー**」をクリックしてすべてのユーザー名を表示します。または、「**グループ**」をクリックしてすべてのグループを表示します。
 - b. **オプション**: 関係を選択します。
たとえば「**子**」を選択し、選択したメンバーの子にアクセス権を割り当てます。
7. アクセス権を除去するには、をクリックします。
8. 「OK」をクリックします。
9. 「閉じる」をクリックします。

共有メンバーへの有効なアクセス権限について

共有メンバーに対して直接アクセス権を割り当てることはできません。共有メンバーは、その基本メンバー、親または祖先からアクセス権限を継承します。

アプリケーションでは、メンバーのアクセス権限継承関係に基づき、最初にユーザー、次にグループという順でアクセス権限が各レベルで確認されます。複数のアクセス権

限が存在する場合、最も制限の少ないアクセス権限が適用されます(たとえば、書込みアクセスは読取りアクセスより優先されます)。

サンプルの親および子エンティティ・メンバー

- ⊕ **United States**
 - ⊖ CA (base)
 - ⊖ NY
- ⊕ **West**
 - ⊖ CA (shared)
 - ⊖ NV
- ⊕ **Sales Region 1**
 - ⊖ CA (shared)

表 9-7 共有メンバーへの継承されたアクセス権の例

ケース	アクセス権限	基本および共有メンバー CA への有効なアクセス権	説明
ケース 1	CA (ベース) = なし iDescendants (西部) = 読取り	読取り	「読取り」は「なし」よりも制限が少ないため、CA は West の親から「読取り」アクセス権を継承します。
ケース 2	iDescendants (米国) = なし iDescendants (西部) = 読取り iDescendants (営業地域 1) = 書込み	書込み	「書込み」は「読取り」および「なし」よりも制限が少ないため、CA は営業地域 1 の親から「書込み」アクセス権を継承します。
ケース 3	iDescendants (米国) = 書込み iDescendants (西部) = なし iDescendants (営業地域 1) = 読取り	書込み	「書込み」は「読取り」および「なし」よりも制限が少ないため、CA は米国の親から「書込み」アクセス権を継承します。

簡易ディメンション・エディタでのディメンション・プロパティの編集

簡易ディメンション・エディタでディメンションのプロパティにアクセスするには：

1. ホーム・ページで「アプリケーション」をクリックし、「概要」をクリックします。
2. 「ディメンション」タブをクリックしてから、ディメンション・プロパティを表示するディメンションの名前をクリックします。

3. 「ディメンション・プロパティの編集」タブ  をクリックします。

ディメンション・プロパティは、命名規則にあるガイドラインに適合させてください。

表 9-8 ディメンション・プロパティ

プロパティ	値
ディメンション	ディメンション全体で一意である名前を入力します。
説明	オプション: 説明を入力します。
「別名表」 および 「別名」	オプション: 別名表を選択します。ディメンションの代替名を入力します。 別名表の管理 を参照してください。
キューブ	ディメンションが有効になっているキューブを選択します。このオプションをクリアすると、ディメンションのすべてのメンバーが、選択を解除したキューブに対して無効になります。
2パス計算	親メンバーまたは他のメンバーの値に基づいてメンバーの値を再計算します。「動的計算」または「動的計算および保管」プロパティで、勘定科目とエンティティ・メンバーに使用できます。
セキュリティの適用	ディメンション・メンバーにセキュリティの設定を行います。ディメンション・メンバーにアクセス権を割り当てる前に選択する必要があります。そうしない場合、ディメンションにセキュリティがかからないため、ユーザーは無制限にメンバーをアクセスさせることができます。 ディメンション・メンバーへのアクセス権の割当て を参照してください。
データ・ストレージ	データ・ストレージ・オプションを選択します。デフォルトは「共有しない」です。 <ul style="list-style-type: none"> • 保管: メンバーのデータ値を保管します。 • 動的計算および保管: メンバーのデータ値を計算し、値を保管します。 • 動的計算: メンバーのデータ値を計算し、値を無視します。 • 共有しない: 同じディメンション内のメンバーでデータ値を共有することを禁止します。 • ラベルのみ: メンバーに関連付けられたデータがありません。 • 共有: 同じディメンション内のメンバーでデータ値を共有することを許可します。 ストレージ・オプション を参照してください。
表示オプション	「メンバー選択」ダイアログ・ボックスのアプリケーションのデフォルト表示オプションを設定します。メンバーまたは別名を表示するには、「メンバー名」または「別名」を選択します。「メンバー名:別名」では、左側にメンバーが表示され、右側に別名が表示されます。「別名:メンバー名」では、左側に別名が表示され、右側にメンバーが表示されます。
階層タイプ	集約ストレージ・キューブにバインドされたディメンションに使用できます。集約ストレージ・ディメンションは、複数階層をサポートするために自動的に有効になります。複数階層のディメンションの最初の階層は「保管済」である必要があります。 「保管済」階層タイプのメンバーについては、有効なキューブ集約オプションは「加算」または「無視」のみです。保管階層で、最初のメンバーを「加算」に設定する必要があります。「動的」階層タイプのメンバーについては、すべてのキューブ集約オプションが有効です。「ラベルのみ」メンバーの子ではない「保管済」階層では、集計演算子として「加算」を指定する必要があります。「ラベルのみ」メンバーの子は「無視」に設定できます。
カスタム属性	ディメンションのカスタム属性の「作成」または「同期」をクリックします。

簡易ディメンション・エディタでの属性の操作

属性は、製品のサイズ、色など、データの特徴を示します。属性を使用すると、その特性に基づいてディメンションのメンバーのグループ化および分析が可能になります。たとえば、製品の収益性をサイズやパッケージに基づいて分析でき、さらに各市場地域の人口サイズなどの市場属性を分析に組み込むことで、より効果的な結論を下すことができます。

疎ディメンションのメンバーのみに属性を割り当てることができます。ラベルのみメンバーには、属性を割り当てることができません。属性ディメンションは、親が動的に計算されるため、集約プロパティを持っていません。

勘定科目のディメンションは通常、密として定義されますので、すべてのキューブのディメンションを疎に変更しないかぎり、属性を割り当てることができません。ディメンションを疎から密に変更する場合、変更するディメンションのすべての属性および属性の値は自動的に削除されます。

[属性のデータ型の理解](#)に記載されているように、属性は、テキスト、日付、ブール式、数値のデータ型を持つことができます。

属性名は、[命名規則](#)にあるガイドラインに適合させてください。

簡易ディメンション・エディタで属性を作成または編集するには:

1. ホーム・ページで、「**アプリケーション**」、「**概要**」、「**ディメンション**」の順にクリックします。
2. 属性の疎ディメンションを選択します。

Note:

疎ディメンションのみが属性を持つことができます。[疎ディメンションおよび密ディメンションについて](#)を参照してください。

3. 「**ディメンション・プロパティの編集**」タブをクリックします。
4. オプションを選択します:
 - 属性を作成するには、「**カスタム属性**」の横にある「**作成**」をクリックします。属性の名前を入力し、「**テキスト**」、「**日付**」、「**ブール**」または「**数値**」のデータ型を選択します。

Note:

- 属性が一度作成されると、データ型を変更することができなくなります。
- 日付属性を操作するには、その前に「**アプリケーション設定**」にある「**属性ディメンション日付フォーマット**」を選択して、保存する必要があります。

[属性のデータ型の理解](#)を参照してください。

- 属性を変更するには、「**カスタム属性**」で、変更する属性の横にある
...
をクリックし、「**編集**」を選択して、属性名を更新します。
5. 「**閉じる**」をクリックします。
「**閉じる**」をクリックすると、階層が検証され、問題が検知されるとエラーが表示されます。たとえば、日付の属性値は正しいフォーマットで入力される必要があります。数値と日付のディメンションには、少なくとも1つの定義された属性値が必要です。
 6. ビジネス・ルールおよびレポートを更新および検証します。

関連トピック:

- [簡易ディメンション・エディタでの属性の削除](#)
- [簡易ディメンション・エディタでの UDA の操作](#)
- [簡易ディメンション・エディタでの属性値の操作](#)

 **Tip:**

属性(「赤」など)で明示的にフィルタするかわりに、属性ディメンションのユーザー変数を作成し、ユーザー変数をフィルタとして使用できます。次に、ユーザー変数を動的ユーザー変数として有効化し、実行時にユーザーがフィルタの値を変更できるようにすることができます。これは、動的フィルタ処理を可能にする有用な手法です。

[ユーザー変数の管理](#)を参照してください。

簡易ディメンション・エディタでの属性の削除

属性を削除すると、その属性に関連付けられたすべての属性値も削除されます。属性値は割り当てられたメンバーから除去され、属性は割り当てられたディメンションから除去されます。

簡易ディメンション・エディタで属性を削除するには:

1. ホーム・ページで、「**アプリケーション**」、「**概要**」、「**ディメンション**」の順にクリックします。
2. 削除する属性を含むディメンションの名前をクリックし、「**ディメンション・プロパティの編集**」タブをクリックします。
3. 「**カスタム属性**」で、編集する属性の横にある
...
をクリックし、「**削除**」を選択します。
4. 「**はい**」をクリックします。
5. ビジネス・ルールおよびレポートを更新および検証します。

簡易ディメンション・エディタでの UDA の操作

ユーザー定義の属性(UDA)、記述的な語やフレーズは、計算スクリプト、メンバー式、レポートおよびフォームで使用できます。UDA は UDA に関連したメンバーのリストを戻します。
例:

- 数種類の製品メンバーのついた製品ディメンションでは、「新製品」と呼ばれる UDA を作成し、製品ディメンションの階層にある新製品へ割り当てることができます。その後、指定した新製品における特定の計算を基にすることができます。
- フォームの設計時に、UDA を使用して、共通属性に基づいてフォームのメンバーを選択できます。UDA を使用してフォームを作成すると、その UDA に割り当てられているメンバーが、フォームに動的に追加されます。たとえば、「新製品」と呼ばれる UDA を作成し、この UDA を製品ディメンションの階層にある新製品に割り当てた場合、フォームでは、実行時に新製品が自動的に表示されます。フォーム・デザイナーで選択する場合、UDA の先頭に UDA (新製品) のように UDA が付きます。
- HSP_UDF UDA を使用して、アプリケーションをリフレッシュする際の式の上書きを防止できます。ビジネス・プロセスに関連する各データベースにログオンし、UDA を使用したメンバー式を作成する必要があります。この UDA の構文は、(UDAs: HSP_UDF) です。
- @XREF 関数を使用して、別のデータベースのデータ値を検索し、現在のデータベースから値を計算する場合、HSP_NOLINK UDA をメンバーに追加して、@XREF 関数が、そのメンバー用として選択されたソース・キューブではないすべてのキューブで作成されてしまうのを防ぐことができます。

UDA はディメンションによって特定されます。たとえば、勘定科目メンバーの UDA を作成すると、共有していない勘定科目メンバーに使用できます。UDA を削除すると、すべての勘定科目メンバーの UDA が除去されます。UDA を複数のディメンションに使用可能にするには、複数のディメンションに同じ UDA を作成します。たとえば、「新規」という UDA を勘定科目ディメンションとエンティティ・ディメンションに作成し、それを勘定科目メンバーとエンティティ・メンバーに使用できます。

簡易ディメンション・エディタで UDA を操作するには:

1. ホーム・ページで、「アプリケーション」、「概要」、「ディメンション」の順にクリックします。
2. メンバーを UDA に関連付けるディメンションの名前をクリックします。
3. 「メンバー・プロパティの編集」タブを選択します。
4. ディメンション・グリッドで、任意の列見出しを右クリックし、「デフォルト・モード」オプションの選択を解除して UDA 列を表示します。
5. UDA を追加するメンバーを探し、UDA 列までスクロールします。
6. UDA セルをクリックして、「UDA」管理ダイアログを表示します。
7. 次のタスクを選択します。
 - UDA を作成するには、

 をクリックし、名前を入力して、「保存」をクリックします。

 **Note:**

UDA に名前を付ける際に使用する文字数は 60 文字までにしてください。

- UDA を変更するには、UDA を選択し、

をクリックして、名前を変更した後、「保存」をクリックします。
- UDA を削除するには、UDA を選択し、

をクリックして、削除を確認します。

 **Note:**

UDA を削除すると、すべてのディメンションから UDA が除去されます。UDA を削除した場合は、それを参照していたすべてのメンバー式、計算スクリプト、レポートを更新する必要があります。

- UDA の選択をクリアするには、

をクリックします。
8. メンバーの UDA を追加または削除するには、矢印を使用して UDA を「選択した UDA」パネルで移動します。
 9. 「OK」をクリックします。

簡易ディメンション・エディタでの属性値の操作

属性値は、フォームの使用時にディメンション・メンバーを選択する別の方法をユーザーに提供します。属性のデータ値は動的に計算されますが保管されません。

通常、エンティティとユーザー定義のカスタム・ディメンションの疎ディメンションに、属性値を定義できます。ディメンションの属性値を定義した後、その属性値をそのディメンションのメンバーに割り当てることができます。

簡易ディメンション・エディタでの属性値の作成

簡易ディメンション・エディタで属性値を作成するには:

1. ホーム・ページで「アプリケーション」をクリックし、「概要」をクリックします。
2. 「ディメンション」タブをクリックします。
3. 「キューブ」で、「すべて」を選択します。
4. 属性ディメンションを選択します。
5. 「メンバー・プロパティの編集」で、メンバーを追加します:

- 子メンバーを追加するには、親レベルのメンバーを選択し、「**アクション**」をクリックして、「**子の追加**」をクリックします。

 **ノート:**

子メンバーは、親メンバーのディメンション・プロパティを継承します。

- 兄弟メンバーを追加するには、メンバーを選択し、「**アクション**」をクリックして、「**兄弟の追加**」をクリックします。
6. メンバー・プロパティを設定または変更するには、「**メンバー・プロパティの編集**」グリッドでセルをクリックし、更新します。[簡易ディメンション・エディタでのメンバー・プロパティの編集](#)を参照してください。
 7. 変更を保存するには、「**保存**」をクリックします。

基本ディメンションへの属性値の割当て

属性ディメンションを基本ディメンションに関連付けると、通常のディメンションと同様に簡易ディメンション・エディタに表示されます。属性ディメンションをリストに表示するには、メイン・ディメンション・ページの「**キューブ**」ドロップダウン・リストで「**すべて**」を選択します。その後、属性ディメンションを選択して、値をグリッドに追加できます。

基本ディメンションに属性値を割り当てるには:

1. 基本ディメンションの**メンバー・プロパティの編集**ページを開き、属性ディメンションの名前がある列を探します。
2. 特定のメンバーについてグリッド内をクリックして、属性値を含むドロップダウン・リストを表示し、リストから属性値を選択します。
3. **メンバー・プロパティの編集**ページで「**保存**」をクリックして、基本メンバーに値を割り当てます。

10

ダッシュボードの設計

ユーザーにサマリー・データを表示するダッシュボードを設計します。ダッシュボードにより、ユーザーはチャート作成、評価、ハイライト、コメント作成および主要ビジネス・データの変更に加え、ルールの追加および編集を行うことができます。

次も参照:

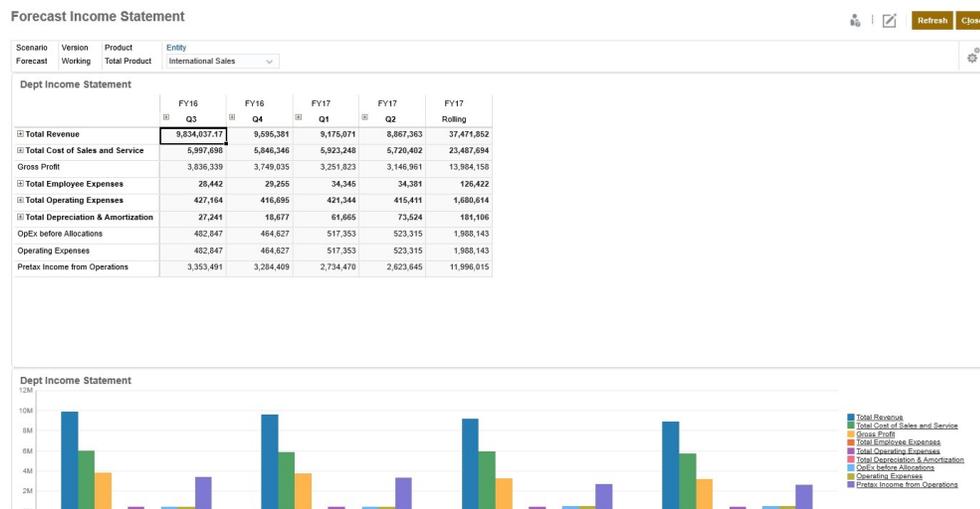
- [ダッシュボードのメリット](#)
- [ダッシュボードの作成および管理](#)
- [ダッシュボード・バージョンについて](#)
- [ダッシュボードの表示](#)
- [ダッシュボード 1.0 のダッシュボードの 2.0 への変換](#)
ダッシュボード 1.0 のダッシュボードをダッシュボード 2.0 のダッシュボードに変換する方法を学習します。
- [ダッシュボードの作成および管理 1.0](#)
- [1.0 ダッシュボード設計の概念](#)
- [ダッシュボード 1.0 のダッシュボードの作成](#)
- [マスター・フォームと詳細を含むダッシュボードの作成](#)
- [ダッシュボードのレイアウトについて - バージョン 1.0](#)
- [ゲージ・チャート・タイプについて](#)
- [タイル・チャート・タイプについて](#)
- [ダッシュボードの色のカスタマイズ](#)
- [1.0 ダッシュボードのグローバル POV とローカル POV について](#)
- [ダッシュボード POV と有効な交差](#)
- [ダッシュボードの作成および管理 2.0](#)
- [ダッシュボード 2.0 のダッシュボード設計の概念](#)
- [オブジェクト・パレット](#)
- [ダッシュボード・ツールバー](#)
- [ダッシュボード・ワークスペース](#)
- [プロパティ・パネル](#)
- [ダッシュボード・コンポーネント](#)
- [ダッシュボード 2.0 の考慮事項](#)
- [ダッシュボード 2.0 のダッシュボードの作成](#)

- [ダッシュボード 2.0 の設計時のメンバー・セレクトタの操作](#)
ダッシュボード 2.0 のダッシュボードを設計する場合は、メンバー・セレクトタを使用して新しいディメンション・メンバーを簡単に検索して選択できます。
- [ダッシュボード 2.0 のフォーム 2.0 のグリッドについて](#)
- [ジオマップ・チャート・タイプについて](#)
- [ピラミッド・チャート・タイプについて](#)
- [ウォーターフォール・チャート・タイプについて](#)
- [ダッシュボードでの表の使用](#)
- [ダッシュボード 2.0 のゲージ・チャート・タイプについて](#)
- [ダッシュボード 2.0 のレーダー・チャート・タイプについて](#)
- [ダッシュボード 2.0 の組合せチャート・タイプについて](#)
- [ダッシュボード 2.0 のタイル・チャート・タイプについて](#)
- [ダッシュボード 2.0 のグローバル POV とローカル POV について](#)
- [クイック分析について](#)

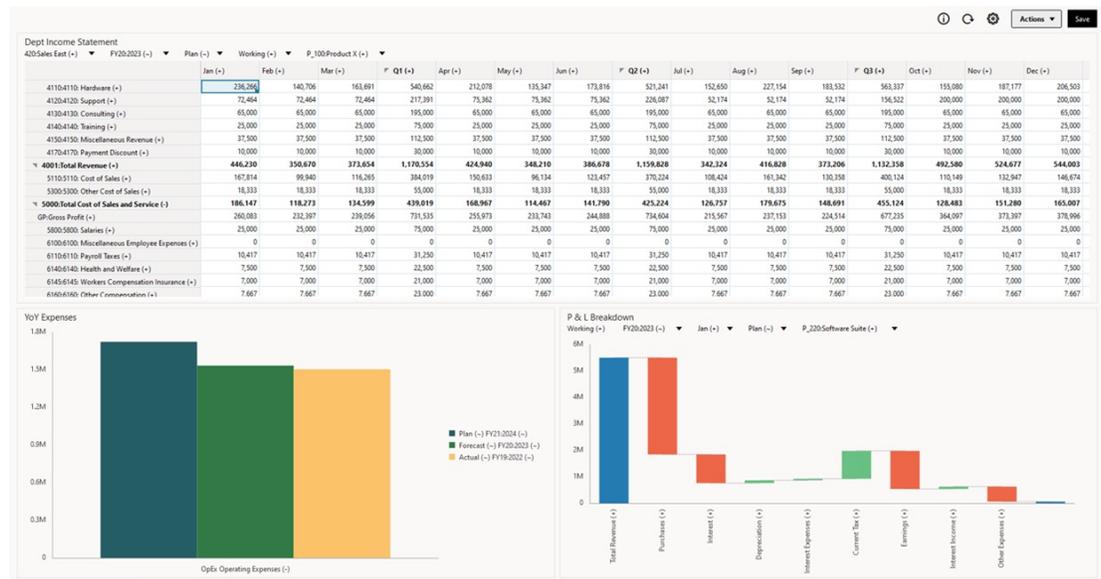
ダッシュボードのメリット

通常、ダッシュボードでは、ユーザーが計画および予測プロセスを開始するときに、サマリー・データを表示することで概要が提供されます。ダッシュボードの多様な機能により、ユーザーはチャート作成、評価、ハイライト、コメント作成および主要ビジネス・データの変更を行うことができます。ダッシュボード内にあるフォームでドライバを変更し、他のフォームやチャートでその影響を即座に確認できます。

ダッシュボード 1.0 のサンプル



ダッシュボード 2.0 のサンプル



ダッシュボードを作成するには、単に左側のライブラリ・パネルからダッシュボード・ワークスペースに様々なオブジェクトをドラッグ・アンド・ドロップします。

ダッシュボードでは、次のことができます。

- ユーザーがフォームでデータを変更すると動的に更新される複数のフォームと関連チャートを含めます。
- キューブの特定の値を表示するタイルを含めます。各タイルに値を提供するには、フォームまたはセル交差をデータ・ソースとして指定します。
- ダッシュボード・ユーザーに表示される内容を正確に確認できるように、デザイン環境とランタイム環境の使用を簡単に切り替えます。
- 面、棒、バブル、列、棒と折れ線の組合せ、ドーナツ、ファンネル、ゲージ、散布、リーダーなどの多様なチャート・タイプを使用して、データを対話形式で表します。
- ダッシュボードのレイアウトを制御します。
- フォームの設計に応じて、ユーザーが基礎となる詳細にドリルダウンし、作業するメンバーを選択できるようにします。
- グローバル POV バーとローカル POV にユーザー変数を含めます。
- 特定のチャートで、色や線幅をカスタマイズしたり、グリッド線の表示/非表示を切り替えます。
- 外部 Web ページを動的に表示するリンクを追加します。
- 注釈と呼ばれるデータの説明をダッシュボードに含めます。
- フォームをマスターとしてタグ付けし、マスター・フォームのメンバーをフィルタ処理して、同じダッシュボード内に詳細フォームまたはチャートを表示します
- チャートの凡例およびラベルの位置を変更します。
- ダッシュボード 2.0 (レッドウッド・エクスペリエンスでのみ使用可能)では次のことができます:
 - ダッシュボード内に最大 12 個のコンポーネントを追加します

- 1つのタイル・チャート・タイプで最大 10 個のタイルを追加します
- チャートで階層ラベルを追加します
- 関連するチャート・タイプで対数目盛を使用します
- 関連するチャート・タイプでセカンダリ Y 軸を追加します
- 「スタイル」プロパティを使用して、「デフォルト」、「明るい」および「暗い」の背景色でダッシュボードをレンダリングします
- 書き込み可能なグリッドでグリッド表示を使用します(フォーム 2.0 で使用)
- より広くなった画面スペース、フォームを直接開いて編集するオプション、データなしでダッシュボードを編集するオプション、POV の変更の自動適用、ディメンション名の非表示など、その他のユーザビリティが向上しました
- ダッシュボードでの保存時のルールが改善されました: ロード/保存の前後の実行時プロンプトの有無
- ダッシュボード 1.0 から簡単に移行します

ノート:

ダッシュボード 1.0 のダッシュボードは、「**フォーム・バージョン**」設定が「**フォーム 2.0**」の場合でも、フォーム 1.0 とともにデプロイされます。

ユーザーがダッシュボード(ランタイムと呼ばれる)を使用する場合、表示されるチャートのタイプやダッシュボードのタイトルなど、コンポーネントの様々な側面を設定できます。コンポーネントごとにツールバーを使用できます。ダッシュボード・ユーザーは、データの変更と保存、ルールの実行などを行うことができます。ただし、実行時にチャート・タイプのオプションに加えた変更は、次のセッションには保存されません。実行時に「**保存**」をクリックすると、データは保存されますが、ダッシュボード定義は保存されません。

サービス管理者は、ダッシュボードとダッシュボード・フォルダの作成、再設計、削除および権限の割当てを行うことができます。

関連トピック

- [ダッシュボード・バージョンについて](#)
- [1.0 ダッシュボード設計の概念](#)
- [ダッシュボード 2.0 のダッシュボード設計の概念](#)
- [ダッシュボードの作成および管理](#)

ダッシュボードの作成および管理

次も参照:

- [ダッシュボード・バージョンについて](#)
- [ダッシュボードの表示](#)

- [ダッシュボード 1.0 のダッシュボードの 2.0 への変換](#)
ダッシュボード 1.0 のダッシュボードをダッシュボード 2.0 のダッシュボードに変換する方法を学習します。

ダッシュボード・バージョンについて

ダッシュボードは、現在、2 つのバージョンで使用可能です:

- **ダッシュボード 1.0:** Oracle Application Development Framework (Oracle ADF) テクノロジを使用しています
- **ダッシュボード 2.0:** Oracle JavaScript Extension Toolkit (Oracle JET) テクノロジを使用しています

現在、両方のダッシュボード・バージョンが同時に同じビジネス・プロセスに共存します。ダッシュボード 1.0 では Oracle ADF テクノロジを使用しており、Oracle ADF ベースのダッシュボードの動作は変わっていません。引き続き、これらのダッシュボードを以前と同様にビジネス・プロセスで作成および更新できます。ダッシュボード 2.0 では、既存のダッシュボード機能を使用し、Oracle JET テクノロジを使用してそれを拡張することで、レンダリングの高速化、洗練性、使いやすさ、柔軟性の向上、より効果的なビジュアルライゼーションを実現するとともに、新たなデザインも提供しています。ダッシュボード 2.0 は、**レッドウッド・エクスペリエンス** が有効になっている場合にのみ使用できます。

「**ダッシュボード**」リスト・ページでダッシュボード・バージョンを区別しやすくするために、それぞれのダッシュボードの前にアイコンが表示されるようになりました:

-  : ダッシュボード 1.0
[ダッシュボード 1.0 の作成および管理](#)を参照してください。
-  : ダッシュボード 2.0
[ダッシュボード 2.0 の作成および管理](#)を参照してください。

ダッシュボード 2.0 デザイナ機能

ダッシュボード 2.0 デザイナでは次の内容がサポートされています:

- ダッシュボード 1.0 よりも多くのチャート・タイプ。たとえば、「ウォーターフォール」、「ピラミッド」、「ジオマップ」や、「レーダー」チャート、「組合せ」チャート、「ゲージ」チャートのサブチャート・タイプはすべてダッシュボード 2.0 の機能です
- スパーク・チャートと呼ばれるデータのビジュアル・インライン・ビューを使用したダッシュボードでの表の作成
- クイック分析(事前作成されたフォームがなくても、ダッシュボードにコンポーネントを追加できます)
「検索」バーにメンバー名を入力するか、「メンバー・セレクト」を使用してアドホック問合せを作成した後、「プロパティ」パネルの「レイアウト」タブで問合せのレイアウトを制御します。
- 基礎となるフォームがフォーム 2.0 のフォームの場合、フォーム・グリッド内のデータの直接操作

- 「URL」タイプのダッシュボード・コンポーネント
- テキスト・エディタを使用する「注釈」タイプのダッシュボード・コンポーネント
- カスタム・フォーマットのダッシュボード・タイトル
- 「URL」、「注釈」および「グリッド」コンポーネント・タイプの背景色
- ダッシュボード 2.0 内でフォーム 2.0 をレンダリングするための「グリッド」チャート・タイプ・オプション
- グローバル・ルールを関連付けるための「プロパティ」パネルの新しい「**関連付け**」タブ
- 「ゲージ」、「円」および「ドーナツ」チャート・タイプの複数のチャート
- ダッシュボード・コンポーネント内からフォームを直接開いて編集するための新しいメニュー・オプション
- フォームおよびダッシュボードの「情報」アイコン。フォームをダッシュボードにドロップすると、その情報が表示されます。
- 「プロパティ」パネルのサイズを変更する機能
- 各ダッシュボード・コンポーネントの背景色を設定する機能
- コンポーネント・タイトルを削除するオプション(ビジュアライゼーションのために保存されたスペースを使用)
- ダッシュボード・コンポーネント数の増加(最大 12 個)
- タイル数の増加(最大 10 個)
- データなしで編集する機能
- 最大 10,000 セルのカスタマイズされたセル・ビジュアライゼーション制限。次のような行 x 列の組合せになります:
 - 100 行 x 100 列 = 10,000 セル
 - 1000 行 x 10 列 = 10,000 セル
 - 250 行 x 40 列 = 10,000 セル
- ダッシュボードの「**スタイル**」を選択する機能。オプションは、「**デフォルト**」、「**明るい**」および「**暗い**」です。
- ダッシュボード・コンポーネントと POV バーの間の枠線を表示または非表示にするオプション
- 新しい Oracle JET メンバー・セレクタ
- 動的タブの表示デザイナー

ダッシュボード 2.0 に切り替える前に考慮事項を確認するには、[ダッシュボード 2.0 の考慮事項](#)を参照してください。

ダッシュボードの表示

ダッシュボード・ページを表示するには:

1. ホーム・ページで、「**ダッシュボード**」をクリックします。
2. ダッシュボードを開くには、ダッシュボードの名前をクリックします。

これにより、実行時環境でダッシュボードが開きます。

 **Note:**

ダッシュボード 2.0 のダッシュボードを選択し、ダッシュボード 2.0 コンポーネントの初期化中にエラーが発生しましたというメッセージが表示される場合、ダッシュボードには、関連付けられるフォーム 2.0 フォームが含まれています。ダッシュボードで表示するには、レッドウッド・エクスペリエンスおよびフォーム 2.0 が有効になっていることを確認する必要があります。

レッドウッド・エクスペリエンスを有効化するには、「**ツール**」、「**外観**」の順にクリックし、「**レッドウッド・エクスペリエンスの有効化**」を選択してから「**保存**」をクリックします。

フォーム 2.0 を有効化するには、「**アプリケーション**」、「**設定**」の順にクリックし、「**その他オプション**」で「**フォーム・バージョン**」を見つけて、「**フォーム 2.0**」を選択してから「**保存**」をクリックします。

ダッシュボード・ページの機能

ダッシュボード・ページ:

- フォルダがサポートされています。**ダッシュボード・ページ**では、インフォレットやデータ入力フォームと同じフォルダ階層を使用しており、すべてのアーティファクトおよびフォルダは、「**ライブラリ**」と呼ばれるルート・フォルダ内に存在します。「**ライブラリ**」フォルダは、削除または名前変更できません。

 **Note:**

管理者のみがファイル(たとえば、ダッシュボード、インフォレット、フォーム、レポートなど)を「**ライブラリ**」ルート・フォルダに追加できます。

- ダッシュボード・ページ**でダッシュボード・バージョンを区別しやすいように、それぞれのダッシュボードの前にアイコンが表示されるようになりました:

 : ダッシュボード 1.0

 : ダッシュボード 2.0

- フラット・ビューとツリー・ビューの間でダッシュボードの表示を切り替えることができます:



- ダッシュボード・ページ**は、タイプ別にフィルタできます。 をクリックして、次のフィルタ・オプションから選択します:

- すべてのタイプ (デフォルト)
- ダッシュボード 1.0
- ダッシュボード 2.0
- 特定のダッシュボードを検索するには、



をクリックしてキーワードで検索するか、または  をクリックして検索を特定のライブラリ・フォルダに絞り込みます。

ダッシュボード・ページの「アクション」列

ダッシュボード・ページの右側には、「アクション」列があります。ダッシュボードまたはフォルダの横にある **...** アイコンをクリックすると、次のアクションが表示されます:

- フォルダ・アクション:
 - **権限の割当:** フォルダにアクセス権限を割り当てます。フォルダ権限はそのフォルダ内のすべてのアイテムに適用され、リストに表示されていないアイテムにも適用されます。
 - **ダッシュボードの作成:** ダッシュボード 1.0 ダッシュボードを作成します。
 - **ダッシュボード 2.0 の作成:** ダッシュボード 2.0 ダッシュボードを作成します。
 - **フォルダの作成:** 新規フォルダを作成します。
 - **削除:** フォルダを削除します。フォルダを削除するには、空である必要があります。
 - **名前変更:** フォルダの名前を変更します。フォルダに他のフォルダが含まれている場合、名前を変更することはできません。
 - **移動先:** フォルダをフォルダ階層内の別の場所に移動します。
 - **すべてのダッシュボードを 2.0 に変換:** フォルダ階層内のすべてのダッシュボード 1.0 ダッシュボードを検索し、これらをダッシュボード 2.0 ダッシュボードに変換します。
- 個別のダッシュボード・アクション:
 - **編集:** ダッシュボード・デザイナーで、基礎となるフォーム・データとともにダッシュボードを開きます。ダッシュボードは動的タブで開きます。
 - **データなし編集 (ダッシュボード 2.0 のみのオプション):** ダッシュボード・デザイナーで、基礎となるフォーム・データなしでダッシュボードを開き、ダッシュボードのコンポーネントとタイルの再配置など、アクションを簡単に実行できるようにします。ダッシュボードは動的タブで開きます。
 - **名前変更:** ダッシュボードの名前を変更します。
 - **別名コピー:** 新しい名前でダッシュボードをコピーします。ダッシュボードは、元のダッシュボードの直下のリストにコピーされます。
 - **削除:** ダッシュボードを削除します。
 - **移動先:** ダッシュボードを別のフォルダに移動します。
 - **権限の割当:** ダッシュボードにアクセス権限を割り当てます。

- **ダッシュボード 2.0 に変換**(ダッシュボード 1.0 のみのオプション): ダッシュボードをダッシュボード 2.0 ダッシュボードに変換します。
- **URL のコピー**: ダッシュボードのコピーおよび直接 URL の共有を行うことができます。[個々の URL のコピー](#)を参照してください。

ダッシュボード 1.0 のダッシュボードの 2.0 への変換

ダッシュボード 1.0 のダッシュボードをダッシュボード 2.0 のダッシュボードに変換する方法を学習します。

アプリケーションで現在ダッシュボード 1.0 を使用している場合は、ダッシュボード 2.0 に変換できます。

ダッシュボード・リスト・ページのダッシュボードは、個々のダッシュボード・レベルまたはフォルダ・レベルで変換します。たとえば、アプリケーション内のすべてのダッシュボードを 1.0 から 2.0 に変換する場合は、最上位レベルの「ライブラリ」フォルダを選択してすべてのダッシュボードを変換できます。

Note:

- ダッシュボード 2.0 に変換した後は、ダッシュボードをダッシュボード 1.0 に戻すことはできません。
- 変換プロセスにより、ダッシュボード名が変更されることはありません。ナビゲーション・フローは、変換前と同様に機能します。
- ダッシュボード 2.0 に変換した後は、固定 POV ではなく動的 POV が最初に表示されます。

ダッシュボード 1.0 をダッシュボード 2.0 に変換するには:

1. ホーム・ページで、「**ダッシュボード**」をクリックします。
2. 変換するフォルダまたは個々のダッシュボード 1.0 のダッシュボードに移動し、次のオプションから選択します:
 - 個々のダッシュボードを変換するには、ダッシュボードの右側にある **...** をクリックし、「**ダッシュボード 2.0 に変換**」を選択します。
 - フォルダ内のすべてのダッシュボードを変換するには、フォルダの右側にある **...** をクリックし、「**すべてのダッシュボードを 2.0 に変換**」を選択します。

 **Note:**

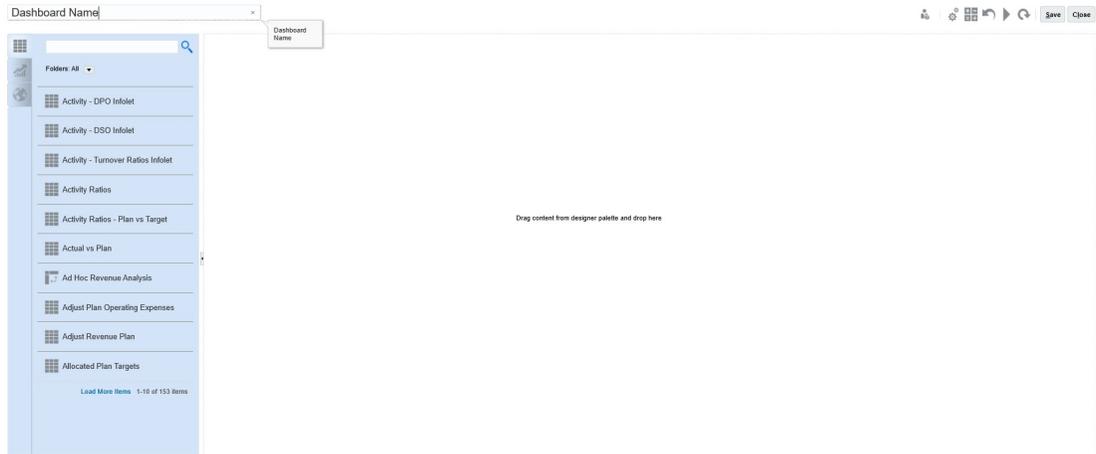
- 非常に古いダッシュボードには、現在サポートされていないコンポーネント幅の値を含むダッシュボード定義が含まれている場合があります。このため、古いダッシュボードをダッシュボード 2.0 に変換した後、予期しないダッシュボードのレンダリングが発生する可能性があります。この問題を解決するには、次のいずれかの回避策をお勧めします:
 - ダッシュボード(1.0)の元のダッシュボードを開き、ダッシュボードを編集して保存します。修正したコンポーネント幅の値とともにダッシュボードが自動的に保存され、ダッシュボード 2.0 に変換できます。
 - 同じフォーム・セットとチャート・セットおよび同じ設定を含むダッシュボード(1.0)の新しいダッシュボードを作成し、このダッシュボードをダッシュボード 2.0 に変換します。
 - 同じアーティファクトおよび設定を含むダッシュボード 2.0 の新しいダッシュボードを作成します。
- 23.11 の更新より前にダッシュボード 2.0 に変換されたマスター・フォームおよび詳細を含むダッシュボードでは、グリッドのコンテキスト・メニューに 2 つの「**コンテキストの適用**」メニュー・オプションが表示される場合があります。この問題は 23.11 で修正されました。

ダッシュボード 1.0 の作成および管理

- [1.0 ダッシュボード設計の概念](#)
- [ダッシュボード 1.0 のダッシュボードの作成](#)
- [マスター・フォームと詳細を含むダッシュボードの作成](#)
- [ダッシュボードのレイアウトについて - バージョン 1.0](#)
- [ゲージ・チャート・タイプについて](#)
- [タイル・チャート・タイプについて](#)
- [ダッシュボードの色のカスタマイズ](#)
- [1.0 ダッシュボードのグローバル POV とローカル POV について](#)
- [ダッシュボード POV と有効な交差](#)

1.0 ダッシュボード設計の概念

1.0 ダッシュボードを設計する際には、次の情報が役立ちます。



- 左側には、デザイン・パレットがあります。パレットからキャンバスにオブジェクトをドラッグ・アンド・ドロップします。

 **ヒント:**

オブジェクトを枠線までドラッグします。許可されたスペースにオブジェクトをドロップできるようになると、ドラッグ・アイコンがプラス記号に変わります。[ダッシュボードのレイアウトについて - バージョン 1.0](#) を参照してください。

- 右上には、ダッシュボード全体の設定があります。



- 「設定」



をクリックして、ダッシュボードの次の一般設定を指定します。

表 10-1 ダッシュボードの一般設定

オプション	説明
名前をタイトルとして使用	このオプションはデフォルトで選択されています。カスタム・フォーマットのタイトルをダッシュボードに指定するには、このオプションの選択を解除します。
枠線	新しいダッシュボードを作成する場合、デフォルトでは枠線は非表示です。新しく作成するダッシュボードで枠線を表示するには、「表示」を選択します。
レイアウト	「固定」(デフォルト)または「フレキシブル」を選択します。
POV バー	「表示」(デフォルト)または「非表示」を選択します。
グローバル POV バー	「有効化」(デフォルト)または「無効化」を選択します。

POV の詳細は、[1.0 ダッシュボードのグローバル POV とローカル POV について](#)を参照してください。

- ダッシュボード・オブジェクトにカーソルを置くと、そのオブジェクトのツールバーが右上隅に表示されます: 

ノート:

ダッシュボード(1.0)のホバー・アイコンでは、オブジェクトのタイプに応じて、「指示」(フォームに指示が構成されている場合のみ使用可能)、「アクション」、「保存」、「リフレッシュ」、「設定」および「最大化」などのオプションが提供されます。

- ダッシュボードの作成時に、「ランタイム」 をクリックすると、ダッシュボード・ユーザーに対するダッシュボードの外観と動作をすぐに確認できます。デザイン・モードに戻ってダッシュボードの設計を続行するには、 をクリックします。
- デフォルトでは、欠落データまたは抑制データは、グラフでゼロとしてプロットされます。「プロットにゼロの値なし」設定をクリアして、特定のチャート・タイプの欠落データまたは抑制データを無視し、ゼロとしてプロットされなくなるようにできます。
- ダッシュボードのリスト・ページでは、フォルダがサポートされます。フォルダによって、個別のダッシュボードに対する権限を割り当てるかわりに、フォルダ内のすべてのダッシュボードに対する権限を割り当てることができます。ダッシュボードのリスト・ページでは、インフォレットやデータ入力フォームと同じフォルダ階層を使用しており、すべてのアーティファクトおよびフォルダは、「ライブラリ」と呼ばれるルート・フォルダ内に存在します。

ノート:

管理者のみがファイル(たとえば、ダッシュボード、インフォレット、フォーム、レポートなど)を「ライブラリ」ルート・フォルダに追加できます。

- ダッシュボードのリスト・ページでは、ダッシュボード表示のフラット・ビューと階層ビュー( )を切り替えることができます。

その後、「検索」 を使用してダッシュボードを検索できます。フラット・ビューには、検索条件と一致するダッシュボードのみが表示され、それらを含むフォルダは表示されません。ツリー(階層)ビューには、ダッシュボードとそれらが含まれるフォルダが一緒に表示されます。

別のキーワードで検索するには、「検索」ボックスの  をクリックして検索条件をクリアします。

ダッシュボード 1.0 のダッシュボードの作成

選択するダッシュボード・バージョンを決定する際に役立つ情報を確認できます。[ダッシュボード・バージョンについて](#)を参照してください。

ノート:

ダッシュボード 2.0 のダッシュボードを作成するには、[ダッシュボード 2.0 のダッシュボードの作成](#)を参照してください。

1. ホーム・ページから、「**ダッシュボード**」をクリックし、「**作成**」をクリックします。



2. 提供されるオプションから、「**ダッシュボード**」を選択します。



3. デフォルトのダッシュボード名をクリックし、入力ボックスに新しい名前を入力することにより、名前を入力します。

カスタム・フォーマットのタイトルをダッシュボードに指定するには、「**設定**」をクリックし、「**名前をタイトルとして使用**」の選択を解除し、タイトルを入力して、ダイアログ・ボックスのフォーマットを設定します。

4. 左側のデザイン・パレットから、オブジェクトをダッシュボード・キャンバスにドラッグ・アンド・ドロップします。

次のオブジェクトから選択します。

表 10-2 ダッシュボード・オブジェクト

オブジェクト	説明
フォーム	<p>フォーム・フォルダにナビゲートするか、名前で検索して、ダッシュボードに含めるフォームを選択します。フォームをダッシュボードに追加した後にそのフォームの指示を表示するには、フォームの上にカーソルを置き、「指示」 をクリックします。</p> <p>フォームに設定されているアクセス権限がダッシュボードで保持されます。</p>
チャート・タイプ	<p>ダッシュボードに含めるチャート・タイプを選択します。最初に追加した際、選択したチャートにはサンプル・データがあります。続いて、それをそのデータ・ソースとしてのフォームに関連付けます。チャートをフォームにリンクすると、ユーザーは、関連付けられたチャートに対するフォームでのデータ変更の影響をすぐに確認できます。</p> <p>デフォルトでは、欠落データまたは抑制データはゼロとしてプロットされます。選択したチャート・タイプ(面、バブル、組合せ、折れ線、レーダーおよび散布図)のチャートの設定で、「プロットにゼロの値なし」オプションの選択を解除することで、この設定を無効化できます。このオプションがクリアされると、欠落データまたは抑制データが無視されて、そのチャート・タイプでプロットされなくなります。</p> <p>「組合せ」チャート・タイプでは、行データが交互に垂直棒と折れ線でチャート内に表示されます。たとえば、フォームの行 1 のデータは棒として、行 2 のデータは折れ線として表示され、偶数と奇数の行のチャート・タイプが交互に入れ替わります。「組合せ」チャート・タイプで表示できるデータは 20 行までですが、特に 2 つのカテゴリのデータを比較する際に便利です。たとえば、ドイツとフランスの平均為替レートを複数年にわたって比較するため、フォームの行 1 にドイツのレートがあり、フランスのレートが行 2 にある場合などです。</p> <p>「ゲージ」チャート・タイプの詳細は、ゲージ・チャート・タイプについてを参照してください。</p> <p>パフォーマンス・タイルと呼ばれることもあるタイル・チャート・タイプを使用すると、キューブから特定の値を選択して表示できます。タイル・チャート・タイプについてを参照してください。</p>
注釈	<p>「外部アーティファクト」、「注釈」の順に選択します。データまたはチャートを説明するテキストを入力します。テキスト制限は、リッチ・テキスト用に追加されるフォーマット・タグを含めて、2000 文字であることに注意してください。</p>
URL	<p>動的な Web ページのサマリーです。「外部アーティファクト」、「URL」の順に選択します。https://セキュリティ・プロトコルで始まる外部サイトの URL のみを挿入します。内部または相対 URL や、google.com などの同意していないサード・パーティ・サイトの URL を使用しないでください。</p>

5. ダッシュボード設定とオブジェクトのホバー・ツールバーを使用してダッシュボードをカスタマイズし、「保存」をクリックします。

[ダッシュボードのレイアウトについて - バージョン 1.0](#) を参照してください。

「ダッシュボード」リスト・ページで「**別名コピー**」を使用すると、ダッシュボードを簡単に複製して変更できます。コピーするダッシュボードの横にある「アクション」アイコンを選択します。

マスター・フォームと詳細を含むダッシュボードの作成

1つのマスター・フォームと複数の詳細(ターゲット)オブジェクト(フォームまたはチャート)を含むダッシュボードを設計できます。その場合、マスター・フォームのメンバーの選択によってターゲット・オブジェクトのメンバーが自動的にフィルタ処理され、ターゲット・オブジェクトには、マスター・フォームでハイライトされたメンバーに関連する詳細のみが表示されます。

マスター・フォームとターゲット・オブジェクトを含むダッシュボードを設計する際の考慮事項:

- マスター・フォームは常にフォームでなければなりません(チャートをマスター・フォームとしてタグ付けすることはできません)。
- ターゲット・オブジェクトはフォームでもチャートでもかまいません。
- マスター・フォームを含むダッシュボードは、常に複数のオブジェクトを含む必要があります。
- ダッシュボード上の1つのフォームだけをマスターとしてタグ付けできます。ダッシュボード上の別のフォームをマスターとしてタグ付けする場合は、まず既存のマスター・フォームのタグ付けを解除する必要があります。

マスター・フォームとターゲット・オブジェクトを含むダッシュボードを作成するには:

1. 少なくとも1つのフォームと1つまたは複数のターゲット・オブジェクトを含むダッシュボードを作成します。
[ダッシュボードの作成および管理](#)を参照してください。
2. 「**アクション**」をクリックしてから、「**編集**」を編集して、必ずダッシュボードをデザイナー・モードにします。
3. ダッシュボード上でマスターとして指定するフォームを選択し、フォームの「**設定**」アイコンをクリックしてから、「**マスターとしてタグ付け**」を選択します。

マスター・フォーム内のデータに関連するターゲット・フォームまたはチャートのデータをフィルタ処理するには、マスター・フォーム内の関連するデータを右クリックし、「**コンテキストの適用**」を選択します。

ダッシュボードのレイアウトについて - バージョン 1.0

バージョン 1.0 でのダッシュボードのレイアウトの設定について:

- 最初にドラッグしたオブジェクトがキャンバス全体を占有します。
- その後、既存のオブジェクトの上下左右にオブジェクトをドラッグします。
- ダッシュボード・キャンバスには、2種類のドロップ・ゾーンが用意されています。2つのオブジェクトを相互に並べて配置し、それぞれがスペースの半分を占有するものと、3つのオブジェクトを配置し、それぞれがスペースの3分の1を占有するものです。
- オブジェクトを左右および上下に並べて表示するようにダッシュボードを設計でき、それぞれを独自のサイズに調整することもできます。

- 「**フレキシブル**」レイアウトを使用しているオブジェクトのサイズを変更するには、オブジェクトの枠線をドラッグします。オブジェクトのハンドルをクリックして拡張し、ハンドルを再びクリックしてオブジェクトを元のサイズに戻すこともできます。
- 「**固定**」レイアウトを使用しているオブジェクトのサイズを変更するには、「**設定**」でその幅または高さの割合を設定します。
- フォームのレイアウトは非対称にすることができます。
- 実行時モードでは、ユーザーがフォームに対するアクセス権を持っていない場合やフォームが見つからない場合、隣接するオブジェクトがそのスペースを占有します。デザイナー・モードでは、空のオブジェクトがすべて表示され、デザイナーはそれらを削除するように選択できます。

ゲージ・チャート・タイプについて

ゲージ・チャート・タイプは、データ値が許容範囲内に収まっているかどうかを確認する場合に便利です。最大値および範囲の最大値を設定すると、ゲージに範囲が赤、黄色および緑で表示され、現在の値をすばやく評価できます。そのため、ゲージ・チャート・タイプを使用すると、重要なデータ・ポイントやメジャーにおける問題を簡単に特定できます。たとえば、しきい値が売上げ目標を示すように設定し、ゲージを使用して現在の売上げを表示できます。

フォームに複数の値がある場合、最大 36 個(フォームの最初の 6 行と最初の 6 列の値)まで、複数のゲージを表示できます。フォーム内の残りの値は無視されます。ゲージ・チャートに 1 つの値のみを表示する場合は、セル値が 1 つのみのフォームにそれに関連付けます。

ダイヤル・ゲージまたはステータス・メーター・ゲージを選択できます。ステータス・メーター・ゲージは、水平棒または垂直棒を使用して表示できます。

ダッシュボード・デザイナーは次の設定を行うことができます。

- **最大値:** ゲージの最高値。ダッシュボード・デザイナーが「**最大値**」をデフォルトとして設定した後、ユーザーが実行時にそれを一時的に変更できます。ダッシュボード・デザイナーが最大値を指定しなかった場合、アプリケーションでは、最大値がゲージの値より大きいものに自動的に設定されます。
- **しきい値:**
 - 「低しきい値」、「中しきい値」および「高しきい値」：メジャーが許容範囲内にあるかどうかを視覚的に示すために、これらのしきい値を使用して、指定した値に基づいてゲージを赤、黄色および緑で表示できます。
 - 低い値が適しているしきい値。
 - ゲージでしきい値にカーソルを置くと表示されるしきい値の適切なラベル。

Settings



Close

Charts

Data

Gauge

Maximum Value

Goal High values are desirable Low values are desirable

Low Threshold ■ Maximum Value Label

Medium Threshold ■ Maximum Value Label

High Threshold ■ Maximum Value Label

When setting the Maximum Value for Low, Medium and High Thresholds for a gauge showing % values, use decimal values. For example, enter .25 for 25%. Also, for percentage gauges, always set the Maximum Value to 1.

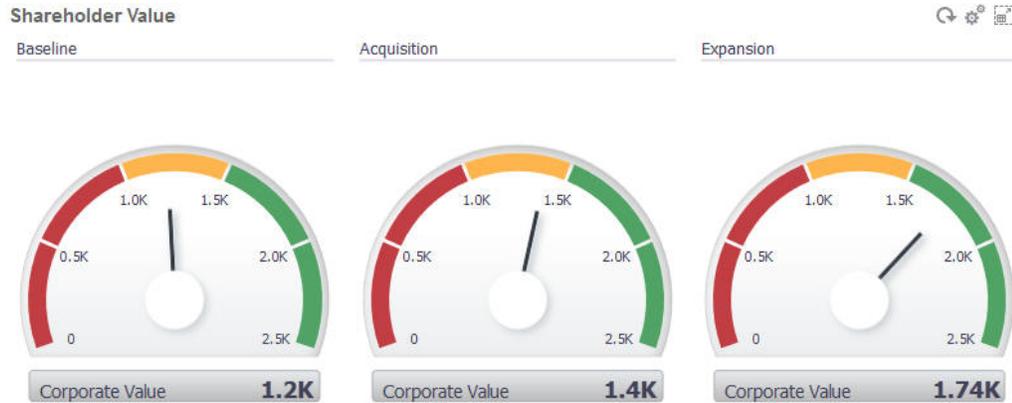
たとえば、次のようなフォームのデータがあるとします。

Shareholder Value



	Baseline	Acquisition	Expansion			
Corporate Value	1,217.058941308	1,391.87	1,737.72			

結果として生成されるダイヤル・ゲージは次のようになります。



結果として生成される垂直棒を使用したステータス・メーター・ゲージは次のようになります。



✎ ノート:

フォームのセルに値がない場合、そのセルについてはゲージが表示されません。また、少なくとも 2 つの連続するしきい値を指定する必要があります。アプリケーションでは、チャートを計算するために中間のしきい値が必要です。

タイル・チャート・タイプについて

タイルは、キューブから特定の値を選択して表示できるチャート・タイプです。フォームをデータ・ソースとして使用する以外に、タイルに値を提供するセル交差を直接入力することもできます。横方向に最大 6 つのタイルと、下方に 4 つの行をダッシュボードに含めて、それらにタイトルを指定できます。タイルをデータに関連付けるまで、サンプル・データが表示されます。

フォームをタイルのデータ・ソースとして使用する場合:

- 1 つのオブジェクトにつき最大 6 つのタイルを含めることができます。
- 最初の列の値(6 行目まで)が、タイルを作成するために使用されます。

 ノート:

場合によっては、フォーム内で、グリッドとして表示されたときに最初の列が縮小される(非表示になる)ことがあります。ただし、タイルがフォームからその値を取得する際には、縮小された列も考慮されます。

- タイルのタイトルは行のタイトルで、最初の列から、続いて行によってその値を取得します。
- タイルのタイトル、タイルの高さのパーセンテージ、凡例を設定でき、含めるフォームの軸を選択できます。たとえば、3つの行があるフォームを選択すると、タイルに3つの値が表示されます。

タイルのデータ・ソースとしてセル交差を使用する場合は、1つのオブジェクトにつきタイルを1つのみ含めることができます。

 ヒント:

タイル・チャート・タイプを選択するには、リストの下部にあるリンクをクリックして、チャート・タイプのリストを展開します。

タイル・チャート・タイプに設定できるオプションは、次のとおりです。値の表示は、タイルの水平方向で左、中央、右に設定することができます。

Settings  Close

Charts | **Data**

Header

Chart Type

Background Fill No Fill Solid Fill

Legend

Legend Position Right Bottom Left Top

Legend Font Size

Value Font Size

Align Text Left Center Right

Scale

大きい数字のスケーリング

大きい数字で特に便利なのは、値の表示方法を指定できることです。たとえば、タイル値が1,689,000の場合に、スケーリング・オプションとして「**K**」を選択すると、タイルにはこの値が「1689K」と表示されます。スケーリングのオプションは次のとおりです。

- **なし:** スケーリングを適用しません。
- **自動:** 範囲に応じて値が表示されます。たとえば、1,500 は「1.5K」、1,689,000 は「1.69M」、42,314,531,211 は「42.31B」、1,234,567,891,234 は「1.23T」としてそれぞれ表示されます。
- **K:** 値が千単位で表示されます。たとえば、1689000 は「1689K」と表示されます。
- **M:** 値が百万単位で表示されます。たとえば、123,456,789 は「123M」と表示されます。
- **B:** 値が十億単位で表示されます。たとえば、12,345,678,912 は「12B」と表示されます。
- **T:** 値が兆単位で表示されます。たとえば、1,234,567,891,234,567 は「1,234T」と表示されます。

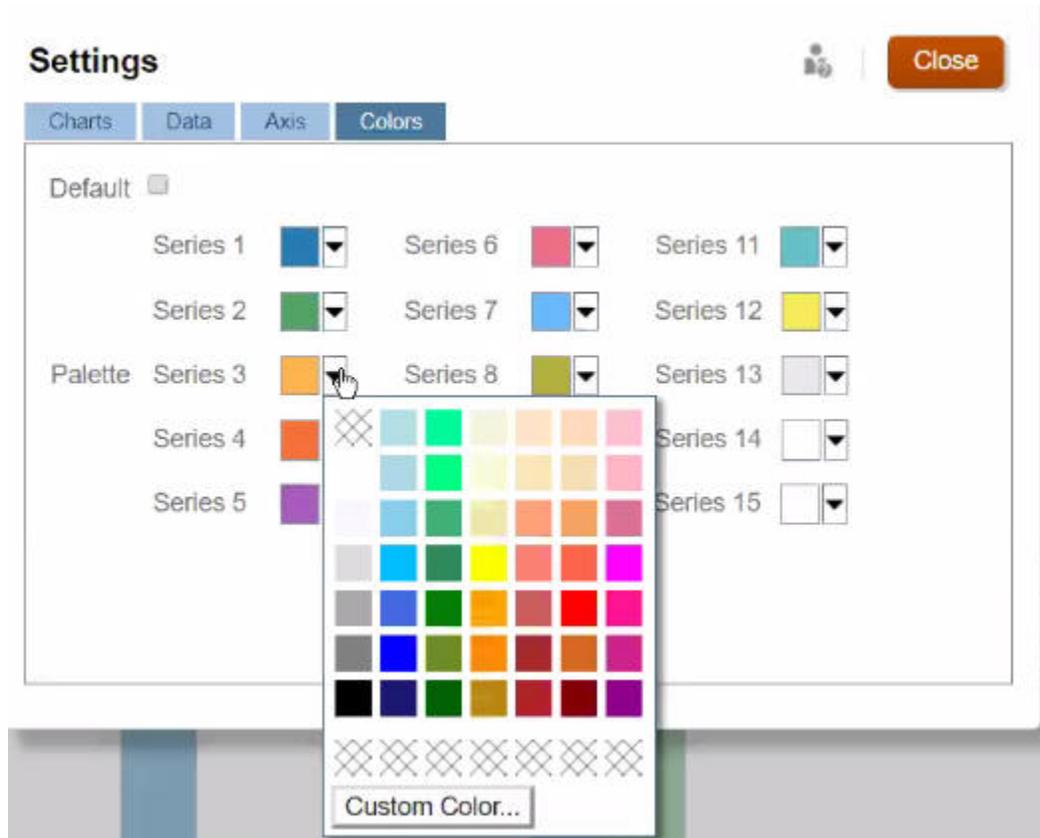
ダッシュボードの色のカスタマイズ

企業では、標準的な色のセットを使用して、チャート内の様々なタイプのデータを示している場合があります。たとえば、実績データは濃い青で、予算データは水色で示されます。ダッシュボードの色をカスタマイズする際は、フォームの行の順序で色を選択します。系列 1 はデータの最初の行を表し、以降はそれに続きます。フォームの各行に、チャート内のデータを表す色を割り当てることができます。

棒、折れ線、面、バブル、列、組合せ、ドーナツ、円、レーダー、散布の各グラフ・タイプでダッシュボードの色をカスタマイズできます。

1. ダッシュボードのデザイン・パレット上のチャートで、「**設定**」  をクリックします。
2. 「**色**」をクリックします。
3. 「**デフォルト**」チェック・ボックスをクリアして、変更する系列の下向き矢印  をクリックします。

背景のチャートで、各系列が表すデータ・タイプを確認します。



4. 選択した系列に指定する色をクリックして、「閉じる」をクリックします。

ノート:

最初に表示されているよりも多くの色の濃淡を選択するには、「カスタム色」をクリックします。

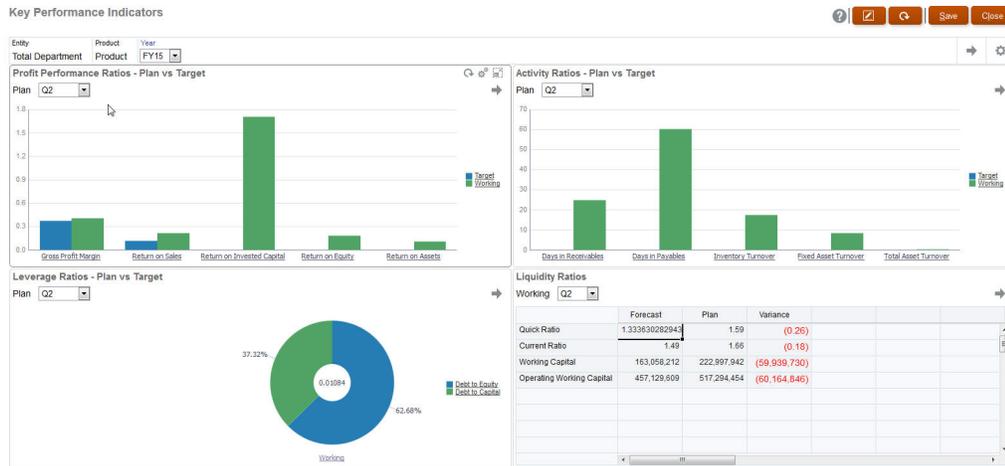
選択内容は、現在のチャートにのみ適用されます。ダッシュボードで他のチャートの色を変更する場合も、このステップに従います。

1.0 ダッシュボードのグローバル POV とローカル POV について

フォームのローカル POV には、フォーム設計者がそのフォームについて選択したディメンション・メンバーが反映されます。ダッシュボードではグローバル POV ともサポートされており、各オブジェクトで繰り返されないように、共通するローカル POV はグローバル POV バーに組み込まれます。

ダッシュボード 1.0 の POV の例

次の 1.0 ダッシュボードには、グローバル POV バー(「エンティティ」、「製品」および「年」を示す)とローカル POV (Q2 を示す「プラン」ドロップダウン・リスト)が表示されています。



グローバル POV バーがある場合、グローバル POV バーでページを変更し、「実行」をクリックすると、フォームに基づいたすべてのオブジェクトについてページが変更されます。グローバル POV バーはダッシュボードの最上部に、すべてのオブジェクトより上に表示されるのに対して、ローカル POV バーはオブジェクト内に表示されます。ユーザー変数は、ダッシュボードのグローバル POV とローカル POV の両方でサポートされており、動的ユーザー変数を POV バーから直接変更できます。

ダッシュボードの「設定」で、POV を表示するか、非表示にするか、およびグローバル POV バーを有効にするか、無効にするかを設定できます。(「POV バー」について「非表示」を、「グローバル POV バー」について「有効化」を選択した場合、「非表示」オプションが「有効化」オプションより優先されます。)グローバル POV バーは、デフォルトで有効になっています。無効にすると、該当する場合、それぞれのローカル POV について POV 全体が表示されます。

グローバル POV バーについて:

- POV バーは、ローカル POV ディメンション、ページ・ディメンションおよびユーザー変数で構成されます。
- ダッシュボード上の各フォームのローカル POV およびページに応じて、グローバル POV バーが自動的に計算されます。
- それらは、そのダッシュボードでフォームを使用している他のオブジェクトに反映されます。つまり、それらは、ダッシュボード内のフォーム、フォームにリンクされたチャート、およびデータ・ソースとしてフォームを使用するタイルに適用されます。そのため、ダッシュボードにデータ・ソースとしてフォームが含まれていない場合は、ローカル POV バーもグローバル POV バーも使用できません。

次に、2つのフォームのローカル POV ディメンションに基づいて、グローバル POV バーがどのように計算されるかの例を示します。

グローバル POV バーが無効:

- フォーム A のローカル POV: 年、エンティティ、製品
- フォーム B のローカル POV: 年、エンティティ、プロジェクト

グローバル POV バーが有効:

- グローバル POV バー: 年、エンティティ
- フォーム A のローカル POV: 製品

- フォーム B のローカル POV: プロジェクト

すべてのディメンションおよびページの選択がダッシュボード上のすべてのフォームに共通しているとはかぎらないため、ダッシュボード・オブジェクトの POV 全体がローカル POV バーとグローバル POV バーの間で分割されることがあります。グローバル POV バーとローカル POV をあわせると、ダッシュボード上の各フォームの完全な交差情報が含まれます。

データ・ソースとしてフォームを使用するオブジェクトが、ダッシュボードで 1 つのみである場合、フォームの POV/ページ全体をグローバル POV バーに移動できます。

データ・ソースとしてフォームを使用するオブジェクトがダッシュボードに複数ある場合、どのディメンションがグローバル POV バーに移動し、どのディメンションがローカル POV にとどまるかは次のように決まります。

- ディメンションがすべてのフォームの POV またはページに含まれ、メンバーの選択がすべてのフォームで同じ場合、ディメンションはグローバル POV バーに移動します。
- ディメンションが 1 つのフォームの POV および別のフォームのページに含まれる場合、ディメンションはローカル POV バーにとどまります。
- ディメンションが POV に含まれる場合、そのディメンションについてすべてのフォームで同じメンバーが選択されている必要があります。
- ディメンションがページ・ディメンションである場合、選択されたページ・メンバーがすべてのフォームで同じであり、同じ順序で表示される必要があります。

1.0 ダッシュボードの POV は、無効なページ・メンバーを非表示にして有効交差を保持します。ダッシュボード POV と有効な交差を参照してください。

ダッシュボード POV と有効な交差

ダッシュボード内の POV では、無効なページ・メンバーを非表示にすることにより、有効な交差が適用されます。フォームと同様に、「ページ」ドロップダウン・リストでは、POV およびページ・ディメンションのすべての選択されたメンバーがフィルタ処理されます。ダッシュボードでは、グローバルおよびローカルの POV がサポートされるため、「ページ」ドロップダウン・リストのフィルタ処理のコンテキストはメンバーが配置されている POV によって異なります。「ページ」ドロップダウン・リストがグローバル POV にある場合、フィルタ処理コンテキストはグローバル POV ディメンションのみとなります。「ページ」ドロップダウン・リストがローカル POV にある場合、フィルタ処理コンテキストはすべてのグローバル・ディメンションおよびチャートのローカル POV のディメンションとなります。

1.0 ダッシュボードのグローバル POV とローカル POV についても参照してください。

ダッシュボード 2.0 の作成および管理

次も参照:

- [ダッシュボード 2.0 のダッシュボード設計の概念](#)
- [ダッシュボード 2.0 の考慮事項](#)
- [ダッシュボード 2.0 のダッシュボードの作成](#)
- [ダッシュボード 2.0 の設計時のメンバー・セレクタの操作](#)
ダッシュボード 2.0 のダッシュボードを設計する場合は、メンバー・セレクタを使用して新しいディメンション・メンバーを簡単に検索して選択できます。
- [ダッシュボード 2.0 のフォーム 2.0 のグリッドについて](#)

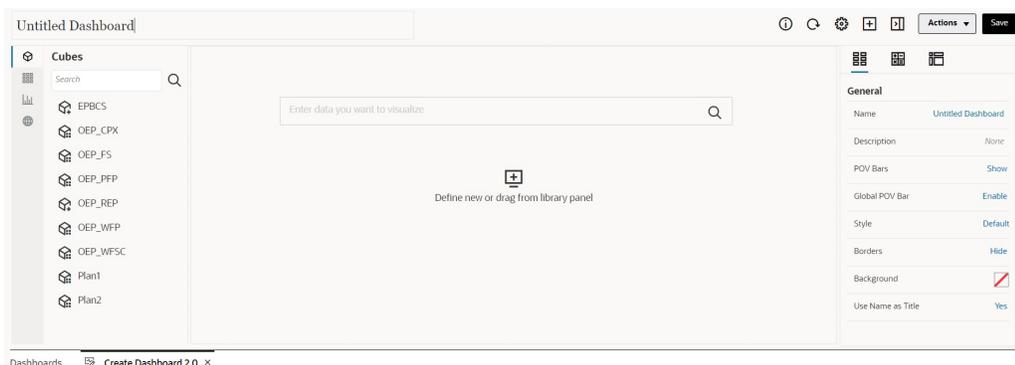
- [ジオマップ・チャート・タイプについて](#)
- [ピラミッド・チャート・タイプについて](#)
- [ウォーターフォール・チャート・タイプについて](#)
- [ダッシュボードでの表の使用](#)
- [ダッシュボード 2.0 のゲージ・チャート・タイプについて](#)
- [ダッシュボード 2.0 のレーダー・チャート・タイプについて](#)
- [ダッシュボード 2.0 の組合せチャート・タイプについて](#)
- [ダッシュボード 2.0 のタイル・チャート・タイプについて](#)
- [ダッシュボード 2.0 のグローバル POV とローカル POV について](#)
- [クイック分析について](#)

ダッシュボード 2.0 のダッシュボード設計の概念

このトピックには、ダッシュボード 2.0 のダッシュボードを設計する際に役立つ情報が含まれています:

- [ダッシュボード 2.0 デザイナについて](#)
- [ダッシュボード 2.0 デザイナを開く](#)
- [チャートのデータ・ソース](#)
- [ダッシュボード 2.0 に関するその他の役立つ情報](#)
- [ビデオ](#)

ダッシュボード 2.0 デザイナについて



ダッシュボード・デザイナーは、次のダッシュボード・コンポーネントで構成されています:

- [オブジェクト・パレット](#)
- [ダッシュボード・ツールバー](#)
- [ダッシュボード・ワークスペース](#)
- [プロパティ・パネル](#)
- [ダッシュボード・コンポーネント](#)

ダッシュボード 2.0 デザイナを開く

前述したように、**ダッシュボード**・ページのダッシュボード 2.0 ダッシュボードは次のアイコンによって識別されます:



ダッシュボード 2.0 の使用は、レッドウッド・エクスペリエンスが有効である場合にのみサポートされます。

ダッシュボード 2.0 デザイナを開くには:

1. ホーム・ページから **「ダッシュボード」** をクリックします。
2. 次のいずれかのオプションを選択してください:
 - ダッシュボードを作成するには、**「作成」** をクリックし、**「ダッシュボード 2.0」** を選択します。
 - ダッシュボードを編集するには、編集するダッシュボード 2.0 のダッシュボードの右側にある **「アクション」** 列で **「…」** をクリックし、**「編集」** をクリックします。
ダッシュボード 2.0 のダッシュボードの編集にデータ进行操作する必要がない場合 (たとえば、ダッシュボード・コンポーネントおよびタイルを再配置する場合は、**「…」** をクリックし、**「データなし編集」** をクリックします。
3. ダッシュボード 2.0 のダッシュボードがランタイム環境で開いている場合は、ランタイム環境からダッシュボード・デザイナ環境に切り替えることができます。
「アクション」 をクリックし、**「編集」** または **「データなし編集」** を選択します。

チャートのデータ・ソース

ダッシュボード 2.0 では、アド・ホック・グリッド、フォームおよびキューブからデータを選択できます。オブジェクト・パレットからデータ・ソースを選択します。

ノート:

ダッシュボード 2.0 のダッシュボードには、最大 12 個のコンポーネントを含めることができます。

- **「チャート」** タブ  のプロパティ・パネルでコンポーネントの完全なデータ・ソース情報を表示でき、**「ビジュアライゼーション」** で情報を表示できます。
- クイック分析のデータ・ソースとしてキューブを使用する場合は、オブジェクト・パレットからダッシュボード・ワークスペースにキューブをドラッグ・アンド・ドロップし、「検索」ボックスをクリックしてメンバー名を入力するか、メンバー・セレクタを起動してメンバーを選択します。これにより、**「レイアウト」** タブがプロパティ・パネルに表示され、ディメンションをピボットし、POV、行軸または列軸に表示するディメンションを選択できます。[クイック分析について](#)を参照してください。

 ノート:

クイック分析を使用してチャートを作成できるのは、選択できる全ディメンションのうち 50 個のメンバーという上限があります。この制限とキューブ内のディメンション数をあわせて、クイック分析に基づいたチャートでサポートされるグリッドの最大サイズが決まります。

- ダッシュボード・コンポーネントのデータ・ソースがフォームまたはアド・ホック・グリッドである場合は、フォーム定義を使用してデータがフェッチされます。
 - プロパティ・パネルでソース・フォームを変更するには、プロパティ・パネルの  タブで「**フォーム**」プロパティをクリックします。
 - チャートでビジュアル化できるフォーム・データの総量は 10,000 セルです。デフォルトでは、これは 100 行と 100 列です。ただし、行数と列数は、合計が 10,000 セル以下になる任意の組合せに変更できます。たとえば、行数を 5 に減らすと、列数を 2,000 ($5 \times 2000 = 10,000$) に増やすことができます。
 - フォームの精度が設定されている場合、ダッシュボード 2.0 への変換後に表示される値は、フォームの精度設定に基づきます。フォームの精度値が設定されていない場合、ダッシュボード 2.0 への変換後に表示される値は変わる可能性があります。

 ノート:

ダッシュボード・コンポーネントのデータ・ソースがフォームで、そのフォームに空白のヘッダー・セルまたは構成されていない空の式の行を含む行がある場合、対応するチャートの凡例は表示されません。

- 「ドーナツ」、「円」および「ゲージ」チャート・タイプの場合、1 つのコンポーネントに複数のチャートを追加できます。複数のチャートを追加するには、チャートの「**表示**」プロパティで「**単一**」または「**複数**」をクリックします。「**単一**」が選択されている場合、チャートには基礎となるフォームのデータの最初の列のみが表示されます。「**複数**」が選択されている場合、基礎となるフォームのデータの列ごとにチャートが表示されます。

 ノート:

「ドーナツ」、「円」および「ゲージ」チャート・タイプが含まれ、ダッシュボード 1.0 からダッシュボード 2.0 に変換されたダッシュボードの場合、「**表示**」プロパティのデフォルト・オプションは「**複数**」です。新しく作成されたダッシュボード 2.0 のダッシュボードの場合、「**表示**」のデフォルト・オプションは「**単一**」です。

ダッシュボード 2.0 に関するその他の役立つ情報

- ダッシュボードの作成時に、「**アクション**」をクリックし、**保存して実行**を選択すると、ダッシュボード・ユーザーに対するダッシュボードの外観と動作をすぐに確

認できます。デザイナー・モードに戻ってダッシュボードの設計を続行するには、「アクション」をクリックし、「編集」または「データなし編集」を選択します。

- デフォルトでは、欠落データまたは抑制データはゼロとしてプロットされます。選択したチャート・タイプ(面、バブル、組合せ、折れ線、レーダーおよび散布図)のチャートの設定で、「プロットにゼロの値なし」オプションを選択して、この設定を無効化できます。このオプションが無効になっている場合は、欠落データまたは抑制データが無視されて、そのチャート・タイプでゼロとしてプロットされなくなります。
- ダッシュボード 2.0 の考慮事項を確認するには、[ダッシュボード 2.0 の考慮事項](#)を参照してください。

ビデオ

目的	視聴するビデオ
ダッシュボード・デザイナーで複数のコンポーネントを持つダッシュボードをダッシュボード 2.0 向けに作成する方法を学習します。	 ダッシュボード 2.0 でのダッシュボードの作成

オブジェクト・パレット

ダッシュボード・デザイナーの左側には、ダッシュボード・コンポーネントのコンテンツを選択するオブジェクト・パレットがあります。単にオブジェクト・パレットからワークスペースにオブジェクトをドラッグ・アンド・ドロップするか、「検索」ボックスを使用してコンテンツを検索します。

オブジェクト・パレットのサイズを変更できます。オブジェクト・パレットのサイズを変更するには、パレットの右側にカーソルを置き、ドラッグします。パレットを非表示にするには、ハンドル・アイコン  が表示されるまでパレットの上にカーソルを置き、このアイコンをクリックしてパレットを非表示にします。ハンドル・アイコンを再度クリックすると、パレットが再度開きます。

オブジェクト・パレットのコンテンツは、次のカテゴリにグループ化されます:

Table 10-3 オブジェクト・パレットのコンテンツのカテゴリ

アイコン	説明
	キューブ: 事前作成されたフォームがなくても、キューブのコンポーネントをダッシュボードに追加することでクイック分析を実行できます。 クイック分析について を参照してください。
	ライブラリ: フォーム・フォルダに移動するか名前で検索して、ダッシュボードに含めるアド・ホック・フォームおよび標準フォームを選択します。 <ul style="list-style-type: none"> 「リスト」をクリックして、フォームを「リスト・ビュー」または「ツリー・ビュー」で表示します。  をクリックして、検索キーワードを入力します。 フォームに設定されているアクセス権限がダッシュボードで保持されます。

Table 10-3 (Cont.) オブジェクト・パレットのコンテンツのカテゴリ

アイコン	説明
	<p>ビジュアライゼーション: ダッシュボードに含めるチャートを選択します。</p> <p>チャートでデータを表示するには、キューブのコンポーネントを選択するか、そのチャートをデータ・ソースとしてフォームに関連付ける必要があります。チャートをフォームにリンクすると、ユーザーは、関連付けられたチャートに対するフォームでのデータ変更の影響をすぐに確認できます。</p>
	<p>その他:</p> <ul style="list-style-type: none"> • 注釈: 入力したコメントをグラフまたはチャートの下、およびプロパティ・パネルの「チャート」タブの下部に追加します。「注釈」には、WYSIWYG テキスト・エディタが含まれています。 • URL: 入力した URL をグラフまたはチャートの下、およびプロパティ・パネルの「チャート」タブの下部に追加します。「URL」には参照 URL リンクが含まれており、URL は IFrame をサポートしている必要があります。 <p>https://セキュリティ・プロトコルで始まる外部サイトの URL のみを挿入します。内部または相対 URL や、google.com などの同意していないサード・パーティ・サイトの URL を使用しないでください。</p> <p>同じ Oracle Enterprise Performance Management Cloud インスタンスまたは別の EPM Cloud インスタンスのフォームやダッシュボードなど、他の EPM アーティファクトへのダッシュボード・ダイレクト URL を埋め込まないでください。</p>

 **Note:**

ダッシュボードに追加された URL がランタイム環境で機能しない場合は、その URL を右クリックし、新しいタブでリンクを開きます。

ダッシュボード・ツールバー

ダッシュボード・デザイナの右上隅には、次のダッシュボード・タスクを実行できるダッシュボード・ツールバーがあります:

Table 10-4 ダッシュボード・ツールバー

アイコン	説明
	「 情報 」アイコンは、ダッシュボードがあるフォルダを表示します。
	「 データのリフレッシュ 」アイコンは、ダッシュボード全体に関連付けられているすべてのデータをリフレッシュします。

Table 10-4 (Cont.) ダッシュボード・ツールバー

アイコン	説明
	<p>「POV 設定」アイコンは、次の POV アクションを実行します:</p> <ul style="list-style-type: none"> • POV: 「ディメンション・ラベルの非表示」: ダッシュボードにグローバル POV バーが含まれている場合、選択すると、グローバル POV バーでディメンション名が非表示になります。もう一度このオプションの選択を解除すると、グローバル POV バーにディメンション名が表示されます。 • POV: 「自動適用」: ダッシュボードにグローバル POV またはローカル POV が含まれている場合、このアクションを有効にすると、変更が自動的に POV に適用されます。変更が自動的に適用されないようにするには、このオプションの選択を解除します。 • POV: すべてのページ選択のクリア:
	<p>「追加」アイコンは、新しい空のダッシュボード・コンポーネントをデザイン・キャンバスに追加します(これは、ドラッグ・アンド・ドロップにかわる方法です)。</p>
	<p>「プロパティ」アイコンは、プロパティ・パネルの表示/非表示を切り替えます。</p>
「アクション」メニュー	<p>「アクション」メニューでは、次のアクションを実行できます:</p> <ul style="list-style-type: none"> • 最終保存時の状態に戻す: ダッシュボードが最後に保存されて以降行われた編集を破棄します • 保存して実行: 行った編集を保存し、ランタイム環境でダッシュボードを開きます。
保存	<p>「保存」をクリックすると、ダッシュボード定義が保存されます。</p>

ダッシュボード・ワークスペース

ページ中央の、オブジェクト・パレットと「プロパティ」パネルの間の大きな領域は、ダッシュボード・ワークスペースです。ドラッグ・アンド・ドロップに加えて、「検索」ボックスを使用して、コンポーネントごとに表示するデータを指定または検索できます(コンポーネントは、ダッシュボード・オブジェクト(チャートや表など)を追加できるダッシュボード・ワークスペース内の空のオブジェクトです)。ダッシュボード・ワークスペースには最大 12 個のコンポーネントを追加できます。

レッドウッド・エクスペリエンスが有効になっており、フォーム・バージョンが「フォーム 2.0」の場合、ワークスペースにドロップされたフォームは最初は編集可能なグリッドとしてレンダリングされます。ワークスペースにドロップされたアド・ホック・グリッドは、最初は表としてレンダリングされます。

- 最初にドラッグ・アンド・ドロップしたオブジェクトがワークスペース全体を占有し、その後、追加オブジェクトをオブジェクト・パレットから既存のコンポーネントの左、右、上または下にドラッグします。
- コンポーネントをダッシュボードの別の部分に移動するには、そのコンポーネントをクリックし、ドラッグ・アイコンが表示されるまでコンポーネントの上端にカーソルを置きます。コンポーネントを別のコンポーネントの左、右、上または下にドラッグ・アンド・ドロップすると、ダッシュボード上の他のオブジェクトが移動し、再配置されます。
- ワークスペース全体に広がるようにコンポーネントを最大化するには、 をクリックし、「最大化」をクリックします。コンポーネントがワークスペース全体に広がり、ワー

クスペース上の他のコンポーネントは非表示になります。***、「復元」の順にクリックすると、コンポーネントが元のサイズに戻り、ワークスペース内の他のコンポーネントが再び表示されます。

- ダッシュボード内のコンポーネントの高さおよび幅を変更するには、次のいずれかのアクションを実行します:
 - ダッシュボード・ワークスペース内のコンポーネントの枠線をドラッグします
 - ダッシュボード・コンポーネントを選択し、右側の「プロパティ」パネルで  をクリックして、コンポーネントの高さおよび幅を表示して変更します。
- ダッシュボード・ワークスペースの全体的なサイズを最大化するには、ワークスペースのいずれかの側にあるオブジェクト・パレットとプロパティ・パネルのサイズを変更したり、非表示にすることができます。
- URL コンポーネントを含むダッシュボードの場合、URL コンポーネントの本文をクリックしても、フォーカスは URL コンポーネントに切り替わりません。フォーカスを URL コンポーネントに切り替えるには、[Alt]を押しながら[W]を押すか、カーソルが移動アイコン  に変わるまで URL タイトル・バーの上にカーソルを置き、クリックしてフォーカスを変更します。

Note:

ランタイム環境では、ユーザーがフォームなどのオブジェクトに対するアクセス権を持っていない場合やフォームが見つからない場合、隣接するコンポーネントがそのスペースを占有します。デザイナー環境では、すべての空のコンポーネントが表示されるため、デザイナーはそれらを削除することもできます。

プロパティ・パネル

ダッシュボード・デザイナーの右側には、ダッシュボード全体の一般プロパティおよびコンポーネント固有のプロパティを設定できる「プロパティ」パネルがあります。

「プロパティ」パネルのサイズを変更できます。パネルのサイズを変更するには、パネルの左側にカーソルを置き、ドラッグします。パネルを非表示にするには、ページの上部にある  をクリックします。  を再度クリックすると、パネルが再度開きます。

Table 10-5 プロパティ・パネル

アイコン	説明
	<p>「一般」タブには、ダッシュボード全体の次のプロパティが含まれています:</p> <ul style="list-style-type: none"> • 名前: ダッシュボード全体のタイトルを編集します。 • 説明(オプション): ダッシュボードについて説明します。 • POV バー: POV バーを表示または非表示にします。 • グローバル POV バー: グローバル POV バーを有効または無効にします。 • スタイル: ダッシュボードのカラー・スキームを選択します。オプションは、「デフォルト」、「明るい」および「暗い」です。 <div data-bbox="751 659 1458 831" style="border: 1px solid #0070C0; padding: 10px; background-color: #E6F2FF;"> <p> Note:</p> <p>「暗い」を選択すると、ダッシュボードのエラー・メッセージおよび凡例テキストが見づらくなります。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> • 枠線: コンポーネントの枠線を表示または非表示にします。 • 背景: 色のメニューから新しいダッシュボードの背景を選択します。 <div data-bbox="751 963 1458 1136" style="border: 1px solid #0070C0; padding: 10px; background-color: #E6F2FF;"> <p> Note:</p> <p>ダッシュボードにグリッドが含まれている場合は、背景色のみが変更されます。グリッドの色は変わりません。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> • 名前をタイトルとして使用: 「いいえ」を選択すると、ダッシュボードのタイトルをカスタマイズできます。フォント・ファミリー、フォント・サイズ、太字、斜体、下線、フォントの色およびフォントの背景色を変更して、タイトルをさらにカスタマイズできます。 <p>POV の詳細は、ダッシュボード 2.0 のグローバル POV とローカル POV についてを参照してください。</p>

Table 10-5 (Cont.) プロパティ・パネル

アイコン	説明
	<p>「関連付け」タブには、ダッシュボードおよび基礎となるフォーム・データに関連付けられているルールがリストされます。</p>

 **Note:**

グローバル**保存**中に実行する必要があるルールを関連付けることができます。これらのルールは、いつでも関連付けたり、削除することができます。

ルールを追加して編集できます:

- ルールが関連付けられていない場合は、 をクリックして、選択するルールのリストを表示します。ダッシュボード内のフォームにすでに関連付けられているルールが最初にリストされ、次のような名前が付けられています:

<フォーム名>のビジネス・ルール
- ルールを追加する場合は、ルールの実行タイミングを指定する必要があります: 「**ロード前**」、「**ロード後**」、「**保存前**」、「**保存後**」、「**フォームのメンバーを使用**」、「**プロンプトの非表示**」。
- 「**アクション**」で、ルールを削除したり、ルールの実行順序を変更することができます: 「**一番上へ移動**」、「**上へ移動**」、「**下へ移動**」、「**一番下へ移動**」および「**削除**」。
- ルールに実行時プロンプトがある場合、それらはルールの実行時に表示されます。

[ビジネス・ルールのプロパティの設定](#)を参照してください。

Table 10-5 (Cont.) プロパティ・パネル

アイコン	説明
	<p>「チャート」タブには、チャート・タイトル、コンポーネントの高さ、幅、背景色など、ダッシュボードで選択されているコンポーネントのプロパティが含まれています。また、チャート・タイプ、データ・ソース・タイプ、および各コンポーネントに使用されている基礎となるフォームを変更することもできます。コンポーネントごとに異なる背景色を使用すると、各ダッシュボード・コンポーネントを一意に区別できます。チャート・タイトルを削除するとスペースが解放され、ローカル POV バーおよびチャート自体に応じてスペースが調整されます。</p> <p>行と列の場合、チャートでビジュアル化できるフォーム・データの総量は 10,000 セルです。デフォルトでは、これは 100 行と 100 列です。ただし、行数と列数は、乗算の合計が 10,000 セル以下になる任意の組合せに変更できます。たとえば、行数を 5 に減らすと、列数を 2,000 ($5 \times 2000=10,000$) に増やすことができます。</p>

 **Note:**

10,000 セルのビジュアライゼーション制限はグリッドには適用されません。

チャートに関連付けられているフォームが **10,000** セルのビジュアライゼーション制限を超えると、フォームに表示されるデータとダッシュボードのチャートでデータをビジュアル化する方法の間に矛盾が発生する可能性があります。また、チャートや凡例のドリルスルーなど、他の実行時の問題が発生する可能性もあります。

このコンポーネントに「**注釈**」または「**URL**」情報タイプを追加した場合は、このタブの下部にあるそれらの情報タイプのコンテンツを編集できます。

Table 10-5 (Cont.) プロパティ・パネル

アイコン	説明
 <p>(このアイコンは、ダッシュボードで選択されているコンポーネントによって異なります)</p>	<p>このタブでは、選択したチャートまたは表のビジュアライゼーションをカスタマイズできます。</p> <p>値のスケール方法、行区切りやグリッド線の表示または非表示、ヘッダーやデータについての異なるフォント・サイズおよび色の選択、垂直または水平の向きの設定、凡例の位置の定義、表へのスパーク・チャートの追加、セカンダリ Y 軸の追加など、選択したコンポーネントの表示プロパティを設定します。</p> <p>プロパティの詳細な説明については、チャート・タイプのトピックを参照してください。</p>
	<p>「レイアウト」タブには、クイック分析用に選択したキューブの「POV」、「行」および「列」プロパティが含まれています。</p> <p>クイック分析についてを参照してください。</p>

 **Note:**

ダッシュボード 2.0 のデータ・ビジュアライゼーションの場合、現在、カスタム色パレットで 15 色ではなく 12 色のみがサポートされています。以前の更新で 15 色を使用してダッシュボードを作成した場合、実行時には引き続き 15 色が表示されます。ただし、カスタム色を変更しようとすると、ダッシュボード・デザイナーで選択および保存できる 12 色のみが表示されます。

ダッシュボード・コンポーネント

ダッシュボード・ワークスペースには最大 12 個のコンポーネントを追加できます。

ワークスペースのコンポーネントにカーソルを置くと、そのコンポーネントのツールバーが右上隅に表示されます:



Table 10-6 ダッシュボード・コンポーネントのツールバー

アイコン	説明
	情報: フォーム名、フォームのフォルダ・パス、キューブなど、基礎となるフォームの詳細を表示します
	保存: 変更したデータを保存し、コンポーネントに関連付けられているルールを実行します
	リフレッシュ: ダッシュボード・コンポーネントに関連付けられているデータをリフレッシュします

Table 10-6 (Cont.) ダッシュボード・コンポーネントのツールバー

アイコン	説明
	チャート・タイプ: コンポーネントに関連付けられているチャート・タイプを変更します
	「アクション」メニュー: <ul style="list-style-type: none"> • 最大化: ダッシュボード・コンポーネントを拡大します。最大化した後、「復元」をクリックすると、ダッシュボード・コンポーネントは元のサイズに戻ります。 • フォームを開く: 現在のタブの横に、コンポーネントに関連付けられているランタイム・フォームを動的タブで開きます。 • フォームの編集: 適切な権限を持っている場合は、コンポーネントに関連付けられているフォームがフォーム・エディタで開きます。フォーム・エディタは、現在のタブの横に動的タブで開きます。 • 削除: フォームを削除します。

ダッシュボード 2.0 の考慮事項

ダッシュボード 2.0 の使用時には、次の考慮事項に注意してください:

- 3D ビジュアライゼーションは、ダッシュボード 2.0 ではサポートされていません。これは、ダッシュボード 2.0 の次のチャート・タイプに影響します:
 - 面
 - 棒
 - バブル
 - 縦棒
 - 組合せ
 - ドーナツ
 - ゲージ
 - グリッド
 - 折れ線
 - レーダー
 - 散布

Note:

ダッシュボード 1.0 では、必要に応じてチャートの 3D ビジュアライゼーションが引き続きサポートされます。

- 今後の更新で、ダッシュボード 2.0 ではスマート・プッシュがサポートされる予定です。
- ファンネル・チャートは、プロセスのステージ(営業プロセスのステージなど)のデータを表示する場合に役立ちます。ファンネル・スライスの領域は、対応するステージのその値

に比例します。ダッシュボード 1.0 は、ダッシュボード 2.0 がファンネル・チャートをレンダリングする方法とは大きく異なる方法でファンネル・チャートをレンダリングします。ダッシュボード 1.0 では、ファンネル・チャートは複数の列をサポートし、フォームの最初の 2 行は実績とターゲットを比較するために使用されます。このチャートは、それぞれの列に対応するファンネルの 2 つの差異をプロットします。ダッシュボード 2.0 では、ファンネル・チャートは最初の列のみをサポートし、行の各セルに対応するファンネルの領域は色付けされ、その数値に比例してサイズが変更されます。

- 今後のダッシュボードの拡張機能はすべてダッシュボード 2.0 に含まれます。

フォーム・バージョンとダッシュボード 2.0

ランタイム・フォームには、次の 2 つのバージョンもあります:

- **フォーム 1.0:** Oracle ADF Fuse コンポーネントを使用する Slick Grid を使用しています
- **フォーム 2.0:** Oracle JET コンポーネントを使用する Slick Grid を使用しています

ダッシュボード 2.0 と同様に、フォーム 2.0 は、**レッドウッド・エクスペリエンス**が有効になっている場合にのみ使用できます。ダッシュボード 2.0 の特定の機能はフォーム 2.0 でのみ動作します。たとえば、ダッシュボード 2.0 では、基礎となるフォームがフォーム 2.0 のフォームである場合にのみ、フォーム・グリッド内のデータを直接操作できます。「**フォーム・バージョン**」は、アプリケーション設定で更新できます。

ダッシュボード・バージョンとフォーム・バージョンが相互作用する方法にはいくつかの違いがあることを知っておく必要があります。

「**フォーム・バージョン**」アプリケーション設定が「**フォーム 1.0**」に設定されている場合:

- ダッシュボード 1.0 とフォーム 1.0 は引き続き併用できます。
- ダッシュボード 2.0 とフォーム 1.0 は併用できません。

フォーム 2.0 はダッシュボード 2.0 でのみサポートされます。すべての相互作用にフォーム 2.0 とダッシュボード 2.0 を使用します。

ダッシュボード 2.0 のダッシュボードを選択した場合に、ダッシュボード 2.0 コンポーネントの初期化中にエラーが発生しましたというメッセージが表示された場合、そのダッシュボードにはフォーム 2.0 のフォームが関連付けられており、ダッシュボードを表示する前に、レッドウッド・エクスペリエンスおよびフォーム 2.0 が有効になっていることを確認する必要があります。

- ダッシュボード 2.0 のアーティファクトが作成されると、「**グリッド**」ビジュアライゼーション・オプションは使用できなくなります。
- ダッシュボード 2.0 でフォームをグリッドとして使用するには、「**フォーム・バージョン**」アプリケーション設定を「**フォーム 2.0**」に更新します。
- 既存のダッシュボード 2.0 のダッシュボード(2023 年 11 月より前に作成されたダッシュボード 2.0 のダッシュボード)では、フォームをグリッドではなく表およびチャートとして引き続き表示します。

「**フォーム・バージョン**」アプリケーション設定が「**フォーム 2.0**」に設定されている場合:

- ダッシュボード 1.0 とフォーム 2.0 は引き続き併用できます。

- ダッシュボード 2.0 では、「**グリッド**」ビジュアライゼーション・オプションが表示され、読み取り、書き込みおよび計算機能を備えたフォーム 2.0 を使用します。
- ダッシュボード 1.0 内のフォーム 2.0 は、フォーム 1.0 として表示されます。

 **Note:**

保存したフォーム定義は、「**フォーム・バージョン**」アプリケーション設定(「**フォーム 1.0**」または「**フォーム 2.0**」)に関係なく、ダッシュボードのチャートのデータ・ソースとして使用できます。

ダッシュボード 2.0 のダッシュボードの作成

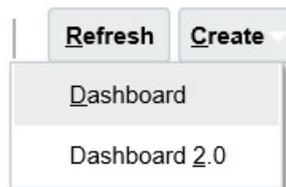
選択するダッシュボード・バージョンを決定する際に役立つ情報を確認できます。[ダッシュボード・バージョンについて](#)を参照してください。

 **ノート:**

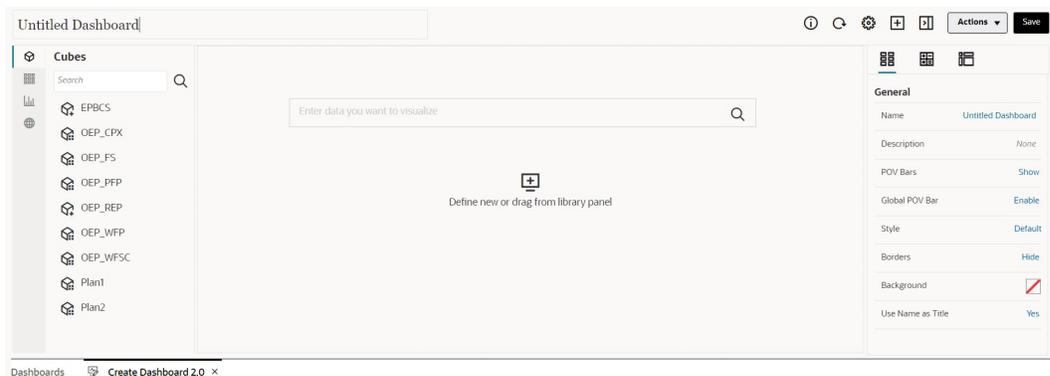
ダッシュボード 1.0 のダッシュボードを作成するには、[ダッシュボード 1.0 のダッシュボードの作成](#)を参照してください。

ダッシュボード 2.0 のダッシュボードを作成するには:

1. ホーム・ページから、「**ダッシュボード**」をクリックし、「**作成**」をクリックします。



2. 提供されるオプションから、「**ダッシュボード 2.0**」を選択します。



3. デフォルトのダッシュボード名をクリックし、入力ボックスに新しい名前を入力することにより、ダッシュボードの名前を入力します。

4. 左側のオブジェクト・パレットからダッシュボード・ワークスペースにコンテンツをドラッグ・アンド・ドロップします。ダッシュボード設定およびプロパティを使用して、ダッシュボードをカスタマイズします。

ダッシュボード・デザイナの詳細は、[ダッシュボード 2.0 のダッシュボード設計の概念](#)を参照してください。

5. 「保存」をクリックします。

ダッシュボード・リスト・ページで「別名コピー」を使用すると、ダッシュボードを簡単に複製して変更できます。コピーするダッシュボードの横にある「アクション」アイコン...を選択します。

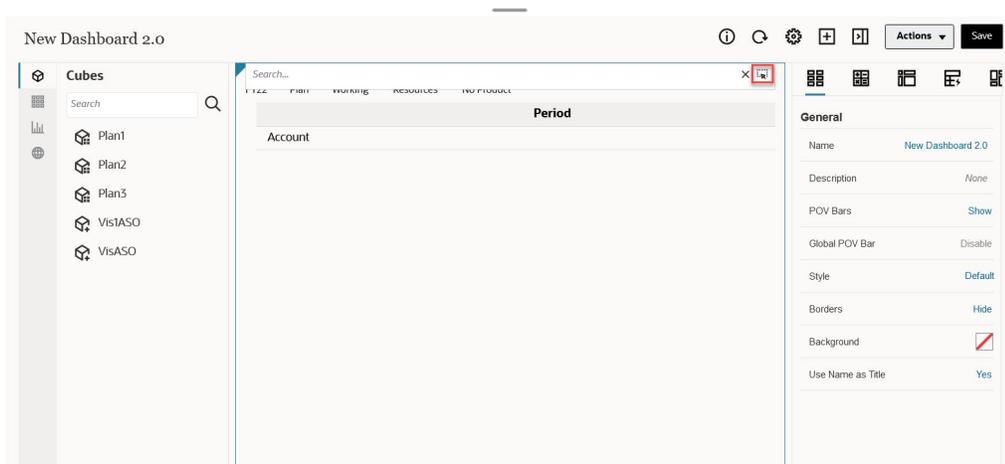
ダッシュボード 2.0 の設計時のメンバー・セレクタの操作

ダッシュボード 2.0 のダッシュボードを設計する場合は、メンバー・セレクタを使用して新しいディメンション・メンバーを簡単に検索して選択できます。

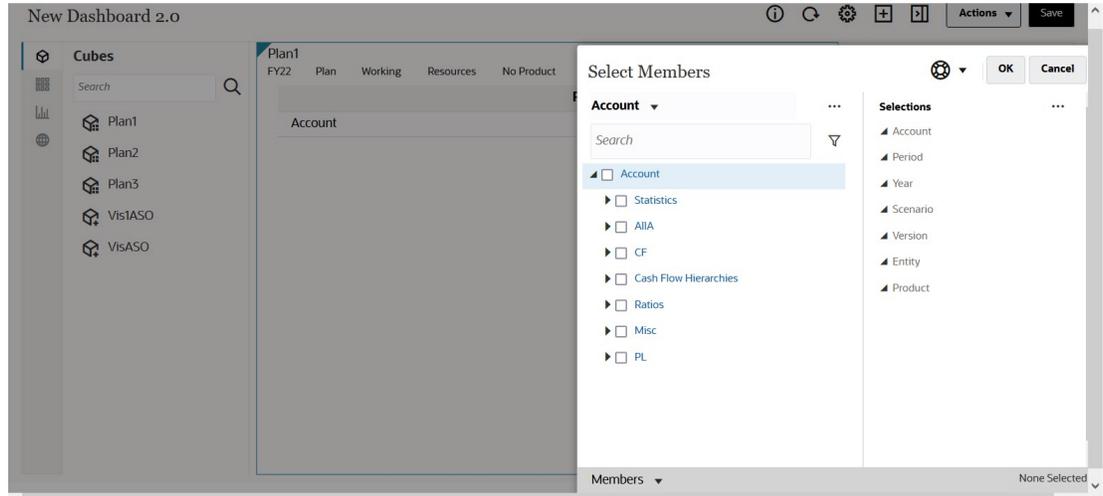
ダッシュボードでクイック分析を作成する場合は、キューブを追加した後に、メンバー・セレクタを使用して各ディメンションのメンバーを選択できます。

クイック分析のメンバー・セレクタを開くには:

「クイック検索」バーの「メンバー・セレクタ」アイコンをクリックします:



メンバー・セレクタを使用して、各ディメンションのメンバーを選択します。

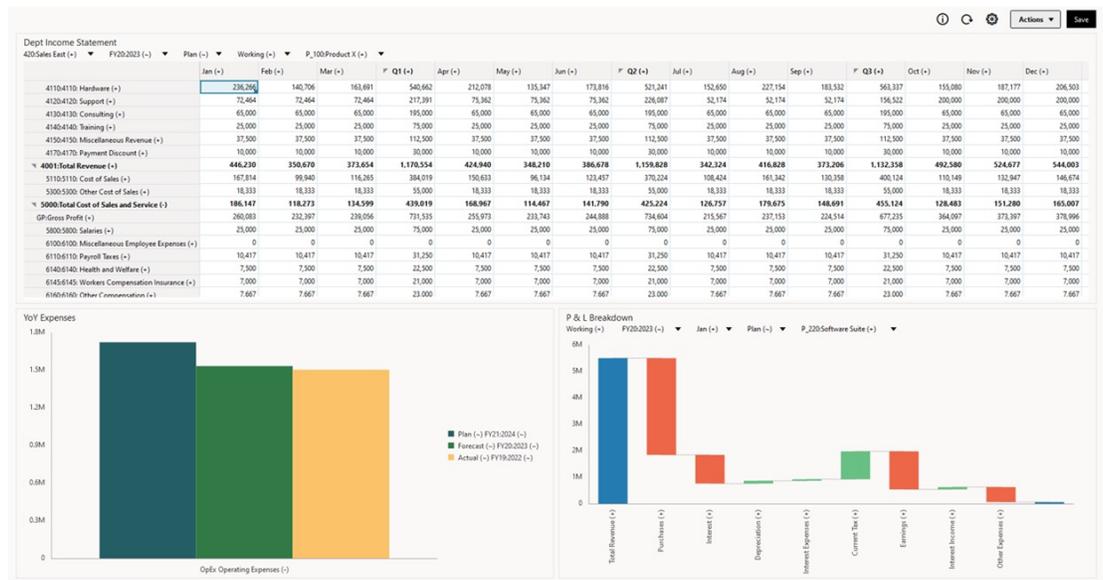


メンバー・セレクタの操作の詳細は、メンバー・セレクタの使用を参照してください。

ダッシュボード 2.0 のフォーム 2.0 のグリッドについて

ダッシュボード 2.0 に新しく追加されたコンポーネントには、デフォルトでフォーム・グリッドが表示され、関連付けられているフォームがフォーム 2.0 フォームである場合、グリッドは書込み可能です。基礎となるフォームがフォーム 2.0 フォームである場合、ダッシュボードのグリッドを使用して、フォームのデータを直接操作できます。グリッド・コンポーネントを含むダッシュボードでは、データ更新をライトバックしたり、ルールを呼び出すことができます。また、グリッド内を右クリックしてコンテキスト・メニューを表示し、そこからグリッド分散などの追加グリッド・アクションを実行したり、コメントや添付を追加することもできます。

グリッドおよびチャートを含むダッシュボードの例



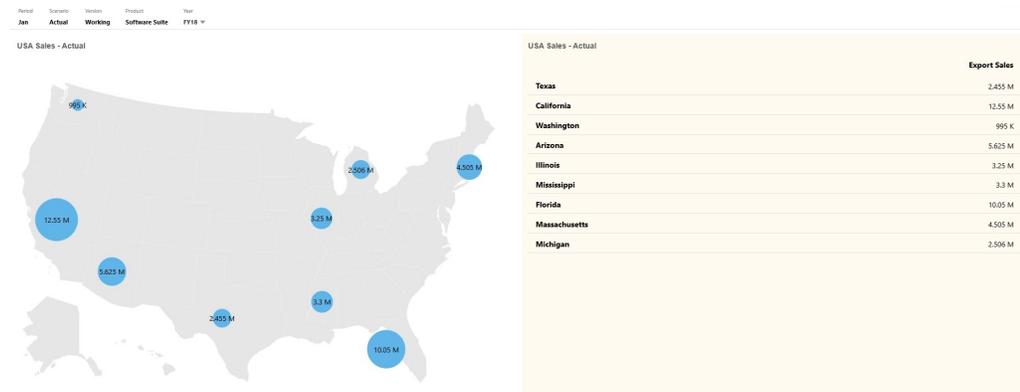
ジオマップ・チャート・タイプについて

ジオマップは、表示されているそれぞれの地理的地域に関するいくつかのメジャーを表示するオーバーレイおよびチャートを伴う地理マップです。ジオマップ内でバブルまたは色による強調表示にカーソルを置くと、データ・ラベルが表示されます。

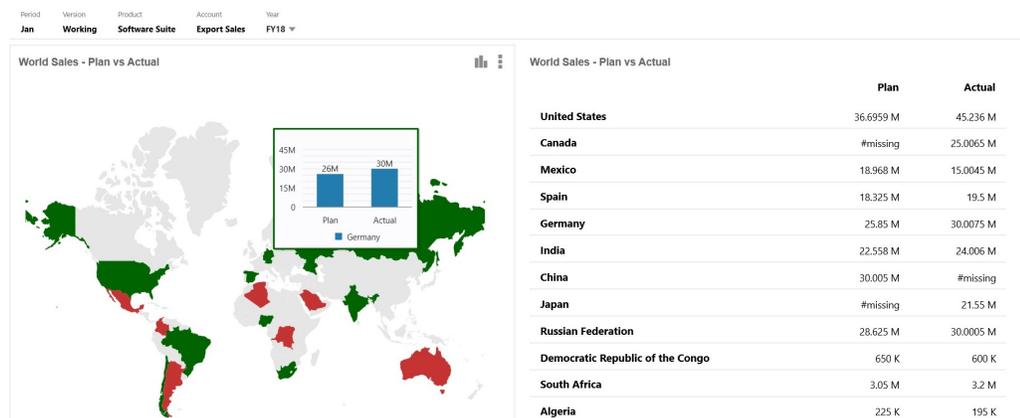
ノート:

基礎となるデータの値に基づいて差異(「目的の差異トレンド」設定に応じて赤または緑)を表示するために、色による強調表示のジオマップが設計されます。ジオマップ領域の 1 番目または 2 番目の列に欠落値がある場合、またはそれらの列の値が等しく、差異がない場合、領域が青で強調表示されます。強調表示された領域の上にカーソルを置くと、欠落値を除く行のすべての値の棒グラフが表示されます。

ジオマップの例 - データ・バブルを使用した米国の売上げ



ジオマップの例 - 色による強調表示を使用した世界の売上げ



ダッシュボード・デザイナーは、次に示すジオマップ・チャートのプロパティを設定できます:

表 10-7 ジオマップ・チャートのプロパティ

設定	説明
マップ・レイヤー	「世界」を選択するか、マップの範囲を「アジア」、「北アメリカ」、「アフリカ」などの大陸に絞り込みます。
タイプ	<p>「データ・バブル」ジオマップでは、サイズが異なるバブルとしてデータがマップ・レイヤー上に表示されます。「色による強調表示」ジオマップでは、2つのデータ値を比較して、増加している地理的地域は緑、減少している地理的地域は赤で表示されます。</p> <p>「データ・バブル」または「色による強調表示」を選択し、次の追加オプションを指定します:</p> <ul style="list-style-type: none"> 「データ・バブル」の場合は、「ラベル」(「表示」または「非表示」)、「ラベルの色」および「バブルの色」について目的の設定を選択します。 「色による強調表示」の場合は、「目的の差異トレンド」(「増加」または「減少」)を指定します。
地理名	<p>国、都道府県/州、市区町村など、ジオマップで使用される地理要素を含むメタデータ・ロード・ファイルが用意されています。CSV ファイルをクリックしてダウンロードし、これを新しいメンバーとして、または(手動で変更を加えて)アプリケーション内の既存のメンバーの別名としてディメンションにアップロードできます。</p> <p>ジオマップが機能するのは、フォームの地理名が、ダッシュボード 2.0 によってそのマップ・レイヤーに使用される地理名と完全に一致する場合のみです。したがって、たとえば、マップ・レイヤーでは「合衆国」が使用されているため、USA というエンティティ/地理ディメンションは、有効な名前として認識されません。</p>

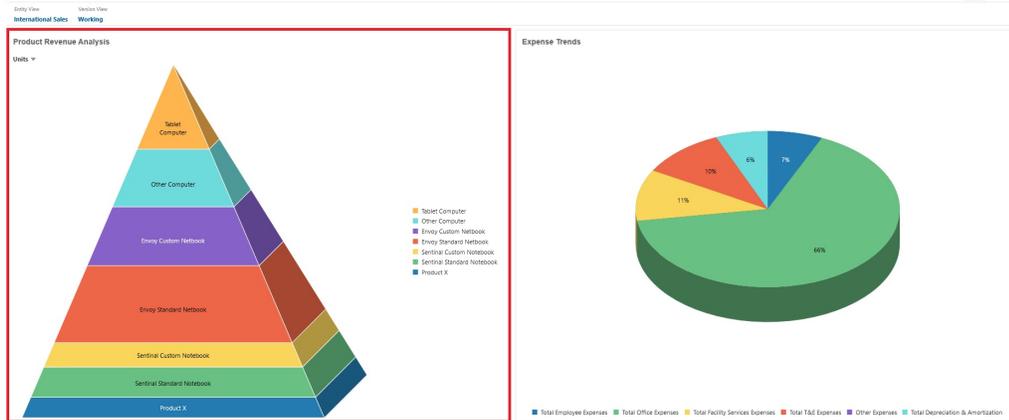
ビデオ

目的	視聴するビデオ
ジオマップ・チャートの地理メンバーをダウンロードし、それらをディメンションにインポートする方法を学習します。データ・バブルと色による強調表示の両方のジオマップ・チャートを設定する方法を学習します。	 ダッシュボード 2.0 でのジオマップの作成

ピラミッド・チャート・タイプについて

ピラミッド・チャート・タイプでは、三角形の図表を使用して階層が視覚的に表されます。三角形はセクションに分割され、上から下に幅を変えて構造やプロセスが示されます。

3D ピラミッド・チャートの例



ダッシュボード・デザイナーは、次に示すピラミッド・チャートのプロパティを設定できます:

表 10-8 ピラミッド・チャートのプロパティ

設定	説明
凡例の位置	「左」、「右」、「上」、「下」または「なし」を選択します。
値のスケール	<p>大きい数字で特に便利なのは、値の表示方法を指定できることです。たとえば、値が 1,689,000 の場合に、スケーリング・オプションとして「K - 千」を選択すると、チャートにはこの値が 1,689K と表示されます。</p> <p>スケーリングのオプションは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> なし: スケーリングを適用しません。 自動: 範囲に応じて値が表示されます。たとえば、1,500 は「1.5K」、1,689,000 は「1.69M」、42,314,531,211 は「42.31B」、1,234,567,891,234 は「1.23T」としてそれぞれ表示されます。 K - 千: 値が千単位で表示されます。たとえば、1,689,000 は「1689K」と表示されます。 M - 百万: 値が百万単位で表示されます。たとえば、123,456,789 は「123M」と表示されます。 B - 十億: 値が十億単位で表示されます。たとえば、12,345,678,912 は「12B」と表示されます。 T - 兆: 値が兆単位で表示されます。たとえば、1,234,567,891,234,567 は「1,234T」と表示されます。
3D グラフ	データを 3D グラフとしてビジュアル化するには、「はい」を選択します。
色	「デフォルト」を選択するか、ピラミッド・チャートのセクションをクリックし、そのセクションのカスタム色を選択します。

ウォーターフォール・チャート・タイプについて

ウォーターフォール・チャートには正および負の値の累計が表示され、初期値からその累計値に到達した経緯を示す場合に役立ちます。

ウォーターフォール・チャートは、初期値が一連の正または負の中間値によってどのような影響を受けたかを表すために使用されます。通常、初期値と最終値(端点)は列全体で表されるのに対して、中間値は、前の列の値に基づいて開始されるフローティン

グ列として表示されます。列を色分けして、正の値と負の値を区別することもできます。

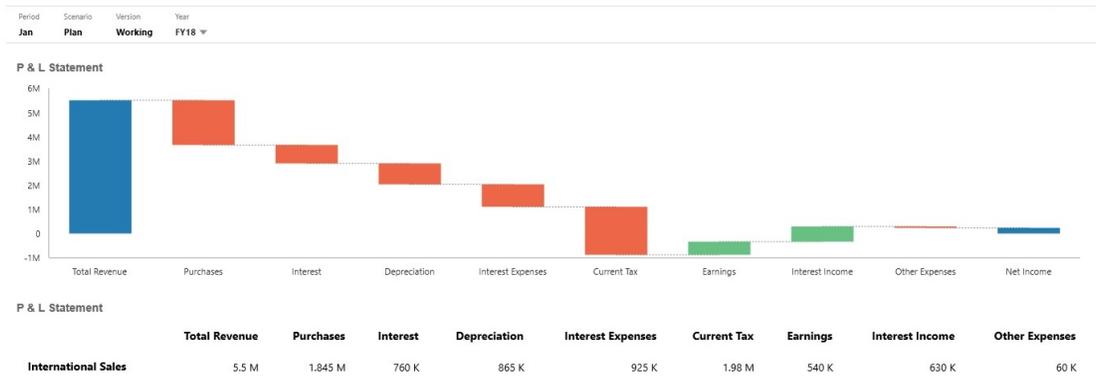
ウォーターフォール・チャートの例 - 在庫分析

次の例は、時間の経過に伴う 1 つの勘定科目の変化をビジュアル化したものです。



ウォーターフォール・チャートの例 - 損益計算書

次の例では、費用勘定科目が収益合計に対する負の変化として示され、利益勘定科目が最終的な純利益値に対する正の変化として示されています。



ダッシュボード・デザイナーは、次に示すウォーターフォール・チャートのプロパティを設定できます:

表 10-9 ウォーターフォール・チャートのプロパティ

設定	説明
値のスケール	<p>大きい数字で特に便利なのは、値の表示方法を指定できることです。たとえば、値が 1,689,000 の場合に、スケーリング・オプションとして「K - 千」を選択すると、チャートにはこの値が 1,689K と表示されます。</p> <p>スケーリングのオプションは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • なし: スケーリングを適用しません。 • 自動: 範囲に応じて値が表示されます。たとえば、1,500 は「1.5K」、1,689,000 は「1.69M」、42,314,531,211 は「42.31B」、1,234,567,891,234 は「1.23T」としてそれぞれ表示されます。 • K - 千: 値が千単位で表示されます。たとえば、1,689,000 は「1689K」と表示されます。 • M - 百万: 値が百万単位で表示されます。たとえば、123,456,789 は「123M」と表示されます。 • B - 十億: 値が十億単位で表示されます。たとえば、12,345,678,912 は「12B」と表示されます。 • T - 兆: 値が兆単位で表示されます。たとえば、1,234,567,891,234,567 は「1,234T」と表示されます。
グリッド線	「 非表示 」を選択するか、「 表示 」を選択してグリッドの x 軸線を表示します。
接続折れ線	「 非表示 」を選択するか、「 表示 」を選択して各列の末尾を次の列の先頭に接続する線を表示します。これは、チャート内のデータのフローをビジュアル化するのに役立ちます。
プロット差分	<p>提供された値に基づいて、1 つのバーと次のバーの間で共通の始点および終点を自動的に計算してプロットする場合は、「はい」を選択します。これは、残高タイプの勘定科目のトレンドを表示する場合に便利です。</p> <p>それ以外の場合は、「いいえ」を選択して増加および減少点を手動で設定します。</p> <p>「いいえ」を選択した場合、次の増加/減少オプションをバーごとに手動で設定できます:</p> <ul style="list-style-type: none"> • 棒の方向: 棒を選択して、棒の方向を手動で増加/減少に設定します。 • すべての棒: チャート内のすべての棒のリストを表示して、棒の方向を手動で増加/減少に設定します。 <p>それぞれのバーについて設定できる手動オプションは、「自動」、「リバース」および「合計」です。「自動」では、データ・ソースからの正/負の値が考慮され、それに従ってプロットされます。「リバース」では符号が変更され、「合計」では、対応するバーでチャートが再開されます。</p>
増加 減少 合計	それぞれのプロパティの色を選択します。
終了棒	チャート上で終了棒を「 非表示 」にするか、「 表示 」するかを選択します。上の例では、終了棒が表示されています。終了棒を表示する場合、ラベルを指定できます。
軸	「 X 軸 」および「 Y 軸 」の「 カスタム範囲 」を選択するか、「 オフ 」を選択します。

ビデオ

目的

ウォーターフォール・チャートを作成して、1つの勘定科目の時間の経過に伴う変化を追跡し、複数の勘定科目がどのように連携して最終合計を生成するかを追跡する方法を学習します。

視聴するビデオ



[ダッシュボード 2.0 でのウォーターフォール・チャートの作成](#)

ダッシュボードでの表の使用

ダッシュボードの表では、フォームまたはグリッドからの複数の値を表示するデータのリスト・ビューが提供されます。列データをプロットする、スパーク・チャートと呼ばれる小さいチャートを表の各行に埋め込むことができます。また、表は検索可能です。

プレーンな表が表示されているダッシュボードの例

Balance Sheet - Plan				
	Q1	Q2	Q3	Q4
Current Assets	535 M	557 M	588 M	625 M
Fixed Assets	54 M	50 M	45 M	41 M
Other Assets Total	223 M	223 M	223 M	223 M
Total Assets	812 M	830 M	857 M	890 M
Current Liabilities	335 M	336 M	337 M	345 M
Long Term Liabilities	44 K	44 K	44 K	44 K
Total Owners Equity	477 M	494 M	519 M	545 M
Total Liabilities and Owners Equity	812 M	830 M	857 M	890 M

Balance Sheet - Forecast				
	FY16 Q3	FY16 Q4	FY17 Q1	FY17 Q2
Current Assets	479.40 M	515.61 M	488.15 M	500.23 M
Fixed Assets	61.17 M	59.33 M	53.98 M	50.52 M
Other Assets Total	223.09 M	223.09 M	223.09 M	223.09 M
Total Assets	763.66 M	798.02 M	765.21 M	773.85 M
Current Liabilities	331.48 M	338.24 M	333.92 M	335.93 M
Long Term Liabilities	43.77 K	43.77 K	43.77 K	43.77 K
Total Owners Equity	432.07 M	459.66 M	431.25 M	437.87 M
Total Liabilities and Owners Equity	763.59 M	797.94 M	765.21 M	773.85 M

スパーク・チャートを含む表が表示されているダッシュボードの例

Balance Sheet - Plan				
	Q1	Q2	Q3	Q4
Current Assets	535 M	557 M	588 M	625 M
Fixed Assets	54 M	50 M	45 M	41 M
Other Assets Total	223 M	223 M	223 M	223 M
Total Assets	812 M	830 M	857 M	890 M
Current Liabilities	335 M	336 M	337 M	345 M
Long Term Liabilities	44 K	44 K	44 K	44 K
Total Owners Equity	477 M	494 M	519 M	545 M
Total Liabilities and Owners Equity	812 M	830 M	857 M	890 M

Balance Sheet - Forecast				
	FY16 Q3	FY16 Q4	FY17 Q1	FY17 Q2
Current Assets	479.40 M	515.61 M	488.15 M	500.23 M
Fixed Assets	61.17 M	59.33 M	53.98 M	50.52 M
Other Assets Total	223.09 M	223.09 M	223.09 M	223.09 M
Total Assets	763.66 M	798.02 M	765.21 M	773.85 M
Current Liabilities	331.48 M	338.24 M	333.92 M	335.93 M
Long Term Liabilities	43.77 K	43.77 K	43.77 K	43.77 K
Total Owners Equity	432.07 M	459.66 M	431.25 M	437.87 M
Total Liabilities and Owners Equity	763.59 M	797.94 M	765.21 M	773.85 M

	YearTotal	Trend
Purchases	7,893.58 K	
Total Revenue	82,791.69 K	
Interest	35,350 K	
Depreciation	4,531.83 K	
Current Tax	3,344 K	
Earnings	35,350 K	
Interest Expenses	3,480 K	
Interest Income	3,164 K	
Other Expenses	430 K	
Gross Profit Margin	71.21%	

ダッシュボード・デザイナーは、次の表のプロパティを設定できます:

表 10-10 表のプロパティ

設定	説明
値のスケール	<p>大きい数字で特に便利なのは、値の表示方法を指定できることです。たとえば、値が 1,689,000 の場合に、スケーリング・オプションとして「K - 千」を選択すると、表にはこの値が 1,689K と表示されます。</p> <p>スケーリングのオプションは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • なし: スケーリングを適用しません。 • 自動: 範囲に応じて値が表示されます。たとえば、1,500 は「1.5K」、1,689,000 は「1.69M」、42,314,531,211 は「42.31B」、1,234,567,891,234 は「1.23T」としてそれぞれ表示されます。 • K - 千: 値が千単位で表示されます。たとえば、1,689,000 は「1689K」と表示されます。 • M - 百万: 値が百万単位で表示されます。たとえば、123,456,789 は「123M」と表示されます。 • B - 十億: 値が十億単位で表示されます。たとえば、12,345,678,912 は「12B」と表示されます。 • T - 兆: 値が兆単位で表示されます。たとえば、1,234,567,891,234,567 は「1,234T」と表示されます。
行区切り	「表示」または「非表示」を選択します。
フォント	ヘッダーおよびデータのサイズと色のオプションを指定します。
スパーク・チャート	<ul style="list-style-type: none"> • チャート・タイプ: 「棒」、「折れ線」、「面」および「面付き折れ線」とともに関連するオプションを選択します。または、「なし」を選択することもできます。 • ヘッダー: スパーク・チャート列の列ヘッダー • 開始インデックス: データのチャート化を開始する列インデックス • 最終インデックス: データのチャート化を終了する列インデックス

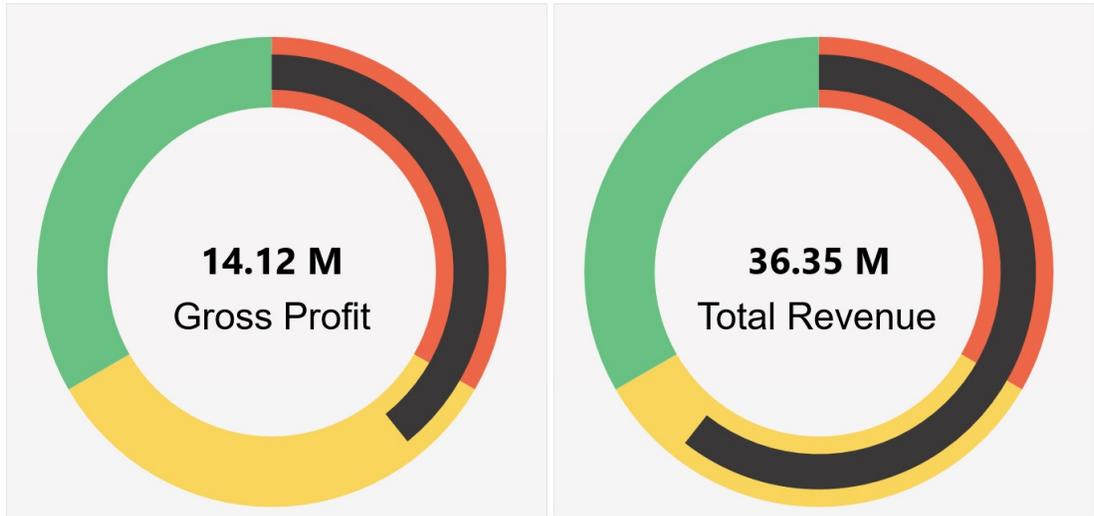
ビデオ

目的	視聴するビデオ
ダッシュボード・デザイナーでダッシュボード 2.0 向けに複数コンポーネントを含むダッシュボードを作成する方法を確認します。表が含まれるダッシュボード、スパーク・チャートが含まれる表およびタイトル・チャートを作成します。	 表、スパーク・チャートおよびタイトル・チャートのダッシュボード 2.0 での作成

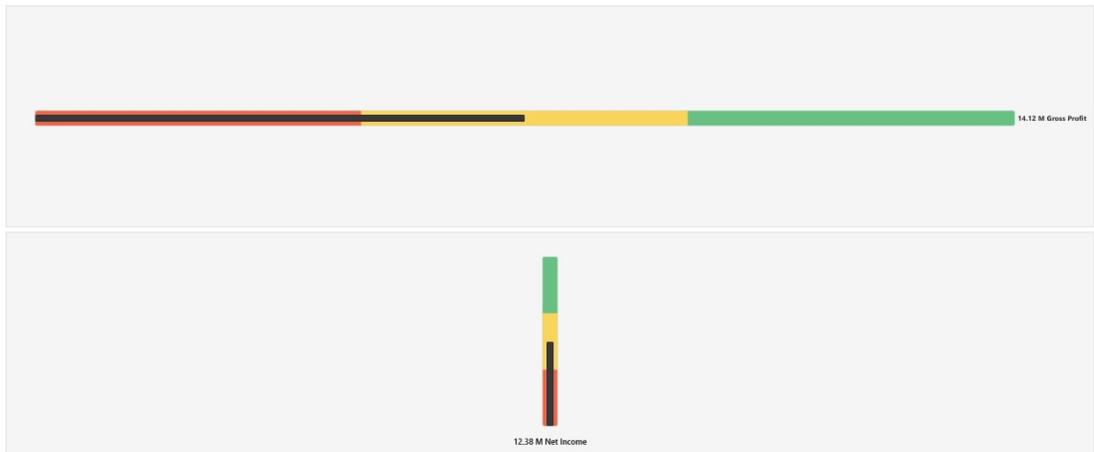
ダッシュボード 2.0 のゲージ・チャート・タイプについて

ゲージ・チャート・タイプでは、データ値が許容範囲内に収まっているかどうかわかります。最小値、最大値および範囲の最大値を設定すると、ゲージで赤、黄色および緑のトラフィック・ライトが使用され、現在の値をすばやく評価して、重要なデータ・ポイントやメジャーにおける問題を識別できます。ダッシュボード 2.0 のダッシュボードでは、円形、水平および垂直ゲージ・タイプを選択できます。

ダッシュボード 2.0 の例 - 円形ゲージ・タイプ

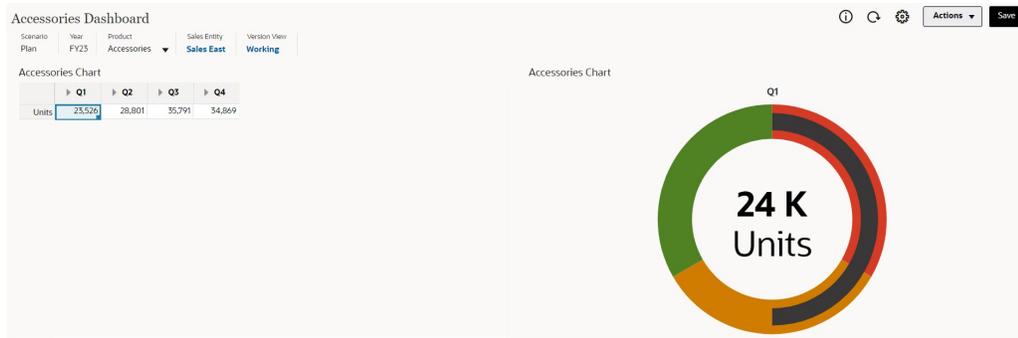


ダッシュボード 2.0 の例 - 水平ゲージ・タイプと垂直ゲージ・タイプ



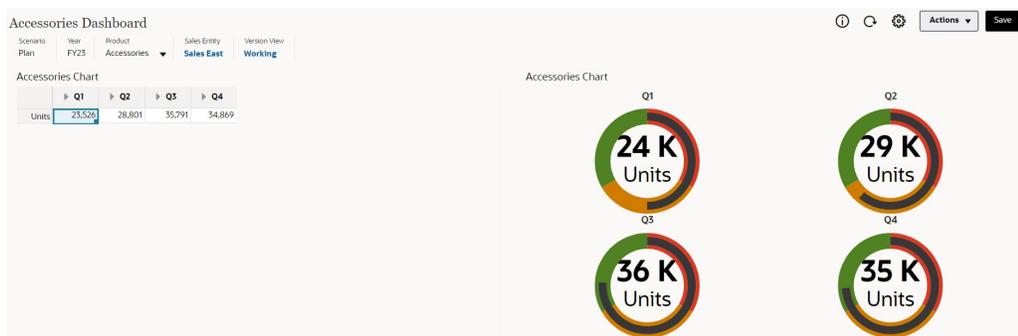
ダッシュボード 2.0 の例 - 単一ゲージの表示

「表示」で「単一」が選択されている場合、ゲージ・チャートには基礎となるフォームのデータの最初の列のみが表示されます。



ダッシュボード 2.0 の例 - 複数のゲージの表示

「表示」で「複数」が選択されている場合、基礎となるフォームのデータの列ごとにゲージ・チャートが表示されます。



ダッシュボード・デザイナーは、次に示すゲージ・チャート・タイプのプロパティを設定できます:

表 10-11 ゲージ・チャート・タイプのプロパティ

設定	説明
スケール	<p>大きい数字で特に便利なのは、値の表示方法を指定できることです。たとえば、値が 1,689,000 の場合に、スケーリング・オプションとして「K - 千」を選択すると、チャートにはこの値が 1,689K と表示されます。</p> <p>スケーリングのオプションは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> なし: スケーリングを適用しません。 自動: 範囲に応じて値が表示されます。たとえば、1,500 は「1.5K」、1,689,000 は「1.69M」、42,314,531,211 は「42.31B」、1,234,567,891,234 は「1.23T」としてそれぞれ表示されます。 K - 千: 値が千単位で表示されます。たとえば、1,689,000 は「1689K」と表示されます。 M - 百万: 値が百万単位で表示されます。たとえば、123,456,789 は「123M」と表示されます。 B - 十億: 値が十億単位で表示されます。たとえば、12,345,678,912 は「12B」と表示されます。 T - 兆: 値が兆単位で表示されます。たとえば、1,234,567,891,234,567 は「1,234T」と表示されます。

表 10-11 (続き) ゲージ・チャート・タイプのプロパティ

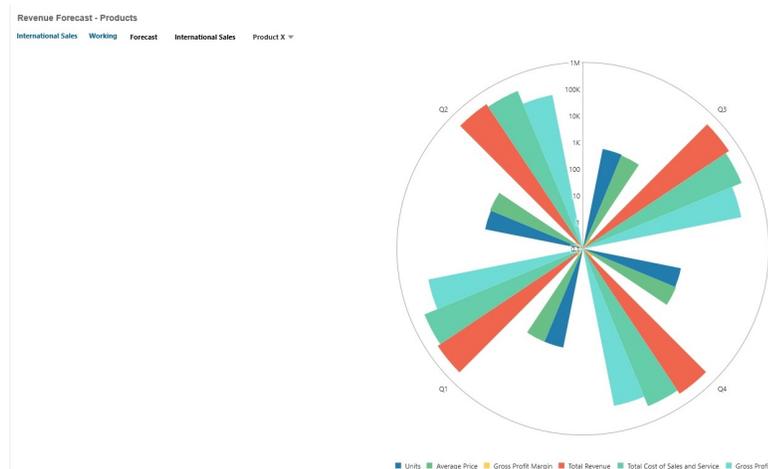
設定	説明
表示	コンポーネントで、「単一」または「複数」ゲージ・チャートを表示できます。「単一」が選択されている場合、ゲージ・チャートには基礎となるフォームのデータの最初の列のみが表示されます。「複数」が選択されている場合、基礎となるフォームのデータの列ごとにゲージ・チャートが表示されます。
ゲージ・タイプ	次のオプションから選択します。 <ul style="list-style-type: none"> • 円形 • 水平 • 垂直
最小値 最大値	ゲージの最低値と最高値。ダッシュボード・デザイナーがこれらの値をデフォルトとして設定した後、ユーザーが実行時にそれらを一時的に変更できます。ダッシュボード・デザイナーがこれらの値を指定しなかった場合、アプリケーションによって、自動的に、最小値がゼロに設定され、最大値がゲージの値より大きいものに設定されます。
希望の目標	「高」の値と「低」の値のどちらが望ましいかを指定します。
低しきい値 中しきい値 高しきい値	メジャーが許容範囲内にあるかどうかを視覚的に示すために、これらのしきい値を使用して、指定した値に基づいてゲージを赤、黄色および緑で表示できます。それぞれのしきい値について「ラベル」(テキスト)と「値」(数値)を指定します。

ダッシュボード 2.0 のレーダー・チャート・タイプについて

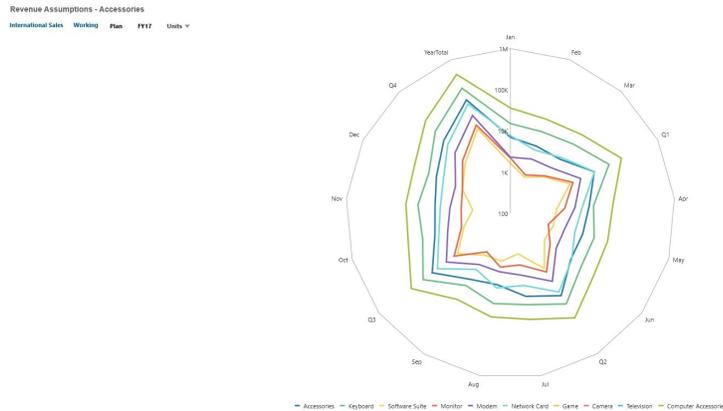
レーダー・チャートは、1 つ以上の系列の値を複数の定量的変数についてプロットするように設計された 2 次元チャート・タイプです。レーダー・チャートは、データの変数のうち、結果がそれ以外と比較して優れているものを確認する場合に最適です。したがって、主にパフォーマンス分析に使用されます。

ダッシュボード 2.0 では、棒、折れ線、面、散布およびバブル・レーダー・タイプを選択できます。

ダッシュボード 2.0 の例 - レーダー棒チャート・タイプ



ダッシュボード 2.0 の例 - レーダー折れ線チャート・タイプ



ダッシュボード・デザイナーは、次に示すレーダー・チャート・タイプのプロパティを設定できます:

表 10-12 レーダー・チャート・タイプのプロパティ

設定	説明
値のスケール	<p>大きい数字で特に便利なのは、値の表示方法を指定できることです。たとえば、値が 1,689,000 の場合に、スケーリング・オプションとして「K - 千」を選択すると、チャートにはこの値が 1,689K と表示されます。</p> <p>スケーリングのオプションは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • なし: スケーリングを適用しません。 • 自動: 範囲に応じて値が表示されます。たとえば、1,500 は「1.5K」、1,689,000 は「1.69M」、42,314,531,211 は「42.31B」、1,234,567,891,234 は「1.23T」としてそれぞれ表示されます。 • K - 千: 値が千単位で表示されます。たとえば、1,689,000 は「1689K」と表示されます。 • M - 百万: 値が百万単位で表示されます。たとえば、123,456,789 は「123M」と表示されます。 • B - 十億: 値が十億単位で表示されます。たとえば、12,345,678,912 は「12B」と表示されます。 • T - 兆: 値が兆単位で表示されます。たとえば、1,234,567,891,234,567 は「1,234T」と表示されます。
タイプ	<p>次のオプションから選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 棒 • 折れ線 • 面 • 散布 • バブル
凡例の位置	「左」、「右」、「上」、「下」または「なし」を選択します。
グリッド線	「非表示」または「表示」を選択します。

表 10-12 (続き) レーダー・チャート・タイプのプロパティ

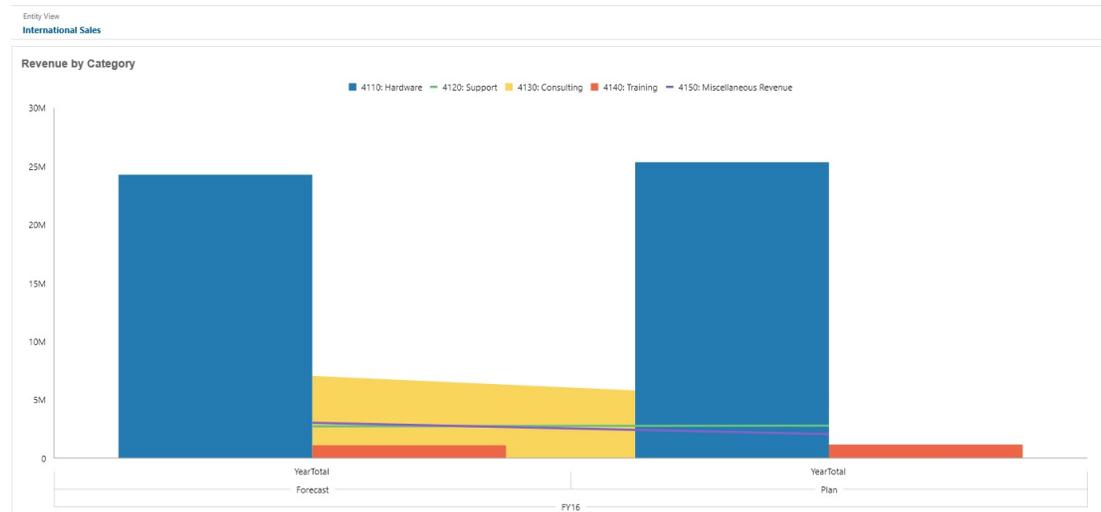
設定	説明
対数目盛	特に、値の範囲が広い(一般に、データの最大数が最小数の数百倍、あるいは数千倍の大きさになる)数値データを表示する場合は、対数目盛によって、これらの値がよりコンパクトで読みやすい形で表示されると便利です。レーダー・チャートで対数目盛を使用するかどうかを選択します。
色	「デフォルト」を選択するか、チャート内のデータをクリックし、そのデータのカスタム色を選択します。

ダッシュボード 2.0 の組合せチャート・タイプについて

組合せチャートは、棒グラフ、折れ線グラフおよび面グラフの任意の組合せを 1 つのチャートにマージできるビジュアライゼーションです。

プライマリ Y 軸の反対側にセカンダリ Y 軸を追加することもできます。セカンダリ Y 軸を追加すると、他のメジャーでは適切にスケールされない 1 つのメジャーのスケールをチャートに表示できます。たとえば、パーセンテージ・メジャーと通貨メジャーを同じチャートに表示できます。

ダッシュボード 2.0 の例 - 面、棒および折れ線の組合せチャート



ダッシュボード・デザイナーは、次に示す組合せチャート・タイプのプロパティを設定できます:

表 10-13 組合せチャート・タイプのプロパティ

設定	説明
値のスケール	<p>大きい数字で特に便利なのは、値の表示方法を指定できることです。たとえば、値が 1,689,000 の場合に、スケーリング・オプションとして「K - 千」を選択すると、チャートにはこの値が 1,689K と表示されます。</p> <p>スケーリングのオプションは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • なし: スケーリングを適用しません。 • 自動: 範囲に応じて値が表示されます。たとえば、1,500 は「1.5K」、1,689,000 は「1.69M」、42,314,531,211 は「42.31B」、1,234,567,891,234 は「1.23T」としてそれぞれ表示されます。 • K - 千: 値が千単位で表示されます。たとえば、1,689,000 は「1689K」と表示されます。 • M - 百万: 値が百万単位で表示されます。たとえば、123,456,789 は「123M」と表示されます。 • B - 十億: 値が十億単位で表示されます。たとえば、12,345,678,912 は「12B」と表示されます。 • T - 兆: 値が兆単位で表示されます。たとえば、1,234,567,891,234,567 は「1,234T」と表示されます。
行の太さ	<p>カウンタをクリックして線の幅を設定します。</p> <p>線のデフォルトの幅は 5 ピクセルです。1 から 12 ピクセルを選択できます。</p>
凡例の位置	<p>「左」、「右」、「上」、「下」または「なし」を選択します。</p>
ラベルの位置	<p>チャート上のデータ・ラベルの位置を設定します。</p> <p>「バーの端の外側」、「中央」、「バーの端の内側」または「なし」を選択します。</p>
グリッド線	<p>「非表示」または「表示」を選択します。</p>
対数目盛	<p>特に、値の範囲が広い(一般に、データの最大数が最小数の数百倍、あるいは数千倍の大きさになる)数値データを表示する場合は、対数目盛によって、これらの値がよりコンパクトで読みやすい形で表示されると便利です。組合せチャートで対数目盛を使用するかどうかを選択します。</p>
セカンダリ Y	<p>チャートを挟んでプライマリ Y 軸の反対側に表示されるセカンダリ Y 軸にプロットするデータを選択します。</p> <p>チャートのデータ値がデータ系列によって大きく異なる場合や、データのタイプ(通貨とパーセンテージなど)が混在する場合、1 つ以上のデータ系列をセカンダリ縦(Y)軸にプロットできます。</p> <p>セカンダリ Y 軸は折れ線チャート・タイプおよび棒チャート・タイプで使用できますが、より一般的には、組合せチャート・タイプで使用して、セカンダリ Y 軸にプロットされるデータ系列を区別しやすくします。たとえば、プライマリ Y 軸に棒を使用し、セカンダリ Y 軸に折れ線を使用します。</p>
系列	<p>チャートの棒/折れ線/面の組合せを選択します。</p>
色	<p>「デフォルト」を選択するか、チャート内のデータをクリックし、そのデータのカスタム色を選択します。</p>
軸	<p>「X 軸」、「Y 軸」および「セカンダリ Y 軸」の「カスタム範囲」を選択するか、「オフ」を選択します。</p>

ダッシュボード 2.0 のタイル・チャート・タイプについて

タイルは、キューブから特定の値を選択して表示できるチャート・タイプです。フォームをデータ・ソースとして使用する以外に、タイルに値を提供するセル交差を直接入力することもできます。デフォルトでは、最初はコンポーネントに 6 個のタイルが表示されますが、コンポーネントには最大 10 個のタイルを表示できます。タイルをデータに関連付けるまで、サンプル・データが表示されます。

フォームをタイルのデータ・ソースとして使用する場合:

- コンポーネントごとに最大 10 個のタイルを含めることができます(デフォルトでは 6 個)。
- フォームの最初の列の値(10 行目まで)が、タイルの作成に使用されます。
- デフォルトでは、フォームの行タイトルはタイルのタイトルであり、その値は最初の列から行ごとに取得されます。
- タイルのコンポーネント・タイトル、タイルの高さのパーセンテージ、凡例ラベルを設定でき、含めるフォームの軸を選択できます。たとえば、3 つの行があるフォームを選択すると、タイルに 3 つの値が表示されます。

Note:

場合によっては、フォーム内で、グリッドとして表示されたときに最初の列が縮小される(非表示になる)ことがあります。ただし、タイルがフォームからその値を取得する際には、縮小された列も考慮されます。フォーム定義を更新し、タイルに表示するセルのみを含むフォームをデータ・ソースとして使用することをお勧めします。

タイルのデータ・ソースとしてセル交差を使用する場合は、1 つのオブジェクトにつきタイルを 1 つのみ含めることができます。

次の表は、タイル・チャート・タイプに設定できるオプションを示しています。値の表示は、タイルの水平方向で左、中央、右に設定することができます。

Table 10-14 タイル・チャート・タイプのプロパティ

設定	説明
値のスケール	<p>大きい数字で特に便利なのは、値の表示方法を指定できることです。たとえば、値が 1,689,000 の場合に、スケーリング・オプションとして「K - 千」を選択すると、チャートにはこの値が 1,689K と表示されます。</p> <p>スケール・オプション:</p> <ul style="list-style-type: none"> • なし: スケーリングを適用しません。 • 自動: 範囲に応じて値が表示されます。たとえば、1,500 は「1.5K」、1,689,000 は「1.69M」、42,314,531,211 は「42.31B」、1,234,567,891,234 は「1.23T」としてそれぞれ表示されます。 • K - 千: 値が千単位で表示されます。たとえば、1,689,000 は「1689K」と表示されます。 • M - 百万: 値が百万単位で表示されます。たとえば、123,456,789 は「123M」と表示されます。 • B - 十億: 値が十億単位で表示されます。たとえば、12,345,678,912 は「12B」と表示されます。 • T - 兆: 値が兆単位で表示されます。たとえば、1,234,567,891,234,567 は「1,234T」と表示されます。
テキストの配置	<p>テキストの配置オプション:</p> <ul style="list-style-type: none"> • 左 • 中央 • 右
カウント	コンポーネントに表示されるタイルの数(最大 10 個)
表示	<p>凡例表示オプション:</p> <ul style="list-style-type: none"> • 行と列のディメンション • 行のディメンション • 列のディメンション • なし
位置	<p>凡例配置オプション:</p> <ul style="list-style-type: none"> • 左 • 右 • 上 • 下
凡例のフォント・サイズ	凡例のフォント・サイズを大きくしたり、小さくします。
値のフォント・サイズ	値のフォント・サイズを大きくしたり、小さくします。

 **Note:**

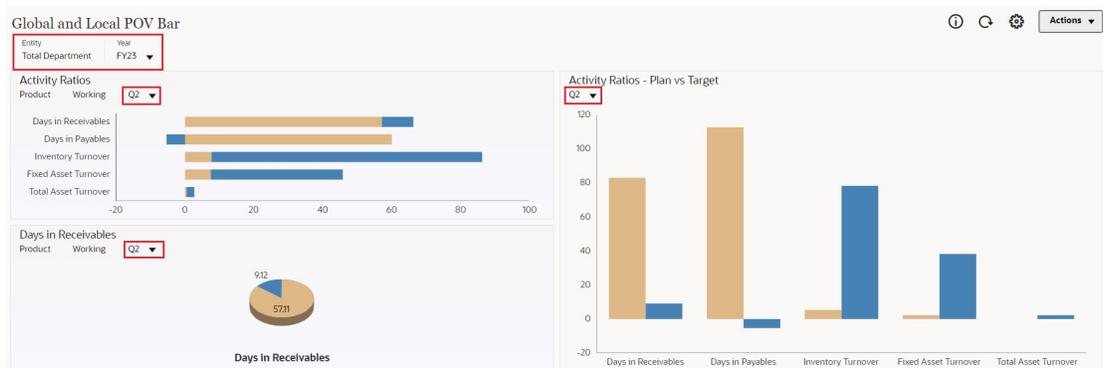
ダッシュボード 2.0 では、セル詳細はサポートされていません。かわりに、セル詳細のより高度なバージョンであるクイック分析をデータ・ソースとして使用することをお勧めします。セル詳細を使用するコンポーネントを含むダッシュボードをダッシュボード 2.0 に変換する場合は、セル詳細をデータ・ソースとして使用するコンポーネントを削除し、クイック分析をデータ・ソースとして使用するコンポーネントを再作成します。

ダッシュボード 2.0 のグローバル POV とローカル POV について

フォームのローカル POV には、フォーム設計者がそのフォームについて選択したディメンション・メンバーが反映されます。ダッシュボードではグローバル POV バーもサポートされており、各コンポーネントで繰り返されないように、共通するローカル POV はグローバル POV バーに組み込まれます。

ダッシュボード 2.0 の POV の例

次のダッシュボード 2.0 のダッシュボードには、グローバル POV バー(「エンティティ」および「年」を示す)とローカル POV (Q2 のドロップダウン・リスト)が表示されています:



グローバル POV バーがある場合、グローバル POV バーでページを変更し、**POV バー：「自動適用」**を有効にすると、フォームに基づいたダッシュボード内のすべてのコンポーネントについてページが変更されます。グローバル POV バーはダッシュボードの最上部に、すべてのコンポーネントより上に表示されるのに対して、ローカル POV バーはコンポーネント内に表示されます。ユーザー変数は、ダッシュボードのグローバル POV とローカル POV の両方でサポートされており、動的ユーザー変数を POV バーから直接変更できます。

ダッシュボード・ツールバーの  **「POV 設定」**メニュー(ランタイム・モードと編集モードの両方)では、ディメンション・ラベルをグローバル POV で非表示にするかどうか(**POV バー：「ディメンション・ラベルの非表示」**)、および変更の自動適用を有効にするか無効にするか(**POV バー：「自動適用」**)を設定できます。

グローバル POV バーについて:

- POV バーは、ローカル POV ディメンション、ページ・ディメンションおよびユーザー変数で構成されます。
- ダッシュボード上の各フォームのローカル POV およびページに応じて、グローバル POV バーが自動的に計算されます。
- グローバル POV は、そのダッシュボードのフォームを使用してコンポーネントのコンテンツを反映します。つまり、それらは、ダッシュボード内のフォーム、フォームにリンクされたチャート、およびデータ・ソースとしてフォームを使用するタイルに適用されます。そのため、ダッシュボードにデータ・ソースとしてフォームが含まれていない場合は、ローカル POV バーもグローバル POV バーも使用できません。

次に、2 つのフォームのローカル POV ディメンションに基づいて、グローバル POV バーがどのように計算されるかの例を示します。

グローバル POV バーが無効:

- フォーム A のローカル POV: 年、エンティティ、製品
- フォーム B のローカル POV: 年、エンティティ、プロジェクト

グローバル POV バーが有効:

- グローバル POV バー: 年、エンティティ
- フォーム A のローカル POV: 製品
- フォーム B のローカル POV: プロジェクト

すべてのディメンションおよびページの選択がダッシュボード上のすべてのフォームに共通しているとはかぎらないため、ダッシュボード・コンポーネントの POV 全体がローカル POV バーとグローバル POV バーの間で分割されることがあります。グローバル POV バーとローカル POV をあわせると、ダッシュボード上の各フォームの完全な交差情報が含まれます。

データ・ソースとしてフォームを使用するコンポーネントが、ダッシュボードで 1 つのみである場合、フォームの POV/ページ全体がグローバル POV バーに移動されます。

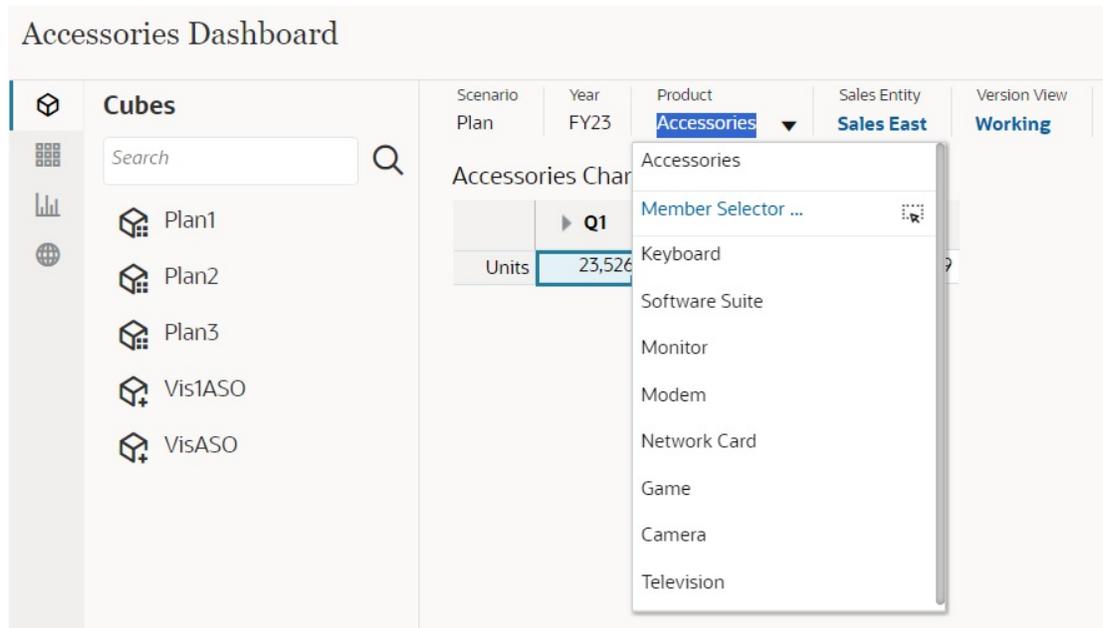
データ・ソースとしてフォームを使用するコンポーネントがダッシュボードに複数ある場合、どのディメンションがグローバル POV バーに移動し、どのディメンションがローカル POV にとどまるかは次のように決まります:

- ディメンションがすべてのフォームの POV またはページに含まれ、メンバーの選択がすべてのフォームで同じ場合、ディメンションはグローバル POV バーに移動します。
- ディメンションが 1 つのフォームの POV および別のフォームのページに含まれる場合、ディメンションはローカル POV バーにとどまります。
- ディメンションが POV に含まれる場合、そのディメンションについてすべてのフォームで同じメンバーが選択されている必要があります。
- ディメンションがページ・ディメンションである場合、選択されたページ・メンバーがすべてのフォームで同じであり、同じ順序で表示される必要があります。

ダッシュボード 2.0 のダッシュボードでの POV メンバーの検索

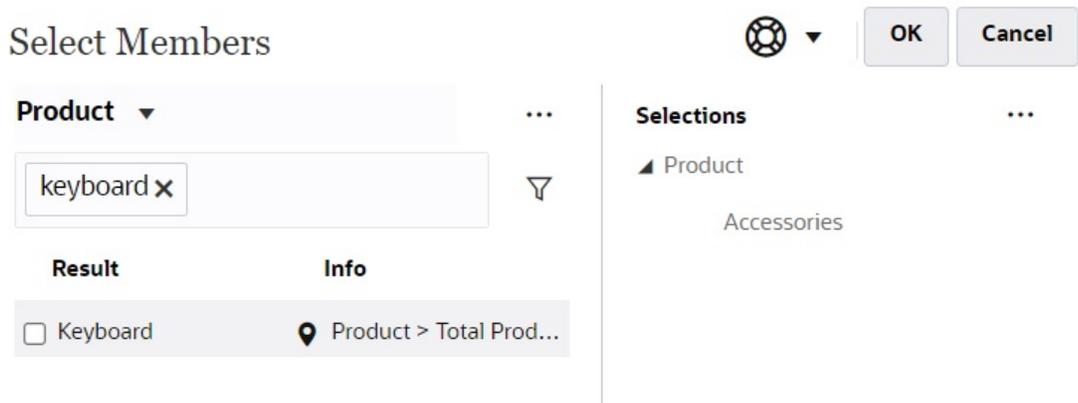
ダッシュボード 2.0 のダッシュボードで作業している場合は、新しい POV メンバーを簡単に検索できます。検索するには、POV リンクをクリックします。検索インターフェースには、最後に使用したメンバーのリストが表示され、そこから選択できます。

図 10-1 ダッシュボード 2.0 の最後に使用した POV メンバーのリスト



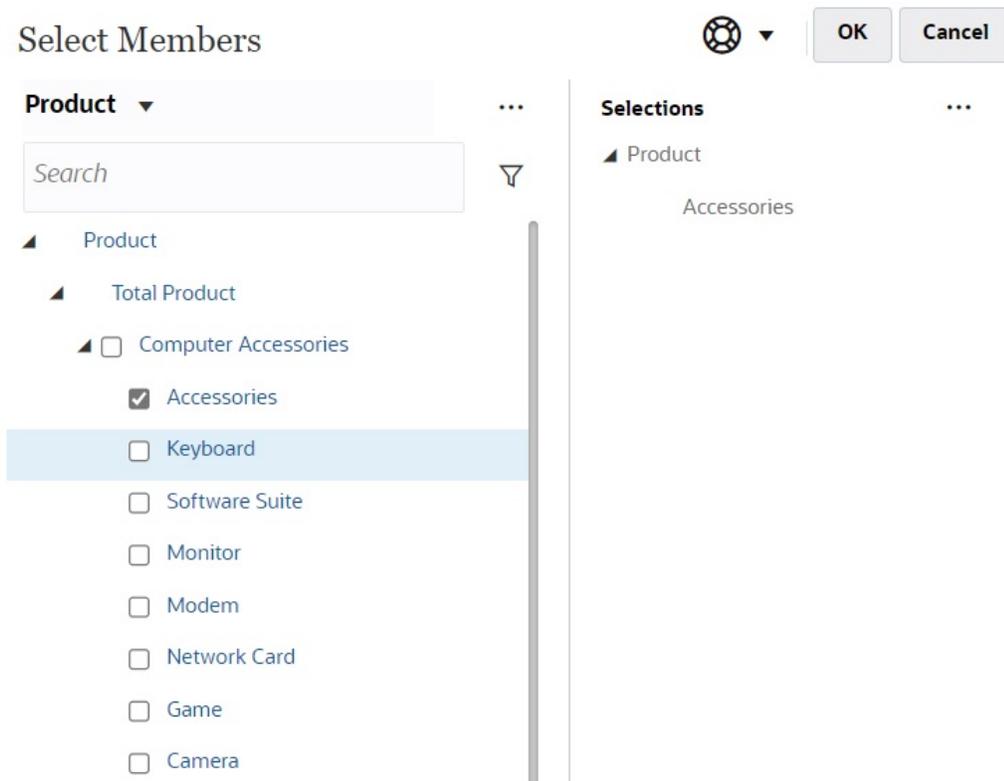
メンバー・セレクトタを使用して検索することもできます。POV リンクをクリックしてから、「メンバー・セレクトタ」アイコン  をクリックして、メンバー・セレクトタを起動します。メンバー・セレクトタのメンバーは階層として表示されますが、「検索」ボックスにメンバー名を入力することもできます。「検索」ボックスを使用してメンバーが見つかった場合は、「検索」ボックスの下に結果が表示されます。

図 10-2 ダッシュボード 2.0 のメンバー・セレクトタ検索結果



メンバーが階層内のどこに配置されているかを表示するには、結果の「情報」列にカーソルを置いて、 をクリックします。

図 10-3 ダッシュボード 2.0 の階層におけるメンバー・セレクタ検索結果



ダッシュボード 2.0 の POV バーの考慮事項

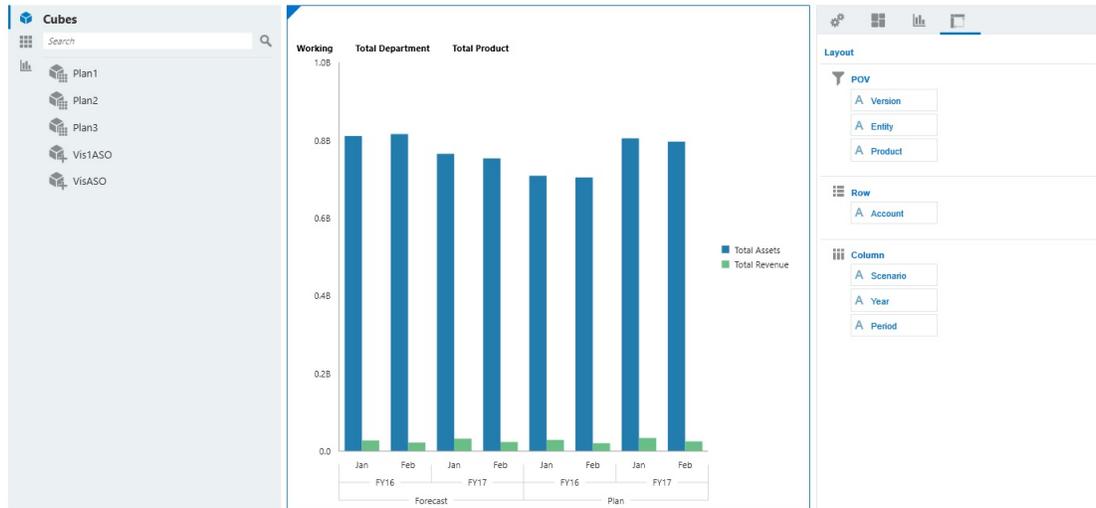
- POV バーのページのドロップダウン・リストで、ページのドロップダウンに表示するメンバーの数は、「ページ・オプション」の「ユーザー・プリファレンス」で制御できます。(ホーム・ページから「ツール」、「ユーザー・プリファレンス」、「表示」の順にクリックして「ページ・オプション」を表示します。)ページのドロップダウン内のアイテム数がこの制限を超えた場合、ユーザーはそれらを表示できません。これは、今後のリリースで、ダッシュボード 1.0 のように残りのメンバーを参照するためのメンバー・セレクタの機能を使用して修正される予定であることに注意してください。
- ダッシュボードに複数のフォームが含まれているが、一部のフォームで同じディメンションに異なるプロパティがある場合(たとえば、「バージョン」ディメンションは一部のフォームでは非表示ですが、同じダッシュボードの他のフォームでは表示される場合)、グローバル POV に「バージョン」ディメンションのメンバーが表示されない場合があります。ダッシュボード内に含まれるすべてのフォームで、すべてのディメンションのすべてのプロパティが同じであることを確認することをお勧めします。

クイック分析について

クイック分析を使用すると、事前作成されたフォームがなくても、ダッシュボードにコンポーネントを追加できます。「検索」バーにメンバー名を入力するか、「メンバー・

セレクトタ」を使用してアドホック問合せを作成した後、「プロパティ」パネルの「レイアウト」タブ  で問合せのレイアウトを制御します。

ダッシュボード 2.0 のデザイン・モードでのクイック分析チャートの例



ダッシュボードでクイック分析を作成するには:

1. 問合せのキューブを選択します。次の 2 つのいずれかの方法で行うことができます:
 - ワークスペースの「検索」ボックスをクリックしてキューブのリストを表示し、キューブを選択します。
 - オブジェクト・パレットからダッシュボード・ワークスペースにキューブをドラッグ・アンド・ドロップします。

ノート:

どちらの方法でも、デフォルトの問合せから開始されます。最近使用したものの (MRU) に基づく、キューブ内の 1 つの交差です。デフォルトの問合せは、キューブで最近見ていたものによって異なります。

キューブ内の MRU 交差が無効な場合は、エラーが発生します。エラーが表示された場合は、別のフォームを開いてページを有効な交差に変更し、MRU が有効な交差で更新されるようにします。

2. 問合せのメンバーを指定して、問合せを調整します:
 - 「検索」ボックスにメンバー名を入力して、キューブからのオートコンプリート・リストを表示します。
 - 「メンバー・セレクトタ」  を起動してメンバーを選択し、「OK」をクリックします。

 ノート:

クイック分析を実行するために検索ボックスを使用してメンバーを検索し、キューブ内のメンバーが 25,000 人よりも多い場合、検索ボックスでは、キューブのディメンション内の最初の 3000 人のメンバーのみが検索されます。キューブに含まれているメンバーが 25,000 人より少ない場合は、検索ボックスですべてのメンバーが検索されます。メンバーが 25,000 人よりも多いキューブを検索するには、メンバー・セクタを起動してクイック分析の選択をします。

3. 問合せのチャート・タイプを選択します。

 をクリックして、チャート・タイプ(「棒」 など)を選択します。

4. 「プロパティ」パネルで、「レイアウト」タブ  をクリックします。
5. 「プロパティ」パネルの「レイアウト」タブのディメンションを「レイアウト」タブの他のセクションにドラッグ・アンド・ドロップして、ダッシュボード・コンポーネントの「POV」、「行」および「列」レイアウトを変更します。

ビデオ

目的	視聴するビデオ
フォームを事前作成せずに、ダッシュボードにクイック分析コンポーネントを追加する方法を学習します。ダッシュボード・デザイナーでアド・ホック問合せを作成する方法と、ディメンションのレイアウトを変更し、ビジュアライゼーションを適用して結果をフォーマットする方法を学習します。	 ダッシュボード 2.0 でのクイック分析の作成

11

インフォレットの設計

次も参照:

- [インフォレットについて](#)
- [インフォレットの詳細分析](#)
- [インフォレットの内容の決定](#)
- [インフォレット・デザイナの使用](#)
- [インフォレットの作成](#)
- [インフォレットの操作](#)
- [インフォレットにアクセスするインタフェースのカスタマイズ](#)

インフォレットについて

インフォレットを使用すると、各種のソースから生成される概要レベルの必須情報を表示し、扱うことができるので、どこに注意を向けるべきかすぐに評価できます。サービス管理者は、インフォレットの作成、再設計、削除およびインフォレットへの権限の割当てを行います。

インフォレットとは何か

インフォレットとは、自己完結型で対話型のボックス・コンテナです。テキストとチャートを使用して情報を表示します。インフォレットは対話型で、概要レベルで集約された必須情報を段階的に表示するので、一目で参照しやすく、必要に応じて迅速に対処できます。インフォレットは、最大で3つのチャートまたは一連の値を表示できるように、切替えとサイズ変更が可能です。



インフォレットの詳細は、[インフォレットの詳細分析](#)を参照してください。

インフォレットの使用方法

インフォレットは、次の用途に使用できます。

- 必須の情報を使いやすい形で示す
- 最もクリティカルな質問に対する答えを示す
 - 何が新しく、何が変更されていますか？
 - 自分の作業をサポートする最も重要な情報は何かですか？
- ユーザーの作業を迅速に評価して優先順位を設けられるように、重要な情報をユーザーの役割ごとにグループ化する
- 必須の情報やアクションを段階的に表示する

インフォレットを切替えまたは展開することで、このような追加の詳細情報をさまざまなインフォレット・ビューで表示します。ただし、使用できるインフォレット・ビューは1つのみです。
- 必須の情報や概要情報を、視覚的にリッチな形で示す

レポート機能のように特に複雑な情報を扱うとき、または詳細なビジュアルを示すときには、インフォレットは使用しないでください。

[インフォレットの内容の決定](#)を参照してください。

インフォレット・ページとは何か

インフォレット・ページとは、1つ以上のインフォレットが表示されるページです。これにはコンテナがあり、インフォレットが占めるスペースを管理したり、ブラウザのサイズとインフォレットのサイズに合わせて再配置したりできます。作成した各インフォレットは、1つのインフォレット・ページに属します。ホーム・ページの「**インフォレット**」カードに、インフォレット・ページのリストが表示されます。



 ノート:

この更新では、上の画像で示されている機能をすべて使用できるわけではありません。それらの機能には、今後の更新で対応する予定です。

[インフォレットの操作](#)を参照してください。

インフォレットの詳細分析

インフォレットのビュー

1つのインフォレットは、最大3つのビューをサポートしています。

1. 前面ビュー(必須)



2. 背面ビュー(オプション)



3. 展開ビュー(オプション)



前面ビューは必須です:

- 自分の作業に直接影響する概要レベルの情報を一目で見ることができます。たとえば、前面ビューには、ステータス、数、合計、最新の更新などを表示できます
- 一目でわかりやすくなっているため、詳細を調べたい重要な情報の識別に役立ちます
- 3x2 を除いてすべてのインフォレット・サイズを使用できます(詳細は、後述のインフォレット・サイズの情報を参照)
- 展開ビューを、前面ビューまたは背面ビューで元のサイズに戻せます
- 「アクション」メニュー・アイコンはカーソルを置いたときだけ表示され、背面切替えアイコン(オプション)または展開アイコンが右下隅に表示されます

ノート:

ビューを 1 つだけ表示する場合は、前面ビューにする必要があります。

背面ビューはオプションです:

- 分析情報(グラフなど)を表示します
- スキャンしやすいため、前面ビューに表示された情報を調べたり、さらに知ることができます
- サイズは前面ビューと同じです
- 「アクション」メニュー・アイコンはカーソルを置いたときだけ表示され、前面切替えアイコンが左下隅に、展開アイコン(オプション)が右下隅に表示されます

展開ビューはオプションです:

- 前面ビューまたは背面ビューで示される 1 つのデータ・ポイントまたは個々のデータについて、さらに詳細を表示します。たとえば、展開ビューでは、1 つのオブジ

エクトまたは最近の項目の一覧について、前面ビューや背面ビューに表示される内容よりも詳細な情報を表示できます

- アクションを実行して作業領域ページの注目すべき内容に移動してよいかどうか、十分な情報に基づいて判断できます
- 他のビューからの移行もスムーズです。他のインフォレットが新しい位置に移動されるので、スムーズでシームレスに展開できます。
- 前面ビューや背面ビューよりサイズを大きくする必要があります
- 「アクション」メニュー・アイコンはカーソルを置いたときだけ表示され、縮小アイコンが右下隅に表示されます

インフォレット・ビューでは、基礎となるフォームとディメンションに割り当てられているアクセス権を保持します。したがって、ユーザーごとにアクセス権が異なれば、同じインフォレットでも表示されるビューは異なることがあります。

インフォレットのサイズ

インフォレットのサイズは、次のように設定できます。

ノート:

1x1 は、1 列 1 行(170 ピクセル)のボックスを表します。

- 1x1
- 2x1
- 3x1
- 2x2
- 3x2 (展開ビューのみ)

前面ビューと背面ビューのサイズは、常に同じです。前面ビューのサイズを変更すると背面ビューのサイズも自動的にリセットされます。展開ビューのサイズは必ず前面/背面ビューより大きくする必要がありますため、インフォレットの前面/背面ビューのサイズを大きくした場合、展開ビューは前面/背面ビューより大きいサイズに自動的にリセットされます。

ノート:

前面ビューと背面ビューには、3x2 のサイズは使用できません。このサイズは、展開ビューのみに適用可能です。

ビューのサイズ、タイトルおよびサブタイトルは、プロパティ・パネルで設計者が設定します。[インフォレット・デザイナーの使用](#)を参照してください。

インフォレット・ビュー間の移動

1 つのインフォレットは、次のいずれかのビューの組合せで作成できます。

1. 前面ビューのみ
2. 前面ビューと背面ビュー

- 3. 前面ビューと展開ビュー
- 4. 前面ビュー、背面ビュー、展開ビュー

ビュー間を切り替えるには、インフォレットの右下隅または左下隅にある切替えアイコン、展開アイコン、縮小アイコンを使用します。下隅にカーソルを置くと、切替え、展開、縮小のアイコンが表示されます。

インフォレットの内容の決定

インフォレットの内容を決めるときは、次の一般的なヒントを参照してください。

- 既存のダッシュボードと作業領域ページを確認します。
ダッシュボードと作業領域ページは、情報サマリーがまとめて表示されるので、出発点として最適です。
- 10/90/90 の原則を適用します。
重要性が高く利用しやすい、ユース・ケースの上位 10%からあがる FAQ に対処する情報を探します。このユース・ケースは、ビジネス・インテリジェンス、ソーシャル、トランザクション、外部など全社から集まります。
次に、この情報に絞って、ユーザーの 90%が、時間の 90%で得られるメリットが何かを検討します。既存のダッシュボードの内容、既存の作業領域ページ、または全般にこの 10/90/90 の原則を適用して、インフォレットに適した情報を選定します。
- 上位のユース・ケースを、よくあるビジネス上の質問の形で書きなおします。
これらのビジネス上の質問に答えるように、対応するインフォレットの内容を提示します。たとえば、対応の困難なオーダーの数をステータス別に一覧するなどです。
- 複数の情報ポイントではなく、1つのポイント、または密接に関連があり相互に依存する一連のポイントを探します。
インフォレットの内容を決定するプロセスは、ダッシュボードの内容を作成するプロセスに類似していますが、分析のレベルはもっと深くなります。3つ以下の情報階層ビューで表示するのに適しており、ビジネス上のクリティカルな質問の答えになる情報を、1つのデータ・ポイントまたはデータ・セットから探します。
- 最も重要な1つのポイントから始めます。
1つのインフォレットには、データの1つの側面つまり情報ポイントに関する集約情報が表示されます。ユーザーが知る必要のあるイベント、またはユーザーが対処する必要のあるタスクに関連する情報です。
ダッシュボードに、1つ以上のオブジェクトの複数の側面(数字の合計や通貨の合計)が含まれている場合は、最も重要な1つのポイントから始め、インフォレットの前面ビューに対する1つの概要(たとえば、合計としてスタイル付きの数値を使用するなど)を追加してきます。次に、必要に応じて背面ビューの内容を決めます。最後に、必要に応じて展開ビューの内容を決めます。
1つのインフォレットで、4つ以上のビューは追加できません。インフォレットに表示するデータ・ポイントが1つのみ、または密接に関連があり相互に依存するデータ・セットが1つのみの場合は、前面ビューのみ使用します。

関連リンク

[インフォレットのフォームの設計](#)

[インフォレットのチャートの設計](#)

インフォレットのフォームの設計

インフォレットでは、小さいデータ・セットのフォームのみを使用します。フォームに設定されているアクセス権限がインフォレットで保持されます。

インフォレットで個々に使用されるフォームを作成できます。

- フォルダで使用するフォームは、従来のデータ入力フォームよりセルが少なくなります。たとえば、インフォレットで使用するフォームのセルは **12** 以下です。
- インフォレットで使用するフォームは、行と列を **12** 以下にしてください。フォームの行と列が **12** を超えた場合、**12** 行および **12** 列までしか表示されません。
- 現在、インフォレットはページ・ディメンションまたは **POV** をサポートしていないため、インフォレットで使用するフォームにページ・ディメンションは使用しないでください。
- インフォレットで使用するフォームにグリッドが含まれ、メンバーを展開すると、インフォレットでは展開したメンバーも含めて、フォームのメンバーがすべて表示されます。

インフォレットのチャートの設計

静的な内容を表示するには、チャートのタイトルとサブタイトルを使用します。

インフォレットで使用できるチャートは **6** 種類あります:

- 棒: 複数のデータ値のグラフィカルなサマリーを表し、比較に利用します。棒グラフは、垂直または水平に表示できます。棒グラフのインフォレットでは、棒の数を最大で **8** つまでに抑えることをお勧めします。
- 縦棒: 異なるデータ・セット同士を積み重ねて表す棒グラフです。1 つの棒の最終的な高さは、データ・セットを合算した値を表します。
- ドーナツ: 円形グラフをセグメントに分割し、データ・セット同士を比較します。中央の空白は、全データ・セットの合計を表します。ドーナツ・チャートのインフォレットでは、セグメントの数を最大で **6** つまでに抑えることをお勧めします。
- 折れ線: 一定期間にわたるデータのトレンドをビジュアル化するときを使用します。
- 円: スライスに分割された円形グラフで、データ・セット同士を比較します。円グラフのインフォレットでは、スライスの数を最大で **6** つまでに抑えることをお勧めします。
- タイル: データ・セットから、表示する特定の値を選択できます。タイル・チャートのインフォレットでは、タイルの数を最大で **3** つまでに抑えることをお勧めします。

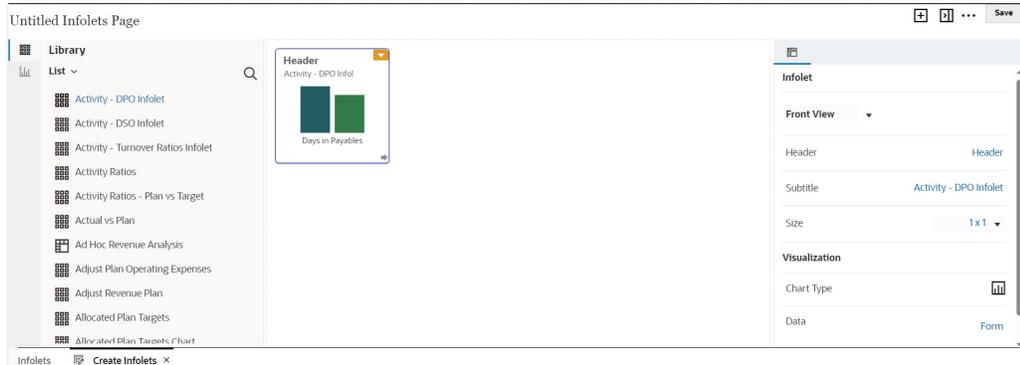
 **ノート:**

タイル・チャートで使用できるサイズは **1x1** のみです。タイル・チャートを使用しているインフォレットは、チャート・タイプを変更しないかぎりサイズを変更できません。タイル・チャートを **1x1** より大きいインフォレットにドラッグ・アンド・ドロップすると、インフォレットのサイズかチャート・タイプか、どちらかを変更するよう指示されます。

インフォレット・デザイナの使用

サービス管理者は、インフォレット・デザイナを使用してインフォレットおよびインフォレット・ページを作成します。インフォレット・デザイナでは、ランタイム・ビューとデザイナ・ビューを簡単に切り替えることができます。インフォレット・デザイナにアクセスするには、ホーム・ページの「**インフォレット**」アイコンを起動して「**作成**」をクリックするか、リストのインフォレット・ページの横にある「アクション」アイコンをクリックして「**編集**」をクリックします。リストでインフォレット名をクリックすると、そのインフォレット・ページのランタイム・バージョンが開きます。ランタイム・ビューとデザイナ・ビューは、 をクリックして切り替えられます。

インフォレット・デザイナ



インフォレット・ツールバー

右上にインフォレット・ツールバーがあります。

 : インフォレット・デザイナに新しいインフォレットを追加します

 : プロパティ・パネルの表示/非表示を切り替えます

...: クリックして次のアクションを実行します。

- **リセット:** インフォレット・デザイナを、前回保存した状態に戻します
- **リフレッシュ:** Essbase からのデータをリフレッシュし、データベースからインフォレット定義を更新します

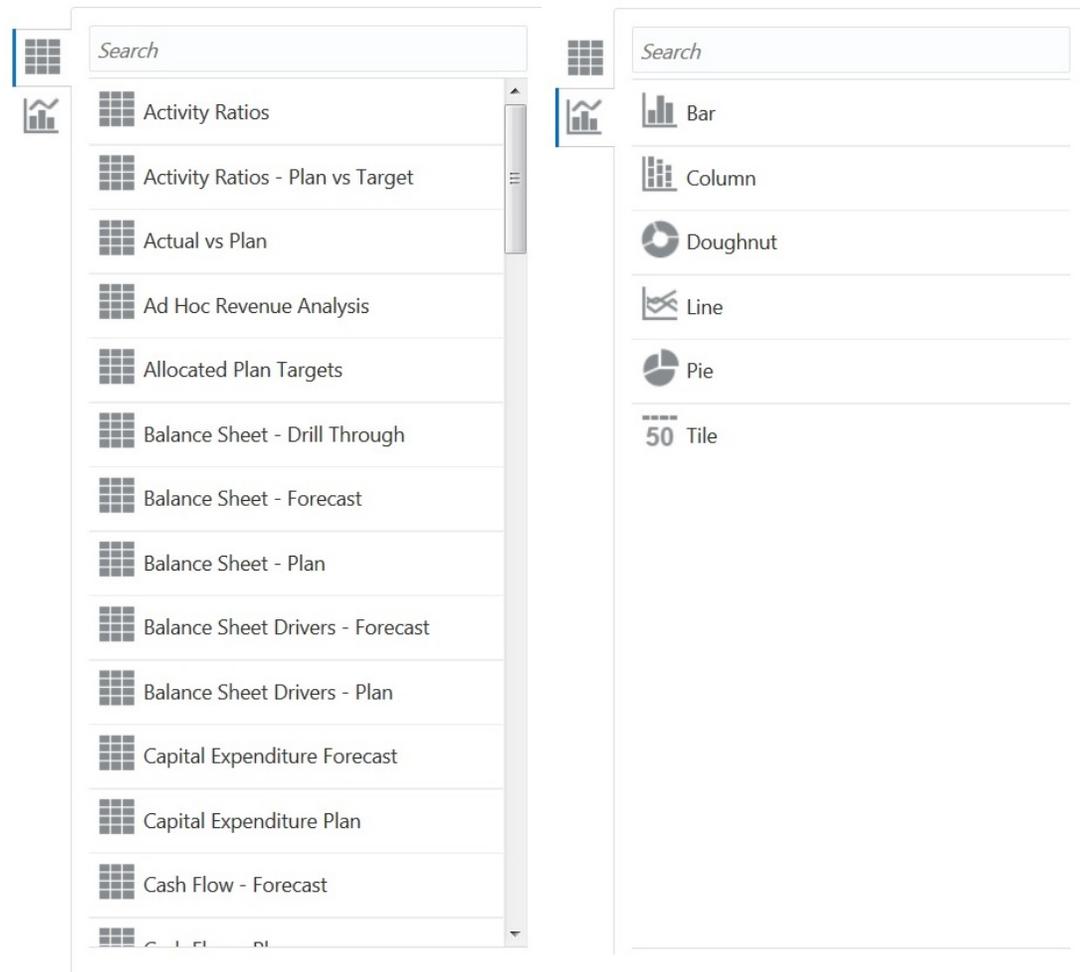
- **ランタイム:** インフォレット・デザイナの要素をすべて非表示にし、実行時にユーザーに見えるのと同じようにインフォレットを表示します



: ランタイム・モードから、インフォレット・デザイナを表示します

インフォレット・デザイナ・パレット

左側には、デザイナ・パレットがあります。デザイナ・パレットには、「フォーム」と「チャート・タイプ」の 2 つのタブがあります。デザイナ・パレットでオブジェクトをハイライトし、ドロップ・ゾーンまでドラッグ・アンド・ドロップします。



デザイナ・パレットのオブジェクト:

- **フォーム:** フォームをスクロールするか、名前で検索して、インフォレットに含めるフォームを選択します。フォームの詳細は、[インフォレットのフォームの設計](#)を参照してください。

ノート:

フォームに設定されているアクセス権限がインフォレットで保持されません。

- **チャート・タイプ:** インフォレットに含めるチャート・タイプを選択します。インフォレットのチャートには、データ・ソースとしてチャートとフォームを関連付けるまで、サンプルのデータが表示されています。チャートをフォームにリンクすると、ユーザーは、関連付けられたチャートに対するフォームでのデータ変更の影響を確認できます。チャートにフォームを関連付けるには、プロパティ・パネルでチャートをハイライトしてドロップ・ゾーンまでドラッグ・アンド・ドロップし、「**サンプル**」をクリックしてから「**フォーム**」をクリックしてデータ・ソースを選択します。チャートの詳細は、[インフォレットのチャートの設計](#)を参照してください。

インフォレット・メニュー

インフォレット・メニューには、インフォレットの削除およびクリア・アクションが含まれます。インフォレット・メニューを表示するには、インフォレットの右上隅にカーソルを置き、下矢印をクリックして、メニュー・オプションを表示します。

- **削除:** ページからインフォレットを削除します
- **クリア:** インフォレットの詳細をクリアします

プロパティ・パネル

インフォレット・デザイナの右側のプロパティ・パネルでは、次のインフォレット・プロパティを表示および操作できます。

ノート:

指定するヘッダーは、1つのインフォレットではすべてのビューで同じですが、各ビューに違うサブタイトルを指定することはできません。たとえば、1つのインフォレットの前面、背面、展開の各ビューに異なるサブタイトルを指定できますが、ヘッダーは同じにする必要があります。

- **ヘッダー**
- **サブタイトル**
- **サイズ:** インフォレットを選択したサイズで表示します
- **チャート・タイプ:** インフォレットのデータを選択したチャート・タイプで表示します
- **データ:** 関連付けられたデータ・ソースを表示します(「サンプル」または「フォーム」)
- **フォーム:** 選択されたインフォレット・フォームを表示します

削除やクリアなどのアクションは、インフォレット・メニューにあります。

デフォルトでは、インフォレットの前面ビューがプロパティ・パネルに表示されます。他のビューをドロップダウンから選択すると、それらが表示されます。インフォレッ

トを切り替えたり展開して背面ビューまたは展開ビューを表示する場合、それらのビューのプロパティは、プロパティ・パネルに表示されます。また、対応するチャート・タイプのプロパティも、プロパティ・パネルに表示されます。

インフォレットの作成

インフォレットを作成するには:

1. ホーム・ページで、「**インフォレット**」、「**作成**」の順にクリックします。
2. 「**無題インフォレット・ページ**」をクリックして、作成する新しいインフォレット・ページのタイトルを入力します。
3. 左側のデザイナ・パレットから、「**ライブラリ**」タブまたは「**ビジュアライゼーション**」タブを選択し、オブジェクトをハイライトして、インフォレットのドロップ・ゾーンまでドラッグ・アンド・ドロップします。

または、ページ上部の



をクリックして、ワークスペースに新しいインフォレットを追加できます。

4. 「**プロパティ**」パネルがまだ表示されていない場合は、ページ上部の



をクリックして表示します。強調表示したインフォレットを、「**プロパティ**」パネルで行った選択を使用してカスタマイズします。

5. 「**保存**」をクリックします。

「インフォレット」リスト・ページで「**別名コピー**」アクションを使用すると、インフォレットを簡単に複製して変更できます。リスト・ページで、コピーするインフォレットの横にある「アクション」アイコンをクリックし、「**別名コピー**」をクリックします。

インフォレットの操作

インフォレット・ページを作成すると、「**インフォレット**」カードのインフォレット・リストに表示されます。

インフォレットのリスト・ページでは、フォルダがサポートされます。フォルダによって、個別のインフォレットに対する権限を割り当てるかわりに、フォルダ内のすべてのインフォレットに対する権限を割り当てることができます。インフォレットのリスト・ページでは、ダッシュボードやデータ入力フォームと同じフォルダ階層を使用しており、すべてのアーティファクトおよびフォルダは、「**Library**」と呼ばれるルート・フォルダ内に存在します。

ノート:

管理者のみがファイル(たとえば、ダッシュボード、インフォレット、フォーム、レポートなど)を「**ライブラリ**」ルート・フォルダに追加できます。

インフォレットを表示および操作するには:

1. ホーム・ページで、「**インフォレット**」をクリックします。

2. インフォレットを操作するには、次のアクションを実行します。

- インフォレットのリスト・ページでは、インフォレット表示のフラット・ビューと階層ビュー( )を切り替えることができます。

その後、「**検索**

 を使用してインフォレットを検索できます。フラット・ビューには、検索条件と一致するインフォレットのみが表示され、それらを含むフォルダは表示されません。ツリー(階層)ビューには、インフォレットとそれらが含まれるフォルダと一緒に表示されます。

別のキーワードで検索するには、「**検索**」ボックスの「**X**」をクリックして検索条件をクリアします。

- インフォレット・リストをリフレッシュするには、「**リフレッシュ**」をクリックします。
- インフォレットを作成するには、「**作成**」をクリックします。[インフォレットの作成](#)を参照してください。
- インフォレット・ページで次のアクションを実行するには、インフォレット・ページに隣にある「**アクション**」アイコンをクリックし、次のように選択します。

- **フォルダの作成:** リスト内にフォルダを作成します
- **編集:** インフォレット・デザイナーでインフォレット・ページを開きます
- **名前変更:** インフォレット・ページの名前を変更します
- **別名コピー:** インフォレット・ページを複製します
- **削除:** リストからインフォレット・ページを削除します
- **移動先:** インフォレット・ページを別のフォルダに移動します
- 「**デフォルト**」または「**マーク解除**」: 「**デフォルト**」は、インフォレット・ページをデフォルトとしてマークし、ホーム・ページのグローバル・ヘッダーの下に表示される 2 つ目のインフォレット・ドットをクリックすることで、ホーム・ページから直接アクセスできるようにします。デフォルトとしてマークできるインフォレット・ページは 1 つのみで、リスト内のそのインフォレットの名前の前に(デフォルト)という接頭辞が表示されます。**マーク解除**は、インフォレット・ページからデフォルト指定を削除します。

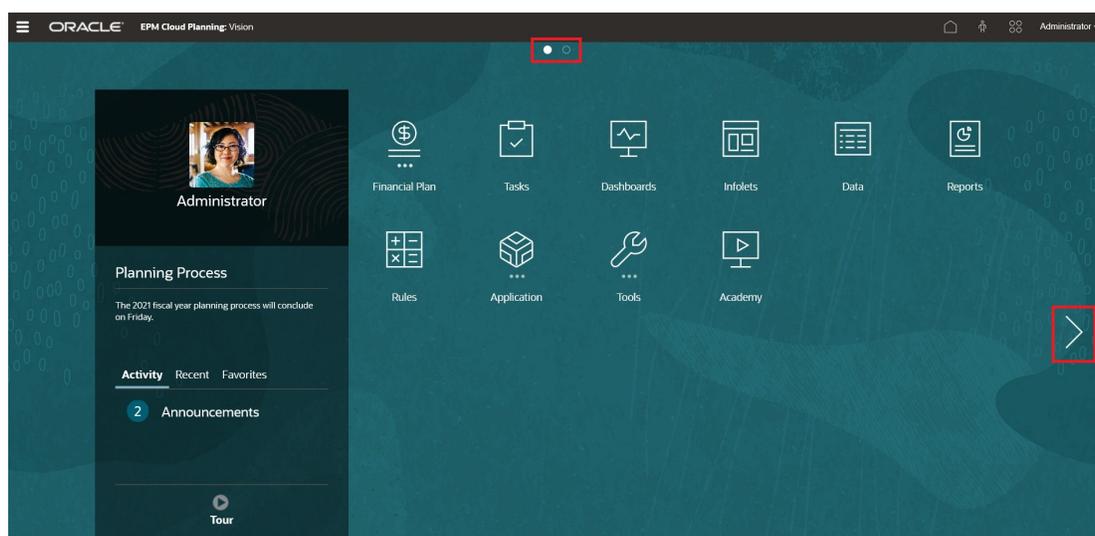
ノート:

ダッシュボード・ページをデフォルトとしてマークできなくなりました。デフォルトとしてマークできるのは、インフォレット・ページのみです。

- **権限の割当て:** 個々のユーザーまたはグループに、インフォレット・ページおよびフォルダに対する「読取り」、「書込み」および「なし」アクセス権限を割り当てることができます

インフォレットにアクセスするインターフェースのカスタマイズ

ホーム・ページからインフォレット・ページへのリンクを追加できるように、ナビゲーション・フロー・デザイナを使用して、ビジネス・プロセス・インターフェースをカスタマイズできます。インフォレット・ページにアクセスするインターフェースをカスタマイズすると、ホーム・ページでグローバル・ヘッダーの下にドットが表示され、ホーム・ページとインフォレット・ダッシュボード・ページとの間を容易にナビゲートできる矢印が表示されます。ホーム・ページに表示される各ドットが 1 つのインフォレット・ページを表しており、ドットにカーソルを置くと、インフォレット・ページの名前が表示されます。インフォレットのドットをクリックすると、それに関連付けられているインフォレット・ページが開きます。ホーム・ページに定義できるインフォレットのドットは、最大 7 つです。他の EPM Cloud 環境への接続をすでに作成している場合は、他の EPM Cloud 環境でもインフォレット・ページへのリンクを追加できます。



アクセス権のあるインフォレット・ページのドットのみがホーム・ページに表示され、ユーザーに見えます。表示されるインフォレット・ドットのタイプは、次のとおりです。

- ホーム・ドット: 常に最初に表示されるドットで、ホーム・ページにリンクしています。ホーム・ドットは 1 つだけです。ホーム・ページ以外を閲覧しているときは、ホーム・ドットをクリックするとホーム・ページに戻ります。
- ユーザー・ドット: エンド・ユーザーがデフォルトのインフォレット・ページとしてマークしたインフォレット・ページにリンクします。ユーザー・ドットは 1 つだけで、必ずユーザーのホーム・ページでホーム・ドットの後に表示されます。ユーザー・ドットは、ナビゲーション・フロー・デザイナでは追加できません。インフォレットをデフォルトとしてマークする方法の詳細は、[インフォレットの操作](#)を参照してください。
- カスタマイズ可能ドット: サービス管理者が作成したインフォレット・ページにリンクします。カスタマイズ可能ドットは、ナビゲーション・フローに統合でき、表示するかどうかと表示の順序はナビゲーション・フロー・デザイナで決定します。カスタマイズ可能ドットは最大 7 つまでで、常にホーム・ドットとユーザー・ドットの後に表示されます。

ナビゲーション・フロー・デザイナを使用して、ビジネス・プロセス・インターフェースにインフォレット・ドットを追加するには:

1. ホーム・ページから、「ツール」、「ナビゲーション・フロー」の順にクリックします。
2. アクティブでないナビゲーション・フローをリストから選択し、ナビゲーション・フロー・デザイナで「インフォレット」タブをクリックします。
3.  をクリックします。
4. 「インフォレットの管理」で、インフォレット・ドットに名前を付けて、表示/非表示を設定し、 をクリックしてアーティファクト・ライブラリからインフォレットを選択します。

 ノート:

他の EPM Cloud 環境への接続が作成してある場合は、その環境からインフォレットを選択することもできます。まず、「自分の接続」で環境を選択し、その環境のインフォレットに移動します。

5. 「保存して閉じる」をクリックします。

 ノート:

インフォレットが、ナビゲーション・フローでタブまたはカードに関連付けられている場合もあります。タブやカードを追加または更新する際には、アーティファクト・ライブラリでインフォレットを選択します。

設計時のナビゲーション・フローに対する変更を確認するには、ナビゲーション・フローをアクティブにし、ホーム・ページからユーザー名(画面の右上隅)の隣の下向き矢印をクリックして、「ナビゲーション・フローのリロード」をクリックします。

ナビゲーション・フローの設計についてさらに学習するには、カスタム・ナビゲーション・フローの設計を参照してください。

EPM Cloud 環境の接続、および「URL のコピー」機能についてさらに学習するには、EPM Cloud での環境の接続を参照してください。

独自の ML の持込み: 機械学習モデルのインポートについて

独自の ML の持込みによって、EPM 管理者は、完全にトレーニングされた機械学習(ML)モデルをインポートしてフリーフォーム・アプリケーションにデプロイできます。プランナは、高度な予測モデリング手法を使用してより正確な予測を生成する、堅牢な ML ベースの予測を活用できます。

データ・サイエンティストは、ビジネスの問題に関連する履歴データを収集して準備し、アルゴリズムをトレーニングし、サード・パーティ・ツールを使用して PMML (予測モデルを表すために使用する標準言語である予測モデル・マークアップ言語)ファイルを生成します。これらの予測分析モデルおよび機械学習モデルは、統計手法または ML アルゴリズムを使用して、大量の履歴データに隠れたパターンを学習します。予測分析モデルは、トレーニング中に取得した知識を使用して、新しいデータ内の既知のパターンの存在を予測します。

EPM 管理者は、完全にトレーニングされた ML モデルをインポートして構成できます。これにより、2 つの Groovy ルールが生成されます。管理者は、ルールをフォームまたはダッシュボードに添付するか、定期的に予測結果を生成するようにジョブをスケジュールします。これにより、機械学習の利点およびデータ・サイエンスの力をビジネス・ユーザーが活用できるようになり、プランニングおよび予算策定のプロセスが強化され、ビジネス上の意思決定が改善されます。

たとえば、平均販売価格、宣伝広告に対する計画済費用、履歴ボリューム、推定業界ボリュームなどのキー・ドライバを使用して、エンティティの製品ボリュームを予測できます。

ML モデルをインポートし、それらを使用して他の財務ユース・ケースの数値を予測できます。次に例を示します:

- 取引プロモーションが売上アップリフトに与える影響
- よりよい ROMI を得るためのマーケティング・ミックス・モデリング
- 内部および外部のドライバが収益予測に与える影響
- より適切な資金ポジションを実現するための予測の資金予測

ステップの概要

前提条件: データ・サイエンティストは、データ・サイエンス・ツール(サード・パーティ・ツールまたは Oracle Data Science Cloud)で ML モデルを構築してトレーニングし、PMML ファイルとして保存します。

次に、EPM 管理者は、トレーニングされたモデルからビジネス価値を得られるようにモデルを機能させます:

1. 管理者は、ML モデルを PMML フォーマットでフリーフォーム・アプリケーションにインポートし、入力変数とターゲット変数がフリーフォーム・アプリケーションのディメンション・メンバーまたはセル値にどのようにマップされるかを定義します。このステップにより、ML モデルをフリーフォーム・アプリケーションに接続する自動 Groovy ルールが生成されます。ML モデル定義ごとに 2 つの Groovy ルールが生成されます。1 つはフォームまたはダッシュボードに関連付けるルールで、ユーザーはオンデマンドで予測を行う

ことができます。もう 1 つは、一括処理用のスケジュール済ジョブで大規模な予測を生成します。[ML モデルのインポート](#)を参照してください。

2. 管理者は、**Groovy** ルールを関連するアクション・メニュー、フォームまたはダッシュボードに関連付けることにより、ML モデルをフリーフォーム・アプリケーションにデプロイします。[プランナへの ML モデルのデプロイ](#)を参照してください。管理者は、バッチ・プロセスで **Groovy** ルールを実行するジョブを作成することもできます。
3. プランナは、フォームで **ML** を利用したビジネス・ルールを活用して予測値を生成します。予測値はフォームに保存されます。プランナは、生成された予測を使用して **What-If** 分析を実行したり、フォームの予測値を変更することができます。プランナは、専門知識と判断力により値を追加して、予測を確定します。
4. これは反復プロセスです。プランナは **ML** モデルに基づいて予測を行うため、管理者はモデルのパフォーマンスを測定し、データ・サイエンティストと連携して、必要に応じて **ML** モデルを更新または置換できます。次に、管理者は再トレーニングされた **ML** モデルを再インポートしてデプロイします。

再トレーニングされた **ML** モデルを再インポートすると、**Groovy** ルールが再生成されます。

ビデオ

目的	視聴
この概要では、独自の ML (機械学習) の持込みについて紹介します。EPM 管理者は、完全にトレーニングされた ML モデルをインポートして、フリーフォーム・アプリケーションにデプロイできます。プランナは、高度な予測モデリング手法を使用してより正確な予測を生成する、堅牢な ML ベースの予測を活用できます。	 概要: 独自の機械学習(ML)の持込み
独自の機械学習の持込み向けに ML モデルのインポートを構成する方法を学習します。完全にトレーニングされた ML モデルをフリーフォームにインポートします。ウィザードのステップに従って、モデルをマップ、分析およびテストします。モデルを保存すると、2 つの Groovy ルールが作成されます。統合プロセスを完了するには、 ML モデルをフリーフォームにデプロイするための関連ビデオを参照してください。	 機械学習(ML)モデルのインポートの構成
ML モデルをフリーフォームにデプロイする方法を学習します。 ML モデル・インポートを構成したら、構成した ML モデルから生成された Groovy ルールを使用してアクション・メニューを作成して、 PMML ファイルをアプリケーションに統合します。その後、アクション・メニューをフォームに関連付けます。プランナがフォームからルールを実行すると、予測値のセットがルールによって返されます。	 機械学習(ML)モデルの Planning へのデプロイ

独自の ML の持込みの考慮事項

独自の **ML** の持込みに関する考慮事項を次に示します。

考慮事項:

- 独自の ML の持込みには、EPM Enterprise Cloud サービス・サブスクリプションが必要で
す。EPM Standard Cloud では使用できません。さらに、Enterprise Planning and
Budgeting Cloud およびフリーフォームでも使用できます。
また、独自の ML の持込みは、Oracle Sales Planning Cloud および Oracle Strategic
Workforce Planning Cloud で使用できます。
- 独自の ML の持込みは、「カスタム」、「フリーフォーム」、「モジュール」、「Sales
Planning」および「Strategic Workforce Planning」のアプリケーション・タイプで機能し
ます。
- 独自の ML の持込みには、Groovy ルールが必要です。
- 独自の ML の持込みは、レッドウッド・エクスペリエンスが有効である場合にのみ使用で
きます。

ML モデルのインポート

完全にトレーニングされた ML モデルをフリーフォーム・アプリケーションにインポートし
て、ビジネス・ユーザーが使用できるように準備します。

前提条件: ML モデルをインポートする前に、データ・サイエンス・チームは ML モデルを構
築、トレーニングし、PMML ファイルとして保存する必要があります。

ML モデルをフリーフォーム・アプリケーションにインポートするには:

1. ホーム・ページで、「IPM」をクリックし、「ML モデル」をクリックします。
2. 「インポート」をクリックし、PMML ファイルをドラッグ・アンド・ドロップするか、参
照して選択します。
モデルのインポート ページには、ターゲット列(ML モデルを使用して予測される変数)
やトレーニング日など、PMML ファイルに関する情報が表示されます。
3. モデルの名前と説明を入力し、「次」をクリックします。
4. **ルールの生成** ページで、フォームまたはダッシュボードに関連付ける Groovy ルールを生
成する情報を入力します:
「モデル・マッピング」 で、ML モデルを使用するキューブを選択し、各ディメンション
からメンバーまたはメンバーのセットを選択して、ML モデルを使用するデータのスコ
ープを定義します。
5. **「入力」** および **「出力」** をキューブの適切なディメンションおよびメンバーにマップし、
「次」 をクリックします。
「入力」 セクションおよび **「出力」** セクションには、入力機能(予測に使用される機能/列)
およびターゲット機能(予測されると予想される列)のリストが含まれています。フリー
フォームは、PMML ファイルを分析して、入力と出力のリストを生成します。

入力機能は、ドライバと同様に、システムへの入力として機能する独立変数です。予測を
行う場合、モデルは入力機能を使用して出力を予測します。このステップでは、ML モ
デルからの入力をフリーフォーム・キューブの出力にマップします。**「入力」** には、ML
モデルからデータをどのように抽出するかを記述します。**「出力」** では、予測するターゲッ
ト・メジャー、およびフリーフォーム・アプリケーションの予測値をどこに貼り付けるか
を定義します。

たとえば、製品、価格および業界ボリューム(入力機能)を使用して、ボリューム(出力)を
予測できます。

- 「**入力**」領域で、入力機能ごとに「**入力タイプ**」を選択し、「**セルの値**」または「**メンバー**」を選択した場合は、マップする Planning アプリケーションのメンバーまたはディメンションを選択します。入力タイプは次のとおりです：
 - **プロンプト**: フリーフォームに、ML モデルからこの入力値にマップするメンバーまたはディメンションがない場合、予測が行われるときに、値の推定を入力するように要求されます。
 - **セルの値**: 入力機能をフリーフォーム・キューブの 1 つ以上のディメンション・メンバーにマップします。たとえば、**Price** という入力機能をフリーフォーム・アプリケーションの **Price** という勘定科目メンバーにマップします。
 - **メンバー**: 入力機能をフリーフォーム・キューブの 1 つのディメンションにマップします。たとえば、**Product** という入力機能をフリーフォーム・アプリケーションの製品ディメンションにマップします。
 - 「**出力**」領域で「**入力タイプ**」を選択し、「**セルの値**」または「**メンバー**」を選択した場合は、予測結果を格納するためにマップするフリーフォーム・アプリケーションのメンバーまたはディメンションを選択します。
6. **モデルの分析**で、ML モデルを確認し、「**次**」をクリックします。
このステップでは、**MLX** (機械学習の説明可能性)を表し、ML モデルに関する追加情報を抽出します。たとえば、回帰係数を確認して、出力の予測に主要な入力機能の相対的な影響がどのように使用されているかを確認します。棒の高さは、入力機能における 1 ユニット増加のターゲット変数に対する増分効果を表します。
 7. **モデルのテスト**で、サンプル値のセットの予測を生成することにより、ML モデルをテストします。**入力**ごとに、サンプル入力値を入力し、「**予測**」をクリックします。
 8. 予測された**出力値**を確認し、「**保存して閉じる**」をクリックします。
 9. 「**はい**」をクリックして、Groovy ルールの作成を確認します。

ML モデル定義ごとに 2 つの Groovy ルールが生成されます:

- `ML_MLModelName_Form`: このルールを使用して、フォームまたはダッシュボードに関連付けます。これにより、ユーザーはオンデマンドで予測を行うことができます。
- `ML_MLModelName`: このルールを使用して、一括処理用のスケジュール済ジョブで大規模な予測を生成します。

生成されたルールは、**Calculation Manager** で確認できます。Groovy ルールは、PMML ファイルの名前と場所、および定義したマッピングに基づいて入力と出力を定義します。これらの生成された Groovy ルールの使用方法の詳細は、[プランナへの ML モデルのデプロイ](#)を参照してください。

チュートリアル

チュートリアルには、トピックの学習に役立つ一連のビデオやドキュメントを使用した手順が用意されています。

目的	方法の学習
完全にトレーニングされた ML モデルをインポートして、フリーフォーム・アプリケーションにデプロイする方法を学習します。プランナは、高度な予測モデリング手法を使用してより正確な予測を生成する、堅牢な ML ベースの予測を活用できます。	 ML モデルのインポート

プランナへの ML モデルのデプロイ

インポートした ML モデルをデプロイして、プランナがフォームおよびダッシュボードで使用できるようにします。プランナは、機械学習を使用して予測を生成できます。

PMML モデルをインポートした後、EPM 管理者は、生成された Groovy ルールをフリーフォーム・フォームに関連付けることにより、PMML ファイルをフリーフォーム・アプリケーションに統合します。

最初に、Calculation Manager で Groovy ルールを確認してマッピングを検証し、必要に応じて変更を加えることができます。Groovy ルールが確定されたら、関連するフォームまたはダッシュボードに関連付けることができます。

フォームに関連付けるアクション・メニューを作成して、プランナが Groovy ルールを使用できるようにします。

ML Groovy ルールをフォームに関連付けるには:

1. アクション・メニュー・アイテムを作成します:
 - a. 「ナビゲータ」の「作成および管理」で、「アクション・メニュー」をクリックします。
 - b.  をクリックし、メニューの名前を入力して、「OK」をクリックします。
 - c. 新しいメニュー・アイテムを選択し、 をクリックして、「子の追加」をクリックします。
 - d. メニュー・アイテム名を入力し、ラベルを指定して(例: Predict Volume、タイプ「ビジネス・ルール」)、適切なキューブおよび Form という接尾辞が付いた Groovy ルール(例: ML_MLModelName_Form)を選択します。次に、「保存」をクリックします。

詳細は、[アクション・メニューの作成と更新](#)を参照してください。

2. アクション・メニューをフォームに関連付けます:
 - a. 「ナビゲータ」の「作成および管理」で、「フォーム」をクリックします。
 - b. フォームに移動して  をクリックし、「その他オプション」で、作成したアクション・メニュー・アイテムをクリックします。メニューを「使用可能なメニュー」から「選択したメニュー」に移動して、メニューをフォームに関連付けます。次に、「保存」をクリックします。

詳細は、[フォームの管理](#)を参照してください。

プランナがフォームからアクション・メニュー・アイテムを選択すると、Groovy ルールがトリガーされます。ルールは、すべての入力ドライバのデータを選択して処理のために PMML ファイルに送信し、予測値のセットを返し、**モデルのインポート**・ウィザードでの定義に従

ってそれらを出力に貼り付けます。ルールはフォームのコンテキストで実行され、フォームのセルの値のみを予測します。プランナにアクセス権を持つ交差の予測のみが表示されるように、セキュリティが適用されます。プランナは、様々な **What-If** シナリオを実行して、予測とプランを調整したり、予測値を調整することができます。

プランナがルールを実行するには、モデル、フォーム、ルールおよびメンバーにアクセスできる必要があることに注意してください。

バッチ・ジョブとしての ML Groovy ルールの実行

ML Groovy ルールをジョブとして実行できます。バッチ・ルールは、特定のフォームのセルのみでなく、モデルの全スコープのすべてのセルに対して実行されます。繰り返しジョブとして実行するように設定できます。たとえば、プランナが定期的に使用できるように予測をロードするなどです。

バッチ・ジョブを実行またはスケジュールするには、「**ジョブ**」で「**ルール**」の「**ジョブ・タイプ**」を選択し、PMML モデル(`ML_MLModelName`)のビジネス・ルールの Groovy バッチ・バージョンを選択します。

ジョブのスケジュールの詳細は、[ジョブのスケジュール](#)を参照してください。

チュートリアル

チュートリアルには、トピックを学習するのに役立つ一連のビデオおよびドキュメントを使用した説明が用意されています。

目的	方法の学習
インポートされた ML モデルから作成された Groovy ルールを取得してフォームに追加する方法を学習します。その後、フリーフォームで ML モデルを使用して予測を行います。	 ML モデルによる予測の実行

13

有効な交差とセル・レベル・セキュリティの定義

アプリケーションでデータを入力したり、表示できるユーザーを制限するルールを定義します。

アプリケーションでデータを入力できるユーザーを制限するには、特定のメンバー交差をデータ入力について有効(または無効)としてマークするルールを作成します。このようなルールは、有効な交差と呼ばれます。また、アプリケーションでデータを表示できるユーザーを制限するには、標準のセキュリティであれば通常アクセスできるセルに対する読取りまたは書き込みアクセス権をユーザーから削除するルールを作成します。このようなルールは、セル・レベル・セキュリティと呼ばれます。

- 有効な交差を定義するには、[有効な交差の定義](#)を参照してください。
- セル・レベル・セキュリティを定義するには、[セル・レベル・セキュリティの定義](#)を参照してください

有効な交差の定義

データを入力したり、実行時プロンプトを選択する場合にユーザーに対して特定のセル交差をフィルタする有効な交差ルールを定義します。

次も参照:

- [有効な交差の理解](#)
- [有効な交差の作成](#)
- [有効な交差の管理](#)
- [フォーム内の無効データの抑制](#)
- [無効なデータのクリア](#)
- [有効交差の操作](#)

有効な交差の理解

有効交差は、定義したルールに基づいてフィルタされるセルの交差部分です。このルールは有効交差ルールと呼ばれ、ユーザーがデータを入力したり実行時プロンプトを選択する場合に、ユーザーに対して特定のセル交差をフィルタします。たとえば、ある期間や一部の部署にのみ特定のプログラムが有効であることを指定できます。有効交差を定義した後は、無効なデータを含むセルは読取り専用になります。この制限により、プランニング・プロセスのスピードが向上し、ユーザーに使用可能な情報が最適化されます。

逆に、ほとんどのセルの組合せでデータ入力を許可し、選択したいくつかのセルの組合せに対するデータ入力のみを禁止する必要があるというユース・ケースも考えられます。このような場合は、無効な交差を定義することにより、定義プロセスを簡易化できます。無効な交差は、交差グループの作成中に無効な交差定義タイプを指定できる点を除き、有効な交差を定義する場合と同様に定義します。

有効交差がフォームおよび実行時プロンプトの動作にどのように影響するかをさらに理解するには、[有効交差の操作](#)を参照してください。

ビデオ

目的	視聴するビデオ
有効交差の管理方法を学習します。	 Cloud EPM での有効な交差の管理

関連トピック

- [有効交差グループ](#)
- [有効交差ルール](#)
- [アンカーおよび非アンカー・ディメンション](#)
- [有効な交差の例](#)
- [有効交差ルールの冗長または重複](#)
- [共有メンバーおよび有効交差ルール](#)
- [代替変数および有効交差ルール](#)
- [評価順序](#)

有効交差グループ

有効交差グループで次の内容を定義します:

- 含まれるディメンション
- ディメンションのいずれかをアンカー・ディメンションとする
- 非アンカー・ディメンションが必要かどうか
- 指定されないまたは参照されないアンカー・ディメンション・メンバーは有効か、無効か

有効交差ルール

有効交差ルール:

- 有効交差グループ内で定義されたディメンションと同じディメンションを使用する必要があります
- 同じ有効交差グループ内の有効交差ルールは明らかな競合や重複が生じると、いずれかの有効交差ルールの条件が満たされた場合に、有効とマークされます
- 明らかな冗長または重複を発生させる、異なる有効交差グループ内の有効交差ルールは、すべての有効交差グループの要件を満たしている場合、有効とマークされます

したがって、有効交差グループが交差を無効とマークしている場合、他の有効交差グループがその交差を有効とマークしているかどうかにかかわらず、その交差は無効とマークされます無効なグループは有効なグループの結果を上書きします。

 ノート:

有効交差を削除する場合は、他の有効交差グループが許可しているかどうかにかかわらず、このルールは異なる有効交差グループに属する必要があります。

[有効な交差の例](#)を参照してください。

アンカーおよび非アンカー・ディメンション

アンカーおよび非アンカー・ディメンション:

- アンカー・ディメンションは常に、有効な交差の評価で使用されるキューブの必須ディメンションです。
- 非アンカー・ディメンションが必須である場合、または必須でない場合:
 - 非アンカー・ディメンションが必須である場合、そのディメンションを使用しないキューブでは、有効な交差の評価時に、そのディメンションが必須としてタグ付けされている有効な交差グループは無視されます。
 - 非アンカー・ディメンションが必須でない場合、そのディメンションを使用しないキューブでは、そのディメンションが必須でないとして含まれている有効な交差グループも評価され、キューブで使用されている有効な交差グループ内の他のディメンションの交差が評価されます。
- 選択していないアンカー・ディメンション・メンバーはデフォルトで有効ですが、「**選択されていないメンバーは有効です**」オプションをクリアすると、これらを無効としてマークできます。このオプションでは、このルールで選択されていないアンカー・ディメンション・メンバーを含むすべての交差を無効としてマークします。

[有効な交差の例](#)を参照してください。

有効な交差の例

ここでは、有効交差グループと有効交差ルールの例を示して、単純、複雑およびエッジケースのシナリオをいくつか説明します。

例: アンカーおよび非アンカー・ディメンション

アンカー・ディメンションの選択は重要です。アンカーのディメンション定義に基づいて、異なる結果が作成される次の例を検討してください:

- 有効交差グループ 1 では、アンカー・ディメンションとしてエンティティが定義され、非アンカー・ディメンションとして製品が定義されています。
- 有効交差グループ 2 では、アンカー・ディメンションとして製品が、非アンカー・ディメンションとしてのエンティティとして逆に定義されています。

表 13-1 例 - アンカー・ディメンションはエンティティです

有効交差グループ	アンカー・ディメンション - エンティティ	非アンカー・ディメンション - 製品
1	DESC(500 - 製造) - 選択されていないメンバーは有効です	DESC(P_TP1 - コンピュータ設備)

グループ 1 は、製造の子孫であるエンティティが、コンピュータ設備の子孫製品でのみ有効であることを意味します。製造の子孫で有効である製品は他にありません。製造の子孫以外のすべてのエンティティは、コンピュータ設備の子孫を含め、すべての製品で有効です。

表 13-2 例 - アンカー・ディメンションは製品です

有効交差グループ	アンカー・ディメンション - 製品	非アンカー・ディメンション - エンティティ
2	DESC(P_TP1 - コンピュータ設備) - 選択されていないメンバーは有効です	DESC(500 - 製造)

グループ 2 は、コンピュータ設備の子孫である製品が、製造の子孫エンティティでのみ有効であることを意味します。他のエンティティは、コンピュータ設備の子孫で有効ではありません。コンピュータ設備の子孫以外のすべての製品は、製造の子孫を含め、すべてのエンティティで有効です。

▲ 注意:

アンカー・ディメンションの選択は重要です。間違ったアンカー・ディメンションを選択した場合、非常に異なる結果になります。

例: 必須のディメンション

次の例では、非アンカー・ディメンションが必須ではない場合、アプリケーションは、必須ではないディメンションを含まないキューブの有効交差グループ内のすべての残りのディメンション交差を評価します。この動作では、1つの有効なディメンションのみを含む有効交差グループの評価が発生する可能性があります。

表 13-3 例 - 必須と必須ではない非アンカー・ディメンションの比較

有効交差グループ	アンカー・ディメンション - エンティティ	非アンカー・ディメンション - 製品
1	DESC(500 - 製造) - 選択されていないメンバーは有効です	DESC(P_TP1 - コンピュータ設備) - 必須ではない

グループ 1 では、製品ディメンションは必須ではなく、選択されていないエンティティは有効です。したがって、実行時、フォームまたはビジネス・ルールのキューブに製品ディメンションが含まれない場合、アプリケーションではエンティティ・ディメンションの選択内容が評価され、製品ディメンションを含まないキューブに対してすべてのエンティティが有効とマークされます。

表 13-4 例 - 必須と必須ではない非アンカー・ディメンションの比較

有効交差グループ	アンカー・ディメンション - エンティティ	非アンカー・ディメンション - 製品
2	DESC(500 - 製造) - 選択されていないメンバーは無効です	DESC(P_TP1 - コンピュータ設備) - 必須ではない

グループ 2 では、製品ディメンションは必須ではなく、選択されていないエンティティは無効です。したがって、キューブに製品ディメンションが含まれない場合、アプリケーションではエンティティ・ディメンションの選択内容が評価され、製品の子孫を除くすべてのエンティティが無効とマークされます。したがって、製品ディメンションを使用しないキューブでは、製造エンティティの子孫でのデータ入力のみが許可されます。

▲ 注意:

非アンカー・ディメンションが必須であるかどうか、特に 1 つの有効なディメンションのみを含む有効交差グループが結果に残されているかどうかを注意深く検討してください。また、アンカー・ディメンション・メンバーに対する「**選択されていないメンバーは有効です**」オプションの選択も、有効交差のシステム動作で重要な役割を果たします。[有効な交差の例](#)を参照してください。

例: 選択されていないメンバーは有効です

次の例では、2 つの交差グループが有効です。1 つのグループで、アンカー・ディメンションの選択されていないメンバーは無効です(このオプションはクリアされています)。他のグループで、アンカー・ディメンションの選択されていないメンバーは有効です(このオプションは選択されています)。

表 13-5 例 - 選択されていないメンバーは有効です

有効交差グループ	アンカー・ディメンション - 勘定科目	非アンカー・ディメンション - エンティティ
1	IDESC(BS - 貸借対照表) - 選択されていないメンバーは無効です	000 - 部署なし
2	IDESC(GP - 総利益) - 選択されていないメンバーは有効です	IDESC(403 - 売上げ)

ビジネス・グループ 1 では、すべての選択されていないメンバーが無効と定義されており、アプリケーションによって、貸借対照表に含まれない子孫が無効とマークされます。総利益は、貸借対照表に含まれる子孫ではありません。したがって、グループ 2 は、総利益に含まれる子孫が、売上げエンティティに含まれる子孫で有効であることを明示的に示していますが、グループ 1 の無効定義は、同じアンカー・ディメンション・メンバー・セットの有効交差を上書きします。

例: 同じ有効交差グループ内での冗長または重複有効交差ルール

有効交差ルールが同じ有効交差グループにあり、冗長または重複が生じる場合、有効交差グループのいずれかの要件が満たされたときにのみ、交差は有効とマークされます。

表 13-6 例: 同じ有効交差グループ内での冗長または重複有効交差ルール

有効交差ルール	アンカー・ディメンション - 勘定科目	非アンカー・ディメンション - エンティティ
1	IDESC(GP - 総利益) - 選択されていないメンバーは有効です	IDESC(403 - 売上げ)
2	IDESC(NI - 純利益) - 選択されていないメンバーは有効です	IDESC(TD - 部署合計)

総利益が純利益の子孫で、売上が部署合計の子孫であるため、総利益に含まれる子孫は、部署合計に含まれる利益で有効です。ルール 1 はルール 2 のサブセットなので、実際は、ルール 1 は操作なしのルールであり、不要です。総利益勘定科目に含まれる子孫に制限はなく、売上げエンティティに含まれる子孫に対してのみ有効です。

例: 異なる有効交差グループでの冗長または重複有効交差ルール

有効交差ルールが異なる有効交差グループにあり、冗長または重複が生じる場合、すべての有効交差グループの要件が満たされたときにのみ、交差は有効とマークされます。

次の例では、異なるグループに冗長または重複するルールがあります:

表 13-7 例 - 異なる有効交差グループでの冗長または重複有効交差ルール

有効交差グループ	アンカー・ディメンション - 勘定科目	非アンカー・ディメンション - エンティティ
1	IDESC(GP - 総利益) - 選択されていないメンバーは有効です	IDESC(403 - 売上げ) - 必須
2	IDESC(NI - 純利益) - 選択されていないメンバーは有効です	IDESC(TD - 部署合計) - 必須ではない

グループ 1 は、売上げエンティティに含まれる子孫で有効である、総利益勘定科目に含まれる子孫を制限するため、アプリケーションでは、このグループがこれらの交差に使用されます。他の総利益以外の勘定科目は、部署合計エンティティに含まれるすべての子孫を使用できますが、総利益勘定科目に含まれる子孫は、売上げエンティティに含まれる子孫を使用する必要があります。

有効交差ルールの冗長または重複

同じ有効交差グループ内の有効交差ルールで、明らかな競合や重複が生じると、いずれかの有効交差ルールの条件が満たされた場合に、有効とマークされます。

異なる有効交差グループが、アンカー・ディメンション、必須または必須でない非アンカー・ディメンション、および「**選択されていないメンバーは有効です**」属性を含め、同じ属性を共有している場合、これらは、同じ有効交差グループのルールとして扱われます。

共有メンバーおよび有効交差ルール

共有メンバーは、有効交差ルールでサポートされています。基本メンバーが有効交差ルールに対して選択されている場合、共有メンバーもルールに含まれます。あるいは、共有メンバーが有効交差ルールに対して選択されている場合、基本メンバーもルールに含まれます。

代替変数および有効交差ルール

有効交差ルールで代替変数を使用できます。ユーザー変数はサポートされていません。代替変数は、Essbase サーバー、アプリケーションまたはデータベース・レベルで設定できます。同じ代替変数が複数のレベルで存在します。アプリケーションは、次の順序で検索するときに検出される最初の代替変数を使用します。

1. データベース(キューブ)

2. アプリケーション
3. サーバー

評価順序

有効交差グループの評価順序は、無効な結果セットをできる限り速く順序付けし、有効交差の評価全体の速度および効率性を向上させます。

たとえば、アプリケーションでは、リスト内の最初の有効交差グループ、次に 2 番目のグループというように順番に評価されます。無効として定義された交差は、他の有効交差グループの結果より優先されるため、リスト内の 2 番目のグループで無効な交差が検出されると、リストの残りの評価は中止されます。

グループの評価順序を変更するには、[有効交差グループの評価順序の変更](#)を参照してください。

有効な交差の作成

データを入力したり、メンバーを選択したり、実行時プロンプトを選択する場合にユーザーに対して特定のセル交差をフィルタするルールを定義できます。

有効交差を作成するには:

1. 「**アプリケーション**」をクリックし、「**有効な交差**」をクリックします。
2. まだ選択されていない場合は、「**セットアップ**」タブをクリックします。

ノート:

レッドウッド・エクスペリエンスが有効になっている場合、「**セットアップ**」タブはページの下部にあります。

3. 有効交差グループを作成します:
 - a. 「**作成**」をクリックします。
 - b. 新しい交差の名前と説明を入力します。
 - c. 「**使用可能**」チェック・ボックスは、デフォルトで選択されています。有効交差グループを無効化するには、「**使用可能**」チェック・ボックスの選択を解除します。「**有効な交差**」ページで直接、有効交差グループを有効化または無効化することもできます。[有効交差グループの無効化および有効化](#)を参照してください。
 - d. 「**定義タイプ**」で、次のいずれかを選択します:
 - **有効な交差**
 - **無効な交差**
 - e. 交差グループのアンカー・ディメンションを選択するには、「**アンカー・ディメンションの選択**」の横にある  をクリックします。
 - f. **オプション**: デフォルトでは、有効交差ルールで指定されていないアンカー・ディメンション・メンバーが有効とマークされます。このオプションをクリアするには、ア

アンカー・ディメンションの横の  をクリックし、「**選択されていないメンバーは有効です**」をクリックします。

このオプションの詳細と使用方法の例は、[アンカーおよび非アンカー・ディメンション](#)を参照してください。

- g.** 追加のディメンション(非アンカー・ディメンションと呼ばれます)を選択するには、「**ディメンションの追加**」をクリックします。
 - h. オプション:** デフォルトでは、非アンカー・ディメンションは必須ではありません。非アンカー・ディメンションを必須にするには、非アンカー・ディメンションの横の  をクリックし、「**必須**」をクリックします。
- 4.** 有効交差ルールを定義します:
- a.** 「**ルールの追加**」をクリックします。
 - b.** 有効な交差に対して含める、除外するまたは削除するメンバーの範囲を選択するには、新規ルールのディメンションの横の  をクリックします。
 - 「**編集**」をクリックして「**メンバーの選択**」ページを開き、有効な交差ルールに含めるメンバー、代替変数および属性を選択します。[メンバー・セレクタの使用](#)を参照してください。
 - 「**除外**」または「**すべて除外**」をクリックして、ルールから除外するディメンション・メンバーを定義します:
 - **除外:** このオプションを選択した場合、メンバーは **ID** を基準にして除外されます。指定したメンバー(基本または共有)のみが除外されます。
 - **すべて除外:** このオプションを選択した場合、メンバーは名前を基準にして除外されます。基本メンバーを指定すると、基本メンバーとそのすべての共有メンバーが除外されます。共有メンバーを指定すると、このメンバー、その基本メンバー、およびこのメンバーの他のすべての共有メンバーが除外されます。
 - 「**クリア**」をクリックして、選択をクリアします。
- ルールを削除するには、 をクリックします。

- 5.** 「**保存して閉じる**」をクリックします。

新しい有効交差グループが、有効交差リストの最後に追加されます。リスト内のルールの順序を変更するには、[有効交差グループの評価順序の変更](#)を参照してください。

有効な交差の管理

次も参照:

- [有効交差の表示](#)
- [有効な交差のフィルタ](#)
- [交差のインポートとエクスポート](#)
- [有効交差グループの評価順序の変更](#)
- [有効交差グループの無効化および有効化](#)
- [有効交差グループの詳細の編集](#)

- [有効交差グループの複製](#)
- [有効交差グループの削除](#)

有効交差の表示

有効交差を表示するには:

1. 「**アプリケーション**」をクリックし、「**有効な交差**」をクリックします。
2. まだ選択されていない場合は、「**セットアップ**」タブをクリックします。

ノート:

レッドウッド・エクスペリエンスが有効になっている場合、「**セットアップ**」タブはページの下部にあります。

3. 特定の交差についてリスト全体を検索するには、「**検索**」ボックスに検索条件を入力し、 をクリックして、検索条件を満たす交差のみを表示します。
4. フィルタ条件を満たす交差のみが表示されるようにリストをフィルタするには、次のフィルタ・オプションを指定します:
 - : クリックすると、「**フィルタ**」ページが表示され、フィルタ・オプションの堅牢なリストから選択できます。フィルタ・オプションとその説明の完全なリストは、[有効な交差のフィルタ](#)を参照してください。
 - : クリックすると、すべてのフィルタがクリアされます。
 - **使用可能**: 有効になっている(**「はい」**)または有効になっていない(**「いいえ」**)交差のみを表示するようにリストをフィルタするか、「**すべて**」を選択します。
 - **定義タイプ**: 「**有効な交差**」または「**無効な交差**」タイプの交差のみを表示するようにリストをフィルタするか、「**すべて**」を選択します。
5. **有効な交差**ページで次のタスクを実行することもできます:
 - **「アクション」メニュー**: 有効な交差のインポートおよびエクスポートについては、[交差のインポートとエクスポート](#)を参照してください。
 - **作成**: [有効な交差の作成](#)を参照してください。
 - **リフレッシュ**: クリックして交差リストをリフレッシュします。
6. 交差ページのそれぞれのリストについて、次のタスクを実行できます:
 - **「使用可能」列**: 交差が有効かどうかを示します。交差を無効または有効にするには、その横にあるチェック・マークをクリックします。緑色のチェック・マークは、定義が使用可能であることを示します。[有効交差グループの無効化および有効化](#)を参照してください。
 - **「アクション」列**: **...**をクリックして、交差を編集、複製または削除したり、交差をリストの順序で上または下に移動します。次のトピックを参照してください:
 - [有効交差グループの評価順序の変更](#)
 - [有効交差グループの詳細の編集](#)

- 有効交差グループの複製
- 有効交差グループの削除

有効な交差のフィルタ

交差が有効になっているかどうか、定義が有効であるか無効であるか、変更時期、変更者など、特定の条件によって交差のリストをフィルタできます。フィルタすると、フィルタ条件を満たす交差のみが「**有効な交差**」ページに表示されます。

交差をフィルタするには:

1. 「**アプリケーション**」をクリックし、「**有効な交差**」をクリックします。
2.  をクリックして、フィルタ条件を指定します:
 - **使用可能:** 有効になっている(「はい」)または有効になっていない(「いいえ」)交差のみを表示するか、「すべて」を選択します。
 - **定義タイプ:** 「有効な交差」または「無効な交差」タイプの交差のみを表示するか、「すべて」を選択します。
 - **変更:** 特定の日時より前または後に変更された交差、あるいは日付または時間の範囲内に変更された交差のみを表示します。「後」、「前」または「次の値の間」を選択し、 をクリックして、日付と時刻の条件を指定します。
 - **変更者:** 選択したユーザーによって変更された交差のみを表示します。
3. 「**その他**」をクリックして、フィルタ条件をさらに絞り込みます:
 - **ディメンション**
 - **アンカー・ディメンション**
 - **選択されていないメンバーは有効です:** 「はい」、「いいえ」または「すべて」を選択します。
 - **その他のディメンションが必要:** 「はい」、「いいえ」または「すべて」を選択します。
4. 「**適用**」をクリックします。

交差のインポートとエクスポート

有効な交差のインポートとエクスポートについて

有効な交差のフィルタされたリストをリスト・ページからローカル・コンピュータ上の場所にエクスポートするか、それらをサーバーにエクスポートできます。リスト・ページでフィルタが定義されていない場合は、すべての交差がエクスポートされます。

交差をローカル・コンピュータ上の場所からアプリケーションにインポートするか、それらをサーバーからインポートするには、「インポート」アクションを使用します。インポートを実行する際に、インポート・ファイルに定義の破損の原因となる可能性があるならかの問題がないかどうかテストされます。たとえば、キューブが欠落している場合、アンカー・ディメンションが存在しない場合、サブルールが見つからない場合は、エラー・ファイルにエラーが記録されます。インポート・ジョブは、インポート・ファイルにエラーがない場合にのみ正常に完了します。

 **Note:**

サブルールは、ルールのコンテンツに関する情報(アンカー・ディメンションおよび非アンカー・ディメンションのメンバー選択または除外、各サブルールに適用される制限タイプなど)を提供します。

選択したエクスポート場所またはインポート場所に応じて、交差は Excel ファイル・フォーマット(XLSX)か zip ファイル・フォーマットでエクスポートまたはインポートされます。

 **Note:**

有効な交差をエクスポートするとき、ロックされた有効な交差ルールはエクスポートされません。有効な交差をインポートするとき、ロックされた有効な交差ルール(および FCCS_、OCX_、OEP_、OFS_、OPF_、OWP_、TRCS_などの接頭辞で始まる制限付きのルール)はインポートされません。

有効な交差のインポート・ファイル

Excel インポート・ファイルには、1 番目と 2 番目のシートに次の名前の 2 つのシートが必要です:

1. Rules
2. Sub Rules

Rules シートには、次の列見出しがあります:

- **名前**
- **位置**
- **説明**
- **使用可能**
- **定義タイプ**
- **アンカー・ディメンション名**
- **選択したメンバーへの アンカー・ディメンションの適用**
- **Dim1**
- **Dim1 必須**
- **Dim2**
- **Dim2 必須**
- **DimX**
- **DimX 必須**

Sub Rules シートには、次の列見出しがあります:

- **名前** - この列には、最初のシートのルールの名前を含める必要があります
- **アンカー・メンバー**

- アンカーの除外
- アンカーをすべて除外
- Dim1 メンバー
- Dim1 の除外
- ディメンション 1 をすべて除外
- Dim2 メンバー
- Dim2 の除外
- ディメンション 2 をすべて除外
- DimX メンバー
- DimX の除外
- DimX すべて除外

有効な交差のインポートとエクスポート

交差をエクスポートおよびインポートするには:

1. 「アプリケーション」をクリックし、「有効な交差」をクリックします。
2. 必要に応じて、リストにフィルタを適用します。有効な交差のフィルタを参照してください。
3. エクスポートするには、「アクション」、「エクスポート」の順にクリックし、エクスポート・ファイルのターゲットの場所を選択します:
 - **ローカル:** エクスポート・ファイルをローカル・コンピュータ上の場所に保存します。このオプションを選択する場合は、「エクスポート」をクリックした後、エクスポート・ファイルを保存する場所を指定します。
 - **送信ボックス:** エクスポート・ファイルを zip 形式でサーバーに保存するジョブを実行します。保存されたファイルは、即時にダウンロードするか、後でエクスポート・ジョブをスケジュールする際に使用できます。このオプションを選択する場合は、「保存してジョブを実行」をクリックします。送信ボックスからエクスポート・ファイルをダウンロードするには:
 - a. 「アプリケーション」をクリックし、「ジョブ」をクリックします。
 - b. 「最近のアクティビティ」で、エクスポート・ジョブをクリックします。
 - c. 「ジョブの詳細」ページで、 をクリックして、エクスポート・ファイルのダウンロード場所を選択します。ビジネス・プロセスの「受信ボックス/送信ボックス・エクスプローラ」からエクスポート・ファイルをダウンロードすることもできます。
4. エクスポート・ファイルを Excel で編集する場合、Excel ファイルには Rules と Sub Rules の 2 つのシートがあることに注意してください。
5. インポートするには、「アクション」、「インポート」の順にクリックし、インポート・ソース・ファイルの場所を選択します:
 - **ローカル:** 自分のコンピュータの場所からインポート・ファイルをロードします。「ソース・ファイル」で、「参照」をクリックして自分のコンピュータ上のインポート・ファイルを選択し、「インポート」をクリックします。

- **受信ボックス:** サーバーからインポート・ファイルを読みするジョブを実行します。インポート・ファイルは zip ファイル形式である必要があります。「ソース・ファイル」にファイルの名前を入力し、「保存してジョブを実行」をクリックして、「ジョブとして保存」ダイアログで「名前」と「エラー・ファイル」を指定します。エラー・ファイルでは、インポートされなかった交差に関する情報が提供されます。ビジネス・プロセスの受信ボックス/送信ボックス・エクスプローラからエラー・ファイルをダウンロードできます。

有効交差グループの評価順序の変更

交差グループの評価順序は、無効な結果セットをできるかぎり速く順序付けし、交差の評価全体の速度および効率性を向上させます。

評価順序についてさらに学習するには、[評価順序](#)を参照してください。

リスト内の有効交差グループの位置を変更するには:

1. 「アプリケーション」をクリックし、「有効な交差」をクリックします。
2. まだ選択されていない場合は、「セットアップ」タブをクリックします。

ノート:

レッドウッド・エクスペリエンスが有効になっている場合、「セットアップ」タブはページの下部にあります。

3. リスト内で交差グループの右側にある **...** をクリックします。
4. 「上へ移動」または「下へ移動」を選択します。

ヒント:

また、交差グループをドラッグして、リスト内で上下に移動することもできます。

有効交差グループの無効化および有効化

交差グループは、デフォルトで作成時に有効になります。交差グループを評価または使用しない場合、「有効な交差」ページでこれを無効化できます。交差グループを無効にすると、アプリケーションのフォーム、ビジネス・ルールまたは実行時プロンプトを表示する際に、そのグループの交差ルールは適用されなくなります。無効になっている交差グループを再度有効にすることもできます。

交差グループを無効化および有効化するには:

1. 「アプリケーション」をクリックし、「有効な交差」をクリックします。
2. まだ選択されていない場合は、「セットアップ」タブをクリックします。

 **ノート:**

レッドウッド・エクスペリエンスが有効になっている場合、「**セットアップ**」タブはページの下部にあります。

3. 交差リストの「使用可能」列で、無効または有効にする交差グループの横にあるチェック・マークをクリックします。

 **ノート:**

グループが有効化されている場合、チェック・マークは緑色です。

4. 有効になっている残りのグループが、交差リストに正しい評価順序でまだリストされていることを確認します。そうではない場合、順序内で上または下に移動します。

[有効交差グループの評価順序の変更](#)を参照してください。

有効交差グループの詳細の編集

交差グループの詳細を編集するには、メンバー・セレクトでディメンション・メンバーを操作します。また、交差ルールで除外を定義できます。

交差グループの詳細を編集するには:

1. 「**アプリケーション**」をクリックし、「**有効な交差**」をクリックします。
2. まだ選択されていない場合は、「**セットアップ**」タブをクリックします。

 **ノート:**

レッドウッド・エクスペリエンスが有効になっている場合、「**セットアップ**」タブはページの下部にあります。

3. 編集する交差グループの名前をクリックします。

 **ノート:**

ページ区切りバーがルール・ページの下部に表示されます。ルールが多数ある場合、ページ区切りバーを使用してルール・ページ間を簡単に移動したり、特定のページにジャンプできます。ページ区切りバーで選択できるページ・サイズ・オプション(1ページ当たりのルール数)は、「**25**」、「**50**」、「**100**」および「**すべて**」です。(300を超えるルールがある場合、「**すべて**」オプションを使用することはできません。)

- ディメンションの詳細を編集するには、ディメンションの横の  をクリックして、交差ルールに対して含める、除外するまたは削除するメンバーを選択します。
 - 「編集」をクリックして「メンバーの選択」ページを開き、交差ルールに含めるメンバー、代替変数および属性を選択します。メンバーまたは関数に入力することもできます。

メンバー・セレクタの使用を参照してください。
 - 「除外」または「すべて除外」をクリックして、ルールから除外するディメンション・メンバーを定義します：
 - * **除外:** このオプションを選択した場合、メンバーは ID を基準にして除外されます。指定したメンバー(基本または共有)のみが除外されます。
 - * **すべて除外:** このオプションを選択した場合、メンバーは名前を基準にして除外されます。基本メンバーを指定すると、基本メンバーとそのすべての共有メンバーが除外されます。共有メンバーを指定すると、このメンバー、その基本メンバー、およびこのメンバーの他のすべての共有メンバーが除外されます。
 - 「クリア」をクリックして、選択をクリアします。
 - 交差グループからディメンションを削除するには、ディメンションの横の  をクリックして、 をクリックします。
 - 交差グループからルールを削除するには、 をクリックします。
 - 交差グループにディメンションまたはルールを追加するには、「ルールの追加」または「ディメンションの追加」をクリックします。
4. 「保存して閉じる」をクリックします。

有効交差グループの複製

交差グループの作成を高速化するために、既存の交差グループを複製し、編集できます。

交差グループを複製するには:

1. 「アプリケーション」をクリックし、「有効な交差」をクリックします。
2. まだ選択されていない場合は、「セットアップ」タブをクリックします。
3. 複製する交差グループの右側にある  をクリックし、「複製」を選択します。

複製されたグループは、名前の末尾に"コピー"という語が付加されて、交差リストの最後に追加されます。
4. 交差グループを開いて編集します。
5. 必要に応じて、交差グループの順序を変更します。[有効交差グループの評価順序の変更](#)を参照してください。

有効交差グループの削除

グループを削除した後、交差グループの順序が変更されます。3つの交差グループがあり、順序内の2番目の交差グループが削除された場合、3番目の交差グループが2番目となります。

交差グループを削除するには:

1. 「**アプリケーション**」をクリックし、「**有効な交差**」をクリックします。
2. まだ選択されていない場合は、「**セットアップ**」タブをクリックします。

ノート:

レッドウッド・エクスペリエンスが有効になっている場合、「**セットアップ**」タブはページの下部にあります。

3. 削除する交差グループの右側にある **...** をクリックし、「**削除**」を選択します。
4. 必要に応じて、残りの交差の順序を変更します。[有効交差グループの評価順序の変更](#)を参照してください。

交差グループから交差ルールを削除するには、[有効交差グループの詳細の編集](#)を参照してください。

フォーム内の無効データの抑制

無効データの抑制により、無効データを含むアプリケーション・フォームの行または列が非表示になります。このオプションが選択されていない場合、アプリケーションでは無効データを含むセルを含んでいる行または列が表示されます。無効なデータを含むセルは読み取り専用です。

フォーム内の無効データを抑制するには:

1. ホーム・ページで「**ナビゲータ**」 をクリックし、「**作成および管理**」で、「**フォーム**」をクリックします。
2. フォームを選択し、、「**レイアウト**」の順にクリックします。
3. 「**グリッドのプロパティ**」の下の「**無効なデータの抑制 - 行**」または「**無効なデータの抑制 - 列**」、あるいはその両方を選択します。
4. 「**保存**」をクリックします。

無効なデータのクリア

次も参照:

- [無効なデータについて](#)
- [無効な交差レポートの操作](#)
- [無効な交差のデータのクリア](#)

無効なデータについて

データが交差にすでに存在する場合、有効な交差を追加または変更すると、既存のデータは無効になります。有効な交差ルールを作成するか、既存の有効な交差ルールを変更しても、無効な交差のデータはクリアされません。データが無効な交差に存在する状況を示す、有効な交差ルール・レポートを生成し、そのデータをクリアするかどうかを判断する必要があります。

 ノート:

履歴を残すため、または将来に向けたシナリオで使用するために、データが無効な交差に保持される場合があります。そのため、無効な交差のデータをクリアする必要はありません。

無効な交差レポートの操作

「有効な交差」ページの「レポート」タブで、無効な交差のデータを表示するレポートを表示できます。「無効な交差レポート」には、既存のレポート、そのステータスおよび前回の実行時刻が表示されます。

無効な交差レポートを操作するには:

1. 「アプリケーション」、「有効な交差」の順にクリックし、「レポート」タブをクリックします。

 ノート:

レッドウッド・エクスペリエンスが有効になっている場合、「レポート」タブはページの下部にあります。

2. 次のタスクを実行します:

- リストをリフレッシュするには、「リフレッシュ」をクリックします。
- レポートを作成するには、「作成」をクリックし、レポートに名前を付け、キューブを選択してレポートの範囲を選択し、レポートの実行時刻を選択します。レポートは、すぐに実行することも、ジョブとして保存して後で実行することもできます。レポートを実行せずに保存するには、「保存して閉じる」をクリックします。レポートを実行後に削除するには、「レポートの削除」をクリックします。

 ノート:

無効な交差レポートは、集約ストレージ・キューブではサポートされていません。集約ストレージ・キューブは、「キューブ」ドロップダウン・リストに表示されません。

- レポートを編集するには、、「編集」の順にクリックします。
- レポートをコピーするには、、「複製」の順にクリックします。
- レポートを実行するには、、「実行」の順にクリックします。
- レポートを削除するには、、「削除」の順にクリックします。

無効な交差のデータのクリア

データが不要な場合、適切な権限があるユーザーは無効なデータをクリアできます。無効なデータをクリアするには、レポートを実行し、「**無効な交差のクリア**」をクリックします。

有効交差の操作

次も参照:

- [アプリケーション・フォームでの有効交差の操作](#)
- [Calculation Manager ルールの実行時プロンプトでの有効交差の操作](#)

アプリケーション・フォームでの有効交差の操作

有効交差を使用すると、該当する有効交差グループの定義に従い無効な交差のデータ入力を防ぐことができます。フォーム内で影響を受けるセルは、読取り専用の標準、読取り専用の色コーディングで表示されます。無効な交差にカーソルを置くと、無効な交差として定義されているので、セルが読取り専用であることを示すツール・チップが表示されます。

有効交差グループは、フォームの視点およびページ軸に最初に適用されます。視点の交差がすべて無効の場合、警告メッセージが表示され、有効交差が選択されるまでフォームにはデータ・グリッドがレンダリングされません。

視点に有効交差がある場合、行と列は無効な交差でのデータ入力を制限するようにフィルタされます。フォームの「**無効なデータの抑制**」オプションが有効化されている場合、フォームでは無効な行または列(あるいはその両方)が必要に応じて抑制されます。

有効交差と無効交差で構成される行または列は、その交差がそれぞれ有効または無効として表示されます。無効な交差は、標準の読取り専用の網掛けで表示され、データ入力できません。

アプリケーション・ユーザーは、選択をクリアすることにより、フォームを閉じたり再度開いたりすることなく、視点をデフォルト(フィルタを解除したりリスト)にリセットできます。アプリケーション・ユーザーは、選択をクリアして、他のディメンションに対するより多くの選択を開くこともできます。有効なメンバーを各ディメンションに選択する必要があるため、ディメンションがクリアされた状態ではフォームをレンダリングできません。

メンバー・セレクトタでは、無効なメンバーは無効交差ルールのために表示されません。アプリケーション・ユーザーは、「**無効なメンバーの表示**」オプションを使用すると、メンバー・セレクトタで無効なメンバーを表示できます。無効なメンバーは表示されますが、選択できません。

ノート:

有効交差グループは、ディメンション・メンバーに対してアクセス権を付与しません。有効交差グループは、アプリケーション・ユーザーにすでに付与されているディメンション・メンバーの有効交差をさらに制限します。

表 13-8 有効交差が適用されている場合のフォームの動作

アクション	動作
フォームを開きます	フォームは、フォーム定義での定義どおりにメンバーが選択されてレンダリングされ、ディメンションに対するユーザーのアクセス権が順守され、現在の選択として最近使用された有効交差グループが適用されます。
視点ディメンションからメンバーを選択	このアプリケーションでは: <ul style="list-style-type: none"> ユーザーによる視点でのメンバーの選択を有効化します 視点ディメンション用のメンバー・セレクタで、ユーザーは、残っている有効交差のフィルタ済みリストから選択できます。このリストは、他の視点ディメンションに選択されたメンバーに基づいています ディメンションの選択時、有効交差グループに含まれているディメンションからメンバーを選択すると、有効交差グループに含まれているディメンションの残りのディメンション・メンバーが必要に応じて動的にフィルタされるため、視点ディメンション・メンバーが選択される順序を無視します 無効なメンバーをディメンション・リストで非表示にする、または視点で選択できないようにするオプションを提供します 選択をクリアすることにより、フォームを閉じたり再度開いたりすることなく、フィルタをすべて解除したリストに視点をリセットする機能を提供します <p>Web と Oracle Smart View for Office の両方のアド・ホック・フォームでは、有効交差グループに従って、ページまたは視点メンバーがフィルタされません。</p>
視点の選択内容に基づいてフォームをレンダリングするには、「実行」を選択します。フォームの視点の右矢印をクリックすることもできます。	フォームは、有効な視点交差に基づいて定義どおりにレンダリングされます。
データの入力および保存	フォーム・データが入力および保存されます。

Calculation Manager ルールの実行時プロンプトでの有効交差の操作

アプリケーションのコンテキスト内から起動された場合、有効交差グループは実行時プロンプトに適用されます。実行時プロンプトにより、有効交差グループの定義のとおり、ユーザーが無効な交差を選択できないようにします。

有効交差グループに応じたフィルタは、Oracle Smart View for Office フォームではサポートされていません。ただし、Web と Smart View の両方で実行時プロンプトの無効な交差を選択した場合、ルールは起動されません。

表 13-9 有効交差が適用されている場合の実行時プロンプトの動作

アクション	動作
Calculation Manager ルールの実行時プロンプトを起動します	このアプリケーションでは: <ul style="list-style-type: none"> 有効交差グループに基づいて、実行時プロンプト内で無効な交差をユーザーが選択できないようにします 実行時プロンプトに無効な交差がある場合、Calculation Manager ルールを実行できないようにします
有効交差を入力します	有効交差へは入力が許可されます。

セル・レベル・セキュリティの定義

フォーム内の特定のセル交差のデータ表示をユーザーとグループに対して制限するセキュリティ・ルールを定義します。

次も参照:

- [セル・レベル・セキュリティの理解](#)
- [セル・レベル・セキュリティ定義の作成](#)
- [セル・レベル・セキュリティ定義の表示](#)
- [セル・レベル・セキュリティ定義のフィルタ](#)
- [セル・レベル・セキュリティ定義のインポートとエクスポート](#)
- [セル・レベル・セキュリティのテスト](#)
- [セル・レベル・セキュリティ定義リストの並替え](#)

セル・レベル・セキュリティの理解

セル・レベル・セキュリティについて

セル・レベル・セキュリティを適用するサービス管理者は、標準のセキュリティによってユーザーが通常アクセスできるセルへのアクセスを拒否できます。したがって、セル・レベル・セキュリティは、既存のメンバー・セキュリティの例外として定義されます。たとえば、部門マネージャは、自分の部門についてはすべての勘定科目にアクセスする必要がありますが、他のすべての部門については特定の勘定科目のみにアクセスする必要があります。通常メタデータ・セキュリティでは、マネージャはすべての部門のすべての勘定科目にアクセスできますが、セル・レベル・セキュリティを使用すると、サービス管理者はすべての勘定科目とマネージャの部門との交差、および他のすべての部門の特定の勘定科目のみを管理できます。

セル・レベル・セキュリティでは、有効な交差ルールと同様のルールを使用して、セルが表示されている場所(フォーム、実行時プロンプト、**Smart View**、レポート、ダッシュボード、インフォレットなど)で、特定のセル交差を表示しているユーザーの読取りまたは書き込みアクセスを拒否します。セル・レベル・セキュリティ・ルールが適用されると、読取りアクセス権を持つユーザーは、セルのデータ値を参照できますが、セルは編集できません。ユーザーがセルへの読取りアクセスを拒否されている場合、セルに表示される値は`#noaccess`です。

サービス管理者は、セル・レベル・セキュリティ・ルールを定義して、任意のユーザーまたはグループに割り当てることができます。セル・レベル・セキュリティはサービス管理者には影響しません。

アンカーおよび非アンカー・ディメンション

セル・レベル・セキュリティ定義では、アンカー・ディメンションと非アンカー・ディメンションを使用します:

- セル・レベル・セキュリティ定義で使用されるキューブでは、アンカー・ディメンションは常に必須ディメンションです。
- 非アンカー・ディメンションが必須である場合、または必須でない場合:

- 非アンカー・ディメンションが必須である場合、そのディメンションを使用しないキューブでは、そのディメンションが必須としてタグ付けされているセル・レベル・セキュリティ定義は無視されます。
- 非アンカー・ディメンションが必須でない場合、そのディメンションを使用しないキューブでは、そのディメンションが必須でないとして含まれているセル・レベル・セキュリティ定義も評価され、キューブで使用されている定義内の他のディメンションの定義が評価されます。
- デフォルトでは、非アンカー・ディメンションは必須ではありません。非アンカー・ディメンションを必須にするには、非アンカー・ディメンションの横の  をクリックし、「必須」をクリックします。
- デフォルトでは、ルールで指定されていないアンカー・ディメンション・メンバーがセキュリティ定義に含まれていますが、アンカー・ディメンションの横にある  をクリックし、次に「選択したメンバーにのみ適用」をクリックすることで、このオプションをクリアできます。

セル・レベル・セキュリティ定義の作成

セル・レベル・セキュリティ定義を作成するには:

1. 「アプリケーション」、「セル・レベル・セキュリティ」の順にクリックします。
2. 定義を作成します:
 - a. 「作成」をクリックします。
 - b. 定義の名前と説明を入力します。
 - c. 「有効」チェック・ボックスは、デフォルトで選択されています。定義を無効にするには、「有効」チェック・ボックスの選択を解除します。セル・レベル・セキュリティ定義ページで定義を直接有効または無効にすることもできます。
 - d. キューブ固有のセキュリティを定義するには、「キューブ」をクリックし、キューブのリストから選択するか、「すべて」を選択します。
 - e. アンカー・ディメンションは必須です。アンカー・ディメンションを選択するには、「アンカー・ディメンションの選択」をクリックします。アンカー・ディメンションおよび非アンカー・ディメンションの詳細は、[セル・レベル・セキュリティの理解](#)を参照してください。
 - f. **オプション:** デフォルトでは、ルールで指定されていないアンカー・ディメンション・メンバーがセキュリティ定義に含まれています。このオプションをクリアするには、アンカー・ディメンションの横の  をクリックし、「選択したメンバーにのみ適用」をクリックします。
 - g. 追加のディメンション(非アンカー・ディメンションと呼ばれます)を選択するには、「ディメンションの追加」をクリックします。
 - h. **オプション:** デフォルトでは、非アンカー・ディメンションは必須ではありません。非アンカー・ディメンションを必須にするには、非アンカー・ディメンションの横の  をクリックし、「必須」をクリックします。
3. セル・レベル・セキュリティ・ルールを定義します:
 - a. 「ルールの追加」をクリックします。

- b. 「ユーザー、グループ」列で、 をクリックして、セル・レベル・セキュリティ・ルールに含めるユーザーとグループを見つけます。
- c. 「制限」に、「読取り不可」(デフォルト)または「書込み不可」を選択します。「読取り不可」は最も厳しい制限であるため、デフォルトのオプションです。ユーザーがセルへの読取りアクセスを拒否されている場合、セルに表示される値は#noaccess です。「書込み不可」アクセス権を持つユーザーは、セルのデータ値を参照できますが、セルは編集できません。
- d. 新しいルールのディメンションの横にある  をクリックします:
 - 「編集」をクリックして **メンバーの選択** ページを開き、セル・レベル・セキュリティ・ルールに含めるメンバー、代替変数および属性を選択します。
 - 「除外」または「すべて除外」をクリックして、ルールから除外するディメンション・メンバーを定義します:
 - **除外:** このオプションを選択した場合、メンバーは ID を基準にして除外されます。指定したメンバー(基本または共有)のみが除外されます。
 - **すべて除外:** このオプションを選択した場合、メンバーは名前を基準にして除外されます。基本メンバーを指定すると、基本メンバーとそのすべての共有メンバーが除外されます。共有メンバーを指定すると、このメンバー、その基本メンバー、およびこのメンバーの他のすべての共有メンバーが除外されます。
 - 「クリア」をクリックして、選択をクリアします。

ルールを削除するには、 をクリックします。

4. 「保存」をクリックします。

新しいセル・レベル・セキュリティ定義がリストの最後に追加されます。定義は、リストに表示されている順に評価されます。定義リストを並べ替える手順は、[セル・レベル・セキュリティ定義リストの並替え](#)を参照してください。

定義を作成した後、フォームで定義をテストして、ユーザーのパースペクティブからフォームがどのように表示されるのかを確認できます。[セル・レベル・セキュリティのテスト](#)を参照してください。

セル・レベル・セキュリティ定義の表示

セル・レベル・セキュリティ定義を表示するには:

1. 「アプリケーション」、「セル・レベル・セキュリティ」の順にクリックします。
2. リスト全体で特定の定義を検索するには、「検索」ボックスに検索条件を入力し、 をクリックして、検索条件を満たす定義のみを表示します。
3. フィルタ条件を満たす定義のみが表示されるようにリストをフィルタするには、次のフィルタ・オプションを指定します:
 -  : クリックすると、「フィルタ」ページが表示され、フィルタ・オプションの堅牢なリストから選択できます。フィルタ・オプションとその説明の完全なリストは、[セル・レベル・セキュリティ定義のフィルタ](#)を参照してください。

- : クリックすると、「有効な割当」、「使用可能」および「制限」のすべてのフィルタがクリアされます。
 - **有効な割当**: 特定のユーザーまたはグループに影響する定義のみを表示するようにリストをフィルタします。
 - **使用可能**: 有効になっている(「はい」)または有効になっていない(「いいえ」)定義のみを表示するようにリストをフィルタするか、「すべて」を選択します。
 - **制限**: 「読取り不可」または「書込み不可」制限が割り当てられている定義のみを表示するようにリストをフィルタするか、「すべて」を選択します。
4. **セル・レベル・セキュリティ定義** ページで、次のタスクを実行することもできます:
 - 「アクション」メニュー: 定義のインポートおよびエクスポートについては、[セル・レベル・セキュリティ定義のインポートとエクスポート](#)を参照してください。
 - **テスト**: [セル・レベル・セキュリティのテスト](#)を参照してください。
 - **作成**: [セル・レベル・セキュリティ定義の作成](#)を参照してください。
 - **リフレッシュ**: クリックして定義リストをリフレッシュします。
 5. 定義ページの各リストに対して、次のタスクを実行できます:
 - 「使用可能」列: 定義が有効かどうかを示します。定義の横にあるチェック・マークをクリックして、定義を無効または有効にします。緑色のチェック・マークは、定義が使用可能であることを示します。
 - 「アクション」列:  をクリックし、定義を編集、複製または削除したり、定義をリストの順序で上または下に移動します。

セル・レベル・セキュリティ定義のフィルタ

セル・レベル・セキュリティ定義のリストは、キューブ、制限、日付など、特定の条件でフィルタできます。フィルタすると、フィルタ条件を満たす定義のみが**セル・レベル・セキュリティ定義**ページに表示されます。

セル・レベル・セキュリティ定義をフィルタするには:

1. 「アプリケーション」、「セル・レベル・セキュリティ」の順にクリックします。
2.  をクリックして、フィルタ条件を指定します:
 - **キューブ**: 選択したキューブ内の定義のみを表示するか、「すべて」を選択します。
 - **使用可能**: 有効になっている(「はい」)または有効になっていない(「いいえ」)定義のみを表示するか、「すべて」を選択します。
 - **制限**: 「読取り不可」または「書込み不可」制限が割り当てられている定義のみを表示するか、「すべて」を選択します。
 - **変更**: 特定の日時より前または後に変更された定義、あるいは日付または時間の範囲内に変更された定義のみを表示します。「後」、「前」または「次の値の間」を選択し、 をクリックして日時の条件を指定します。
 - **変更者**: 選択したユーザーによって変更された定義のみを表示します。
 - **有効な割当**: 選択したユーザーまたはグループに影響する定義のみを表示します。
3. 「その他」をクリックして、フィルタ条件をさらに絞り込みます:

- **ディメンション**
 - **アンカー・ディメンション**
 - **アンカー・ディメンション: 選択したメンバーにのみ適用:** 「はい」、「いいえ」または「すべて」を選択します。
 - **その他のディメンションが必要:** 「はい」、「いいえ」または「すべて」を選択します。
4. 「適用」をクリックします。

セル・レベル・セキュリティ定義のインポートとエクスポート

セル・レベル・セキュリティ定義のインポートとエクスポートについて

セル・レベル・セキュリティ定義のフィルタされたリストをリスト・ページからローカル・コンピュータの場所にエクスポートするか、サーバーにエクスポートできます。リスト・ページでフィルタが定義されていない場合は、すべてのセル・レベル・セキュリティ定義がエクスポートされます。

インポート・アクションを使用して、セル・レベル・セキュリティ定義をローカル・コンピュータ上の場所からアプリケーションにインポートするか、サーバーからインポートします。インポートを実行すると、定義に違反する内容がないかについてインポート・ファイルがテストされます。たとえば、キューブが欠落している場合、アンカー・ディメンションがない場合、またはサブルールが見つからない場合は、エラー・ファイルにエラーが記録されます。インポート・ジョブは、インポート・ファイルにエラーがない場合にのみ正常に完了します。

Note:

サブルールは、ルールのコンテンツに関する情報(ルールの各メンバー(サブルール)のユーザー割当て、アンカー・ディメンションおよび非アンカー・ディメンションのメンバー選択または除外、各サブルールに適用される制限タイプなど)を提供します。

選択したエクスポートまたはインポートの場所に依じて、アプリケーション定義は Excel ファイル形式(XLSX)または zip ファイル形式のいずれかでエクスポートまたはインポートされます。

セル・レベル・セキュリティのインポート・ファイル

Excel インポート・ファイルには、1 番目と 2 番目のシートに次の名前の 2 つのシートが必要です:

1. Rules
2. Sub Rules

Rules シートには、次の列見出しがあります:

- **名前**
- **位置**

- 説明
- 有効
- **有効なキューブ** - この列には、All またはカンマ区切りのキューブ名のリスト(Plan1, Plan2 など)のいずれかが含まれます
- **アンカー・ディメンション名**
- **選択されていないメンバーへのアンカー・ディメンションの適用**
- Dim1
- Dim1 必須
- Dim2
- Dim2 必須
- DimX
- DimX 必須

Sub Rules シートには、次の列見出しが必要です:

- **名前** - この列には、1 番目のシートのルールの名前が含まれている必要があります
- **ユーザー**
- **ユーザー・グループ**
- **制限** - この列には「読取り不可」または「書込み不可」が含まれます
- **アンカー・メンバー**
- **アンカーの除外**
- **アンカーをすべて除外**
- **Dim1 メンバー**
- **Dim1 の除外**
- **ディメンション 1 をすべて除外**
- **Dim2 メンバー**
- **Dim2 の除外**
- **DimX メンバー**
- **DimX の除外**
- **DimX すべて除外**

セル・レベル・セキュリティ定義のエクスポートおよびインポート

セル・レベル・セキュリティ定義をエクスポートおよびインポートするには:

1. 「アプリケーション」、「セル・レベル・セキュリティ」の順にクリックします。
2. 必要に応じて、リストにフィルタを適用します。[セル・レベル・セキュリティ定義のフィルタ](#)を参照してください。
3. エクスポートするには、「アクション」、「エクスポート」の順にクリックし、エクスポート・ファイルのターゲットの場所を選択します:

- **ローカル:** エクスポート・ファイルをローカル・コンピュータ上の場所に保存します。このオプションを選択した場合は、「**エクスポート**」をクリックし、XLSX エクスポート・ファイルを保存する場所を指定します。
 - **送信ボックス:** エクスポート・ファイルを zip 形式でサーバーに保存するジョブを実行します。保存されたファイルは、即時にダウンロードするか、後でエクスポート・ジョブをスケジュールする際に使用できます。このオプションを選択した場合は、「**保存してジョブを実行**」をクリックします。

送信ボックスからエクスポート・ファイルをダウンロードするには:

 - a. 「**アプリケーション**」をクリックし、「**ジョブ**」をクリックします。
 - b. 「**最近のアクティビティ**」で、**CLS のエクスポート・ジョブ**をクリックします。
 - c. **ジョブの詳細**ページで、 をクリックしてセル・レベル・セキュリティのエクスポート・ファイルのダウンロード場所を選択します。ビジネス・プロセスの「受信ボックス/送信ボックス・エクスプローラ」からエクスポート・ファイルをダウンロードすることもできます。
4. Excel でエクスポート・ファイルを編集する場合は、Excel ファイルに Rules と Sub Rules の 2 つのシートがあることに注意してください。
 5. インポートするには、「**アクション**」、「**インポート**」の順にクリックし、インポート・ソース・ファイルの場所を選択します:
 - **ローカル:** 自分のコンピュータの場所からインポート・ファイルをロードします。「**ソース・ファイル**」の「**参照**」をクリックしてコンピュータ上のインポート・ファイルを選択し、「**インポート**」をクリックします。
 - **受信ボックス:** サーバーからインポート・ファイルをロードするジョブを実行します。インポート・ファイルは zip ファイル形式である必要があります。「**ソース・ファイル**」にファイル名を入力して「**保存してジョブを実行**」をクリックし、「**ジョブとして保存**」ダイアログで「**名前**」および「**エラー・ファイル**」を指定します。エラー・ファイルにより、インポートされなかった定義に関する情報が提供されます。ビジネス・プロセスの「受信ボックス/送信ボックス・エクスプローラ」からエラー・ファイルをダウンロードできます。

セル・レベル・セキュリティのテスト

セル・レベル・セキュリティを定義して有効にした後は、影響を受けるユーザーがフォームを表示したときに表示される内容を確認するためにテストできます。テストにより、許可されているセルの値のみがユーザーに表示され、それより多くのセル値が表示されないことが確認されます。定義をテストするには、定義を有効にする必要があります。

セル・レベル・セキュリティをテストするには:

1. 「**アプリケーション**」、「**セル・レベル・セキュリティ**」の順にクリックします。
2. テストする定義を有効にします。
3. 「**テスト**」をクリックし、テストするフォームを選択します。
4. 「**ユーザー名の選択または入力**」テキスト・ボックスで、ユーザー名を指定するか、 をクリックしてユーザーを選択し、「**OK**」をクリックします。

 **Note:**

一度にテストできるユーザーは 1 人のみです。

フォームには、各セルへのユーザー・アクセスが「読取り」、「書込み」または「なし」と表示されます。

セル・レベル・セキュリティ定義リストの並替え

セル・レベル・セキュリティ定義は、たとえば、リストの最初のセル・レベル・セキュリティ定義が評価され、次に 2 番目の定義が評価されるなど、定義リストに表示されている順序で評価されます。

リストのセル・レベル・セキュリティ定義の位置を変更するには:

1. 「アプリケーション」、「セル・レベル・セキュリティ」の順にクリックします。
2. セル・レベル・セキュリティ定義の右側で、**...**をクリックします。
3. 「上へ移動」または「下へ移動」を選択します。

 **Tip:**

セル・レベル・セキュリティ定義をドラッグして、リスト内で上または下に移動することもできます。

14

データ・マップの定義とファイルベース統合の作成

データ統合は、Oracle Enterprise Performance Management Cloud での統合プロセスの実行の基礎となるメカニズムです。ファイルベース統合と直接統合のソースの定義、ソース・データを必要なターゲット・フォーマットに変換するためのマッピング・ルールの作成、および定期的なデータ・ロード・プロセスの実行と管理が可能になります。ファイルベース統合を作成する方法を学習するには、*Oracle Enterprise Performance Management Cloud データ統合の管理*のファイルベース統合の作成を参照してください。

データ、コメント、添付およびサポート詳細をソース・キューブとスマート・リストからターゲット・レポート・キューブに移動して、データを連結するためのデータ・マップを定義します。データ・マップを定義する方法を学習するには、*Oracle Enterprise Performance Management Cloud データ統合の管理*のデータ・マップの定義を参照してください。

ジョブの管理

一般的な管理タスクを実行するジョブをスケジュールして、作業負荷を軽減します。ジョブをすぐに開始することも、後で定期的に行うようジョブをスケジュールすることもできます。

次も参照:

- [ジョブで時間を節約する方法](#)
- [保留中のジョブおよび最近のアクティビティの表示](#)
- [ジョブのスケジュール](#)
- [ジョブの編集および取消し](#)
- [ジョブの複製](#)
- [ルール・ジョブおよびルール・セット・ジョブの取消し](#)
- [送信ボックスからのエクスポート・ファイルのダウンロード](#)

ジョブで時間を節約する方法

ジョブはデータのエクスポートやデータベースのリフレッシュなどのアクションで、ただちに開始することも、後で周期的に行うようスケジュールすることもできます。作業負荷を軽減するために、次のような一般的な管理タスクを実行するジョブを定義します。

- メタデータとデータのインポートおよびエクスポート
- データベースのリフレッシュ
- キューブのマッピング

保留中のジョブおよび最近のアクティビティの表示

ジョブ・コンソールでジョブ・リストを表示するには:

1. 「**アプリケーション**」をクリックし、「**ジョブ**」をクリックします。
2. 次のタスクのいずれかを行います:
 - 日付やジョブ・タイプなどの条件でジョブおよびアクティビティをフィルタするには、 をクリックします
 - ジョブを名前で検索するには、「**検索**」にテキストを入力し、 をクリックします。
 - ジョブの詳細を表示するには、ジョブをクリックします。

 ノート:

- アプリケーションのアップグレード時にアプリケーションが自動的にリフレッシュされます。アプリケーションのアップグレード中にリフレッシュ・エラーが発生した場合は、「ジョブ」ページでエラーを表示できます。これらのエラーは、「**コンテンツ更新**」というジョブで取得されません。
- 90 日より古いジョブはパージされます。

ジョブのスケジュール

ジョブをスケジュールするには:

1. 「アプリケーション」、「ジョブ」、「ジョブのスケジュール」の順にクリックします。
2. 次を指定します。
 - 作成するジョブのタイプ。ジョブのリストおよび説明については、[ジョブ・タイプ](#)を参照してください。
 - いつジョブを実行するか。ジョブは、すぐに実行または後で実行するようにスケジュールできます。ジョブを後で実行する場合は、[後で実行するジョブのスケジュール](#)を参照してください。
3. 「次」をクリックします。
4. ジョブ・リストからジョブを選択します。ジョブ・タイプに応じて、追加のオプションおよび考慮事項がある可能性があります。[ジョブ・タイプ](#)を参照してください。

 ノート:

- 一度に最大 5 つのインポートまたはエクスポート・ジョブを実行できます。
- エクスポート・ジョブの場合は、各ジョブに対して一意の出力ファイル名を指定できます。ジョブ・リストのページで、選択したジョブの横にある  をクリックし、zip 拡張子を使用して出力ファイル名を指定します。指定する一意のファイル名によって、デフォルトのエクスポート・ファイル名がジョブの実行時に上書きされます。
- スケジュール済ジョブによって自動バックアップが失敗するのを防ぐために、EPM Cloud では、日次メンテナンス・プロセスの実行中に特定のスケジュール済ジョブを開始することが禁止されています。システムによってジョブの開始が妨げられた場合、「ジョブの詳細」に理由が示されます。ジョブ・コンソールの電子メール通知を有効にしている場合は、ジョブが開始されなかったときに電子メール通知を受け取ります。日次メンテナンス・プロセス中に開始するようにスケジュールされたジョブがある場合は、日次メンテナンス・ウィンドウ外で開始するようにジョブを再スケジュールすることをお勧めします。[日次メンテナンス・プロセス開始時間の設定](#)を参照してください。

5. 「次」をクリックします。

6. 選択内容を確認します。問題なければ、「終了」をクリックします。

スケジュールしたジョブを編集または取消するには、[ジョブの編集および取消](#)を参照してください。

ジョブ・タイプ

表 15-1 ジョブ・タイプ

ジョブ・タイプ	説明
ルール	<p>選択したルールを実行します。 次の点に注意してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ルール・リストは、キューブとルール・タイプを基準にフィルタできます。 続行する前に、実行するルールの横にあるチェック・マークをクリックする必要があります。 実行時プロンプトがあるルール・ジョブの場合は、ルールの横にあるチェック・マークをクリックすると、実行時プロンプトのパラメータが表示されます。ジョブ・スケジューラでルールを実行する際の実行時プロンプト値を設定し、「OK」をクリックします。 非表示の実行時プロンプトでは、Calculation Manager で設計時に設定されたデフォルト値が取得されます。 <p>ルールについてを参照してください。</p>
データのインポート*	<p>ジョブとして保存されたデータ・インポートを実行します。 データのインポートを参照してください。</p>
メタデータのインポート*	<p>ジョブとして保存されたメタデータ・インポートを実行します。 メタデータのインポートを参照してください。</p>

表 15-1 (続き) ジョブ・タイプ

ジョブ・タイプ	説明
セル・レベル・セキュリティ定義のインポート	<p>ジョブとして保存されたセル・レベル・セキュリティ定義をインポートします。</p> <p>セル・レベル・セキュリティ定義のインポートとエクスポートを参照してください。</p>
有効な交差のインポート	<p>ジョブとして保存された有効な交差をインポートします。</p> <p>交差のインポートとエクスポートを参照してください。</p>
データのエクスポート*	<p>ジョブとして保存されたデータ・エクスポートを実行します。</p> <p>各「データのエクスポート」ジョブに対して一意の出力ファイル名を指定できます。ジョブ・リストから、選択したジョブの横にある  をクリックし、zip 拡張子を使用して「出力ファイル名」を指定します。エクスポート・ファイル名は「確認」ページで確認できます。一意のファイル名によって、デフォルトのエクスポート・ファイル名がジョブの実行時に上書きされます。</p> <p>データのエクスポートを参照してください。</p>
<div style="border: 1px solid #0070c0; padding: 10px; background-color: #e6f2ff;"> <p> ノート:</p> <p>データのエクスポート・ジョブ定義のドライバと列のディメンションは密である必要があります。</p> </div>	
メタデータのエクスポート*	<p>ジョブとして保存されたメタデータ・エクスポートを実行します。</p> <p>各「メタデータのエクスポート」ジョブに対して一意の出力ファイル名を指定できます。ジョブ・リストから、選択したジョブの横にある  をクリックし、zip 拡張子を使用して「出力ファイル名」を指定します。エクスポート・ファイル名は「確認」ページで確認できます。一意のファイル名によって、デフォルトのエクスポート・ファイル名がジョブの実行時に上書きされます。</p> <p>メタデータのエクスポートを参照してください。</p>
セル・レベル・セキュリティ定義のエクスポート	<p>ジョブとして保存されたセル・レベル・セキュリティ定義をエクスポートします。</p> <p>セル・レベル・セキュリティ定義のインポートとエクスポートを参照してください。</p>
有効な交差のエクスポート	<p>ジョブとして保存された有効な交差をエクスポートします。</p> <p>交差のインポートとエクスポートを参照してください。</p>
データベースのリフレッシュ*	<p>アプリケーション・データベースをリフレッシュします。</p> <p>アプリケーション・データベースのリフレッシュを参照してください。</p>
データ・マップ	<p>データのマッピング操作を実行します。</p> <p><i>Oracle Enterprise Performance Management Cloud</i> データ統合の管理のデータ・マップの定義を参照してください。</p>
無効な交差レポート	<p>データが無効な交差に存在する場所を示すレポートを実行します。</p> <p>無効な交差レポートの操作を参照してください。</p>
キューブのクリア*	<p>キューブのクリア操作を実行します。</p> <p>キューブのクリア・ジョブの作成を参照してください。</p>

表 15-1 (続き) ジョブ・タイプ

ジョブ・タイプ	説明
キューブの再構築*	<p>ブロック・ストレージ・キューブの再構築をすべて実行して、断片化を消去または削減します。また、空のブロックが削除されます。このジョブを実行しても、変更内容はビジネス・プロセスから Essbase にプッシュされません。</p> <p>キューブのパフォーマンスの向上を参照してください。</p>
アウトラインの圧縮*	<p>集約ストレージ・キューブのアウトライン・ファイルを圧縮します。圧縮は、アウトライン・ファイルを最適なサイズに保つのに役立ちます。アウトラインを圧縮しても、データはクリアされません。このジョブを実行しても、変更内容はビジネス・プロセスから Essbase にプッシュされません。</p> <p>キューブのパフォーマンスの向上を参照してください。</p>
データ・スライスのマージ*	<p>集約ストレージ・キューブの増分データ・スライスをマージします。スライスが少なくなると、キューブのパフォーマンスは向上します。メイン・データベース・スライスにすべての増分データ・スライスをマージしたり、メイン・データベース・スライスを変更しないまま単一のデータ・スライスにすべての増分データ・スライスをマージしたりできます。オプションで、値がゼロのセルを削除することも可能です。</p> <p>キューブのパフォーマンスの向上を参照してください。</p>
集約の最適化*	<p>集約ストレージ・キューブで収集された問合せトラッキング情報に基づいて、最適化したビューを生成します。</p> <p>オプションの追加詳細は、キューブのパフォーマンスの向上を参照してください。</p>
管理モード	<p>ビジネス・プロセスのログイン・レベルを変更します。「管理者」を選択すると、ジョブの実行後にすべての非管理者ユーザーがアプリケーションからログオフされます。すべてのユーザーがアプリケーションにアクセスできるように復元するには、「すべてのユーザー」を選択します。</p> <p>指定可能なアプリケーションおよびシステム設定を参照してください。</p>
バースティング定義の実行	<p>レポートのバースティング・ジョブを実行します</p> <p>次世代のレポートのレポート・ソリューションを使用している場合、バースティング機能を使用すると、1つのデータ・ソースに対して、単一ディメンションの複数メンバーの単一レポートまたはブックを実行し、メンバーごとに PDF 出力を発行できます。</p> <p><i>Oracle Enterprise Performance Management Cloud</i> のレポートでの設計のバースティングの操作を参照してください。</p>
統合パイプライン*	<p>パイプライン定義を実行します。</p> <p>このジョブは、データ統合ユーザー・インタフェースでパイプラインに定義されたパラメータおよび変数に基づいたパイプラインの実行をサポートします。例: 「開始期間」および「インポート・モード」。</p> <p>ジョブ・パラメータおよび変数の詳細は、次のトピックを参照してください:</p> <ul style="list-style-type: none"> • <i>Oracle Enterprise Performance Management Cloud データ統合の管理</i>の統合ジョブ・タイプの使用 • <i>Enterprise Performance Management Cloud REST API</i> のパイプラインの実行 <p>パイプライン定義の作成の詳細は、<i>Oracle Enterprise Performance Management Cloud データ統合の管理</i>の統合パイプラインの使用を参照してください。</p>

*日次メンテナンス・プロセスの実行中に開始するようにスケジュールされている場合、このジョブは開始されません。日次メンテナンス・ウィンドウ外で開始するようにこのジョブを再スケジュールすることをお勧めします。[日次メンテナンス・プロセス開始時間の設定](#)を参照してください。

後で実行するジョブのスケジュール

表 15-2 ジョブのスケジュール・オプション

オプション	説明
スケジュール開始日	開始日時をタイム・ゾーンを含めて選択します。
名前	スケジュール済ジョブの名前(MyDailyCubeRefresh など)を指定します。指定した名前が、ジョブ名(次の画面で選択する)とともに、たとえば MyDailyCubeRefresh : Refresh Database のように表示されます。

表 15-2 (続き) ジョブのスケジュール・オプション

オプション	説明
繰返しパターン	<p>ジョブの実行頻度を指定します:</p> <ul style="list-style-type: none"> 時間ごと: 時間ごとのジョブは、「スケジュール開始日」フィールドと「時間」フィールドに設定した値に基づくタイムテーブルに従って実行されます。「時間ごと」ジョブのスケジュールは毎日午前 0 時に再スタートし、繰返しジョブは「時間」フィールドで選択した値に従い、午前 0 時の 1 時間後、2 時間後、3 時間後(というように最大 12 時間後)にスタートします。 <p>たとえば、「時間」フィールドに値の「5」を指定すると、ジョブの開始可能な時間は、毎日午前 12:00、午前 5:00、午前 10:00、午後 3:00、および午後 8:00 となります。スケジュールされたジョブの開始時間が午後 12:48 で、「時間ごと」の繰返しを 5 時間と指定した場合、そのジョブは午後 3:48 に開始されます。これは 5 時間の繰返しジョブが開始される 12:48 より後の最初のスケジュール時間です。その後、ジョブは午後 8:48 に、それから午前 12:48、午前 5:48、午前 10:48 に実行されます。</p> <p>デフォルトの繰返しが 1 時間の場合、ジョブは指定した開始時刻に実行され、終了の日時まで 1 時間ごとに実行され続けます。たとえば、スケジュールの開始時刻が 12:48 の場合、ジョブは 12:48、1:48、2:48、3:48 というように実行されます。</p> <p>「時間」フィールドで選択された値に基づく時間のスケジュールについては、時間ごとのジョブのスケジュールを参照してください。</p> 分単位:「頻度」を 15 分または 30 分に設定します。ジョブは 15 分または 30 分後に開始され、終了の日時まで指定した間隔で実行され続けます。たとえば、15 分ごとに実行するようジョブを設定し、開始時刻が 3:15 の場合、ジョブは 3:30 に始まり、その次が 3:45 というように実行されます。ジョブの実行をスケジュールできる最小の単位は 15 分です。 1 回実行: ジョブは開始日時に 1 回実行されます。 年次: ジョブは開始日時に実行され、その後引き続き終了日まで毎年実行されます。 月次: ジョブは開始日時に実行され、その後引き続き終了日まで毎月実行されます。 週次: ジョブは開始日時に実行され、引き続き終了日まで毎週実行されます。 毎日: ジョブは開始日時に実行され、引き続き終了日まで毎日実行されます。
終了日	ジョブが繰り返される場合は、終了する日時を選択します。

時間ごとのジョブのスケジュール

時間ごとのジョブは、「スケジュール開始日」フィールドと「時間」フィールドに設定した値に基づくタイムテーブルに従って実行されます。「時間ごと」ジョブのスケジュールは毎日午前 0 時に再スタートし、繰返しジョブは「時間」フィールドで選択した値に従い、午前 0 時の 1 時間後、2 時間後、3 時間後(というように最大 12 時間後)にスタートします。

When do you want to run this job?

Run Now

Schedule starting from

11/18/19 12:48 PM

(UTC-05:00) New York - Eastern Time

How often do you want to run this job?

Name Hourly Rules

Recurrence pattern Hourly

Hour 5 hour

End Date 11/19/19 12:48 PM

たとえば、「時間」フィールドに値の「5」を指定すると、ジョブの実行時間は、毎日午前 12 時、午前 5 時、午前 10 時、午後 3 時、および午後 8 時となります。開始時間はスケジュールに基づいたシステムの開始時分を示し、終了時間はシステムの停止時分を示します。そうすると、開始時間が 11/18 の午後 12:48 の場合、その日(11/18)の午前 12:48、午前 5:48 および午前 10:48 時はすでに過ぎており、次に実行可能なタイムスロットは午後 3:48 となり、この時間にスケジュール済ジョブが最初に実行されます。その後は、11/18 の午後 8:48 に実行されます。ただし、11/19 には最初から再開され、午前 12:48、午前 5:48、午前 10:48 のように、指定されたシステムの終了時間(この場合は 11/19 の午後 12:48)まで実行されます。

 ノート:

ジョブが 2 日にまたがる場合、そのジョブは次の日の午前 0 時に実行され、繰り返しパターンが再セットされます。

時間ごとのジョブをスケジュールする方法については、[ジョブのスケジュール](#)を参照してください。

表 15-3 時間ごとのジョブのタイムテーブル

時間ごとの繰り返し	タイムテーブル
1 (デフォルト)	午前: 12:00、1:00、2:00、3:00、4:00、5:00、6:00、7:00、8:00、9:00、10:00、11:00 午後: 12:00、1:00、2:00、3:00、4:00、5:00、6:00、7:00、8:00、9:00、10:00、11:00 たとえば、スケジュールされた開始時間が午後 12:48 で、時間ごとの繰り返しが 1 時間に設定されている場合、ジョブはまず午後 12:48 に実行され、それから午後 1:48、午後 2:48、午後 3:48 というように続きます。
2	午前: 12:00、2:00、4:00、6:00、8:00、10:00 午後: 12:00、2:00、4:00、6:00、8:00、10:00 たとえば、スケジュールされた開始時間が午後 12:48 で、時間ごとの繰り返しが 2 時間に設定されている場合、ジョブはまず午後 12:48 に実行され、それから午後 2:48、午後 4:48、午後 6:48 というように続きます。

表 15-3 (続き) 時間ごとのジョブのタイムテーブル

時間ごとの繰返し	タイムテーブル
3	<p>午前: 12:00、3:00、6:00、9:00 午後: 12:00、3:00、6:00、9:00</p> <p>たとえば、スケジュールされた開始時間が午後 12:48 で、時間ごとの繰返しが 3 時間に設定されている場合、ジョブはまず午後 12:48 に実行され、それから午後 3:48、午後 6:48、午後 9:48、午前 12:48、午前 3:48 というように続きます。</p>
4	<p>午前: 12:00、4:00、8:00 午後: 12:00、4:00、8:00</p> <p>たとえば、スケジュールされた開始時間が午後 12:48 で、時間ごとの繰返しが 4 時間に設定されている場合、ジョブはまず午後 12:48 に実行され、それから午後 4:48、午後 8:48、午前 12:48、午前 4:48 というように続きます。</p>
5	<p>午前: 12:00、5:00、10:00 午後: 3:00、8:00</p> <p>たとえば、スケジュールされた開始時間が午後 12:48 で、時間ごとの繰返しが 5 時間に設定されている場合、ジョブはまず午後 3:48 に実行され、それから午後 8:48、午前 12:48、午前 5:48、午前 10:48 というように続きます。</p>
6	<p>午前: 12:00、6:00 午後: 12:00、6:00</p> <p>たとえば、スケジュールされた開始時間が午後 12:48 で、時間ごとの繰返しが 6 時間に設定されている場合、ジョブはまず午後 12:48 に実行され、それから午後 6:48、午前 12:48、午前 6:48 というように続きます。</p>
7	<p>午前: 12:00、7:00 午後: 2:00、9:00</p> <p>たとえば、スケジュールされた開始時間が午後 12:48 で、時間ごとの繰返しが 7 時間に設定されている場合、ジョブはまず午後 2:48 に実行され、それから午後 9:48、午前 12:48、午前 7:48 というように続きます。</p>
8	<p>午前: 12:00、8:00 午後: 4:00</p> <p>たとえば、スケジュールされた開始時間が午後 12:48 で、時間ごとの繰返しが 8 時間に設定されている場合、ジョブはまず午後 4:48 に実行され、それから午前 12:48、午前 8:48 というように続きます。</p>
9	<p>午前: 12:00、9:00 午後: 6:00</p> <p>たとえば、スケジュールされた開始時間が午後 12:48 で、時間ごとの繰返しが 9 時間に設定されている場合、ジョブはまず午後 6:48 に実行され、それから午前 12:48、午前 9:48、午後 6:48 というように続きます。</p>

表 15-3 (続き) 時間ごとのジョブのタイムテーブル

時間ごとの繰返し	タイムテーブル
10	午前: 12:00、10:00 午後: 8:00 たとえば、スケジュールされた開始時間が午後 12:48 で、時間ごとの繰返しが 10 時間に設定されている場合、ジョブはまず午後 8:48 に実行され、それから午前 12:48、午前 10:48、午後 8:48 というように続きます。
11	午前: 12:00、11:00 午後: 10:00 たとえば、スケジュールされた開始時間が午後 12:48 で、時間ごとの繰返しが 11 時間に設定されている場合、ジョブはまず午後 10:48 に実行され、それから午前 12:48、午前 11:48、午後 10:48 というように続きます。
12	午前: 12:00 午後: 12:00 たとえば、スケジュールされた開始時間が午後 12:48 で、時間ごとの繰返しが 12 時間に設定されている場合、ジョブはまず午後 12:48 に実行され、それから午前 12:48 というように続きます。

ジョブの編集および取消し

保留中のジョブのスケジュールを編集したり、保留中のジョブや完了したジョブを削除したりできます。処理中のジョブを変更したり、削除することはできません。

ジョブを編集または削除するには:

1. 「アプリケーション」をクリックし、「ジョブ」をクリックします。
2. ジョブを実行する時期を変更するには、...、「編集」の順にクリックし、スケジュールを変更します。

ノート:

ジョブの頻度を変更しても、新しい頻度で実行されるのは、それ以前の頻度設定で次に 1 回実行されてからです。たとえば、毎日繰返しに設定されていたジョブの頻度を 1 時間に変更した場合、スケジュールされていた毎日のジョブが翌日に実行されてから、新しい 1 時間ごとの頻度で実行されるようになります。それより早く新しい頻度でジョブを実行したい場合は、スケジュールされているジョブを削除して新しいジョブを作成することをお勧めします。

3. ジョブを削除するには、それらを選択し、...、「削除」の順にクリックします。

ジョブの複製

新しいジョブを作成するたびに再度選択しなくて済むように、「名前を付けて保存」オプションを使用して既存のジョブの複製を作成し、それを更新します。

「名前を付けて保存」は、次のジョブ・タイプでサポートされています：

- データのエクスポート
- データのインポート
- メタデータのエクスポート
- メタデータのインポート
- データベースのリフレッシュ
- キューブのクリア
- 為替レートのインポート

 **Note:**

ジョブ・タイプの説明は、[ジョブ・タイプ](#)を参照してください。

ジョブを複製するには：

1. 「アプリケーション」、「概要」の順にクリックします。
2. 「アクション」をクリックし、次のいずれかのアクションを選択します：
 - データのエクスポート
 - データのインポート
 - メタデータのエクスポート
 - メタデータのインポート
 - データベースのリフレッシュ
 - キューブのクリア
 - 為替レートのインポート
3. リスト・ページで、複製するジョブの横にある「アクション」列の・・・をクリックし、「名前を付けて保存」を選択します。
4. 新しいジョブの名前を入力し、「OK」をクリックします。

複製ジョブが作成されたら、そのジョブを開いて更新できます。複製ジョブのエラー・ファイルには、接頭辞として新しいジョブ名が自動的に使用されます。

ルール・ジョブおよびルール・セット・ジョブの取消し

処理中の、「最近のアクティビティ」に表示されているルール・セットまたはルール・ジョブを取り消すことができます。これらのジョブを取り消すには、「アプリケーション」をクリックし、「ジョブ」をクリックします。

ルール・ジョブを取り消すには、ジョブの横の 、、「取消し」の順にクリックします。

ルール・セットを取り消すには、、「**ジョブの詳細**」の 、「**取消し**」の順にクリックします。

送信ボックスからのエクスポート・ファイルのダウンロード

メタデータまたはデータのエクスポート・ジョブを実行したら、送信ボックスからエクスポート・ファイルをダウンロードできます。

ファイルをダウンロードするには:

1. 「**アプリケーション**」をクリックし、「**ジョブ**」をクリックします。
2. 「**最近のアクティビティ**」で、ジョブをクリックします。
3. 「**ジョブの詳細**」の上部で、エクスポート・ファイル・オプションをクリックしてダウンロード場所を選択します。

16

タスクおよびデータの監査

次も参照:

- [監査の概要](#)
- [監査トラッキングの有効化](#)
- [監査詳細の表示](#)

監査の概要

監査機能を使用して、ユーザーが実行したタスクを表示します。監査タイプ(「データ」や「セル詳細のクリア」など)、日付範囲(「昨日」や「過去 60 日間」など)およびユーザー名で監査タスクをフィルタできます。

監査トラッキングを有効化し、監査情報を表示およびエクスポートするには、サービス管理者である必要があります。

次のタイプのユーザー・アクティビティを、タスク監査でログに保存できます。

表 16-1 監査可能なタスク

監査タイプ	追跡される変更
ディメンション管理	<ul style="list-style-type: none">• ディメンション階層: メンバーまたはディメンションの追加。プロパティの移動、削除および変更。メンバーおよびディメンションの名前変更• パフォーマンス設定: ディメンションの密または疎の再設定、ディメンションの順序の変更
別名表の管理	別名表への変更: 登録、コピー、名前変更、削除およびクリア
データ	<ul style="list-style-type: none">• セル値• サポート詳細• 勘定科目注釈• セル・レベル・ドキュメント

ノート:

データ変更がデータ・フォーム内で発生した場合のみ、監査ログは変更を取得します。変更が、たとえばビジネス・ルール計算、データ・マップ、Oracle Essbase への直接データ・ロードなどの一部として発生した場合、監査ログで取得されません。

ビジネス・ルールの起動

計算スクリプトおよびビジネス・ルールによる更新(実行時プロンプトを含む)

表 16-1 (続き) 監査可能なタスク

監査タイプ	追跡される変更
フォームの定義	フォーム: フォームの作成、移動、削除(監査レコードには、設計の変更方法は記録されません。)
フォーム・フォルダの管理	フォルダ: 作成済、移動済および削除済
セキュリティ	ディメンションのメンバー、フォーム、フォーム・フォルダ、ビジネス・ルールおよびタスク・リストに対するアクセス権限
ユーザーの管理	追加、変更および削除済のユーザー
グループの管理	追加、変更および削除済のグループ、追加および除去済のユーザー
タスク・リスト	タスク・リスト: 作成、更新、保存、移動および削除済
データのコピー	サポート詳細、セル・テキスト、セルの添付、詳細のないデータなどを含む静的ディメンション、ソース・ディメンション、宛先ディメンションにおけるユーザーの選択
セル詳細のクリア	サポート詳細、コメント、および添付のクリアにおけるユーザーの選択
変数	変数(代替変数およびユーザー変数): 追加、変更および削除済

「監査」 ページには、次の情報が表示されます。

- 監査(タスク)
- ソース
- アクション
- ユーザー
- 名前
- 日付
- 詳細
- プロパティ
- 古い値
- 新規の値

列はすべて、昇順または降順でソートできます。

監査トラッキングの有効化

監査トラッキングは、デフォルトでは有効化されていません。サービス管理者は監査を有効にして、データの変更を追跡できるようにする必要があります。

監査機能を有効化するには:

1. ホーム・ページで、「ツール」、「監査」の順にクリックします。
2. 「監査」 ページで「監査の使用可能」をクリックします。
3. 「監査の使用可能」 ページで監査タスクを選択して、「保存して閉じる」をクリックします。

監査詳細の表示

ビジネス・プロセス・インタフェースでは、最大 180 日間の監査詳細を表示およびエクスポートできます。

監査の詳細を表示するには:

1. ホーム・ページで、「ツール」、「監査」の順にクリックします。

監査が有効になっている場合、デフォルトで「監査」ページに過去 7 日間のデータ・タスクの監査レコードが表示されます。監査を有効にするには、[監査トラッキングの有効化](#)を参照してください。

2. フィルタするには、 をクリックしてフィルタ条件を選択します。

- **監査タイプ:** 1 つ以上または「すべて」を選択します。監査タイプのリストおよび説明については、[監査の概要](#)を参照してください。
- **日付範囲:** 「今日」、「昨日」、「過去 7 日間」、「過去 30 日間」、「過去 60 日間」または「過去 180 日間」を選択します。

ノート:

- 今日から 180 日より前の日付範囲は選択できません。今日と今日から 180 日前までの間(今日を含む)で、日付範囲を選択する必要があります。
- ビジネス・プロセスでは、現在のシステム日付から最大 365 日間の監査詳細が保持されます。180 日間を超える監査詳細をエクスポートするには、EPM 自動化の `exportAppAudit` コマンドまたは REST API の「監査のエクスポート」ジョブを使用します。*Oracle Enterprise Performance Management Cloud EPM 自動化の操作*または *Oracle Enterprise Performance Management Cloud の REST API* を参照してください。

- **ユーザー名:** ユーザー名を入力するか、 をクリックしてユーザーを検索します。
3. フィルタ条件の選択が完了したら、「適用」をクリックします。

グリッドに、フィルタ条件に一致する監査表から上位 200 レコードが表示されます。フィルタ条件に 200 を超えるレコードがある場合、表の下に汎用が表示されます。

4. Microsoft Excel スプレッドシートに監査情報をエクスポートするには、「エクスポート」をクリックしてダウンロードの指示に従います。

「エクスポート」オプションを選択すると、フィルタ条件に一致するすべてのレコードが xlsx ファイル(Microsoft Excel バージョン 2007 以降の形式)にエクスポートされます。

 ノート:

データ監査が有効な場合、「アクション」、「変更履歴」の順に選択して、どのデータが変更されたかを確認できます。

データ検証の管理

次も参照:

- [データ検証ルールの作成および更新](#)
- [セルのフォーマット](#)
- [データ検証ルールの表示](#)
- [データ検証ルールの評価および実行の順序](#)
- [ルール・ビルダーによってサポートされている条件](#)
- [データ検証の条件演算子](#)
- [データ検証ルールのシナリオ](#)

データ検証ルールの作成および更新

ビジネス・ポリシーおよびビジネス・プラクティスを実装するために、フォームで条件が満たされたときにチェックするデータ検証ルールを構築できます。入力したデータが検証ルールに違反したときに、検証メッセージを生成できます。

データ検証ルールを使用して処理できるシナリオの例は、[データ検証ルールのシナリオ](#)を参照してください。

データ検証ルールの定義には、次のメイン・タスクがあります:

- 条件が満たされたときに検証メッセージとともに表示したり別の色で表示するデータのセルまたは場所を指定します。
- ルールの評価に関与させるセルを指定し、適切にルールを定義します。
- このトピックに説明されているとおり、指定した場所でデータ検証ルールを作成します。

検証ルールを作成および更新するには:

1. ホーム・ページで「ナビゲータ」をクリックし、「作成および管理」で、「フォーム」をクリックします。
2. フォームを作成または編集し、「フォームとアド・ホック・グリッドの管理」ページで「レイアウト」をクリックします。
3. 「レイアウト」で、検証ルールを追加または更新するグリッド、行見出し、列見出しまたはセルを右クリックします。

 ノート:

「レイアウト」内のセルの上にカーソルを置くと、コンテキスト・メニューでは、セルに検証ルールが含まれるかどうかが表示されます。検証メッセージを表示するには、「**データ検証メッセージの表示**」を選択します。単一のセルを選択すると、コンテキスト・メニューも表示されます。

4. 「**検証ルールの追加/編集**」を選択し、ルールを作成または更新します。
5. ルールを追加するには、 をクリックし、ルールの名前と説明を入力します。
必要に応じて、「**場所**」からオプションを選択し、ルールを移動します。既存のルールと似たルールを作成するには、 をクリックし、ルールを更新します。ルールを表示するには、「**ルールの表示**」をクリックします。[データ検証ルールの表示](#)を参照してください。
6. ルールを更新します。
 - a. 「**条件**」で、条件文を開始するオプション(「IF」、ELSE IF、「ELSE」、「THEN」、CHECK RANGE または RANGE)を選択します。
ルールの最初の部分には、IF 条件が含まれる必要があります。また、ルールには、特定の形式の THEN 条件も含まれる必要があります。[ルール・ビルダーによってサポートされている条件](#)を参照してください。
 - b. 「**ソース・タイプ**」で、ルールによる評価のオプションを選択します。
「**ソース・タイプ**」リストには、条件に適したオプションが表示されます。たとえば、IF 条件に対しては、「**現在のセル値**」、「**セルの値**」、「**列値**」、「**行値**」、「**メンバー名**」、「**メンバー**」、「**ディメンション間メンバー**」、「**勘定科目タイプ**」、「**バージョン・タイプ**」、「**Var レポート・タイプ**」、「**UDA**」または「**属性**」などが含まれます。条件の各タイプの詳細は、[ルール・ビルダーによってサポートされている条件](#)を参照してください。
 - c. 選択した「**ソース・タイプ**」に該当する場合、オプションを選択するか、フリー・フォーム値を入力して、「**ソース値**」に値を入力します。
 - d. 評価の演算子(「=」、「!=」、「<」、「<=」、「>」、「>=」、「次と等しい」、「次と等しくない」、「次を含む」、「次で始まる」、「次で終わる」、「次に含まれる」または「次に含まれない」)を選択します。
たとえば、[データ検証の条件演算子](#)を参照してください。
 - e. ルールに適した「**ターゲット・タイプ**」を選択します。
 - f. 条件ビルダーの右側にある「**アクション**」列のアイコンをクリックして、条件を更新します。
 -  : 現在の行の横に条件を追加します。
 -  : 現在の行の条件を削除します。
 - g. 更新する条件または条件ブロックを選択します。
条件ブロックを更新するには、条件ビルダーの上部にある「**条件**」領域のアイコンをクリックします:

- : 検証ルール内に IF などの条件を追加します。条件は展開または縮小できます。ルール・ビルダーによってサポートされている条件を参照してください。
 - : 選択した条件ブロックを削除します。
 - : 選択した条件を削除し、コピーしたものを新しい場所に貼り付けます。
 - : 選択した条件をコピーします。
 - : 選択した条件を新しい場所に貼り付けます。
 - : 条件内の選択対象をグループ化し、グループ用のカッコを追加します。設定したグループに加えて、条件がグループ化されるとこのグループ・ブロック内の IF 文がグループ化され、「カスタム・グループ」オプションが有効になります。
 - : 選択した条件のグループを解除します。選択した条件からは、グループ用のカッコが削除されます。グループ解除が選択されるたびに、条件から 1 つのグループが削除されます。
- 独自の条件グループを設定することもできます。それには、「カスタム・グループ」を選択して、ルール定義領域でグループを設定します。
- 選択した条件は影付きで表示されます。選択した条件をクリアするには、「条件」列の左側を再クリックします。

7. 右端の列にある  をクリックして、処理命令を追加します。

ノート:

アイコンが表示されない場合は、ルールが有効であり、ルールでセルの処理命令が許可されていることを確認してください。セルの処理命令はたとえば ELSE、RANGE および THEN 条件に含まれています。このアイコンは、ルールに必要なすべての列が選択されるまで表示されません。

セルのフォーマットを参照してください。

8. ルールをフォームで使用可能にする準備ができた後で、「検証規則の使用可能」を選択します。

ヒント:

ルールは、構築する際、使用可能にしなくても保存できます。この場合、エラーを解決してルールが検証および使用する準備ができた後、ルールを使用可能にして保存し、フォームで使用可能にできます。また、「検証規則の使用可能」をクリアすることにより、ルールを一時的に無効にすることもできます。

9. ルールの更新が終了したら、ルールを検証します。
- 「検証」をクリックします。

検証ステータスが、ダイアログ・ボックスの上部に表示されます。変更を保存する前に、エラーを修正する必要があります。ルールを検証しなかったり、検証中に検出されたエラーを修正せずにダイアログ・ボックスを閉じると、更新は保存されません。

- b. 検証中に検出されたエラーを修正した後、ルール定義領域の上にある「**検証ルールの使用可能**」が選択されていることを確認し、アプリケーションでルールを有効にします。
 - c. ルールを検証した後、「**OK**」をクリックします。
10. オプション: 「**フォームとアド・ホック・グリッドの管理**」ページで、ルールを表示して更新します。
- 「**フォームとアド・ホック・グリッドの管理**」ページの右側にある「**検証ルール**」ペインで、、 または  をクリックして、ルールを追加、編集または削除します。
 - 同じ場所に複数のルールが定義されている場合に、ルールの優先度が同じであるときは、ルールが処理される順序を変更できます。ルールをリストで上下あるいは一番上または下に移動するには、ルールを選択して、矢印をクリックします。[データ検証ルールの評価および実行の順序](#)を参照してください。
 - 検証ルールのオプションから選択します。

表 17-1 フォームの「検証ルール」のオプション

オプション	説明
既存のブロックがあるページについてのみ検証	有効化されている場合、システムにより潜在的ブロックが含まれるページの組合せが検出され、そのページの組合せに対してのみ検証が実行されます。これにはいくつかの例外があります。ページの組合せに動的計算、動的計算および保管、ラベルのみ、または子メンバーが 1 つ含まれる保管が含まれる場合、そのページは常にロードされます。
ユーザーがアクセス権を持つセルおよびページについてのみ検証	有効化されている場合、サービス管理者ではなく現在ログインしているユーザーとして検証が行われ、フォーム・メンバーにはユーザーのセキュリティが適用されます。

11. 「**フォームとアド・ホック・グリッドの管理**」ページで、フォームをプレビューして検証し、検証エラーを解決して、変更を保存します。

データ検証ルールが使用可能なフォームの場合、フォームがロードまたは保存されたときにルールが検証されます。フォームが保存されると、データ検証ルールが保存されます。[フォームの作成](#)を参照してください。

ユーザーは、フォームを開くと、「**データ検証メッセージ**」ペインを使用して検証メッセージを表示および解決できます。

[フリーフォームの操作のデータ検証エラーの解決](#)を参照してください。

セルのフォーマット

ルールを設定した後に、「セルの処理」ダイアログ・ボックスを使用して、フォームでのセルの表示方法を設定します。

セルをフォーマットするには:

1. 「データ検証ルール・ビルダー」ダイアログ・ボックスで、右端の列にある  をクリックします。

ノート:

アイコンが表示されない場合は、ルールが有効であり、ルールでセルの処理命令が許可されていることを確認してください。セルの処理命令はたとえば ELSE、RANGE および THEN 条件に含まれています。このアイコンは、ルールに必要なすべての列が選択されるまで表示されません。 [データ検証ルールの作成および更新](#) を参照してください。

2. 「セルの処理」ダイアログ・ボックスで、このルールに定義されている条件が満たされた場合のフォームにおけるセルの表示方法を設定します。

ルールが使用可能であっても、セルの背景色または検証メッセージのうち少なくとも 1 つのオプションを指定しないかぎり、ルールによる検証は行われません。

- セルの背景色を追加または更新するには、 をクリックします。セルの背景色を削除するには、 をクリックします。
- セルの検証メッセージを表示するには、「**検証メッセージ**」フィールドにメッセージを入力します。フォームのセルの上にマウスを置くと表示されるコンテキスト・メニューで「**データ検証メッセージの表示**」を選択すると、このテキストが表示されます。また、検証ルールによってデータ・セルにフラグが設定されており、「**データ検証メッセージ**」ペインにメッセージを表示」チェック・ボックスが選択されている場合、このテキストは「**データ検証メッセージ**」ペインにリンクとしても表示されます。データ検証エラーの表示および解決の詳細は、[フリーフォームの操作](#) を参照してください。

3. 「OK」をクリックします。

ルールの更新は、ルールの「処理」列に表示されます。セルの色を指定した場合、その色が表示されます。検証メッセージをプレビューするには、「処理」列の上にカーソルを置きます。

データ検証ルールの表示

処理命令を使用してデータ検証ルールを設定した後、「ルールの表示」ダイアログ・ボックスを使用して、選択したグリッド、行、列またはセルに適用されるすべてのルールを表示できます。

データ検証ルールを表示するには:

1. 「データ検証ルール・ビルダー」ダイアログ・ボックスで、「**ルールの表示**」をクリックし、フォーム内のこの場所におけるこのレベル(セル、行、列またはグリッド)のルールをすべて表示します。
2. ルール名を選択し、ルールをダブルクリックするか「OK」をクリックして、詳細を表示します。

データ検証ルールの評価および実行の順序

フォーム内のデータ更新ルールについては、ルール評価の優先度は、条件の優先度、ルール場所、およびルール・リスト内のルールの位置(同じ場所に複数のルールが存在する場合)によって決まります。最初に、セル・レベルのルールが処理されます。次に、列レベルのルールが処理され、続いて、行レベルのルールが処理されます。最後に、グリッド・レベルのルールが処理されます。これらのルールは、各レベルのルール・リスト内の位置に基づいて評価されます。

場所と位置により、ルールの処理順序が決まります。ただし、データ・セルに適用されるルールは、処理命令の優先度によって決まります。このため、セル・レベルのルールに優先度 4 の処理命令が含まれ、グリッド・レベルのルールに優先度 5 の処理命令が含まれる場合、データ・セルにはグリッド・レベルのルールが適用されます。すべてのルールの処理命令の優先度が同じである場合は、最初に処理されたルールが優先されます。優先度は、検証メッセージ、色、「**移動しない**」移動パス・オプション、またはこれらの設定の組合せがセルの処理命令に指定されているかどうかによって決まります。

表 17-2 フォームのルール優先度

デフォルトの条件優先度	検証メッセージ	色	移動しない
1 (最低)	X		
1		X	
1	X	X	
2			X
3	X		X
4		X	X
5 (最高)	X	X	X

ルール・ビルダーによってサポートされている条件

データ検証ルール・ビルダーによってサポートされている条件は、IF、ELSE、ELSE IF、THEN、CHECK RANGE および RANGE です。

これらの条件によってサポートされている値の詳細と例は、次の項を参照してください:

- **IF、ELSE、ELSE IF:** [IF 条件値](#)
- **THEN:** [THEN 条件値](#)
- **CHECK RANGE、RANGE:** [RANGE 条件値](#)

IF 条件値

他の条件の詳細は、[ルール・ビルダーによってサポートされている条件](#)を参照してください。

現在のセル値

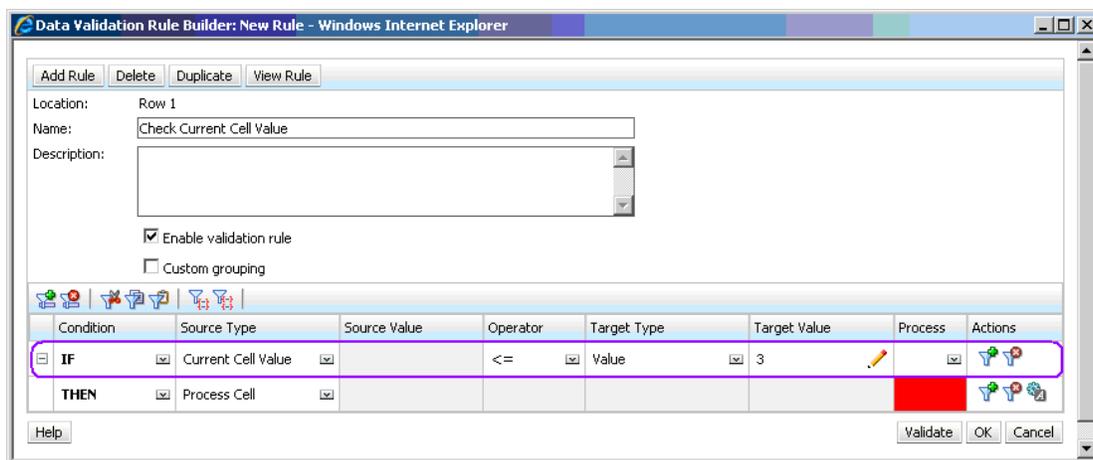
アクション:

アクションが実行されるのは、ルールが呼び出される現在のデータ・セルの値がこの条件を満たす場合です。

演算子:

この関数で使用可能な演算子は、「=」、「!=」、「<」、「<=」、「>」、「>=」、「次と等しい」、「次と等しくない」、「次を含む」、「次で始まる」または「次で終わる」です。これらの演算子は、選択したターゲット値に作用します。ターゲット値には、フリー・フォーム値、セル値、列値、行値またはディメンション間メンバーがあります。

条件定義:



条件評価:

前の図に示す条件の場合、条件が評価されると、メンバー Row_Member1 を持つ行 1 のセルは赤になります。

		A	
		Column_Member 1	Column_Member 2
1	Row_Member 1	1.0	2.0
	Row_Member 2	5.0	6.0
	Row_Member 3	9.0	10.0
2	Row_Member 4	13.0	14.0
	Row_Member 5	17.0	18.0

セルの値

アクション:

アクションが実行されるのは、指定したセルの値が条件を満たす場合です。

演算子:

この関数で使用可能な演算子は、「=」、「!=」、「<」、「<=」、「>」、「>=」、「次と等しい」、「次と等しくない」、「次を含む」、「次で始まる」、「次で終わる」です。これらの演算子は、選択したターゲット値に作用します。ターゲット値には、フリー・フォーム値、セル値、列値、行値またはディメンション間メンバーがあります。

条件定義:



条件評価:

設計時セルは、次の図に示すように、データ入力時に 1 つ以上のデータ・セルまで展開できます。セルの値は、展開されたすべてのデータ・セルの値の合計です。たとえば、セル A1 の値は、紫色の線で囲まれたセルの値の合計(1+2+5+6+9+10=33)です。また、セル A2 の値は、青色の線で囲まれたセルの値の合計(13+14+17+18=62)です。

		A	
		Column_Member 1	Column_Member 2
1	Row_Member 1	1.0	2.0
	Row_Member 2	5.0	6.0
	Row_Member 3	9.0	10.0
2	Row_Member 4	13.0	14.0
	Row_Member 5	17.0	18.0

列値

アクション:

アクションが実行されるのは、指定した列の値が条件を満たす場合です。

演算子:

この関数で使用可能な演算子は、「=」、「!=」、「<」、「<=」、「>」、「>=」、「次と等しい」、「次と等しくない」、「次を含む」、「次で始まる」または「次で終わる」です。これらの演算子は、選択したターゲット値に作用します。ターゲット値には、フリー・フォーム値、セル値、列値、行値またはディメンション間メンバーがあります。

条件定義:

IF	Column Value	A	<	Value	3		
----	--------------	---	---	-------	---	--	--

条件評価:

設計時列は、次の図に示すように、データ入力時にデータ・セルまで展開できます。列の値は、現在の行の場所にあるこの列内の展開されたすべてのデータ・セルの値の合計です。ルールが評価されている現在のセルがグリッド内で変更されると、これに応じて現在の行も変更されます。

たとえば、メンバー **Row_Member1** を持つ行 **1** の任意のセルに対してルールが評価される場合、列 **A** の値は、紫色の線で囲まれたセルの値の合計($1+2=3$)になります。メンバー **Row_Member3** を持つ行 **1** の任意のセルに対してルールが評価される場合、列 **A** の値は、青色の線で囲まれたセルの値の合計($9+10=19$)になります。同様に、メンバー **Row_Member5** を持つ行 **2** の任意のセルに対してルールが評価される場合、列 **A** の値は、緑色の線で囲まれたセルの値の合計($17+18=35$)になります。

		A	
		Column_Member 1	Column_Member 2
1	Row_Member 1	1.0	2.0
	Row_Member 2	5.0	6.0
	Row_Member 3	9.0	10.0
2	Row_Member 4	13.0	14.0
	Row_Member 5	17.0	18.0

行値**アクション:**

アクションが実行されるのは、指定した行の値が条件を満たす場合です。

演算子:

この関数で使用可能な演算子は、「=」、「!=」、「<」、「<=」、「>」、「>=」、「次と等しくない」、「次を含む」、「次で始まる」、「次で終わる」です。これらの演算子は、選択したターゲット値に作用します。ターゲット値には、フリー・フォーム値、セル値、列値、行値またはディメンション間メンバーがあります。

条件定義:

IF	Row Value	1	=	Value	10		
----	-----------	---	---	-------	----	--	--

条件評価:

設計時行は、次の図に示すように、データ入力時に **1** つ以上のデータ・セルまで展開できます。行の値は、現在の列の場所にあるこの行内の展開されたすべてのデータ・セルの値の合

計です。ルールが評価されている現在のセルがグリッド内で変更されると、それに
応じて現在の列も変更されます。

たとえば、メンバー **Column_Member1** を持つ列 **A** の任意のセルに対してルールが評価
される場合、行 1 の値は、紫色の線で囲まれたセルの値の合計(1+5+9=15)になります。
同様に、メンバー **Column_Member2** を持つ列 **A** の任意のセルに対してルールが評価さ
れる場合、行 2 の値は、青色の線で囲まれたセルの値の合計(14+18=32)になります。

		A	
		Column_Member 1	Column_Member 2
1	Row_Member 1	1.0	2.0
	Row_Member 2	5.0	6.0
	Row_Member 3	9.0	10.0
2	Row_Member 4	13.0	14.0
	Row_Member 5	17.0	18.0

ディメンション間メンバー

アクション:

アクションが実行されるのは、ディメンション間メンバーによって参照されるデータ・セルの値が条件を満たす場合です。現在のデータ・セル・メンバーを使用して、メンバーがディメンション間に指定されていないディメンションのセルを完全修飾します。このメンバー名は、フリー・フォームで入力されます。

ノート:

フォームの検証ルールでディメンション間演算子が使用されている場合、ディメンション間セルがフォーム上で表されている必要があります。ディメンション間セルが含まれる列または行が、その場所に表示されることをユーザーが望まない場合にフォーム上で非表示になっていることがあります。

演算子:

この関数で使用可能な演算子は、「=」、「!=」、「<」、「<=」、「>」、「>=」、「次と等しい」、「次と等しくない」、「次を含む」、「次で始まる」または「次で終わる」です。これらの演算子は、選択したターゲット値に作用します。ターゲット値には、フリー・フォーム値、セル値、列値、行値またはディメンショナル間メンバーがあります。ターゲット値には、各ディメンションの 1 つのメンバーのみを含めることができますが、ディメンションのメンバーのみを行または列として含める必要があります。

条件定義:

IF	Current Cell Value	>	Cross-Dim Member	Row_Member 5
----	--------------------	---	------------------	--------------

条件評価:

前のルールがグリッド・レベルで適用されると、このルールはフォームの各セルで呼び出され、紫色の線で囲まれたセルの値とこのセルの値が比較されます。このため、Row_Member5のセル->Column_Member2 は赤色になります。

		A	
		Column_Member 1	Column_Member 2
1	Row_Member 1	1.0	2.0
	Row_Member 2	5.0	6.0
	Row_Member 3	9.0	10.0
2	Row_Member 4	13.0	14.0
	Row_Member 5	17.0	18.0

メンバー名**アクション:**

アクションが実行されるのは、ルールが呼び出される現在のデータ・セルの交差に、指定したディメンション・メンバーがある場合です。フォームが作成されたキューブに、選択したディメンションのメンバー名が含まれる必要があります。

演算子:

演算子には、「次と等しい」、次と等しくない、「次を含む」、「次で始まる」または「次で終わる」を使用できます。メンバー名であるターゲット値は、フリー・フォームで選択または入力されます。

条件定義:

IF	Member Name	Account	Equals	Value	Total Cost		
----	-------------	---------	--------	-------	------------	--	--

メンバー**アクション:**

アクションが実行されるのは、ルールが呼び出される現在のデータ・セルの交差に、指定したディメンション・メンバー(または、指定した関数の評価結果として生成されるメンバーの1つ)がある場合です。

演算子:

使用可能な演算子は「次に含まれる」および次に含まれないです。メンバーであるターゲット値は、フリー・フォームで選択または入力されます。

属性を含める

ルールには属性値を含めることができます。「ソース・タイプ」が「**属性**」の場合、使用可能な演算子は「次である」で、属性値を「ターゲット値」フィールドに直接入力できます。「ソース・タイプ」が「**メンバー**」であり、「ターゲット値」フィールドで

「次に含まれる」、または次に含まれない演算子を選択する場合は、 をクリックして「メンバー選択」ダイアログ・ボックスの「**変数**」をクリックして、属性を選択できます。メンバー選択関数セレクタを使用して、「等しくない」や「以上」などの属性の関数を選択できます。

データ検証ルールに属性値を使用する場合、属性の評価方法に注意してください。1つのルールが1つまたは複数のディメンションからの1つまたは複数の属性を参照する場合、同じ属性ディメンションからの属性値はORとして評価され、異なる属性ディメンションからの属性はANDとして評価されます。たとえば、ルールに属性 IN Red、Blue、True、Big が含まれる場合、いずれか(Red OR Blue) AND True AND Big のすべてのメンバーが選択されます。詳細は、[メンバーとしての属性値の選択](#)を参照してください。

メンバーのソース・タイプの条件定義

IF	Member	Account	In	Value	IDescendants("Total Cost")		
----	--------	---------	----	-------	----------------------------	--	--

属性のソース・タイプの条件定義

IF	Attribute	Entity	Is	Value	red		
----	-----------	--------	----	-------	-----	--	--

勘定科目タイプ

アクション:

アクションが実行されるのは、ルールが呼び出される現在のデータ・セルの交差に、指定した勘定科目タイプの勘定科目がある場合です。現在サポートされているすべての勘定科目タイプ(費用、収益、資産、負債、資本、保存された仮定)が表示されます。

演算子:

使用可能な演算子は、「次である」です。

条件定義:

IF	Account Type		Is		Expense		
----	--------------	--	----	--	---------	--	--

バージョン・タイプ

アクション:

アクションが実行されるのは、ルールが呼び出される現在のセルの交差に、指定したバージョン・タイプのバージョンがある場合です。現在サポートされているバージョン・タイプ(標準ボトムアップ、標準トップダウン)が表示されます。

演算子:

使用可能な演算子は、「次である」です。

条件定義:

IF	Version Type	Is	Standard Botto...
----	--------------	----	-------------------

差異レポート・タイプ

アクション:

アクションが実行されるのは、ルールが呼び出される現在のセルの交差に、指定した差異レポート・タイプの勘定科目がある場合です。使用可能な差異レポート・タイプ(費用、費用外)が表示されます。

演算子:

使用可能な演算子は、「次である」です。

条件定義:

IF	Var Reporting Type	Is	Non-Expense
----	--------------------	----	-------------

UDA

アクション:

アクションが実行されるのは、ルールが呼び出される現在のセルの交差に、指定したディメンションのメンバーに関連付けられたこの UDA がある場合です。UDA 参照は、選択したディメンションに基づいて選択されます。条件は、選択した値と等しいこのディメンションの UDA に基づいています。UDA 値は、ドロップダウン・リストから選択する必要があります。

演算子:

使用可能な演算子は、「次である」です。

条件定義:

IF	UDA	Scenario	Is	Value	ACTUAL
----	-----	----------	----	-------	--------

属性

アクション:

アクションが実行されるのは、ルールが呼び出される現在のセルの交差に、指定したディメンションのメンバーに関連付けられたこの属性がある場合です。属性参照は、選択したディメンションに基づいて選択されます。条件は、選択したターゲット値と等しいこのディメンションの属性に基づいています。

演算子:

使用可能な演算子は、「次である」です。

条件定義:

	IF	Attribute	Entity	Is	Value	East	
--	----	-----------	--------	----	-------	------	--

THEN 条件値

アクション:

データ検証ルール・ビルダーによってサポートされている **THEN** 条件は、セルの処理条件のみをサポートします。セルの処理条件を入力するには、[セルのフォーマット](#)を参照してください。

条件定義:

THEN	Process Cell						
------	--------------	--	--	--	--	--	--

他の条件の詳細は、[ルール・ビルダーによってサポートされている条件](#)を参照してください。

RANGE 条件値

CHECK RANGE および RANGE 条件は一緒に使用されます。これらの条件は、データ検証ルール・ビルダーを使用して、**THEN** 句内でまたは独立して使用できます。

他の条件の詳細は、[ルール・ビルダーによってサポートされている条件](#)を参照してください。

CHECK RANGE

アクション:

特定の範囲内に収まる必要がある値を定義します。

値:

この値には、「現在のセル値」、または特定の「行」、「列」または「セル」の値を使用できます。

RANGE

アクション:

CHECK RANGE 条件に定義されている値に有効な範囲を定義します。この範囲には、最小値以上かつ最大値未満のすべての値が含まれます。**CHECK RANGE** 条件に指定した値がこの範囲内である場合、この条件によって定義される処理命令は、ルールが呼び出されるデータ・セルに適用されます。複数の値範囲を定義し、範囲ごとに異なる処理命令を指定できます。

値:

範囲の最小値と最大値は、「セルの値」、「現在のセル値」、「行値」、「列値」、ディメンション間値を使用するか、フリー・フォーム値を入力することにより、定義できます。たとえば、次のルールにより、現在のセル値が **5** 以上 **10** 未満であることを確認できます。この条件が満たされない場合、セルは赤になります。

条件定義:

Condition	Source Type	Source Value	Operator	Target Type	Target Value	Process	Actions
CHECK RANGE	Current Cell Value						
RANGE	Value	5		Value	10		

他の条件の詳細は、[ルール・ビルダーによってサポートされている条件](#)を参照してください。

データ検証の条件演算子

データ検証ルール・ビルダーの条件演算子には、次のタイプの比較を組み込むことができます:

- 次の演算子を使用した数値比較: 「=」、「!=」、「<」、「<=」、「>」、「>=」。
- 次の演算子を使用した文字列値比較: 「次と等しい」、「次と等しくない」、「次を含む」、「次で始まる」、「次で終わる」、次に含まれる」、次に含まれない。

ルールにより、テキストやスマート・リストなどの様々なデータ型を持つセルを比較できます。セルのデータ型が保持されるのは、常に 1 つのセルからの値が参照される場合です。「現在のセル値」と「ディメンション間メンバー」を使用してセル値を参照する場合はこれに該当します。比較対象の値が複数のセルからの値(行値、列値およびセル値など)である場合、データ型はデフォルトで **double** 型に設定されます。

これらのデータ型の値を比較する場合、次のような処理が行われます:

- double** 型の場合、**double** 値に対して文字列表現(123.45 など)が使用されます。**double** 型が小数部を持たない整数(123.00 など)である場合、整数値(この場合、123)が使用されます。
- テキストの場合、ルールで比較対象として使用するのはテキスト値のみです。
- 他のデータ型(パーセンテージおよび日付)はすべて、**double** 型として処理されます。

表 17-3 「次で始まる」、「次で終わる」および「次を含む」の結果の例

演算子	比較値	比較先の値
次で始まる	2.0	2
	1234.0	12.0
	101.0	10
	2.0	2.0
	2.5	"2."
	"YearTotal"	"Year"
次で終わる	2.0	2.0
	2.0	2
	2.5	5
	2.5	".5"
	"YearTotal"	"al"
	"YearTotal"	"Total"
次を含む	2.0	2.0
	2.0	2
	2.5	5
	2.5	".5"
	2.5	2.5
	23.567	3.5
	23.567	67
	23.567	"23."
	23.567	".56"
	"YearTotal"	"al"

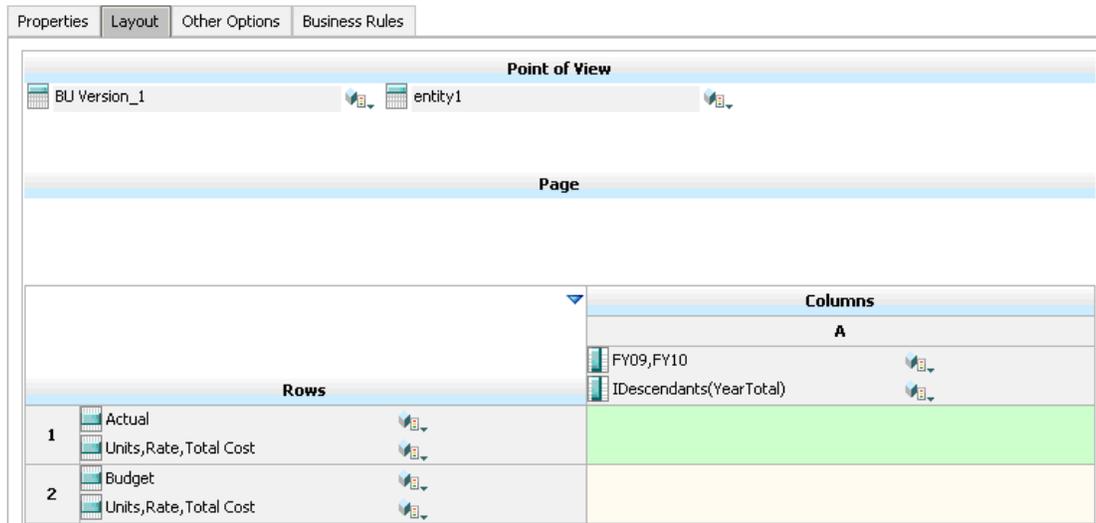
データ検証ルールシナリオ

これらのシナリオは、データ検証がビジネス・ポリシーの実装にどのように役立つかについての例となります。

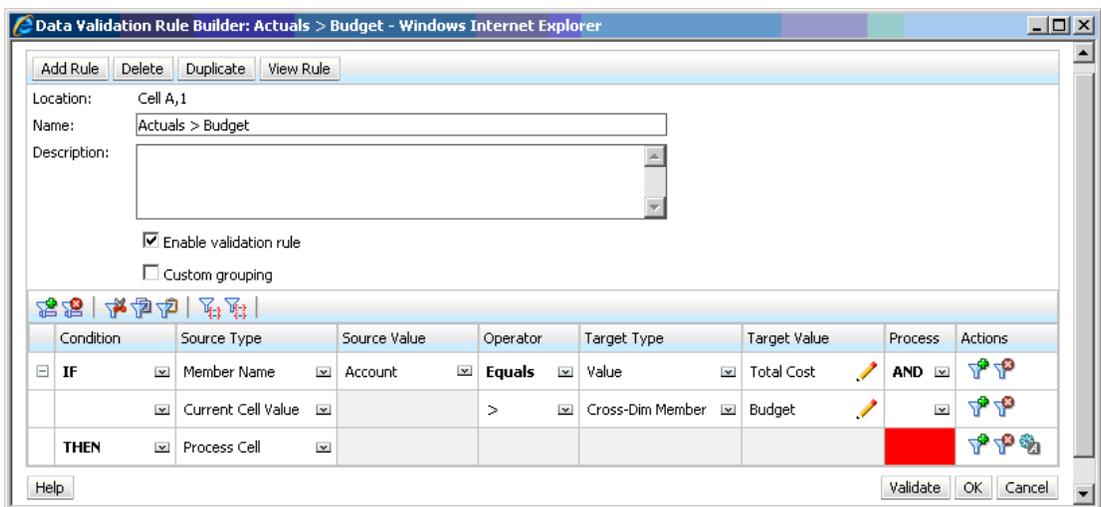
シナリオ 1

John は、Acme, Inc という会社で働くコンサルタントで、フォームを設計したり、会社のポリシーを実施するデータ検証ルールを実装しています。彼は、実際のコスト合計が予算額を超えたときに実績額を赤色で示す検証ルールを実装するよう求められました。このテストは、アプリケーションで年度および期間ごとに繰り返す必要があります。John は、次の図のようにフォームを設計し、ディメンション間メンバーを使用してセル・レベルにデータ検証ルールを追加しました。

設計時のフォームのレイアウト:



設計時のデータ検証ルール:



データ検証が適用されたデータ入力時のフォーム:

		FY09								FY10			
		Jan	Feb	Mar	Q1	Q2	Q3	Q4	YearTotal	Jan	Feb	Mar	Q1
Actual	Units	3	4	6	13	12	24	21	70	5	14	7	26
	Rate	5	5	5	15	15	15	9	54	4	4	4	12
	Total Cost	15	20	30	195	180	360	189	3780	20	56	28	312
Budget	Units	3	4	6	13	12	24	21	70	5	13	7	25
	Rate	4	6	3	13	15	15	9	52	5	4	4	13
	Total Cost	12	24	18	169	180	360	189	3640	25	52	28	325

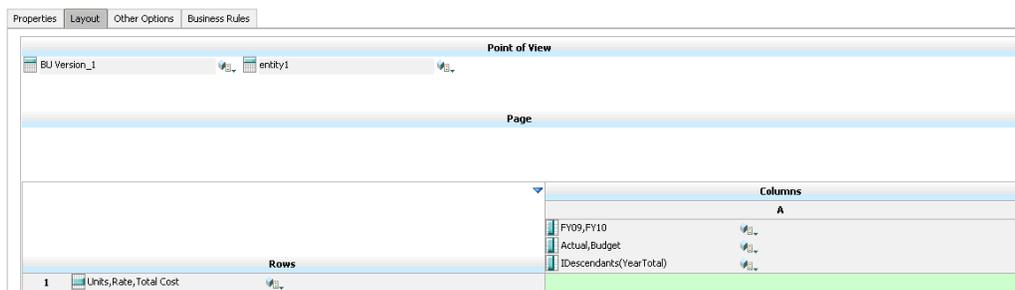
ヒント:

- John は、コスト合計を分割して独立したセグメントとし、このセグメントにデータ検証ルールを適用することにより、パフォーマンスをわずかに向上させることができます。ただし、これを行うと、新規のアカウントとシナリオがフォームに追加されるためにメンテナンス作業が増えます。
- 「実績」の年合計期間のみを赤色で示すというように要件が変更された場合、John には 2 つのオプションがあります。最善のオプションは、年合計が「期間」メンバーであるかどうかをチェックする IF エントリを追加する方法です。もう 1 つのオプションは、年合計メンバーを分割して独立した列とし、パフォーマンスを向上させる方法です。ただし、これを行うと、分散ロジックが破綻し、「年」の列ヘッダーが繰り返されるため、新規年度が追加されるにつれてフォームのメンテナンスがより困難になります。

シナリオ 2

シナリオ 1 で John によって設計されたフォームをレビューした後、Acme は、「予算」を行ではなく列として配置することにしました。この要件を実装するには、John は、軸内でメンバーを移動してフォームのレイアウトを変更できます。ただし、データ検証ルールを更新する必要はありません。John は、次の図のようにフォームを更新しました。

設計時のフォームのレイアウト:



データ検証が適用されたデータ入力時のフォーム:

	Version: BU Version_1										Entity: entity1						
	FY09										Budget		FY10				
	Actual												Actual				
	Jan	Feb	Mar	Q1	Q2	Q3	Q4	YearTotal	YearTotal	Jan	Feb	Mar	Q1	Q2	Q3	Q4	YearTotal
Units	3	4	6	13	12	24	21	70	70	5	14	7	26	12	12	12	36
Rate	5	5	5	15	15	15	9	54	52	4	4	4	12	12	12	36	360
Total Cost	15	20	30	195	180	360	189	3780	3640	20	56	28	312	120	120	120	3600

シナリオ 3

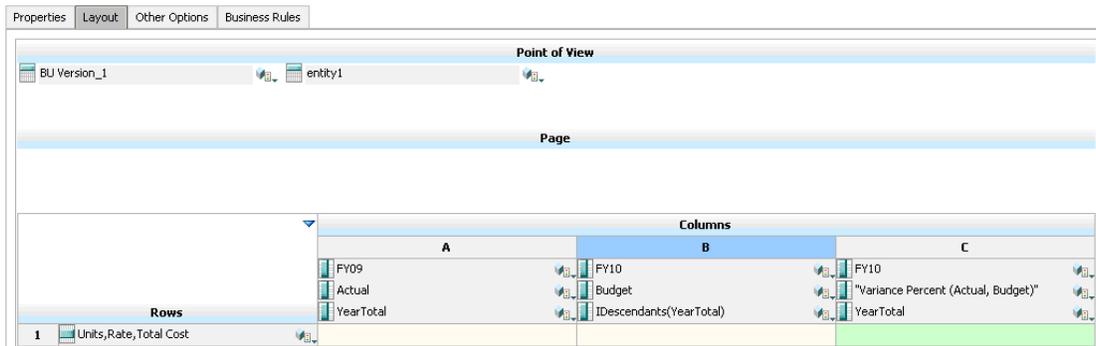
これらのフォームを正常にロールアウトした後、John は、次のポリシーを実装するよう求められました。それは、今年度の予算金額が前年度の実績金額を大幅に超えないことを確認するためです。差が 5% を超える場合、差が赤色で示されます。

John は、メンバー式を持つメンバーを使用して、今年度の予算金額と前年度の実績金額の差異を計算することにしました。次のメンバー式を追加しました:

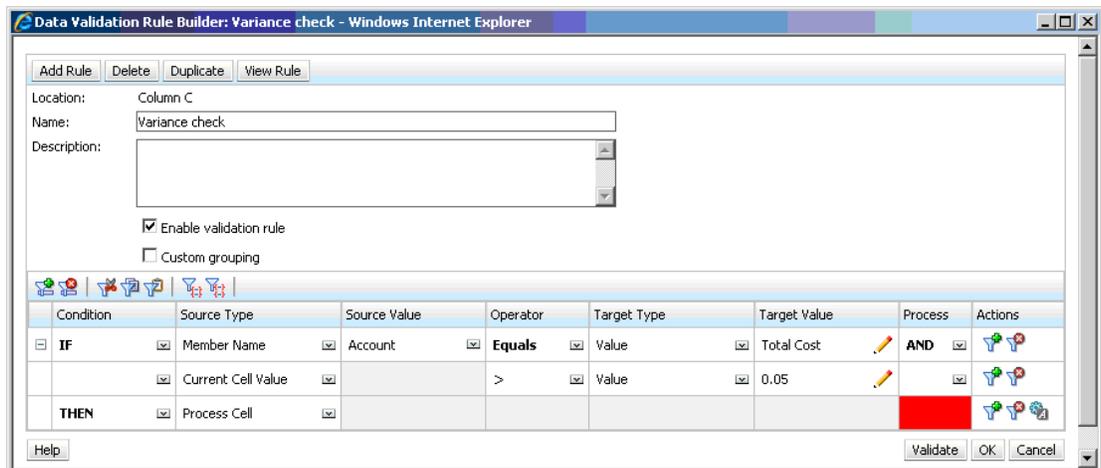
```
@varper(@Prior("Actual", 1, @Relative("Year", 0)), budget)/100;
```

John は、次の図に示すようにフォームを設計し、セル・レベルでデータ検証ルールを追加しました。John は、「メンバー名」を使用して検証をコスト合計にのみ適用しました。

設計時のフォームのレイアウト:



設計時のデータ検証ルール:



データ検証が適用されたデータ入力時のフォーム:

Version: BU Version_1							
	FY09	FY10				FY10	
	Actual	Budget				Variance Perce	
	YearTotal	⊕ Q1	⊕ Q2	⊕ Q3	⊕ Q4	⊖ YearTotal	YearTotal
Units	70.0	60.0	20.0	20.0	15.0	115.0	39.13%
Rate	54.0	24.0	4.0	4.0	5.0	37.0	-45.95%
Total Cost	3780.0	1440.0	80.0	80.0	75.0	4255.0	11.16%

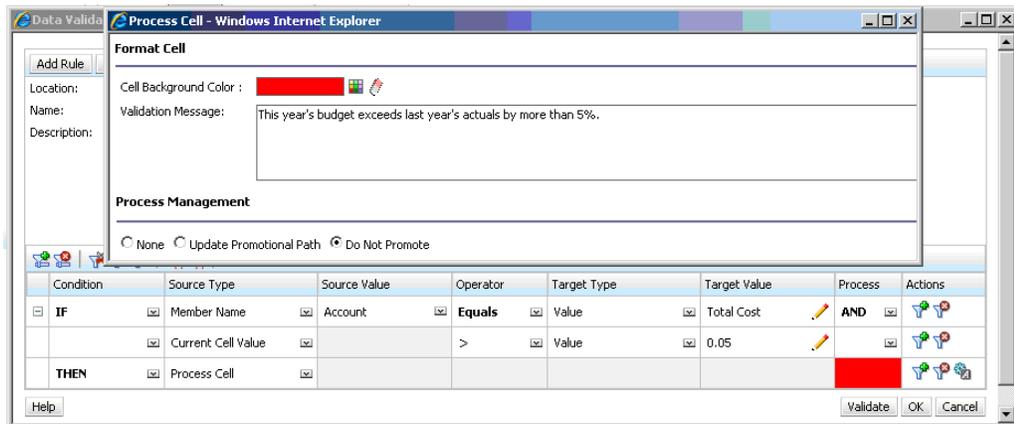
ヒント:

- John がアウトラインの変更を許可されていない場合、またはメンバー式のパフォーマンスに問題が発生した場合、式の列を使用できます。式の行と列を使用したフォームの設計を参照してください。
- John は、次の理由により、このルールを「差異の割合(%)」列に定義します。
 - パフォーマンスが向上します。ルールは、「差異の割合(%)」列のセルにおいてのみ評価されます。これに対し、ルールが年合計に割り当てられている場合は、今年度の予算についてすべての期間でルールを評価することが必要になってしまいます。
 - ユーザーがデータ検証メッセージに対応しやすくなります。John は、差異が大きいという内容のメッセージを、年合計に追加するのではなく、「差異の割合(%)」列に追加できます。これにより、ユーザーは、差異を確認するために「差異の割合(%)」を探さなくて済みます。
- 年合計と「差異の割合(%)」の両方を赤色で示すことが要件の一部であった場合、John は両方を赤色で示すことができます。

シナリオ 4

セルを赤色で示すのみでなく、今年度の「予算」が前年度の「実績」金額より大幅に多い(> 5%)場合に、承認ユニットを移動できないようにすることも必要です。この要件を実装するために John に必要な作業は、次の図に示すように、データ検証ルールの処理命令を編集し、「移動しない」を選択することです。

設計時のデータ検証ルール:



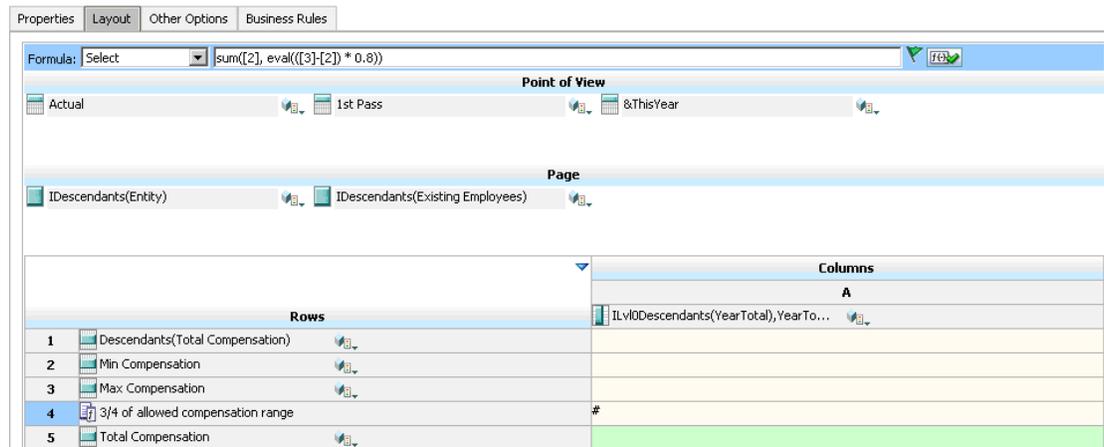
シナリオ 5

最後に、John は、特定部門の従業員の合計報酬が許容範囲内に収まっているかどうかを検証するデータ検証ルールを設計するよう求められました。このルールにより、「運用」部門の「既存の従業員」を評価します。このルールでは、「合計報酬」が許可された「最小」より大きく、従業員の等級に応じた報酬範囲の 4 分の 3 以下である場合、アクションは必要ないと認定します。

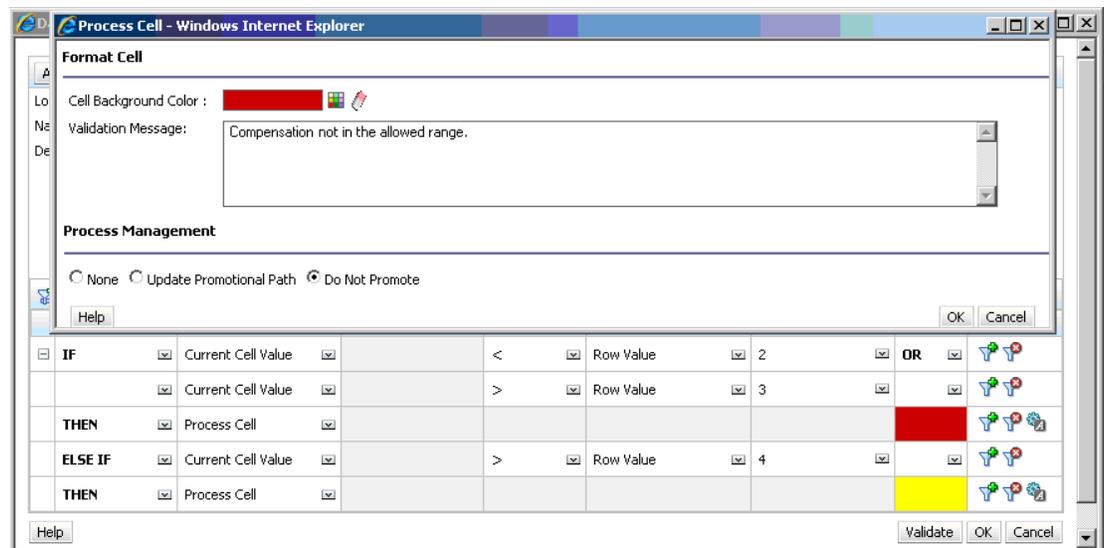
「合計報酬」が報酬範囲の 4 分の 3 を超える場合、検証メッセージが表示され、承認ユニットは人事部長の承認を受ける必要があります。この値が「最小」より小さい場合や、「最大」より大きい場合は、エラーが生成され、ユーザーはその承認ユニットを移動できません。

John は、「フォームの管理」ダイアログ・ボックスから従業員費用サマリーフォームを開きました。このフォームでは、ページに従業員と部門、行に勘定科目(「合計報酬」など)、および列として期間があります。検証を構築しやすくするために、John は、次の図に示すように、報酬範囲の 4 分の 3 を計算するための計算行を追加し、フォームに最小報酬および最大報酬メンバーを追加しました。従業員の等級に応じた最小報酬および最大報酬は、メンバー式を使用して計算されます。

設計時のフォームのレイアウト:



承認ユニットの移動を阻止するデータ検証ルール:



人事部長を確認者として追加するデータ検証ルール:

Process Cell - Windows Internet Explorer

Format Cell

Cell Background Color :

Validation Message:

Process Management

None Update Promotional Path Do Not Promote

Add Delete Copy Paste

	Planning Unit Hierarchy	Planning Units	Promotional Path Condition		Assign		Annotations	
			Position	Planning Units	Role	Users	Sender Message	Reviewer Message
1	testPMHierarchy	entity1	Before		Reviewer	HR Manager		

Condition	Source Type	Source Value	Operator	Target Type	Target Value	Process	Actions
IF	Current Cell Value		<	Row Value	2	OR	
	Current Cell Value		>	Row Value	3		
THEN	Process Cell						
ELSE IF	Current Cell Value		>	Row Value	4		
THEN	Process Cell						

Help Validate OK Cancel

データ検証が適用され、検証メッセージが表示された、データ入力時のフォーム:

Scenario: Actual Version: 1st Pass

Page Operations Existing Employees Go

	Jan	Feb	Mar	Apr	May	Jun	Jul	Aug	Sep	Oct	Nov	Dec
Salary	3000	3000	3000	3000	3000	3000	3000	3010	3100	3300	3300	3300
Merit												
Overtime					500							
Adjusted Salary	3000	3000	3000	3000	3500	3000	3000	3010	3100	3300	3300	3300
Bonus												10000
Sign On Bonus												
Commissions												
Total Salary	3000	3000	3000	3000	3500	3000	3000	3010	3100	3300	3300	13300
Health Care Costs	55	55	55	55	55	55	55	55	55	55	55	55
Severance												
Other Compensation												
Turnover Adjustment												
Min Compensation	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000
Max Compensation	3500	3500	3500	3500	3500	3500	3500	3500	3500	3500	3500	9500
3/4 of allowed compensation	3200	3200	3200	3200	3200	3200	3200	3200	3200	3200	3200	8000
Total Compensation	3055	3055	3055	3055	3355	3055	3055	3065	3155	3355	3355	13355

Data Validation Messages

Salary not in the allowed range. [3]: 1, 2, 3

Salary exceeds 3/4 of maximum allowed. [2]: 1, 2

Salary exceeds 3/4 of maximum allowed.

アプリケーションおよびシステム設定の管理

数値のフォーマット、通知、ページに表示されるアイテム数、別名、日付のフォーマット、アプリケーション所有権の割当てなど、アプリケーションのデフォルトおよびシステム設定を設定します。

次も参照:

- [指定可能なアプリケーションおよびシステム設定](#)
- [ユーザー変数の定義](#)
- [表示形式のカスタマイズ](#)
表示のテーマを変更するか、会社のロゴまたは背景イメージをホーム・ページに追加します。
- [将来のイベントのお知らせ](#)
- [アーティファクト・ラベルの指定](#)

指定可能なアプリケーションおよびシステム設定

次のようなアプリケーションおよびシステムの様々な側面を制御できます。

- 千の位、小数点および負数をフォームで表示する方法
- 通知を受けるアクションの定義
- ユーザー ID ではなくユーザーのフル・ネームの表示
- レポート・オプションの設定
- 別のサービス管理者へのアプリケーション所有権の割当て

アプリケーションおよびシステム設定を変更するには:

1. 「**アプリケーション**」、「**設定**」の順にクリックします。
2. 現在のアプリケーションのデフォルトを指定します。設定の詳細は、以下のアプリケーション設定の表を参照してください。
3. システム設定を指定します。設定の詳細は、以下のシステム設定の表を参照してください。
4. 「**保存**」をクリックします。

表 18-1 アプリケーション設定

アプリケーション設定	説明
別名設定	オプションの詳細は、 デフォルトの別名表の指定と、メンバーおよび別名の表示オプションの設定 を参照してください。
通知	タスク・リストおよびジョブ・コンソールで通知を有効化します。

表 18-1 (続き) アプリケーション設定

アプリケーション設定	説明
ページ	ページでのメンバーのインデントおよびページ・ドロップダウンのアイテム数の設定に対するデフォルトを設定します。 「「ページ」ドロップダウンの項目数」 オプションを使用するとメンバー・リストを短くできるので、「検索」ボックスを容易に見つけられるようになることに注意します。たとえば、リストを 10 メンバーに減らすと、スクロールしなくても「検索」ボックスが見つかります。

表 18-1 (続き) アプリケーション設定

アプリケーション設定	説明
その他オプション	<p>次に示すその他の構成オプションを設定します:</p> <ul style="list-style-type: none"> • 日付フォーマット • 属性ディメンション日付フォーマット • UI 表示: 「標準インタフェース」または「簡易インタフェース」を選択します。 • 部分グリッド・フェッチ・サイズ(行,列): nn, nn の形式で行と列の数を入力します • Smart View でアプリケーション管理オプションを抑制 • アド・ホック読取り専用役割のデータ・ロードの有効化: デフォルトは「いいえ」です。アド・ホック読取り専用役割を持つユーザーのデータ・ロードを有効にするには、「はい」を選択します。 • ルールがバックグラウンドで実行されるまでの秒数の設定: 0 から 600 までの値を入力します。
	<div style="border: 1px solid #0070C0; padding: 10px; background-color: #E6F2FF;"> <p> ノート:</p> <p>フォームがロードまたは保存されたときに自動的に実行されるよう設定されたルールはバックグラウンドで実行されません。</p> </div>
	<ul style="list-style-type: none"> • クライアント・ログ・レベル: 接続したデータ・ソースからのエラー・メッセージ、警告メッセージおよび情報メッセージはすべて発生時に表示されますが、どのメッセージ・レベルのものをブラウザ・コンソールのログ・ファイルに記録するかは選択できます。この設定は、Oracle JET テクノロジを使用する Web インタフェースでのみ使用可能です。表示および記録するメッセージ・レベルの選択: <ul style="list-style-type: none"> - 「なし」: すべてのメッセージを抑制します。 - 「情報」: 警告およびエラーを含む、すべてのメッセージ—問題を診断するために推奨。パフォーマンスに悪影響を与える可能性があります。 - 「警告」: 警告レベルおよびエラー・レベルのメッセージ。パフォーマンスに悪影響を与える可能性があります。 - 「エラー」: エラー・メッセージのみ—一般的な使用に推奨。パフォーマンスへの影響が最小になります。 - 「一般」: 情報レベルのメッセージとすべてのサーバー 応答および要求。パフォーマンスに悪影響を与えます。 • アド・ホックのユーザー式の有効化: 「はい」を選択した場合、アド・ホック・グリッドで、メンバー式が添付されたセルにカーソルを置くと、セルに関連付けられているメンバー式が表示され、計算をオンザフライで実行できます。 • 「セグメント」ドロップダウンでの除外メンバーのフィルタ処理: デフォルトは「はい」です。「いいえ」を選択すると、フォームで行のドロップダウン POV に除外メンバーが表示されます。 • フォーム・バージョン: フォーム・バージョンを指定します。既存のアプリケーションでは、デフォルトは「フォーム 1.0」です。「フォーム 2.0」の有効化は、レッドウッド・エクスペリエンスが有効である場合にのみサポートされます。新しく作成されたアプリケーションのデフォルトは、「フォーム 2.0」です。この設定はアプリケーション固有であり、アプリケーション間で異なる場合があります。

表 18-2 システム設定

システム設定	説明
ユーザーのフル・ネームの表示	選択すると、ユーザーのフル・ネームが表示されます(Max Hennings など)。クリアすると、ユーザーの ID が表示されます(VHennings など)。
キューブのリフレッシュに共有メンバーを含める	選択すると、基本メンバーと共有メンバーの親に割り当てられたアクセス権限の組合せに基づいた、最も高いセキュリティ・アクセスを共有メンバーが継承します。 クリアすると、共有メンバーが基本メンバーに割り当てられたセキュリティ・アクセスを継承します。
電子メールの文字セット	「UTF-8 エンコード」または「地域設定」を選択します。
ビジネス・ルール通知	「はい」に設定されている場合、(Calculation Manager で通知に対して有効な)ルールが完了するか、エラーが発生した場合にユーザーまたはグループに通知します。「ユーザーに通知」で、通知するユーザーまたはグループを選択します。
アド・ホックでの共有メンバーに対するドリルダウンを許可	<ul style="list-style-type: none"> 「はい」では、アド・ホック・グリッドで共有メンバーに対するドリルダウンが許可されます。 「はい」に設定している場合、「ベースのすべてのレベルにドリル」チェック・ボックスが表示されます。 このオプションが「はい」に設定されている場合、ブロックの抑制はサポートされないことに注意してください。ブロックの抑制を無効にするには: <ul style="list-style-type: none"> Oracle Smart View for Office の「オプション」、「データ・オプション」で、「欠落ブロックの抑制」を無効にします。 Web の「プリファレンス」、「アド・ホック・オプション」で、「行で欠落しているブロック」を無効にします。 「いいえ」では、アド・ホック・グリッドで共有メンバーに対するドリルダウンが無効になります。
ベースのすべてのレベルにドリル	<p>アド・ホック・グリッド・ユーザーが共有メンバーから基本階層内のすべてのレベルにドリル・ダウン(またはズーム・イン)することを許可します。このチェック・ボックス・オプションは、標準モードのアプリケーションにのみ適用されます。</p> <p>「ベースのすべてのレベルにドリル」チェック・ボックスは、「アド・ホックでの共有メンバーに対するドリルダウンを許可」が「はい」に設定されている場合に表示されます。</p> <p>多くの場合、共有メンバーはその基本階層で親メンバーです。「ベースのすべてのレベルにドリル」チェック・ボックスを有効にすると、ユーザーはズーム・オプションの「すべてのレベル」または「最下位レベル」を使用して、共有メンバーから基本階層にドリル・ダウンできます。</p> <p>「ベースのすべてのレベルにドリル」チェック・ボックスを無効にすると、ユーザーは「次のレベル」ズーム・オプションを使用して、基本階層の様々なレベルに一度に 1 つずつズーム・インできます。</p> <p>共有メンバーへの複数セル・ズーム・インはサポートされません。</p>

表 18-2 (続き) システム設定

システム設定	説明
アプリケーションの使用可能	バックアップ中などの管理モードのときに、ユーザーがアプリケーションにアクセスできるかどうかを判別します。「 管理者 」を選択すると、非管理者ユーザーがアプリケーションにログオンしている場合、ユーザーは強制的にシステムからログオフされ、ログオンできなくなります。すべてのユーザーがアプリケーションにアクセスできるように復元するには、「 すべてのユーザー 」を選択します。
アプリケーションの所有者の割当	アプリケーションの所有権を別のサービス管理者に割り当てます。 アプリケーションの所有権の詳細は、 アプリケーション所有権の管理 を参照してください。
代替変数の表示を使用可能にする	ユーザーが、ビジネス・ルールで実行時プロンプトへの応答時に「メンバー選択」ダイアログ・ボックスに代替変数をどう表示させるかを次のように設定します。「 すべて表示 」では、すべての代替変数が表示されます。「 何も表示しない 」では、代替変数は表示されません。「 フィルタの使用可能 」では、実行時プロンプトに有効な代替変数のみが表示されます。
抑制モード	行と列にデータの欠落やゼロがある場合の Web および Smart View におけるアド・ホック・グリッドの抑制動作を選択します。 <ul style="list-style-type: none"> • 欠落した値のみを抑制(デフォルト): データなし/欠落を含む行または列、あるいはその両方を抑制します。 • 欠落を抑制したらゼロも抑制: データなし/欠落とゼロの両方を含む行または列、あるいはその両方を抑制します。
Smart View アド・ホック動作	すべての新規および再作成アプリケーションは、自動的に「 標準 」に設定されます。 既存および移行済アプリケーションの場合、 Smart View で拡張アド・ホックの機能および動作を有効にするかどうかを選択します: <ul style="list-style-type: none"> • ネイティブ(デフォルト): 拡張アド・ホック機能を有効にしません。 すべての Smart View リリースでサポートされます。 • 標準: 拡張アド・ホック機能を有効にします。 リリース 11.1.2.5.900 以降の Smart View でサポートされません。 標準モードで使用可能な拡張アド・ホック機能の詳細は、Oracle Smart View for Office の使用の EPM Cloud での Smart View の動作オプションを参照してください。
リフレッシュ時にすべての別名表を使用	アド・ホック・グリッドに入力された別名が、現在選択されている別名表を使用して評価されるか、すべての別名表に対して評価されるかを指定します <ul style="list-style-type: none"> • はい: 入力はいずれの別名表およびすべてのメンバー名に対して評価されます。 • いいえ: 入力は現在選択されている別名表およびすべてのメンバー名に対して評価されます。これがデフォルトの設定です。 入力が有効なメンバー名または別名として識別できない場合、入力はコメントとして表示されます。

表 18-2 (続き) システム設定

システム設定	説明
日次メンテナンス時に増分データ・インポートのために EPM Cloud スマート・リストのテキスト・データをエクスポート	<p>日次メンテナンス・プロセス中に完全なエクスポートを実行するか、アプリケーション・バックアップを作成するかを選択します:</p> <ul style="list-style-type: none"> • はい: 完全なエクスポートを実行することで、ビジネス・プロセス・スマート・リスト・データを含むデータをアプリケーションに増分的にインポートできます(このオプションではメンテナンス・プロセスの時間が長くなる可能性があります) • いいえ(デフォルト): メンテナンス・プロセス時にアプリケーションのバックアップを作成することで、全面的な復元の一部としてデータを使用できます <p>この設定は、ハイブリッドをサポートしない Oracle Essbase にのみ該当することに注意してください。</p> <p>詳細は、<i>Oracle Enterprise Performance Management Cloud オペレーション・ガイド</i>の日次メンテナンス時に増分データ・インポートのためにスマート・リストのテキスト・データをエクスポートを参照してください。</p>
デフォルトで勘定科目をリンク	<p>ブロック・ストレージ(入力)キューブの場合、デフォルトで勘定科目メンバーを XREF リンクするかどうかを選択します:</p> <ul style="list-style-type: none"> • はい(デフォルト): XREF は勘定科目メンバーで作成され、アプリケーションは以前のリリースと同じように機能します。 • いいえ: 勘定科目メンバーの XREF は作成されず、これにより、アプリケーションのパフォーマンスが向上する場合があります。「いいえ」を選択すると、「キューブのリフレッシュ」を実行した後、勘定科目メンバーの既存の XREF はすべて削除され、非ソース・キューブではソース・キューブのデータが表示されなくなります。 <p>特定の勘定科目メンバーで HSP_LINK および HSP_NOLINK UDA を使用すると、その勘定科目メンバーの XREF 設定がオーバーライドされることに注意します。たとえば、このオプションが「いいえ」に設定され、@XREF 関数を使用して、別のキューブのデータ値を検索し、現在のキューブから値を計算する場合、HSP_LINK UDA をそのようなメンバーに追加して、この特定のメンバーに対してのみ@XREF 関数を作成できます。このオプションが「はい」に設定されている場合、HSP_NOLINK は以前のリリースと同じように機能し、特定のメンバーで XREF が作成されないようにします。</p>
属性ディメンション並替えしきい値	<p>0 から 500 までのしきい値を入力します(500 がデフォルト値です)。</p> <p>属性ディメンションについては、特定の親の下のメンバー数が、指定したしきい値を超えると、メタデータのロード中ではなく、ロードの終了時にメンバーが並べ替えられます。属性ディメンションの特定の形状によっては、この数値を調整すると、パフォーマンスに影響が生じることがあります。一般に、属性ディメンションのロード時間が許容可能なレベルを下回らないかぎり、この設定は無視できます。</p>

表 18-2 (続き) システム設定

システム設定	説明
レポート・オプションの設定	<p>次世代のレポートのレポート・ソリューションを使用している場合は、この設定を使用して、レポートの作成に会社で使用している TrueType フォントをアップロードすることをお勧めします。</p> <p>TrueType フォントをアップロードするには、レポートの設定、フォントの管理、+ の順にクリックして、アップロードするフォント・ファイルを選択します。</p> <p>フリーフォームの操作のレポートのレポート・ソリューションの操作を参照してください。</p>

ユーザー変数の定義

部署の費用など、特定のメンバーにユーザーが集中できるように、ユーザー変数を定義できます。たとえば、エンティティの行、および部署というユーザー変数を含むフォームを作成できます。たとえば販売など、部署ユーザー変数のメンバーを選択することによってフォームで表示される行数を制限できます。後で部署に他の値、たとえば営業などを選択できます。

ユーザー変数を更新するには:

1. 「ツール」、「変数」の順にクリックします。
2. 「ユーザー変数」タブをクリックします。
3. 変更する変数の横にある  をクリックします。
4. 「メンバー選択」で、メンバーを選択します。

表示形式のカスタマイズ

表示のテーマを変更するか、会社のロゴまたは背景イメージをホーム・ページに追加します。

外観ページで、Oracle Enterprise Performance Management Cloud 環境の全般的なルック・アンド・フィールを変更できます。新しく作成された、または再作成されたすべての EPM Cloud サービス、ビジネス・プロセスおよびアプリケーションで、レッドウッド・エクスペリエンスがデフォルト・テーマとして使用されます。レッドウッド・エクスペリエンスでは、魅力的なルック・アンド・フィールが提供されるのみでなく、動的タブなど、他のテーマでは使用できない特定の機能も組み込まれます。レッドウッド・エクスペリエンスを使用しない場合は、かわりに、背景色やアイコン・スタイルなどが異なる事前定義済のクラシック・テーマのリストから選択できます。また、ブランド・ロゴや背景イメージをホーム・ページに追加したり、ビジネス・プロセス名を非表示にすることもできます。ホーム・ページ使用の全般情報は、[ホーム・ページについて](#)を参照してください。

 ノート:

「ユーザー・プリファレンス」でプロファイル・ピクチャを設定して、ホーム・ページの「お知らせ」パネルの上部に表示できます。「ツール」に続いて、「ユーザー・プリファレンス」をクリックします。

詳細は、フリーフォームの操作のプロファイル・ピクチャの設定を参照してください。

表示形式をカスタマイズするには:

1. 「ツール」をクリックし、「外観」をクリックします。
2. 次のカスタマイズ・オプションから選択します:
 - **レッドウッド・エクスペリエンスの有効化:** デフォルトのユーザー・エクスペリエンスを活用し、レッドウッド・エクスペリエンスでのみ使用可能な機能を利用するために選択します。このオプションをクリアすると、「テーマ」オプションが表示されます。
 - **テーマ:** 「レッドウッド・エクスペリエンスの有効化」をクリアした場合のみ使用可能です。事前定義済のクラシック・テーマのリストからオプションを選択します。
 - **「ロゴ・イメージ」** および **「背景イメージ」:** 事前定義済の Oracle ロゴおよびテーマに基づく背景イメージを独自のイメージに置き換えます。「ファイル」を選択して、ローカルに保管されているカスタム・イメージ・ファイルを選択するか、「URL」を選択してカスタム・イメージ URL を選択します。サポートされているグラフィック形式は .jpg、.png または .gif であり、ファイル・アップロードは 5MB に制限されています。「事前定義」を選択して、テーマに基づくロゴおよび背景イメージを選択します。

 ノート:

保護された URL のみがサポートされています。URL は、http ではなく https で始まる必要があります。

- **ビジネス・プロセス名の表示:** デフォルトでは、ホーム・ページおよびブラウザのタブ(タブが開いているとき)のロゴの横にビジネス・プロセス名が表示されます。「いいえ」を選択すると、ビジネス・プロセス名がホーム・ページで非表示になり、「Oracle Applications」がブラウザのタブに表示されます。

次の点に注意してください。

- 事前定義済テーマを編集することも、削除することも、カスタム・テーマを作成することもできません。
- ロゴと背景イメージの両方をカスタマイズできます。歪みを避けるため、ロゴ・イメージは 113px x 32px または同等の比率にする必要があります。

背景イメージのデフォルト・サイズは 1024x768 です。これより大きな背景イメージを使用できますが、画面の解像度設定に適合するようにイメージがスケールリングされ、イメージが水平方向に中央揃えされます。背景イメージをブラウザとモバイル・デバイスの両方に適合させるには、最大画面(または解像度

が最高のデバイス)に収まるようにイメージをサイズ設定することをお勧めします。

- カスタムの背景イメージを使用しているお客様は、新しいテーマに切り替えるとき、アイコンおよびラベルの色のコントラストが適切であることを確認する必要がある場合があります。解決するには、異なるテーマまたは適切な背景を選択することを確認してください。

将来のイベントのお知らせ

システム・メンテナンスやジョブの実行など、将来のイベントをユーザーに通知するには、お知らせを作成して送信します。お知らせは、アプリケーションのホーム・ページの「お知らせ」領域に表示されます。

「お知らせ」領域の詳細は、[ホーム・ページについて](#)を参照してください

お知らせを作成するには:

1. 「ツール」をクリックし、「お知らせ」をクリックします。
2. 「作成」をクリックし、次のような情報を入力します。
 - お知らせの目的を要約した件名
 - 開始日(お知らせを送信する時期)。終了日はオプションです。
 - 内容。最初に編集モード(リッチ・テキストまたはソース・コード)を選択する必要があります。

アーティファクト・ラベルの指定

「ツール」クラスタの**アーティファクト・ラベル**・ページを使用すると、サービス管理者は、ユーザーのブラウザのロケールに基づいてアーティファクト・ラベル(アーティファクト名、説明など)をカスタマイズできます。

例をいくつか示します。

- ユーザーに表示しない暗号のような名前で作成する場合、ユーザーの言語で表示されるわかりやすい名前をフォームに定義できます。
- 次の例のように、ユーザーの言語でのみ表示される、アーティファクトに関する有用な指示を作成する場合:
"この式では、休職中の常勤従業員の数が計算されます。"

関連リンク

- [ローカライズ可能なアーティファクト・ラベル](#)
- [アーティファクト・ラベル・グリッドの操作](#)
- [言語の追加とローカライズされたアーティファクト・ラベルの定義](#)
- [編集するアーティファクト・ラベルのエクスポートとインポート](#)

ローカライズ可能なアーティファクト・ラベル

アプリケーションでは、次のアーティファクトの言語の変更がサポートされています。

- カード

- クラスタ
- ダッシュボード
- データ・マップ
- データ検証ルール
- ディメンション
- フォルダ
- フォーム
- メンバー
- メニュー
- メニュー・アイテム
- ナビゲーション・フロー
- キューブ
- 承認ユニット階層
- レポート
- ルール
- ルールセット
- スマート・リスト
- スマート・リスト・エントリ
- タブ
- タスク
- タスク・リスト
- テンプレート
- ユーザー変数
- 有効な交差

アーティファクト・ラベル・グリッドの操作

アーティファクト・ラベル・ページには、アーティファクトおよびプロパティ・タイプでフィルタされた Excel スタイルのスプレッドシート・グリッドが表示されます。

グリッドの行軸には、アーティファクトとそのプロパティが表示されます。

グリッドの列軸には、次の列が表示されます。

- **アーティファクト**: アーティファクトのタイプ(たとえば、タスク・リストやルール)
- **プロパティ**: アーティファクトのプロパティ・タイプ(たとえば、名前、説明など)
- **デフォルト**: アーティファクトの作成時に定義されたアーティファクト・ラベルが表示されます。

言語が追加されると、「**デフォルト**」列の右側に新しい列が表示されます。

アーティファクト・ラベル・グリッドを表示およびフィルタするには:

1. 「ツール」をクリックし、「アーティファクト・ラベル」をクリックします。
2. フィルタするには:
 - a.  をクリックし、操作するアーティファクトを選択します。一部のアーティファクトについては、プロパティ・タイプによってさらにフィルタできます。
 - b. 「適用」をクリックして「フィルタ」ウィンドウを閉じると、アーティファクト・タイプとプロパティ・タイプでフィルタされたアーティファクト・グリッドが表示されます。

言語の追加とローカライズされたアーティファクト・ラベルの定義

サービス管理者は、サポートされている言語のリストから**アーティファクト・ラベル・グリッド**に特定のアーティファクトの言語を追加できます。一度に選択できる言語は 1 つのみです。言語を追加すると、その言語の新しい列がグリッドの「デフォルト」列の右側に追加されます。言語固有の列のセルは編集可能です。

ヒント:

アーティファクト・ラベル・グリッドでラベルを直接追加するには、この方法を使用します。この方法は、一度に少数のラベルのみを追加または更新する必要がある場合に最適です。複数のラベルに影響する用語の変更など、アーティファクト・ラベルに対するバルク変更または更新の場合は、エクスポート機能を使用して **Excel** で編集した後、インポートします。[編集するアーティファクト・ラベルのエクスポートとインポート](#)を参照してください。

言語を追加するには:

1. 「ツール」をクリックし、「アーティファクト・ラベル」をクリックします。
2.  をクリックし、操作するアーティファクトを選択します。一部のアーティファクトについては、プロパティ・タイプによってさらにフィルタできます。
3. 「適用」をクリックします。
4. 「言語の追加」をクリックします。
5. サポートされている言語のリストから選択します。
6. 言語固有の列で、それぞれのアーティファクト・プロパティ(「名前」、「説明」など)について編集可能なセルにアーティファクト・ラベルを入力します。

ノート:

アーティファクト・ラベル・グリッドでは、**[Ctrl]+[C]** (コピー)および**[Ctrl]+[V]** (貼付け)の使用はサポートされていません。

7. 「保存」をクリックします。

 **ノート:**

デフォルトのナビゲーション・フローにローカライズされたアーティファクト・ラベルを定義すると(ホーム・ページでアイコンの名前を編集するなど)、更新内容がすべてのナビゲーション・フローに自動的に伝播されます。ただし、デフォルト・フローではない別のナビゲーション・フローにローカライズされたアーティファクト・ラベルを定義すると、更新内容によってデフォルト・フローのラベルが上書きされます。

編集するアーティファクト・ラベルのエクスポートとインポート

指定した言語のすべてのアーティファクト・ラベルをエクスポートして編集できます。すでにラベルのあるアーティファクトのみがエクスポートされます。ラベルは Excel ファイル形式(XLSX)でエクスポートします。編集後、ラベルをアプリケーションにインポートできます。

 **ヒント:**

この方法は、複数のラベルに影響する用語変更など、言語ごとのアーティファクト・ラベルのバルク変更または編集に使用します。個々のアーティファクト・ラベルを更新する場合は、アーティファクト・グリッドで直接編集できます。言語の追加とローカライズされたアーティファクト・ラベルの定義を参照してください。

言語ごとのアーティファクト・ラベルを編集のためにすべてエクスポートしてインポートするには:

1. 「ツール」をクリックし、「アーティファクト・ラベル」をクリックします。
2. すべてのアーティファクト・ラベルが含まれる XLSX ファイルをエクスポートします:
 - a. 「アクション」、「エクスポート」の順にクリックします。
 - b. エクスポート・ファイルのターゲットの場所を選択します:
 - **ローカル:** エクスポート・ファイルをローカル・コンピュータ上の場所に保存します。
 - **送信ボックス:** エクスポート・ファイルをサーバーに保存します。受信ボックス/送信ボックス・エクスプローラを使用したファイルのアップロードおよびダウンロードを参照してください。
 - c. 言語を選択します。
 - d. 「エクスポート」をクリックします。
3. XLSX ファイルでラベルを編集します。

4. XLSX ファイルをインポートします:
 - a. 「アクション」、「インポート」の順にクリックします。
 - b. インポート・ファイルの場所を選択します。
 - **ローカル**: 自分のコンピュータの場所からインポート・ファイルをロードします。「ソース・ファイル」で、「参照」をクリックして、インポートしているアーティファクトのインポート・ファイルを自分のコンピュータ上で選択します。
 - **受信ボックス**: サーバーからインポート・ファイルをロードします。「ソース・ファイル」内にファイルの名前を入力します。受信ボックス/送信ボックス・エクスペローラを使用したファイルのアップロードおよびダウンロードを参照してください。
 - c. 「インポート」をクリックします。

19

その他の管理タスクへのアクセス

関連リンク

- [「ナビゲータ」メニューについて](#)
- [データ・ロード設定の管理](#)
- [データ統合を使用したインポート](#)
- [アクション・メニューの管理](#)
- [別名表の管理](#)
- [ディメンションの管理](#)
- [フォームの管理](#)
- [ルールの管理](#)
- [ルール・セキュリティの管理](#)
- [スマート・リストの管理](#)
- [タスク・リストの管理](#)
- [ユーザー・プリファレンスの設定](#)
- [変数の管理](#)
- [セル詳細のクリア](#)
- [データのコピー](#)
- [アプリケーション診断の管理](#)

「ナビゲータ」メニューについて

「ナビゲータ」メニューから追加の管理タスクにアクセスできます。

ホーム・ページで「ナビゲータ」をクリックすると、より多くのビジネス・プロセス機能にアクセスできるリンクのリストが表示されます。

ノート:

一部のリンクは、デスクトップからビジネス・プロセスにアクセスしている場合のみ使用可能です。

データ・ロード設定の管理

パラメータを指定して、アプリケーション・データベースにデータを直接ロードできるようにします。必要に応じて、ドライバ・ディメンションの一意的識別子に基づいて親ディメンション・メンバーの子メンバーに詳細をロードする場合、拡張設定を使用できます。

たとえば、開始日、職階、給与基準および支払タイプとともに勘定科目データを従業員ディメンション・メンバーにロードできます。人事データには新規従業員と既存の従業員のプレースホルダが含まれているため、次のような拡張設定も設定できます：

- データ・ロード・ディメンションの親: 新規従業員、既存の従業員
- 新規従業員の一意的識別子: 開始日、職階
- 既存の従業員の一意的識別子: 給与基準、支払タイプ

データ・ロード時に、新規従業員と既存の従業員の子メンバーにデータ更新がないかどうか評価されます。一意的識別子である開始日、職階、給与基準および支払タイプにより、既存のデータ・ロード・ディメンション値が更新されるか、新規値が追加されるかが判別されます。つまり、一意的識別子のデータ値が同じ場合はデータが更新され、データ値が異なる場合は次に使用可能な子メンバーが使用されます。

データをロードするためのパラメータを指定するには：

1. ホーム・ページで「ナビゲータ」をクリックし、「統合」で、「データ・ロードの設定」をクリックします。
2. 「データ・ロード・ディメンション」で、アプリケーション用にデータがロードされるディメンション(従業員など)を選択します。
3. 「ドライバ・ディメンション」で、をクリックし、データのロード先のディメンションを選択します。

たとえば、データを従業員にロードする場合、ドライバ・ディメンションには勘定科目を使用できます。
4. ドライバ・ディメンションのメンバーを選択します。

たとえば、ドライバ・ディメンションが勘定科目である場合、ドライバ・ディメンション・メンバーには開始日、等級、職階、給与基準および支払タイプを組み込むことができます。
5. **オプション:** 拡張設定を使用するには、次のステップに従います。
 - a. をクリックして行を追加します。
 - b. 新規フィールドの右側で、をクリックし、親メンバーを選択します。

メンバーの選択の詳細は、[メンバー・セレクトの使用](#)を参照してください。
 - c. 親メンバーの右側にある「ドライバ・ディメンションの一意的識別子」の下で、メンバーを一意的識別子として選択します。(このフィールドで選択したメンバーは、ページの上部にある選択済ドライバ・ディメンション・メンバーのリストに追加されます。)

各親メンバーには、少なくとも 1 つの一意の識別子メンバーを含める必要があります。これらの識別子メンバーにより、既存のデータ・ロード・ディメンション値が更新されるか、新規値が追加されるかが判別されます。

- d. 必要に応じて、前述のステップを繰り返して、行の追加を続行します。
- e. 行を複製または削除するには、行内をクリックし、 または  をクリックします。

データ統合を使用したインポート

データ統合は、Oracle Fusion Cloud EPM での統合プロセスの実行の基礎となるメカニズムです。忙しい管理者やユーザー向けに設計されたものであり、ファイルベース統合と直接統合のソースの定義、ソース・データを必要なターゲット・フォーマットに変換するためのマッピング・ルールの作成、および定期的なデータ・ロード・プロセスの実行と管理が可能になります。一般的な統合タスクは、作業方法をサポートし、それに準拠する、ナビゲートしやすいインタフェースを使用して行います。

統合プロセスの一般的な理解については、*Oracle Enterprise Performance Management Cloud データ統合の管理*のデータ統合の定義を参照してください。

チュートリアル

チュートリアルには、トピックを学習するのに役立つ一連のビデオおよびドキュメントを使用した説明が用意されています。

目的

アプリケーションの登録、期間マッピングの定義、カテゴリ・マッピングの定義およびファイルベースのデータ統合の作成と実行の方法を学習します。

方法の学習

 データ統合を使用したデータのロード

アクション・メニューの管理

次も参照:

- [アクション・メニューの作成と更新](#)
- [アクション・メニュー・アイテムの操作](#)
- [アクション・メニュー・アイテムの定義](#)

アクション・メニューの作成と更新

サービス管理者は、右クリック(アクション)メニューを作成し、それらをフォームに関連付けることにより、ユーザーがフォームで行や列をクリックして、次の操作を実行するメニュー・アイテムを選択できるようにすることができます。

- 実行時プロンプトがあってもなくても、別のアプリケーション、URL またはビジネス・ルールを起動
- 別のフォームへの移動
- ジョブを開く

右クリックのコンテキストは、POV とページ、ユーザーがクリックしたメンバー、左のメンバー(行)や上(列)など、次のアクションへ送られます。

フォームの設計時に、「**その他オプション**」を使用して、「フォーム」メニュー・アイテム・タイプで使用可能なメニューを選択します。アプリケーションを更新するとき、それに適切なメニューが更新されます。たとえば、メニューで参照されているビジネス・ルールを削除する場合は、そのルールをメニューから削除します。

アクション・メニューを作成、編集または削除するには:

1. ホーム・ページで「ナビゲータ」をクリックし、「作成および管理」で、「アクション・メニュー」をクリックします。
2. 次のいずれかのアクションを行います:
 - アクション・メニューを作成するには、をクリックし、メニューの名前を入力して、「OK」をクリックします。
 - アクション・メニューの詳細を編集するには、それを選択し、をクリックします。[アクション・メニュー・アイテムの操作](#)を参照してください。
 - アクション・メニューを削除するには、それらを選択し、をクリックして、「OK」をクリックします。

アクション・メニュー・アイテムの操作

「**メニューの編集**」ページには、現在のアクション・メニューの名前、ラベル、必要なディメンション、アイコン、タイプ(「URL」、「フォーム」、「ビジネス・ルール」、「メニュー・ヘッダー」、「フォーム」および「ジョブ」)を含むメニュー・アイテムが表示されます。

アクション・メニュー・アイテムを操作するには:

1. ホーム・ページで「ナビゲータ」をクリックし、「作成および管理」で、「アクション・メニュー」をクリックします。
2. メニューを選択し、をクリックします。
3. **初回のみ:** メニューに初めてアイテムを追加するには、「子の追加」をクリックして、「保存」をクリックします。
4. メニュー・アイテムを選択して、次のことを実行できます。
 - 選択したメニュー・アイテムの下にメニュー・アイテムを追加するには、「**子の追加**」(メニューのタイプが「メニュー・ヘッダー」の場合)をクリックします。
 - 選択したメニュー・アイテムと同じレベルにメニュー・アイテムを追加するには、「**兄弟の追加**」をクリックします。
 - メニュー・アイテムを編集し、メニュー・アイテムのプロパティを定義するには、「**メニュー・アイテムの編集**」をクリックします。
 - メニュー・アイテムを削除するには、「**メニュー・アイテムの削除**」をクリックします。
 - 同じレベル内でメニュー・アイテムの順番を変更するには、「**上へ移動**」または「**下へ移動**」をクリックします。複数のアイテムを移動できます。

5. 「保存」をクリックします。

「名前を付けて保存」をクリックして、新しいメニュー名の下にある現在の選択肢を保存します。

アクション・メニュー・アイテムの定義

アクション・メニュー・アイテムを定義するには:

1. ホーム・ページで「ナビゲータ」をクリックし、「作成および管理」で、「アクション・メニュー」をクリックします。
2. メニューを選択し、をクリックします。
3. メニュー・アイテムを選択し、「メニュー・アイテムの編集」または「兄弟の追加」をクリックします。
4. メニュー・アイテムを定義します:

表 19-1 「メニュー・アイテムの編集」のオプション

アイテム	説明
メニュー・アイテム	特殊文字やスペースを入れずに、英数字とアンダースコア文字のみを含む一意の名前を入力します。
ラベル	メニューが選択されたときに表示されるテキストを入力します。スペースおよび特殊文字を使用できます。メニュー・ラベルはユーザー・インタフェースに表示されます。ラベルはテキストか、名前のリソース変数から参照できるものにします。たとえば、メニューのラベルを「ファイル」と設定して、それを「ファイル」に直接設定するか、ローカライズ可能な、「ラベル_ファイル」のようなリソースの名前に設定します。
アイコン	このオプションは現在サポートされていません。

表 19-1 (続き) 「メニュー・アイテムの編集」のオプション

アイテム	説明
タイプ	メニュー・アイテム・タイプを選択して、使用可能なプロパティを判別します。

 **ノート:**

「メニュー・ヘッダー」にプロパティは使用できません。

- **URL:** 指定された URL を開くメニューを作成します。
- **フォーム:** 選択したフォームを起動するメニューを作成します。ユーザーが、ソース・フォーム内で右クリックすると、メンバー、ページ、POV のメンバー選択のコンテキストが保持されます。ターゲット・フォームにページのこれらのディメンション・メンバーが含まれる場合、そのページはコンテキストが一致するよう設定されます。**Web** から起動された場合、フォームは **Web** で開きます。**Oracle Smart View for Office** から起動された場合、フォームは **Smart View** で開きます。フレックス・フォームとして有効化されるフォームを参照するアクション・メニューは、これらのフォームを **Smart View** ではフレックス・フォームとして開き、**Web** では単一のフォームとして開きます。
- **ビジネス・ルール:** 選択したビジネス・ルールを起動するメニューを作成します。
- **ダッシュボード:** 選択したダッシュボードを起動するメニューを作成します。ユーザーがソース・フォーム内で右クリックするとセル・コンテキストが保持され、ダッシュボードが新しい動的タブに開きます。

 **ノート:**

動的タブ機能は、レッドウッド・エクスペリエンスが有効になっている場合にのみ使用できます。

- **メニュー・ヘッダー:** 子のメニュー・アイテムの作成先にメニューを作成します。このアイテムでメニューに区切り線を表示するには、「ラベル」にハイフンを 1 つ入力します。この場合、「必須ディメンション」リストは使用できません。
- **前のフォーム:** ユーザーを前のフォームに戻すメニューを作成します。
- **バージョンのコピー:** 「バージョンのコピー」を開いて、管理者が現在のフォームのデータをコピーできるようにするメニューを作成します。

 **ノート:**

パワー・ユーザーおよびユーザーは、「バージョンのコピー」を使用できません。

表 19-1 (続き) 「メニュー・アイテムの編集」のオプション

アイテム	説明
必須パラメータ	ディメンションとメンバーを選択するか、メニュー・アイテムを表示するオプション(「視点」、「ページ」、「行」、「列」、「メンバーのみ」、「セルのみ」)を選択します。たとえば「勘定科目」を選択すると、ユーザーがフォームで勘定科目メンバーを右クリックしたときにメニューが表示されます。「行」を選択すると、ユーザーが行を右クリックしたときにメニューが表示されます。「なし」を選択すると、ユーザーがフォーム内の任意の場所を右クリックしたときにメニューが表示されます。

 **ノート:**

Smart View では、フォーム(単一のフォームまたはフレックス・フォーム)に添付されたアクション・メニューで、「ページ」および「POV」オプションはサポートされていません。

- メニュー・アイテムのタイプごとに、異なるメニュー・アイテム・プロパティを定義します:

表 19-2 メニュー・アイテム・タイプのオプション

タイプ	オプション
URL	<ol style="list-style-type: none"> 「URL」で、ユーザーがアクセスする完全な URL を入力します。 例: <code>http://サーバー名/HFM/Logon/HsvLogon.asp</code> URL タイプのアクション・メニューは、新しいタブを自動的に起動します。 「フォーム・コンテキストの使用」を選択して、URL のカッコで囲まれたディメンション名(たとえば、<code><Entity></code>や <code><Account></code>)を、フォームのページまたは POV の対応するディメンションのメンバー名と置き換えます。 たとえば、URL でエンティティ、シナリオ、バージョンおよび勘定科目ディメンションのメンバーを返すには、URL を入力して「フォーム・コンテキストの使用」を有効にします: <code>http://yourcompanyurl/ EntDim=<Entity>&test['VERSION']=<Version>&Acc=<Account></code> URL は新しいタブで次のように開きます: <code>http://yourcompanyurl/ EntDim=<410>&test['VERSION']=<working>&Acc=<1110></code> 「フォーム・コンテキストの使用」を無効にすると、URL は新しいタブでコンテキストを置換せずにそのまま起動されます。
フォーム	<ol style="list-style-type: none"> 「フォーム・フォルダ」で、宛先フォームを含むフォルダを選択します。 「フォーム」で、フォームを選択します。

表 19-2 (続き) メニュー・アイテム・タイプのオプション

タイプ	オプション
ビジネス・ルール	<p>a. 「キューブ」で、ビジネス・ルールで使用できるキューブを選択します。</p> <p>b. 「ビジネス・ルール」で、起動するビジネス・ルールを選択します。</p> <p>c. 「表示タイプ」で、実行時プロンプト・ページの表示方法を選択します:</p> <ul style="list-style-type: none"> クラシック・ビュー: デフォルトのアプリケーション・ビューを使用 ストリームライン・ビュー: 異なるラインで各実行時プロンプトを表示 <p>d. オプション: 「ウィンドウ・タイトル」で、実行時プロンプトのかわりに表示するタイトルを入力します。</p> <p>e. オプション: 「OK ボタン・ラベル」で、「OK」ボタンに表示するテキストを入力します。</p> <p>f. オプション: 「取消 ボタン・ラベル」で、「取消」ボタンに表示するテキストを入力します。</p> <p>g. オプション: 「確認メッセージの起動」で、ビジネス・ルールが呼び出されて起動する前に表示するテキストを入力します。このオプションにより、サービス管理者はビジネス・ルールの起動の結果についてユーザーに意味のあるメッセージを表示することができます。</p>
ダッシュボード	「ダッシュボード」で、ダッシュボードを選択します。
前のフォーム	ユーザーを前のフォームに戻すメニュー・アイテムの名前を入力します。

6. 「保存」をクリックします。

別名表の管理

次も参照:

- 別名について
- 別名表について
- 別名表の操作
- デフォルトの別名表の指定と、メンバーおよび別名の表示オプションの設定

別名について

代替名(別名)を、勘定科目、通貨、エンティティ、シナリオ、期間、バージョン、年およびユーザー定義のディメンション・メンバーに割り当てることができます。アプリケーションでは、ディメンション・メンバーごとに、デフォルトの別名を含めて、最大 30 個の別名を付けることができます。別名は、1 つの別名表内および複数の別名表間で同じ名前を持つことができます。

別名は、次を持つこともできます:

- メンバーと同じ名前
- 親および子であるメンバーについて同じ別名
- 異なるディメンションまたは同じディメンションのメンバーについて同じ名前

ノート:

- メンバーを一意に識別する方法がなくなるため、兄弟である 2 つのメンバーに同じ別名を指定することはできません。このルールは、アプリケーションによって基本メンバーに適用されますが、共有メンバーには適用されません。
共有メンバーに別名を直接設定することはできないため、このルールは共有メンバーには適用されません。共有メンバーの別名は、その基本メンバーから継承されます。代替階層を作成すれば、そこで 2 つの共有メンバーが同じ別名と兄弟を持つことができます。ただし、これらのメンバーをアドホック・グリッドから別名によって参照する場合、この状況は推奨されません。別名をグリッドに入力してアプリケーションに送信すると、そのアプリケーションはこのメンバーを一意に解決できなくなり、エラーが返されるためです。表示の目的にのみ別名を使用する場合は、問題ではありませんが、この設計は推奨されません。視覚上で、これらの 2 つのメンバーを識別する方法がないためです。
- 別名はメンバーと同じ名前を持つことができますが、**member1** の別名を **member2** と同じ名前に設定しないように注意してください。これは、意図しない結果につながる場合があり、フォーム・グリッドで混乱が生じます。
- メンバー名は、ルールおよびフォーム設計で使用できるように、一意にする必要があります。

別名表について

別名表の作成および更新、アプリケーションの別名表の設定ができます。[命名規則](#)の命名規則に従ってください。

たとえば、複数の別名表が次の言語の組合せをサポートしています:

- 英語、フランス語、ドイツ語、スペイン語およびイタリア語
- 日本語と英語
- 韓国語と英語
- トルコ語と英語

ノート:

別名表のサポートは、これらの言語の組合せに限定されていません。

別名表を設定してアプリケーションのメンバーを表示できます。ユーザーは、プリファレンスの別名表を設定できます。

別名表の操作

別名表を追加、編集、名前変更、削除したり、別名表の値をクリアできます。別名表の内容を 1 つの表から別の表にコピーすることもできます。

別名表を操作するには:

1. ホーム・ページで「ナビゲータ」をクリックしてから、「作成および管理」で、「別名表」をクリックします。
2. タスクを選択します。
 - 別名表を追加する場合は、をクリックし、「追加 - 別名表」に名前を入力します。
 - 別名表を編集または名前変更するには、別名表を選択し、をクリックして、「編集 - 別名表」に名前を入力します。
 - 別名表を削除する場合は、別名表を選択し、「削除」をクリックします。

ノート:

デフォルトの別名表は削除できません。

- 別名表の値をクリアするには、クリアする別名表を選択し、「値のクリア」をクリックします。

ノート:

別名表をクリアすると、表の内容は除去されますが、表自体は除去されません。

- 別名表の内容をコピーする場合は、別名表を選択し、「コピー」をクリックして、コピー先の別名表を選択し、「コピー」をクリックします。

ノート:

移行先の別名表が存在している必要があります。コピーしても表は作成されません。

3. 「OK」をクリックします。

デフォルトの別名表の指定と、メンバーおよび別名の表示オプションの設定

勘定科目、通貨、エンティティ、シナリオ、期間、バージョン、年およびユーザー定義のディメンションとメンバーの別名で別名表を作成する場合、アプリケーション用

デフォルトの別名表を選択できます。ユーザーは、一連の別名(別名表に保管済)でプリファレンスを設定し、メンバーおよびディメンション名の表示に使用できます。

アプリケーションのデフォルトの別名表を選択するには:

1. ホーム・ページで、「**アプリケーション**」をクリックし、「**設定**」をクリックします。
2. 「**別名表**」で、別名表を選択します。
3. 「**メンバーのラベルの表示形式**」で、アプリケーション全体でメンバー・セレクトにメンバー・データの種類を表示できるようにするオプションを選択します。
 - **デフォルト**: フォーム、グリッドまたはディメンション設定によって判別されるデータ
 - **メンバー名**: メンバー名のみ
 - **別名**: メンバーの別名のみ(定義されている場合)
 - **メンバー名:別名**: 名前に続けて別名(定義されている場合)
 - **別名:メンバー名**: 別名(定義されている場合)に続けて名前
4. 「**保存**」または、「**リセット**」をクリックします。

ディメンションの管理

ここでは、クラシック・ディメンション・エディタを使用してディメンションを編集する方法について説明します。「ナビゲータ」メニューの「**ディメンション**」リンクからアクセスします。17.05 (2017 年 5 月)の更新で、簡易ディメンション・エディタがリリースされました。

簡易ディメンション・エディタの使用の詳細は、[簡易ディメンション・エディタでのディメンションの編集](#)を参照してください。

関連リンク

[ディメンションについて](#)

[ディメンション階層の操作](#)

[カスタム・ディメンション、エンティティ、勘定科目、期間およびキューブについて](#)

[ユーザー定義カスタム・ディメンションの追加または編集](#)

[メンバーの操作](#)

[属性の操作](#)

[属性値の操作](#)

[カレンダーのカスタマイズ](#)

[動的時系列メンバーの設定](#)

[UDA の操作](#)

[メンバー式の操作](#)

ディメンションについて

ディメンションで、データ値が分類されます。

フリーフォームでは、標準アプリケーションによって強制されるキューブおよびディメンションの制限を受けずに、選択したキューブおよびディメンションでアプリケーションを作成できます。集約ストレージとブロック・ストレージを任意に組み合わせて、最大で合計 12 のキューブを追加できます。[フリーフォームの理解](#)を参照してください。

メンバーはディメンションのコンポーネントです。

ディメンションの詳細は、[ディメンションの概要](#)を参照してください。

ディメンション階層の操作

次も参照:

- [キューブによるディメンション・ビューのフィルタ](#)
- [メンバーのソート](#)
- [メンバーの祖先の表示](#)
- [アプリケーション内でメンバーが使用される場所の判別](#)

キューブによるディメンション・ビューのフィルタ

ディメンション・ビューをキューブでフィルタできます。キューブを選択すると、そのキューブで使用されているディメンションのみが「**ディメンション**」ページに表示されます。

ディメンション・ビューをキューブでフィルタするには:

1. ホーム・ページで「ナビゲータ」をクリックし、「作成および管理」で、「**ディメンション**」をクリックします。
2. 「**キューブ**」で、キューブを選択します。

選択したキューブで使用されているディメンションのみが表示されます。

メンバーのソート

子または子孫による昇順または降順でメンバーをソートできます。メンバーのソートはアウトラインに影響を及ぼします。

メンバーをソートするには:

1. ホーム・ページで「ナビゲータ」をクリックし、「作成および管理」で、「**ディメンション**」をクリックします。
2. 「**ディメンション**」で、メンバーのディメンションを選択します。
3. 「**ディメンション**」タブで、子または子孫をソートするメンバーを選択します。
4. 「**ソート**」で、子または子孫を選択します。

子でソートする場合は、選択したメンバーの真下のレベルにあるメンバーのみにソートがかかります。子孫でソートする場合は、選択したメンバーのすべての子孫にソートがかかります。

5. 昇順でソートする場合は  を、降順でソートする場合は  をクリックします。
6. 「OK」をクリックします。

次にデータベースを作成またはリフレッシュするとき、表示される順序のメンバーでアウトラインが生成されます。

メンバーの祖先の表示

メンバーの祖先を表示するには:

1. ホーム・ページで「ナビゲータ」  をクリックし、「作成および管理」で、「ディメンション」をクリックします。
2. 「ディメンション」で、ディメンションを選択します。
3. ディメンション階層内のメンバーを選択します。
4.  をクリックします。
5. 「OK」をクリックします。

アプリケーション内でメンバーが使用される場所の判別

アプリケーション内でメンバーが使用される場所を表示するには:

1. ホーム・ページで「ナビゲータ」  をクリックし、「作成および管理」で、「ディメンション」をクリックします。
2. メンバーの使用状況を表示するディメンションを選択します。
3.  をクリックします。

カスタム・ディメンション、エンティティ、勘定科目、期間およびキューブについて

詳細は、次のトピックを参照してください。

- [カスタム・ディメンションについて](#)
- [エンティティについて](#)
- [勘定科目について](#)
- [勘定科目、エンティティ、期間およびキューブ](#)

ユーザー定義カスタム・ディメンションの追加または編集

ユーザー定義のカスタム・ディメンションは、[命名規則](#)に記載されているガイドラインに従っている必要があります。

表 19-3 ユーザー定義カスタム・ディメンションのプロパティ

プロパティ	値
ディメンション	ディメンション全体で一意である名前を入力します。
別名	オプション: 別名表を選択します。ディメンションの代替名を入力します。 別名について を参照してください。
説明	オプション: 説明を入力します。
キューブに有効	ディメンションに有効なキューブを選択します。このオプションをクリアすると、ディメンションのすべてのメンバーが、選択を解除したキューブに対して無効になります。
セキュリティの適用	ディメンション・メンバーにセキュリティの設定を行います。ディメンション・メンバーにアクセス権を割り当てる前に選択する必要があります。そうしない場合、ディメンションにセキュリティがかからないため、ユーザーは無制限にメンバーをアクセスさせることができます。
データ・ストレージ	データ・ストレージ・オプションを選択します。デフォルトは「共有しない」です。

ユーザー定義のディメンションを追加または変更するには:

1. ホーム・ページで「ナビゲータ」をクリックし、「作成および管理」で、「ディメンション」をクリックします。
 2. をクリックするか、既存のディメンションを選択して  をクリックします。
 3. 前述のプロパティのいずれかを指定します。
 4. 「保存」をクリックします。
 5. 「OK」をクリックします。
- 「リフレッシュ」をクリックすると、前の値に戻されます。ページは開いたままです。
- [ディメンション・プロパティの設定](#)
 - [ディメンションの密度と順序の設定](#)
 - [評価順序の設定](#)

ディメンション・プロパティの設定

ディメンション・プロパティは、[命名規則](#)にあるガイドラインに適合させてください。

表 19-4 ディメンション・プロパティ

プロパティ	値
ディメンション	ディメンション全体で一意である名前を入力します。
説明	オプション: 説明を入力します。
「別名表」 および 「別名」	オプション: 別名表を選択します。ディメンションの代替名を入力します。 別名表の管理 を参照してください。

表 19-4 (続き) ディメンション・プロパティ

プロパティ	値
キューブに有効	ディメンションに有効なキューブを選択します。このオプションをクリアすると、ディメンションのすべてのメンバーが、選択を解除したキューブに対して無効になります。
2 パス計算	親メンバーまたは他のメンバーの値に基づいてメンバーの値を再計算します。「動的計算」または「動的計算および保管」プロパティで、勘定科目とエンティティ・メンバーに使用できます。
セキュリティの適用	ディメンション・メンバーにセキュリティの設定を行います。ディメンション・メンバーにアクセス権を割り当てる前に選択する必要があります。そうしない場合、ディメンションにセキュリティがかからないため、ユーザーは無制限にメンバーをアクセスさせることができます。
データ・ストレージ	データ・ストレージ・オプションを選択します。デフォルトは「共有しない」です。
表示オプション	「メンバー選択」ダイアログ・ボックスのアプリケーションのデフォルト表示オプションを設定します。メンバーまたは別名を表示するには、「メンバー名」または「別名」を選択します。「メンバー名:別名」では、左側にメンバーが表示され、右側に別名が表示されます。「別名:メンバー名」では、左側に別名が表示され、右側にメンバーが表示されます。

ディメンションの密度と順序の設定

「パフォーマンス設定」タブで、ディメンションを疎または密に設定し、その優先順位を設定できます。

パフォーマンス設定を管理するには:

1. ホーム・ページで「ナビゲータ」をクリックし、「作成および管理」で、「ディメンション」をクリックします。
2. 「パフォーマンス設定」タブを選択します。
3. 各ディメンションに対し、「密度」を「密」または「疎」に設定します。
[疎ディメンションおよび密ディメンションについて](#)を参照してください。

ノート:

「密度」列は、ASO キューブのみを含むアプリケーションでは非表示になっています。アプリケーションに BSO キューブまたは BSO キューブと ASO キューブが含まれている場合、両方のキューブで「密度」列が表示されます。

4. ディメンションを選択し、「位置」列見出しの横にある▲または▼をクリックして、優先順位を設定します。

評価順序の設定

「評価順」タブで、データ交差にデータ・タイプの競合がある場合に優先されるデータ・タイプを指定できます。

評価順序を設定するには:

1. ホーム・ページで「ナビゲータ」をクリックし、「作成および管理」で、「ディメンション」をクリックします。
2. 「評価順」を選択し、キューブを選択します。
3. 「使用可能なディメンション」からディメンションを選択し、これらを「選択したディメンション」に移動します。
 - は、選択したディメンションを移動します
 - は、すべてのディメンションを移動します
 - は、選択したディメンションを削除します
 - は、すべてのディメンションを削除します

メンバーが特定のデータ・タイプを持つディメンションのみを選択する必要があります(つまり、そのデータ・タイプは「未指定」ではありません)。データ・タイプ「未指定」は他のデータ・タイプと競合しません。
4. 複数のディメンションを選択した場合、またはをクリックして優先順序を設定します。
5. 「保存」をクリックします。

メンバーの操作

メンバーへのアクセス権の割当て、ディメンション・メンバー階層の再配置、エンティティ、勘定科目およびユーザー定義のカスタム・ディメンションのメンバーの共有、動的メンバーのオンザフライ作成が可能です。

- [ディメンション・メンバーの検索](#)
- [メンバーに対するアクセス権の割当てについて](#)
- [メンバーの追加または編集](#)
- [メンバーの削除](#)
- [親メンバーの削除](#)
- [共有メンバーの操作](#)
- [共有メンバーの作成](#)
- [動的メンバーについて](#)

ディメンション・メンバーの検索

ディメンション階層内のディメンション・メンバーを検索するには:

1. ホーム・ページで「ナビゲータ」をクリックし、「作成および管理」で、「ディメンション」をクリックします。
2. 「ディメンション」で、メンバーのディメンションを選択します。
3. 「検索」では、「名前」、「別名」、または「両方」を選択します。
4. 検索する検索テキスト(メンバーの名前、別名または文字列の一部)を入力します。
5.  または  をクリックします。

メンバーに対するアクセス権の割当てについて

サービス管理者はメンバーにアクセス権を割り当てることができます。

メンバーに権限を割り当てるには、ディメンション・プロパティ「**セキュリティの適用**」を選択します。「**セキュリティの適用**」の設定を省略またはクリアすると、すべてのユーザーがディメンションのメンバーにアクセスできるようになります。デフォルトでは、勘定科目、エンティティ、シナリオおよびバージョン・ディメンションのアクセス権限が使用可能です。オプションで、期間、年およびカスタム・ディメンションについてこのオプションを有効にすることができます。

詳細は、[ディメンション・メンバーへのアクセス権の割当て](#)を参照してください。メンバーに対してアクセス権を有効にするには、[簡易ディメンション・エディタでのディメンション・プロパティの編集](#)を参照してください。

メンバーの追加または編集

メンバーは、[命名規則](#)に記載されているガイドラインに従っている必要があります。共有メンバーは、[共有メンバーの操作](#)に沿っている必要があります。

表 19-5 メンバーのプロパティ

プロパティ	値
名前	ディメンション・メンバー全体で一意である名前を入力します。
説明	オプション: 説明を入力します。
別名表	オプション: 別名表を選択し、別名を保管します。「別名」にメンバーの代替名を入力します。 別名表の管理 を参照してください。
勘定科目メンバーのみ: 勘定科目タイプ	「費用」、「収益」、「資産」、「負債」、「資本」または「保存された仮定」を選択します。 詳細は、 勘定科目タイプ を参照してください。
勘定科目メンバーのみ: 差異レポート	勘定科目タイプが「保存された仮定」の場合、「費用」または「費用外」を選択します。保存された仮定を、収益、資産、負債、資本の勘定科目に指定します。
勘定科目メンバーのみ: タイム・バランス	「フロー」、「最初」、「残高」、「平均」、「入力」、「加重された平均-Actual_Actual」または「加重された平均-Actual_365」を選択します。 詳細は、 タイム・バランス・プロパティ を参照してください。
勘定科目メンバーのみ: スキップ	勘定科目タイプが「資産」、「資本」または「負債」の場合、「なし」、「欠落」、「ゼロ」または「欠落およびゼロ」を選択します。 詳細は、 ゼロと欠落した値の勘定科目計算の設定 を参照してください。

表 19-5 (続き) メンバーのプロパティ

プロパティ	値
勘定科目メンバーのみ: 為替レート・タイプ	「平均」、「期末」または「履歴」を選択します。 詳細は、 データ型 を参照してください。
勘定科目メンバーのみ: データ型	「パーセンテージ」、「日付」または「テキスト」を選択します。 詳細は、 データ型 を参照してください。
勘定科目メンバーのみ: 配分	週次配分を設定します。アプリケーションの作成時に、このオプションが選択済で基本期間が 12 か月の場合、リーフ勘定科目メンバーに使用できます。
階層タイプ	「階層タイプ」は、集約ストレージ・キューブにバインドされたディメンションに使用できます。集約ストレージ・ディメンションは、複数階層をサポートするために自動的に有効になります。複数階層のディメンションの最初の階層は保管階層である必要があります。
	<div style="border-left: 2px solid #0070C0; padding-left: 10px; margin-left: 20px;"> <p> ノート:</p> <p>保管階層タイプのメンバーについては、有効なキューブ集約オプションは「加算」または「無視」のみです。保管階層で、最初のメンバーを「加算」に設定する必要があります。動的階層タイプのメンバーについては、すべてのキューブ集約オプションが有効です。「ラベルのみ」メンバーの子ではない保管階層では、集計演算子として「加算」を指定する必要があります。「ラベルのみ」メンバーの子は「無視」に設定できます。</p> </div>
データ・ストレージ	データ・ストレージのプロパティを選択します。新規カスタム・ディメンション・メンバー(ルート・メンバー以外)に対して、デフォルトは「共有しない」です。
2 パス計算	親メンバーまたは他のメンバーの値に基づいてメンバーの値を再計算します。「動的計算」または「動的計算および保管」プロパティで、勘定科目とエンティティ・メンバーに使用できます。

表 19-5 (続き) メンバーのプロパティ

プロパティ	値
プラン・タイプ	メンバーに有効なプラン・タイプ(またはキューブ)を選択します。

 **ノート:**

メンバーは、集約ストレージ・キューブとブロック・ストレージ・キューブの両方に属することができます。

選択したキューブごとに集約オプションを選択します。複数のキューブがメンバーに有効な場合にのみ、ソース・キューブを選択できます。メンバーの親に有効なキューブと集約オプションのみが使用可能です。親がキューブまたは集約オプションに有効でない場合は、子メンバーも有効になりません。勘定科目またはエンティティの親メンバーについてキューブの選択を解除すると、その親のすべての子孫についても、その選択が解除されます。保管階層タイプのメンバーに対して有効な集約オプションは、「加算」または「無視」のみです。[集約オプション](#)を参照してください。

 **注意:**

アプリケーションにデータを入力した後でディメンション・メンバーのキューブの選択を解除すると、アプリケーションをリフレッシュしたときにデータが失われる場合があります。勘定科目メンバーについては、選択を解除されたキューブがソース・キューブの場合、データが失われません。

カスタム・ディメンションおよび期間ディメンションのメンバーには、勘定科目ディメンションやエンティティ・ディメンションと同様に、キューブ別に使用方法を設定できます。

勘定科目メンバーのみ: **ソース・キューブ**

メンバーのソース・キューブを選択します。共有メンバーは基本メンバーへのポインタで、保管されません。これは共有メンバーに無効です。共有メンバーに適用されないため、ソース・プラン・フィールドは使用できませんが、共有勘定科目メンバーのソース・キューブは基本メンバーのソース・キューブと一致します。

スマート・リスト

オプション: スマート・リストを選択してメンバーに関連付けます。

動的な子に対して使用可能

ユーザーが、動的な親メンバーを使用するように構成されたビジネス・ルールの実行時プロンプトでメンバー名を入力することにより、このメンバーの子を作成できるようにします([動的メンバーについて](#)を参照)。

使用可能な動的な子の数

このオプションは、「**動的な子に対して使用可能**」が選択されている場合のみ使用可能です。ユーザーが作成できる、動的に追加する最大メンバー数を入力します。デフォルトは 10 です。

表 19-5 (続き) メンバーのプロパティ

プロパティ	値
メンバー作成者に付与されたアクセス権	<p>このオプションは、「動的な子に対して使用可能」が選択されている場合のみ使用可能です。メンバー作成者が実行時プロンプトで作成する動的メンバーに対して持つ権限を判別します:</p> <ul style="list-style-type: none"> • 継承: メンバー作成者は、新しく作成したメンバーに対する最も近い親のアクセス権を継承します。 • なし: メンバー作成者には、新しく作成したメンバーへのアクセス権は割り当てられません。(サービス管理者は、後でメンバー作成者にメンバーへのアクセス権を割り当てることができます。) • 読取り: メンバー作成者には、新しく作成したメンバーへの読取りアクセス権が割り当てられます。 • 書込み: メンバー作成者には、新しく作成したメンバーへの書込みアクセス権が割り当てられます。

 **ノート:**

サービス管理者がこれらの設定を変更した場合、その変更は将来の動的メンバーにのみ適用され、遡って動的メンバーに適用されることはありません。

ユーザーを追加または編集するには:

1. ホーム・ページで「ナビゲータ」 をクリックし、「作成および管理」で、「ディメンション」をクリックします。
2. ディメンションを選択します。
3. 次のいずれかの操作を実行します:
 - 子メンバーを追加するには、メンバーを追加するディメンション階層の親レベルを選択し、 をクリックします。
 - 兄弟を追加するには、兄弟を追加するディメンション階層のレベルを選択し、 をクリックします。
 - メンバーを編集するには、そのメンバーをディメンション階層から選択し、 をクリックします。

 **ノート:**

年ディメンションのすべてのメンバーを含む「すべての年」親メンバーを追加するには、年ディメンションを選択し、 をクリックします。「すべての年」親メンバーにより、ユーザーはプロジェクトの終了日までのコスト合計などの、複数年にわたり累計されたデータを表示することができます。アプリケーションに対して定義された場合、「すべての年」メンバーには「年なし」メンバーは含まれません。

4. 「メンバーのプロパティ」で、表 1 の説明に従ってメンバーのプロパティを設定または変更します。
現在のページに新規メンバーが表示されないときは、「次」をクリックします。
5. 「保存」をクリックして、リレーショナル・データベースに新しい情報を保存し、変更がディメンション階層に反映されることを確認します。
6. データベースをリフレッシュすると、データを入力するユーザーに編集したメンバーが表示されます。
7. ディメンション・メンバーを作成した後、通常は、次のタスクを完了させます。
 - アクセス権を割り当てます。ディメンション・メンバーへのアクセス権の割当てを参照してください。
 - 属性を指定します。

メンバーの削除

各データ値は、一連のディメンション・メンバー値とキューブによって識別されます。ディメンション・メンバーの削除やキューブの選択の解除を行うと、アプリケーションをリフレッシュしたときにデータが失われます。

メンバーを削除する前に、「用途の表示」を使用して、それらが使用されているアプリケーション内の場所(フォームや為替レートなど)を確認します。アプリケーション内でメンバーが使用される場所の判別を参照してください。

エンティティ・メンバーをディメンションから削除する前に、アプリケーション全体でそれを削除する必要があります。たとえば、エンティティ・メンバーがフォームで使用されている場合には、そのエンティティ・メンバーをディメンションから削除する前に、フォームから削除する必要があります。

メンバーを削除するには:

1. ホーム・ページで「ナビゲータ」をクリックし、「作成および管理」で、「ディメンション」をクリックします。
2. 削除するメンバーのディメンションを選択します。
3. ディメンション階層から、削除するエンティティ・メンバーを選択します。
4. をクリックします。
基本メンバーを削除すると、その共有メンバーも削除されます。
5. 「はい」をクリックします。
6. ビジネス・ルールおよびレポートを更新および検証します。

親メンバーの削除

データ値は、一連のディメンション・メンバー値とキューブによって識別されます。ディメンション・メンバーの削除やキューブの選択の解除を行うと、アプリケーションをリフレッシュしたときにデータが失われます。

ディメンション階層から親メンバーとそのすべての子孫を削除するには:

1. ホーム・ページで「ナビゲータ」をクリックし、「作成および管理」で、「ディメンション」をクリックします。

2. 削除するメンバーと子孫を持つディメンションを選択します。
3. 削除する分岐を持つメンバーを選択します。
4.  をクリックします。
5. 「はい」 をクリックします。

共有メンバーの操作

メンバーを共有すると、アプリケーション内でロールアップ構造の入れ替えが行えます。共有メンバーを作成する前に基本メンバーが存在している必要があります。基本メンバーに複数の共有メンバーを作成できます。上から下への表示位置では、基本メンバーはその共有メンバーより先に表示されている必要があります。

共有メンバーは、エンティティ、勘定科目、ユーザー定義のカスタム・ディメンションに使用できます。アウトラインをロールアップする際、共有メンバーの値を無視して二重計算を防ぐことができます。

共有メンバーは、メンバー名、別名、メンバーに有効なキューブなどのいくつかのプロパティ定義を基本メンバーと共有します。共有メンバーには、一意の親メンバーおよび異なるロールアップ集約を設定する必要があります。カスタム属性、カスタム属性値およびメンバー式を共有メンバーに使用することはできません。基本メンバーの名前を変更すると、すべての共有メンバーの名前も変更されます。

共有メンバーを別の親メンバーに移動させることはできません。移動させる場合、共有メンバーを削除してから、別の親メンバーの下に再度作成します。基本メンバーをレベル・ゼロにする必要はありません。共有メンバーにデータを入力し、値を基本メンバーと共に保管できます。

共有メンバーは基本メンバーと同様に、Oracle Smart View for Office のメンバー選択のディメンション階層に表示されます。

共有メンバーの作成

共有メンバーを、他のメンバーと同じ方法で作成できますが、次のように異なる点があります。

- 基本メンバーは、共有メンバーの親にはなれません。
- 共有メンバーを兄弟として基本メンバーに追加できません。
- 共有メンバーの名前は、基本メンバーと同じにする必要があります。共有メンバーに別の説明を付けることはできます。
- 共有メンバーのデータ・ストレージ・オプションは、「共有」にする必要があります。

動的メンバーについて

動的メンバーとは、ユーザーがビジネス・ルールの操作時に作成できるメンバーです。"オンザフライ・メンバー"と呼ばれることもあります。サービス管理者はエンド・ユーザーが親メンバーの下に動的メンバーを作成できるようにし、データベースをリフレッシュして必要なプレースホルダを Essbase 内に作成する必要があります。実行時プロンプトのあるビジネス・ルールでは、ユーザーは実行時プロンプトで目的のメンバー名を入力して、メンバーを作成できます。それ以降にデータベースをリフレッシュすると、使用されている動的な子の名前がエンド・ユーザーによって指定された名前に変更され、必要なプレースホルダが Essbase 内に再作成されます。ビジネス・

ルールと動的メンバーの操作の詳細は、*Oracle Enterprise Performance Management Cloud Calculation Manager* での設計を参照してください。

親メンバーが動的な子を追加できるようになっている場合、ユーザーは実行時プロンプトで名前を入力して新規のメンバーを作成できます。

動的な子の追加に対する親メンバーの有効化

親メンバーが動的な子を追加できるようにするには:

1. ホーム・ページで「ナビゲータ」をクリックし、「作成および管理」で、「ディメンション」をクリックします。
2. 親メンバーを編集し、オプション「動的な子に対して使用可能」を選択します(メンバーの追加または編集を参照)。
 - オプション: メンバー・プロパティ「使用可能な動的な子の数」を設定します(デフォルトは 10 です)。この設定は、メンバーを親の下に動的に追加またはロードするために作成されたプレースホルダの名前を決定します。すべてのプレースホルダが使用されている場合、以降に追加される子は通常のメンバーとして追加され、データベースがリフレッシュされるまで使用できません。
 - オプション: メンバー・プロパティ「メンバー作成者に付与されたアクセス権」を設定します(デフォルトは「継承」です)。
3. データベースをリフレッシュして、メンバーを使用するキューブに対して、データベース内の動的メンバーのプレースホルダを作成します。
4. Calculation Manager で:
 - a. (変数タイプが「メンバー」の)実行時プロンプトを含むビジネス・ルールを作成します。「動的メンバーの親」列で、「メンバー・セレクタ」を使用して、アプリケーションで動的な子に対して有効な親メンバーを選択します。
 - b. オプション「動的メンバーの作成」を選択します。
 - c. ビジネス・ルールをデプロイします。

ビジネス・ルールの操作の詳細は、*Oracle Enterprise Performance Management Cloud Calculation Manager* での設計を参照してください。

ノート:

- Calculation Manager で、「動的メンバーの作成」オプションと「動的メンバーの削除」オプションの両方を選択すると、一時的な動的メンバーを計算用に作成できるようになり、それらの一時的な動的メンバーはビジネス・ルールの完了後に削除されます。
- 「動的メンバーの削除」オプションのみを選択すると、実行時プロンプトで「メンバー・セレクタ」が表示され、(メンバーへの書込みアクセス権を持っていれば)親の下に動的に作成したメンバーを削除できます。これを使用すると、親の下のメンバーのクリーン・アップおよび管理を完全に制御できます。重要なのは、要件に応じた適切な設計を行い、「メンバー作成者に付与されたアクセス権」メンバー・プロパティを使用して動的な子に適切なアクセス権を設定することです。

結果

前述のすべての条件が満たされた場合、ユーザーは、実行時プロンプトのあるビジネス・ルールを実行するときに、動的なメンバーの名前を入力して、「**起動**」をクリックします。ビジネス・ルールが正常に実行されると、ディメンション階層内の動的メンバーの親の下にメンバーが作成されます。

動的な子に対して有効な親メンバー下にインポートされた子メンバーは、Essbase 内に動的メンバー・プレースホルダが存在している場合、動的な子メンバーとして追加されます。プレースホルダがいっぱいになると、残りの子は通常のメンバーとして追加され、データベースがリフレッシュされるまで使用できません。

ノート:

動的な子に対して使用可能になっている親メンバーおよびその子メンバーを同じインポート時にロードすると、子メンバーは通常のメンバーとしてロードされます。これは、Essbase にプレースホルダを作成するためにデータベースのリフレッシュが必要なためです。

考慮事項

動的メンバーを作成し、そのメンバーに対するデータが複数のキューブに(直接データ入力、計算、データ・ロード、またはデータ・マップ/スマート・ブッシュを介して)取得されている場合は、「**動的メンバーの削除**」操作を使用してメンバーを移動する前に、これらの各場所からのデータのクリアを確認する必要があります。「**動的メンバーの削除**」操作によってデータは削除されません。メンバーは削除されますが、キューブはメンバーなしで保持されてインタフェースに示され、キューブ上のロールアップには間違った合計が反映されます。

属性の操作

グループ・メンバーに同じ条件で属性を使用します。疎ディメンションのメンバーのみに属性を割り当てることができます。ラベルのみメンバーには、属性を割り当てることができません。属性ディメンションは、親が動的に計算されるため、集約プロパティを持っていません。

勘定科目のディメンションは通常、密として定義されますので、すべてのキューブのディメンションを疎に変更しないかぎり、属性を割り当てることができません。ディメンションを疎から密に変更する場合、変更するディメンションのすべての属性および属性の値は自動的に削除されます。

[属性のデータ型の理解](#)に記載されているように、属性は、テキスト、日付、ブール式、数値のデータ型を持つことができます。属性名は、[命名規則](#)にあるガイドラインに適合させてください。属性が定義されると、「**メンバー選択**」ダイアログ・ボックスを使用し、「**等しい**」や「**以上**」などの属性関数を選択できます。

 **ノート:**

このトピックでは、クラシック・ディメンション・エディタを使用して属性を操作する方法について説明します。簡易ディメンション・エディタを使用して属性を操作する方法は、[簡易ディメンション・エディタでの属性の操作](#)を参照してください。

属性、属性値、別名を作成または変更するには:

1. ホーム・ページで「ナビゲータ」をクリックし、「作成および管理」で、「ディメンション」をクリックします。
2. 定義する属性、属性値または別名に疎ディメンションを選択します。

 **ノート:**

疎ディメンションのみが属性を持つことができます。

3. をクリックします。

 **ノート:**

ディメンションが疎ディメンションではない場合、「カスタム属性」は使用できません。

4. オプションを選択します。
 - 属性を作成するには、をクリックします。属性の名前を入力し、**テキスト**、**日付**、**ブール式**、**数値**のデータ型を選択します。

 **ノート:**

- 属性が一度作成されると、データ型を変更することができなくなります。
- 日付属性を操作するには、その前に「アプリケーション設定」にある「属性ディメンション日付フォーマット」を選択して、保存する必要があります。

[属性のデータ型の理解](#)を参照してください。

- 属性を変更するには、 をクリックし、属性の名前を更新します。
 - 属性に別名を設定するには、属性と属性値を選択し、 をクリックします。別名表を選択して別名を入力してから、「保存」をクリックします。
5. 「閉じる」をクリックします。

「閉じる」をクリックすると、階層が検証され、問題が検知されるとエラーが表示されます。たとえば、日付の属性値は正しいフォーマットで入力される必要があります。数値と日付のディメンションには、少なくとも 1 つの定義された属性値が必要です。

6. ビジネス・ルールおよびレポートを更新および検証します。

関連トピック:

- [属性のデータ型の理解](#)
- [属性の削除](#)

 **ノート:**

属性(「赤」など)で明示的にフィルタするかわりに、属性ディメンションのユーザー変数を作成し、ユーザー変数をフィルタとして使用できます。次に、ユーザー変数を動的ユーザー変数として有効化し、実行時にユーザーがフィルタの値を変更できるようにすることができます。これは、動的フィルタ処理を可能にする有用な手法です。[ユーザー変数の管理](#)を参照してください。

表 19-6 チュートリアル

目的	方法の学習
属性階層を含むデータのレポート方法を学習します。フォームとダッシュボード上の Web、MR レポートまたは Oracle Smart View for Office でアド・ホック分析を使用して、属性別に編成されたデータを表示およびレポートできます。	 属性階層を含むデータのレポート

属性のデータ型の理解

属性ディメンションは、数値、ブール式または日付のデータ型を持つことができます。これにより、グルーピングに異なる関数テキストの使用、選択を可能にするかまたはデータの計算を可能にします。属性タイプは属性ディメンションのレベル 0 のメンバーにのみ適用します。

- テキストの属性で、計算における基本の属性メンバー選択と属性の比較ができます。このような比較を実行すると、文字が比較されます。たとえば、パッケージ・タイプの「Bottle」はパッケージ・タイプの「Can」より小さいということになります。アルファベットでは B は C の前にくるからです。
- 数値の属性ディメンションでレベル 0 のメンバーの名前に数の値が使用されます。計算には数値の属性ディメンションのメンバーの名前(値)を含めることができます。たとえば、オンスの属性に指定されたオンスの数を使用して、各プロジェクトのオンスごとの収益を計算することができます。さらに、市場人口のグループ化による製品売上げの分析など、数値の属性を基本ディメンションの値の範囲に関連付けることができます。
- データベース内のブール式の属性ディメンションには、2 個のメンバーのみが含まれています。ビジネス・プロセスにブール式の属性ディメンションが追加されると、2 個の属性値、すなわち TRUE および FALSE が、この属性ディメンションにデフォルトで作成されます。勘定科目やエンティティなどの基本ディメンション

を、1 つだけのブール式データ型属性ディメンションに関連付けることができます。

- 日付の属性で、月-日-年または日-月-年という日付フォーマット、およびそれに応じたシーケンス情報を指定できます。計算にも日付の属性を使用できます。たとえば、12-22-1998 からの製品売上げを選択する計算で日付を比較できます。ユーザーは「**アプリケーション設定**」の「**属性ディメンション日付フォーマット**」のオプションを 1 つ選択して日付フォーマットを設定できます。

▲ 注意:

日付属性を操作するには、その前に「**アプリケーション設定**」にある「**属性ディメンション日付フォーマット**」の選択を切り替えて、保存する必要があります。ホーム・ページで、「**アプリケーション**」をクリックし、「**設定**」をクリックします。「**属性ディメンション日付フォーマット**」で、日付フォーマット(MM-dd-yyyy または dd-MM-yyyy)を選択してから、「**保存**」をクリックします。日付フォーマットを選択して保存した後は、既存の属性の日付値すべてをサポートされているフォーマットに手動で変更する必要があります。サポートされていないフォーマットがアプリケーション内の日付属性で使用されている場合は、修正する必要があるディメンション属性値のリストが提供されます。

また、アプリケーション設定内で「**属性ディメンション日付フォーマット**」の設定が変更されている場合は、新しい属性を追加または保存する前に、元のフォーマットの日付属性をすべて新しいフォーマットに変更する必要があります。

属性の削除

属性を削除すると、その属性に関連付けられたすべての属性値も削除されます。属性値は割り当てられたメンバーから除去され、属性は割り当てられたディメンションから除去されます。

✎ ノート:

このトピックでは、「ナビゲータ」メニューの「**ディメンション**」リンクを使用してアクセスするクラシック・ディメンション・エディタを使用して属性を削除する方法について説明します。以前の更新で、簡易ディメンション・エディタがリリースされました。

簡易ディメンション・エディタを使用して属性を削除する方法は、[簡易ディメンション・エディタでの属性の削除](#)を参照してください。

属性を削除するには:

1. ホーム・ページで「**ナビゲータ**」をクリックし、「**作成および管理**」で、「**ディメンション**」をクリックします。
2. 属性を削除する疎ディメンションを選択し、をクリックします。
3. 削除する属性を選択します。

4. 「属性」列の上で、 をクリックします。
5. 「OK」をクリックします。
6. ビジネス・ルールおよびレポートを更新および検証します。

属性値の操作

属性値には、フォームの使用の際、ディメンション・メンバーを選択する別の方法があります。属性値のデータ値は動的に計算されますが保管されません。

ノート:

このトピックでは、クラシック・ディメンション・エディタを使用して属性値を操作する方法について説明します。簡易ディメンション・エディタを使用して属性値を操作する方法は、[簡易ディメンション・エディタでの属性値の操作](#)を参照してください。

- [属性値の作成](#)
- [メンバーへの属性値の割当て](#)
- [属性値の編集および削除](#)

属性値の作成

通常、エンティティとユーザー定義のカスタム・ディメンションの疎ディメンションに、属性値を定義できます。ディメンションの属性値を定義した後、その属性値をそのディメンションのメンバーに割り当てることができます。

属性値を作成するには:

1. ホーム・ページで「ナビゲータ」 をクリックし、「作成および管理」で、「ディメンション」をクリックします。
2. 属性値を作成する疎ディメンションを選択します。
3. ディメンション階層内の最上位レベルを選択します。
4.  をクリックします。
5. 「属性と値の管理」ページで、値を指定する属性値を選択します。
6. 「属性値」列の上で、 をクリックします。オプションが使用可能な場合、 または  をクリックできます。
7. 名前を入力し、データ型を選択します。
8. 「保存」をクリックします。

メンバーへの属性値の割当て

すべてのキューブについて、疎として定義されているディメンションのメンバーに属性値を割り当てることができます。属性値は同レベルの疎ディメンション・メンバーへ割り当ててください。そうしないと、リフレッシュ中にエラーが表示されます。

メンバーへ属性値を割り当てるには:

1. ホーム・ページで「ナビゲータ」をクリックし、「作成および管理」で、「ディメンション」をクリックします。
2. 属性値を割り当てるメンバーの疎ディメンションを選択します。
3. 「ディメンション」階層で、属性値を割り当てるメンバーを選択します。
4. をクリックします。
5. 属性値を割り当てられているメンバーについて、をクリックしてメンバーの属性値を変更します。
6. 属性値を選択してメンバーへ割り当てます。
7. 次のいずれかのアクションを行います:
 - 選択したメンバーへ値を割り当てるには、をクリックします。
 - 選択したメンバーから値を除去するには、除去する値を選択し、をクリックします。
 - 選択したメンバーからすべての値を除去するには、をクリックします。
8. 「保存」をクリックします。

属性値の編集および削除

ノート:

属性値を削除すると、属性値が割り当てられていたすべてのカスタム・ディメンションから、属性値が除去されます。

属性値を編集または削除するには:

1. ホーム・ページで「ナビゲータ」をクリックし、「作成および管理」で、「ディメンション」をクリックします。
2. 変更または削除する属性値を含む疎ディメンションを選択します。
3. ディメンション階層内の最上位レベルを選択します。
4. をクリックします。
5. 「属性」で、変更または削除する値を含む属性を選択し、属性値を選択します。
6. 「属性値」の上にある  または  をクリックします。

7. 編集する場合は、名前を入力します。削除する場合は、削除を確認します。
8. 「保存」をクリックします。
9. ビジネス・ルールおよびレポートを更新および検証します。

カレンダーのカスタマイズ

期間ディメンションを使用して、月次カレンダーのロールアップ構造体を操作できます。アプリケーションの作成時に、サービス管理者はアプリケーション・データベースにスパンする基本期間を指定します。年ディメンションを使用して、カレンダーに年を追加します。

関連トピック

- [カレンダーのロールアップ方法の定義](#)
- [サマリー期間の作成と編集](#)
- [サマリー期間の削除](#)
- [年ディメンションの操作](#)
- [年のカレンダーへの追加](#)
- [年情報の編集](#)
- [期間名の変更](#)
- [別名のサマリー期間への割当て](#)
- [BegBalance メンバーの編集](#)

カレンダーのロールアップ方法の定義

表 19-7 カレンダーのロールアップ

基本期間	ロール・アップ
12 か月	年ごとに 4 つの四半期が作成されます。月は親の四半期にロールアップされ、四半期は年にロールアップされます。
四半期	四半期は年にロールアップされます。
カスタム	デフォルトのロールアップ構造はありません。カスタム基本期間の固定リストが表示されます。

アプリケーションのカレンダーが一度作成されると、カレンダーの基本期間を変更したり、年数を減らしたりすることはできなくなります。サービス管理者は、階層内の名前、説明、別名、サマリー期間を変更できます。

サマリー期間の作成と編集

名前、説明、別名、開始期間、終了期間などを変更できます。ただし、基本期間の順序を変更したり基本期間をスキップすることはできません。現在の会計年度を超えた範囲の延長はできません。

サマリー期間を作成する際、階層の上位から下位へ操作する必要があります(そうしないと、ロールアップ構造が非対称として表示され、続行できません。)サマリー期間は、

選択されたアイテムの親として、階層内を表示します。バランスのとれた階層にするには、すべての基本メンバーをルートから同じレベル数にする必要があります。

サマリー期間の作成または編集をするには:

1. ホーム・ページで「ナビゲータ」をクリックし、「作成および管理」で、「ディメンション」をクリックします。
2. 「ディメンション」で、「期間」を選択します。
3. 次のいずれかの操作を実行します:
 - 期間を追加するには、子または兄弟を追加するディメンション階層内の期間を選択し、またはをクリックします。
 - 期間を編集するには、期間を選択し、をクリックします。
4. 「名前」で、サマリー期間の名前を入力するか変更します。
5. オプション: 「説明」で、説明を入力します。
6. オプション: 「別名表」および「別名」で、使用する別名表を選択します。別名を入力します。
1つ選択しないと、デフォルトの表が使用されます。
7. 「開始期間」で、開始する期間を選択します。
現在の会計年度を超えた範囲の延長はできません。サマリー期間には、「開始期間」に最初の子が表示されるか、その上の兄弟の最初の子を除く、すべての子が表示されます。
8. 「終了期間」で、期末を選択します。
サマリー期間には、「終了期間」に最後の子が表示されるか、最後の子を除く、開始期間から次の兄弟の子までのすべての子が表示されます。
9. 「保存」をクリックします。

サマリー期間の削除

階層からサマリー期間を除去すると、その子は次に示すように別のサマリー期間に移動されます。

- 階層で最初のサマリー期間を削除すると、その子はサマリー期間の次の兄弟に移動されます。
- 階層で最後のサマリー期間を削除すると、その子はサマリー期間の前の兄弟に移動されます。
- 階層の中段からサマリー期間を削除すると、その子はサマリー期間の前の兄弟に移動されます。

サマリー期間を削除するには:

1. 「ナビゲータ」アイコンをクリックし、「作成および管理」で、「ディメンション」をクリックします。
2. 「ディメンション」で、「期間」を選択します。
3. ディメンション階層で、削除するサマリー期間を選択します。
基本期間は削除できません。

4.  をクリックします。
5. 「OK」 をクリックします。

年ディメンションの操作

年ディメンションを使用して、カレンダーの年を操作します。

表 19-8 年タスク

タスク	トピックを参照
<ul style="list-style-type: none"> • カレンダーの開始年の前、または終了年の後に年を追加します。 • 「年」ディメンションのすべてのメンバーを含む「すべての年」親メンバーを追加します(「年なし」メンバー(存在する場合)を除く)。 	簡易ディメンション・エディタでのメンバーの追加
<p>年の説明および別名を追加または更新します。</p>	簡易ディメンション・エディタでのメンバーの編集

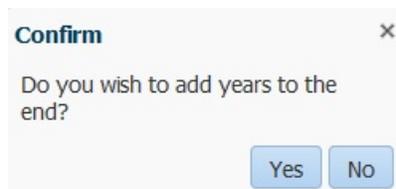
年のカレンダーへの追加

年数をカレンダーの最初または最後に追加できますが、データベースの作成をせずにカレンダーの年数を減らすことはできません。

年をカレンダーに追加するには:

1. 「ナビゲータ」アイコン  をクリックし、「作成および管理」で、「ディメンション」をクリックします。
2. 「ディメンション」で、「年」を選択します。
3.  をクリックします。
4. 「年の追加」で、カレンダーに追加する年数を入力します。
5. 「OK」 をクリックします。

確認ダイアログで次の確認を求められます。



- 年を終了年の後に追加するには、「はい」 をクリックします。
- 年を開始年の前に追加するには、「いいえ」 をクリックします。

 ノート:

年ディメンションのすべてのメンバーを含む「すべての年」親メンバーを追加するには、 をクリックします。「すべての年」親メンバーにより、ユーザーはプロジェクトの終了日までのコスト合計などの、複数年にわたり累計されたデータを表示することができます。(この親メンバーには「年なし」メンバー(存在する場合)は含まれません。)

年情報の編集

年ディメンションのメンバーの説明と別名を追加または更新できます。

年ディメンションのメンバーを編集するには:

1. 「ナビゲータ」アイコン  をクリックし、「作成および管理」で、「ディメンション」をクリックします。
2. 「ディメンション」で、「年」を選択します。
3. 編集する年を選択し、 をクリックします。
4. その年の情報を更新し、「保存」をクリックします。

期間名の変更

ルート・レベル、基本期間、ユーザー定義のサマリー期間の名前を変更できます。

期間の名前を変更するには:

1. 「ナビゲータ」アイコン  をクリックし、「作成および管理」で、「ディメンション」をクリックします。
2. 「ディメンション」で、「期間」を選択します。
3. 名前を変更する期間を選択し、 をクリックします。
4. 期間の名前を変更し、「保存」をクリックします。

別名のサマリー期間への割当て

基本期間およびサマリー期間への別名の割り当てや変更を行えます。

別名を割り当てまたは変更するには:

1. 「ナビゲータ」アイコン  をクリックし、「作成および管理」で、「ディメンション」をクリックします。
2. 「ディメンション」で、「期間」を選択します。
3. サマリー期間を選択します。
4.  をクリックします。
5. 「別名表」で、使用する別名表を選択します。

6. 「別名」で、別名を入力します。
7. 「保存」をクリックします。

BegBalance メンバーの編集

期間ディメンションの「BegBalance」メンバーを編集できます。アプリケーションの最初の期間として、新規アプリケーション、会計年度、カレンダーの年を開始するときの開始データの入力には BegBalance メンバーが便利です。BegBalance の名前変更や説明、ならびに別名も付けることができます。

BegBalance メンバーを編集するには:

1. 「ナビゲータ」アイコン  をクリックし、「作成および管理」で、「ディメンション」をクリックします。
2. 「ディメンション」で、「期間」を選択します。
3. 最初のメンバーである **BegBalance** を選択します。
4.  をクリックします。
5. 「期間の編集」で、次の操作を行います。
 - 名前を入力します。
 - 説明を入力します。
 - BegBalance メンバーに使用する別名表を選択し、別名を入力します。
6. 「保存」をクリックします。

動的時系列メンバーの設定

動的時系列メンバーを使用して四半期累計費用などの期間累計データを表示するレポートが作成できます。動的時系列メンバーは、アプリケーション作成時に自動的に作成され、期間ディメンションのメンバーと一緒に使用できます。動的時系列を設定するには、事前定義済みの動的時系列メンバーを使用可能にし、世代番号(およびオプションで、別名表と別名)に割り当てます。たとえば、四半期累計値を算出する場合、Q-T-D (四半期累計)メンバーを使用可能にし、世代番号 2 へ割り当てます。その後、Q-T-D 動的時系列メンバーを使用して、その四半期における本月までの月次値を算出できます。

ノート:

集約ストレージ・アプリケーションでは、期間ディメンションとして動的時系列はサポートされていません。

動的時系列メンバーは期間累計レポートの 8 レベルまでを提供します。データおよびデータベースのアウトラインでどのメンバーが使用できるかを判別できます。たとえば、データベースに 1 時間、1 日、1 週間、1 か月、四半期および 1 年ごとのデータが含まれる場合、D-T-D (日次累計)、W-T-D (週次累計)、M-T-D (月次累計)、Q-T-D および Y-T-D の情報をレポートできます。データベースに過去 5 年間の月次データが含まれる場合、特定年までの Y-T-D および H-T-D (累計)の情報をレポートできます。データ

ベースが季節ごとのデータを記録する場合は、P-T-D または S-T-D (季節累計)の情報をレポートできます。

動的時系列の計算でメンバーを使用する予定がある場合、タイム・バランス・プロパティ(「最初」、「平均」など)を動的計算に予定されているメンバーに割り当てないことをお勧めします。割り当ててしまうと、勘定科目ディメンションの親メンバーの値に誤りが生じる場合があります。

動的時系列メンバーを設定するには:

1. 「ナビゲータ」アイコン  をクリックし、「作成および管理」で、「ディメンション」をクリックします。
2. 期間ディメンションを選択し、 をクリックします。
3. 使用する DTS 系列の「使用可能」を選択します。
 - Y-T-D: 年次累計
 - H-T-D: 累計
 - S-T-D: 季節累計
 - Q-T-D: 四半期累計
 - P-T-D: 期間累計
 - M-T-D: 月次累計
 - W-T-D: 週次累計
 - D-T-D: 日次累計
4. 「世代」を選択します。
表示される世代数は、時間ディメンションの世代数によって異なります。動的時系列メンバーは一番高い世代(ディメンション・ルート)と関連付けることはできません。
5. オプション: 別名を追加します。「別名の編集」列で  をクリックし、別名を入力して「OK」をクリックします。
6. 「保存」をクリックします。

サポートされるその他のアプリケーション機能

その他にも、アプリケーション・ディメンションでサポートされる機能があります。シナリオ、バージョンおよび期間ディメンションに子および兄弟を追加できるとともに、切り取り、貼付け、展開および縮小機能を使用してディメンション階層を操作できます([ディメンション階層の操作](#)を参照)。このディメンションには共有メンバーを使用することもでき、すべてのディメンションにおいてルート・レベルで 2 パス計算を設定できます。たとえば、次のようなことができます。

表 19-9 機能

機能	詳細情報
<p>期間ディメンションで、代替階層を作成し、共有子孫を使用します。すべての期間のデータ・ストレージは、有効なデータ・ストレージ値に設定できます。BegBalance を含むすべての期間の集計演算子は、有効な集計演算子に設定できます。たとえば、~(無視)のかわりに+に設定できます。</p> <p>たとえば、勘定科目のルート・レベルの 2 パス計算をオンにします。</p>	<p>年ディメンションの操作および BegBalance メンバーの編集を参照してください。</p> <p>メンバーの追加または編集を参照してください。</p>
<p>▲ 注意:</p> <p>2 パス計算は、動的計算に設定されていない非勘定科目メンバーでは無視されます。</p>	
<p>属性には階層を作成し、別名を割り当てます。</p>	<p>属性の操作を参照してください。</p>

期間ディメンションの代替階層の考慮事項

「期間」ディメンションで代替階層を作成する場合、代替階層はアウトラインの年合計メンバーに従う必要があります。

UDA の操作

ユーザー定義の属性(UDA)、記述的な語やフレーズは、計算スクリプト、メンバー式、レポートおよびフォームで使用できます。UDA は UDA に関連したメンバーのリストを戻します。例:

- HSP_UDF UDA を使用して、アプリケーションをリフレッシュする際の式の上書きを防止できます。ビジネス・プロセスに関連する各データベースにログオンし、UDA を使用したメンバー式を作成する必要があります。この UDA の構文は、(UDAs: HSP_UDF) です。
- @XREF 関数を使用して、別のデータベースのデータ値を検索し、現在のデータベースから値を計算する場合、HSP_NOLINK UDA をメンバーに追加して、@XREF 関数が、そのメンバー用として選択されたソース・キューブではないすべてのキューブで作成されてしまうのを防ぐことができます。
- 数種類の製品メンバーのついた製品ディメンションでは、「新製品」と呼ばれる UDA を作成し、製品ディメンションの階層にある新製品へ割り当てることができます。その後、指定した新製品における特定の計算を基にすることができます。
- フォームの設計時に、UDA を使用して、共通属性に基づいてフォームのメンバーを選択できます。UDA を使用してフォームを作成すると、その UDA に割り当てられているメンバーが、フォームに動的に追加されます。たとえば、「新製品」と呼ばれる UDA を作成し、この UDA を製品ディメンションの階層にある新製品に割り当てた場合、フォームでは、実行時に新製品が自動的に表示されます。フォー

ム・デザイナーで選択する場合、UDA の先頭に UDA (新製品) のように UDA が付きます。

UDA はディメンションによって特定されます。たとえば、勘定科目メンバーの UDA を作成すると、共有していない勘定科目メンバーに使用できます。UDA を削除すると、すべての勘定科目メンバーの UDA が除去されます。UDA を複数のディメンションに使用可能にするには、複数のディメンションに同じ UDA を作成します。たとえば、「新規」という UDA を勘定科目ディメンションとエンティティ・ディメンションに作成し、それを勘定科目メンバーとエンティティ・メンバーに使用できます。

UDA を操作するには:

1. 「ナビゲータ」アイコン  をクリックし、「作成および管理」で、「ディメンション」をクリックします。
2. メンバーを UDA に関連付けるディメンションを選択します。
3. ディメンション階層から、メンバーを選択し、 をクリックします。
4. 「UDA」を選択します。
5. 次のタスクを選択します。
 - UDA を作成するには、 をクリックし、名前を入力して、「保存」をクリックします。

 ノート:

UDA に名前を付ける際に使用する文字数は 60 文字までにしてください。

- UDA を変更するには、 をクリックし、名前を変更して、「保存」をクリックします。
- UDA を削除するには、UDA を選択し、 をクリックして、削除を確認します。

 ノート:

UDA を削除すると、すべてのディメンションから UDA が除去されます。UDA を削除した場合は、それを参照していたすべてのメンバー式、計算スクリプト、レポートを更新する必要があります。

- UDA の選択をクリアするには、 をクリックします。
6. メンバーの UDA を追加または削除するには、矢印を使用して UDA を「選択した UDA」パネルで移動します。
 7. 「保存」をクリックします。

メンバー式の操作

演算子、計算関数、ディメンション名、メンバー名および数値定数を組み合わせてメンバー式を定義することによって、メンバーの計算を実行できます。メンバー式には次も含まれます。

- 式で許可される演算子タイプ、関数、値、メンバー名、UDA など。
- 式に展開するスマート・リスト値またはデータベースのリフレッシュにおける値を含む事前定義済の数式。

メンバー式を定義するには:

1. 「ナビゲータ」アイコン  をクリックし、「作成および管理」で、「ディメンション」をクリックします。
2. メンバーの式を追加または変更するディメンションを選択します。
3. メンバーを選択し、「編集」をクリックします。
4. 「メンバー式」タブを選択します。
5. 次のフィールドのオプションを選択します:
 - キューブ

 ノート:

勘定科目の式を除いて、デフォルトのキューブに入力された式は、特定のキューブに入力された別の式によって上書きされないかぎり、すべてのキューブに適用されます。

また、勘定科目メンバーに対するデフォルトの式は、ソース・キューブについてのみ Oracle Essbase に転送され、他のキューブについては転送されません。デフォルトの式が集約ストレージ・キューブに転送されることはありません。

- **データ・ストレージ:** データ・ストレージ・オプションを選択します。デフォルトは「保管」です。

 ノート:

キューブ固有のデータ・ストレージ・フィールドには、「共有」または「ラベルのみ」オプションは表示されません。これは、あるキューブで別のキューブではない「共有」または「ラベルのみ」にメンバーを設定できないためです。

- **解決順:** 式が評価される順序を指定します。0 から 100000 の間の整数を入力します(または矢印を使用して数を増減します)。指定された解決順を持つメンバーの式は、低い解決順から高い解決順に計算されます。デフォルトは 0 です。

 ノート:

解決順は、集約ストレージ・キューブに加えて、ハイブリッドが有効になったブロック・ストレージ・キューブにも使用できます。ブロック・ストレージ・キューブの解決順は、簡易ディメンション・エディタを使用してのみ編集可能です。「[メンバー・プロパティの編集](#)」へのアクセスを参照してください。

6. テキスト・ボックスで、当該メンバー用の式を定義します。
7. **オプション**: メンバー式が有効かどうかを確認するには、「**検証**」をクリックします。
8. 「**保存**」をクリックします。
「**保存**」をクリックする前に、「**リセット**」をクリックして、前にあったメンバー式情報を復元します。

式の検証結果の表示

メンバー式の検証結果を表示するには:

1. 「**メンバー式**」で、「**検証**」をクリックします。
2. 「**保存**」をクリックします。

数式の操作

「**メンバー式**」タブのテキスト・ボックスに、メンバー式内の事前定義済の数式を含めて、「**検証**」ボタンを使用してテストします。また、ロードすることもできます。

アウトラインに頼っているビジネス・ルールや計算スクリプトを更新することなくディメンションのアウトラインを更新できます。計算はアウトライン内で特定数よりさらに孤立します。スマート・リストは計算でオブジェクトとして使用できます。数式を使用しても、データベースのリフレッシュ時にのみ実行されるので、パフォーマンスが低下することはありません。

メンバー式で数式を使うには:

1. 「**ナビゲータ**」アイコン  をクリックし、「**作成および管理**」で、「**ディメンション**」をクリックします。
2. 操作するディメンションを選択します。
3. メンバーを選択し、「**編集**」をクリックします。
4. **メンバー式**を選択します。
5. 次のフィールドのオプションを選択します:
 - **キューブ**

 **ノート:**

勘定科目の式を除いて、デフォルトのキューブに入力された式は、特定のキューブに入力された別の式によって上書きされないかぎり、すべてのキューブに適用されます。

また、勘定科目メンバーに対するデフォルトの式は、ソース・キューブについてのみ **Oracle Essbase** に転送され、他のキューブについては転送されません。デフォルトの式が集約ストレージ・キューブに転送されることはありません。

- **データ・ストレージ:** データ・ストレージ・オプションを選択します。デフォルトは「**保管**」です。

 **ノート:**

キューブ固有のデータ・ストレージ・フィールドには、「**共有**」または「**ラベルのみ**」オプションは表示されません。これは、あるキューブで別のキューブではない「共有」または「ラベルのみ」にメンバーを設定できないためです。

- **解決順:** 式が評価される順序を指定します。0 から 100000 の間の整数を入力します(または矢印を使用して数を増減します)。指定された解決順を持つメンバーの式は、低い解決順から高い解決順に計算されます。デフォルトは 0 です。

 **ノート:**

解決順は、集約ストレージ・キューブに加えて、ハイブリッドが有効になったブロック・ストレージ・キューブにも使用できます。ブロック・ストレージ・キューブの解決順は、簡易ディメンション・エディタを使用してのみ編集可能です。「[メンバー・プロパティの編集](#)」への[アクセス](#)を参照してください。

6. テキスト・ボックスで、当該メンバー用の式を定義します。
ビジネス・プロセス数式および **Essbase** ネイティブ式をメンバー式に含めることができます。
ビジネス・プロセスは、メンバー式で使用できる事前定義の数式を提供します。独自の数式を編集したり作成することはできません。
7. **オプション:** メンバー式が有効かどうかを確認するには、「**検証**」をクリックします。
8. **オプション:** メンバー式にエラーがある場合は、「**詳細の表示**」をクリックするとエラーの理由が表示されます。
9. **オプション:** メンバー式の変更を保存しない場合は、「**リセット**」をクリックして、前のメンバー式を復元できます。
10. 「**保存**」をクリックします。

構文

メンバー計算数式は関数および変数をサポートします。計算数式を作成する場合には、次の関数および変数の構文ルールに従ってください。

- 変数やプロパティは大カッコ([])で囲みます。大カッコを省略すると、変数はネイティブ変数として扱われます。
- メンバー名を引用符で囲みます。
- 変数では大文字と小文字は区別されますが、余計なスペースや、アンダースコア(_)のような文字は使用できません。
- 式には他の関数へのサブコールも含めることができます。
- 数字が必要な箇所には、テキストは入力できません。
- アウトラインの順番は、メンバー式では重要になります。たとえば、まだ計算されていない値を参照できません。

スマート・リスト変数を変数として含める

スマート・リストは、変数として"Status"=[Status.Deported]などの数式に含めることができます。

"Status"はメンバー名であり、**Status** はスマート・リスト名、**Deported** はスマート・リストのエントリです。**Deported** に対するスマート・リストの ID が 2 の場合、メンバー式で **Status.Deported** を 2 に置き換えます(アプリケーションはスマート・リストを数字として扱います)。**Deported** に対するスマート・リストの ID が 2 の場合、計算に 2 をおき、データベースに 2 を保管します。

スマート・リストを次のフォーマットで記述します。[SmartListName.SmartListEntry]

数式

数式には、定義済の変数および関数を含められます。

表 19-10 数式内の変数

変数	説明
NumberOfPeriodsInYear	年内の期間を戻します。
NumberOfYears	アプリケーション内の年数を戻します。

表 19-11 数式内の関数

関数	説明
Dimension(dimTag)	<p>事前定義済のディメンションの名前を戻します。dimtag は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • DIM_NAME_PERIOD • DIM_NAME_YEAR • DIM_NAME_ACCOUNT • DIM_NAME_ENTITY • DIM_NAME_SCENARIO • DIM_NAME_VERSION • DIM_NAME_CURRENCY
Period(periodName)	<p>指定した期間を戻します。periodName オプションは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • FIRST_QTR_PERIOD • SECOND_QTR_PERIOD • THIRD_QTR_PERIOD • FOURTH_QTR_PERIOD • FIRST_PERIOD • LAST_PERIOD
CrossRef(accountName)	<p>デフォルトの接頭辞「No」を各ディメンション名(通貨、期間および年は除く)に追加し、指定の勘定科目を続けることで、相互参照を生成できます。</p> <p>たとえば勘定科目、期間、HSP_View、年、シナリオ、バージョン、エンティティおよび製品のディメンションを持つアプリケーションの場合</p> <p>CrossRef("5800") returns: "BegBalance"->"No HSP_View"->"No Scenario"->"No Version"->"No Entity"->"No Product"->"5800";</p>
CrossRef(accountName, prefix)	<p>指定された接頭辞を各ディメンション名(通貨、期間および年は除く)に追加し、指定の勘定科目を続けることで、相互参照を生成できます。接頭辞は二重引用符で囲む必要があります。</p> <p>たとえば勘定科目、期間、HSP_View、年、シナリオ、バージョン、エンティティおよび製品のディメンションを持つアプリケーションの場合</p> <p>CrossRef("5800", "NoX")は次を返します: "BegBalance"->"NoX HSP_View"->"NoX Scenario"->"NoX Version"->"NoX Entity"->"NoX Product"->"5800";</p>
CrossRef(accountName, prefix, true)	<p>指定された接頭辞を各ディメンション名(年も含む。通貨と期間は除く)に追加し、指定の勘定科目を続けることで、相互参照を生成できます。</p> <p>たとえば、CrossRef("5800", "NoX",)は次を返します: "BegBalance"->"NoX HSP_View"->"NoX Year"->"NoX Scenario"->"NoX Version"->"NoX Entity"->"NoX Product"->"5800";</p>
getCalendarTPIndex()	<p>期間のインデックスを戻すメンバー式を生成します。暦年に基づくインデックスです。</p>
getFiscalTPIndex()	<p>期間のインデックスを戻すメンバー式を生成します。年度に基づくインデックスです。</p>
CYTD(memberName)	<p>メンバー用に暦年の通算日数を計算する式を生成します。</p>

表 19-11 (続き) 数式内の関数

関数	説明
CYTD(memberName, calTpIndexName, fiscalTpIndexName)	メンバー用に暦年の通算日数を計算する式と、暦年および会計年を基にした期間インデックスを生成します。メンバーの名前が変更する場合に使用します。デフォルトのメンバー名は「暦期間-インデックス」および「会計期間-インデックス」です。

一般的なエラー

構文のルールに注意して従います。数式構文にエラーが含まれる場合、メンバー式を検証した後にエラー・メッセージが戻されます。エラー・メッセージの情報を得るには、「**メンバー式**」タブで式の詳細を確認します。最も一般的なエラー・メッセージは「実行に失敗しました。」です。これは、式でパラメータを不正に使用すると発生します。次のアクションが「実行に失敗しました。」のエラー・メッセージの原因となります。

- 数式でパラメータの数を間違えて入力
- メンバー名、関数または変数名のスペルミス
- メンバー名を引用符で囲んでいない
- テキストが必要な箇所へ数字を含ませる

フォームの管理

プランニングのニーズに基づいてデータを入力するためのフォームを作成します。

次も参照:

- [フォームについて](#)
- [フォームの作成](#)
- [フォームおよびフォーム・コンポーネントの操作](#)
- [フォームとフォルダの管理](#)

フォームについて

フォームはデータ入力用のグリッドです。ニーズを満たすようにフォームを作成でき、その後、それらのフォームや他のアーティファクトを使用して、データをサマリーするダッシュボードを設計できます。

[ダッシュボードの設計](#)を参照してください。

トラブルシューティング

フォームの機能およびパフォーマンスの問題を解決する方法の詳細は、*Oracle Enterprise Performance Management Cloud オペレーション・ガイド*のフォームの機能およびパフォーマンスの問題の解決を参照してください。

フォーム・コンポーネント

視点

年、シナリオ、バージョンなどの視点(POV)ディメンションを選択して、ページ、行および列のコンテキストを定義します。たとえば、シナリオが「予算」の場合、ページ、行および列に表示および入力されているすべてのデータが「予算」シナリオ・ディメンション・メンバーに書き込まれます。各 POV ディメンションが 1 つのメンバーに設定され、ユーザーが変更することはできません。

フォームの POV を簡潔にする場合、またはユーザーのニーズや役割にあわせて調整する場合は、関連するメンバーのみを指定するか、ユーザー変数を定義します。[フォーム・ページと視点の定義](#)を参照してください。

[ユーザー変数の管理](#)も参照してください。

ページ軸

ページ軸を使用して、ユーザーがより小さな論理的ビューでデータを操作できるように、様々なディメンションにわたるメンバーの組合せを指定します。ページ軸の各アイテムに、様々なディメンションから選択したメンバーを指定できます。ユーザーはアクセスできるメンバーのみを見ます。

複数のページのドロップダウン・リストを指定し、関係機能または属性を使用してメンバーを選択できます。ページ軸から選択して、メンバー・セット間で切り替えます。

メンバー名または別名をページ軸で表示します。データ入力ページで検索ドロップダウン・リストを使用可能にするページ・ディメンションでメンバーの数を指定できます。ディメンションに多くのメンバーが含まれている場合に役に立ちます。[フォーム・ページと視点の定義](#)を参照してください。

行と列

行と列は、ユーザーがデータを入力するグリッドを定義します。たとえば、ユニット・セールスを行軸に割り当て、1 月を列軸に割り当てることができます。ユーザーがフォームにアクセスすると、売上個数の行が 1 月の列と交差しているセルにデータを入力できます。

デフォルトでは、フォームに 1 セットの行と列があります。行と列を追加し、メンバーの非対照的な組合せを作成できます。[非対称の行と列の作成](#)を参照してください。

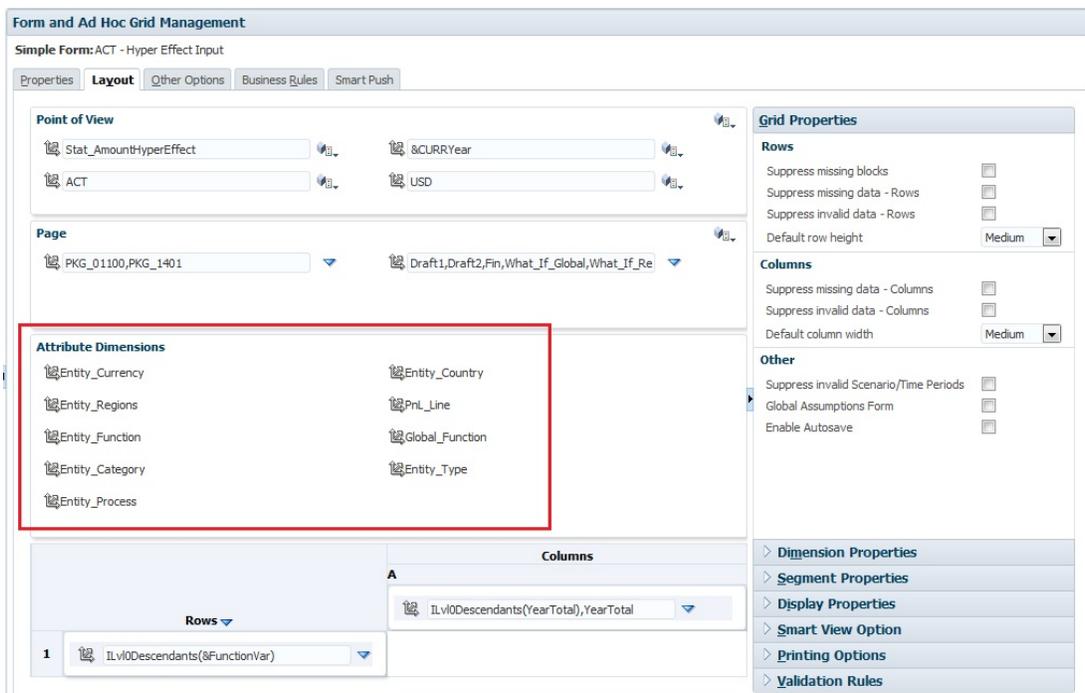
属性ディメンション

属性ディメンションをフィルタとして使用するだけでなく、関連付けられた基本ディメンション以外の軸に配置できるように、アプリケーション内で一意のディメンションとして属性を定義することもできます。これにより、属性メンバーを横断してディメンション間ロールアップを実行できます。

属性ディメンションはフォーム・グリッドではオプションであり、フォーム・デザイナーの「レイアウト」タブに別個に表示されます。属性ディメンションをフォームで使用するには、属性ディメンションを視点、ページ、行または列にドラッグします。

▲ 注意:

軸上の属性をフィルタとして使用しているときはその属性をドラッグしないでください。ドラッグすると、パフォーマンスに影響するディメンション間参照の原因となります。属性ディメンションをフィルタとして使用する場合、(別名を表示するオプションがあるのと同様に)関連付けられた属性を表示するフォーム・オプションがあります。レイアウトの定義を参照してください。



フォームの設計に関する考慮事項

フォームとキューブ

フォームを作成する際、それをキューブに関連付けることにより、フォームの有効なメンバーが決まります。たとえば、フォームを「収益」キューブに割り当てた場合、「収益」キューブに有効な勘定科目のみを追加できます。入力したデータは、選択したキューブのデータベースに保存されます。

 ノート:

- 割り当てた後でフォームのキューブを変更することはできません。
- ソース・キューブがフォームのキューブと一致する場合にのみ、フォームの勘定科目を編集できます。
- 勘定科目のソース・キューブ以外のキューブに関連付けられたフォームに勘定科目を追加した場合、そのフォームでは勘定科目が読取り専用になります。

フォームと権限

設計(レイアウトや手順など)の変更やデータの入力を行うことができるユーザーを判別するには、フォームに権限を割り当てます。ユーザーは、保護された 1 つのディメンションのメンバーに対する権限を持っている場合にのみ、フォームを編集できます。たとえば、ユーザーが **Europe (欧州)** エンティティに対する読取り専用権限を持っている場合、**Europe (欧州)** エンティティを含む行と列は読取り専用です。ユーザーは、書き込み権限を持っているメンバーについてのみデータを変更できます。

フォームとバージョン

ボトムアップ・バージョンでは、レベル 0 メンバーを持つ行および列でデータ入力が可能です。親メンバーに設定された行または列は読取り専用となります。ボトムアップ・バージョンでデータ・エントリを許可するには、さらに視点をレベル 0 メンバーに設定する必要もあります。ターゲット・バージョンにより親および子のメンバーでデータ・エントリを許可できます。

属性によるフォーム・メンバーのフィルタ

属性を使用して、メンバーを選択できます。たとえば、エンティティ・ディメンションでは、**South (南部)** などの特定の地域によってメンバーを選択できます。その結果として生成されるグリッドには、**South (南部)** 属性を持つメンバー(TX、NM など)のみが含まれます。属性によってフィルタされた行および列に値を入力し、保存できます。

フォームと共有メンバー

共有メンバーは個々に選択できないため、関係機能を使用して選択します。たとえば、代替の機能ロールアップを選択して、そのロールアップの下にすべてのメンバーを含めます。ユーザーは、共有メンバーを表示する行または列に値を入力でき、データはデータベースの基本メンバーに保存されます。

フォームと計算

計算を最適化するには、個々の子を選択するかわりに、関係(子孫や子など)を使用して行メンバーを選択します。たとえば、個々の親レベルの合計を計算するには、複数のパスが必要になることがあるため、かわりに関係を使用します。

フォームでの暗黙の共有の理解

一部のメンバーは、明示的に共有として設定しなくても共有されます。これらのメンバーが暗黙的な共有メンバーです。

暗黙的な共有関係が作成されると、各暗黙的なメンバーは他のメンバーの値であるとみなされます。アプリケーションは次の状況でメンバーの共有関係を想定します。

- 親が 1 つの子のみを持っています
- 親が親に連結される 1 つの子のみを持っています
- 親のデータ・タイプが「ラベルのみ」です。親は、子の集約設定に関係なく、最初の子の値を継承します。

暗黙的な共有関係を持つメンバーを含むフォームでは、親に対し値が追加されると、フォームが保存された後は、子はそれと同じ値を想定します。同様に、子に対し値が追加されると、フォームが保存された後は、親は通常同じ値を想定します。

たとえば、計算スクリプトまたはロード・ルールが暗黙的な共有メンバーを移入する場合、その他の暗黙的な共有メンバーは計算スクリプトまたはロード・ルールにより移入されたメンバーの値を想定します。計算されたまたはインポートされた最後の値が優先されます。計算スクリプトの変数として親または子のどちらを参照しても結果は同じです。

フォームの作成

表 19-12 フォームの作成のチェックリスト

タスク	詳細を知るには
<p>次のようなレイアウトを定義します:</p> <ul style="list-style-type: none"> • 行および列の追加 • 列と行へのディメンションの割当て • 視点、ページ、列および行への属性ディメンションの割当て • ユーザーが操作するディメンション・メンバーの選択 • グリッド・プロパティの設定 • ディメンション・プロパティの設定 • 式の行と列の追加 • Smart View フォームの表示オプションの設定 • 表示プロパティの設定 • 印刷オプションの設定 • 検証ルールの追加および更新 	<p>レイアウトの定義を参照してください。</p>
ページ軸および視点の定義	<p>フォーム・ページと視点の定義を参照してください。</p>
メンバーの選択	<p>メンバー・セレクタの使用を参照してください</p>
フォーム精度、コンテキスト・メニューの関連付け、および動的ユーザー変数を有効にするかどうかの設定	<p>フォームの精度およびその他のオプションの設定を参照してください。</p>
ビジネス・ルールの選択およびプロパティの設定	<p>ルールについてを参照してください。</p>
スマート・プッシュの使用	<p>スマート・プッシュを使用したあるキューブから別のキューブへのデータの移動を参照してください</p>
アクセス権限の定義	<p>アクセス権限の設定を参照してください。</p>

表 19-12 (続き) フォームの作成のチェックリスト

タスク	詳細を知るには
式の行と列の設計	式の行と列を使用したフォームの設計 を参照してください。
データ検証ルール of 設計	データ検証を使用したフォームの設計 を参照してください。

フォームを作成するには:

1. 「ナビゲータ」アイコン  をクリックし、「作成および管理」で、「フォーム」をクリックします。
2. 「フォームとアド・ホック・グリッドの管理」で、 をクリックします。
3. 「プロパティ」タブで、80 文字までの名前、および 255 文字までのオプションの説明を入力します。
4. フォームに関連付ける「キューブ」を選択します。[フォームとキューブ](#)を参照してください。
5. **オプション**: フォームの操作方法を説明する手順を入力します。
6. 「次」をクリックし、[レイアウトの定義](#)を参照します。

レイアウトの定義

フォームを作成した際、最初は 1 つの行と列のみが含まれ、オプションの属性ディメンションを除くすべてのディメンションが視点に存在します。必要に応じて、行と列を追加します。行と列のレイアウトを設定する場合:

- 行と列の軸に少なくとも 1 つのディメンションを割り当てます。
- 複数の軸で同じディメンションは選択できません。複数の軸でディメンションを使用するには、視点でユーザー変数を設定します。
- 任意の軸からディメンションを選択し、それを別の軸にドラッグできます
- ディメンションのメンバーは、ディメンションが行または列に割り当てられた後にフォームから除去できます。

ノート:

属性ディメンションはオプションで、「レイアウト」タブの独自の領域に表示されます。属性ディメンションをフォームで使用するには、視点、ページ、行または列にドラッグします。

▲ **注意:**

属性をフィルタとして操作する場合は、どの軸上の属性もドラッグしないでください。ドラッグすると、パフォーマンスに影響するディメンション間参照の原因となります。属性ディメンションをフィルタとして使用する場合、(別名を表示するオプションがあるのと同様に)関連付けられた属性を表示するフォーム・オプションがあります。

レイアウトを定義するには:

1. フォームを開き「**レイアウト**」をクリックします。
[フォームとフォルダの選択および表示](#)を参照してください。
2. 「**レイアウト**」タブのディメンションの隣にある  アイコンをクリックし、目的の軸(「**行**」または「**列**」)にドラッグします。必要に応じて、「**視点**」、「**ページ**」、「**行**」および「**列**」で使用する属性ディメンションを選択することもできます。
3. 行または列に追加したディメンションを編集するには、ディメンションの隣にある  をクリックします:
 - 「**編集**」を選択してメンバー・セレクタを起動し、フォームに含めるディメンション・メンバーと変数を定義します。

表 19-13 フォームのメンバー選択オプション

メンバー選択オプション	説明
メンバー	メンバー・リストのメンバーをクリックして選択を行います。 フォームのメンバーの選択 を参照してください。
変数	次のオプションについて選択します: <ul style="list-style-type: none"> - ユーザー変数 (メンバーとしてのユーザー変数の選択を参照してください) - 代替変数 (メンバーとしての代替変数の選択を参照してください) - 属性 (メンバーとしての属性値の選択を参照してください) - UDA (UDAのメンバーとしての選択を参照してください)

- 「**除外**」または「**すべて除外**」を選択し、メンバー・セレクタを使用して、除外するディメンション・メンバーを定義します:
 - **除外:** このオプションを選択した場合、メンバーは ID を基準にして除外されます。指定したメンバー(基本または共有)のみが除外されます。
 - **すべて除外:** このオプションを選択した場合、メンバーは名前を基準にして除外されます。基本メンバーを指定すると、基本メンバーとそのすべての共有メンバーが除外されます。共有メンバーを指定すると、このメンバー、その基本メンバー、およびこのメンバーの他のすべての共有メンバーが除外されます。

サービス管理者は、アプリケーション設定「**セグメント**」**ドロップダウンでの除外メンバーのフィルタ処理**」を使用して、ユーザーの「セグメント」ドロップダウンの

メンバー・セレクトで、除外メンバーを表示するか、非表示にするかを選択することもできます。

指定可能なアプリケーションおよびシステム設定を参照してください。

- 「クリア」を選択して選択内容を削除します。
- 4. **オプション**: 行または列におけるディメンションの順序を変更するには、、「**ディメンションを上に移動**」または「**ディメンションを下に移動**」の順にクリックします。
- 5. **セグメント・プロパティ**の説明に従って、行ヘッダー(1 や 2 など)を選択して行プロパティを指定したり、列ヘッダー(A や B など)を選択して列プロパティを設定します。
ユーザーがフォームについてテスト環境から本番環境にグローバル仮定を転送できるようにするには、「**グローバル仮定フォーム**」を選択し、フォームを更新してグローバル仮定を保管します。[グローバル仮定を使用したフォームの設計](#)を参照してください。
- 6. **オプション**: 式の行と列を追加します。[式の行と列の追加](#)を参照してください。

サブピック:

- [セグメント・プロパティ](#)
- [フォーム・グリッド・プロパティの設定](#)
- [ディメンション・プロパティの設定](#)
- [表示プロパティの設定](#)
- [Smart View フォームのオプションの設定](#)
- [印刷オプションの設定](#)
- [フォームへのデータ検証ルールの組込み](#)
- [共有メンバーでのドリルの有効化](#)

セグメント・プロパティ

フォームの「**セグメント・プロパティ**」にアクセスするには、フォームのレイアウトで行番号をクリックします。

表 19-14 セグメント・プロパティ

オプション	説明
すべての行に適用	各行に異なるプロパティを指定する場合は、クリアします。
すべての列に適用	各列に異なるプロパティを指定する場合は、クリアします。
非表示	列または行を非表示にします
読取り専用	ユーザーが古い読取り専用データと新しい編集可能なデータを比較できるように、読取り専用の行または列を作成します。
区切り線の表示	セグメントが目視で区別できるように太い枠線を作成します
階層の抑制	インデントを抑制します。
欠落データの抑制	空の行または列を非表示にします。クリアすると、データが欠落しているセルには「#MISSING」が付いた行または列が表示されません。

表 19-14 (続き) セグメント・プロパティ

オプション	説明
無効なシナリオ/期間の抑制	このオプションは、列の表示をシナリオの開始期間と終了期間に結び付けます。選択されている場合、シナリオの期間範囲外の期間の表示は抑止されます。
列幅	<ul style="list-style-type: none"> • デフォルト: グリッド・レベルで定義された列幅を使用します(「グリッドのプロパティ」の下) • 小: 50px • 中: 100px • 大: 300px • 適合するようサイズ調整: データに適合するよう列が拡張されます • カスタム: ピクセル数を指定します
行の高さ	<ul style="list-style-type: none"> • デフォルト: グリッド・レベルで定義された行の高さを使用します(「グリッドのプロパティ」の下) • 中: 標準の高さを使用します • 適合するようサイズ調整: データに適合するよう行が拡張されます • カスタム: ピクセル数を指定します
ディメンションのドロップダウンの有効化	Oracle Smart View for Office グリッドおよびビジネス・プロセス Web フォームの行ディメンションで、ドロップダウン・メンバー・セクタを設定できます。このドロップダウン・セクタが有効になっている場合、フォーム・ユーザーはフォーム内の行ディメンションのドロップダウン・リストから直接メンバーを選択できます。たとえば、行軸にエンティティとライン・アイテムの 2 つのディメンションが配置されているとした場合、メンバー・セクタ・ドロップダウンはエンティティ・ディメンション・メンバー、ライン・アイテム・ディメンション・メンバーまたはその両方に対して有効になります。サービス管理者が選択した設定に応じて、ドロップダウン・メンバー・セクタを使用して、ユーザーがメンバー行(セクタが有効になっていないと抑制または除外される場合があります)にデータを追加できる場合もあります。

 **ノート:**

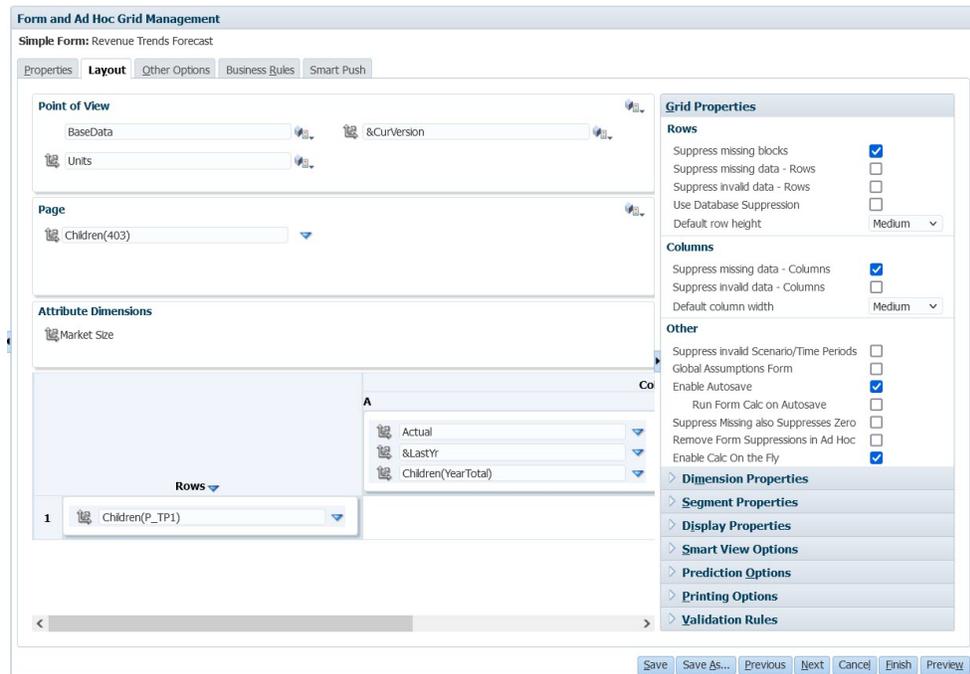
サーバー側のメンバー式がすでに含まれているフォームのドロップダウン・メンバー・セクタは有効にできません。

フォーム・グリッド・プロパティの設定

グリッド・プロパティにより、行および列を表示する方法を定義します。

グリッド・プロパティを設定するには:

1. フォームを開き「レイアウト」をクリックします。 [フォームとフォルダの選択および表示](#) を参照してください。



2. 「グリッドのプロパティ」で、行および列プロパティを次のように設定します。

表 19-15 フォーム・グリッド・プロパティ

オプション	説明
欠落ブロックの抑制	<p>複数の行に対して、「欠落データの抑制」の効率を大幅に向上させます。抑制する行が存在しない場合または少ない場合は、このオプションによってパフォーマンスが低下することがあります。この設定を使用する前後でフォームをテストし、パフォーマンスが向上するかどうかを判定します。</p> <p>このオプションを使用する場合は注意してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> 一部の抑制されたブロックでは、動的計算メンバーが無視されることがあります 行メンバーがインデントされない場合があります
欠落データの抑制	<p>データがない行または列を非表示にします。クリアすると、データが欠落しているセルには"#MISSING"が表示されます。</p>
無効なデータの抑制	<p>無効なデータを含む行または列を非表示にします。無効なデータを含むセルは読取り専用です。</p>

表 19-15 (続き) フォーム・グリッド・プロパティ

オプション	説明
データベース抑制の使用	ビジネス・プロセス・レベルではなく Oracle Essbase レベルで行の抑制を適用します。これにより、ビジネス・プロセス側のデータ量が削減され、問合せしきい値に対する影響が排除されます。
	<p> ノート:</p> <p>このオプションを使用し、フォーム上に結果が #MISSING 値となる式の列がある場合、その行は Essbase では抑制されるためフォーム上に表示されず、式の評価のためにビジネス・プロセスに戻されることはありません。</p>
デフォルトの行の高さ	<ul style="list-style-type: none"> • 中: 行は中程度の高さです。 • 適合するようサイズ調整: データに適合するよう行が拡張されます • カスタム: ピクセル数を指定します
デフォルトの列の幅	<p>幅をピクセルで指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 小: 50px • 中: 100px • 大: 300px • 適合するようサイズ調整: データに適合するよう列が拡張されます • カスタム: ピクセル数を指定します
無効なシナリオ/期間の抑制	このオプションは、フォーム・グリッドの表示をシナリオの開始期間と終了期間に結び付けます。選択されている場合、シナリオの期間範囲外の期間の表示は抑止されます。
グローバル仮定フォーム	フォームについてテスト環境から本番環境にグローバル仮定を転送するには、「 グローバル仮定フォーム 」を選択し、それを更新して仮定を保管します。 グローバル仮定を使用したフォームの設計 を参照してください。
自動保存の使用可能	このオプションを使用すると、ユーザーは、[Ctrl]を押しながら[Z]を押すことでアクションを連続的に元に戻せます。また、プランナがセル間を移動すると、変更が自動的に保存されます。
	<p> ノート:</p> <p>パフォーマンスを最適化するには、行と列に密ディメンションのみを使用します。</p>
自動保存のフォーム計算の実行	「 自動保存の使用可能 」を選択した場合にのみ使用できます。「 自動保存のフォーム計算の実行 」を選択した場合、変更および保存された値(たとえば集約された親の値のパーセンテージを計算する式を持つ行)に依存して動的に計算されるセルが更新され、緑の背景で表示されます。

表 19-15 (続き) フォーム・グリッド・プロパティ

オプション	説明
欠落を抑制したらゼロも抑制	<p>フォームでこのオプションを、「欠落データの抑制」オプションと同時に選択すると、「欠落」と「ゼロ」両方を含む行または列がすべて抑制されます。</p> <p>この設定を選択すると、Oracle Smart View for Office でデータ欠落やゼロを抑制していた実行時の抑制選択より優先されます。</p>

 **ノート:**

フォーム 2.0 では、行または列にゼロと #Missing の組合せがある場合、フィルタ処理は適用されません。

アド・ホックでのフォーム抑制の削除 Smart View ユーザーに、他の抑制オプションが指定されたフォーム上でアド・ホック分析の実行を許可する場合に選択します。フォームに欠落データがある場合、列または行の基本ディメンション・メンバーは Smart View のアド・ホック・グリッドに表示されます。これにより、フォーム設計で抑制オプションが有効になっていた場合でも、ユーザーはフォームでアド・ホック分析を継続できます。

 **ノート:**

このオプションを選択しても、ユーザーが Smart View の「オプション」ダイアログ、「データ・オプション」タブで設定した可能性のある抑制オプションは上書きされません。フォームに対して「アド・ホックでのフォーム抑制の削除」オプションが有効な場合、ユーザーがフォームでアド・ホック分析を実行するとエラーが発生し、ユーザーは Smart View で抑制オプションをクリアする必要があります。

オンザフライ計算の使用可能 このオプションを選択した場合、フォーム 2.0 で、メンバー式が添付されたセルにカーソルを置くと、セルに関連付けられているメンバー式が表示され、オンザフライ計算を実行できます。オンザフライ計算では、変更を送信せずに計算を実行できます。

フォーム 2.0 は、レッドウッド・エクスペリエンスが有効になっている場合にのみ使用できることに注意してください。

3. 「保存」をクリックして続行するか、「終了」をクリックして保存してフォームを閉じます。

ディメンション・プロパティの設定

メンバー名や別名を表示するかどうか、ユーザーにメンバー式の表示を許可するかどうかなどの、ディメンション表示プロパティを指定できます。これらのプロパティは、行、列、ページおよび視点ディメンションに適用されます。

ディメンション・プロパティを設定するには:

1. フォームを開き「**レイアウト**」をクリックします。
[フォームとフォルダの選択および表示](#)を参照してください。
2. 視点、ページ、行または列ディメンションをクリックし、「**ディメンション・プロパティ**」で次のようなプロパティを適用します。

表 19-16 ディメンション・プロパティ

プロパティ	説明
すべての行ディメンションに適用 すべての列ディメンションに適用 すべてのページ・ディメンションに適用	すべての行ディメンション、列ディメンションまたはページ・ディメンションにプロパティを適用します
すべての POV ディメンションに適用	すべての視点ディメンションにプロパティを適用します
展開開始	行ディメンションまたは列ディメンションに使用でき、ディメンション・メンバー・リストを展開して表示します。
カスタム属性の使用可能	フォーム 1.0 の行ディメンションまたは列ディメンションについてのみ、カスタム属性を使用します。
共有メンバーのドリル	行ディメンションまたは列ディメンションに使用でき、共有メンバーがメイン履歴の親メンバーにある場合、共有メンバーのドリルを可能にします。
フォーム定義を超えるフレックス	<p>フレックス・フォームの行ディメンションと列ディメンションについて、フォーム定義の一部として含まれていない行メンバーまたは列メンバーの追加を Oracle Smart View for Office ユーザーに許可する場合に選択します。</p> <p>このオプションは、行ごとまたは列ごとに有効にします。</p> <p>「すべての行ディメンションに適用」を選択することもできますが、現在の行ディメンションで選択されているすべてのプロパティがフォーム内のすべての行ディメンションに適用されることに注意してください。</p> <p>このオプションは、フォーム定義の「Smart View オプション」セクションで、「行のフレックス・フォームの有効化」または「列のフレックス・フォームの有効化」(あるいはその両方)が選択されている場合にのみ表示されます(Smart View フォームのオプションの設定を参照してください)。</p>
行の幅	<p>行ディメンションについて、次の列サイズ・オプションから選択します:</p> <ul style="list-style-type: none"> • 小: 50px • 中: 100px • 大: 300px • 適合するようサイズ調整(デフォルト): 内容が収まるように列が拡張されます • カスタム: ピクセル数を指定します <p>この設定は、フォームが単独で表示される場合、またはダッシュボード内に表示される場合に保持されます。</p>

3. 「**保存**」をクリックして続行するか、「**終了**」をクリックして保存してフォームを閉じます。

表示プロパティの設定

「レイアウト」タブで表示オプションを定義します。

ノート:

- 「勘定科目」ディメンションは、行軸に割り当てます。
- 「勘定科目」、「エンティティ」、「バージョン」、「シナリオ」のディメンションは、列軸に割り当てることはできません。
- 「エンティティ」ディメンションは、任意の軸に割り当てることができます。
- 「バージョン」と「シナリオ」ディメンションは、ページまたは視点軸に割り当てます。

表示プロパティを設定するには:

1. フォームを開き「レイアウト」をクリックします。
フォームとフォルダの選択および表示を参照してください。
2. 「表示プロパティ」を選択し、次のようなオプションを選択します。

表 19-17 表示プロパティ

オプション	説明
フォームを読み取り専用にする	ユーザーがフォームを編集するのを禁止します。
フォームの非表示	ダッシュボードの一部であるフォームまたはメニューやタスク・リストからアクセスできるフォームを非表示にします。
欠落値を空白で表示	データが存在しないセルを空のセルとして表示します。クリアすると、「#MISSING」が表示されます。 スマート・リストで#Missing を表示 を参照してください。
一括割当ての使用可能	このオプションを使用するには、ユーザーが「一括割当て」役割を持っている必要があります。 フリーフォームの操作 を参照してください。
グリッド分散の使用可能	フリーフォームの操作 を参照してください。
セル・レベルのドキュメントの使用可能	アクセス権限に応じて、ユーザーがフォームのセルでドキュメントを追加、編集、表示できるようにします。 フリーフォームの操作 を参照してください。
データの無いフォームのメッセージ	無効なデータが存在する場合に表示するカスタム・テキストを入力します。「このフォームに有効なデータの行がありません。」を表示するよう、空白を残します。
保存の確認メッセージの非表示	フォームの保存の確認メッセージがユーザーに表示されないようにします。

3. 「保存」をクリックして処理を保存して続行するか、「終了」をクリックして処理を保存してフォームを閉じます。

Smart View フォームのオプションの設定

Oracle Smart View for Office のフォーム表示のオプションを指定します。

Smart View フォームのオプションを設定するには:

1. フォームを開き「レイアウト」をクリックします。
[フォームとフォルダの選択および表示](#)を参照してください。
2. 「Smart View オプション」を選択し、次の設定をします。

表 19-18 Smart View オプション

オプション	説明
スプレッドの無効化	Smart View で各分散オプションを無効化します。これにはデフォルトの分散、期間に対するデータの分散、グリッド分散を使用した分散、一括割当てを使用した分散が含まれます。
フォーマットの無効化	Smart View のプロバイダ・リボンの「フォーマット」オプション(「保存」、「クリア」、「適用」)を無効にします。
メンバー・ラベルの繰返し	<p>フォームでのメンバー・ラベルの繰返しを許可します。</p> <p>この設定がクリアになっている場合、「Smart View オプション」ダイアログの「フォーマット」タブで「繰返しメンバー・ラベル」を選択することにより Smart View で上書きし、フォームでのメンバーの繰返しを許可できます。</p> <p>(「セグメント」プロパティで)「ディメンションのドロップダウンの有効化」が選択されているフォームについては、フォーム・レイアウトの動作は自動的に、実際に選択されているかどうかには関係なく、「メンバー・ラベルの繰返し」オプションが選択されているときの動作になります。</p> <p>フレックス・フォームでは(次の「行のフレックス・フォームの有効化」および「列のフレックス・フォームの有効化」を参照)、「メンバー・ラベルの繰返し」オプションは自動的に有効になり、クリアできません。</p>
シート保護の無効化	<p>Smart View のフォームでのデータ・セルの保護を無効にします。</p> <p>ユーザーはデータをセルに入力または貼付けできますが、変更されたデータを送信することはできません。</p> <p>デフォルトで、このオプションはクリアになっています。</p>
行のフレックス・フォームの有効化	<p>Smart View で行のフォームをフレックス・フォームとして有効化します。</p> <p>このオプションが有効になっている場合、「メンバー・ラベルの繰返し」オプションは自動的に有効になり、クリアできません。</p> <p>フレックス・フォームの設計を参照してください。</p>
列のフレックス・フォームの有効化	<p>Smart View で列のフォームをフレックス・フォームとして有効化します。</p> <p>このオプションが有効になっている場合、「メンバー・ラベルの繰返し」オプションは自動的に有効になり、クリアできません。</p> <p>フレックス・フォームの設計を参照してください。</p>

表 19-18 (続き) Smart View オプション

オプション	説明
フレックス・フォームの無効なメンバーの表示	<p>Smart View でのリフレッシュ後にフレックス・フォーム・シートに無効なメンバーを保持します。</p> <p>無効なメンバーは次の結果の場合があります:</p> <ul style="list-style-type: none"> メンバー名の入力ミスまたはスペルミス あるシートから別のシートに、または同じシート内でメンバー名をコピーして貼り付けるときのエラー フォーム定義を超えるメンバー名の入力 <p>このチェック・ボックスが有効になっている場合、リフレッシュ時に無効なメンバーがシートに保持され、見つけて修正しやすいように強調表示されます。</p> <p>フレックス・フォームの設計を参照してください。</p>

3. 「保存」をクリックして続行するか、「終了」をクリックして保存してフォームを閉じます。

印刷オプションの設定

印刷オプションを設定するには:

1. フォームを開き「レイアウト」をクリックします。
[フォームとフォルダの選択および表示](#)を参照してください。
2. 「印刷オプション」を選択し、次のような設定を選択します。

表 19-19 印刷オプション

オプション	説明
サポート詳細を含める	<p>PDF ファイルにサポート詳細を追加行として次のように印刷します。</p> <p>標準順序: 「サポート詳細」 ページと同じ順序</p> <p>逆順: 関連付けられたメンバーの前。子に関するサポート詳細は親の上に表示され、兄弟の順序が保たれます</p>
コメントの表示	セルのテキスト・ノートを表示します
データのフォーマット	数値フォーマットの設定を適用します
精度の適用	特定の小数点以下の桁数を使用してデータを印刷します

3. 「保存」をクリックして続行するか、「終了」をクリックして保存してフォームを閉じます。

フォームへのデータ検証ルールの組込み

「レイアウト」タブで、検証ルールをグリッド、列、行またはセルに対して追加および更新できます。ルールを処理すると、セルの色を変更し、データ入力時にユーザーに検証メッセージを表示できます。

 **ノート:**

データ検証ルールを追加する前に、ルールが実行する関数について検討します。検証ルールの使用の詳細およびベスト・プラクティスは:

[データ検証の管理](#)を参照してください。

フォームにデータ検証ルールを組み込むには:

1. フォームを開き「**レイアウト**」をクリックします。
[フォームとフォルダの選択および表示](#)を参照してください。
2. 「**検証ルール**」を選択してから、次の検証ルール・オプションを選択します。

 **ノート:**

表示される右クリック・メニュー・オプションはコンテキスト依存であり、ルールおよびメニュー・オプションがすでに追加されているかどうかによって異なります。

表 19-20 「検証ルール」のオプション

オプション	説明
検証ルールの追加/編集	「 データ検証ルール・ビルダー 」ダイアログ・ボックスで既存のルールを作成または変更します。
検証ルールのコピー 検証ルールの貼付け	選択したルールをコピーし、新しい場所に貼り付けます。
既存のブロックがあるページについてのみ検証	潜在的ブロックが含まれるページの組合せに対してのみ検証を実行します。唯一の例外は、動的計算、動的計算および保管、ラベルのみ、または子メンバー設定が 1 つ含まれる保管が含まれるページの組合せです。この場合、ページはロードされます。
ユーザーがアクセス権を持つセルおよびページについてのみ検証	サービス管理者ではなく現在のユーザーとして、ユーザーのセキュリティを使用して検証を実行します。

3. ルールを作成し、検証します。
[データ検証ルールの作成および更新](#)を参照してください。
4. フォームで、フォームの構築を続行するため「**次**」をクリックしてから、フォームを検証および保存します。

共有メンバーでのドリルの有効化

フォーム設計者は、共有メンバーを使用して、アプリケーション内に代替ロールアップ構造を作成することがよくあります。これらの代替階層を使いやすいするために、アプリケーションには、特定のディメンションの共有メンバーにドリルする機能が用意されています。ドリル・オプションはディメンション・プロパティの 1 つで、ドリル操作の焦点を特定のディメンションに絞る際の柔軟性を提供します。ドリル・オプションは、フォームの設計時に行

または列軸に配置されたディメンションにのみ使用可能です。ページまたは POV ディメンションにはドリル機能はありません。

たとえば、エンティティ・ディメンションを表す次のような階層を使用しているとしたら。

World			
	USA		
		West	
			CA
			AZ
			CO
		East	
			NY
			MA
			PA
		South	
			TX
			FL
			NM
		North	
			WA
			MI
			MN
	Southwest		
		South (Shared)	
		West (Shared)	
	Northeast		
		North (Shared)	
		East (Shared)	

iDescendants(Southwest)が行に定義されているフォームは、次のメンバーを返します。

- TX
- FL
- NM
- South
- CA
- AZ
- CO
- West
- Southwest

フォームで共有メンバーのドリルを有効にするには:

1. フォームを開き「レイアウト」をクリックします。
[フォームとフォルダの選択および表示](#)を参照してください。

2. 行または列ディメンションをクリックして、「**ディメンション・プロパティ**」を展開します。
3. 「**ディメンション・プロパティ**」で、「**共有メンバーのドリル**」を選択します。
4. 「**保存**」をクリックします。

精度の設定について

「**その他オプション**」では、様々な勘定科目タイプについて最小値と最大値を適用し、データの精度を制御できます。たとえば、長い数の小数部の桁を切り捨てることができます。精度の設定は値の表示にのみ影響し、保管されている値には影響しません。たとえば、**最小精度**が 2 で、Q1 の値 100 が 1 月、2 月および 3 月に分散されると、選択されていない場合、これらの月のセルには 33.33 と表示されます。選択されている場合、それらには実際の値 (33.33333333333333 など) が表示されます。値を保管する際の小数点以下の桁数は有限であるため、1 月、2 月および 3 月の値が Q1 に集約されると、33.33333333333333 に 3 が掛けられて、Q1 の値は 99.99999999999998 になります。

フォームの精度およびその他オプションの設定

精度およびその他オプションを設定するには:

1. フォームを開き「**その他オプション**」をクリックします。
[フォームとフォルダの選択および表示](#)を参照してください。
2. 「**精度**」で、「**通貨の値**」、「**通貨以外の値**」および「**パーセンテージ値**」について、セルに表示される小数部の桁数を指定します。
[精度の設定について](#)を参照してください。

短い小数部を持つ数にゼロを追加するには、「**最小**」に値を指定します。大きい数の小数部を切り捨てるには、「**最大**」に値を指定します。例:

表 19-21 データ精度の例

値	最小精度	最大精度	表示される値
100	0	任意	100
100	3	3 以上の任意の数値か、 なし	100.000
100.12345	5 以下の任意の数値	なし	100.12345
100.12345	7	なし	100.1234500
100.12345	3 以下の任意の数値	3	100.123
100.12345	0	0	100
100.12345	2	4	100.1235
100	2	4	100.00

ノート:

選択により、通貨メンバーの精度設定が上書きされます。かわりに、通貨メンバーの精度設定を使用するには、「**通貨メンバーの精度設定の使用**」を選択します。

3. 「コンテキスト・メニュー」で、「**使用可能なメニュー**」から「**選択したメニュー**」に移動することによって、メニューをフォームに関連付けます。複数のメニューの場合は、右側にある移動オプションをクリックして、表示順序を指定します

コンテキスト・メニュー(アクション・メニュー)の作成方法の詳細:

アクション・メニューの管理を参照してください。

4. 「**動的ユーザー変数の使用可能**」を選択して、フォーム内の動的ユーザー変数を許可し、「**使用可能なユーザー変数**」を「**選択したユーザー変数**」に移動します。

ユーザー変数の動的設定を参照してください。

スマート・プッシュを使用したデータの移動

有意義で包括的なレポートを作成するために、スマート・プッシュを使用して、フォームでの操作中にコメント、添付およびサポート詳細をソース・キューブからレポート・キューブに即時に移動できます。ユーザーは、別のキューブから取得されるデータに関する詳細な分析を実行できます。

スマート・プッシュを使用してデータを移動する方法を学習するには、**Oracle Enterprise Performance Management Cloud データ統合の管理**のスマート・プッシュを使用したあるキューブから別のキューブへのデータの移動を参照してください。

トラブルシューティング

スマート・プッシュに関する問題を解決する方法の詳細は、**Oracle Enterprise Performance Management Cloud オペレーション・ガイド**のスマート・プッシュによる問題の解決を参照してください。

非対称の行と列の作成

非対称の行と列には、同じディメンションで選択されたが異なっているメンバー・セットが含まれます。例:

行/列 A-シナリオ=実績、期間=Q1

行/列 B-シナリオ=予算、期間=Q2、Q3、Q4

非対称の行と列を作成するには:

1. フォームを開き「**レイアウト**」をクリックします。
[フォームとフォルダの選択および表示](#)を参照してください。
2.  をクリックし、変更するディメンションを選択します。
3. ディメンション名の右側にある  をクリックし、このディメンションに選択したメンバーを変更します。

[メンバー・セレクトタの使用](#)を参照してください。

4. 「保存」をクリックして続行するか、「終了」をクリックして保存し、終了します。

式の行と列の追加

行および列の式を定義できます。たとえば、月の売上げ列の間のパーセンテージ差異を計算する式の列を作成できます。行または列の式は、行または列のすべてのディメンションに適用されます。式を定義する場合、または既存の式をフォームに割り当てる場合は、「レイアウト」タブで行または列を選択し、「セグメント・プロパティ」のオプションを使用します。

[式の作成](#)を参照してください。

ヒント:

空白行を作成するには、他の 2 つの行間に式の行を追加することを考慮します。空白行は、フォーム内で小計と合計を視覚的に区別する場合に便利です。

式の行と列を追加するには:

1. フォームを開き「レイアウト」をクリックします。
[フォームとフォルダの選択および表示](#)を参照してください。
2. 「レイアウト」タブで、「行」または「列」を右クリックします。
3. 「式の行の追加」または「式の列の追加」を選択します。
4. 新しい「式ラベル」をクリックし、式の名前を入力します。
5. 式ラベルの行または列の番号をクリックし、ユーザーが  をクリックしたときに式を確認できる「フォームの式を表示」など、「セグメント・プロパティ」を指定します。
6. 「セグメント・プロパティ」で、「式のデータ型」の各ディメンションに対して、式の結果を表示する方法(スマートリスト、日付、テキスト形式など)を選択します。
7. 式を入力し、 をクリックします。
[式の編集](#)を参照してください。
8. 「検証」をクリックし、エラーを探して修正します。

フォーム・ページと視点の定義

ページ軸と視点(POV)のディメンションとメンバーを選択できます。POV のディメンションとメンバーは、フォーム・キューブに有効であり、かつページ、列または行軸に割り当てられていない必要があります。POV によって、データ交差とフォームのコンテキストを定義するメンバーが設定されます。ユーザー変数を使用すると、変数名が POV に表示されます。

[ユーザー変数の管理](#)を参照してください。

ページ軸および視点を定義するには:

1. フォームを開き「レイアウト」をクリックします。
[フォームとフォルダの選択および表示](#)を参照してください。

2.  をクリックし、そのディメンションを「ページ」にドラッグします。
3. ページ軸ディメンションごとに  をクリックし、メンバーを選択します。
[メンバー・セレクタの使用](#)を参照してください。

 **ノート:**

「検索」ボックスが容易に確認できるようにメンバー・リストに表示されるメンバーの数を削減するには、ホーム・ページに移動し、「アプリケーション」をクリックし、「設定」をクリックします。「ページ」ドロップダウンの項目数」オプションで、より少ない値を入力します。

4. 必要に応じて、ステップ 2 と 3 を繰り返します。複数のディメンションをページ軸に割り当て、ユーザーがデータの入力時にディメンションを変更できるようにします。「表示プロパティ」を使用して、最近適用した選択を使用できます。
5. 「ディメンション・プロパティ」を指定します。
[簡易ディメンション・エディタでのディメンション・プロパティの編集](#)を参照してください。
6.  をクリックし、ディメンションを「視点」にドラッグして、ディメンション(メンバー)をフォームの視点に追加します。
7. 「ディメンション・プロパティ」を指定します。
[簡易ディメンション・エディタでのディメンション・プロパティの編集](#)を参照してください。
8. 「保存」をクリックして続行するか、「終了」をクリックして保存し、終了します。

特定のタイプのフォームの設計

- [式の行と列を使用したフォームの設計](#)
- [データ検証を使用したフォームの設計](#)
- [グローバル仮定を使用したフォームの設計](#)
- [ローリング予測のフォームの設計](#)
- [フレックス・フォームの設計](#)

式の行と列を使用したフォームの設計

式の行と列には、グリッド・メンバーに対して算術計算を実行する式が含まれます。たとえば、特定の列内の値にランクを付けたり、2つの行間の差異を計算できます。式は、グリッド参照、算術演算子および算術関数で構成されます。既存の式をフォームに定義する、または割り当てる場合は、「レイアウト」タブで適切な行または列を選択し、「セグメント・プロパティ」の下で選択を行います。

[式の行と列の追加](#)を参照してください。

式の作成および算術関数の使用に関する情報:

[フォームの式関数](#)を参照してください。

データ検証を使用したフォームの設計

ビジネス・ポリシーやビジネス・プラクティスの実装に役立つよう事前定義されたデータ検証ルールが含まれるフォームを設計できます。フォームでは、入力したデータが検証ルールに違反したときに生成されるセルの色やデータ検証メッセージを指定できます。データ検証ルールは、フォームの一部として保存されます。[フォームへのデータ検証ルールの組み込み](#)を参照してください。

[データ検証の管理](#)も参照してください。

グローバル仮定を使用したフォームの設計

フォーム設計者は、通常、減価償却値、税率、単価など、グローバル仮定(「ドライバ」、「ドライバ・データ」とも呼ばれる)を格納する特定の目的のフォームを作成します。これは、**Migration** を使用してテスト環境から本番環境にフォームのドライバ・データを移行する場合などに役立ちます。このようなフォームは、通常は小さく、計算を処理する参照表として使用されます。

ノート:

グローバル仮定は、ダッシュボードまたは複数のセグメントを持つフォームでは使用できません。

フォーム設計時にテスト環境から本番環境へのグローバル仮定の転送を有効にするには:

1. 「レイアウト」タブで、「グリッドのプロパティ」をクリックします。
2. 「その他」で、「グローバル仮定フォーム」を選択します。
3. フォームを更新して、税率などのドライバ・データを保管します。**Migration** を使用して移行する場合、これにより、タグ付けされたフォームに含まれるドライバ・データを移行できます。

ローリング予測のフォームの設計

次も参照:

- [ローリング予測について](#)
- [ローリング予測の作成](#)
- [ローリング予測変数の変更](#)

ローリング予測について

従来の予測では、予測サイクルは常に会計年度の終わりに関連し、予測期間の月は会計年度の月が進むにつれて減っていきます。

ローリング予測は、会計年度の終了期間と関係なく継続するという点で、従来の予測とは異なります。ローリング予測の期間は、ローリング予測用に事前定義されたウィンドウに基づいて進みます。この期間は通常月次または四半期ごとに定義されます。月次ローリング予測は通常 12 ヶ月、18 ヶ月、または 24 ヶ月サイクルです。12 ヶ月サイクルでは、12 ヶ月の期

ローリング予測の作成

ノート:

ローリング予測を作成および操作できるのはサービス管理者のみです。これには、フォームの設計時にローリング予測オプションを表示する機能、ローリング予測をユーザー・インタフェースから移動する機能、代替変数を削除または変更する機能が含まれます。

ローリング予測のフォームを設計するには:

1. 新しいフォームを作成します。
[フォームとフォルダの選択および表示](#)を参照してください。
2. 「レイアウト」タブで、列軸の「年」および「期間」ディメンションを削除します。
3. 列セグメント・ヘッダーを右クリックして、「**ローリング予測設定**」を選択します。
「ローリング予測設定」メニュー・オプションは、「年」および「期間」が同じグリッド軸(行または列)である場合にのみ使用できます。
4. 「**ローリング予測設定**」ダイアログ・ボックスで、次の情報を入力します:

表 19-22 「ローリング予測設定」のオプション

オプション	説明
接頭辞	これによりローリング予測代替変数が別の代替変数と区別されます。たとえば、4QRF は予測が第 4 四半期のローリング予測であることを指定します。
既存の代替変数の再利用	以前に使用したことがある接頭辞を指定する場合は、これを選択します。
開始年	ローリング予測が開始する年(例: FY11)。 開始年を入力するか、  をクリックして、「メンバー選択」ダイアログ・ボックスを開きます。 入力した接頭辞が既存のローリング予測代替変数の接頭辞に一致する場合に、「 既存の代替変数の再利用 」を選択してあると、既存の代替変数の開始年が「開始年」に自動的に入力されます。
開始期間	ローリング予測が開始する年の期間(例: Q1)。 開始期間を入力するか、  をクリックして、「メンバー選択」ダイアログ・ボックスを開きます。 入力した接頭辞が既存のローリング予測代替変数の接頭辞に一致する場合に、「 既存の代替変数の再利用 」を選択してあると、既存の代替変数の開始期間が「開始期間」に自動的に入力されます。
期間数	個別のセグメントとして生成される年/期間の組合せの数。

5. 「**生成**」をクリックします。
定義済の代替変数が作成され、ローリング予測用の代替変数の組合せを含むフォームで、追加の列セグメントが作成されます。

 ノート:

- 代替変数は、開始年および開始期間に選択した期間に基づいています。
[メンバーとしての代替変数の選択](#)を参照してください。
- フォームを設計するとき、「年」と「レベル 0」の期間(たとえば、FY12/Jan)が選択されている行または列から「ローリング予測設定」ダイアログ・ボックスを開いた場合は、「開始年」と「開始期間」が自動的に入力されます。関数、変数、またはレベル 0 でないメンバーを使用して列のメンバーを選択した場合、値は自動的に入力されません。
- ローリング予測変数を別のフォームで再利用するには、新しいフォームの列ヘッダーを右クリックして「メンバー・セレクタ」を起動します。

ローリング予測変数の変更

ローリング予測代替変数の値は、フォームで直接改訂できます。

フォームでローリング予測変数を変更するには:

1. ホーム・ページで、「**データ**」をクリックします。
2. ローリング予測のフォームを開きます。
3. フォームの列ヘッダーを選択し、「**アクション**」をクリックして、「**ローリング予測変数の設定**」を選択します。
4. 「**ローリング予測変数の設定**」ダイアログ・ボックスで、「年」および「期間」ディメンションの値を入力または編集します。

「**値のシフト基準**」の横の選択を変更することで、値を上下にシフトできます。「**値のシフト基準**」の隣にある選択肢を変更すると、年ディメンションと期間ディメンションの値は自動的に移入され、シフト後の年と期間の値が表示されます。

5. 「**適用**」をクリックします。

新しい値は、これらの代替変数が使用されるすべてのフォームに流れ、そのフォームに変更が反映されます。

フレックス・フォームの設計

フレックス・フォームは、Oracle Smart View for Office での行および列の柔軟な管理を提供するフォーム・タイプです。

フレックス・フォームでは、フレックス・フォームに添付されたビジネス・ルールの実行、保存時または保存前のルールの実行、一部のアド・ホック固有の機能の有効化など、すべての標準フォームのプロパティおよび機能が保持されます。ただし、フレックス・フォームでは、ディメンションとメンバーの行セルと列セル、およびすべてのデータ・セルは保護されません。これは、Smart View ユーザーが行および列メンバーを再配置したり、行または列のソートや移動を行うことができることを意味します。変更された行および列の順序は、リフレッシュ時および送信中に維持されます。また、Smart View ユーザーは、Excel のフィルタリング機能を使用してデータをフィルタすることもできます。

 ノート:

フレックス・フォームは、Smart View でのみ使用され、Web インタフェースでは使用されません。

フォームの定義中に次の操作を行います:

- 「**行のフレックス・フォームの有効化**」または「**列のフレックス・フォームの有効化**」、あるいはその両方を選択して、フレックス・フォーム固有の機能を有効にします。これらのオプションは、「**レイアウト**」タブの「**Smart View オプション**」にあります。

[Smart View フォームのオプションの設定](#)を参照してください。

- 「**行のフレックス・フォームの有効化**」または「**列のフレックス・フォームの有効化**」、あるいはその両方を選択した場合、「**フレックス・フォームの無効なメンバーの表示**」オプションを有効にできます。このオプションは、「**レイアウト**」タブの「**Smart View オプション**」にあります。

フレックス・フォームにメンバー名を入力するとき、エラーが発生する場合があります。たとえば、ユーザーがメンバー名の入力を間違ったりスペルミスをする場合、あるシートから別のシートにまたは同じシート内でメンバー名をコピーして貼り付けるときに失敗する場合、フォーム定義を超えるメンバー名を入力して無効なメンバーになる場合などです。「**フレックス・フォームの無効なメンバーの表示**」オプションを有効にすることで、無効なメンバーがリフレッシュ後にフォームに保持されます。無効なメンバーは、見つけて編集しやすいように強調表示されます。ユーザーがメンバー名に必要な修正を加えて再度リフレッシュした後、フレックス・フォームにデータを入力して送信できます。

[Smart View フォームのオプションの設定](#)を参照してください。

- 個々の行または列、あるいはその両方について、**フォーム定義を超えるフレックス・オプション**を有効にします。**フォーム定義を超えるフレックス・プロパティ**は、行または列を選択した場合に「**レイアウト**」タブの「**ディメンション・プロパティ**」に表示されます。

このオプションを行または列ディメンションについて有効にすると、Smart View ユーザーは、フォーム定義の一部として含まれていない行または列メンバーをフレックス・フォームに追加できます。フレックス機能を必要とする行または列にのみ、これを使用してください。

[ディメンション・プロパティの設定](#)を参照してください。

- アクション・メニューを定義して、Smart View で別のフレックス・フォームを開きます。

アクション・メニューを定義するには:

[アクション・メニューの管理](#)を参照してください。

フレックス・フォームにアクション・メニューを添付するには:

[フォームの精度およびその他オプションの設定](#)を参照してください。

フレックス・フォームの使用に関する情報:

[Oracle Smart View for Office の操作のフレックス・フォーム](#)を参照してください。

フォームおよびフォーム・コンポーネントの操作

次も参照:

- [フォームとフォルダの選択および表示](#)
- [フォームのプレビュー](#)
- [フォーム定義の印刷](#)
- [フォームの検索](#)
- [フォームの編集](#)
- [フォームの移動、削除および名前変更](#)
- [Smart View のセル・フォーマットのフリーフォームでの存続](#)

フォームとフォルダの選択および表示

これらの手順を使用して、フォーム・フォルダと、フォルダに含まれるフォームを選択して開きます。

フォーム・フォルダまたはフォームを選択して開くには:

1. 「ナビゲータ」アイコン  をクリックし、「作成および管理」で、「フォーム」をクリックします。
2. 次のステップのいずれかを実行します:
 - フォルダを開くには、「フォルダ」の下からライブラリを展開し、フォーム・フォルダを選択します。
 - フォームを開くには、「フォルダ」の下からライブラリを展開し、フォーム・フォルダを選択して、「フォームとアド・ホック・グリッドの管理」ペインに表示されているリストからフォームを選択します。
3. フォーム・フォルダを選択した後、「フォルダ」の横にあるボタンを使用して、フォルダの作成、削除、名前変更、移動およびアクセス割当てを行います。
4. フォームを管理するには、「フォームとアド・ホック・グリッドの管理」ペインで次のいずれかのアクションを選択します:
 - フォームを開くには、フォームを選択し、「編集」をクリックします。
 - フォームを作成するには、「単一のフォームの作成」をクリックします。
 - フォームの編集、削除、移動、アクセス割当て、名前変更または用途の表示(複合フォームのみ)を行うには、フォームを選択し、対応するボタンを使用します。

フォーム名の横にあるアイコンはフォームのタイプを示します:

-  単一のフォーム
-  複合フォーム

 ノート:

複合フォームのサポートは終了しました。ただし、既存の複合フォームは引き続き機能します。複合フォームではなくダッシュボードを使用するように変更することをお勧めします。

-  アド・ホック・グリッド

アド・ホック・グリッドの設定の詳細:

フリーフォームの操作のデータ入力および分析のためのアド・ホックの使用を参照してください。

フォームのプレビュー

フォームの設計中に、視点、列、行およびページ軸に割り当てられているディメンションをプレビューできます。プレビューでは、メンバー属性、別名および、フォームに関連付けられたデータが表示されますが、新規データは入力できません。

プレビューにより、通常のフォームの設計検証チェックが完了し、フォームに含まれるデータ検証ルールが正しく評価されたかどうかをチェックされます。フォームを保存するには、データ検証ルールが正しく完了している必要があります。また、データ検証ルールは、フォームの一部として保存されます。変更をフォームに保存しない場合、フォームが最後に保存された後に行われた検証ルールの変更はすべて失われます。

フォームの設計をプレビューするには:

1. 「**フォームとアド・ホック・グリッドの管理**」でフォームを選択し、「**編集**」をクリックしてフォームを開きます。
2. フォームを開き「**プレビュー**」をクリックします。
フォームが新しいタブに編集モードで開きます。
3. 設計検証チェック中にレポートされた問題を解決します。これには、データ検証ルールに関する問題も含まれます。
4. フォームを保存し、更新が保存されたことを確認します。更新には、データ検証ルールの変更も含まれます。

フォーム定義の印刷

サービス管理者は、ディメンション・メンバー、ビジネス・ルール、アクセス権限および他のフォームのコンポーネントについての情報が記載されているフォーム定義レポートを印刷できます。

フォーム定義レポートを作成および印刷するには:

1. 「**ナビゲータ**」アイコン  をクリックし、「**モニターおよび検索**」で「**システム・レポート**」をクリックします。
2. 「**フォーム**」タブを選択します。
3. 「**レポート・オプションの選択**」で、「**使用可能なフォーム**」から「**選択したフォーム**」に移動することによって、印刷するフォーム定義を選択します。
4. **オプション:** 「**メンバー選択リストを含める**」を選択し、レポートに列と行を含みます。

5. **オプション: 「ビジネス・ルールを含める」** を選択し、関連付けられたビジネス・ルールを含みます。
6. **「レポート作成」** をクリックします。
Adobe Acrobat が次のような集計されたレポートを生成します:
 - キューブ
 - 説明
 - 列ディメンション、メンバーおよび追加の列の定義
 - 行ディメンション、メンバーおよび追加の行の定義
 - 「ページと視点」ディメンション
 - フォームのアクセス権限
 - 関連付けられたビジネス・ルール
7. レポートを印刷するには、Adobe のツールバーで、**「ファイル」**、**「印刷」** の順に選択します。

フォームの検索

フォームを検索するには:

1. **「ナビゲータ」** アイコン  をクリックし、**「作成および管理」** で、**「フォーム」** をクリックします。
2. 「フォームとアド・ホック・グリッドの管理」で、**「検索」** ボックスにフォーム名の一部または全部を入力して、**[Enter]** を押します。
大文字と小文字の区別を無視し、次の一致が検索されます。
3.  をクリックして前方(下方)に検索するかまたは  をクリックして後方(上方)に検索します。

フォームの編集

フォームのレイアウト、メンバーおよびプロパティを編集できます。たとえば、式の行または列をフォームに追加できます。

ノート:

以前は、データをサマリーするために複合フォーム(複数の単一のフォームで構成されるフォーム)を作成できました。複合フォームのサポートは終了しました。ただし、既存の複合フォームは引き続き機能します。複合フォームではなくダッシュボードを使用するように変更することをお勧めします。

[ダッシュボードの設計](#)を参照してください。

フォームを編集するには:

1. フォームを選択し、 をクリックします(フォームとフォルダの選択および表示を参照)。または、ホーム・ページで「データ」をクリックすることもできます。フォーム・フォルダを展開し、フォームの名前をクリックしてそれを開き、「アクション」をクリックして「編集」を選択します。
2. 選択:
 - a. **プロパティ:** 説明および指示を編集します。フォームの作成を参照してください。
 - b. **レイアウト:** フォームのレイアウトを編集します。レイアウトの定義を参照してください。
 - c. **その他オプション:** フォーム精度の編集、フォームに関連付けられているコンテキスト・メニューの変更、動的ユーザー変数の有効化/無効化、およびユーザー変数の選択を行います。フォームの精度およびその他オプションの設定を参照してください。
アクション・メニューの管理およびユーザー変数の動的設定も参照してください。
 - d. **ビジネス・ルール:** フォームに関連付けるビジネス・ルールを変更したり、ビジネス・ルールのプロパティを変更します。
ルールの管理を参照してください。
3. 次のいずれかのオプションを選択します:
 - 作業を保存するには、「保存」をクリックします。
 - フォームのバリエーションを新しい名前で保存するには、「名前を付けて保存」をクリックし、「新規フォーム名」を入力して、「OK」をクリックします。新しい名前を更新されたフォームがフォーム・リストに追加されます。レッドウッド・エクスペリエンスが有効になっている場合、新しい名前のフォームは新しい動的タブで開きます。

フォームの移動、削除および名前変更

フォームを移動、削除および名前変更するには:

1. フォームを選択します。
フォームとフォルダの選択および表示を参照してください。
2. 次のいずれかのタスクを実行します:
 - フォームを移動するには、「移動」をクリックしてから、宛先フォルダを選択します。

ノート:

複数のフォームが同じフォルダにある場合、それらを同時に移動できます。

- フォームを削除するには、「削除」をクリックします。
 - フォームの名前を変更するには、「名前変更」をクリックしてから、新しい名前を入力します。
3. 「OK」をクリックします。

Smart View のセル・フォーマットのフリーフォームでの存続

ノート:

次のステップを実行する前に:

Oracle Smart View for Office の操作 22.100 の EPM Cloud へのネイティブ Excel フォーマットの保存を参照してください。

フォームのフォーマットを選択するには:

1. フォームで右クリックし、「適用」を選択します。
2. 選択:
 - **セル・スタイル:** ビジネス・プロセスのフォーマットを使用する場合
 - **カスタム・スタイル:** Oracle Smart View for Office で保存したフォーマットを使用する場合

詳細情報:

- Smart View およびフリーフォームでサポートされている Microsoft Excel のフォーマット機能:
フリーフォームの操作の Planning フォームでの Smart View のフォーマットについてを参照してください。
- Excel フォーマットの保存時:
[Oracle Smart View for Office ユーザーズ・ガイド](#)を参照してください。

フォームとフォルダの管理

「フォームとアド・ホック・グリッドの管理」および「ビジネス・ルール・フォルダ」ページを使用して、フォルダとフォームを管理します。「フォームとアド・ホック・グリッドの管理」ページにアクセスするには、「ナビゲータ」アイコン  をクリックし、「作成および管理」で「フォーム」をクリックします。「ビジネス・ルール・フォルダ」にアクセスするには、「ナビゲータ」アイコン  をクリックし、「作成および管理」で「ルール・セキュリティ」を選択します。

表 19-23 タスク

タスク	トピック
フォルダの作成	フォルダの作成
フォルダの移動、削除または名前変更	フォルダの操作
フォームの作成	フォームの作成
フォームとフォルダへの権限の割当て	アーティファクト、ルールおよびフォルダに対する権限の割当てについて
フォームの移動および削除	フォームの移動、削除および名前変更

フォルダのすべてのフォームまたはビジネス・ルールを表示するには、左側のフォルダ領域でフォルダ名をクリックします。すべてのフォームを選択するには、フォームのリストの上にあるチェック・ボックスを選択します。

フォルダの作成

フォルダを使用してフォームとビジネス・ルールを階層的に整理します。階層内でフォルダを移動させることができ、フォルダが別の階層レベルにある場合は、同じ名前を付けることができます。次の操作は実行できません。

- 空でないフォルダの削除
- 複数のフォルダの選択
- 最上位レベルのフォルダの名前変更、移動または削除。フォームの場合、最上位レベルのフォルダ名は **Library** です。ビジネス・ルールの場合、最上位レベルのフォルダ名は **CalcMgrRules** です。
- 管理者でないかぎり、最上位レベルのフォルダへのファイルの追加

フォルダを作成するには:

1. 次のいずれかのアクションを行います:
 - フォーム・フォルダの場合: 「ナビゲータ」アイコン  をクリックし、「作成および管理」で、「フォーム」をクリックします。
 - Calculation Manager ビジネス・ルール・フォルダの場合: 「ナビゲータ」アイコン  をクリックし、「作成および管理」で、「ルール・セキュリティ」をクリックします。
2. 作成先のフォルダを選択します。
3. フォルダ・リストの上の「作成」をクリックします。
4. フォルダ名を入力します。
5. 「OK」をクリックします。

フォルダの操作

フォルダを移動、削除または名前変更するには:

1. フォーム・フォルダの場合: 「ナビゲータ」アイコン  をクリックし、「作成および管理」で、「フォーム」をクリックします。

ビジネス・ルール・フォルダの場合: 「ナビゲータ」アイコン  をクリックし、「作成および管理」で「ルール・セキュリティ」をクリックします。
2. 移動、削除または名前変更するフォルダを選択します。
3. 次のタスクを実行します:
 - 移動するには、「移動」をクリックします。選択したフォルダを移動する宛先フォルダを選択します。

 **ノート:**

フォルダを移動するとき、すべてのネストされたフォルダ、フォームおよびそれらにある **Calculation Manager** のビジネス・ルールも移動されます。

- 削除するには、「**削除**」をクリックします。
 - 名前を変更するには、「**名前変更**」をクリックしてから、新しい名前を入力します。
4. 「OK」をクリックします。

 **ヒント:**

ユーザーのブラウザ・ロケールに基づいてフォルダ名をローカライズできることをご存知でしたか。フォルダ名を(たとえば、英語から日本語に)ローカライズするには、「**ツール**」クラスターの「**アーティファクト・ラベル**」ページでフォルダ名をカスタマイズできます。詳細情報:

[アーティファクト・ラベルの指定](#)を参照してください。

ルールの管理

- [ルールについて](#)
- [フォームでのルールの追加および削除](#)
- [ビジネス・ルールのプロパティの設定](#)
- [ルールの使用状況の表示](#)
- [実行時プロンプトについて](#)
- [Groovy ルールの使用](#)

ルールについて

適切なアクセス権により、ユーザーはアプリケーションからビジネス・ルールを起動できます。ルールの起動時に、ユーザーに入力を求めるプロンプトが表示される場合もあります。

データ・フォーム内から、またはアプリケーションで個別にビジネス・ルールを起動するには、そのルールが **Calculation Manager** からデプロイされている必要があります。最適なパフォーマンスのために、フォームで実行するビジネス・ルールは 3 分以内に実行するよう設計されています。実行時間がそれよりも長いルールでは、バッチ処理のスケジュールを作成するか、ピーク以外の時間にルールを実行できます。

ビジネス・ルールに関するパフォーマンス問題を診断し、アクティビティ・レポートを使用して任意の問題を特定し、対処できます。アクティビティ・レポートによって、実行に最も時間がかかっているビジネス・ルールを特定します。その後、**Calculation Manager** でルールを開き、ログを確認して、ルール内のステップを最適化することでパフォーマンスを向上できます。

詳細について:

- ビジネス・ルールの作成、更新およびデプロイについては、*Oracle Enterprise Performance Management Cloud Calculation Manager* での設計のデプロイメント・ビューからのビジネス・ルールおよびビジネス・ルールセットのデプロイを参照してください
- 実行時プロンプトの使用については、[実行時プロンプトについて](#)を参照してください
- ルールがどこで使用されているかを詳しく説明するレポートを作成するには、[ルールの使用状況の表示](#)を参照してください
- アクティビティ・レポートを表示してルールのパフォーマンス問題を診断するには、[アクティビティ・レポートの表示](#)を参照してください
- ビジネス・ルールの最適化については、*Oracle Enterprise Performance Management Cloud Calculation Manager* での設計のビジネス・ルールの最適化を参照してください

トラブルシューティング

一般的な実行エラーを回避するためのルールの設計および時間がかかるルールの最適化の詳細は、*Oracle Enterprise Performance Management Cloud オペレーション・ガイド*のビジネス・ルールのエラーおよびパフォーマンスのトラブルシューティングを参照してください。

フォームでのルールの追加および削除

キューブによって、1 つ以上のルールをフォームに関連付けることができます。ユーザーはフォームから関連付けられたルールを起動し、値を計算して割り当てることができます。フォームを開くまたは保存するときに、フォームに関連付けられた各ルールが自動的に起動するかどうかを設定できます。ルールの起動順序を変更したり、フォームからルールを削除することもできます。

次の点に注意してください。

- ルールをビジネス・プロセス・フォームに追加する前に、*Calculation Manager* からビジネス・プロセスにルールをデプロイする必要があります。
[ルールについて](#)を参照してください。
- 同様に、*Calculation Manager* でルールが削除された場合は、そのルールがビジネス・プロセスで今後使用されないように、ルールをビジネス・プロセスに再デプロイする必要があります。オプションで、このトピックの手順を使用して、フォームからルールを手動で削除できます。
- フォームがロードまたは保存されたときに自動的に実行されるよう設定されたルールはバックグラウンドで実行されません。

フォームでビジネス・ルールを追加、更新または削除するには:

1. 次のいずれかの操作を実行します。
 - 現在のフォームを更新するには、「アクション」、「ビジネス・ルール」の順にクリックします。
 - ルールを関連付けられるように編集用にフォームを開くには、ホーム・ページに移動して、「ナビゲータ」アイコン  をクリックし、「作成および管理」で「フォーム」をクリックします。フォームを選択し、、「ビジネス・ルール」の順にクリックします。
2. 「キューブ」ドロップダウン・メニューからキューブを選択します。

3. 「ビジネス・ルール」リストから、フォームに関連付けるルールを選択し、「**選択したビジネス・ルール**」に追加します。関連付けられたルールを削除するには、「**選択したビジネス・ルール**」でルールを選択して削除します。

デフォルトでは、「フォームの計算」ルールが選択されます。「フォームの計算」はフォームが小計を計算するために自動的に作成されます。「フォームの計算」を削除することで、ユーザーがフォーム上でデータを計算するのを防げます。

4. 選択したビジネス・ルールの順序(ルールが表示および起動される順序)を変更するには、「**選択したビジネス・ルール**」でビジネス・ルールを選択し、上矢印または下矢印をクリックしてリスト内で上下に移動します。リストの先頭にあるルールが最初に表示および起動されます。リストの末尾にあるルールは最後に表示および起動されます。

▲ 注意:

ビジネス・ルールを起動する順序は重要であり、データに影響する場合があります。

5. ビジネス・ルールのプロパティを設定するには、「**プロパティ**」をクリックします。
[ビジネス・ルールのプロパティの設定](#)を参照してください。
6. 「**保存**」をクリックして処理を保存し、フォームの作成または編集を続行します。または、「**終了**」をクリックして処理を保存し、フォームを閉じます。

ビジネス・ルールのプロパティの設定

ユーザーがフォームをロード(開く)または保存するときに、フォームに関連付けられたビジネス・ルールが自動的に起動されるようにするかどうかを指定できます。ビジネス・ルールに実行時プロンプトがある場合、実行時プロンプトのデフォルト・メンバーを、ページ軸と視点軸で選択されたメンバーに一致させるかどうかを設定できます。

ビジネス・ルールのプロパティを設定するには:

1. 次のいずれかの操作を実行します。
 - 現在のフォームを更新するには、「**アクション**」、「**ビジネス・ルール**」の順にクリックします。
 - 編集するフォームを開くには、ホーム・ページに移動して「**ナビゲータ**」アイコンをクリックし、「**作成および管理**」で「**フォーム**」をクリックします。フォームを選択し、、「**ビジネス・ルール**」の順にクリックします。
2. フォームにはルールの割当てが可能な 4 つのフェーズがあり、各ルールではそれぞれ該当するフェーズに関連する情報を扱います。次から選択します:
 - **ロード前に実行**
 - **ロード後に実行**
 - **保存前に実行**
 - **保存後に実行**

 ノート:

- 「ロード後に実行」および「保存前に実行」は、Groovy ルールに対してのみ有効です。計算スクリプトやグラフィック・ルールに対してこれらのオプションを選択することはできません。Groovy ルールの詳細は、[Groovy ルールの使用](#)を参照してください。
 - また、グリッドの保存、ページの変更、アクション・メニュー項目の起動などの一部のアクションでは、操作の完了後にページがリロードされます。これにより、グリッドのデータが最新に保たれます。この際には、ロードの前後に、通常のページ・ロードの場合と同様のアクションが実行されます。
 - 非表示の実行時プロンプトはロード前およびロード後のオプションの計算スクリプト・ルールではサポートされていませんが、Groovy ルールではサポートされています。
 - Groovy ルールがサポートされる場所の詳細は、[Groovy ビジネス・ルールの作成について](#)を参照してください。
3. **オプション:** ビジネス・ルールに実行時プロンプトがある場合、実行時プロンプト・ウィンドウのデフォルトのメンバー選択を、開いているフォームのページ軸と視点軸の現在のメンバーに一致させるには、「**フォームのメンバーを使用**」を選択します。
- このオプションが他の設定や条件の下でどのように作用するかを学習するには、[実行時プロンプトの理解](#)を参照してください。
4. **オプション:** 実行時プロンプトの値をユーザーに非表示にするには、「**プロンプトの非表示**」を選択します。これにより自動的に「**フォームのメンバーを使用**」が選択されます。
- フォームを保存した後、次回このページに戻ると、「**フォームのメンバーを使用**」が選択したとおりに表示されます。
- 次の場合に実行時プロンプトを非表示にできます:
- すべての実行時プロンプト・メンバーの値が入力されている場合(該当するディメンション・メンバーがフォームの「ページ/視点」から読み取られます)
 - 実行時プロンプトではディメンションは繰り返されません
5. 「OK」をクリックします。

ルールの使用状況の表示

ビジネス・ルールは、次のアーティファクトで使用できます。

- フォーム
- ルールセット
- メニュー
- タスク・リスト

サービス管理者は、ルールがどこで使用されているかを詳しく説明する、ルールの使用状況レポートというレポートを作成できます。フィルタを使用して、ルール名、ルール・タイプおよびキューブで詳細を絞り込みます。

 **ノート:**

ルールの使用状況レポートには、ビジネス・プロセスにデプロイされているルールのみが表示されます。

ルールの使用状況を表示するには:

1. 「ナビゲータ」アイコン  をクリックし、「モニターおよび検索」で「システム・レポート」をクリックします。
2. 「ルール詳細」タブをクリックします。
3. フィルタする場合は、フィルタ条件を選択して「フィルタの適用」をクリックします。
 - **ルール・タイプ:** 「すべて」、「ルール」 および 「ルールセット」 から、1つ以上のオプションを選択します
 - **キューブ:** 使用可能なキューブのリストから選択します。
 - **名前フィルタ:** ルール名またはルールセット名を入力します。オプションで、ワイルドカード文字を使用できます。

「ルール」リストに、ビジネス・プロセスにデプロイされていて、フィルタ条件に一致するルールが表示されます。
4. 「ファイル・フォーマット」に、次のいずれかのフォーマットを選択します。
 - XLSX (デフォルト)
 - PDF
 - HTML
 - XML

 **ノート:**

XML フォーマットを選択した場合、Oracle BI Publisher Add-in for MS Office を使用してルールの使用状況レポートを構成できます。レポートに表示する列、列を表示する順序、ソートを適用するかどうかなどを細かく制御できます。

5. 「レポート作成」をクリックします。

ルールの使用状況レポートには、次の情報が表示されます。

- ルール名
- ルール・タイプ
- キューブ
- プライマリ関連付け(タイプと名前)
- セカンダリ関連付け(タイプと名前)

プライマリ関連付けでは、フォームまたはタスクにリンクされているルールなど、アーティファクトに直接関連付けられているルールを参照します。セカンダリ関連付けでは、メニュー項目にリンクされていて、そのメニュー項目がフォームにリンクされているルール、または特定のタスク・リストのタスクにリンクされているルールなど、アーティファクトと間接的に関連付けられているルールを参照します。

作成されたレポートでは、ルールは次のようにアルファベット順に表示されます。

- ルール名
- プライマリ関連付けタイプ
- プライマリ関連付け名

例 19-1 プライマリ関連付けを示す、ルールの使用状況レポートのサンプル(PDF フォーマット)



Rules Usage Report

Rule Name	Rule Type	Cube	Primary Association		Secondary Association	
			Type	Name	Type	Name
Act_Agg_Ek	Rules	PSPPlan1				
Adhoc - Clear 5+7	Rules	PSPPlan1				
Agg	Rules	PSPPlan1	Form	_XX_Agg		
Agg - Roll up E and O from drop down, Customer in row, all others at none	Rules	PSPPlan1	Form	1 - Corp Prof Fees		

例 19-2 プライマリおよびセカンダリ関連付けを示す、ルールの使用状況レポートのサンプル(PDF フォーマット)



Rule Name	Rule Type	Cube	Primary Association		Secondary Association	
			Type	Name	Type	Name
psp_Agg_budget	Rules	PSPPlan1				
psp_Agg_Fcs t_All Dims	Rules	PSPPlan1	Task	Aggregation	Task List	Execute Royalty Calc
psp_Agg_FC @AER_All Dims	Rules	PSPPlan1				
psp_Agg_budget_All Dims	Rules	PSPPlan1				
psp_Rowfocused_Agg	Rules	PSPPlan1	Form	1.0 psp_Agg		
psp_Agg_Actuals_All Dims	Rules	PSPPlan1				

Page 81 of 82

1/10/2018 18:00 PM

実行時プロンプトについて

起動時にビジネス・ルールは、メンバー、テキスト、日付または数字としての変数についてユーザーにプロンプト表示します。プロンプトは特定である必要があり、どのようなタイプのデータが予期されるかをユーザーに示します。例:

- 月を選択します。
- 四半期ごとの予想顧客数を入力します。
- 翌月に予測される収益変化のパーセンテージは何ですか？

Calculation Manager で、ビジネス・ルールについて「動的メンバーの作成」オプションが選択されており、親メンバーが動的な子を追加できるようになっている場合、ユーザーは実行時プロンプトで名前を入力して新規メンバーを作成できます。

実行時プロンプトを使用してビジネス・ルールを起動するときに、入力した値は検証されますが、ビジネス・ルールは検証されません。実行時プロンプトでデフォルトのメンバー選択を設定するには、[ビジネス・ルールのプロパティの設定](#)を参照してください。他の設定と条件がどのように実行時プロンプトに影響するかを理解するには、[実行時プロンプトの理解](#)を参照してください。

実行時プロンプトの理解

実行時プロンプトの表示および値は次のような点に影響されます。

- 設計時に、ルールまたはルールセットのレベルで「オーバーライド値として使用」プロパティが設定されているかどうか

- フォームのページ/視点に有効なメンバーがいるかどうかおよび「ビジネス・ルール・プロパティ」タブで「フォームのメンバーを使用」と「プロンプトの非表示」オプションが選択されているかどうか(ビジネス・ルールのプロパティの設定を参照)
- 「実行時プロンプト」オプションをフォームの設計中に設定するか、実行時プロンプトの設計時に設定するか(Oracle Enterprise Performance Management Cloud Calculation Manager での設計を参照)
- 前回の値を使用プロパティをビジネス・ルールの設計時に設定するかどうか
- Calculation Manager で、ビジネス・ルールのオプション「動的メンバーの作成」が選択されていて、親メンバーが動的な子を追加できるようになっているかどうか。なっている場合、ユーザーは実行時プロンプトで名前を入力して新規メンバーを作成できます。

 ノート:

ビジネス・プロセスでは、二重引用符で囲まれたテキスト内の実行時プロンプト値は置換されません。かわりに、Groovy ルールを使用して同じことを実現できます。ただし、Calculation Manager からルールを起動すると、二重引用符で囲まれたテキスト内の実行時プロンプト値が置換されます。

原則:

1. 「オーバーライド値として使用」プロパティが設計時にルールまたはルールセットのレベルで設定されている場合には、ページ/視点のメンバーの値や前回保存された値より、ルールまたはルールセットのレベルで上書きされる値が優先されます。これは、ルールの起動方法(フォームからか、「ナビゲータ」メニューの「ルール」リンクからか)とは無関係に、また設計中に実行時プロンプトが非表示かどうかにも関係なく発生します。「値の上書き」はユーザー変数として設定できます。その場合、ルールは変数の現在値を使用して起動されます。
2. フォームから起動するときに、「フォームのメンバーを使用」オプションを選択すると、設計中に実行時プロンプトが非表示かどうかに関係なく、前回保存された値よりページ/視点のメンバーの値が優先されます。非表示の実行時プロンプトをユーザーに表示せずにビジネス・ルールが実行され、実行時プロンプトの値がページ/視点メンバーからとられます。
3. 前回の値を使用オプションを設計時に実行時プロンプトで選択する場合および次の条件のどれかが該当する場合:
 - 「フォームのメンバーを使用」が選択されていない
 - 実行時プロンプトは、「ナビゲータ」メニューの「ルール」リンクから起動されます
 - 値をコンテキストから事前に入力できない

実行時プロンプト値の優先度は次によって決定されます:

- a. 前回保存された値が優先されます。
- b. ルールセットが起動する場合、設計時にルールセットのレベルで上書きされた値が使用されます。
- c. ビジネス・ルールが起動する場合、設計時にルール・レベルで上書きされた値が使用されます。ルール・レベルで上書きされない場合、設計時の実行時プロンプト値が使用されます。

設計時に非表示の実行時プロンプトは前回保存された値を絶対に使用しません。これらの場合、**前回の値を使用**設定は無視されます。

4. 「**フォームのメンバーを使用**」および「**プロンプトの非表示**」オプションは「メンバー」および「ディメンション間」実行時プロンプト・タイプのみにも適用されます (ディメンション間実行時プロンプト・タイプを使用できるのは、**Calculation Manager** で作成されたビジネス・ルールのみです)。

「**オーバーライド値として使用**」プロパティが設定されているとき、設計時にルールまたはルールセットのレベルで設定された値は、「**プロンプトの非表示**」の動作に影響します。

5. ディメンション間実行時プロンプトの場合: 実行時プロンプトのすべてのプロンプトを「**値の上書き**」またはページ/視点から事前に入力可能でないかぎり、実行時プロンプトは非表示になりません。実行時プロンプトは、「**値の上書き**」またはページ/視点から事前に入力された一部の値および原則 1、2 および 3 に応じて入力された他の値とともに表示されます。

この表は、次の設定と条件における実行時プロンプトの結果を説明しています。

表 19-24 メンバーの可用性と他の設定が実行時プロンプトにもたらす影響

「値の上書き」とページ/視点のメンバーを使用できるかどうか	「フォームのメンバーを使用」オプションが選択されます	実行時プロンプトの非表示プロパティが実行時プロンプト設計中に設定されます	「プロンプトの非表示」オプションがフォームで選択されます	実行時プロンプトでの結果
「 オーバーライド値として使用 」が設定され、「 値の上書き 」を使用できる、またはメンバーがページ/視点で実行時プロンプトの値として使用可能。	はい	はい	はい/いいえ 設定は無視されます	ビジネス・ルールは実行時プロンプトをユーザーに表示せずに実行されます。そのかわり、実行時プロンプトの値は「 値の上書き 」またはページ/視点メンバーからとられます。
「 オーバーライド値として使用 」が設定され、「 値の上書き 」を使用できる、またはメンバーがページ/視点で実行時プロンプトの値として使用可能。	はい	いいえ	はい	すべての実行時プロンプトが「 値の上書き 」またはページ/視点コンテキストから事前に入力可能で、制限範囲内で有効な場合、実行時プロンプトは表示されません。ただし、実行時プロンプト値が 1 つでも「 値の上書き 」またはページ/視点コンテキストから事前に入力できなければ、すべての実行時プロンプトが、どこでも事前に入力された値とともに表示されます。その他はすべて原則 1 および 3 に従います。
「 オーバーライド値として使用 」が設定され、「 値の上書き 」を使用できる、またはメンバーがページ/視点で実行時プロンプトの値として使用可能。	はい	いいえ	いいえ	実行時プロンプトは「 値の上書き 」またはページ/視点から事前に入力された値とともに表示されます。

表 19-24 (続き) メンバーの可用性と他の設定が実行時プロンプトにもたらす影響

「値の上書き」とページ/視点のメンバーを使用できるかどうか	「フォームのメンバーを使用」オプションが選択されます	実行時プロンプトの非表示パーティが実行時プロンプト設計中に設定されず	「プロンプトの非表示」オプションがフォームで選択されます	実行時プロンプトでの結果
「オーバーライド値として使用」が未設定で、メンバーがページ/視点で実行時プロンプトの値として使用不可。	はい	はい	はい/いいえ 設定は無視されます	ビジネス・ルールは、原則 3 に従って事前に入力された値とともに実行時プロンプトをユーザーに表示します。 たとえば、実行時プロンプトのディメンションは行または列にあるためフォームのコンテキストを渡すことはできません。このため「 プロンプトの非表示 」設定は無視され、実行時プロンプトが表示されます。
「オーバーライド値として使用」が未設定で、メンバーがページ/視点で実行時プロンプトの値として使用不可。	はい	いいえ	はい	実行時プロンプトは、原理 3 に従って事前に入力された値とともにユーザーに表示されず。
「オーバーライド値として使用」が設定され、「値の上書き」を使用できる、かつメンバーがページ/視点で実行時プロンプトの値として使用不可。	はい	いいえ	いいえ	すべての実行時プロンプトが「 値の上書き 」から事前に入力可能で、制限範囲内で有効な場合、実行時プロンプトは表示されません。ただし、実行時プロンプト値が 1 つでも「 値の上書き 」から事前に入力できなければ、すべての実行時プロンプトが、どこでも事前に入力された値とともに表示されます。その他はすべて原則 1 および 3 に従います。
「オーバーライド値として使用」が未設定で、メンバーがページ/視点で実行時プロンプトの値として使用不可。	はい	いいえ	いいえ	実行時プロンプトは、原理 3 に従って事前に入力された値とともにユーザーに表示されず。
「オーバーライド値として使用」が設定され、「値の上書き」を使用できる、かつメンバーがページ/視点で実行時プロンプトの値として使用不可。	はい	いいえ	いいえ	実行時プロンプトは、原理 1 および 3 に従って事前に入力された値とともにユーザーに表示されます。
「オーバーライド値として使用」が設定され、「値の上書き」を使用できる、またはメンバーがページ/視点で実行時プロンプトの値として使用可能。	いいえ	はい	使用不可能	ビジネス・ルールは実行時プロンプトをユーザーに表示せずに実行されます。そのかわりに、設計時の値が使用されます。
「オーバーライド値として使用」が設定され、「値の上書き」を使用できる、またはメンバーがページ/視点で実行時プロンプトの値として使用可能。	いいえ	いいえ	使用不可能	実行時プロンプトは、原理 3 に従って事前に入力された値とともにユーザーに表示されます。

表 19-24 (続き) メンバーの可用性と他の設定が実行時プロンプトにもたらす影響

「値の上書き」とページ/視点のメンバーを使用できるかどうか	「フォームのメンバーを使用」オプションが選択されます	実行時プロンプトの非表示プロパティが実行時プロンプト設計中に設定されず	「プロンプトの非表示」オプションがフォームで選択されます	実行時プロンプトでの結果
「オーバーライド値として使用」が未設定で、メンバーがページ/視点で実行時プロンプトの値として使用不可。	いいえ	はい	使用不可能	ビジネス・ルールは実行時プロンプトをユーザーに表示せずに実行されます。そのかわりに、設計時の値が使用されず。
「オーバーライド値として使用」が未設定で、メンバーがページ/視点で実行時プロンプトの値として使用不可。	いいえ	いいえ	使用不可能	実行時プロンプトは、原理 3 に従って事前に入力された値とともにユーザーに表示されず。

非表示の実行時プロンプト値が明瞭でない場合、次に注意してください。

- フォームのコンテキストを渡すことができない場合(たとえば、ディメンションは行または列にあるため)、非表示の実行時プロンプトが表示されます。
- 実行時プロンプトが非表示のディメンション間タイプで、「値の上書き」またはコンテキストから一部のプロンプトを渡すことができない場合、実行時プロンプトは、「値の上書き」またはコンテキスト値および設計時の値から値が事前入力された状態で表示されます。たとえば、「ディメンション間」に「期間」、「エンティティ」および「シナリオ」の実行時プロンプトがあり、「エンティティ」が行で定義されていてシナリオに「値の上書き」が設定されている場合、実行時プロンプトには上書きシナリオ、エンティティの設計時値、ページ期間が順に表示されます。
- 「値の上書き」が存在するか、実行時プロンプト値でコンテキストを渡すことが可能でもそれが制限範囲外の場合、実行時プロンプトは事前に入力されたコンテキスト値で表示されます。
- 「メンバー」のタイプと「ディメンション」のタイプの組合せの実行時プロンプトが 1 つ以上ある場合、実行時プロンプトは「値の上書き」、または事前に入力されたコンテキスト値とともに表示されます。たとえば、「エンティティ」ディメンションのメンバー・タイプの実行時プロンプトと、「エンティティ」ディメンションの 1 つのプロンプトをともなう「ディメンション間」タイプの実行時プロンプトがある場合、両方の実行時プロンプトが表示されます。このルールは Calculation Manager のルールセットには適用されません。
- 「ナビゲータ」メニューの「ルール」リンクから起動するときは、実行時プロンプトは非表示となり、設計時の値(ルールまたはルールセットのレベルで上書きされた)を使用してビジネス・ルールを起動します。与えられた設計時の値が制限範囲外の場合、実行時プロンプトが事前に入力された設計時の値とともに表示されず。
- 設計中に非表示となる実行時変数は前回保存された値を決して使用しません。**前回の値を使用**プロパティは無視され、その値はデータベースに保存されません。

Groovy ルールの使用

通常のビジネス・ルールでは解決できないユース・ケースを解決する、Groovy スクリプト言語で記述したルールを作成します。

表 19-25 Groovy ルールについてさらに学習できる場所

目的	さらに学ぶ
Groovy ルールの利点を学習します。	Groovy ビジネス・ルールの作成について
Groovy ビジネス・ルールを使用できるビジネス・シナリオの例を確認します。	Groovy ルールのビジネス・シナリオ
ビデオを視聴し、Groovy ルールの実装時と使用時のベスト・プラクティスを指導する実践的なチュートリアルを完了します。	<ul style="list-style-type: none"> • Groovy ビジネス・ルール・チュートリアル・ビデオ • Oracle EPM Cloud での Groovy を学ぶ
Calculation Manager を使用して、Groovy ビジネス・ルールと Groovy テンプレートを作成します。	<ul style="list-style-type: none"> • Groovy ビジネス・ルールの作成 • Planning BSO キューブの Groovy テンプレートの作成
Groovy ルールの作成に使用する Java API に接続して、Groovy スクリプトの例を確認します。	<ul style="list-style-type: none"> • Groovy ルールの Java API リファレンス • Groovy ビジネス・ルールの例
Calculation Manager を使用して、Groovy ビジネス・ルールまたはテンプレート用にスクリプトを編集します。	Groovy ビジネス・ルールまたはテンプレート用のスクリプトの編集
権限があるユーザーの Groovy テンプレートを保護します。	Groovy テンプレートに対するアクセス権の割当て

Groovy ビジネス・ルールの作成について

ノート:

Groovy ルールは、「Enterprise」タイプ(Enterprise PBCS または PBCS Plus One ライセンスで使用可能)、Strategic Workforce Planning、Sales Planning およびフリーフォームのアプリケーションにのみ使用できます。

Groovy ビジネス・ルールを使用すると、通常のビジネス・ルールでは解決できないユース・ケースを解決する高度なルールを設計できます。たとえば、フォーム上のデータ値が事前定義済のしきい値を超える場合に、そのデータの保存を禁止するルールを設計できます。

Groovy ルールは、Calculation Manager で作成し、「ルール」ページ、フォームのコンテキスト内、ジョブ・スケジューラ、ダッシュボード、タスク・リストなど、ビジネス・プロセスで計算スクリプト・ルールを実行できる任意の場所から実行します。Groovy ルールはルールセットでもサポートされています。ルールセット内では計算スクリプト・ルールと Groovy ルールを併用できます。

Oracle では、次の 2 つのタイプの Groovy ルールをサポートしています。

- 実行時プロンプト以外のコンテキストに基づいて実行時に計算スクリプトを動的に生成し、Oracle Essbase に対して実行される計算スクリプトを返すルール。

たとえば、プロジェクトの期間(開始日から終了日まで)のみを対象としたプロジェクト費用を計算するルールを作成できます。

また、フォーム上にある勘定科目のみを対象としたトレンドベースの計算も同様の例の 1 つです。この計算を収益、費用、貸借対照表およびキャッシュ・フローの各種フォームで使用できます。これにより、最適化と再利用が可能になります。

- データ検証を実行し、入力されたデータが会社のポリシーに違反する場合に操作を取り消すような純粋な Groovy ルール。

このチュートリアル・ビデオを見て、Groovy ルールとスマート・プッシュを使用して変更済データを移動する際のベスト・プラクティスを学習します。



Groovy ルールとスマート・プッシュを使用した変更済データの移動

このチュートリアル・ビデオを見て、Groovy スクリプト言語を使用してコンテキスト固有の動的ビジネス・ルールを作成し、ビジネス・プロセス・フォームでの計算のパフォーマンスを改善する方法を学習します



Groovy ルールを使用した変更済データの計算

ノート:

Enterprise アプリケーションの場合、Groovy ルールを作成する際に Java API リファレンスを利用できます。Groovy ルールを設計するためのテクニカル・リファレンスについては、[クラウド・ヘルプ・センターの Oracle Enterprise Performance Management Cloud Groovy ルール Java API リファレンス](#)を参照してください。このリファレンスには、[Oracle Enterprise Planning and Budgeting Cloud Academy](#) からアクセスできます。アカデミにアクセスするには、サインインしてから「**アカデミ**」をクリックします。この Java API リファレンスには、EPM Groovy オブジェクト・モデルの構文と動作を示す例も記載されています。例を確認するには、[Oracle Enterprise Performance Management Cloud Groovy ルール Java API リファレンス](#)を開きます。次に、いずれかの操作を実行します。

- メイン・ページで「**Groovy スクリプトの例**」まで下にスクロールし、Groovy スクリプトのサンプルについての文章内の「**ここ**」という語をクリックします。
- 左ペインの「**すべてのクラス**」で「**StrategicModel**」クラスをクリックします。

Groovy ルールの Java API リファレンス

Enterprise アプリケーションの場合、Groovy ルールを作成する際に Java API リファレンスを利用できます。

Java API リファレンスには、EPM Groovy オブジェクト・モデルの構文と動作を示す例も記載されています。

Java API リファレンスを確認するには、[クラウド・ヘルプ・センターの Oracle Enterprise Performance Management Cloud Groovy ルール Java API リファレンス](#)を参照してください。このリファレンスには、[Oracle Enterprise Planning and Budgeting](#)

Cloud Academy からアクセスできます。アカデミにアクセスするには、サインインしてから「アカデミ」をクリックします。

Groovy ビジネス・ルールの例

Groovy スクリプトの例を利用できます。

Groovy スクリプトの例を参照するには:

1. Oracle Enterprise Performance Management Cloud の Groovy ルールに関する Java API リファレンス(<http://docs.oracle.com/cloud/latest/epm-common/GROOV/>)を参照してください。
2. 次のいずれかを行います:
 - メイン・ページの「**Example Groovy Scripts**」で、「[ここ](#)」という語をクリックしてサンプル・スクリプトを表示します。
Example Groovy Scripts
The example Groovy scripts provided here demonstrate the syntax and power of the EPM Groovy object model.

 - 左ペインの「**All Classes**」で、クラスをクリックすると、そのクラスの例が表示されます。
 たとえば、戦略モデリングの例を表示するには、左のペインで「**StrategicModel**」クラスをクリックします。

Groovy ビジネス・ルール・チュートリアル・ビデオ

Groovy ビジネス・ルールの実装時と使用時の詳細およびベスト・プラクティスは、次のチュートリアル・ビデオをご覧ください。

目的	次のビデオの視聴
Oracle Enterprise Performance Management Cloud で Groovy ルールを作成するためのトレーニング・オプションを確認します:	 Oracle EPM Cloud での Groovy を学ぶ
Groovy ルールおよびスマート・プッシュを使用して、ソース・ロケーションからターゲット・ロケーションにデータをプッシュします。	 Groovy ルールとスマート・プッシュを使用した変更済データの移動
ビジネス・プロセスで焦点を絞った計算スクリプトを生成して、データ入力フォーム全体ではなく、編集されたデータのみを計算します。	 Groovy ルールを使用した変更済データの計算
データ管理で、Groovy ルールを使用して増分ロードされたデータを計算します。	 データ管理での Groovy ルールを使用した増分ロードされたデータの計算

目的

次のビデオの視聴

Groovy テンプレートを使用して、ユーザー・アクションのユーザビリティおよび計算パフォーマンスを改善します。



[Groovy テンプレートを使用したパフォーマンスを改善するためのアクションのカスタマイズ](#)

Groovy ルールのビジネス・シナリオ

この項では、Groovy ビジネス・ルールを使用できるビジネス・シナリオの例について説明します。

次のトピックには、集中的なデータ移動およびビジネス・プロセス・データに対するスマート計算を実行するための Groovy ルールの使用方法を示すシナリオが含まれます:

- [Groovy ルールとスマート・プッシュを使用した変更済データの移動](#)
- [Groovy ルールを使用した変更済データの計算](#)

Groovy ルールとスマート・プッシュを使用した変更済データの移動

このトピックでは、レポート・キューブに変更済データを移動するために Groovy ルールとスマート・プッシュを使用する方法のベスト・プラクティスについて説明します。

データ・フォームで、ユーザーは従業員の給与を変更し、レポート・マネージャを割り当てることができます。フォーム・データが保存されると、スマート・プッシュが実行されて、データが分析のためにレポート・キューブにプッシュされます。また、必要な場合には、データがコピーされているときにディメンションが連結されます。

フォームに数百行のデータが含まれていても、すべてのデータが構成済のデータ・マップに対して確認され、ディメンション連結(設定されている場合)の処理が行われてから、レポート・キューブにプッシュされます。フォームのデータ量によっては、このプロセスが完了するまでにしばらく時間がかかります。

入力とレポート・キューブの間でのデータ同期のパフォーマンスを向上させるには、変更したデータを識別して分離し、分離したデータのみをレポート・キューブにプッシュするように Groovy ルールを設計します。

たとえば、ディメンション・メンバーを入力キューブからレポート・キューブにマッピングする単純なデータ・マップをスマート・プッシュのために構成したとします。

PushCompensationToRepCube

Tap description to edit

Options Save and Close Cancel

Source	Target
HP1 Plan2	HP1 HP1_ASO
Account ILV0Descendants(Account)	Account
Currency ILV0Descendants(Currency)	Currency
Employee ILV0Descendants(Employee)	Employee
Entity ILV0Descendants(Entity)	Entity
ReportingManager	Manager
Unmapped Dimensions	

次に、入力のデータとレポート・キューブを表示するフォームを用意しました。

ORACLE Planning and Budgeting Cloud: HP1

Manage Employees Data Exchange

Input Cube Reporting Cube

Manage Employee Salary and Reporting Manager

Currency: USD Scenario: Current Years: FY16 Period: Jan Version: BU Version_1 Entity: No Entity

	Grade	Salary	Bonus	Employee Phone	Employee Email	Reporting Manager
No Employee	Grade 1	500	1000	555-1234	no_emp@oracle.c	Jerry R
Employee 1	Grade 3	7000	650	555-4321	emp1@oracle.co	Jerry R
Employee 2	Grade 3	6900	620	555-2345	emp2@oracle.co	Elizabeth K
Employee 3	Grade 1	4200	1000	555-5432	emp3@oracle.co	John S
Employee 4	Grade 2	5000	500	555-8765	emp4@oracle.co	Elizabeth K
Employee 5	Grade 3	6000	600	555-9876	emp5@oracle.co	Jerry R
Employee 6	Grade 1	4000	400	555-1234	emp6@oracle.co	Jerry R
Employee 7	Grade 2	5200	500	555-1235	emp7@oracle.co	Elizabeth K
Employee 8	Grade 3	6000	600	555-1236	emp8@oracle.co	John S
Employee 9	Grade 1	7000	700	555-1237	emp9@oracle.co	Jerry R
Employee 10	Grade 2	8500	800	555-1238	emp10@oracle.c	Elizabeth K
Employee 11	Grade 3	9000	900	555-1239	emp11@oracle.c	John S
Employee 12	Grade 1	10000	1000	555-1240	emp12@oracle.c	Jerry R
Employee 13	Grade 2	4250	425	555-1241	emp13@oracle.c	Elizabeth K
Employee 14	Grade 3	5250	525	555-1242	emp14@oracle.c	John S
Employee 15	Grade 1	6250	625	555-1243	emp15@oracle.c	Jerry R

Period	Years	Scenario	Version	Currency	Entity
Jan	FY16	Current	BU Version_1	USD	No Entity
				Salary	Bonus
No Employee	Jerry R			500	1000
Employee 1	Jerry R			7000	650
Employee 2	Elizabeth K			6900	620
Employee 3	John S			4200	1000
Employee 4	Elizabeth K			5000	500
Employee 5	Jerry R			6000	600
Employee 6	Jerry R			4000	400
Employee 7	Elizabeth K			5200	500
Employee 8	John S			6000	600
Employee 9	Jerry R			7000	700
Employee 10	Elizabeth K			8500	800
Employee 11	John S			9000	900
Employee 12	Jerry R			10000	1000
Employee 13	Elizabeth K			4250	425
Employee 14	John S			5250	525
Employee 15	Jerry R			6250	625
Employee 16	Elizabeth K			7250	725

データ入力に使用されるフォームは、スマート・プッシュに対応しており、フォームのコンテキストを使用して、フォームで定義されたディメンションについて選択されているすべてのメンバーのデータをプッシュします。

Map Reporting Application	Dimension	Use Form Context	Overwrite Selection	Run After Save	Delete
PushCompensationToRepCube	Currency	<input checked="" type="checkbox"/>			
	Scenario	<input checked="" type="checkbox"/>			
	Years	<input checked="" type="checkbox"/>			
	Period	<input checked="" type="checkbox"/>			
	Version	<input checked="" type="checkbox"/>			
	Entity	<input checked="" type="checkbox"/>			
	Employee	<input checked="" type="checkbox"/>			
	Account	<input checked="" type="checkbox"/>			

Groovy ルールのスクリプト全体を次に示します。

```

System View MoveCompensationToRepCube
1  if(!operation.grid.hasSmartPush("PushCompensationToRepCube"))
2      return
3
4  // Isolate edited employees
5  Set<String> employees = []
6  operation.grid.dataCellIterator('salary', 'Reporting Manager').each { Datacell cell ->
7      if(cell.edited) {
8          employees << cell.getMemberName("Employee")
9      }
10 }
11
12 if(employees) {
13     // Push data to the reporting cube for edited employees only
14     String employeesStr = "" + employees.join(", ")
15     operation.grid.getSmartPush("PushCompensationToRepCube").execute( [ "Employee" : employeesStr ] )
16     println("the following employee compensation details were moved to reporting cube: \n " + employeesStr)
17 }
18 else{
19     println("there were no modifications. No data was moved to the reporting cube.")
20 }
  
```

スクリプトでは、スマート・プッシュのために関連付けられたデータ・マップが最初に指定されます。

```
1 if(!operation.grid.hasSmartPush("PushCompensationToRepCube"))
2     return
3
4 // Isolate edited employees
5 Set<String> employees = []
6 operation.grid.dataCellIterator('Salary', 'Reporting Manager').each { DataCell cell ->
7     if(cell.edited) {
8         employees << cell.getMemberName("Employee")
9     }
10 }
11
12 if(employees) {
13     // Push data to the reporting cube for edited employees only
14     String employeesStr = """"\${employees.join(", ")}\"""
15     operation.grid.getSmartPush("PushCompensationToRepCube").execute( [ "Employee" : employeesStr ] )
16     println("The following employee compensation details were moved to reporting cube: \n \${employees.join(', ')}")
17 }
18 else{
19     println("There were no modifications. No data was moved to the reporting cube.")
20 }
```

スクリプトのこのセクションでは、dataCellIterator メソッドを使用し、編集済のセルを識別して分離します。

```
1 if(!operation.grid.hasSmartPush("PushCompensationToRepCube"))
2     return
3
4 // Isolate edited employees
5 Set<String> employees = []
6 operation.grid.dataCellIterator('Salary', 'Reporting Manager').each { DataCell cell ->
7     if(cell.edited) {
8         employees << cell.getMemberName("Employee")
9     }
10 }
11
12 if(employees) {
13     // Push data to the reporting cube for edited employees only
14     String employeesStr = """"\${employees.join(", ")}\"""
15     operation.grid.getSmartPush("PushCompensationToRepCube").execute( [ "Employee" : employeesStr ] )
16     println("The following employee compensation details were moved to reporting cube: \n \${employees.join(', ')}")
17 }
18 else{
19     println("There were no modifications. No data was moved to the reporting cube.")
20 }
```

次のセクションでは、分離されたデータを受け取り、スマート・プッシュと、構成されてこのフォームに関連付けられているデータ・マップを使用して、集中的なデータ移動を実行します。変更済データがレポート・キューブに移動されるとメッセージが表示されます。

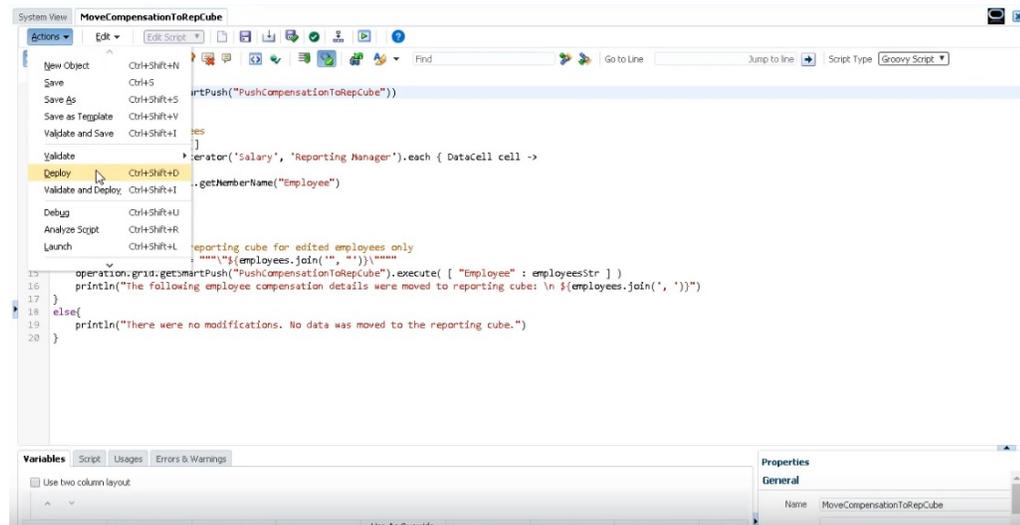
```
1 if(!operation.grid.hasSmartPush("PushCompensationToRepCube"))
2     return
3
4 // Isolate edited employees
5 Set<String> employees = []
6 operation.grid.dataCellIterator('Salary', 'Reporting Manager').each { DataCell cell ->
7     if(cell.edited) {
8         employees << cell.getMemberName("Employee")
9     }
10 }
11
12 if(employees) {
13     // Push data to the reporting cube for edited employees only
14     String employeesStr = """"\${employees.join(", ")}\"""
15     operation.grid.getSmartPush("PushCompensationToRepCube").execute( [ "Employee" : employeesStr ] )
16     println("The following employee compensation details were moved to reporting cube: \n \${employees.join(', ')}")
17 }
18 else{
19     println("There were no modifications. No data was moved to the reporting cube.")
20 }
```

変更がないときは、変更箇所がなく、データがレポート・キューブに移動されなかったというメッセージが表示されます。

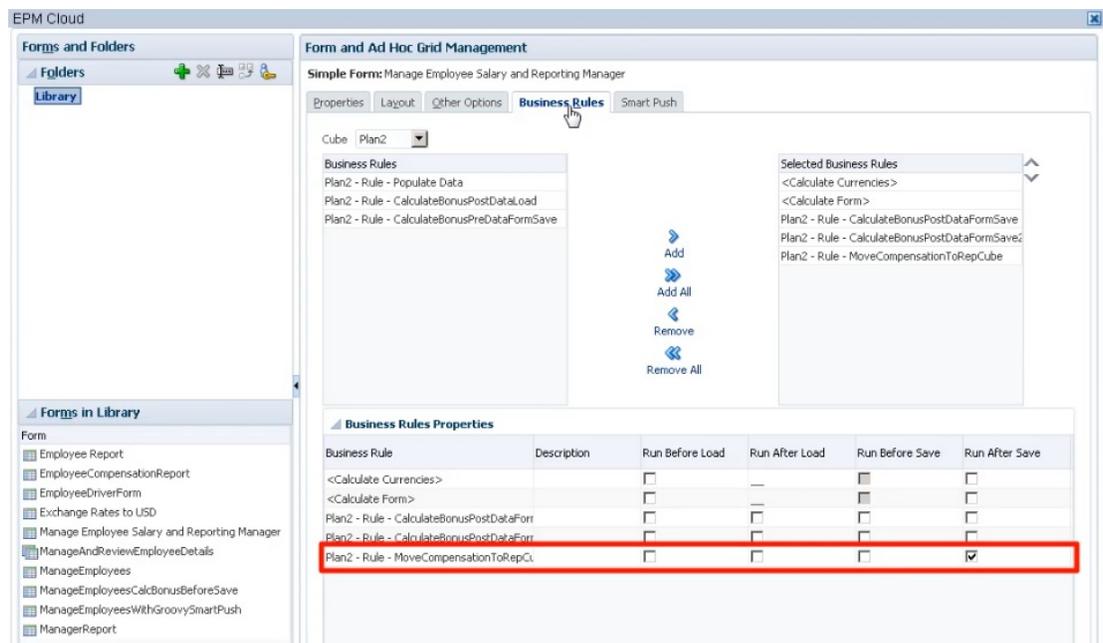
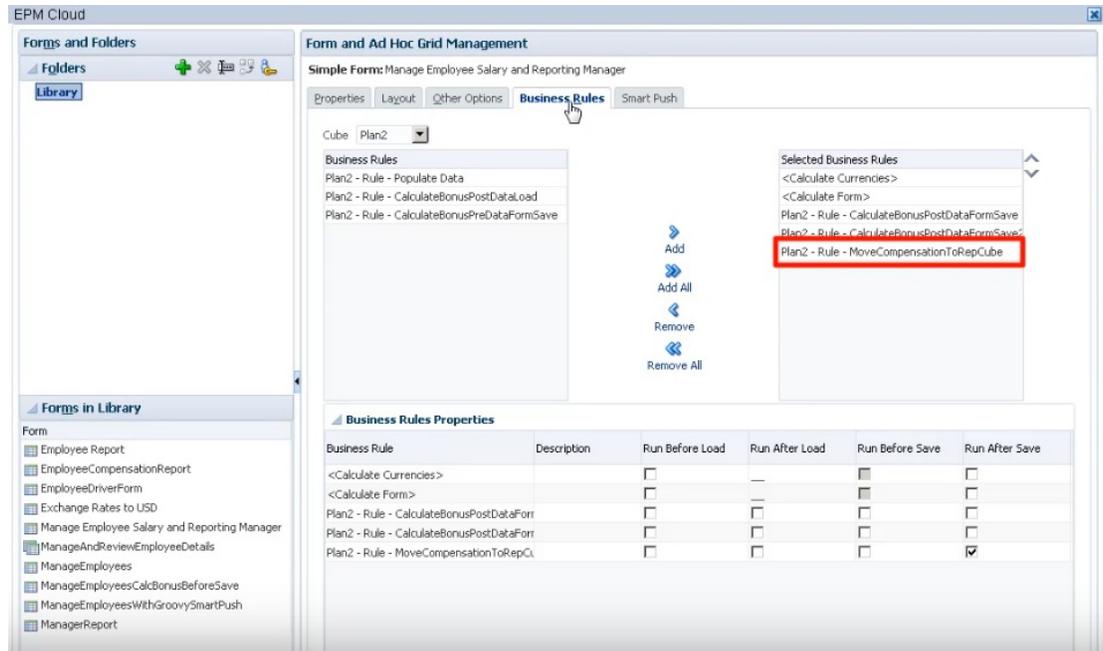
```

1 if(operation.grid.hasSmartPush("PushCompensationToRepCube"))
2     return
3
4 // Isolate edited employees
5 Set<String> employees = []
6 operation.grid.dataCellIterator('Salary', 'Reporting Manager').each { DataCell cell ->
7     if(cell.edited) {
8         employees << cell.getMemberName("Employee")
9     }
10 }
11
12 if(employees) {
13     // Push data to the reporting cube for edited employees only
14     String employeesStr = "" + employees.join(", ") + ""
15     operation.grid.getSmartPush("PushCompensationToRepCube").execute( [ "Employee" : employeesStr ] )
16     println("The following employee compensation details were moved to reporting cube: \n ${employees.join(', ')}")
17 }
18 else{
19     println("There were no modifications. No data was moved to the reporting cube.")
20 }
  
```

この Groovy ルールを作成した後、ビジネス・ルールをデプロイするのと同じ方法でデプロイしました。



次に、フォームの管理でルールをフォームに関連付けます。この Groovy ルールは、フォーム・データが保存された後で実行します。



Groovy ルールを実行するには、**入力キューブ**でフォームを開き、変更を加えてから「**保存**」をクリックします。

The screenshot shows the Oracle Planning and Budgeting Cloud interface. An information dialog box is displayed in the center, stating: "Information Messages for this page are listed below. The data has been saved. Rule was run successfully." Below the dialog is a table titled "Manage Employee Salary and Reporting Man". The table has columns for Currency, Scenario, Years, Period, Version, Entity, Employee, and Reporting Manager. A red box highlights a row of data for Employee 7, showing a salary of 5200 and a bonus of 500. The text "ISOLATED DATA" is visible in the bottom right corner of the table area.

Currency	Scenario	Years	Period	Version	Entity	Employee	Reporting Manager					
USD	Current	FY16	Jan	BU Version_1	No Ent							
						No Employee	Grade 1	500	1000	555-1234	no.emp@oracle.t	Jerry R
						Employee 1	Grade 3	7200	650	555-4321	emp1@oracle.co	Jerry R
						Employee 2	Grade 3	6900	620	555-2345	emp2@oracle.co	Elizabeth K
						Employee 3	Grade 1	4500	1000	555-5432	emp3@oracle.co	Jerry R
						Employee 4	Grade 2	5500	500	555-8765	emp4@oracle.co	Elizabeth K
						Employee 5	Grade 3	6000	600	555-9876	emp5@oracle.co	Jerry R
						Employee 6	Grade 1	4500	400	555-1234	emp6@oracle.co	Jerry R
						Employee 7	Grade 2	5200	500	555-1235	emp7@oracle.co	Elizabeth K

保存されると、更新されたデータがレポート・キューブに表示されます。

Groovy ルールを使用した変更済データの計算

このトピックでは、Groovy ルールを使用して変更済データのみを計算することで、ビジネス・プロセス計算パフォーマンスを改善する方法を説明します。

フォーム内のデータを更新したら、データを計算する必要があります。標準計算スクリプトを計算するビジネス・ルールを使用すると、フォームのすべてのデータが計算されます。データベースの大きな領域に影響する大規模なフォームまたは計算では、計算のパフォーマンスが低下する場合があります。

行を右クリックすると、一度に 1 つの行を手動で計算できます。こうすると計算のパフォーマンスが速くなりますが、データの複数行に変更を加えるために適した方法ではありません。

Groovy ルールは、更新するセルに動的に集中することができます。

フォームに対して Groovy ルールを使用するには次の 2 つの方法があります。

- 保存時にデータを計算するとき、Groovy ルールによって、更新したセルに基づいた FIX 文を含む計算スクリプトが生成されます。次に、フォーム上のすべてのレコードではなく変更済データに対して、サーバー上で計算が実行されます。多数のデータを更新する大規模なフォームでは、このオプションをベスト・プラクティスとして使用します。
- データを保存する前に計算する場合は、Groovy ルールによって、メモリー内の変更済データが計算され、フォーム上に結果が表示された後で、データベースに保存されます。実行する計算の数が少ない場合、またはアウトラインに構築するのが難しい複雑な手続き型計算を実行しようとする場合には、このオプションをベスト・プラクティスとして使用します。

この例では、給与の割合としてボーナスが計算されます。

Currency	Scenario	Years	Period	Version	Entity	
USD	Current	FY16	Jan	BU Version_1	No Entity	
	Grade	Salary	Bonus	Employee Phone	Employee Email	Reporting Manager
No Employee	Grade 1	500	50	555-1234	no.emp@oracle.co	Jerry R
Employee 1	Grade 3	6500	650	555-4321	emp1@oracle.co	John S
Employee 2	Grade 3	6200	620	555-2345	emp2@oracle.co	Elizabeth K
Employee 3	Grade 1	4500	450	555-5432	emp3@oracle.co	John S
Employee 4	Grade 2	5000	500	555-8765	emp4@oracle.co	Elizabeth K
Employee 5	Grade 3	6000	600	555-9876	emp5@oracle.co	Jerry R
Employee 6	Grade 1	4000	400	555-1234	emp6@oracle.co	Jerry R
Employee 7	Grade 2	5000	500	555-1235	emp7@oracle.co	Elizabeth K

$$\text{Bonus} = \text{Salary} * 0.1$$

保存時の計算について説明します。このフォームは、保存時に計算する Groovy ルールを含むように定義されていることに注意してください。

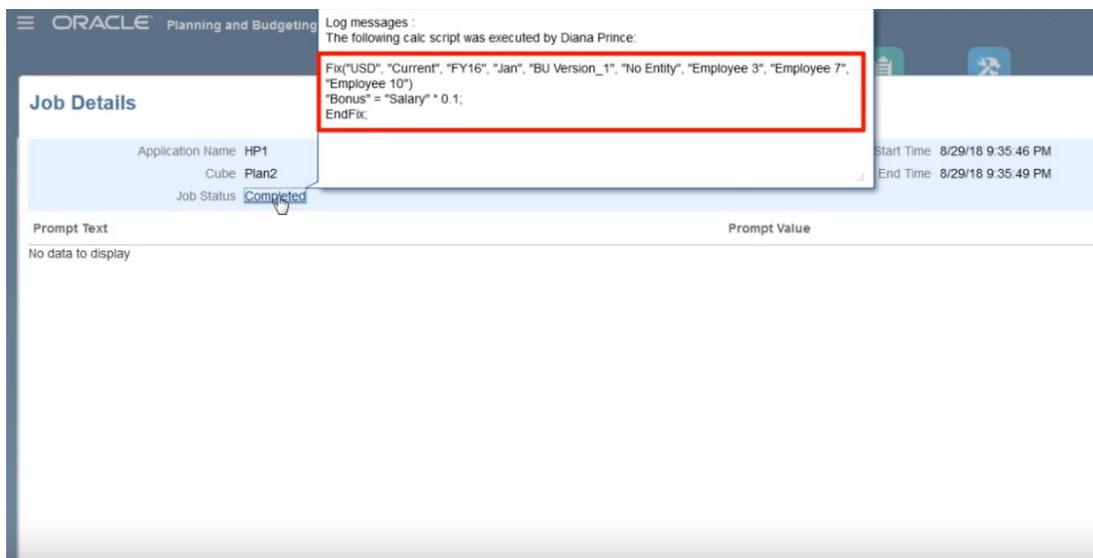
フォーム上で一部の給与データと一部の電話番号を更新した後、電話番号は保存されますが、計算には影響しません。

Employee	Grade	Salary	Bonus	Employee Phone	Employee Email	Reporting Manager
No Employee	Grade 1	5000	500	555-1234	no.emp@oracle.c	Jerry R
Employee 1	Grade 3	6500	650	555-4321	emp1@oracle.co	John S
Employee 2	Grade 3	6200	620	555-2345	emp2@oracle.co	Elizabeth K
Employee 3	Grade 1	4000	400	555-5431	emp3@oracle.co	John S
Employee 4	Grade 2	5000	500	555-8765	emp4@oracle.co	Elizabeth K
Employee 5	Grade 3	6000	600	555-9876	emp5@oracle.co	Jerry R
Employee 6	Grade 1	4000	400	555-1235	emp6@oracle.co	Jerry R
Employee 7	Grade 2	9000	900	555-1235	emp7@oracle.co	Elizabeth K
Employee 8	Grade 3	6000	600	555-1236	emp8@oracle.co	John S
Employee 9	Grade 1	7000	700	555-1237	emp9@oracle.co	Jerry R
Employee 10	Grade 2	4000	400	555-1238	emp10@oracle.c	Elizabeth K
Employee 11	Grade 3	9000	900	555-1239	emp11@oracle.c	John S
Employee 12	Grade 1	10000	1000	555-1240	emp12@oracle.c	Jerry R
Employee 13	Grade 2	4250	425	555-1241	emp13@oracle.c	Elizabeth K
Employee 14	Grade 3	5250	525	555-1242	emp14@oracle.c	John S
Employee 15	Grade 1	6250	625	555-1243	emp15@oracle.c	Jerry R
Employee 16	Grade 2	7250	725	555-1244	emp16@oracle.c	Elizabeth K
Employee 17	Grade 3	8250	825	555-1245	emp17@oracle.c	John S
Employee 18	Grade 1	9250	925	555-1246	emp18@oracle.c	Jerry R
Employee 19	Grade 2	10250	1025	555-1247	emp19@oracle.c	Elizabeth K
Employee 20	Grade 3	4500	450	555-1248	emp20@oracle.c	John S
Employee 21						

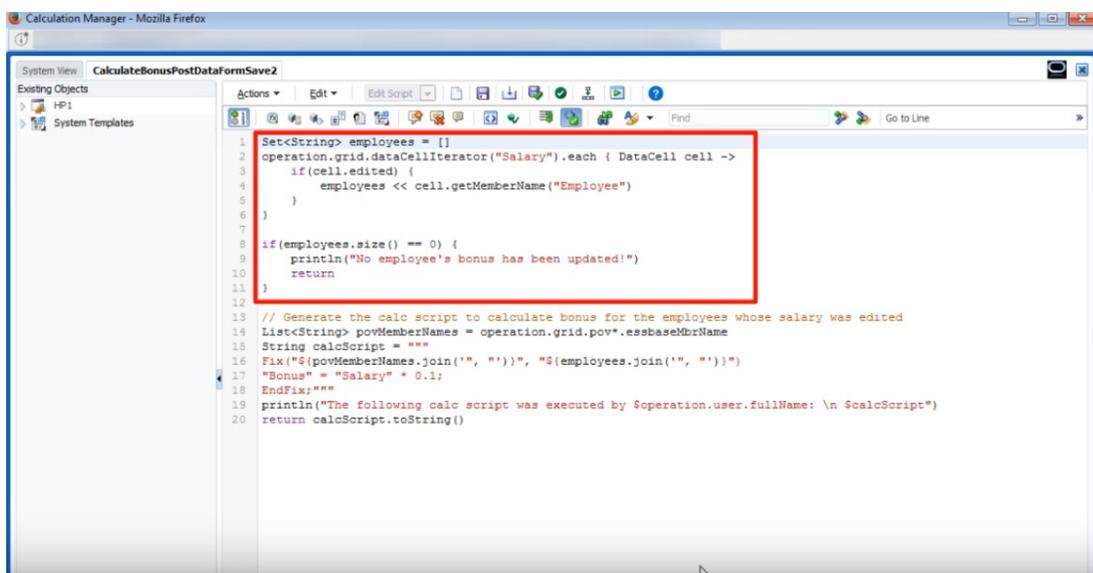
関連する Groovy ルールを実行するフォームを保存するとき、計算されたボーナス・データがフォームに表示されます。

Currency	Scenario	Years	Period	Version	Entity	
USD	Current	FY16	Jan	BU Version_1	No Entity	
	Grade	Salary	Bonus	Employee Phone	Employee Email	Reporting Manager
No Employee	Grade 1	5000	500	555-1234	no.emp@oracle.c	Jerry R
Employee 1	Grade 3	6500	650	555-4321	emp1@oracle.co	John S
Employee 2	Grade 3	6200	620	555-2345	emp2@oracle.co	Elizabeth K
Employee 3	Grade 1	4000	400	555-5431	emp3@oracle.co	John S
Employee 4	Grade 2	5000	500	555-8765	emp4@oracle.co	Elizabeth K
Employee 5	Grade 3	6000	600	555-9876	emp5@oracle.co	Jerry R
Employee 6	Grade 1	4000	400	555-1235	emp6@oracle.co	Jerry R
Employee 7	Grade 2	9000	900	555-1235	emp7@oracle.co	Elizabeth K
Employee 8	Grade 3	6000	600	555-1236	emp8@oracle.co	John S
Employee 9	Grade 1	7000	700	555-1237	emp9@oracle.co	Jerry R
Employee 10	Grade 2	4000	400	555-1238	emp10@oracle.c	Elizabeth K
Employee 11	Grade 3	9000	900	555-1239	emp11@oracle.c	John S

「ジョブの詳細」を表示すると、Groovy ルールによって作成された計算スクリプトがあります。FIX 文には変更済の従業員のみが含まれることに注意してください。



Calculation Manager を開いて、Groovy ルールを表示します。この最初のセクションは、フォームのグリッドに対して反復処理を行い、編集された給与のセルを見つけて、関連する従業員名を収集します。



このセクションでは計算スクリプトが生成されます。フォームの POV メンバーを見つけて、POV メンバーと編集された従業員に対する FIX 文を作成します。

```

1 Set<String> employees = []
2 operation.grid.dataCellIterator("Salary").each { DataCell cell ->
3   if(cell.edited) {
4     employees << cell.getMemberName("Employee")
5   }
6 }
7
8 if(employees.size() == 0) {
9   println("No employee's bonus has been updated!")
10  return
11 }
12
13 // Generate the calc script to calculate bonus for the employees whose salary was edited
14 List<String> povMemberNames = operation.grid.pov*.esbaseMrName
15 String calcScript = ""
16 Fix("${povMemberNames.join(", ")}", "${employees.join(", ")}")
17 "Bonus" = "Salary" * 0.1;
18 EndFix;""
19 println("The following calc script was executed by $operation.user.fullName: \n $calcScript")
20 return calcScript.toString()
  
```

ここからは、保存前の計算について説明します。

これは同じフォームですが、保存前に計算を行う別の Groovy ルールが定義されています。

Business Rule	Description	Run Before Load	Run After Load	Run Before Save	Run After Save	Use Members on Form	Hide Prompt
<Calculate Currencies>		<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
<Calculate Form>		<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
Plan2 - Rule - CalculateBonusPreDataForm		<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

ここでも、給与データと一部の電話番号を更新した後で、フォームを保存して、関連付けられた Groovy ルールを実行します。計算されたボーナス・データがフォームに表示されますが、「ジョブの詳細」を見ると、一部のボーナス・データが更新されたことがわかりますが、今回は計算スクリプトは生成されていません。

Log messages:
 Following employee's bonus has been updated.
 Employee 3, Employee 7, Employee 10

Job Details
 Application Name: HP1
 Cube: Plan2
 Job Status: Completed

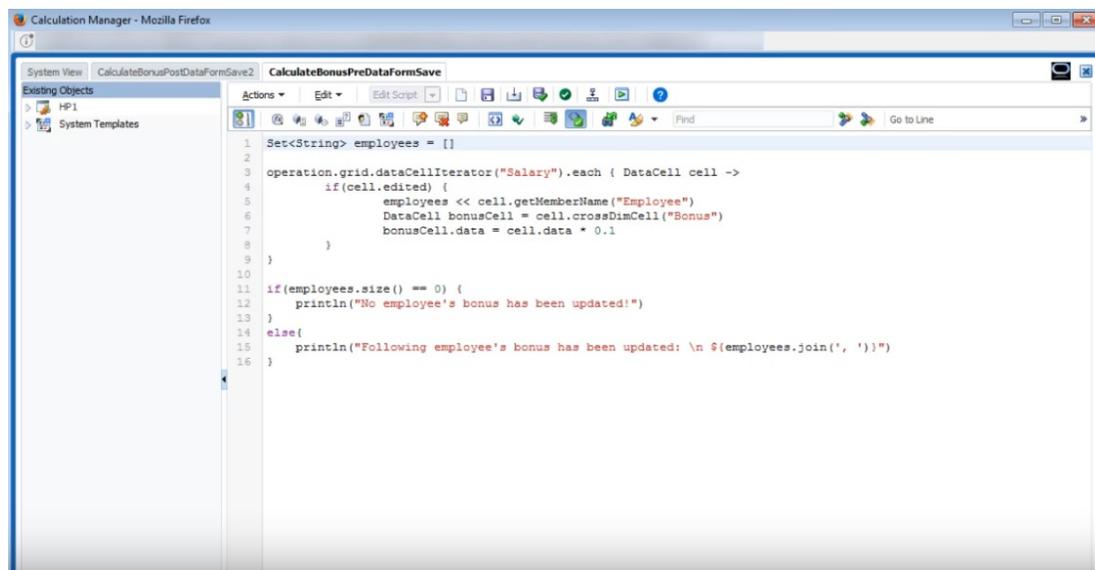
Prompt Text: No data to display

Prompt Value: No data to display

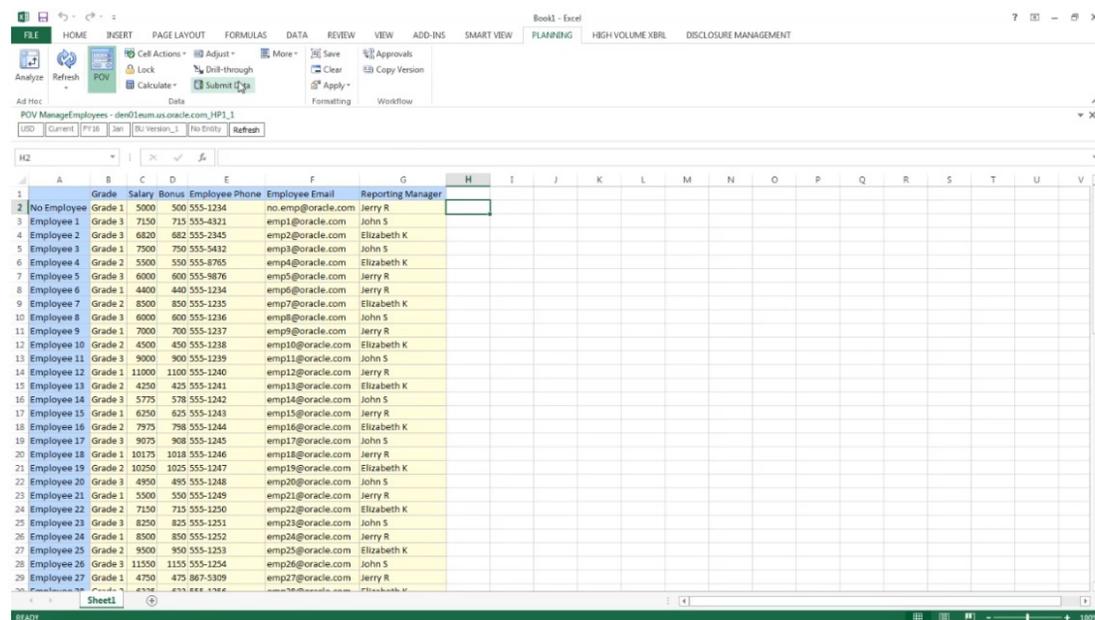
Start Time: 8/29/18 9:44:58 PM
 End Time: 8/29/18 9:45:01 PM

Calculation Manager で Groovy ルールを開きます。

最初のルールと同様に、このスクリプトはフォームのグリッドに対して反復処理を行い、編集された給与のセルを見つけて、関連する従業員名を収集します。次に、編集された従業員のみに対してボーナス・データを計算します。Oracle Essbase 計算スクリプトは生成されないことに注意してください。



また、Groovy ルールは、Oracle Smart View for Office のフリーフォーム・フォームでも使用できます。Smart View では、データの一括修正を行うために Microsoft Excel のすべての機能を利用できます。保存の前または後で実行するように設定されたフォームの Groovy ルールはすべて、データを送信するときに実行されます。



ルール・セキュリティの管理

次も参照:

- [ルールに対するアクセス権の割当て](#)
- [ルールに対するアクセス権の追加、編集および削除](#)
- [Groovy テンプレートに対するアクセス権の割当て](#)

ルールに対するアクセス権の割当て

サービス管理者はビジネス・ルールに対するアクセス権を割り当てることができます。

Groovy ビジネス・ルール・テンプレートに対するアクセス権を割り当てするには、[Groovy テンプレートに対するアクセス権の割当て](#)を参照してください。

ルールに対するアクセス権を割り当てするには:

1. 「ナビゲータ」アイコン  をクリックし、「作成および管理」で、「ルール・セキュリティ」をクリックします。
2. 「ビジネス・ルール・フォルダ」で、ルールを含むフォルダを選択し、ルールを選択します。
3.  をクリックします。
4. アクセス権を追加、編集または削除します。
[ルールに対するアクセス権の追加、編集および削除](#)を参照してください。

ルールに対するアクセス権の追加、編集および削除

選択したルールにアクセスできるユーザーおよびグループを指定できます。

ノート:

ルールセットは、ルールセットに含まれるルールから起動権限を継承します。

ルールに対するアクセス権限の割当て、編集および削除を行うには:

1. 「ナビゲータ」アイコン  をクリックし、「作成および管理」で、「ルール・セキュリティ」をクリックします。
2. 「ビジネス・ルール・フォルダ」で、ルールを含むフォルダを選択し、ルールを選択します。
3.  をクリックします。
4. 次のタスクを実行します:
 - アクセス権を追加するには、 をクリックし、使用可能なユーザーおよびグループのリストから選択します。

「アクセス権タイプ」で、次のように選択します。

- 選択したユーザーおよびグループが、選択したルールを起動できるようにするには、「**起動**」を選択します。
 - 選択したユーザーおよびグループが、選択したルールを起動できないようにするには、「**起動しない**」を選択します。
- アクセス権を編集するには、 をクリックし、該当する「**アクセス権タイプ**」を選択します。
 - アクセス権を削除するには、アクセス権を削除するユーザーまたはグループを選択し、 をクリックします。

Groovy テンプレートに対するアクセス権の割当て

Groovy テンプレートに対するアクセス権を割り当てるには:

1. ホーム・ページから、「**ルール**」、「**フィルタ**」の順にクリックして、キューブとアーティファクト・タイプを選択します。
2. ルールまたはテンプレートの横にある「**権限**」をクリックして、「**権限の割当**」をクリックします。
3. 「**権限の割当**」で、「**権限**」をクリックして、権限を割り当てます。詳細は、[アクセス権限の設定](#)を参照してください。

スマート・リストの管理

スマート・リストは、フォーム・セルからユーザーがアクセスするカスタムのドロップダウン・リストです。

次も参照:

- [スマート・リストの操作](#)
- [レポート・アプリケーションでのスマート・リストの同期](#)
- [スマート・リストのプロパティの設定](#)
- [スマート・リストのエントリの定義](#)
- [スマート・リストのプレビュー](#)
- [スマート・リストで#Missing を表示](#)

スマート・リストの操作

サービス管理者は、スマート・リストを使用して、フォーム・セルからユーザーがアクセスするカスタムのドロップダウン・リストを作成します。スマート・リスト(メンバー・プロパティとして)に関連するメンバーのセルをクリックする場合、ユーザーは、データを入力するかわりに、ドロップダウン・リストからアイテムを選択します。ユーザーはスマート・リストを含んでいるセルに入力することはできません。スマート・リストは、セルには下矢印が表示され、ユーザーがセルをクリックすると展開されます。

次のタスクを実行してスマート・リストを作成し、管理します。

- スマート・リストを定義します。

- メンバーにスマート・リストを関連付けます。
- スマート・リストを表示するディメンションを選択します。
- オプション:
 - メンバー式でスマート・リストの値を使用します。
 - スマート・リストに関連付けられた#MISSING セルのフォームでの表示方法を設定します。
 - レポート・アプリケーションでスマート・リストを同期します

ノート:

スマート・リストをフォームで表示可能にするには、スマート・リストのタイプ・メンバーが属するディメンションが評価順序の最初にある必要があります。 [ディメンションの管理](#)を参照してください。

スマート・リストを作成または操作するには:

1. 「ナビゲータ」アイコン  をクリックし、「作成および管理」で、「スマート・リスト」をクリックします。
2. 次のいずれかの操作を実行します:
 - スマート・リストを作成するには、 をクリックして、スマート・リストのプロパティを設定します。 [スマート・リストのプロパティの設定](#)を参照してください。
 - スマート・リストを編集するには、そのスマート・リストを選択し、 をクリックして、スマート・リストのプロパティを設定します。 [スマート・リストのプロパティの設定](#)を参照してください。
 - スマート・リストを削除するには、そのスマート・リストを選択して  をクリックし、「OK」をクリックします。スマート・リストを削除すると、ディメンション・メンバーおよびレポート・アプリケーションと関連付けられたマッピングも削除されます。
データ・セルは 1 つのスマート・リストのみに表示できます。複数のスマート・リストがセルで交差する場合、どちらを優先させるかを設定します。
 - **オプション:**  をクリックして、レポート・アプリケーションでスマート・リストを同期します。 [レポート・アプリケーションでのスマート・リストの同期](#)を参照してください。

ノート:

スマート・リストのメンバーが削除されてから再度追加されると、新しいメンバーには新しい一意の ID が指定されます。削除されたメンバーに関連付けられたデータは、削除されたメンバーの数字の ID として表示されます。

レポート・アプリケーションでのスマート・リストの同期

レポート・アプリケーションでスマート・リストを同期することによって、スマート・リストをマップするレポート・アプリケーションでディメンションが識別され、選択したディメンションのレベル 0 のメンバーが選択したスマート・リストに新規スマート・リストとして追加されます。データ・マップを定義するには、**Oracle Enterprise Performance Management Cloud データ統合の管理**のデータ・マップの定義を参照してください。

レポート・アプリケーションでスマート・リストを同期するには:

1. 「スマート・リスト」リスト・ページを表示します。

[スマート・リストの操作](#)を参照してください。

2. 同期するスマート・リストをクリックし、



を選択します。

同期の際には、適切なスマート・リスト内の最後のスマート・リスト・アイテムの後で既存のすべてのマッピングのレポート・アプリケーションの値が追加されます。スマート・リストが 2 つのディメンションにマップされている場合、最初のマッピングからのメンバーがすべて挿入されてから、2 番目のマッピングからのメンバーが挿入されます。メンバーがスマート・リストにすでに存在する場合は、再追加されません。レポート・アプリケーション上の対応するディメンション・メンバーが削除された場合でも、フリーフォーム・スマート・リスト内のスマート・リスト・メンバーは削除されません。

ノート:

勘定科目がスマート・リストとしてディメンションにマップされている場合、勘定科目ディメンションのすべてのレベル 0 メンバーはスマート・リストが同期される時にスマート・リスト・エントリとして入れられます。たとえば、スマート・リストは **HSP_Average** や **HSP_Ending** のようなエントリを含むことがあります。この場合、余分なエントリをスマート・リストから削除します。

3. 「スマート・リストの同期化を完了しました。」と表示されているダイアログ・ボックスで「OK」をクリックします。

ノート:

スマート・リスト名にスペースを含めることはできません。レポート・アプリケーションでスマート・リストを同期する場合は、新しいメンバーの名前にスペースが含まれていないことを確認してください。

スマート・リストのプロパティの設定

「プロパティ」タブでスマート・リストのプロパティを定義します。

 **ノート:**

スマート・リストをフォームで表示可能にするには、スマート・リストのタイプ・メンバーが属するディメンションが評価順序の最初にある必要があります。 [ディメンションの管理](#)を参照してください。

表 19-26 スマート・リストのプロパティ

プロパティ	説明
スマート・リスト	英数字およびアンダースコア (Position など)、特殊文字またはスペースなしの文字のみを含む一意の名前を入力します。スマート・リスト名は数式で参照できます。
ラベル	スマート・リストが選択されたときに表示されるテキストを入力します。スペースおよび特殊文字を使用できます。
表示順	スマート・リストのドロップダウン・リストを、ID 順、名前順、ラベル順のいずれかでソートするのを指定します。
#Missing ドロップ・ダウン・ラベル	<p>値が#MISSING のスマート・リストのエントリに表示するラベル (No Justification など)を入力します。</p> <p>次の点に注意してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> スマート・リストのドロップダウンに最初の項目として表示されるので、フォームの中で#MISSING を値として選択できます。 セルがフォーカスされていないときは、次のオプションで「ドロップ・ダウン設定」を選択した場合にのみ、このラベルが表示されます。それ以外の場合は、フォームについて選択した「欠落値を空白で表示」の設定に応じて、#MISSING または空白のセルが表示されます。 #MISSING ラベルは、#MISSING データをセルに表示するかどうかを判別するのみです。格納された値は、#MISSING のままです。
#Missing フォーム・ラベル	<p>スマート・リストに関連付けられたセルにおける、#MISSING 値の表現形式を指定します。オプション:</p> <ul style="list-style-type: none"> ドロップ・ダウン設定: 「#Missing ドロップ・ダウン・ラベル」で設定したラベルを表示します。 フォーム設定: フォームについて選択した「欠落値を空白で表示」の設定に応じて、#MISSING を表示するか、セルを空白のままにします。この選択によって、セルが選択されていないときに表示される内容が決定されます。セルがフォーカスにある場合、ドロップダウンから選択されたスマート・リストのアイテムが表示されます。
自動的に ID を生成	各スマート・リストのエントリに対して数字の ID を生成します。このオプションを選択しない場合は、スマート・リストの ID 値をカスタマイズできます。
メンバーから作成	ディメンション階層に基づいてスマート・リストを作成します。スマート・リスト値は、メンバーの更新時に動的に更新されます。ディメンションのユーザー・セキュリティは、ディメンションの階層から作成されたスマート・リストに反映されます。
メンバー選択	スマート・リストで使用するメンバーを手動で選択します。

「**エントリ**」タブを使用して、スマート・リストの選択肢を定義します。 [スマート・リストのエントリの定義](#)を参照してください。

スマート・リストのエントリの定義

スマート・リストのエントリを定義するには:

1. 「**エントリ**」タブで、ドロップダウン・リストのアイテムを定義します。
 - **最初のアイテムのみ**: 最初の行に情報を入力します。
 - アイテムを追加するには、 をクリックし、情報を入力します。
 - アイテムを削除するには、それを選択し、 をクリックします。
 - エントリを編集するには、行の中の情報を変更します。

表 19-27 スマート・リストのエントリ

エントリ・プロパティ	説明
ID	エントリを表示する順番を決める一意の数です。「 プロパティ 」タブで「 自動的に ID を生成 」が選択されていない場合にのみ、ID はカスタマイズ可能です。
名前	英数字およびアンダースコア(Customer_Feedback など)で、特殊文字やスペースのない一意の英数字名です。
ラベル	ドロップダウン・リストのスマート・リストのエントリに表示されるテキスト(Customer Feedback など)です。

ノート:

赤で強調表示されるアイテムは、重複しています。

2. 「**保存**」をクリックします。
「**プレビュー**」タブを使用して、定義したスマート・リストをプレビューします。[スマート・リストのプレビュー](#)を参照してください。

スマート・リストのプレビュー

定義済のスマート・リストを「**プレビュー**」タブでプレビューします。タブは、スマート・リストをドロップダウン・リストまたは表で表示されるように表示します。

Smart List をプレビューするには:

1. 「**ナビゲータ**」アイコン  をクリックし、「**作成および管理**」で、「**スマート・リスト**」をクリックします。
2. スマート・リストを選択し、 をクリックします。
3. 「**保存**」をクリックします。

スマート・リストで#Missing を表示

サービス管理者は、データがセルにない場合を含めて、スマート・リストおよびデータ・セルで表示される値を設定します。セルでは、値なし、#MISSING または(スマート・リストに関連するセルの)指定値を表示させることができます。

このオプションを使用して、セルがフォーカスにない場合の#MISSING の表示を制御します。

表 19-28 #MISSING の表示オプション

オプション	ガイドライン
空白	フォームを設計する場合、「 欠落値を空白で表示 」を選択します。スマート・リストのプロパティを設定する場合、「 フォーム設定 」を選択します。
#MISSING	フォームを設計する場合、「 欠落値を空白で表示 」を選択しないでください。スマート・リストのプロパティを設定する場合、「 フォーム設定 」を選択します。
「変更なし」などのカスタム・ラベル	スマート・リストのプロパティを設定する場合、「 #MISSING ドロップダウン・ラベル 」フィールドにカスタム・ラベル(変更なしなど)を入力します。「 ドロップ・ダウン設定 」を選択します。

タスク・リストの管理

タスク・リストでプランニング・プロセスを通してユーザーをガイドします。

タスク・リストは、タスク、手順および終了日を一覧表示することで、ユーザーにプランニング・プロセスの手順を示します。サービス管理者とパワー・ユーザーは、タスクとタスク・リストを作成および管理します。

関連トピック

- [タスク・リストの操作](#)
- [タスク・リストへの指示の追加](#)
- [タスク・リストへのタスクの追加](#)
- [タスク・リストの編集](#)
- [タスク・リストへのアクセス権の割当て](#)

タスク・リストの操作

タスク・リストはユーザーのためにタスクの組織グループを一覧表示します。タスクを作成する前に、タスク・リストを作成する必要があります。

タスク・リストを作成および名前変更するには:

1. 「ナビゲータ」アイコン  をクリックし、「作成および管理」で、「タスク・リスト」をクリックします。

2. 次のタスクを実行します:
 - タスク・リストを作成するには、をクリックします。
 - タスク・リストの名前を変更するには、タスク・リストを選択し、をクリックします。
 - タスク・リストを移動するには、タスク・リストを選択し、をクリックします。
 - タスク・リストを削除するには、タスク・リストを選択し、をクリックします。
3. 「OK」をクリックします。

タスク・リストを定義するには、次を参照してください:

- [タスク・リストへの指示の追加](#)
- [タスク・リストへのタスクの追加](#)

タスク・リストへの指示の追加

タスク・リストへ指示を追加するには:

1. 「ナビゲータ」アイコン  をクリックし、「作成および管理」で、「タスク・リスト」をクリックします。
2. 「タスク・リスト」で、変更するタスク・リストを選択し、 をクリックします。
3. 「指示」タブをクリックします。
4. タスク・リストの手順を入力します。
5. 「保存」をクリックし、「閉じる」をクリックします。

タスク・リストへのタスクの追加

ユーザーが実行時に実行するタスクの完了日およびアラートを設定できます。また、たとえば、タスクが終了日までに完了しなかったことをユーザーに警告するように、電子メールのメッセージを設定することもできます。アラート・メッセージは設定した"アラート日"の後に送信され、タスクの終了日になるまで繰り返し送信されます。

タスク・リストへタスクを追加するには:

1. 「ナビゲータ」アイコン  をクリックし、「作成および管理」で、「タスク・リスト」をクリックします。
2. 次のタスクを実行します:
 - タスク・リストを定義するには、をクリックし、名前を入力します。
 - タスク・リストを変更して新しいタスクを追加するには、それを選択し、 をクリックします。
3.  をクリックします。
4. 「タスク」でタスク名を入力します。

5. 「**タイプ**」から、作成しているタスクの種類、およびタスクによってユーザーが実行可能になることを選択します。たとえば、サービス管理者が実行時にすべてのディメンションを変更できるようにするタスクを作成している場合は、「**ディメンション・エディタ**」を選択します。

次の表を使用して、タスク・タイプに必要な情報を指定します:

表 19-29 タスク情報

タスク・タイプ	アクション
URL	指定された URL を開きます このタスクに関連付けるために、http:// www.company_name.com などの完全修飾 URL を入力し、ステップ 6 に進みます。
フォーム	フォームを開きます ユーザーが完了するフォームを選択し、ステップ 6 に進みます。 オプション: タスクを最初に開いたときデフォルトとして表示するメンバーを各ディメンションから選択するには、 ページ・メンバーのデフォルト設定 を選択します。このオプションを選択してから、ページ・ディメンションのメンバーを選択できます。デフォルトのページ・メンバーは、ユーザーがフォームを更新し、別のセッションでタスクに戻るまで適用されます。デフォルトのページ・メンバーが設定されている場合、各セッションで最後に使用された設定がこれらのデフォルトによって上書きされます。
ダッシュボード	ダッシュボードを開きます ユーザーが操作するダッシュボードを選択してから、ステップ 6 に進みます。
ビジネス・ルール	ビジネス・ルールを起動します 次のタスクを実行します: <ul style="list-style-type: none"> • 「キューブ」から、実行するビジネス・ルールに関連付けられたキューブを選択します。 • 「ビジネス・ルール」から、実行するビジネス・ルールを選択します。 • ステップ 6 に進みます。
記述的	サービス管理者は、タスク・プロパティなしでタスクを追加できます。
ジョブ・コンソール	「 ジョブ・コンソール 」を開いて、ユーザーがタイプ(データのコピーやデータのプッシュなど)および完了ステータス別にジョブのリストを表示できるようにします 次のタスクを実行します: <ul style="list-style-type: none"> • 「ジョブ・タイプ」で、コンソールに表示するジョブの種類を選択します。 • 「ステータス」で、コンソールに表示するタスクのステータスを選択します。 • ステップ 6 に進みます。

表 19-29 (続き) タスク情報

タスク・タイプ	アクション
ディメンション・エディタ	<p>サービス管理者が実行時にディメンションを表示および変更できるようにします</p> <p>次のタスクを実行し、ステップ 6 に進みます:</p> <ul style="list-style-type: none"> サービス管理者がすべてのディメンションを表示および変更できるようにするには、「ディメンション」から「すべて」を選択します。 サービス管理者が特定のディメンションを表示および変更できるようにするには、これを選択します。
アプリケーションのリフレッシュ	<p>サービス管理者が実行時にアプリケーションをリフレッシュして、最近の変更を取得できるようにします。有効化の後、ステップ 6 に進みます。</p>
インポートおよびエクスポート	<p>サービス管理者がフラット・ファイルを使用してデータとメタデータをインポートおよびエクスポートできるようにします。</p> <p>「ロード方法」で、ユーザーが実行する必要があるインポート・タスクまたはエクスポート・タスク(ファイルへのデータのエクスポートやファイルからのメタデータのインポートなど)を指定し、ステップ 6 に進みます。</p>

 ノート:

「セキュリティ管理」、「プロセス管理」および「フォームの管理」タスク・タイプは、タスク・リストに追加したり、簡易インタフェースで編集したりできません。これらのタスク・タイプには、アプリケーションのデスクトップ・モードでのみアクセスできます。

「ダッシュボード」タスク・タイプは、デスクトップ・モードではタスク・リストに追加したり編集したりできません。このタスク・タイプにアクセスできるのは簡易インタフェースのみです。

- 「期間」で、タスクの完了に要すると予想される期間を入力します。最初のフィールドに数字、2 番目のフィールドに時間の単位を入力します。たとえば、タスクが 2 週間かかると考えられる場合は、最初のフィールドに 2 を入力し、2 番目のフィールドに w または W を入力して「週」を選択します。2 番目のフィールドの時間単位オプションは次のとおりです:
 - 時間:** このオプションを選択するには、h または H を入力します。
 - 日:** このオプションを選択するには、d または D を入力します。
 - 週:** このオプションを選択するには、w または W を入力します。
 - 月:** このオプションを選択するには、m または M を入力します。
 - 年:** このオプションを選択するには、y または Y を入力します。

 ノート:

時間の単位オプションは大文字と小文字を区別しません。使用している言語が英語ではない場合、これらのエントリはローカライズされます。ローカライズされた単語の最初の文字を入力して、表示される単語全体を選択します。

7. タスクが特定の日付に開始し、特定の日付までに完了することを確認するには、次のタスクを実行します:
 - a. 「**開始日**」で、 をクリックし、カレンダーを使用して、それまでにタスクを開始する必要がある年、月、日および時刻を指定します。
 - b. 「**終了日**」で、 をクリックし、カレンダーを使用して、それまでにタスクを完了する必要がある年、月、日および時刻を指定します。

未完のタスクの終了をユーザーに促す電子メールのメッセージを送信するには、「**次毎に繰り返し**」を選択し、電子メールを送信する頻度(1日に1回など)を指定します。
8. タスクを完了する必要がある日付が近づいていることをユーザーに促す電子メールのメッセージを送信するには、「**アラート**」を選択して、次を実行します:
 - a.  をクリックし、カレンダーを使用して、アラート・リマインダの送信を開始する日時を指定します。
 - b. 「**次毎に繰り返し**」をクリックし、電子メール・リマインダの頻度を指定します。

たとえば、タスクの終了日が 2014 年 6 月 9 日午後 5 時で、タスクの期限の 1 週間前から 1 日に 1 回ユーザーに知らせる場合、「2014 年 6 月 2 日午後 5 時」を選択し、「1」を入力してから「週」を選択します。
9. タスクの完了が別のプライマリ・タスク(親タスク)の完了に依存するようにするには、「**依存関係**」の横にある  をクリックし、プライマリ・タスクを選択して、「OK」をクリックします。

ノート:

タスクの完了が、別のプライマリ・タスクの子タスクの完了に依存するようにはできません。タスク・リスト階層をまたがる依存関係は、タスクに子がある場合にはサポートされません。たとえば、タスク 3 がタスク 2 に依存しており、タスク 4 がタスク 3 に依存しているケースです。タスク 3 が完了していないと、タスク 4 は自動的に未完了になります。ただし、タスク 2.1 が完了していないと、その親タスク(タスク 2)が未完了に変わりますが、これは再帰的ではありません(タスク 3 とタスク 4 は影響を受けません)。

- タスク 1
- タスク 2
 - タスク 2.1
 - タスク 2.2
- タスク 3
- タスク 4

10. 右側の「手順」ペインで、タスクを完了する方法を説明する情報を入力します。書式設定ボタンを使用して、情報をカスタマイズします。たとえば、フォント、フォント・サイズおよびレイアウト(箇条書きや番号付きステップなど)を変更できます。

11. 「保存」をクリックし、「OK」をクリックします。

タスク・リストの編集

次も参照:

- [タスクの編集](#)
- [タスクのコピーおよび移動](#)
- [タスク・リストの移動および順序変更](#)
- [タスク・リストのクリア](#)
- [タスクおよびタスク・リストの削除](#)

タスクの編集

「タスクの編集」ダイアログ・ボックスを使用して、タスクのタイプとその手順、終了日とアラート日、および電子メール通知メッセージを変更します。

タスクを編集するには:

1. 「ナビゲータ」アイコン  をクリックし、「作成および管理」で、「タスク・リスト」をクリックします。
2. タスク・リストを選択し、 を選択します。
3. タスクを選択し、 を選択します。
4. 「タスクの編集」で、次の操作を行います。

- タスク名を変更します。
- 別のタスク・タイプを選択します。
- **オプション:** 「期間」、「開始日」、「終了日」、「アラート」 および 「依存関係」 オプションの値を変更します。

個々のオプションの詳細は、[タスク・リストへのタスクの追加](#)を参照してください。

5. 「**タスク - 手順**」 で、タスクを完了するための手順を変更します。
6. 「**保存**」 をクリックします。

タスクのコピーおよび移動

タスクをコピーまたは移動するには:

1. 「**ナビゲータ**」 アイコン  をクリックし、「**作成および管理**」 で、「**タスク・リスト**」 をクリックします。

2. 次のいずれかのアクションを行います:

タスクをコピーするには:

- a. タスク・リストを選択し、 を選択します。
- b. コピーするタスクを選択し、「**名前を付けて保存**」 をクリックします。
- c. 新しいタスク・リストの名前を入力し、「**OK**」 をクリックします。

タスクを移動するには:

- a. タスク・リストを選択し、 を選択します。
- b. タスクを選択し、 をクリックします。
- c. 別のタスクの子となるタスクを選択し、 を選択します。
- d. 親タスクとなるタスクを選択し、 を選択します。
- e. 「**保存**」 をクリックします。

タスクの切り取りおよび貼付けをするには:

- a. タスク・リストを選択し、 をクリックします。
- b. タスクを選択し、 をクリックします。
- c. タスクを新しい位置に移動するには、移動するタスクを上に表示させます。
- d.  をクリックします。
- e. 「**OK**」 をクリックします。

タスク・リストの移動および順序変更

タスク・リストを移動または順序変更するには:

1. 「ナビゲータ」アイコン  をクリックし、「作成および管理」で、「タスク・リスト」をクリックします。
2. 次のタスクを実行します:
タスク・リストを移動するには:
 - a. タスク・リストを選択し、 をクリックします。
 - b. 宛先フォルダを選択します。
 - c. 「OK」をクリックします。タスク・リストを並べ替えるには:
 - a. タスク・リストを選択します。
 - b.  または  をクリックします。

タスク・リストのクリア

タスク・リストの完了後、選択したタスク・リスト内のすべてのタスクの完了ステータス、終了日およびアラートをクリアできます。次以降のプランニング期間にタスクを再利用することができます。

アラートは、タスク・リストに終了日が含まれる場合のみ有効になります。タスク・リストをクリアすると、終了日のチェック・ボックスの選択が解除されて、アラートが無効になります。日付は削除されません。

タスク・リストをクリアするには:

1. 「ナビゲータ」アイコン  をクリックし、「作成および管理」で、「タスク・リスト」をクリックします。
2. クリアするタスク・リストを選択し、 をクリックします。
3. 「クリア」ドロップダウン・リストで、次のいずれかのオプションを選択します。
 - **完了ステータス:** 完了ステータスのみをクリアします
 - **期限とアラート:** タスクに設定されている終了日に基づいて、有効になっているアラートをクリアします
 - **両方:** 完了ステータス、終了日およびアラートをクリアします
4.  をクリックします。
5. 「OK」をクリックします。

タスクおよびタスク・リストの削除

タスクおよびタスク・リストを削除するには:

1. 「ナビゲータ」アイコン  をクリックし、「作成および管理」で、「タスク・リスト」をクリックします。
2. 次のタスクを実行します:

- タスクを削除するには、削除するタスクを含むタスク・リストを選択し、 をクリックします。削除するタスクを選択し、 をクリックします。
 - タスク・リストを削除するには、削除するタスク・リストを選択し、 を選択します。
3. 「OK」をクリックします。

タスク・リストへのアクセス権の割当て

タスク・リストを表示および変更できるユーザーを判別できます。デフォルトでは、タスク・リストのアクセス権限の管理および割当てができるのはサービス管理者です。

ノート:

タスク・リストに割り当てられるということは、タスク・リスト内のタスクにアクセスして実行できることを意味します。他のユーザーにタスクを割り当てることはできません。

- [タスク・リストへのアクセス権の追加](#)
- [タスク・リストへのアクセス権の変更および削除](#)

タスク・リストへのアクセス権の追加

タスク・リストへアクセス権を割り当てるには:

1. 「ナビゲータ」アイコン  をクリックし、「作成および管理」で、「タスク・リスト」をクリックします。
2. 変更するタスク・リストを選択します。
3.  をクリックします。
4.  をクリックします。
5. タスク・リストにアクセスするユーザーまたはグループを選択します。
 - 「ユーザー」をクリックしてすべてのユーザー名を表示します。または、「グループ」をクリックしてすべてのグループを表示します。
 - ユーザーおよびグループのページが複数ある場合は、ページ区切りバーがページの下部に表示され、ページ間を簡単に移動したり、特定のページにジャンプできます。
6. 「アクセス権タイプ」で、ユーザーやグループがどのようにタスク・リストを使用できるかを指定します:
 - **割当て済:** 表示および使用
 - **管理:** 変更
 - **管理と割当て:** 表示、使用、変更

- なし: アクセス権なし
7. 「追加」をクリックします。
 8. 「閉じる」をクリックします。

タスク・リストへのアクセス権の変更および削除

タスク・リストへのアクセス権を変更または削除するには:

1. 「ナビゲータ」アイコン  をクリックし、「作成および管理」で、「タスク・リスト」をクリックします。
2. 変更するタスク・リストを選択し、 をクリックします。
3. 次のタスクを実行します:
タスク・リストへのアクセス権を変更するには:
 - a. ユーザーまたはグループを選択し、 をクリックします。
 - b. 「アクセス権タイプ」で、次から選択します。
 - 割当て済: 表示および使用
 - 管理: 変更
 - 管理と割当て: 表示、使用、変更
 - なし: アクセス権なし
 - c. 「設定」をクリックします。タスク・リストへのアクセス権を除去するには:
 - a. ユーザーまたはグループを選択し、 をクリックします。
 - b. 「OK」をクリックします。
4. 「閉じる」をクリックします。

セル詳細のクリア

キューブのセル詳細(勘定科目注釈、サポート詳細、セル・テキスト、セル・レベル・ドキュメント)をクリアできます。勘定科目注釈、サポート詳細、セル・テキスト、セル・レベル・ドキュメントの作成と表示の詳細は、[フリーフォームの操作](#)を参照してください。

ノート:

この機能はサービス管理者とパワー・ユーザー向けであるため、アプリケーションでは、削除する詳細に対するすべてのアクセス権があると仮定されます。

セル詳細をクリアするには:

1. 「ナビゲータ」アイコン  をクリックし、「アクション」で、「セル詳細のクリア」をクリックします。

2. 「**キューブ**」で、キューブを選択します。
3. キューブ内のすべてのディメンションを選択するには、「**すべてのディメンションの追加**」をクリックします。
表示されたディメンションのメンバーを選択します。
4. 「**オプションのクリア**」から少なくとも 1 つのオプションを選択して、削除する情報のタイプを指定します。
5. データ交差のメンバーを選択します:
 - a. 「**ディメンション**」で、消去するディメンションを詳細とともに、少なくとも 1 つ選択します。
 - b. 表示されたディメンションで  をクリックします。「**メンバー選択**」ページで、削除する詳細のある選択項目を選択します。

 **ノート:**

選択された各ディメンションに、少なくとも 1 つのメンバーを選択する必要があります。ディメンションを選択しなかった場合、アプリケーションでは、セル詳細をクリアする際にそのすべてのメンバーが対象となります。

 **注意:**

目的のデータをクリアするには、少なくとも 1 つの勘定科目メンバーを選択し、他のすべてのディメンションからメンバーを選択します。少なくとも 1 つの勘定科目メンバーを選択しないと、**はい、値を #Missing に設定する** オプションを選択した場合でも、データはクリアされません。他のディメンションからメンバーを選択しない場合、選択した勘定科目メンバーの全データは、他のすべてのディメンションにわたってクリアされます。

6. **オプション:** 別のディメンションを選択して、そのメンバーを選択できるようにするには、 をクリックします。
7. 「**クリア**」をクリックします。
確認ページに選択項目が表示されます。
8. 「**終了**」をクリックして次に進むか、「**戻る**」をクリックして選択項目を変更します。
「セル詳細のクリア」が正常に完了すると、キューブからデータが削除されます。データが正常に削除されない場合、メッセージが表示されます。ログ・ファイルで確認することもできます。
9. **オプション:** 「セル詳細のクリア」の実行ステータスを表示し、削除された情報を確認するには、「**ジョブ**」を表示します。[ジョブの管理](#)を参照してください。
10. 別のキューブのセル詳細をクリアするには、ステップ 2 で別のキューブを選択し、手順を繰り返します。

データのコピー

プランは、あるディメンショナル交差から別のディメンショナル交差に、リレーショナル・データとサポート詳細を含めてコピーできます。たとえば、「予算、会計年度 10、最終」を「予測、会計年度 11、第 1 ドラフト」へコピーできます。

ノート:

- 「選択されたデータのコピー」の設定は、現在のセッションにしか保持されません。
- コピーするディメンション・メンバーが、選択したキューブに存在する必要があります。
- データは、データを使用できる列にコピーする必要があります。データを読み取り専用セルや動的セルにはコピーできません。
- 勘定科目注釈、サポート詳細、セル・テキストをコピーできます。
- この機能は属性とともに使用できないため、属性は選択しないでください。
- これは管理機能であるため、アプリケーションでは、コピーするデータに対するすべてのアクセス権があると仮定されます。
- この機能でデータを計算できません。予測を 5%増加させるなどの計算を実行するには、データをコピーした後、ビジネス・ルールを適用させてください。
- データをコピーするには、「シナリオ」、「勘定科目」、「期間」、「バージョン」ディメンションの少なくとも 1 つのメンバーを選択する必要があります。
- 「データのコピー」は、ブロック・ストレージ・キューブと集約ストレージ・キューブに対して有効です。

データをコピーするには:

1. 「ナビゲータ」アイコン  をクリックし、「アクション」で、「データのコピー」をクリックします。
2. 「キューブ」で、キューブを選択します。
このキューブのディメンションが表示されます。一度に 1 つのキューブからのみコピーできます。
3. 「データ・オプションのコピー」で、コピーする情報のタイプを選択します。
4. 「静的ディメンション」で、データ交差のメンバーを選択します。
 - a. 「ディメンション」で、コピー元のディメンションを選択します。
 - b. 「メンバー」で、 をクリックしてコピー元のメンバーを選択します。メンバーは複数選択可能です。「シナリオ」、「勘定科目」、「エンティティ」、「期間」、「バージョン」ディメンションの少なくとも 1 つのメンバーを選択する必要があります。
5. オプション: 別の静的ディメンションをリストに追加するには、 をクリックし、ディメンション・メンバーを選択します。

 **ノート:**

ディメンションを削除するには、「**ディメンションの選択**」を選択します。そのディメンションが、「**ディメンションおよびソース/宛先**」領域に移動します。

6. 「**ディメンションおよびソース/宛先**」で、データをコピーするディメンションを入力します

「**ソース**」および「**宛先**」で、 をクリックします。

7. 「**データのコピー**」をクリックします。

データは 1 つの交差から他の交差にコピーされます。データが正常にコピーされない場合、メッセージが表示されます。ログ・ファイルで確認することもできます。

8. 別のキューブのデータをコピーするには、ステップ 2 で別のキューブを選択し、手順を繰り返します。

アプリケーション診断の管理

次も参照:

- [アプリケーション診断について](#)
- [仮定](#)
- [アプリケーション診断の機能](#)
- [アプリケーション診断グラフの使用](#)
- [アプリケーション診断の起動](#)
- [最適なパフォーマンスのためのアーティファクトの変更](#)

アプリケーション診断について

アプリケーション診断によって、サービス管理者は、設計時に、アプリケーションを本番環境に置く前に(さらに継続的に、アプリケーションが新しいメンバーを使用して発展し、データがアプリケーションに追加されるとともに)、およびエンド・ユーザーがアプリケーションを使用する前に、設計の不具合を特定および解決できます。サービス管理者は、アプリケーション診断を使用して、次を評価できます:

- アプリケーション全体
- アーティファクトのタイプ(フォームなど)
- 個々の選ばれたアーティファクト

アプリケーション診断によって、サービス管理者は、設計時に、設計の不具合を含むアーティファクトを解決するために加えることができる変更を識別し、それらの変更に必要なエディタに簡単にアクセスできます。アーティファクトを変更する必要がある場合、内部プロセスは実行時にシステム要求を拒否するチェックを実行します。アプリケーション診断は、サービス管理者が選択したユーザーに基づいて、アプリケーションおよびアーティファクトを評価します。これにより、分析の一部として個々の

ユーザーの変数およびセキュリティ・アクセスを考慮して、実行時に発生する可能性がある問題を特定できます。

仮定

Oracle では、妥当なパフォーマンスを保証するためのアプリケーションおよびアーティファクトの設計方法に関する一般的なガイドラインのみを提供できます。アーティファクトおよび操作に対して正確な値の範囲を指定できません。

アプリケーション診断の機能

アプリケーション診断は次のようにアプリケーションを評価します:

- 設計時: 発生する可能性があるすべての問題の観点で、アプリケーションまたは特定のアーティファクトを分析します。この考えられる最悪の状況を判断するには、抑制オプション(フォームで使用されるものなど)は無視されます。アプリケーション診断では、発生する設計の不具合の修正方法に関する情報が提供されます。
- 実行時: 内部ガバナーは、見つかった設計の不具合が解決されていない場合に、ユーザーが特定のアクションを実行しないようにするチェックを実行します。

アプリケーション診断を使用して、次を分析します:

- ブロック・ストレージ・キューブ
- ディメンション
- フォーム
- スタンドアロン・ビジネス・ルール
- レポート・マッピング
- データのエクスポート機能

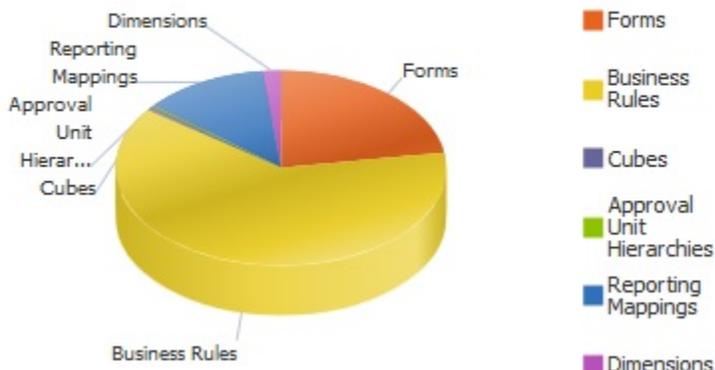
アプリケーション診断グラフの使用

パフォーマンスの問題を引き起こす可能性があり変更する必要があるアーティファクトは黄色で、パフォーマンスの問題が発生し再設計する必要があるアーティファクトは赤で表示されます。次のように円グラフを使用します:

- **<ビジネス・プロセス>アーティファクト分布:** アプリケーションがどのようなアーティファクト・タイプで構成されているかを示します。グラフの部分にマウスを置いて、各タイプのいくつかのアーティファクトがアプリケーション診断によって分析されたかを表示します。たとえば、フォームの上にマウスを置き、ポップアップ値が 55 の場合、55 フォームが分析されました。グラフの各部分をクリックして、各アーティファクト・タイプの準拠ステータスを表示します。ここでは、各タイプのいくつかのアーティファクトが許容、警告またはエラーのステータスであるかを表す別の円グラフを表示します。

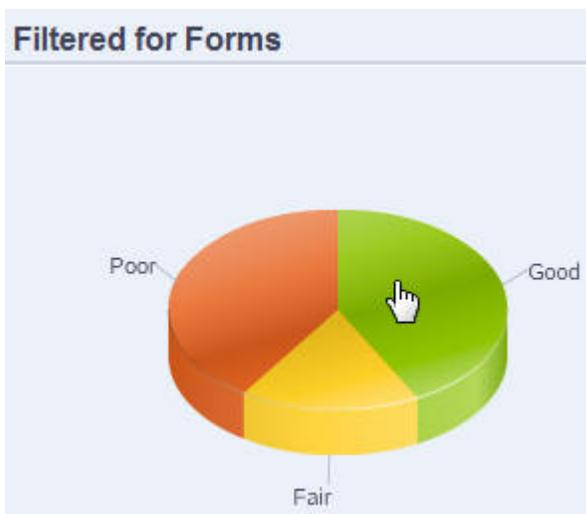
アーティファクト分布グラフの例:

Planning Artifact(s) Distribution



- **フィルタ対象<アーティファクト>**: アーティファクトのステータスを表すグラフの部分をクリックして、特定のステータスのアーティファクトを表示およびドリルダウンします。

フィルタ・グラフ:



アプリケーション診断の起動

アプリケーション診断を起動するには:

1. 「ナビゲータ」アイコン  をクリックし、「モニターおよび検索」で「アプリケーション診断」をクリックします。
2. 「ユーザーの選択」で、 をクリックして、設定が分析の実行に使用するユーザーを選択し、 をクリックします。
3. 次のタスクを実行します:

- 円グラフは、アプリケーション内のアーティファクトの分布を示しています。下部のグリッドは、すべてのアプリケーション・アーティファクトの整合性を表します。「普通」および「悪い」のステータスは、最適なパフォーマンスのために変更する必要がありますがあるアーティファクトを示します。
- 特定のタイプのアーティファクト(フォームなど)を分析するには、円グラフ内でそのタイプのスライスを選択します。たとえば、ビジネス・ルールが適切に設計されパフォーマンスの問題が発生しないことを確認するには、円グラフのビジネス・ルールのスライスをクリックします。グラフの大きな部分が「普通」または「悪い」の場合、ルールを変更する必要があります。そのタイプのすべてのアーティファクトに関する詳細は、下のグリッドに表示されます。
- ある特定のアーティファクトを選択して分析するには、「検索」を展開し、名前、開始日、終了日およびタイプを指定してアーティファクトを検索し、アーティファクトを選択して  をクリックします。アーティファクトに関する情報は、下のグリッドに表示されます。

ヒント:

円グラフに表示されるもの、および詳細にアクセスするためのドリルダウン方法の詳細は、[アプリケーション診断グラフの使用](#)を参照してください。

4.  をクリックするか、「アクション」、「アプリケーション・モニターの実行」の順に選択します。
5. グリッドに「詳細の表示」列が表示されない場合は、「表示」、「列」、「詳細の表示」の順に選択します。これにより、異なるタイプのアーティファクト・データを表示または非表示にすることもできます。
6. アーティファクトを修正する方法に関する情報を表示するには、「詳細の表示」で  をクリックします。次に、アーティファクトをクリックして、アーティファクトを変更できるエディタを起動します。

最適なパフォーマンスのためのアーティファクトの変更

アーティファクトを変更する方法を指示する、アプリケーション診断によって提供される詳細を確認した後で、次のように編集します:

- フォーム: フォームのアーティファクト名をクリックすると、新しいタブで「フォーム・デザイナー」が起動します。[フォームの管理](#)の説明に従って、フォームを編集します。
- ビジネス・ルール: ビジネス・ルール名をクリックすると、アクセス可能なすべてのアプリケーション・アーティファクトが表示される「システム・ビュー」が起動します。次のようなタスクを実行できます:
 - 上部の「ルール・デザイナー」を使用して、条件、コマンドおよびスクリプトなど、ルールの個別のコンポーネントを表示します。各コンポーネントをクリックして、ページの下部でそれを変更します。左側の「ルール・パレット」および「既存のオブジェクト」ペインからドラッグ・アンド・ドロップすることによって、式、システム・テンプレート、スクリプトなどのコンポーネントを挿入および削除することもできます。
 - 「デザイナー」から「スクリプトの編集」を選択して、関数の挿入、テンプレートの編集、変数の挿入、メンバー範囲の挿入、コメントの使用、および構文の検証などのタスクを実行することによって、スクリプトを変更およびフォーマットします。

- アーティファクト、ページおよびその他のドキュメントを、作成、オープン、削除、およびリフレッシュします。
- ビジネス・ルールおよびその他のオブジェクトをインポートおよびエクスポートします。
- アーティファクトを使用する方法および場所を判別します。

Oracle Enterprise Performance Management Cloud Calculation Manager での設計および実行時プロンプトの理解を参照してください。

- キューブ: キューブのアーティファクト名をクリックすると、新しいタブで、ディメンション・エディタの「パフォーマンス設定」タブが起動します。簡易ディメンション・エディタでのディメンションの編集の説明に従って、ディメンション・アウトラインまたはディメンションの疎を編集します。
- レポート・マッピング: レポート・マッピングのアーティファクト名をクリックすると、新しいタブでレポート・マッピング・デザイナーが起動します。*Oracle Enterprise Performance Management Cloud データ統合の管理*のデータ・マップの定義の説明に従って、レポート・マッピングを編集します。

A

命名規則

次も参照:

- [アプリケーションとデータベースの命名規則](#)
- [ディメンション、メンバーおよび別名の名前付けの制限](#)
- [計算スクリプト、レポート・スクリプト、式、フィルタおよび代替変数値でのディメンションとメンバー名](#)
- [ユーザー名およびグループ名の命名規則](#)

アプリケーションとデータベースの命名規則

アプリケーションを命名する場合は、次のルールに従います:

- アプリケーションの名前には、8文字まで使用できます。
- スペースとタブは使用できません。
- 最初または最後の文字にアンダースコア(_)は使用できません。
- 次の特殊文字は使用できません。

表 A-1 アプリケーション名で制限されている文字

文字	意味
*	アスタリスク
\	円記号(バックスラッシュ)
[]	大カッコ
:	コロン
,	カンマ
"	二重引用符
=	等号
>	大なり記号
<	小なり記号
.	ピリオド
+	プラス記号
?	疑問符
;	セミコロン
'	一重引用符
/	スラッシュ
	縦棒

- リレーショナル・データベース環境のアプリケーション名には、拡張文字は使用できません(アンダースコアを除く)。
- 集約ストレージ・データベースでは、アプリケーション名に DEFAULT、LOG、METADATA または TEMP を使用できません。

名前には大文字小文字のどちらでも使用できます。アプリケーション名は、入力した通りに作成されます。

ディメンション、メンバーおよび別名の名前付けの制限

ディメンション、メンバーおよび別名を命名する場合は、次のルールに従います。

- ディメンション名、メンバー名または別名に使用する文字数は 80 文字までとします。
- ディメンション、非共有メンバーおよび別名の名前は大文字と小文字を区別しません。大文字と小文字が異なるのみの同じ名前は使用しないでください。たとえば、2つのメンバーに「zzz」と「ZZZ」という名前を付けたり、基本メンバーに「zzz」、共有メンバーに「ZZZ」という名前を付けしないでください。

つまり、共有メンバー名は基本メンバーと同じ名前および大文字/小文字を使用する必要があります。基本メンバーの名前を変更すると(大文字/小文字のみを変更した場合でも)、共有メンバー名が基本メンバー名と一致するように更新されます。

- メタデータ・ロード・ファイル内のメンバー・プロパティまたは列ヘッダーと同じ名前のディメンション名(「データ型」など)は使用しないでください。
- メンバー名、ディメンション名、別名および説明で HTML タグを使用することはできません。
- ディメンション名、メンバー名および別名では[Tab]キーが制限されており、使用できません。
- ディメンション名、メンバー名および別名で制限されていて使用できない文字のリストを次に示します:

表 A-2 ディメンション名、メンバー名および別名で制限されている文字

文字	意味
"	引用符
[]	大カッコ
\	円記号(バックスラッシュ)
/	スラッシュ

 ノート:

- 大カッコ[]は認められていますが、ブロック・ストレージ・アウトラインでは推奨されていません。これは、集約ストレージ・アウトラインに変換する場合にエラーの原因となることがあるためです。
- メンバー名および別名に ASCII 代替文字(ゼロ幅スペース文字) 0x1A は使用できません。

- ディメンション名、メンバー名および別名の先頭で使用できない文字のリストを次に示します:

表 A-3 ディメンション名、メンバー名および別名の先頭で制限されている文字

文字	意味
@	アット・マーク
&	アンパサンド
\	円記号(バックスラッシュ)
[]	大カッコ
,	カンマ
-	ダッシュ、ハイフンまたはマイナス記号
=	等号
<	小なり記号
()	丸カッコ
.	ピリオド
+	プラス記号
"	引用符
/	スラッシュ
_	アンダースコア
	縦棒

 ノート:

前述の文字を含むメンバー名は、ビジネス・プロセスのデータ・エクスポート・ジョブでは許可されていません。

- 名前の先頭または末尾にスペースを挿入することはできません。
- カスタム・カレンダーの期間で、接頭辞にスペースは使用できません。
- ディメンション名、メンバー名または別名として次のものを使用することはできません:
 - 計算スクリプト・コマンド、演算子およびキーワード
 - 関数名と関数引数
 - 他のディメンションおよびメンバーの名前(メンバーが共有されている場合を除く)

- 動的時系列を使用可能にしている場合は、履歴、年、季、期間、四半期、月、週、および日は使用しないでください。
- 属性ディメンションを含む一意のメンバー・アウトラインでは、**Sum**、**Count**、**Min**、**Max** および **Avg** をメンバー名またはディメンション名として使用することはできません。これらの名前を使用すると、重複する名前が競合する原因となります。

ノート:

属性計算ディメンションに作成されたメンバー(**Sum**、**Count**、**Min**、**Max** および **Avg**)は、予約語とみなされません。これは、これらの名前を属性計算ディメンションで変更してから、属性ディメンションまたは標準ディメンションで標準名を使用できるためです。

アウトラインに重複メンバー・アウトラインのタグが付けられており、**Sum**、**Count**、**Min**、**Max** および **Avg** を基本メンバーとして使用する前に属性ディメンション(したがって属性計算ディメンション)が存在している場合は、重複名が許可されます。ただし、属性ディメンションを作成する前に **Sum**、**Count**、**Min**、**Max** および **Avg** を基本メンバーとして使用する場合、重複名は許可されません。

- ディメンション名、メンバー名および別名で制限されていて使用できない語のリストを次に示します:

表 A-4 ディメンション名、メンバー名および別名で制限されている語

制限されている語	制限されている語	制限されている語
ALL	AND	ASSIGN
AVERAGE	CALC	CALCMBR
COPYFORWARD	CROSSDIM	CURMBRNAME
DIM	DIMNAME	DIV
DYNAMIC	EMPTYPARM	EQ
EQOP	EXCEPT	EXP
EXPEROR	FLOAT	FUNCTION
GE	GEN	GENRANGE
GROUP	GT	ID
IDERROR	INTEGER	LE
LEVELRANGE	LOCAL	LOOPBLOCK
LOPPARMS	LT	MBR
MBRNAME	MBRONLY	MINUS
MISSING	MUL	MULOP
NE	NON	NONINPUT
NOT	OR	PAREN
PARENPARM	PERCENT	PLUS
RELOP	REQUEST	SET

表 A-4 (続き) ディメンション名、メンバー名および別名で制限されている語

制限されている語	制限されている語	制限されている語
SKIPBOTH	SKIPMISSING	SKIPNONE
SKIPZERO	STATUS	TO
TOLOCALRATE	TRAILMISSING	TRAILSUM
TYPE	UMINUS	UPPER
VARORXMBR	XMBRONLY	\$\$UNIVERSE\$\$
#MISSING	#MI	

計算スクリプト、レポート・スクリプト、式、フィルタおよび代替変数値でのディメンションとメンバー名

メンバー名を代替変数の値、計算スクリプト、レポート・スクリプト、フィルタ定義、パーティション定義または式で使用する場合は、MDX 文では大カッコ(())で囲む必要があります。また次の状況ではブロック・ストレージ・データベースで使用するために、二重引用符("")で囲む必要があります。

- 名前が 1 つまたは複数の数字で始まる場合(たとえば、100)
- 名前にはスペースまたは次の文字が含まれます。
 - アンパサンド(&)
 - アスタリスク(*)
 - アット・マーク(@)
 - 円記号(バックスラッシュ)(\)
 - 中カッコ({})
 - コロン(:)
 - カンマ(,)
 - ダッシュ、ハイフンまたはマイナス符号(-)
 - 感嘆符(!)
 - 等号(=)
 - 大なり記号(>)
 - 小なり記号(<)
 - 丸カッコ()
 - パーセント記号(%)
 - ピリオド(.)
 - プラス記号(+)
 - セミコロン(;)

- スラッシュ(/)
- チルダ(~)

計算スクリプトと式では、**Essbase** キーワードでもあるメンバー名を含む場合、ブロック・ストレージ・データベースでは引用符(" ")、集約ストレージ・データベースでは大カッコ(())でメンバー名を囲む必要があります。

```
BEGIN DOUBLE ELSE END FUNCTION GLOBAL IF MACRO MEMBER RANGE RETURN STRING  
THEN
```

計算スクリプト、レポート・スクリプトまたは式で、スペースまたは次の文字を含む名前、またはスペースまたは次の文字で始まる名前を引用符で囲みます: +、-、*、/、()、コロン、カンマ、@、セミコロン、{}、[]、<

数字で始まる名前も引用符で囲みます。例:

```
@SUM(ac1, "12345");
```

ユーザー名およびグループ名の命名規則

ユーザー名およびグループ名には最大 80 文字まで使用できます。

B

フォームの式関数

次も参照:

- [フォームの式関数について](#)
- [式の操作](#)
- [式の関数](#)

フォームの式関数について

式の行または列を作成したら、「**セグメント・プロパティ**」ペインを使用して式を定義します。式には、グリッド参照、算術演算子、およびオプションで算術関数を指定します。完全なリストは、[式の関数](#)を参照してください。

ノート:

アプリケーションには、メンバー式を持つ動的計算のレベル 0 メンバーが必要です。式を持たない動的計算メンバーについては、リフレッシュすると、セミコロン(;)が挿入されます。

式の操作

次も参照:

- [式の作成](#)
- [式の編集](#)
- [式の削除](#)

式の作成

式を作成するには:

1. 式を関連付ける行または列を選択します。
2. 自動的に展開されない場合は、「**セグメント・プロパティ**」を選択します。
3. 「式」に式の名前を入力し、 をクリックします。
4. 「**式**」ボックスが表示されたら、COUNT()、MAX()、IfThen()など、その式が実行する演算または関数を選択します。[式の関数](#)を参照してください。
5. 式にエラーがないことを確認するには、「**検証**」をクリックします。

式の編集

式を編集するには:

1. 式の行または列のあるフォームを開きます。
2. 「レイアウト」で、番号の付いた式の行または列を選択します。
3. 「セグメント・プロパティ」を使用して、式のプロパティを変更します。
4.  をクリックして、実行する演算または関数を変更します。
5. フォームを保存します。

式の削除

式を削除するには:

1. 式の行または列を選択します。
2. 「削除」をクリックします。
3. 式の削除を確認するには:
 - a. 式バーのチェックマークをクリックします。
 - b. グリッドの別のセルをクリックして、式バーをリセットします。
 - c. 式を削除したセルをクリックして、削除を確認します。

式の関数

この項では、フォームの式の行および列に式を作成できる算術関数を定義します。式の行および列をフォームに挿入するには、[式の行と列の追加](#)を参照してください。

算術関数の構文:

FunctionName (arguments)

引数の詳細は、[引数](#)を参照してください。

表 B-1 算術関数の構文

変数	説明
FunctionName	算術関数の名前
arguments	数値、または行、列、セルの参照、あるいは埋め込まれた関数

算術関数

表 B-2 算術関数

関数	説明
Abs	数値または参照先の絶対値を返します。 Abs を参照してください。
Average	数値や参照先の集合の平均を返します。 Average を参照してください。
AverageA	数値や参照先の集合の平均を返します。抑制されていない行または列についてののみ、計算に#Missing セルが含まれます。 AverageA を参照してください。
Count	数値や参照先の集合に含まれる値の個数を返します。 Count を参照してください。
CountA	数値や参照先の集合に含まれる値の個数を返します。抑制されていない行または列についてののみ、計算に#Missing セルが含まれます。 CountA を参照してください。
Difference	数値または参照先と、別の数値または参照先との差の絶対値を返します。 Difference を参照してください。
Eval	式を評価します。 Eval は、式を関数の引数として埋め込むために使用します。 Eval を参照してください。
IfThen、If	指定した条件が真の場合と偽の場合で異なる値を返します。 IfThen 、 If を参照してください。
Max	数値や参照先の集合の最大値を返します。 Max を参照してください。
Min	数値や参照先の集合の最小値を返します。 Min を参照してください。
Mod	除算した余り(モジュラス)を返します。 Mod を参照してください。
PercentOfTotal	数値または参照先を、別の数値または参照で割った結果を 100 倍した値を返します。 PercentOfTotal を参照してください。
Pi	15 桁の円周率の値(3.14159265358979)を返します。 Pi を参照してください。
Product	すべての数値または参照先の積を返します。 Product を参照してください。
Random	0.0 と 1.0 の間の乱数を返します。 Random を参照してください。
Round	数値を指定した桁数に切り上げまたは切り下げます。 Round を参照してください。
Sqrt	数値、行、列、セルの値の平方根を返します。 Sqrt を参照してください。
Sum	数値や参照先の集合の合計を返します。 Sum を参照してください。
Truncate/Trunc	数値の指定した桁数を除去します。 Truncate/Trunc を参照してください。
Variance/Var	現在の勘定科目に基づいて、指定された値の差を求めます。 Variance/Var を参照してください。
VariancePercent/VarPer	現在の勘定科目の勘定科目タイプに基づいて、指定された値のパーセントの差を求めます。 VariancePercent/VarPer を参照してください。

引数

算術関数では、数値、行、列、セルの参照、埋込み関数を引数として使用します。引数には、次の 4 つのタイプがあります：

- 数値
数値引数を参照してください。
- プロパティ
プロパティ引数を参照してください。
- 行、列またはセルの参照
行、列またはセルの参照引数を参照してください。
- 埋込み関数
引数への関数の埋込みを参照してください。

数値引数

数値引数の構文は次のとおりです：

```
(numeral1, numeral2, ... numeraln)
```

ここで、数値 1 から n は、小数および負数を含む任意の数字です。たとえば、Average(10,20,30)は、値 20 を戻します。

行、列またはセルの参照引数

行、列、セルの参照引数では、グリッド内の行、列またはセルを指定します。構文：

```
FunctionName(GridName.GridElement[segment(range)].Property)
```

表 B-3 引数のコンポーネント

引数	説明
<i>GridName</i>	フォームの名前。例： Difference (grid1.row[5], grid1.row[6])は、フォーム grid1 の 2 つの行の差を戻します。 オプション。GridName を指定しない場合、デフォルトは現在のフォームの名前になります。

表 B-3 (続き) 引数のコンポーネント

引数	説明
<i>GridElement</i>	<p>キーワード row、col、column、または cell のうちのいずれかです。</p> <p>たとえば、Max(row[1], row[2], row[3])は、これらの 3 行の最大値を戻します。GridElement はオプションです。ただし、セル参照には、行および列のセグメント ID が必要です。たとえば、cell[2, A]と [2, A]は両方とも、行 2 と列 A の交差であるセルを参照します。キーワード cell は、オプションです。セルの参照には、[row, col]構文または[col, row]構文を使用できます。</p> <p>オプション。GridElement が指定されていない場合、文字は列を、数字は行を示します。たとえば、Max ([1, A], [2, A], [3, A])という構文は、列 A の行 1、2 および 3 を参照します。</p>
<i>segment</i>	<p>行、列またはセル参照の番号。展開される行または列に対しては、セグメントを指定する必要があります。たとえば、row[2]は、行セグメント 2 を指します。セグメントは、角カッコ []で囲んで示します。</p> <p>必須。</p>
<i>range</i>	<p>指定されたセグメントから展開される行、列またはセル。範囲が指定されている場合は、指定された範囲のみを指定して式が計算されます。たとえば、row[2(3:5)]では、展開されたセグメント 2 の 3 番目から 5 番目までの行のみが使用されます。</p> <p>オプション。範囲が指定されていない場合、展開されるセルのすべてが使用されます。</p>
	<div style="border-left: 2px solid #0070C0; border-right: 2px solid #0070C0; border-bottom: 2px solid #0070C0; padding: 10px; background-color: #E6F2FF;"> <p> ノート:</p> <p>セグメントが 1 行または 1 列のみの場合は、範囲引数を使用しないでください。</p> </div>
<i>property</i>	<p>キーワード average、averageA、count、countA、max、min、product または sum のいずれかです。プロパティにより、指定済の展開される行、列またはセルを集約する方法を指定します。</p> <p>参照が引数の場合にはプロパティを指定しないことをお勧めします。プロパティを指定しないと、関数による参照の計算が最適な方法で実行されます。たとえば、次の式は、行 1 と行 2 にあるセルの平均を戻します:</p> <p><code>Average (row[1], row[2])</code></p> <p>一方、次の式は、最初に row[1]の平均を計算してから row[2]の平均を計算し、次にこれらの 2 つの値を足して 2 で割ります:</p> <p><code>Average (row[1].average, row[2].average)</code></p> <p>行、列またはセル参照のデフォルトのプロパティは、sum プロパティです。たとえば、row[2]は Sum (row[2])と等価です。</p>

セグメントのみが参照の必須コンポーネントなので、次の参照は同じになります:

```
Grid1.row[1].sum
```

```
[1]
```

AverageA と CountA の計算には、#Missing セルも含まれます。たとえば、行 1 が、Qtr1 = 100、Qtr2 = 200、Qtr3 = #MISSING、Qtr4 = 400 と展開するセグメント行の場合、次の関数は 4 という結果を返します:

```
row[1].CountA
```

これ以外のすべての関数は、#Missing データ・セルを計算から除外します。たとえば、前述の Qtr 1 = 100、Qtr2 = 200、Qtr3 = #MISSING、Qtr4 = 400 と展開する行 1 で、次の例は 3 という結果を返します:

```
row[1].Count
```

プロパティ引数

プロパティ引数は、展開される参照を 1 つの値に集計します。この集計値は、後に計算で使用されます。プロパティ引数は、集約行、列、またはセルでの計算に使用できます。プロパティ引数には、次の 2 つのタイプがあります:

- 集約
[集約プロパティ引数](#)を参照してください。
- 参照
[参照プロパティ引数](#)を参照してください。

集約プロパティ引数

集約行、集約列、集約セルは、それぞれ複数の行、列、セルを含んでいます。

集約プロパティ引数は、次の算術関数の構文の最後にある引数です。

```
FunctionName(GridName.GridElement[segment(range)].property)
```

次の集約プロパティを行、列またはセルの参照に適用します。

表 B-4 集約プロパティ

プロパティ	説明
Average	行、列またはセルの平均を返します。計算には、#MISSING 値および#ERROR 値は含まれません。
AverageA	行、列またはセルの平均を返します。計算には、#MISSING 値および#ERROR 値が含まれます。

表 B-4 (続き) 集約プロパティ

プロパティ	説明
Count	行、列またはセル内の値の数を返します。計算には、#MISSING 値および#ERROR 値は含まれません。
CountA	行、列またはセル内の値の数を返します。計算では、#MISSING 値と#ERROR 値をゼロ(0)として処理します。
Max	行、列またはセルの最大値を返します
Min	行、列またはセルの最小値を返します
Product	行または列の積を返します
Sum	行、列またはセルの合計を返します

算術関数引数として使用される場合は、プロパティのデフォルトはその関数と同じになります。次の例では、デフォルトのプロパティは **Average** です。

```
Average(row[2])
```

算術関数引数として使用されない場合は、プロパティのデフォルトは **sum** になります。次の例では、デフォルトのプロパティは集約行の **sum** です。

```
row[2]
```

参照プロパティ引数

参照プロパティ引数は、式の参照結果の処理方法を指定します。この引数は、他のプロパティとともに使用します。

次の参照プロパティ引数があります。

```
IfNonNumber / IFFN
```

IfNonNumber は、#MISSING 値および#ERROR 値のかわりに使用する特定の数値を指定します。構文:

```
AXIS[segment(range)].IfNonNumber(arg).AggregateProperty
```

表 B-5 参照プロパティ引数

引数	説明
AXIS	キーワード row 、 column または cell のいずれかです オプション
セグメント(範囲)	行番号、列の文字などの軸の有効な参照を示します
IfNonNumber (引数)	軸の参照先にデータがない場合やエラーの場合の処理方法を示します AxisRef の欠落データやエラー・データのかわりに使用する数値を示します

表 B-5 (続き) 参照プロパティ引数

引数	説明
AggregateProperty	集約関数は、集約セグメントで使用されます オプション

例:

cell[1,A] = 3、かつ

cell[1,B] = #MISSING のときに、

式:

```
cell[1,A] / cell[1,B]
```

は、#ERROR を戻します。

式:

```
cell[1,A] / cell[1,B].ifNonnumber(1)
```

は、cell[1,B]を 1 に置換し、3 を戻します。

ノート:

グリッドの#MISSING を抑制しており、グリッドの行や列に IfNonNumber プロパティを含む式がある場合は、#MISSING は抑制されたままになります。

引数への関数の埋込み

関数の引数に、関数を埋め込むことができます。

例:

次の例では、Average 関数を Sum 関数の中に埋め込んでいます:

```
sum(row[3:5], avg(row[4:6], 40, 50), row[7; 9], 70, 80)
```

- 行セグメント 3、4 および 5
- 行セグメント 4、5、6 と、数値 40 と 50 の平均
- 行セグメント 7 および 9
- 数値 70 および 80

Abs

Abs は、数値、行、列、またはセルの絶対値を戻す算術関数です。数値の絶対値は、符号に関係なく数値そのものです。正数は変更されませんが、負数は正数に変化します。関数の構文:

```
Abs ( argument )
```

ここで、*argument* は、次のいずれかです:

表 B-6 Abs 関数の引数

引数	説明
数値	数値。たとえば、 Abs (- 20) は、値 20 を戻します。数値には、小数および負数も使用できます。
行、列またはセルの参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文: GridName.GridElement [segment (range)].Property
関数	埋込み関数

例:

- 次の式は、引数に数値を取り、**30** という値を戻します。

```
Abs ( -30 )
```

- 次の例は、行 **1** の値の絶対値を戻します。

```
Abs ( row[1] )
```

- 次の例は、列 **E** の合計の絶対値を戻します。

```
Abs ( column[E].sum )
```

- 次の例は、フォーム **Grid1** のデザイン・セグメント **3** の展開された行 **1** から **3** を示します:

```
Abs ( Grid1.row[3(1:3)] )
```

Average

Average は、数値、行、列またはセルの集合の平均を戻す算術関数です。**Average** では、平均を求めるときに**#MISSING** および**#ERROR** のセルは除外されます。

 ノート:

欠落している値は、その値が抑制されるかどうかにかかわらず計算には含まれません。

関数の構文:

`Average(arguments)` or `Avg(arguments)`

ここで、*arguments* は、次の 1 つ以上の引数を取ります:

表 B-7 Average 関数の引数

引数	説明
数値	数値。たとえば、 Average (10, 20, 30) は、値 20 を返します。数値には、小数および負数も使用できます。
行、列またはセルの参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文: <code>GridName.GridElement[segment(range)].Property</code> たとえば、 Avg(Grid1.row[4(3:5)]) は、フォーム <code>grid1</code> 、行 4、3 から 5 までの範囲の平均値を返します。
関数	埋込み関数

例:

- 次の式は、20 という値を返します。

```
Avg( 10, 30, 20)
```

- 次の例は、3 つの集約行に含まれるすべての数値の平均を返します。

```
Average( row[1], row[6], row[8] )
```

- 次の例では、3 つの集約列 E、G、I の平均値を求めます。まず、各列の平均値を求め、その 3 つの値を平均します。

```
Avg(column[E].avg, column[G].avg, column[I].avg)
```

- 次の例は、集約行 3 の平均値を求め、その値を 100 で割ります:

```
Avg(row[3])/100
```

AverageA

AverageA は、数値、行、列またはセルの集合の平均を返す算術関数です。**AverageA** の計算には、**#MISSING** および **#ERROR** のセルも含まれます。これらのセルは、平均を求める際にゼロ値として処理されます。

 ノート:

#MISSING のセルと#ERROR のセルは、抑制されていない行や列の場合にのみ、計算に含まれます。

関数の構文:

`AverageA(arguments)` or `AvgA(arguments)`

ここで、*arguments* は、次の 1 つ以上の引数を取ります:

表 B-8 AverageA 関数の引数

引数	説明
数値	数値。たとえば、 <code>AverageA(10, 20, 30)</code> は、値 20 を返します。数値には、小数および負数も使用できます。
行、列またはセルの参照	行、列またはセルへのポインタ。参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文: <code>GridName.GridElement[segment(range)].Property</code> たとえば、 <code>AvgA(Grid1.row[4(3:5)])</code> は、フォーム <code>grid1</code> 、行セグメント 4、3 から 5 までの範囲の平均値を返します。
関数	埋込み関数

例

次の例では、グリッドに値 10、20、30 および#ERROR がある 4 行が含まれます。5 行目にある次の式は、値 15 を返します:

`AverageA([1:4])`

Count

`Count` は、数値、行、列またはセルの集合にある値の個数を返す算術関数です。`Count` では、個数の取得時に#MISSING 値および#ERROR 値は除外されます。関数の構文:

`Count (arguments)`

ここで、*arguments* は、次の 1 つ以上の引数を取ります:

表 B-9 Count 関数の引数

引数	説明
数値	数値。たとえば、 <code>Count(10, 20, 30)</code> は、値 3 を返します。数値には、小数および負数も使用できます。

表 B-9 (続き) Count 関数の引数

引数	説明
行、列またはセルの参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文: <code>GridName.GridElement[segment(range)].Property</code>
関数	埋込み関数

例:

- 次の例は、3つの行 1、6、8 にある値の個数を返します。

```
Count(row[1], row[6], row[8])
```

- 次の例は、3つの列にある値の個数を返します。

```
Count(column[E], column[G], column[I])
```

- 次の例は、行 4 と列 D が交差するセルにある値の個数を返します。

```
Count(cell[D,4])
```

- 次の例は、グリッド 5 の集約行 3 にある値の個数を返します。

```
Count(grid1.row[3])
```

CountA

CountA は、数値、行、列またはセルの集合内の値の個数を返す算術関数です。個数の取得時には、CountA では、抑制されていない行または列の #MISSING セルおよび #ERROR セル内の値のみの個数を返します。関数の構文:

```
CountA(arguments)
```

ここで、*arguments* は、次の 1 つ以上の引数を取ります:

表 B-10 CountA 関数の引数

引数	説明
数値	数値。たとえば、CountA(10,20,30,50) は、値 4 を返します。数値には、小数および負数も使用できます。
行、列またはセルの参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文: <code>CountA(GridName.GridElement[segment(range)].property</code>
関数	埋込み関数

例:

- 次の例は、グリッドに値 10、20、30 および #ERROR がある 4 行が含まれる場合です。5 行目にある次の式は、これらの 4 行にある値の個数を返します:

```
CountA([1:4])
```

- 次の例は、4 つの行にある値の個数を返します:

```
CountA(row[1], row[6], row[8] row[where data yields #ERROR])
```

Difference

Difference は、数値、行または列から別の数値、行または列を減算した差異の絶対値を返す算術関数です。この関数は、**Variance** とも呼ばれます。関数の構文:

```
Difference(arg1, arg2)
```

arg1 から *arg2* が減算され、これらは次の 1 つ以上の引数です。

表 B-11 Difference 関数の引数

引数	説明
数値	数値。たとえば、 Difference (3, 5) は、絶対値 2 を返します。数値には、小数および負数も使用できます。
行、列または参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文: GridName.GridElement[segment(range)].Property 次の例は、フォーム grid1 の 2 つの行の差を返します: Difference(grid1.row[1],grid1.row[6])
関数	埋込み関数

ノート:

Difference 関数は、*arg2* から *arg1* を差し引いた値の絶対値を返します。引数のマイナス符号は、負数を示します。

例:

- 次の例は、絶対値 8 を返します。

```
Difference(3, -5)
```

- 次の例は、2 つの集約列の差を返します。

```
Difference( column[E], column[G] )
```

 ノート:

テキスト・ラベルには、"Difference"と"Variance"のいずれでも入力できません。

Eval

Eval は、式を評価する算術関数です。**Eval** を埋込み関数の引数として使用して 1 つの式に複数の式を結合できます。関数の構文:

```
Eval (expression)
```

ここで、式は、次の 1 つ以上の引数を取ります:

表 B-12 Eval 関数の引数

引数	説明
数値	数値。数値には、小数および負数も使用できます。
行、列または参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文: <code>GridName.GridElement[segment(range)].Property</code>
関数	埋込み関数
演算子	サポートされている算術演算子(+、-、*、/、^、%など)。

例:

次の例は、行 1 を行 2 で割り、その値を 4 桁に丸めます:

```
Round (Eval ([1]/[2]), 4)
```

IfThen、If

IfThen 関数は、条件が真であるか偽であるかに応じて異なる値を戻す条件関数です。

関数の構文:

```
IfThen (Condition, TrueParameter, FalseParameter)
```

- 条件は、**true** または **false** を評価する論理式です。ブール演算子(**And**、**Not**、および **Or**)と同様に、完全な条件論理を使用できます。条件は、**#MISSING** 値および **#ERROR** 値に対するテストの実行にも使用できます。有効な条件演算子のリストは、次の表を参照してください。
- TrueParameter** と **FalseParameter** は、条件の結果に基づいて評価される任意の有効な式です。

次の表に、完全にサポートされている条件演算子の説明を示します。条件演算子によってサポートされている代替構文がある場合は、その構文がリストされています。

表 B-13 条件演算子

条件演算子	構文	ロジック
次と等しい	$式 = 式$	左の式が右の式に等しいかどうかを調べます。 この条件を評価するルーチンは、丸め処理を考慮しません。丸め処理が必要な場合は、 Round 関数を使用します。 例: $1 = 4$ False を返します
次より大きい	$式 > 式$	左の式が右の式より大きいかどうかを調べます。 例: $1 > 4$ False を返します
次と等しいか大きい	$式 >= 式$	左の式が右の式より大きい、または等しいかどうかを調べます。 正しい構文は" $>=$ "です。構文" $=>$ "はサポートされていません。 例: $1 >= 4$ False を返します
次より小さい	$式 < 式$	左の式が右の式より小さいかどうかを調べます。 例: $1 < 4$ True を返します
次より小さい、または次と等しい	$式 <= 式$	左の式が右の式より小さい、または等しいかどうかを調べます。 正しい構文は" $<=$ "です。構文" $=<$ "はサポートされていません。 例: $1 <= 4$ True を返します
次と等しくない	$式 <> 式$ $式 \neq 式$	左の式が右の式に等しいかどうかを調べます。 この条件を評価するルーチンは、丸め処理を考慮しません。丸め処理が必要な場合は、 Round 関数を使用します。 例: $1 <> 4$ True を返します $1 \neq 4$ True を返します

表 B-13 (続き) 条件演算子

条件演算子	構文	ロジック
IsMissing	IsMissing (参照) IsMiss (参照)	参照先に#MISSING の値があるかどうかを調べます。 展開される行や列を参照する場合に条件が True になるためには、すべての結果セルの値が#MISSING である必要があります。 例: IsMissing([1]) 行 1 の値が#MISSING のときに、True を戻します。
IsError	IsError (参照) IsErr (参照)	参照先に#ERROR の値があるかどうかを調べます。 展開される行や列を参照する場合に条件が True になるためには、すべての結果セルの値が#ERROR である必要があります。式行および式列のみ結果として#ERROR を戻すことができます。 例: IsError([2]) 行 2 の値が#ERROR のときに、True を戻します。
IsNonNumeric	IsNN (参照) IsNonNumerid (参照) IfNN (参照) IfNonNumber (参照)	参照先に、#MISSING または#ERROR の結果が含まれているかどうかを調べます。 展開される行や列を参照する場合に条件が True になるためには、すべての結果セルの値が#Error または#Missing である必要があります。 例: IsNN([3]) 行 3 の値が#MISSING か#ERROR のときに、True を戻します。
カッコ	(条件)	条件をグループ化するために使用します。多くの場合、視覚的にわかりやすくするために使用します。 例: (1 > 4) False を戻します

表 B-14 条件演算子

複合条件	構文	ロジック
And	(条件 AND 条件) (条件 & 条件)	2 つの条件を比較するために使用される複合条件。すべての条件が True の場合に True を戻します。 例: (1 > 4 AND 5 > 2) False を戻します
Not	NOT (条件) ! (条件)	条件の結果を逆転(否定)します。 例: Not (1 > 4) True を戻します

表 B-14 (続き) 条件演算子

複合条件	構文	ロジック
Or	(条件 OR 条件) (条件 条件)	2つの条件を比較するために使用される複合条件。いずれかの条件が True の場合に True を返します。 例: (1 > 4 OR 5 > 2) True を返します

条件文に関するノート

- 式: 任意の有効な数式。式には、定数(整数または実数)の任意の組合せ、参照、またはそれ以外の関数を使用できます。
- 参照: 任意の有効な参照。つまり、**IFNN** 参照プロパティを参照の一部として使用できます。
- 条件: 複合条件 **And**、**Not**、および **Or** に適用される任意の有効な条件。これらの演算子は、埋込み条件を持つことができます。

ノート:

And、**Not**、および **Or** 演算子は、カッコで囲まれている必要があります。

- 条件内の式のいずれかが **#MISSING** 値または **#ERROR** 値を返す場合、**If** 関数は **#MISSING** または **#ERROR** を返します。ただし、**IsMissing** 条件、**IsError** 条件または **IsNonNumeric** 条件を使用している場合にはこの規則は適用されません。

複合条件

複合条件 **And**、**Or** および **Not** は完全にサポートされています。ただし、カッコで囲まれている必要があります。

有効な例:

```
If ( ([A] > [B] and [A] > 1000), [A], [B])
```

無効な例:

```
If ( [A] > [B] and [A] > 1000, [A], [B])
```

Max

Max は、数値、行、列またはセルの集合内の最大値を返す算術関数です。関数の構文:

```
Max (arguments)
```

ここで、**arguments** は、次の 1 つ以上の引数を取ります:

表 B-15 Max 関数の引数

引数	説明
数値	数値。たとえば、 Max (10, 20, 30) は、値 30 を返します。数値には、小数および負数も使用できます。
行、列またはセルの参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文: <code>GridName.GridElement[segment(range)].Property</code>
関数	埋込み関数

例:

- 次の例は、行 1、行 6、行 8 にある値の最大値を返します。

```
Max(row[1], row[6], row[8])
```

- 次の例は、集約行の合計の最大値を返します。

```
Max(row[1].sum, row[2].sum, row[3].sum)
```

Min

Min 関数は、数値、行、列またはセルの集合の最小値を返す算術関数です。関数の構文:

```
Min (arguments)
```

ここで、*arguments* は、次の 1 つ以上の引数を取ります:

表 B-16 Min 関数の引数

引数	説明
数値	数値。たとえば、 Min (10, 20, 30) は、値 10 を返します。数値には、小数および負数も使用できます。
行、列またはセルの参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文: <code>GridName.GridElement[segment(range)].Property</code>
関数	埋込み関数

例:

- 次の例は、行 1、行 6、行 8 にある値の最小値を返します。

```
Min (row[1], row[6], row[8])
```

- 次の例は、集約行の合計の最小値を返します。

```
Min(row[1].sum, row[2].sum, row[3].sum)
```

Mod

Mod 関数は、除算した余り(モジュラス)を戻す算術関数です。関数の構文:

```
Mod (arg1, arg2)
```

ここで、*引数2* は除数です。*引数1* と *引数2* は次の引数を取ります。

表 B-17 Mod 関数の引数

引数	説明
数値	数値。たとえば、Mod (6, 4) は、値 2 を戻します。数値には、小数および負数も使用できます。
行、列またはセルの参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文: GridName.GridElement[segment(range)].Property
関数	埋込み関数

例:

次の例は、10 を 5 で割った余り 0 を戻します。

```
Mod (10,5) = 0
```

PercentOfTotal

PercentOfTotal は、ある数値、行、列またはセルを、別の数値、行、列またはセルで割った値に 100 を掛けた値を戻す算術関数です。関数の構文:

```
PercentOfTotal (arg1, arg2)
```

- ここで、*引数1* は、現在高(*引数2*)のコンポーネントです。通常、この引数は、行または列を参照します。
- ここで、*引数2* は、*引数1* に対する現在高です。通常、この引数は、総計を含むセル参照です。
- 引数1* は、*引数2* で除算され、その結果に 100 が掛けられます。*引数1* および *引数2* は、次の 1 つ以上の引数を取ります。

表 B-18 PercentOfTotal 関数の引数

引数	説明
数値	数値。たとえば、PercentOfTotal (100, 20) は、値 500 を戻します。数値には、小数および負数も使用できます。
行、列またはセルの参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文: GridName.GridElement[segment(range)].Property

表 B-18 (続き) PercentOfTotal 関数の引数

引数	説明
関数	埋込み関数

 ノート:

この関数には、2つの引数が必要です。

例:

- 次の例は、値 5%を戻します。

```
PercentofTotal(20, 400)
```

- 次の例では、列 A の各セルの値をセル A5 の「市場合計」の値で割り、100 を掛けた結果 PercentOfTotal を列 B に示します。式:

```
PercentOfTotal ([A], [A,5]),
```

PercentOfTotal 関数の結果

次の表に、前述の例を使用した PercentOfTotal の結果を列 B に示します。

		A	B
1		Sales	% Total
2	Mkt1	60	20%
3	Mkt2	120	40%
4	Mkt3	120	40%
5	Total Mkt	300	100%

 ヒント:

列 B のヘッダーをクリックし、式バーを使用して式を挿入します。

Pi

Pi は、算術定数 3.14159265358979 を 15 桁で戻す算術関数です。Pi(π)は、円周の直径に対する比率です。関数の構文:

```
PI()
```

例:

次の例は、行 3 を、 π と 2 の積で割った値を戻します。

```
row[3] / (PI() * 2)
```

Product

Product は、すべての数値または参照の積を戻す算術関数です。関数の構文:

```
Product (arguments)
```

ここで、*arguments* は、次の 1 つ以上の引数を取ります:

表 B-19 Product 関数の引数

引数	説明
数値	数値。たとえば、 Product(2, 20) は、値 40 を戻します。数値には、小数および負数も使用できます。
行、列またはセルの参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文: <code>GridName.GridElement[segment(range)].property</code>
関数	埋込み関数

例:

次の例は、**40** という値を戻します。

```
Product (2, 20)
```

Random

Random は、**0.0** と **1.0** の間の乱数を戻す算術関数です。関数の構文:

```
Random ()
```

例:

次の例は、**0.0** と **1.0** の間の乱数を戻し、それに **1000** を掛けます。

```
Random () * 1000
```

Round

Round は、指定された桁数で数値を切り上げまたは切り下げる算術関数です。関数の構文:

```
Round (引数1, 整数)
```

ここで、*引数1* は、次の 1 つ以上の引数を取ります:

表 B-20 Round 関数の引数

引数	説明
数値	数値。たとえば、 Round(81.3987,3) は、値 81.399 を戻します。数値には、小数および負数も使用できます。
行、列またはセルの参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文: <code>GridName.GridElement[segment(range)].property</code>
関数	埋込み関数

整数は、数値を丸める桁数を指定します。

- 整数がゼロより大きい場合、小数点以下の指定した桁数に丸められます。
- 整数がゼロの場合は、最も近い整数に丸められます。
- 整数がゼロより小さい場合は、小数点より左側の桁数に丸められます。

例:

次の例は、小数点以下 **3** 桁に丸められます:

```
Round(3594.5567,3) = 3594.557
```

次の例は、最も近い整数の桁数に丸められます。

```
Round(3594.5567,0) = 3595
```

次の例は、**1000** の桁に丸められます。スケールとも呼ばれます。

```
Round(3594.5567,-3) = 4000
```

Sqrt

Sqrt は、数値、行、列またはセルの平方根を戻す算術関数です。**Sqrt** 関数の構文:

```
Sqrt(argument)
```

ここで、*argument* は、次のいずれかの引数を取ります:

表 B-21 Sqrt 関数の引数

引数	説明
数値	数値。たとえば、 Sqrt(100) は、値 10 を戻します。数値には、小数および負数も使用できます。
行、列またはセルの参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文: <code>GridName.GridElement[segment(range)].property</code>
関数	埋込み関数

例

次の例は、値 4 を返します。

```
Sqrt(16)
```

Sum

Sum は、数値、または行、列、セルにある値の和を返す算術関数です。

Sum 関数の構文:

```
Sum (arguments)
```

ここで、*arguments* は、次の 1 つ以上の引数を取ります:

表 B-22 Sum 関数の引数

引数	説明
数値	数値。たとえば、 Sum(10, 20, 30) は、値 60 を返します。数値には、小数および負数も使用できます。
行、列またはセルの参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文: <code>GridName.GridElement[segment(range)].property</code>
関数	埋込み関数

例:

- 次の例は、**30** という値を返します。

```
sum(10,20)
```

- 次の例は、**3** つの行の和を返します。

```
sum(row[1],row[6],row[8])
```

- 次の例は、**3** つの集約列の和を返します。

```
sum(column[E], column[G], column[I])
```

式の行に IDESC が含まれている場合、合計には親とその子孫がすべて含まれます。

たとえば、フォームは、次の行(および各メンバーの子)で作成されます:

```
IDESC("Mem1"), IDESC("Mem2"), IDESC("Mem3"), IDESC("Mem4")
```

式の行が次の式で追加される場合:

```
SUM(ROW[1],ROW[2],ROW[3],ROW[4])
```

フォームがデータ・エントリのために開かれたとき、式の行によりすべての親とその子の合計が戻されます。

Truncate/Trunc

Truncate は、指定した桁で数値を除去する算術関数です。

構文:

Trunc (*arg1*, *integer*)

- ここで、*引数1* は、次のいずれかの引数を取ります:

表 B-23 Truncate/Trunc 関数の引数

引数	説明
数値	数値(例: 234.567)。
行、列またはセルの参照	グリッド内の行、列またはセルへのポインタ。参照の指定にはいくつかの方法があります。参照構文: GridName.GridElement[segment(range)].property
関数	埋込み関数

- ここで、**整数**には、除去する桁数を指定します。
 - 正の**整数**は、小数点の右側の有効桁数を決定します。
 - 整数**にゼロ(0)を指定すると、小数点の左側にある整数を戻します。
 - 負の**整数**は、小数点の左側の切り捨てられた有効桁数を示します。

例:

次の文では、正の整数 2 を指定しています。小数点以下 2 桁で除去されます。

```
Trunc(234.567, 2) = 234.56
```

次の文ではゼロ(0)を整数値として指定しています。小数点以下の数字はすべて除去されます。

```
Trunc(234.567, 0) = 234
```

次の文では、負の整数-2 を指定しています。小数点以下の数字はすべて除去され、整数の最後の 2 桁は切り捨てられます。

```
Trunc(234.567, -2) = 200
```

 ノート:

セル、列または行に事前に適用されているフォーマットは、**Trunc** 関数を使用した場合でも維持されます。たとえば、事前に小数点以下 3 桁まで表示するようにフォーマットされているセルで **Trunc** 関数を使用すると、`Trunc(234.567, 0) = 234.000` のようになります。

Variance/Var

Variance は、現在の勘定科目の種別に基づいて、指定された値の差異を評価する財務関数です。たとえば、費用または負債勘定科目での正の結果は減少を示すので、負数として表示されます。この関数は、UDA 勘定科目タイプ(資産、負債、資本、収益および費用)で使用できます。

構文:

`Var (reference1, reference2)`

reference1 と *reference2* は、差異を計算するための、同じ勘定科目ディメンションのメンバ一の行、列またはセルの参照です。

計算結果

次の表は、勘定科目で **Variance** 関数を使用した場合の計算結果を示しています。

表 B-24 Variance 関数を使用した場合の計算結果

列 A	列 B	Var ([A], [B])=0	Var ([A], [B])>0	Var ([A], [B])<0
資産	資産	0	正の値を戻します	負の値を戻します
負債	負債	0	正の値を戻します	負の値を戻します
資本	資本	0	正の値を戻します	負の値を戻します
収益	収益	0	正の値を戻します	負の値を戻します
費用	費用	0	負の値を戻します	正の値を戻します

Variance の動作

- **Variance** 関数は、同じ勘定科目の種別での比較を要求します。販売と費用など、2 つの異なる勘定科目の種別を比較する場合、**Variance** 関数は、勘定科目の種別の論理を適用せず、単純な計算を実行します。例:

表 B-25 2 つの異なる勘定科目の種別を比較する場合の Variance 関数の結果

販売	費用	結果
-400	100	-500

- **Variance** 関数を勘定科目タイプ以外のディメンションに適用すると、実行時に **#ERROR** を戻します。

- #MISSING のセルは、IfNonNumber プロパティを指定していないかぎり、ゼロ(0)として扱われます。

例

Variance 関数で使用できる参照は、セル、列または行のみです。

表 B-26 Variance 関数の構文の例

構文	例
列を参照する構文の例:	Var ([A], [B])
行を参照する構文の例:	Var ([3], [4])
セルを参照する構文の例:	Var (Cell [3,A], [3,B])

次に、列 A (**実績**)と列 B (**予算**)の差異を計算する例を示します:

Var ([A], [B])

この例では、次のレポートが作成されます:

	Year	Product	Market
	Actual	Budget	Variance
	=====	=====	=====
Sales (Income)	400,855	373,080	27,775
COGS (Expense)	179,336	158,940	-20,396

VariancePercent/VarPer

VariancePercent は、現在の勘定科目の勘定科目タイプに基づいて指定された値の差異をパーセントで評価する財務関数です。収益、フロー、資産、または残高の勘定科目では、正の結果は増加を示すため、正数で表示されます。費用または負債の勘定科目では、正の結果は減少を示すため、負数で表示されます。

構文:

VarPer (reference1, reference2)

ここで、reference1 と reference2 は、VariancePercent 関数の結果を計算する勘定科目ディメンションと同じディメンションのメンバーである行、列またはセルへの参照です。

計算結果

次の表に、UDA の勘定科目を、VariancePercent 関数で計算した結果を示します。

表 B-27 VariancePercent 関数を使用した場合の計算結果

列 A	列 B	VarPer ([A], [B])=0	VarPer ([A], [B])>0	VaPer ([A], [B])<0
資産	資産	0	正の値を戻します	負の値を戻します
負債	負債	0	負の値を戻します	正の値を戻します
資本	資本	0	正の値を戻します	負の値を戻します
収益	収益	0	正の値を戻します	負の値を戻します
費用	費用	0	負の値を戻します	正の値を戻します

VariancePercent の動作

- VariancePercent 関数は、同じ勘定科目の種別間での比較を要求します。販売と費用など、2 つの勘定科目の種別間で比較すると、VariancePercent 関数は、勘定科目の種別の論理を適用せず、単純な計算を実行します。例:

表 B-28 2 つの勘定科目の種別を比較する場合の VariancePercent 関数の計算結果

販売	費用	結果
-400	100	-5.

- VariancePercent 関数を勘定科目タイプ以外のディメンションに適用すると、実行時に #ERROR を戻します。
- #MISSING のセルは、Ifnonnumber プロパティを指定していないかぎり、ゼロ(0)として扱われます。

例

VariancePercent 関数で使用できる参照は、セル、列または行のみです。

表 B-29 VariancePercent 関数の構文の例

構文	例
列を参照する構文の例	VarPer ([A], [B])
行を参照する構文の例	VarPer ([3], [4])
セルを参照する構文の例	VarPer (Cell [3,A], [3,B])

次に、列 A (実績)と列 B (予算)の VariancePercent を計算する例を示します:

```
VarPer ([A], [B])
```

列を比較する場合の VariancePercent 関数の結果の例

この例では、次のレポートが作成されます:

	Year Actual	Product Budget	Market <u>VariancePercent</u>
Sales (Income)	400,855	373,080	7%
COGS (Expense)	179,336	158,940	-13%

C

Smart View を使用したアプリケーションの管理

次も参照:

- [Smart View でのアプリケーションの管理について](#)
- [アプリケーション管理のための Smart View とその管理拡張機能のインストール](#)
- [Smart View でのアプリケーション管理オプションの表示の制御](#)
- [アプリケーション・テンプレートのダウンロード](#)
- [アプリケーションの作成](#)
- [アプリケーション・テンプレートでのアーティファクトの操作](#)
- [Smart View でのアプリケーションの更新](#)
- [アプリケーションの削除](#)
- [プランニング管理拡張機能と Office のオートコレクト](#)

Smart View でのアプリケーションの管理について

適用対象: フリーフォーム、Planning、Planning モジュール

サービス管理者は、Oracle Smart View for Office と Oracle Smart View for Office (Mac and Browser)で、Excel を使用して Planning アプリケーション、Planning モジュール・アプリケーションおよびフリーフォーム・アプリケーションを作成および管理できます。

ダウンロード可能な Excel テンプレート・ワークブックを使用すると、Smart View でアプリケーションをすばやく作成し、モデリングおよび管理できます。アプリケーション・テンプレート・ワークブックのワークシートを変更することで、アプリケーションのプロパティ、ディメンションとメンバーのプロパティ、セキュリティ(アクセス権限)および代替変数をニーズにあわせて定義できます。また、テンプレート・ワークブックからデータをロードすることもできます。

アプリケーションが作成されると、ユーザーはそのアプリケーションを Oracle Smart View for Office、Oracle Smart View for Office (Mac and Browser)または Web アプリケーションから使用できます。サービス管理者は、必要に応じて Smart View でアプリケーションをさらに更新およびリフレッシュできます。Smart View からアプリケーションを削除することもできます。

Smart View でのアプリケーション管理は、お使いのビジネス・プロセス環境で迅速かつ簡単にアプリケーションを起動して実行する方法です。

開始するには、[アプリケーション管理のための Smart View とその管理拡張機能のインストール](#)のトピックを参照してください

インストールしたら、まず Smart View で使用可能なアプリケーション・テンプレート・ワークブックをダウンロードして編集します。または、ビジネス・プロセスの「**ダウンロード**」

メニューからアプリケーション・テンプレート zip ファイルをダウンロードします。テンプレート zip ファイルには、**Planning**、**Planning** モジュールおよびフリーフォーム・アプリケーションのスターター・ワークブックおよびサンプル **Planning** アプリケーション・ワークブックが含まれています。[アプリケーション・テンプレートのダウンロード](#)を参照してください。

ノート:

22.03 以降、単一の Excel テンプレート・ワークブック

PlanningApplicationTemplate_FreeForm.xlsx を使用して、フリーフォーム・ビジネス・プロセス用の複数キューブ・アプリケーション(最大 12 個の ASO キューブと BSO キューブの任意の組合せ)を作成できます。

複数キューブ・フリーフォーム・テンプレートは、単一キューブ・フリーフォーム ASO または BSO アプリケーションを作成可能にした、以前は使用可能であった 2 つのテンプレートに置き換わるものです。

次に、[アプリケーションの作成](#)に進み、[アプリケーション・テンプレートでのアーティファクトの操作](#)に記載されている情報を使用して、要件に従ってテンプレートを変更します。

ノート:

Web でのアプリケーションの作成の詳細は、ビジネス・プロセスのドキュメントを参照してください:

- *Planning の管理*の Planning アプリケーションの作成
- *フリーフォームの管理*のフリーフォーム・アプリケーションの作成
- *Planning モジュールの管理*のアプリケーションの設定

ビデオ

目的

Smart View でのアプリケーションの作成について学習します。
このビデオは Oracle Smart View for Office を使用して Planning アプリケーションを作成するプロセスを示していますが、この概念は、フリーフォームおよび Planning モジュール・ビジネス・プロセスのみでなく、Oracle Smart View for Office (Mac and Browser)にも適用されます。

視聴するビデオ



概要: Smart View を使用した Planning Cloud アプリケーションの作成および管理

アプリケーション管理のための Smart View とその管理拡張機能のインストール

この付録で説明するほとんどの手順は、[Smart View](#) でのアプリケーション管理オプションの表示の制御および [Web](#) インタフェースからのアプリケーション・テンプレート zip ファイルのダウンロードを除いて、[Smart View](#) 内で実行します。

ノート:

アプリケーション管理は、Oracle Enterprise Performance Management Cloud ビジネス・プロセス(Planning、Planning モジュールおよびフリーフォーム)に対してサポートされています。

始める前に、Windows ベースの Oracle Smart View for Office、Oracle Smart View for Office (Mac and Browser) またはその両方を使用するかどうかに応じて、次のことを確認してください:

- **Windows ベースの Smart View:** Smart View をインストールします。

Windows ベースの Smart View では、アプリケーション管理機能を使用するために管理拡張機能は必要ありません。

[Windows ベースの Oracle Smart View for Office のインストール](#) を参照してください

- **Smart View (Mac and Browser):** ディメンション・エディタのオプションを選択して、Smart View (Mac and Browser) をデプロイします。

Smart View (Mac and Browser) でアプリケーション・テンプレートを使用するには、ディメンション・エディタのオプションを選択する必要があります。

[Oracle Smart View for Office \(Mac and Browser\) とその管理拡張機能のデプロイ](#) を参照してください

Windows ベースの Oracle Smart View for Office のインストール

Smart View の Windows クライアントベースのバージョンを使用するには、Smart View をインストールする手順について [Oracle Enterprise Performance Management Cloud 管理者のためのスタート・ガイド](#) のクライアントのダウンロードおよびインストールを参照してください。

ノート:

アプリケーション管理で作業するときは、Windows ベースの Smart View では管理拡張機能は必要ありません。

インストールした後は、Smart View で使用可能な、または Web のテンプレート・ダウンロード zip ファイルから、アプリケーション・テンプレート・ワークブックをダウンロードして編集することから始めます。

- デフォルトでは、Smart View から Planning アプリケーション・ワークブック・テンプレートを直接ダウンロードできます。
- あるいは、Planning、Planning モジュールまたはフリーフォーム・ビジネス・プロセスの「ダウンロード」ページからアプリケーション・テンプレート zip ファイルをダウンロードします。テンプレート zip ファイルには、これらのビジネス・プロセスのスターター・アプリケーション・テンプレート・ワークブックとともにサンプル Planning アプリケーション・ワークブックが含まれています。

Oracle Smart View for Office (Mac and Browser)とその管理拡張機能のデプロイ

Smart View の Mac ベースまたはブラウザベースのバージョンを使用するには、ディメンション・エディタのオプションを有効にして Smart View (Mac and Browser) マニフェスト・ファイルをデプロイする必要があります。

ディメンション・エディタのオプションを有効にして Smart View (Mac and Browser) をデプロイする手順については、*Oracle Smart View for Office (Mac and Browser)* の *デプロイと管理* の次のトピックを参照してください:

- マニフェスト・ファイルの作成および保存
- 管理拡張機能の有効化
- サイドロードとログインまたは Office 365 ユーザーに対するマニフェスト・ファイルのデプロイ

Smart View でのアプリケーション管理オプションの表示の制御

Web、Oracle Smart View for Office または Oracle Smart View for Office (Mac and Browser) で新しいアプリケーションが作成されると、デフォルトですべてのアプリケーション管理オプションがいずれかのバージョンの Smart View でサービス管理者に対して表示されます。

Planning、Planning モジュールまたはフリーフォームの「**Smart View でアプリケーション管理オプションを抑制**」オプションを使用すると、「**アプリケーションの更新**」および「**アプリケーションの削除**」という 2 つのオプションの表示と非表示を切り替えることができます。

この設定と、アプリケーション管理オプションの表示は、サービス管理者にのみ適用されます。

Smart View で「**アプリケーションの更新**」および「**アプリケーションの削除**」オプションの表示を制御するには:

1. ホーム・ページで、「**アプリケーション**」をクリックし、「**設定**」をクリックします。
2. 「**Smart View でアプリケーション管理オプションを抑制**」の設定を選択します。
 - **はい**: アプリケーション・オプションは、Smart View に表示されません。
 - **いいえ**: デフォルト。アプリケーション・オプションは、Smart View に表示されます。
3. 「**保存**」をクリックします。

 ノート:

Web、Oracle Smart View for Office または Oracle Smart View for Office (Mac and Browser)のいずれであっても、新しいアプリケーションが作成されると常に、「**Smart View でアプリケーション管理オプションを抑制**」設定はデフォルトで「**いいえ**」となり、「**アプリケーションの更新**」および「**アプリケーションの削除**」オプションが自動的に表示されます。オプションを非表示にするには、前述の手順を実行してください。

アプリケーション・テンプレートのダウンロード

次も参照:

- [Smart View でのテンプレートのダウンロード](#)
- [Web インタフェースからのアプリケーション・テンプレート zip ファイルのダウンロード](#)

Smart View でのテンプレートのダウンロード

Smart View にサービス管理者としてログインすると、「テンプレートのダウンロード」コマンドが「Smart View パネル」(Windows)および「Smart View ホーム」パネル(Mac and Browser)に表示されます。

ダウンロードしたデフォルトのテンプレートをすぐに使用して、Planning アプリケーションの作成を開始できます。または、テンプレートを変更して、独自のカスタム・アプリケーションを作成することもできます。

Smart View からデフォルトのアプリケーション・テンプレートをダウンロードするには:

1. Smart View で適用可能なデータ・ソースにログインします。
2. 次のいずれかのアクションを行います:
 - 「Smart View」パネル(Windows)で、パネルの下部にある「**テンプレートのダウンロード**」コマンドをクリックします。
 - 「Smart View ホーム」パネル(Mac and Browser)で、をクリックし、ドロップダウン・メニューから「**テンプレートのダウンロード**」を選択します。

プロンプトが表示されたら、クラウド・リポジトリにファイルを作成することを許可します。

デフォルトのアプリケーション・テンプレート PlanningApplicationTemplate.xlsx が開かれます。デフォルトのテンプレートには、標準の Planning アプリケーションの作成を開始するために必要な基本要素が格納されています。

[アプリケーション・テンプレートでのアーティファクトの操作](#)の説明に従って、デフォルトのテンプレートを編集してカスタム・アプリケーションを作成することもできます。

Planning モジュール、フリーフォームまたはサンプルの Planning のテンプレートをダウンロードするには、[Web インタフェースからのアプリケーション・テンプレート zip ファイルのダウンロード](#)に示すように、Web からアプリケーション・テンプレートの zip ファイルをダウンロードします。

Web インタフェースからのアプリケーション・テンプレート zip ファイルのダウンロード

Planning、Planning モジュールまたはフリーフォームにサービス管理者としてログインすると、次のアプリケーション・テンプレート・ワークブック・ファイルが格納された zip ファイルをダウンロードできます：

- PlanningApplicationTemplate.xlsx: **Planning** アプリケーションを作成します。
- PlanningApplicationTemplate_epbcs.xlsx: **Planning** モジュール・アプリケーションを作成します。
- PlanningApplicationTemplate_FreeForm.xlsx: フリーフォーム・アプリケーションを作成します。
- PlanningApplicationTemplate_sample.xlsx: **Planning** サンプル・アプリケーション(サンプル)を作成します。

ノート:

22.03 以降、単一の Excel テンプレート・ワークブック

PlanningApplicationTemplate_FreeForm.xlsx を使用して、フリーフォーム・ビジネス・プロセス用の複数キューブ・アプリケーション(最大 12 個の ASO キューブと BSO キューブの任意の組合せ)を作成できます。

複数キューブ・フリーフォーム・テンプレートは、単一キューブ・フリーフォーム ASO または BSO アプリケーションを作成可能にした、以前は使用可能であった 2 つのテンプレートに置き換わるものです。

アプリケーション・テンプレートの zip ファイルをダウンロードするには：

1. クライアント・ソフトウェアをインストールまたはデプロイするコンピュータからビジネス・プロセス・インスタンスにアクセスします。
2. Planning、Planning モジュールまたはフリーフォームのホーム・ページで画面の右上隅のユーザー名をクリックし、「**設定およびアクション**」にアクセスします。
3. 「**ダウンロード**」を選択します。
4. **ダウンロード**・ページの「プランニング拡張機能」セクションで、**アプリケーション・テンプレートのダウンロード**をクリックします。
5. zip ファイルをローカルまたはアクセス可能なサーバー上の場所に保存し、その内容を解凍します。

次のファイルが保存されているはずですが、

- PlanningApplicationTemplate.xlsx
- PlanningApplicationTemplate_epbcs.xlsx
- PlanningApplicationTemplate_FreeForm.xlsx
- PlanningApplicationTemplate_sample.xlsx

6. 作業するテンプレート・ファイルを Excel で開いて、[アプリケーションの作成](#)に進み、[アプリケーション・テンプレートでのアーティファクトの操作](#)に記載されている情報を使用して、要件に従ってテンプレートを変更します。

アプリケーションの作成

Oracle Smart View for Office および Oracle Smart View for Office (Mac and Browser)では、サービス管理者は、ダウンロードしたテンプレートを変更せずにそのまま使用して新しいアプリケーションを作成することも、変更したテンプレートに基づいて新しいアプリケーションを作成することもできます。どちらの場合も、テンプレートがテンプレートのルールとガイドラインに準拠している必要があります。

アプリケーションを作成する際に、次の作業を行うことができます。

- キューブの定義
- ディメンションの定義
- 限られた量のデータの追加
- セキュリティおよびアクセス権限の定義
- 代替変数の定義

アプリケーションを作成できるのはサービス管理者のみで、アプリケーションがクラウド・ビジネス・プロセスに存在しない場合にかぎられます。アプリケーションを作成すると、そのオプションは「Smart View パネル」または「Smart View ホーム」パネルに表示されなくなります。

開始する前に、Excel を起動し、Smart View から、該当するデータ・ソースにログインする必要があります。

Smart View で新しいアプリケーションを作成するには:

1. 次のアクションをまだ実行していない場合、いずれかを実行します。
 - [Smart View でのテンプレートのダウンロード](#)の説明に従って、Planning のアプリケーション・テンプレートをダウンロードします。
アプリケーション・テンプレートをダウンロードすると、Smart View でテンプレートが開きます。
 - [Web インタフェースからのアプリケーション・テンプレート zip ファイルのダウンロード](#)の説明に従って、アプリケーション・テンプレート zip ファイルをダウンロードして解凍し、いずれかのテンプレート・ファイルを開きます。
 - 保存しているテンプレート・ファイルを開きます。アプリケーションを作成するには、Excel アプリケーション・テンプレート・ワークブックが開いている必要があります。
2. **オプション:** 必要に応じてアプリケーション・テンプレートを編集し、保存します。
アプリケーション・テンプレート・ワークブックのワークシートを変更する方法の詳細は、[アプリケーション・テンプレートでのアーティファクトの操作](#)を参照してください。
3. Smart View でアプリケーション・テンプレート・ワークブックを開いた状態で、「**新規アプリケーションの作成**」を選択します:
 - Oracle Smart View for Office (Windows):

「Smart View」パネルのツリーでサーバー名を選択し、パネルの下部にある「**新規アプリケーションの作成**」コマンドにアクセスします。「**新規アプリケーションの作成**」コマンドには、サーバー名を右クリックしてアクセスすることもできます。

- Oracle Smart View for Office (Mac and Browser):
「Smart View ホーム」パネルで、「アクション」ボタンをクリックし、ドロップダウン・メニューから「**新規アプリケーションの作成**」を選択します。

アプリケーションの作成ステータスが Excel の左下隅に表示されます。

4. アプリケーションの作成プロセスが完了したら、アプリケーションが「Smart View」パネル(Windows)または「Smart View ホーム」パネル(Mac and Browser)に表示されていることを確認します。

- Oracle Smart View for Office (Windows):
アプリケーション名が「Smart View」パネルのツリーに表示されます。フォルダおよびキューブを表示するには、アプリケーション名を展開します。
- Oracle Smart View for Office (Mac and Browser):
「Smart View ホーム」パネルにアプリケーション・フォルダとキューブが表示されます。アプリケーション名は表示されません。

クラウド・ビジネス・プロセスごとに 1 つのアプリケーションのみが許可されています。アプリケーションを作成すると、「**新規アプリケーションの作成**」コマンドが「アプリケーション管理」ポップアップ・ウィンドウに表示されなくなります。

これで、該当するユーザーはアプリケーションを使用できます。

次のステップには、アプリケーション・テンプレート・ワークブックの更新などがあります。アプリケーションを削除し、新しいものを作成することもできます。参照:

- [アプリケーション・テンプレートでのアーティファクトの操作](#)
- [Smart View でのアプリケーションの更新](#)
- [アプリケーションの削除](#)

アプリケーション・テンプレートでのアーティファクトの操作

次も参照:

- [アプリケーション・テンプレートでのアーティファクトの操作について](#)
- [アプリケーションの定義](#)
- [ディメンションの定義](#)
- [属性ディメンションの定義](#)
- [データの定義](#)
- [代替変数の定義](#)
- [セキュリティの定義](#)
- [拡張設定の定義](#)

アプリケーション・テンプレートでのアーティファクトの操作について

アプリケーション・テンプレートを編集する際には、アプリケーション・ワークブックで Excel ワークシートを編集することになります。

アプリケーション・テンプレート・ワークブックには、アプリケーション・プロパティ、キューブ、ディメンションとメンバーのプロパティ、代替変数およびセキュリティを定義するためのシートが含まれています。テンプレートを使用してデータをロードすることもできます。

アプリケーションの定義

アプリケーション・テンプレート・ワークブックで、定義ワークシートを使用してアプリケーションおよびキューブを定義します。テンプレート zip ファイルに含まれているアプリケーション定義ワークシートを開始点として使用して、含まれているワークシートを要件に合うように編集できます。また、サンプル・アプリケーションのテンプレート・ファイルは、標準アプリケーションのガイドラインとして使用したり、調整して Planning モジュール・アプリケーションまたはフリーフォーム・アプリケーションを作成することもできます。

アプリケーション・テンプレート・ワークブックでデータ・ワークシートを設定する際には、次のワークフローに従います。

1. ワークシート名の定義
2. ワークシート・タイプの定義
3. アプリケーション・プロパティの定義
4. キューブの定義

ワークシート名の定義

ワークシート名は Excel のワークシート・タブに表示されます。ワークブックの最初のタブはアプリケーション定義ワークシート用です。アプリケーション定義ワークシートに「Definition」という名前を付けます。例:



ワークシート・タイプの定義

アプリケーション・ワークシートのセル A1 にワークシート・タイプとしてアプリケーション定義と入力します。図 1 では、セル A1 にアプリケーション定義というワークシート・タイプが入力されています。

図 C-1 アプリケーション定義ワークシートに表示されたワークシート・タイプとアプリケーション・プロパティ

	A	B
1	Application Definition	
2		
3	Application Name	PBCS
4	Description	PBCS Standard Application
5	Application Type	Standard
6	Planning Frequency	Monthly
7	Start Year	2010
8	End Year	2019
9	First Month of Fiscal Year	January
10	Weekly Distribution	Even
11	Main Currency	USD
12	Multi Currency	No
13	Multi Currency Type	Standard
14	Sandboxes	Yes
15	Task Flow Type	EPM Task Manager

アプリケーション・プロパティの定義

アプリケーション・プロパティは、アプリケーションを作成するために必要な基本情報です。一般に、必須プロパティは「アプリケーション名」、「アプリケーションの説明」および「アプリケーション・タイプ」のみです。その他のプロパティについては、指定しなければ、アプリケーションの作成時にデフォルト値が入力されます。

ノート:

フリーフォーム・アプリケーションは、ワークブックのディメンション、属性ディメンション、セキュリティ(アクセス権限)または代替変数を使用せずに、アプリケーション・プロパティのみで作成できます。

表 1 に、サポートされているプロパティ、デフォルト値および有効な値を示します。

表 C-1 アプリケーション・プロパティ

プロパティ	必須	値のタイプ	デフォルト値	有効な値	コメント
アプリケーション名	はい	テキスト			Planning アプリケーションの名前
説明	はい	テキスト			アプリケーションの説明

表 C-1 (続き) アプリケーション・プロパティ

プロパティ	必須	値のタイプ	デフォルト値	有効な値	コメント
アプリケーション・タイプ	はい	テキスト	標準	標準: 最初は 2 つのキューブで構成され、必要に応じて後で追加できる拡張アプリケーション Enterprise: EPBCS 拡張とも呼ばれます フリーフォーム: フリーフォーム・アプリケーション	Web インタフェース上の選択肢と類似
プランニング頻度	いいえ	テキスト	月次	月次 週次 四半期ごと カスタム	
週次配分	いいえ	テキスト	445	均等 445 454 544	「プランニング頻度」が「月次」の場合にのみ該当
年間の期間	いいえ	数値	13		「プランニング頻度」が「カスタム」の場合のみ
接頭辞	いいえ	テキスト	TP		「プランニング頻度」が「カスタム」の場合のみ
開始年	いいえ	数値	2010		4 桁の年
終了年	いいえ	数値	2019		4 桁の年 (開始年 + 年数 + 1)として計算
会計年度の最初の月	いいえ	テキスト	1 月	1-12 月	「プランニング頻度」が「月次」の場合のみ
最初の会計年度の開始日	いいえ	日付			「プランニング頻度」が「四半期ごと」または「カスタム」の場合のみ
ローリング予測	いいえ	ブール	はい	True False はい いいえ	月次カレンダーの場合のみ
ローリング予測期間	いいえ	数値	6	1-36	「ローリング予測」が「True」の場合のみ

表 C-1 (続き) アプリケーション・プロパティ

プロパティ	必須	値のタイプ	デフォルト値	有効な値	コメント
タスク・フロー・タイプ	いいえ	テキスト	EPM Task Manager	EPM Task Manager タスク・リスト	エントリが見つからない、または正しく型が設定されていない場合は、デフォルトで EPM Task Manager になります。 ノート: このオプションは、FreeForm アプリケーションには適用されません。

キューブの定義

アプリケーション・ワークシートでは、アプリケーション・プロパティの定義に使用するシートと同じシートにすべてのキューブがリストされます。

アプリケーション・ワークシートでキューブを定義するには、アプリケーション定義セクションの後に「キューブ」というラベルの行を追加します。たとえば、表 2 では、「キューブ」という行がワークシートの行 18 に追加されています。

次の行で、列 A に「名前」というラベルを追加し、列 B に「タイプ」というラベルを追加します。

図 C-2 アプリケーション定義ワークシートのキューブ定義セクション

	A	B
18	Cubes	
19	Name	Type
20	Plan1	
21	Plan2	
22	Plan3	
23	VisASO	ASO
24	Vis1ASO	ASO

表 2 に、キューブ定義に関連するプロパティを示します。キューブ名のみが必須です。「タイプ」列では、「BSO」または「ASO」を使用します。「タイプ」を空白のままにした場合は、「BSO」がデフォルトで使用されることに留意してください。

すべてのアプリケーション・タイプ、Planning、Planning モジュールおよびフリーフォームで、複数キューブおよび BSO キューブと ASO キューブの任意の組合せをサポートしています。

表 C-2 キューブ・プロパティ

ヘッダー名	必須	コメント
名前	はい	キューブの名前
タイプ	BSO ASO	「BSO」がデフォルトです。セルを空白のままにした場合は、「BSO」が使用されます

ディメンションの定義

テンプレート・ワークブックで、アプリケーションのディメンションごとに新しいワークシートを作成します。サンプル・アプリケーションのテンプレートを含め、テンプレートで提供されているワークシートをガイドとして使用できます。

アプリケーション・テンプレート・ワークブックでディメンション・ワークシートを設定する際には、次のワークフローに従います。

1. ワークシート名の定義
2. ワークシート・タイプの定義
3. ディメンション名の定義
4. ディメンション・プロパティの定義
5. メンバーの定義

ワークシート名の定義

Excel のワークシート・タブでワークシート名を定義します。ディメンション・ワークシート名には、ディメンション名に「Dim.」という接頭辞を付けたものを使用します。たとえば、「Scenario」というディメンションの場合、ワークシートに「Dim.Scenario」という名前を付けます。例:



ワークシート・タイプの定義

ディメンション・ワークシートのセル A1 にワークシート・タイプとして「ディメンション」と入力します。図 1 では、セル A1 に「ディメンション」というワークシート・タイプが入力されています。

図 C-3 アプリケーション・テンプレートのディメンション・ワークシートに表示されたワークシート・タイプとディメンション名

	A	B
1	Dimension	
2		
3	Name	Scenario

ディメンション名の定義

ディメンション・ワークシートで、ディメンション名を入力します。図 1 では、セル B3 に「Scenario」というディメンション名が入力されています。

入力したディメンション名が存在しない場合は、アプリケーションの作成時に新しいカスタム・タイプのディメンションが自動的に作成されます。

ディメンション・プロパティの定義

ディメンション・ワークシートでディメンション・プロパティを直接定義できます。「タイプ」プロパティを使用して、勘定科目、年およびエンティティ・ディメンションのユーザー定義名を指定し、それらを「勘定科目」、「年」または「エンティティ」ディメンション・タイプにマップできます。必要に応じて、他のカスタム・ディメンションを定義することもできます。テンプレート zip ファイルのテンプレートには、勘定科目、年およびカスタム・ディメンションの例とそれらのプロパティがガイドとして含まれています。

ノート:

フリーフォーム・アプリケーションは、ワークブックのディメンションまたはその他のアプリケーション・プロパティ(属性ディメンション、セキュリティ(アクセス権限)、代替変数など)なしで作成できます。

表 C-3 ディメンション・プロパティ

プロパティ	必須	値のタイプ	デフォルト値	有効な値	コメント
名前	はい	テキスト			ディメンションの名前
タイプ	いいえ	テキスト		勘定科目 期間 エンティティ	このプロパティを省略した場合、つまり値を指定しなかった場合、このディメンションはカスタム・ディメンションとして解釈されます。

表 C-3 (続き) デイメンション・プロパティ

プロパティ	必須	値のタイプ	デフォルト値	有効な値	コメント
説明	いいえ	テキスト			オプションの デイメンシ ョンの説明。
別名	いいえ	テキスト	なし	デイメンシ ョンの別名	別名は、デイ メンシ ョン・メン バーの代替名 です。
別名表	いいえ	テキスト	いいえ	別名表	アプリケー ションのデフ ォルトの別名表。
階層タイプ	いいえ	テキスト	設定しない	設定しない 保管済 動的 複数	集約ストレ ージ・キューブに バインドされ たデイメンシ ョンに使用で きます。集約 ストレージ・デ イメンシ ョンは、複数階層を サポートする ために自動的 に有効になり ます。複数階 層のデイメン シ ョンの最初 の階層は「保管 済」である必要 があります。
密度	いいえ	ブール	疎	密 疎	疎デイメンシ ョンには、メン バーの組合せ の多くにデー タ値が存在し ません。密デ イメンシ ョンには、メン バーの組合せの多 くにデータ値 が存在します。
2パス計算	いいえ	ブール	いいえ	はい いいえ	親メンバーま たは他のメン バーの値に基 づいてメンバ ーの値を再計 算します。「動 的計算」または 「動的計算およ び保管」プロパ ティで、勘定科 目とエンティ ティ・メンバー に使用できま す。

表 C-3 (続き) ディメンション・プロパティ

プロパティ	必須	値のタイプ	デフォルト値	有効な値	コメント
セキュリティの適用	いいえ	ブール	いいえ	はい いいえ	アプリケーション・テンプレートのセキュリティ・ワークシートに示されているセキュリティに従って、ディメンション・メンバーにセキュリティを設定することを許可します。
部分的共有	いいえ	ブール	いいえ	はい いいえ	エンティティ・ディメンションでは代替階層がサポートされています。1つのエンティティに複数の親を含むことができ、各親に別々にコントリビューションできます。このようなメンバーは部分共有エンティティと呼ばれ、エンティティのすべてのインスタンス間で入力データの一部のみが共有されます。
データ・ストレージ	いいえ	テキスト	保管	動的計算および保管 動的計算 保管 共有しない 共有 ラベルのみ	「データ・ストレージ」プロパティでは、連結が格納される場所と時期が定義されます。たとえば、デフォルトでは、メンバーは「保管」としてタグ付けされます。
パフォーマンス順	いいえ	数値	なし	正数または負数。たとえば: 1 -1	アプリケーションにおけるディメンションの評価順序。

表 C-3 (続き) ディメンション・プロパティ

プロパティ	必須	値のタイプ	デフォルト値	有効な値	コメント
評価順序	いいえ	数値	なし	正数または負数。たとえば: 1 -1	ディメンションの順序により、データ計算がどのように実行されるかが決定されます。「評価順」で、データ交差にデータ型の競合がある場合に優先されるデータ型を指定できます。
表示オプション	いいえ	テキスト	メンバー名または別名	「メンバー名または別名」 では、メンバー名または別名が表示されます。 「メンバー名:別名」 では、左側にメンバーが表示され、右側に別名が表示されます。 「別名:メンバー名」 では、左側に別名が表示され、右側にメンバーが表示されます。	アプリケーションのデフォルトの表示オプションを設定します。

メンバーの定義

ディメンション・ワークシートで、「Members」という見出し(Planning アプリケーション・テンプレートのセル A5)の下に、メンバーとそのプロパティを追加します。メンバーのリストは、[データとメタデータのインポートおよびエクスポート](#)に記載のフォーマットに準拠している必要があります。必須プロパティの場合にかぎり、列を追加できます。欠落しているプロパティは、アプリケーション、キューブおよびディメンションのデフォルトに基づいて追加されます。

図 C-4 標準 Planning アプリケーションの「Scenario」ディメンションのディメンション・ワークシートの例

Member Name	Data Storage	Two Pass Calculation	Formula	Data Type	Hierarchy Type	Process Management Enabled	Start Year	Include BegBal
Variance	never share	FALSE	<none>	unspecified	none	TRUE	FY10	FALSE
Variance Comments	never share	FALSE	<none>	unspecified	none	TRUE	FY10	FALSE
Current	store	FALSE	<none>	unspecified	stored	TRUE	FY10	FALSE
No Scenario	store	FALSE	<none>	unspecified	stored	FALSE	FY10	TRUE
Actual	store	FALSE	<none>	unspecified	stored	TRUE	FY10	TRUE
Plan	store	FALSE	<none>	unspecified	stored	TRUE	FY14	TRUE
Adj Plan	store	FALSE	<none>	unspecified	stored	TRUE	FY14	TRUE
Revised Plan	store	FALSE	<none>	unspecified	stored	TRUE	FY14	FALSE
Forecast	store	FALSE	<none>	unspecified	stored	TRUE	FY14	TRUE
Act vs Plan	store	FALSE	<none>	unspecified	stored	FALSE	FY10	FALSE
Act vs Plan %	store	FALSE	<none>	percentage	stored	FALSE	FY10	FALSE
Act vs Forecast	store	FALSE	<none>	unspecified	stored	FALSE	FY10	FALSE
Forecast vs Plan	store	FALSE	<none>	unspecified	stored	FALSE	FY10	FALSE
Plan Adj %	store	FALSE	<none>	percentage	stored	FALSE	FY14	FALSE

属性ディメンションの定義

テンプレート・ワークブックで、アプリケーションの属性ディメンションごとに新しいワークシートを作成します。Vision アプリケーションのテンプレートに含まれている属性ディメンション・ワークシートをガイドラインとして使用できます。

アプリケーション・テンプレート・ワークブックで属性ディメンション・ワークシートを設定する際には、次のワークフローに従います。

1. ワークシート名の定義
2. ワークシート・タイプの定義
3. 属性ディメンション名の定義
4. 属性ディメンション・タイプの定義
5. 基本ディメンションの定義
6. 属性メンバーの定義

ワークシート名の定義

Excel のワークシート・タブでワークシート名を定義します。ワークシート名には、ディメンション名に「Attribute.」という接頭辞を付けたものを使用します。たとえば、「Location」という属性ディメンションの場合、ワークシートに「Attribute.Location」という名前を付けます。例:



ワークシート・タイプの定義

属性ディメンション・ワークシートのセル A1 にワークシート・タイプとして「属性」と入力します。図 1 では、セル A1 に「属性」というワークシート・タイプが入力されています。

図 C-5 アプリケーション・テンプレートの属性ディメンション・ワークシートに表示されたワークシート・タイプと属性ディメンション・プロパティ

	A	B
1	Attribute	
2		
3	Name	Location
4	Type	Text
5	Base Dimension	Entity

属性ディメンション名の定義

属性ディメンション・ワークシートで、ディメンション名を入力します。図 1 では、セル B3 に「Location」という属性ディメンション名が入力されています。

属性ディメンション・タイプの定義

属性ディメンション・ワークシートで、属性ディメンション・タイプを入力します。図 1 では、セル B4 に「テキスト」という属性ディメンション・タイプが入力されています。

有効な属性ディメンション・タイプは次のとおりです。

- テキスト
- 数値
- ブール
- 日付

基本ディメンションの定義

属性ディメンション・ワークシートで、属性ディメンションの基本ディメンションを入力します。図 1 では、セル B5 に「エンティティ」という基本ディメンションが入力されています。

属性メンバーの定義

ディメンション・ワークシートで、セル A5 の「メンバー」という見出しの下に、属性名とそのプロパティを追加します。属性メンバーのリストは、[データとメタデータのインポートおよびエクスポート](#)に記載のフォーマットに準拠している必要があります。必須プロパティの場合にかぎり、列を追加できます。欠落しているプロパティは、アプリケーション、キューブおよびディメンションのデフォルトに基づいて追加されます。

データの定義

アプリケーション作成テンプレートを使用すると、最大 1,000 行のデータを Essbase データ・フォーマットでロードできます。

テンプレート・ワークブックで、サンプル・アプリケーションのテンプレートに含まれているデータ・ワークシートをガイドラインとして使用して、アプリケーション・データ用のワークシートを作成します。または、テンプレートに含まれているワークシートを編集します。

アプリケーション・テンプレート・ワークブックでデータ・ワークシートを設定する際には、次のワークフローに従います。

1. ワークシート名の定義
2. ワークシート・タイプの定義
3. キューブ名の定義
4. データの定義

ワークシート名の定義

Excel のワークシート・タブでワークシート名を定義します。ワークシート名には、データのロード先キューブ名に「Data.」という接頭辞を付けたものを使用します。たとえば、「Plan1」というキューブにデータをロードする場合は、それがわかるようにワークシートに「Data.Plan1」という名前を付けます。「Data.」という必須の接頭辞の後に、データの識別に役立つその他のインジケータを追加することもできます。たとえば、Plan1 に実際のデータと履歴データの比較をロードする場合は、ワークシートに「Data.Plan1.Actual」という名前を付けます。



ワークシート・タイプの定義

データ・ワークシートのセル A1 に「キューブ」と入力し、このシートのデータをキューブにロードすることを示します。図 1 では、このワークシートにキューブにロードするデータが含まれていることを示すために、セル A1 に「キューブ」と入力されています。

図 C-6 アプリケーション・テンプレートのデータ・ワークシートに表示されたワークシート・タイプとキューブ名

	A	B
1	Cube	
2		
3	Name	Plan1

キューブ名の定義

データ・ワークシートで、データのロード先キューブの名前を入力します。図 1 では、セル B3 に「Plan1」というキューブ名が入力されています。

データの定義

データを Essbase 列型フォーマットで定義します。各メンバー交差のヘッダーには「ディメンション」を使用します。

代替変数の定義

アプリケーション・テンプレート・ワークブックで、サンプル・アプリケーションのテンプレートに含まれている代替変数定義ワークシートをガイドラインとして使用して、代替変数用のワークシートを追加します。

代替変数は、標準アプリケーション、Enterprise アプリケーションおよびフリーフォーム・アプリケーションについて定義できます。

アプリケーション・テンプレート・ワークブックで代替変数ワークシートを設定する際には、次のワークフローに従います。

1. ワークシート名の定義
2. ワークシート・タイプの定義
3. 代替変数の定義

ワークシート名の定義

Excel のワークシート・タブでワークシート名を定義します。代替変数定義ワークシートに「Variables」という名前を付けます。例:



ワークシート・タイプの定義

データ・ワークシートのセル A1 に「代替変数」と入力し、このシートデータをキューブにロードすることを示します。図 1 では、このワークシートにアプリケーションの特定のキューブにロードする代替変数情報が含まれていることを示すために、セル A1 に「代替変数」と入力されています。

図 C-7 アプリケーション・テンプレートの変数ワークシートに表示されたワークシート・タイプと代替変数

	A	B	C
1	Substitution Variables		
2			
3	Cube	Name	Value
4	All Cubes	CurrYr	FY12
5	Plan3	CurrYr	FY11
6	Plan2	NextYr	FY13
7	All Cubes	CurVersion	Working

代替変数の定義

変数ワークシートで、[図 1](#) を参考にして、各代替変数の情報を次のフォーマットで追加します。

- 「**キューブ**」列には、代替変数を適用するキューブの名前を入力します。例:
 - 変数をすべてのキューブに適用する場合は、「すべてのキューブ」と入力します
 - 変数を特定のキューブに適用する場合は、「Plan3」のように、該当するキューブ名を入力します
 - 変数をすべてのキューブではないものの複数のキューブに適用する場合は、各キューブ名を 1 行ずつ個別にリストします。たとえば、変数を **Plan2** と **Plan3** の 2 つに適用する場合は、「Plan2」のエントリと「Plan3」のエントリをそれぞれ別の行に追加します。
- 「**名前**」列には、代替変数名を入力します。[図 1](#) では、代替変数名は「CurrYr」、「NextYr」および「CurVersion」です。
- 「**値**」列には、代替変数に使用する値を入力します。

セキュリティの定義

アプリケーション・テンプレート・ワークブックで、Vision アプリケーションのテンプレートに含まれているセキュリティ定義ワークシートをガイドラインとして使用して、ユーザー権限用のワークシートを追加します。

アプリケーション・テンプレート・ワークブックでユーザー権限ワークシートを設定する際には、次のワークフローに従います。

1. [ワークシート名の定義](#)
2. [ワークシート・タイプの定義](#)
3. [セキュリティ・プロパティの定義](#)

ワークシート名の定義

Excel のワークシート・タブでワークシート名を定義します。ユーザー権限を定義するセキュリティ・ワークシートに「Security」という名前を付けます。例:



ワークシート・タイプの定義

データ・ワークシートのセル A1 に「セキュリティ」と入力し、このシートのデータをキューブにロードすることを示します。図 1 では、このワークシートにアプリケーションに対するすべてのユーザー・アクセス権限がリストされることを示すために、セル A1 に「セキュリティ」と入力されています。

図 C-8 アプリケーション・テンプレートのセキュリティ・ワークシートに表示されたワークシート・タイプ

	A	B	C	D	E
1	Security				
2					
3	Name	Object Name	Access Mode	Flag	Object Type

セキュリティ・プロパティの定義

セキュリティ・プロパティには、ユーザー名とその他のユーザー・アクセス情報が含まれません。

表 1 に、サポートされているセキュリティ・プロパティを示します。

表 C-4 セキュリティ・プロパティ

プロパティ名	説明
名前	ユーザーまたはグループの名前
オブジェクト名	アーティファクト名
アクセス・モード	付与されている権限。デフォルトは NONE です。有効な値: <ul style="list-style-type: none"> • READ • WRITE • READWRITE • LAUNCH (オブジェクト・タイプがルールの場合に有効) • NOLAUNCH (オブジェクト・タイプがルールの場合に有効) • NONE: デフォルト

表 C-4 (続き) セキュリティ・プロパティ

プロパティ名	説明
フラグ	<p>アクセスの適用時に使用されるメンバー関数デフォルトは MEMBER です。有効な値:</p> <ul style="list-style-type: none"> • MEMBER: デフォルト • CHILDREN • @CHILDREN • @DESCENDANTS • @IDESCENDANTS
オブジェクト・タイプ	<p>アーティファクトのオブジェクト・タイプ。デフォルトは SL_DIMENSION (ディメンション/メンバー)です。有効な値:</p> <ul style="list-style-type: none"> • SL_FORM - フォーム • SL_COMPOSITE - 複合フォーム、インフォレットまたはダッシュボード • SL_TASKLIST - タスク・リスト • SL_CALCRULE - ルール • SL_FORMFOLDER - フォーム・フォルダ • SL_CALCFCOLDER - ルール・フォルダ • SL_DIMENSION - ディメンション/メンバー: デフォルト • SL_CALCTEMPLATE - テンプレート • SL_REPORT - 管理レポート • SL_REPORTSSHOT - 管理レポートのスナップショット

拡張設定の定義

アプリケーション・テンプレート・ワークブックで、サンプル・アプリケーションのテンプレートに含まれている拡張設定ワークシートをガイドラインとして使用して、拡張設定用のワークシートを追加します。

拡張設定には次のとおりです:

- 評価順序
- パフォーマンス設定
- ディメンション・プロパティ (階層タイプ、2 パス計算、データ・ストレージ・オプションなど)
- 密度(集約ストレージ・アプリケーションの場合のみ)
- キューブへのディメンションの割当て

アプリケーション・テンプレート・ワークブックで拡張設定ワークシートを設定する際には、次のワークフローに従います。

1. ワークシート名の定義
2. ワークシート名の定義
3. 評価順の定義
4. パフォーマンス設定の定義
5. ディメンション設定の定義
6. 密度設定の定義

7. キューブへのディメンションの割当て

ワークシート名の定義

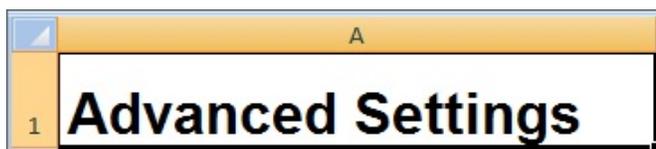
拡張設定定義ワークシートに「Advanced Settings」という名前を付けます。例:



ワークシート・タイプの定義

データ・ワークシートのセル A1 に「拡張設定」と入力し、このシートにアプリケーションの拡張設定、つまりその他の設定が含まれていることを示します。図 1 では、このワークシートにアプリケーションの拡張設定が含まれていることを示すために、セル A1 に「**拡張設定**」というワークシート・タイプが入力されています。

図 C-9 アプリケーション・テンプレートの拡張設定ワークシートに表示されたワークシート・タイプ



評価順の定義

拡張設定ワークシートの「評価順」セクションでは、ディメンションの評価順を定義します。ディメンションは、「ディメンション」という見出しの最初の列にリストされます。後続列にはキューブがリストされます。ディメンションの評価順はキューブごとに変えることができます。

3	Evaluation Order	Cubes	
4	Dimensions	Plan1	PBCS
5	Account	3	
6	Period		
7	Entity	1	
8	Year		
9	Scenario	2	
10	Version	1	
11	HSP_View		

パフォーマンス設定の定義

Planning アプリケーションのみが対象です。

拡張設定ワークシートの「パフォーマンス設定」セクションでは、各キューブの各ディメンションのディメンション・ストレージ・プロパティを定義します。有効な値は「密」または「疎」です。各キューブには少なくとも 1 つの密なディメンションが必要です。ディメンシ

ンは、「ディメンション」という見出しの最初の列にリストされます。後続列にはキューブがリストされます。各ディメンションの疎または密の値はキューブごとに変えることができます。

14	Performance Setting	Cubes				
15	Dimensions	Plan1	Plan2	Plan3	VisASO	Vis1ASO
16	Account	Dense	Dense	Dense	Dense	Dense
17	Period	Dense	Dense	Dense	Dense	Dense
18	Entity	Sparse	Sparse	Sparse	Sparse	Sparse
19	Year	Sparse	Sparse	Sparse	Sparse	Sparse
20	Scenario	Sparse	Sparse	Sparse	Sparse	Sparse
21	Version	Sparse	Sparse	Sparse	Sparse	Sparse
22	HSP_View	Sparse	Sparse	Sparse	Sparse	Sparse

ディメンション設定の定義

拡張設定ワークシートの「ディメンション設定」セクションでは、ディメンション・プロパティを定義します。ディメンションは、「ディメンション」という見出しの最初の列にリストされます。後続列にはディメンション・プロパティがリストされます。ディメンション・プロパティのリストは、表 1 を参照してください

表 C-5 拡張設定ワークシートの「ディメンション設定」セクションで使用されているディメンション・プロパティ

ディメンション・プロパティ	説明または有効な値
説明	オプションの説明テキスト
別名表	オプションの別名表
階層タイプ	<ul style="list-style-type: none"> 動的 保管
2パス計算	はい いいえ
セキュリティの適用	はい いいえ
データ・ストレージ	<ul style="list-style-type: none"> 保管 動的計算および保管 動的計算 共有しない ラベルのみ 共有
表示オプション	<p>「メンバー選択」ダイアログ・ボックスのアプリケーションのデフォルト表示オプションを設定します。メンバーまたは別名を表示するには、「メンバー名」または「別名」を選択します。「メンバー名:別名」では、左側にメンバーが表示され、右側に別名が表示されます。「別名:メンバー名」では、左側に別名が表示され、右側にメンバーが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> メンバー名 別名 メンバー名:別名 別名:メンバー名

「ディメンション設定」セクションに情報を追加する際には、図 2 も参考にしてください。

図 C-10 拡張設定ワークシートの「ディメンション設定」セクション

25	Dimension Settings							
26	Properties	Description	Alias Table	Hierarchy Type	Two Pass Calculation	Apply Security	Data Storage	Display Option
27	Account							
28	Entity				Yes		Never Share	
29	Period			Dynamic				
30	Year							
31	Scenario							
32	Version							

密度設定の定義

Planning モジュール・アプリケーションのみが対象です。

拡張設定ワークシートの「密度」セクションでは、各キューブの各ディメンションのディメンション・ストレージ・プロパティを定義します。各キューブには少なくとも 1 つの密なディメンションが必要です。ディメンションは、「ディメンション」という見出しの最初の列にリストされます。後続列にはキューブがリストされます。各ディメンションの疎または密の値はキューブごとに変えることができます。

25	Density	Cubes	
26	Dimensions	Plan1	EPBCS
27	Account	Dense	Dense
28	Currency	Sparse	Sparse
29	Entity	Sparse	Sparse
30	HSP_View	Sparse	Sparse
31	Period	Dense	Dense
32	Scenario	Sparse	Sparse
33	Version	Sparse	Sparse
34	Years	Sparse	Sparse

キューブへのディメンションの割当て

拡張設定ワークシートのディメンション有効セクションでは、キューブにディメンションを割り当てます。ディメンションは、「ディメンション」という見出しの最初の列にリストされます。後続列にはキューブがリストされます。

各ディメンションとキューブの交差部では:

- キューブにディメンションを追加するには、「はい」と入力します。
- キューブからディメンションを除外するには、「いいえ」と入力するか、セルを空白のままにします。

35	Dimension Valid For	Cubes				
36	Dimensions	Plan1	Plan2	Plan3	VisASO	Vis1ASO
37	Account	Yes	Yes	Yes	Yes	Yes
38	Entity	Yes	Yes	Yes	Yes	Yes
39	Period	Yes	Yes	Yes	Yes	
40	Year	Yes	Yes	Yes	Yes	
41	Scenario	Yes	Yes	Yes		
42	Version	Yes	Yes	Yes		

Smart View でのアプリケーションの更新

Oracle Smart View for Office および Oracle Smart View for Office (Mac and Browser) から、サービス管理者は、ダウンロードしたテンプレート、またはテンプレートのいずれかをコピーして変更したものをベースに **Planning**、**Planning** モジュールまたはフリーフォーム・アプリケーションを更新できます。変更したテンプレートは、必ずテンプレート・ガイドライン(アプリケーション・テンプレートでのアーティファクトの操作に記載)に準拠している必要があります。

アプリケーションを更新する際には、次の作業を行うことができます。

- 新しいディメンションの定義または既存のディメンションの変更
- 限られた量のデータの追加または変更
- 新しいアクセス権限の定義または既存のアクセス権限の変更
- 新しい代替変数の定義または既存の代替変数の変更
- 拡張アプリケーション設定の変更

アプリケーションを更新できるのはサービス管理者のみです。

開始する前に、Excel を起動し、Smart View から、該当するデータ・ソースにログインする必要があります。

Smart View でアプリケーションを更新するには:

1. 変更したアプリケーション・テンプレート・ファイルをまだ開いていない場合は開きます。
2. 「Smart View」パネル(Windows)または「Smart View ホーム」パネル(Mac and Browser)で、タスクを実行します:
 - Oracle Smart View for Office: アプリケーション名を選択し、「アクション」パネルで、「**アプリケーション管理**」を選択します。
アプリケーション名が「Smart View」パネルのツリーに表示されます。
 - Oracle Smart View for Office (Mac and Browser): 「Smart View ホーム」パネルで、「アクション」ボタンをクリックし、ドロップダウン・リストで「**アプリケーション管理**」コマンドを選択します。
「アクション」ボタンは、ライブラリ・ツリーのいずれのフォルダからもクリックできます。
3. ポップアップ・ダイアログで、「**アプリケーションの更新**」を選択します。
アプリケーションの更新ステータスが Excel の左下隅に表示されます。

4. アプリケーションの更新プロセスが完了したら、**Web** アプリケーションまたは **Smart View** のいずれかでアプリケーションにアクセスし、変更を確認します。

アプリケーションの削除

サービス管理者は、**Oracle Smart View for Office** および **Oracle Smart View for Office (Mac and Browser)** からアプリケーションを削除できます。

開始する前に、**Excel** を起動し、**Smart View** から、該当するデータ・ソースにログインする必要があります。

Smart View からアプリケーションを削除するには:

1. 「**Smart View**」パネル(**Windows**)または「**Smart View ホーム**」パネル(**Mac and Browser**)で、タスクを実行します:
 - **Oracle Smart View for Office**: アプリケーション名を選択し、「アクション」パネルで、「**アプリケーション管理**」を選択します。
アプリケーション名が「**Smart View**」パネルのツリーに表示されます。
 - **Oracle Smart View for Office (Mac and Browser)**: 「**Smart View ホーム**」パネルで、「アクション」ボタンをクリックし、ドロップダウン・リストで「**アプリケーション管理**」コマンドを選択します。
「アクション」ボタンは、ライブラリ・ツリーのいずれのフォルダからもクリックできます。
2. ポップアップ・ダイアログで、「**アプリケーションの削除**」を選択し、後続のダイアログで確認します。
3. 「**Smart View**」パネル(**Windows**)または「**Smart View ホーム**」パネル(**Mac and Browser**)で、アプリケーションが削除されたことを確認します。

プランニング管理拡張機能と Office のオートコレクト

ノート:

このトピックの情報は、**Windows** ベースのバージョンの **Oracle Smart View for Office** のプランニング管理拡張機能に適用されます。**Oracle Smart View for Office (Mac and Browser)** のプランニング管理拡張機能には適用されません。

Windows ベースのバージョンの **Excel** のプランニング管理拡張機能では、**Office** のオートコレクトが **Smart View** でのメンバーの編集に影響する場合があります。

メンバー・プロパティ (**Text** データ型のメンバー名、メンバーの説明、別名、メンバー式など)を編集するとき、次の例のように最初の 2 文字が大文字の名前が生成されることがあります。

DGreen

Excel では、次の例のように名前の最初の 1 文字が大文字になるようにオートコレクトされます。

Dgreen

Excel では、「オートコレクト」オプションを設定すると、名前の最初の 2 文字を大文字にしておくことができます。

名前の最初の 2 文字を大文字にしておくには:

1. Excel で、「**Excel のオプション**」ダイアログにアクセスします。
2. 「**文章校正**」を選択して、「**オートコレクトのオプション**」ボタンをクリックします。
3. 「**オートコレクト**」ダイアログで、「**2 文字目を小文字にする**」チェックボックスをクリアします。
4. 「**OK**」をクリックして「**オートコレクト**」ダイアログを閉じ、「**OK**」をクリックして「**Excel のオプション**」ダイアログを閉じます。

変更はすぐに有効になります。Excel を再起動する必要はありません。

D

Smart View を使用したアプリケーション・メタデータのインポートおよび編集

次も参照:

- [Smart View を使用したアプリケーション・メタデータの操作について](#)
- [ディメンションの編集のための Smart View とその管理拡張機能のインストール](#)
- [Smart View グリッドを使用したアプリケーション・メタデータのインポートおよび編集](#)
- [Smart View でのディメンションのインポート](#)
- [Smart View でのメンバーの編集](#)
- [Smart View でのアプリケーション・メンバーの追加](#)
- [Smart View でのメンバーの移動](#)
- [属性ディメンションの操作](#)
- [Smart View での共有メンバーの指定](#)
- [データベースのリフレッシュ](#)
- [プランニング管理拡張機能と Office のオートコレクト](#)

Smart View を使用したアプリケーション・メタデータの操作について

適用対象: Enterprise Profitability and Cost Management、Financial Consolidation and Close、フリーフォーム、Planning、Planning モジュール、Tax Reporting

サービス管理者は、プランニング管理拡張機能と Oracle Smart View for Office を使用してディメンションおよびメンバーのメタデータをすばやくインポートおよび編集できます。

ノート:

この付録で説明するすべての手順は、Smart View アプリケーション内で、プランニング管理拡張機能を使用して実行します。

- Smart View の Windows クライアントベースのバージョンを使用するには、拡張機能をインストールする手順について *Oracle Enterprise Performance Management Cloud 管理者スタート・ガイド*を参照してください。
- Oracle Smart View for Office (Mac and Browser)の Mac ベースまたはブラウザベースのバージョンを使用するには、拡張機能をデプロイする手順について *Oracle Smart View for Office (Mac and Browser)のデプロイと管理*を参照してください。

ディメンションの編集のための Smart View とその管理拡張機能のインストール

Oracle Smart View for Office でディメンションの編集を開始する前に、Windows ベースの Smart View または Oracle Smart View for Office (Mac and Browser)、あるいはその両方のどれを使用する予定があるかに応じて、次のことを実行してください:

- **Windows ベースの Smart View** Smart View およびプランニング管理拡張機能をインストールします。

[Oracle Smart View for Office およびプランニング管理拡張機能のインストール](#)を参照してください

- **Smart View (Mac and Browser):** ディメンション・エディタのオプションを有効にして、Smart View (Mac and Browser)をデプロイします。

[Oracle Smart View for Office \(Mac and Browser\)とその管理拡張機能のデプロイ](#)を参照してください

Oracle Smart View for Office およびプランニング管理拡張機能のインストール

Smart View の Windows クライアントベースのバージョンを使用するには、Smart View をインストールする手順について *Oracle Enterprise Performance Management Cloud 管理者スタート・ガイド*のクライアントのダウンロードおよびインストールを参照してください。

次に、管理拡張機能をインストールします。

Note:

22.07 より前は、管理拡張機能ファイルは MSI 形式でした。22.07 以降は、管理拡張機能ファイルは SVEXT 形式です。

22.07 より前の管理拡張機能をインストールしている場合は、最初に Windows の「コントロール パネル」の「プログラムと機能」から MSI バージョンの拡張機能をアンインストールする必要があります。MSI バージョンをマシンに保持して、SVEXT バージョンもインストールする場合は、Smart View 拡張機能の更新プロセスでは、SVEXT バージョンの管理拡張機能に対する更新が認識されません。以前にインストールした MSI バージョンの管理拡張機能は引き続き使用できます。ただし、MSI バージョンの拡張機能は今後更新されないため、今後のバグ修正や機能強化は含まれません。このため、SVEXT 形式の管理拡張機能に移行することをお勧めします。

 **Tip:**

- 管理拡張機能のインストールに進む前に、まずブラウザのキャッシュをクリアすることをお勧めします。
- **Enterprise Profitability and Cost Management:** 管理拡張機能は、Smart View 22.100 以降でサポートされています。

管理拡張機能をインストールするには:

- ビジネス・プロセスのダウンロード・ページから拡張機能をダウンロードします。プランニング管理拡張機能をインストールする手順は、*Oracle Enterprise Performance Management Cloud 管理者スタート・ガイド*のクライアントのダウンロードおよびインストールを参照してください。
- Smart View の拡張機能のインストールと更新のプロセスを使用して、ダウンロードしてインストールします。*Oracle Smart View for Office の操作*の拡張機能のインストールを参照してください。

どちらの方法でも、SVEXT 形式の管理拡張機能をダウンロードしてインストールします。

Oracle Smart View for Office (Mac and Browser)とその管理拡張機能のデプロイ

Smart View の Mac ベースまたはブラウザベースのバージョンを使用するには、管理拡張機能のオプションを有効にして Smart View マニフェスト・ファイルをデプロイする必要があります。

Smart View とその管理拡張機能のデプロイの詳細は、*Oracle Smart View for Office (Mac and Browser) のデプロイと管理*の次のトピックを参照してください。

- マニフェスト・ファイルの作成および保存
- 管理拡張機能の有効化
- サイドロードとログインまたは Office 365 ユーザーに対するマニフェスト・ファイルのデプロイ

Smart View グリッドを使用したアプリケーション・メタデータのインポートおよび編集

Smart View グリッドを使用すると、迅速にディメンションのメンバーを追加、編集および移動できます。

- [Smart View グリッドについて](#)
- [Smart View グリッドおよびリボンの表示](#)
- [Smart View グリッドの使用のガイドライン](#)
- [デフォルトのメタデータ・ディメンション・メンバー・プロパティ](#)

Smart View グリッドについて

Oracle Smart View for Office および Oracle Smart View for Office (Mac and Browser) では、グリッドは 2 つのディメンションで構成されます:

- 1 つの軸の Oracle Enterprise Performance Management Cloud ディメンション (Planning、Financial Consolidation and Close、Tax Reporting)
- もう一方の軸にメタデータ・ディメンション

メタデータ・ディメンションは、メタデータ・メンバーのフラット・リストを表します。各ディメンションについて、メタデータ・メンバーの事前定義済セットがデフォルトで提示されます。各メタデータ・メンバーは、グリッドにインポートされたディメンションに対して有効な特定のメンバー・プロパティに対応します。メタデータのグリッド・データ・セルには、数値ではなく特定のプロパティ値が保持されます。デフォルトでグリッドにないメタデータ・ディメンション・メンバー・プロパティを追加するには、Smart View の「メンバー選択」ダイアログを使用します。

Smart View グリッドおよびリボンの表示

Smart View グリッドに、メンバー名を行、メンバー・プロパティを列としてディメンションが表示されます。編集用にディメンションを初めてインポートする場合、メンバー・プロパティの事前定義済セットがグリッドにデフォルトで表示されます。

Smart View のディメンション・グリッド

図 1 では、Oracle Smart View for Office の Vision Account ディメンションのデフォルト・メンバー・プロパティの例を示しています。

図 D-1 Planning アド・ホックのリボンが表示された Smart View for Office グリッドにインポートしたディメンション

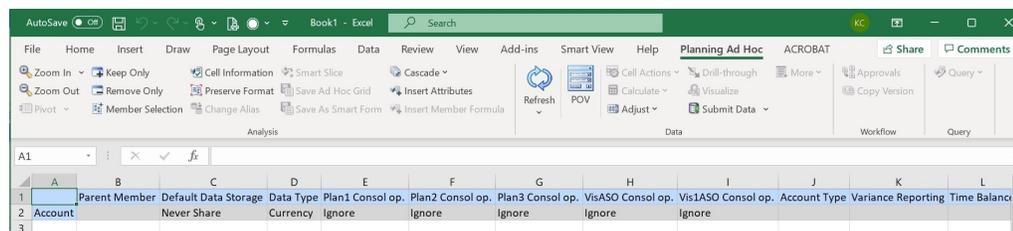


図 1 では Planning アド・ホックのリボンが表示されていることに注意してください。接続しているデータ・ソースに応じて、そのデータ・ソースのプロバイダのアド・ホック・リボンが表示されます。たとえば、Enterprise Profitability and Cost Management のデータ・ソースに接続している場合、EPCM アド・ホック・リボンが表示されます。

表示されるアド・ホック・リボンは、従来の Smart View アド・ホック・グリッドに表示されるプロバイダのアド・ホック・リボンと同じですが、有効なオプションが少なくなっています。

属性ディメンションを含むすべてのディメンションにおいて、プロバイダのアド・ホック・リボンの有効なオプションは次のとおりです。

- ズーム・イン
- ズーム・アウト
- 選択項目のみ保持
- 選択項目のみ削除
- メンバー選択
- リフレッシュ
- データの送信

次のオプションが有効になっているように見えますが、メタデータ・グリッドに対しては有効ではありません: フォーマットの保存、カスケード、属性の挿入、POV、調整。

リボンからアクセスするか、グリッドでプロパティを右クリックして「Smart View」、「メンバー選択」の順に選択することでアクセスする「メンバー選択」ダイアログ・ボックスを使用して、メタデータ・ディメンション・メンバーを追加できます。

Smart View の「メンバー選択」ダイアログ・ボックスの使用の詳細は、*Oracle Smart View for Office* の操作 22.100 のメンバー・セレクタからのメンバーの選択を参照してください。

Smart View (Mac and Browser)のディメンション・グリッド

図 2 では、Chrome ブラウザで実行されている Oracle Smart View for Office (Mac and Browser)の Vision Account ディメンションのデフォルト・メンバー・プロパティの例を示しています。

図 D-2 Smart View のリボンが表示された Smart View (Mac and Browser)グリッドにインポートしたディメンション

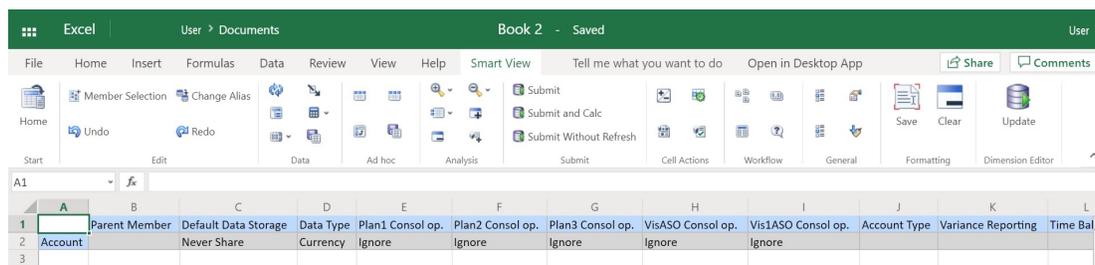


図 2 では Smart View のリボンが表示されていることに注意してください。これは、Oracle Smart View for Office (Mac and Browser)デプロイメントのデフォルトのリボン名です。リボンには異なる名前を指定できます。グリッドにディメンションをインポートすると、すべてのリボンのオプションが有効になっているように見えますが、ディメンション・グリッドに適用できるのは一部のみです。

属性ディメンションを含むすべてのディメンションにおいて、リボンの有効なオプションは次のとおりです。

- ズーム・イン
- ズーム・アウト
- 選択項目のみ保持

- 選択項目のみ削除
- メンバー選択
- リフレッシュ
- 更新

リボンからアクセスできる「**メンバー選択**」ダイアログ・ボックスを使用して、メタデータ・ディメンション・メンバー・プロパティを追加できます。

Oracle Smart View for Office (Mac and Browser)での「**メンバー選択**」ダイアログ・ボックスを使用したグリッドへのメタデータ・メンバー・プロパティの追加の詳細は、『Oracle Smart View for Office (Mac およびブラウザ)の操作』のメンバー・セレクトからのメンバーの選択を参照してください。

Smart View グリッドの使用のガイドライン

Smart View グリッドを使用してディメンション・メタデータを編集するときは、次のガイドラインを参考にしてください:

- プランニング管理拡張機能を使用して、ディメンション・メンバーを追加し、ディメンションとメンバーのプロパティを編集および更新します。
- プランニング管理拡張機能は、次のことには使用できません:
 - ディメンション(つまり、ディメンション・ルート・メンバー)またはメンバーの削除。
 - ディメンション名またはメンバー名の編集。
- データ・セルの値は、テキスト、数値または列挙です。
- 「親メンバー」を使用して、親/子の関係を指定または変更します。
- グリッドにおけるメンバーの位置は、アウトラインにおける兄弟の実際の位置を表しているとはかぎりません。
- 各メタデータ・グリッドを、対応するディメンションにリンクする必要があります。
- 各ディメンションの列は、ディメンション・エディタで使用できるメンバー・プロパティのうち、対応するセットに基づいています。

ディメンションを初めてインポートする場合、メタデータ・ディメンション・メンバー・プロパティの事前定義済セットが表示されます。これらのメンバー・プロパティのリストは、[デフォルトのメタデータ・ディメンション・メンバー・プロパティ](#)を参照してください。
- メタデータ・グリッドを開くと、異なるディメンションに再リンクできません。
- 対応する有効なメタデータ・メンバーのセットは、各ディメンションに固有です。
- ディメンション・メンバーは、対応するディメンションにのみ有効です。
- 「期間」ディメンションでは、「データ・ストレージ」が編集可能な唯一のプロパティです。
- 次の機能は、ディメンション・メタデータを使用する Smart View グリッドでは使用できません:
 - ピボット

- POV にピボット
- セル・テキスト
- セル・ノート
- サポート詳細

デフォルトのメタデータ・ディメンション・メンバー・プロパティ

プランニング管理拡張機能にディメンションを初めてインポートする場合、ディメンション・メタデータ・メンバー・プロパティの事前定義済セットがデフォルトで表示されます。「メンバー選択」ダイアログ・ボックスを使用して、他のメタデータ・メンバー・プロパティをグリッドに追加します。

次のセクションには、**Planning** ディメンションのデフォルトのメンバー・プロパティがリストされます。

Oracle Smart View for Office の「メンバー選択」ダイアログ・ボックスを使用したグリッドへの他のメンバー・プロパティの追加の詳細は、**Oracle Smart View for Office ユーザーズ・ガイド**のメンバー・セレクタからのメンバーの選択に関する項を参照してください。

勘定科目ディメンション

- 親メンバー
- デフォルトのデータ・ストレージ
- データ型
- すべてのキューブの集計演算子
- 勘定科目タイプ
- 差異レポート
- タイム・バランス
- デフォルト別名表
- デフォルト式

エンティティ・ディメンション

- 親メンバー
- デフォルトのデータ・ストレージ
- データ型
- すべてのキューブの集計演算子
- 基本通貨
- デフォルト別名表

カスタム・ディメンション

- 親メンバー
- デフォルトのデータ・ストレージ

- データ型
- すべてのキューブの集計演算子
- デフォルト別名表

シナリオ・ディメンション

- 親メンバー
- デフォルトのデータ・ストレージ
- データ型
- すべてのキューブの集計演算子
- 開始年度
- 終了年度
- 開始期間
- 終了期間
- デフォルト別名表
- デフォルト式

バージョン・ディメンション

- 親メンバー
- デフォルトのデータ・ストレージ
- データ型
- すべてのキューブの集計演算子
- タイプ
- デフォルト別名表
- デフォルト式

期間および年ディメンション

- 現在のまままたは親メンバーに制限
- デフォルトのデータ・ストレージ - 「期間」ディメンションでは、「データ・ストレージ」が編集可能な唯一のプロパティであることに注意してください
- データ型
- デフォルト別名表

通貨ディメンション

- 親メンバー
- デフォルトのデータ・ストレージ
- データ型
- 記号
- 事前定義の記号

- スケール
- 精度
- トライアングレーション通貨
- レポート通貨
- 3桁ごとの区切り文字
- 小数点
- 負数の符号
- 負数の色
- デフォルト別名表
- デフォルト式

HSP_View ディメンション(サンドボックス・ディメンション)

- 親メンバー
- デフォルトのデータ・ストレージ
- データ型
- すべてのキューブの集計演算子
- デフォルト別名表

Smart View のディメンションのインポート

Smart View グリッドにディメンションをインポートすることは、ディメンションとそのメンバー、およびそれらの各プロパティを編集の準備としてグリッドに配置することを意味しています。

ディメンションを Oracle Smart View for Office または Oracle Smart View for Office (Mac and Browser) にインポートすると、ディメンションのメンバーを簡単に追加、編集および移動できます。

ノート:

Smart View でディメンションをインポートするにはサービス管理者権限が必要です。

参照:

- [Smart View for Office でのディメンションのインポート](#)
- [Smart View \(Mac and Browser\)でのディメンションのインポート](#)

Smart View for Office でのディメンションのインポート

ノート:

Oracle Smart View for Office でディメンションをインポートするにはサービス管理者権限が必要です。

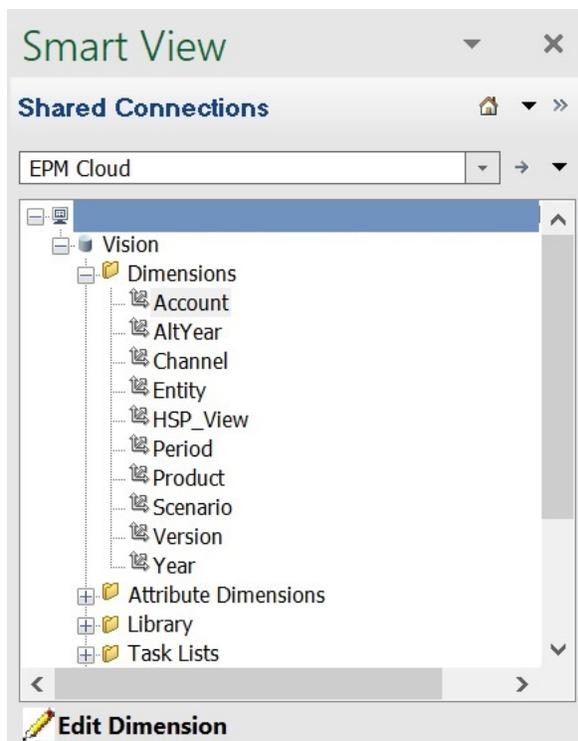
Smart View グリッドにディメンションをインポートするには:

1. Smart View のリボンで、「パネル」をクリックします。
2. 「Smart View」パネルで、「共有接続」または「プライベート接続」をクリックし、ログイン・ウィンドウでユーザー名およびパスワードを入力します。
プライベート接続を選択する場合は、接続のドロップダウン・リストからプライベート接続を選択し、ログイン資格証明を指定します。
3. 「Smart View」パネルのドロップダウン・リストから、ビジネス・プロセス (**「Planning」** など) または **「EPM Cloud」** を選択します。
4. 「Smart View」パネルのツリーで **「ディメンション」** フォルダを展開し、フォルダ内のアプリケーション・ディメンションを表示します。

属性ディメンションが定義されている場合は、**「属性ディメンション」** フォルダに表示されます。

期間ディメンションが定義されている場合は、「ディメンション」フォルダに表示されます。「期間」ディメンションでは、「データ・ストレージ」が編集可能な唯一のプロパティであることに注意してください。

次の例では、「ディメンション」フォルダが展開されており、10 個のディメンションが含まれています。



5. ディメンション名を右クリックして「**ディメンションの編集**」を選択します。
 または、ディメンションを選択してから、アクション・パネルで「**ディメンションの編集**」を選択します。
 Account ディメンションの最初のグリッドの図は、[Smart View のディメンション・グリッド](#)を参照してください。

Smart View (Mac and Browser)でのディメンションのインポート

Oracle Smart View for Office (Mac and Browser)でのディメンションの操作を開始する前に、環境に Smart View をサイドロードまたはデプロイする必要があります。手順は、*Oracle Smart View for Office (Mac and Browser)のデプロイと管理*に記載されています:

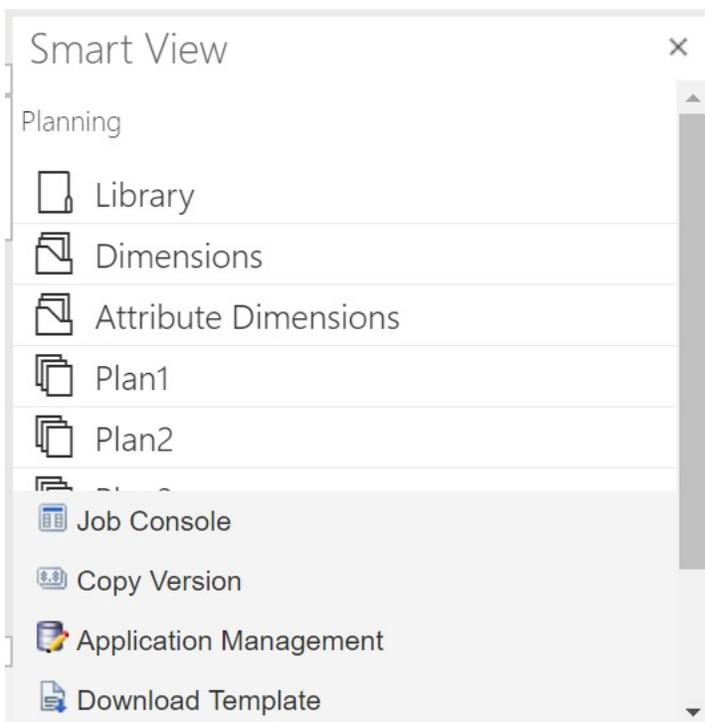
- サイドロードとログイン
- Office 365 ユーザーに対するマニフェスト・ファイルのデプロイ

Oracle Smart View for Office (Mac and Browser)グリッドにディメンションをインポートするには:

1. Smart View のリボンで、「**ホーム**」をクリックします。

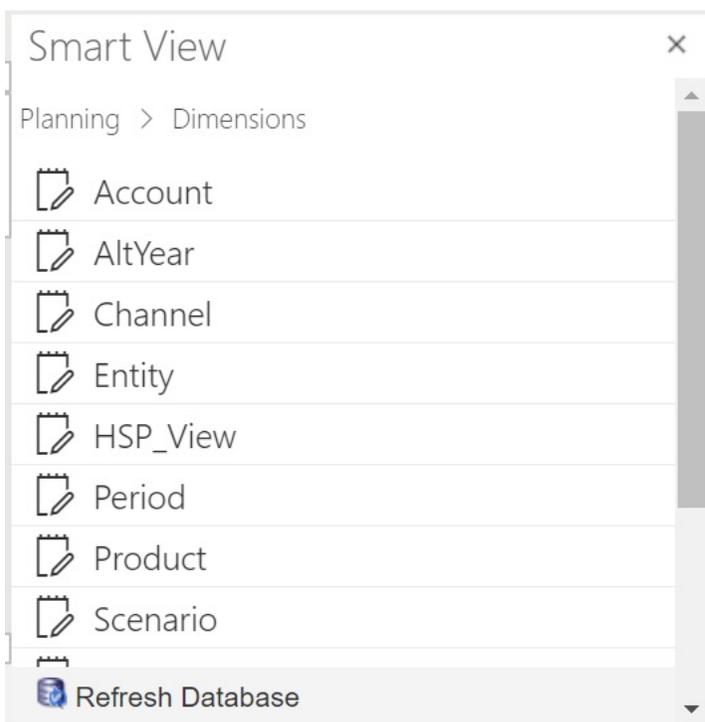
「**ホーム**」パネルで、ディメンションが「**ディメンション**」フォルダに表示されます。属性ディメンションが定義されている場合は、「**属性ディメンション**」フォルダに表示されます。

期間ディメンションが定義されている場合は、「**ディメンション**」フォルダに表示されます。「**期間**」ディメンションでは、「**データ・ストレージ**」が編集可能な唯一のプロパティであることに注意してください。



2. 「Smart View ホーム」パネルで、「ディメンション」フォルダをクリックして展開し、フォルダ内のアプリケーション・ディメンションを表示します。

次の例では、「ディメンション」フォルダが展開され、Vision アプリケーションの 10 個のディメンションのうち、8 個が表示されています。



3. ディメンション名をクリックして、グリッドにディメンションをインポートします。
Account ディメンションの最初のグリッドの図は、[Smart View \(Mac and Browser\)のディメンション・グリッド](#)を参照してください。
4. **オプション:** パネル上部にあるパスでプロバイダのリンクをクリックして、「ホーム」パネルのメイン・ページに戻ります
たとえば、[ステップ 2](#)の図では、「**Planning**」をクリックすると、「ホーム」パネルのメイン・ページに戻ります。

Smart View でのメンバーの編集

Smart View グリッドを使用すると、ディメンションのメンバーのプロパティを迅速に編集できます。

Smart View でメンバーのプロパティを編集するには:

1. Oracle Smart View for Office 内または Oracle Smart View for Office (Mac and Browser)内で、Smart View グリッドにディメンションをインポートします([Smart View でのディメンションのインポート](#)を参照)。
2. グリッドでメンバーのプロパティをハイライトします。
「期間」ディメンションでは、「データ・ストレージ」が編集可能な唯一のプロパティであることに注意してください。
3. ドロップダウン・メニューで、値を選択します。

ノート:

変更されたセルは異なる色で表示されます。

4. グリッドを保存するには、次のタスクを実行します:
 - Oracle Smart View for Office: Planning アド・ホックのリボンで、「**データの送信**」をクリックします。
 - Oracle Smart View for Office (Mac and Browser)の場合、Smart View のリボンで、「**更新**」をクリックします。

ノート:

複数のメンバーとプロパティに対する変更を、同じ「**データの送信**」操作または「**更新**」操作で保存できます。操作が 1 つのメンバーについて失敗すると、アプリケーション・サーバーは操作を停止し、変更は保存されません。

Smart View でのアプリケーション・メンバーの追加

Smart View グリッドを使用すると、ディメンションに簡単にメンバーを追加できます。

- [Smart View でのメンバーの追加](#)

- [Smart View でのメンバーの追加のガイドライン](#)

ビデオ

目的	視聴するビデオ
Oracle Smart View for Office におけるエンティティ・ディメンション・メンバーの追加について学習します。	 Oracle® Smart View for Office でのエンティティ・ディメンション・メンバーの管理
Smart View における勘定科目ディメンション・メンバーの追加について学習します。	 Oracle® Smart View for Office での勘定科目ディメンション・メンバーの管理
Smart View におけるシナリオ・ディメンション・メンバーの追加について学習します。	 Oracle® Smart View for Office でのシナリオ・ディメンション・メンバーの管理

Smart View でのメンバーの追加

Smart View グリッドを使用すると、ディメンションに簡単にメンバーを追加できます。

Smart View でメンバーを追加するには:

1. Oracle Smart View for Office 内または Oracle Smart View for Office (Mac and Browser)内で、Smart View グリッドにディメンションをインポートします([Smart View でのディメンションのインポート](#)を参照)。

Oracle Smart View for Office では、「期間」ディメンションへのメンバーの追加はサポートされないことに注意してください。

2. 新しいメンバーの名前を名前の列に入力します。

ノート:

数値の名前を持つメンバーを追加するには、その数値がデータでなくメンバー名であることをシステムに通知するために、数値メンバー名の前に単一引用符(')を配置します。たとえば、123 という名前のメンバーを追加する場合、'123 と入力します。

3. リボンで、「リフレッシュ」をクリックします。
「リフレッシュ」を実行すると、新規メンバーにはグリッドでアスタリスク(*)のマークが付けられます。デフォルトのプロパティ・セットが、新しいメンバーに自動的に適用されます。デフォルトの「親メンバー」はディメンションのルート・メンバーです。
4. **オプション:** 任意のプロパティをデフォルト値(ルート・メンバー)から変更するには、グリッドで適切なセルをハイライトし、ドロップダウン・メニューから別の値を選択します。([Smart View でのメンバーの編集](#)を参照してください。)

 ノート:

「リフレッシュ」は、新しいメンバーでプロパティを変更する前に実行してください。「リフレッシュ」操作を行うと、変更した値があってもサーバーからのデフォルト値に置き換えられます。

5. グリッドを保存するには、次のタスクを実行します:

- Oracle Smart View for Office: Planning アド・ホックのリボンで、「データの送信」をクリックします。
- Oracle Smart View for Office (Mac and Browser)の場合、Smart View のリボンで、「更新」をクリックします。

 ノート:

- 新しいメンバーのプロパティを変更するには、[Smart View でのメンバーの編集](#)を参照してください。
- Oracle Smart View for Office では、メンバー名などのメンバー・プロパティは、Smart View アドインで設定され特定のロケールに基づいてローカライズできます。
- 複数のメンバーとプロパティに対する変更を、同じ「データの送信」操作または「更新」操作で保存できます。操作が1つのメンバーについて失敗すると、アプリケーション・サーバーは操作を停止し、変更は保存されません。

Smart View でのメンバーの追加のガイドライン

- 新しいメンバーは、指定した親の下に最後の兄弟として追加されます。
- 親子の関係は、「親の名前」列のプロパティによって決まります。
- グリッドにおける新規メンバーの相対位置には影響されません。
- グリッドでの新しいメンバーの相対位置を、「データの送信」操作または「更新」操作の実行後に変更することはできません。アド・ホック・グリッドに反映されたアウトラインで、新しいメンバーの実際の位置を確認するには、「ズーム・アウト」と「ズーム・イン」を続けて実行します。
- 無効な文字のチェックや重複する名前の確認など、新しいメンバー名の完全な有効性チェックは、「データの送信」操作中または「更新」操作中に実行されます。
- デフォルトのプロパティがアプリケーションによって自動的に新しいメンバーに適用されます。特定のデフォルト・プロパティは、ディメンションのプロパティに基づいています。
- 簡易アプリケーションの通貨ディメンションに新しい通貨メンバーを追加する場合、新しい通貨の親メンバーはデフォルトで「通貨」ディメンション・メンバーになります。しかし、デフォルトで入力通貨メンバーになるようにする必要があります。これを修正するには、次のようにします。
 1. 新規に追加した各通貨メンバーの「親メンバー」列で、「通貨」を入力通貨に置き換えます。

2. 「データの送信」または「更新」を実行します。
3. 「リフレッシュ」をクリックします。
4. 新規に追加した各通貨について、「親メンバー」列のエントリが入力通貨になっていることを確認します。

Smart View でのメンバーの移動

Smart View グリッドを使用すると、ディメンション内の親から別の親にメンバーを迅速に移動できます。

Oracle Smart View for Office でメンバーを移動するには:

1. Smart View 内または Oracle Smart View for Office (Mac and Browser)内で、Smart View グリッドにディメンションをインポートします([Smart View for Office でのディメンションのインポート](#)を参照。)
2. グリッドの「親メンバー」列でメンバーをハイライトします。

ノート:

「親メンバー」プロパティを空にすると、「親メンバー」の値はデフォルトでルート・メンバーになります。

3. **メンバー名**と「親」列の交差に親の名前を入力します。
4. 「データの送信」をクリックして、データを保存します。

ノート:

同じ「データの送信」操作で、複数のメンバーまたはサブツリーの移動を保存できます。「データの送信」操作が1つのメンバーに対して失敗した場合、アプリケーション・サーバーで操作が停止し、変更は保存されません。

Smart View でのメンバーの移動のガイドライン

- グリッドで空の親メンバーは、ディメンションのルート・メンバーを表します。
- 「親メンバー」の値は、Smart View で使用されるメタデータ・ロード・ファイルの対応する値に該当するルールに従います。

属性ディメンションの操作

次も参照:

- [Smart View での属性ディメンション・メンバーの追加](#)
- [属性ディメンション・メンバーとディメンション・メンバーの関連付け](#)

Smart View での属性ディメンション・メンバーの追加

Web インタフェースで、属性ディメンションを作成します。次に、Oracle Smart View for Office または Oracle Smart View for Office (Mac and Browser) で管理拡張機能を使用して、属性ディメンションにメンバーを追加します。

- [Smart View for Office での属性ディメンション・メンバーの追加](#)
- [Smart View \(Mac and Browser\)での属性ディメンション・メンバーの追加](#)

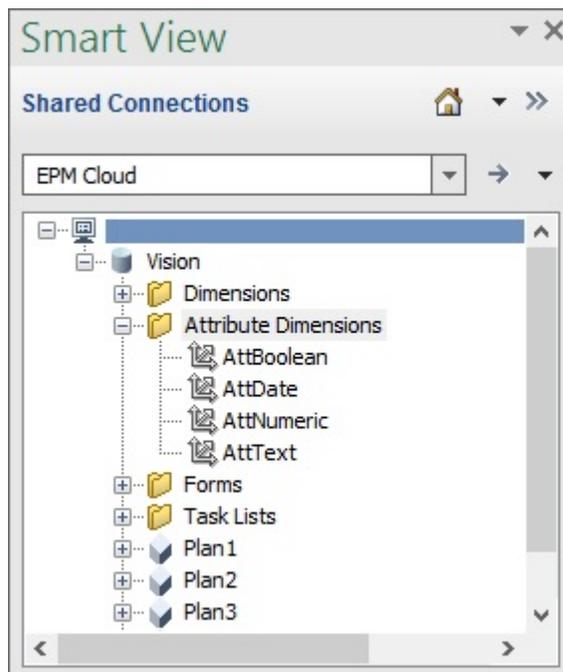
Smart View for Office での属性ディメンション・メンバーの追加

Web インタフェースで、属性ディメンションを作成します。次に、Oracle Smart View for Office で管理拡張機能を使用して、属性ディメンションにメンバーを追加します。

属性ディメンションのメンバーにメンバーを追加するには:

1. Smart View のリボンで、「パネル」をクリックします。
2. 「Smart View」パネルで、「共有接続」または「プライベート接続」をクリックし、ログイン・ウィンドウでユーザー名およびパスワードを入力します。
プライベート接続を選択する場合は、接続のドロップダウン・リストからプライベート接続を選択し、ログイン資格証明を指定します。
3. 「Smart View」パネルで、「EPM Cloud」を選択します。
4. 「Smart View」パネルのツリーで、「属性ディメンション」ノードを展開します。

次の例では、「属性ディメンション」ノードに 4 つの属性ディメンションがあり、それぞれの属性タイプがテキスト、日付、ブール、数値です。



5. 属性ディメンションを 1 つ選択して、「ディメンションの編集」を選択します。

ここで、説明のために **AttText** 属性ディメンションを選択して編集します。属性ディメンションの最初のグリッドの例が表示されています。このディメンションにはまだメンバーがなく、親メンバーとデフォルト別名表の2つのプロパティしかありません。

	A	B	C
1		Parent Member	Default Alias Table
2	AttText		

6. 追加する属性メンバー名を、たとえば次のように入力します。

	A	B	C
1		Parent Member	Default Alias Table
2	AttText		
3	Gold		
4	Silver		
5	Platinum		

7. Smart View のリボンで、「送信」をクリックします。
属性メンバーがアプリケーションに送信されます。

	A	B	C
1		Parent Member	Default Alias Table
2	AttText		
3	Gold	AttText	
4	Silver	AttText	
5	Platinum	AttText	

8. **オプション:** 属性メンバーの編集を続行し、グリッドに直接入力して他のプロパティのデータを入力してから、変更を送信します。

Smart View (Mac and Browser)での属性ディメンション・メンバーの追加

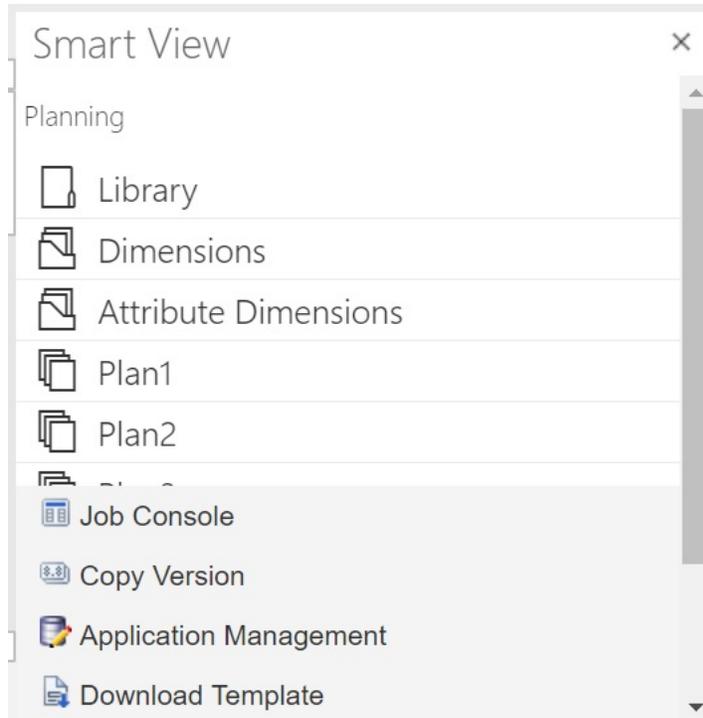
Oracle Smart View for Office (Mac and Browser)での属性ディメンション・メンバーの追加を開始する前に、環境に Smart View をサイドロードまたはデプロイする必要があります。手順は、*Oracle Smart View for Office (Mac and Browser)のデプロイと管理*に記載されています:

- サイドロードとログイン
- Office 365 ユーザーに対するマニフェスト・ファイルのデプロイ

Oracle Smart View for Office (Mac and Browser)グリッドの属性ディメンションにメンバーを追加するには:

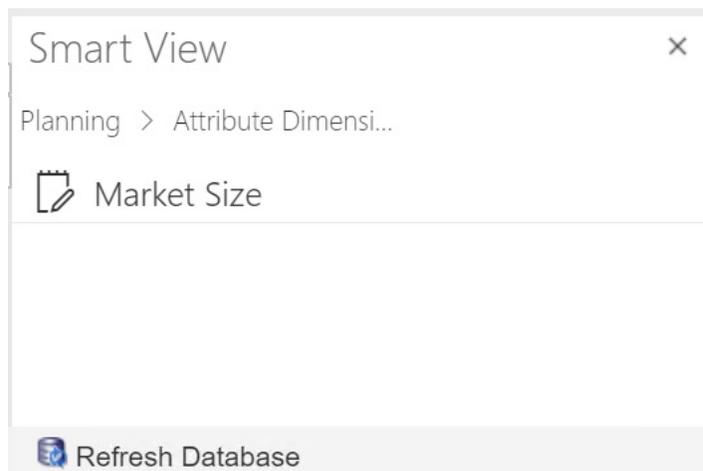
1. Smart View のリボンで、「ホーム」をクリックします。

「ホーム」パネルで、ディメンションが「ディメンション」フォルダに表示されます。属性ディメンションが定義されている場合は、「属性ディメンション」フォルダに表示されます。



2. 「Smart View ホーム」パネルで、「属性ディメンション」フォルダをクリックして展開し、フォルダ内の属性ディメンションを表示します。

次の例では、「属性ディメンション」フォルダが展開され、Vision アプリケーションの 1 つの属性ディメンションである Market Size が表示されています。



3. 属性ディメンションを選択して、グリッドにインポートします。

ここで、説明のために **Market Size** 属性ディメンションを選択して編集します。属性ディメンションの最初のグリッドの例が表示されています。このディメンションにはまだメンバーがなく、親メンバーとデフォルト別名表の2つのプロパティしかありません。

	A	B	C
1		Parent Member	Default Alias Table
2	Market Size		

- 属性名の列で、属性名の下に、追加する属性メンバー名を入力します。

	A	B	C
1		Parent Member	Default Alias Table
2	Market Size		
3	Large		
4	Medium		
5	Small		

- Smart View のリボンで、「送信」をクリックします。
属性メンバーがアプリケーションに送信されます。

	A	B	C
1		Parent Member	Default Alias Table
2	Market Size		
3	Large	Market Size	
4	Medium	Market Size	
5	Small	Market Size	

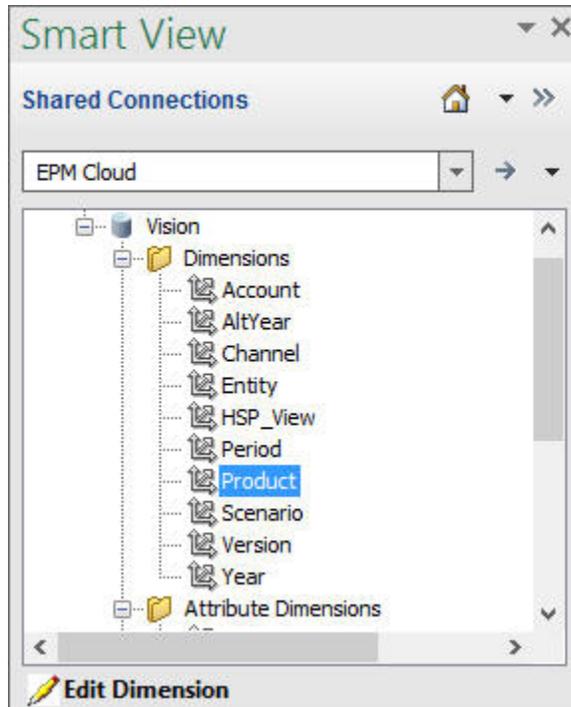
- オプション:** 属性メンバーの編集を続行し、グリッドに直接入力して他のプロパティのデータを入力してから、変更を送信します。

属性ディメンション・メンバーとディメンション・メンバーの関連付け

このトピックの図は Oracle Smart View for Office のものですが、この概念は Oracle Smart View for Office (Mac and Browser)にも適用されます。

- 「Smart View」パネル(Windows)または「Smart View ホーム」(Mac and Browser)のツリーで、「ディメンション」ノードを展開して、作業するディメンションを選択します。

次の例では、「ディメンション」ノードに Vision アプリケーションの標準のディメンションがあり、AltYear や Channel といったカスタム・ディメンションも表示されています。製品ディメンションが選択されています。



2. 「**ディメンションの編集**」を選択し、シート上のグリッドで最初のレイアウトに注目してください。

Oracle Smart View for Office (Mac and Browser)では、単にディメンションをクリックしてグリッドにインポートします。

シートに属性ディメンションが表示されていない場合は、「メンバー・セレクタ」を使用して追加します。Planning アド・ホックのリボン(Windows)または Smart View のリボン (Mac and Browser)で「**メンバー選択**」を選択し、属性ディメンションを追加します。

3. グリッドで、メンバーを表示するディメンションを展開します。
4. セルから開くメンバー・セレクタを使用して、属性メンバー値をディメンション・メンバーに関連付けます(図 1)。

図 D-3 ディメンション・メンバーへの属性値の関連付け

	A	B	C	D	J	K	L	M	N
1		Parent Member	Default Data Storage	Data Type	Default Alias Table	AttText	AttDate	AttBoolean	AttNumeric
2	Product		Never Share	Unspecifie		<None>	<None>	<None>	<None>
3	P_TP	Product	Dynamic Calc	Unspecifie	Total Product	Platinum	<None>	<None>	<None>
4	P_000	P_TP	Store	Unspecifie	No Product	Gold	<None>	<None>	<None>
5	P_TP1	P_TP	Dynamic Calc	Unspecifie	Computer Equipment	Gold	<None>	<None>	<None>
6	P_100	P_TP1	Store	Unspecifie	Product X	Platinum	<None>	<None>	<None>
7	P_110	P_TP1	Store	Unspecifie	Sentinal Standard Notebook	<None>	>None>	<None>	<None>
8	P_120	P_TP1	Store	Unspecifie	Sentinal Custom Notebook	Type to search	<None>	<None>	<None>
9	P_130	P_TP1	Store	Unspecifie	Envoy Standard Netbook	<None>	<None>	<None>	<None>
10	P_140	P_TP1	Store	Unspecifie	Envoy Custom Netbook	<None>	<None>	<None>	<None>
11	P_150	P_TP1	Store	Unspecifie	Other Computer	<None>	<None>	<None>	<None>
12	P_160	P_TP1	Store	Unspecifie	Tablet Computer	<None>	<None>	<None>	<None>
13	P_TP2	P_TP	Dynamic Calc	Unspecifie	Computer Accessories	<None>	<None>	<None>	<None>
14	P_200	P_TP2	Store	Unspecifie	Accessories	<None>	<None>	<None>	<None>
15	P_210	P_TP2	Store	Unspecifie	Keyboard	<None>	<None>	<None>	<None>

5. 前のステップを繰り返して、定義が必要な他のディメンション・メンバーと属性値とを関連付けます。

- いつでも、Planning アド・ホックのリボン(Windows)で「**データの送信**」をクリックするか、Smart View のリボン(Mac and Browser)で「**送信**」をクリックすれば、変更内容がデータベースに送信されます。
仮送信を実行することも、すべての変更を一度に送信することもできます。

Smart View での共有メンバーの指定

Smart View グリッドを使用すると、ディメンション内で共有するメンバーを簡単に指定できます。

ノート:

Smart View では、通貨ディメンションまたは属性ディメンションのメンバーには「共有」データ・ストレージ・オプションを使用できません。

Oracle Smart View for Office で共有メンバーを指定するには:

- 基本メンバーが存在していることを確認します。
- グリッドの「**親メンバー**」列で基本メンバーをハイライトします。
- 基本メンバーの親の名前の値を変更します。
- 「**データ・ストレージ**」列で基本メンバーをハイライトします。
- ドロップダウン・メニューで、「**共有**」を選択します。
- 「**データの送信**」(Windows)または「**送信**」(Mac and Browser)をクリックして、グリッドを保存します。

送信操作によって、元の親メンバーおよびデータ・ストレージのプロパティで基本メンバーがリフレッシュされます。共有メンバーは、サーバー上で指定した親の下に追加されます。新規に追加した共有メンバーを表示するには、親でズームインする必要があります。

ノート:

新しい共有メンバーは、Smart View グリッドに自動的に追加されません。グリッドに表示されるメンバーのリストは変更されません。

データベースのリフレッシュ

次も参照:

- [Smart View for Office でのデータベースのリフレッシュ](#)
- [Smart View \(Mac and Browser\)でのデータベースのリフレッシュ](#)

Smart View for Office でのデータベースのリフレッシュ

Oracle Smart View for Office グリッドを使用すると、データベースのリフレッシュが簡単です。

Smart View でデータベースをリフレッシュするには:

1. Smart View のリボンで、「**パネル**」をクリックします。
2. Smart View パネルから、「**Planning**」を選択します。
3. 「**ディメンション**」フォルダを展開してフォルダのアプリケーション・ディメンションを表示します。

属性ディメンションが定義されている場合は、「**属性**」フォルダに表示されます。

4. ルート・フォルダである「**ディメンション**」フォルダまたは「**属性**」フォルダを右クリックし、「**データベースのリフレッシュ**」を選択します。

Smart View で、「**データベースのリフレッシュ**」ダイアログ・ボックスが表示されます。

ヒント:

ルール・タイプ・ジョブの実行中または進行中は、データベース・リフレッシュを完了できません。Web または Oracle Smart View for Office (Mac and Browser)のいずれかのジョブ・コンソールで、データベースに対して実行中のジョブがないか確認します。すべてのジョブが完了したら、データベース・リフレッシュを実行します。

5. 「**リフレッシュ**」をクリックします。

進行状況バーが表示され、リフレッシュや作成で完了したステップの割合が示されます。

Smart View (Mac and Browser)でのデータベースのリフレッシュ

Smart View グリッドを使用すると、データベースのリフレッシュも新しいデータベースの作成も簡単です。

Oracle Smart View for Office (Mac and Browser)でデータベースをリフレッシュするには:

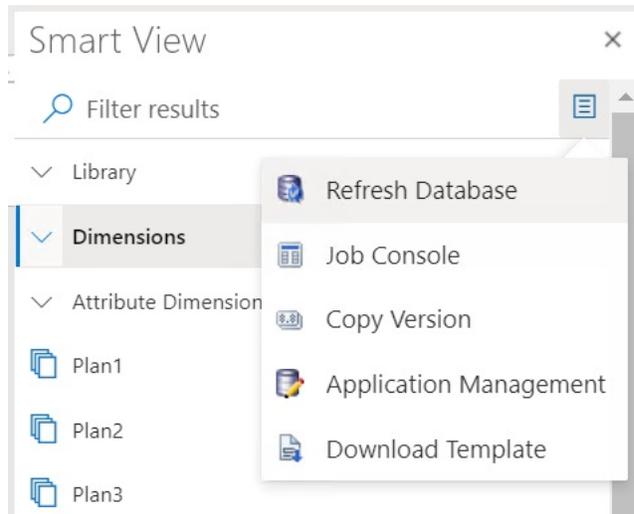
1. Smart View のリボンで、「**ホーム**」をクリックします。
2. 「Smart View ホーム」パネルから、アプリケーションのルート「**ディメンション**」フォルダに移動します。

アプリケーションで属性が定義されている場合、属性ディメンションをリフレッシュするには、「**属性ディメンション**」フォルダに移動します。

3. ルート「**ディメンション**」または「**属性ディメンション**」フォルダを選択し、「**アクション**」ボタンをクリックして、ドロップダウン・メニューから「**データベースのリフレッシュ**」を選択します。

「**データベースのリフレッシュ**」ダイアログ・ボックスが表示されます。

次の例では、「**ディメンション**」フォルダが選択され、「**アクション**」ドロップダウン・メニューで「**データベースのリフレッシュ**」が選択されています。



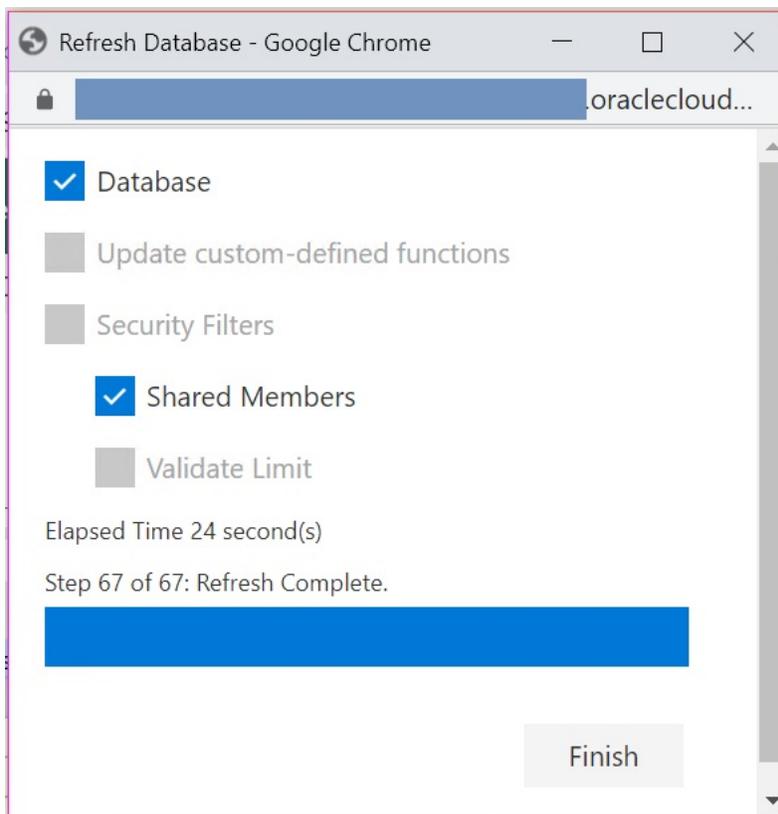
ヒント:

ルール・タイプ・ジョブの実行中または進行中は、データベース・リフレッシュを完了できません。Web または Oracle Smart View for Office (Mac and Browser)のいずれかのジョブ・コンソールで、データベースに対して実行中のジョブがないか確認します。すべてのジョブが完了したら、データベース・リフレッシュを実行します。

4. 「データベース」チェック・ボックスを選択して、「リフレッシュ」をクリックします。

次の図では、「データベース」と「共有メンバー」チェック・ボックスが選択されています。リフレッシュで選択できるその他のオプションは、次のとおりです:

- カスタム定義関数の更新
- セキュリティ・フィルタ
- 制限の検証



進行状況バーが表示され、リフレッシュや作成で完了したステップの割合が示されます。

5. 「終了」をクリックしてダイアログを閉じます。

プランニング管理拡張機能と Office のオートコレクト

ノート:

このトピックの情報は、Windows ベースのバージョンの Oracle Smart View for Office のプランニング管理拡張機能に適用されます。Oracle Smart View for Office (Mac and Browser)のプランニング管理拡張機能には適用されません。

Windows ベースのバージョンの Excel のプランニング管理拡張機能では、Office のオートコレクトが Smart View でのメンバーの編集に影響する場合があります。

メンバー・プロパティ (Text データ型のメンバー名、メンバーの説明、別名、メンバー式など) を編集するとき、次の例のように最初の 2 文字が大文字の名前が生成されることがあります。

DGreen

Excel では、次の例のように名前の最初の 1 文字が大文字になるようにオートコレクトされません。

Dgreen

Excel では、「オートコレクト」オプションを設定すると、名前の最初の 2 文字を大文字にしておくことができます。

名前の最初の 2 文字を大文字にしておくには:

1. Excel で、「**Excel のオプション**」ダイアログにアクセスします。
2. 「**文章校正**」を選択して、「**オートコレクトのオプション**」ボタンをクリックします。
3. 「**オートコレクト**」ダイアログで、「**2 文字目を小文字にする**」チェックボックスをクリアします。
4. 「**OK**」をクリックして「**オートコレクト**」ダイアログを閉じ、「**OK**」をクリックして「**Excel のオプション**」ダイアログを閉じます。

変更はすぐに有効になります。Excel を再起動する必要はありません。

E

フリーフォームのベスト・プラクティス

フリーフォームにこれらのベスト・プラクティスを使用します。

次の表には、このガイドで説明したベスト・プラクティスへのリンクが用意されています。

カテゴリ	ベスト・プラクティスの対象	この項を参照
EPM センター・オブ・エクセレンス	EPM センター・オブ・エクセレンスの作成および実行	EPM センター・オブ・エクセレンスの作成および実行
アプリケーション起動	ログインの問題の解決	Oracle Enterprise Performance Management Cloud オペレーション・ガイドのログインの問題の解決
停止した環境	停止した環境の問題の解決	Oracle Enterprise Performance Management Cloud オペレーション・ガイドのダウンした環境への対処
動的タブ	動的タブの使用	Oracle Enterprise Performance Management Cloud 管理者スタート・ガイドのレッドウッド・エクスペリエンスでの動的タブの使用
フリーフォーム・アプリケーションの作成	フリーフォーム・アプリの作成	フリーフォーム・アプリケーションの重要な考慮事項
キューブ最適化	キューブのパフォーマンスの向上	<ul style="list-style-type: none"> • キューブのパフォーマンスの向上 • Oracle Enterprise Performance Management Cloud オペレーション・ガイドの BSO キューブの最適化 • Oracle Enterprise Performance Management Cloud オペレーション・ガイドの集約ストレージ・オプション・キューブの最適化
データのエクспорт	ASO キューブから多数のデータ・セルをエクспортするときに Oracle Essbase 問合せ制限エラーが発生した場合の問題の解決	Oracle Enterprise Performance Management Cloud オペレーション・ガイドの ASO キューブからの大規模なデータ・エクспортに関連する問題の対処
アプリケーション・データベース・リフレッシュ	データベース・リフレッシュの問題の解決	Oracle Enterprise Performance Management Cloud オペレーション・ガイドのデータベース更新の問題のトラブルシューティング
日次メンテナンス	日次メンテナンス・プロセス中に完全なエクспортを実行するか、アプリケーション・バックアップを作成するかの決定	Oracle Enterprise Performance Management Cloud オペレーション・ガイドの日次メンテナンス時に増分データ・インポートのためにスマート・リストのテキスト・データをエクспорт
環境の接続	EPM Cloud 環境の接続および EPM Cloud 接続の移行	<ul style="list-style-type: none"> • 考慮事項 • EPM Cloud 接続を移行する際の考慮事項

カテゴリ	ベスト・プラクティスの対象	この項を参照
ナビゲーション・フロー	接続された環境でのナビゲーション・フローの設計およびナビゲーション・フローに関する問題の処理	<ul style="list-style-type: none"> ナビゲーション・フロー設計のベスト・プラクティスおよび命名の考慮事項 Oracle Enterprise Performance Management Cloud オペレーション・ガイドのナビゲーション・フローに関する問題の処理
マスター・フォームを含むダッシュボード	マスター・フォームとターゲット・オブジェクトを含むダッシュボードの設計	マスター・フォームと詳細を含むダッシュボードの作成
ダッシュボード 2.0 POV バー	ダッシュボード 2.0 での POV バーの使用	ダッシュボード 2.0 の POV バーの考慮事項
動的計算	動的計算の親の下の子の追加	動的計算について
Aliases	ディメンション・メンバーへの別名の割当て	別名について
動的メンバー	動的メンバーの削除	考慮事項
期間ディメンション	期間ディメンションでの代替階層の作成	期間ディメンションの代替階層の考慮事項
フォームの設計	フォームの設計およびフォームの機能およびパフォーマンスの問題の解決	<ul style="list-style-type: none"> フォームの設計に関する考慮事項 Oracle Enterprise Performance Management Cloud オペレーション・ガイドのフォームの機能およびパフォーマンスの問題の解決
スマート・プッシュ	スマート・プッシュによる問題の解決	Oracle Enterprise Performance Management Cloud オペレーション・ガイドのスマート・プッシュによる問題の解決
ルールの設計	一般的な実行エラーを回避するためのルールの設計および時間がかかるルールの最適化	Oracle Enterprise Performance Management Cloud オペレーション・ガイドのビジネス・ルールのエラーおよびパフォーマンスのトラブルシューティング
Groovy ルール	Groovy ルールの実装と使用およびフォームのデータを計算するための Groovy ルールの使用	<ul style="list-style-type: none"> Groovy ビジネス・ルール・チュートリアル・ビデオ Oracle EPM Cloud での Groovy を学ぶ Groovy ルールを使用した変更済データの計算
Groovy ルールおよびスマート・プッシュ	変更済データをレポート・キューブに移動するための Groovy ルールおよびスマート・プッシュの使用	Groovy ルールとスマート・プッシュを使用した変更済データの移動

F

EPM Cloud に関するよくある質問(FAQ)

この FAQ には、Oracle Enterprise Performance Management Cloud の管理タスクに関するよくある質問のリソースへのリンクが用意されています。

よくある質問

- EPM Cloud サービスのトラブルシューティング時に、テクニカル・サポートを支援するための「フィードバックの提供」機能をどのように使用しますか。
- EPM Cloud ビジネス・プロセスの一般的なトラブルシューティングのヒントはどこで入手できますか。
- EPM Cloud サービスの SOC1 および SOC2 レポートをどのようにして取得できますか。
- EPM Cloud サービスはどのように再起動しますか。
- ユーザーのパスワードをどのようにリセットしますか。
- EPM Cloud で本番からテストへのデータ移行をどのように実行しますか。
- 自分の環境の自動月次更新をどのように延期しますか。
- OAuth 2 for OCI (Gen 2)環境での認証をどのように設定しますか。
- REST API または EPM 自動化を使用した、グループの作成または除去方法、およびそれらに対するユーザーの追加または除去方法
- オラクル社によって本番およびテストのバックアップが保持される期間、および自分の環境へのバックアップ・スナップショットのコピー方法

EPM Cloud サービスのトラブルシューティング時に、テクニカル・サポートを支援するための「フィードバックの提供」機能をどのように使用しますか。

画面の右上に表示されるユーザー名をクリックして「フィードバックの提供」を選択します。

Tip:

サービス管理者の場合、メンテナンス・スナップショットを含めて、テクニカル・サポートがサービスをトラブルシューティングすることを支援できます。「フィードバックの提供」ユーティリティで、「**アプリケーション・スナップショットの送信の確認**」を展開し、「**アプリケーション・スナップショットの送信**」オプションを有効化します。

Oracle Enterprise Performance Management Cloud 管理者のためのスタート・ガイドのフィードバックの提供ユーティリティを使用したフィードバックの送信を参照してください

EPM Cloud ビジネス・プロセスの一般的なトラブルシューティングのヒントはどこで入手できますか。

トラブルシューティングのヒント、およびお客様から報告された一般的な問題に関する情報とその修正手順については、[Oracle Enterprise Performance Management Cloud オペレーション・ガイド](#)を参照してください。

EPM Cloud サービスの SOC1 および SOC2 レポートをどのようにして取得できますか。

アプリケーションの「アクション」メニューをクリックし、「ドキュメント」タブを選択することで、「個人用サービス」でこれらのレポートにアクセスできます。[Oracle Enterprise Performance Management Cloud 管理者のためのスタート・ガイドのコンプライアンス・レポートへのアクセス](#)を参照してください

EPM Cloud サービスはどのように再起動しますか。

- EPM 自動化で `resetService` コマンドを使用して、EPM Cloud サービスを再起動します。[Oracle Enterprise Performance Management Cloud EPM 自動化の操作で resetService](#) を参照してください。
- **サービス・インスタンスの再起動** REST API を使用して、EPM Cloud サービスを再起動します。[Enterprise Performance Management Cloud REST API のサービス・インスタンスの再起動\(v2\)](#)を参照してください。

ユーザーのパスワードをどのようにリセットしますか。

OCI (Gen 2)環境の場合、Oracle Identity Cloud Service を使用してユーザー・アカウントのパスワードをリセットします。[Oracle Cloud の管理とモニタリングのパスワードのリセット](#)に関する項を参照してください。

クラシック環境の場合、「個人用サービス」を使用してユーザー・アカウントのパスワードをリセットします。[Oracle Cloud の管理とモニタリングのユーザーのパスワードのリセット](#)に関する項を参照してください。

EPM Cloud で本番からテストへのデータ移行をどのように実行しますか。

「クローン」機能を使用して、本番からテストにデータを移行します。[Oracle Enterprise Performance Management Cloud 移行の管理の EPM Cloud 環境のクローニング](#)を参照してください

または、EPM 自動化の `cloneEnvironment` コマンドを使用できます。環境のクローニング REST API を使用することもできます。

自分の環境の自動月次更新をどのように延期しますか。

更新のスキップの設定は、`skipUpdate` EPM 自動化コマンドを使用して実行するセルフサービス操作です。[Oracle Enterprise Performance Management Cloud オペレーション・ガイドの環境の自動更新のスキップのリクエスト](#)を参照してください。

`skipUpdate` REST API を使用して、月次更新を延期することもできます。[Enterprise Performance Management Cloud REST API の更新のスキップ\(v2\)](#)を参照してください。

OAuth 2 for OCI (Gen 2)環境での認証をどのように設定しますか。

EPM 自動化の場合、OAuth 2.0 承認プロトコルを使用して、コマンドを実行するため、特にコマンドの実行を自動化するために OCI (GEN 2) Oracle Enterprise Performance Management Cloud 環境にアクセスできます。Oracle Enterprise Performance Management Cloud EPM 自動化の操作で OCI での OAuth 2.0 承認プロトコルの使用を参照してください。

REST API の場合、Oracle Cloud Infrastructure (OCI) Gen 2 アーキテクチャ上の EPM Cloud 環境では、環境でのパスワードの使用を回避するという要件を満たすために、EPM Cloud で OAuth 2 アクセス・トークンを使用して REST API を発行できます。Enterprise Performance Management Cloud REST API の OAuth 2 での認証 - OCI のみを参照してください。

REST API または EPM 自動化を使用した、グループの作成または除去方法、およびそれらに対するユーザーの追加または除去方法

- グループを追加するには、『Oracle Enterprise Performance Management Cloud EPM 自動化の操作』の createGroups または Enterprise Performance Management Cloud REST API のグループの追加を参照してください。
- グループを削除するには、『Oracle Enterprise Performance Management Cloud EPM 自動化の操作』の deleteGroups または Enterprise Performance Management Cloud REST API のグループの削除を参照してください。
- ユーザーをグループに追加するには、『Oracle Enterprise Performance Management Cloud EPM 自動化の操作』の addUsersToGroup または Enterprise Performance Management Cloud REST API のグループへのユーザーの追加を参照してください。
- グループからユーザーを削除するには、『Oracle Enterprise Performance Management Cloud EPM 自動化の操作』の removeUsersFromGroup または Enterprise Performance Management Cloud REST API のグループからのユーザーの削除を参照してください。

オラクル社によって本番およびテストのバックアップが保持される期間、および自分の環境へのバックアップ・スナップショットのコピー方法

OCI (Gen 2)環境の場合、オラクル社によって本番環境のスナップショットが 60 日間保持され、テスト環境のスナップショットは 30 日間保持されます。listBackups および restoreBackup EPM 自動化コマンドを使用して、使用可能なバックアップ・スナップショットをチェックし、自分の環境にコピーします。バックアップのリストおよびバックアップの復元 REST API を使用することもできます。

クラシック環境の場合、(本番およびテスト環境の)過去 3 日間の日次スナップショットと、(本番環境のみの)過去 60 日間の週次バックアップ・スナップショットがオラクル社によってアーカイブされます。オラクル社に、過去 3 日間のテスト・バックアップおよび過去 60 日間の本番バックアップをコピーするようリクエストできます。

Oracle Enterprise Performance Management Cloud 管理者のためのスタート・ガイドの日次スナップショットのアーカイブ、保持および取得を参照してください

EPM Cloud 環境はどのようにバックアップおよび復元しますか。

メンテナンス・スナップショット(Artifact Snapshot)を使用して、前日のアーティファクトおよびデータを復元できます。必要に応じて、Artifact Snapshot を使用して、環境を最後の操作メンテナンス時の状態に復元することもできます。参照:

- *Oracle Enterprise Performance Management Cloud 管理者スタート・ガイド*のメンテナンステナンス・スナップショットを使用した環境のバックアップと復元
- 『*Oracle Enterprise Performance Management Cloud EPM 自動化の操作*』の `restoreBackup` コマンドおよび `importSnapshot` コマンド。

EPM Cloud にはどのような障害回復オプションがありますか。

EPM Cloud には、環境を稼働状態にリストアし、それによってほぼ即時の目標復旧時間を達成するセルフサービス・オプションが用意されています。参照:

- *Oracle Enterprise Performance Management Cloud 管理者スタート・ガイド*の障害回復サポート
- *Oracle Enterprise Performance Management Cloud EPM 自動化の操作*の EPM Cloud 環境のレプリケート

自動リグレッション・テストはどのように要求しますか。

Oracle では、自動リグレッション・テスト・プロセスを容易にする EPM 自動化ベースのスクリプトの作成を支援しています。*Oracle Enterprise Performance Management Cloud オペレーション・ガイド*の自動リグレッション・テストのリクエストを参照してください